

少林山砂防施設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

少林山台遺跡

—後期弥生時代集落・群集墳の調査—

《本文編》

1993

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	勸業局 保管文化財 和文書 研究保存	01-352
No. 94-1352	平成 6 年 9 月 6 日	411
		1 (6)

少林山砂防施設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

しょう りん ざん だい
少 林 山 台 遺 跡

—後期弥生時代集落・群集墳の調査—

《本文編》

1993

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



少林山台遺跡全景(南東上空より)

移築保存される2号墳石室内部





12号墳の豊富な副葬品

現状保存される17号墳





11号墳

住居



6号墳



9号墳



2号墳



14号墳



序

縁起達磨で全国的に有名な高崎市の少林山達磨寺南側の山腹は、年々僅かずつ地すべりが生じています。群馬県では、これを防止するために大掛かりな地すべり対策工事を行うことになり、地すべりの要因となる山腹の土砂を大量に移動することにしました。しかし、工事の対象となった山腹一帯には、少林山古墳群その他の埋蔵文化財が存在しており、工事に先立っての埋蔵文化財発掘調査が当事業団に委託されました。

発掘調査は、平成元年度、2年度の両年度にわたって行われましたが、20基の古墳と弥生時代から平安時代の住居跡32軒等が調査されました。

調査された古墳の中には、地すべりにより横穴式石室が数メートル分離し、陥没していたものもあり、地すべりの状況を埋蔵文化財の調査という形で記録することができました。また、保存状況のよい古墳が、関係者の努力により保存されることになり、1基が現状保存、他の1基が移築保存されることになりました。

今回、発掘調査報告書を上梓するに際し、調査でお世話になった少林山達磨寺、群馬県土木部砂防課、高崎土木事務所、高崎市教育委員会、地元関係者の方々に心より感謝を申し上げ、本報告書が本県の歴史解明のために十分活用されることを願い、序とします。

平成5年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、少林山砂防施設工事に伴い事前調査された、「少林山台遺跡」の発掘調査報告書である。報告書名は、当該地区の小字名の一つと少林山達磨寺を併せたものである。

2. 遺跡は、群馬県高崎市鼻高町字台・栗木沢に所在する。

3. 事業主体 群馬県土木部砂防課 高崎土木事務所

4. 調査主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間 平成元年4月24日～平成2年10月30日

6. 調査組織 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

平成元年度

常務理事 邊見長雄 事務局長 松本浩一

管理部長 田口紀雄 調査研究部長 神保侑史

庶務課長 住谷 進 調査研究第3課長 巾 隆之

調査担当者 飯塚 誠 徳江秀夫 根岸 仁 調査研究部補助員 並木綾子

庶務課 笠原秀樹 小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 補助員 野島のぶ江 今井もと子

松井美智子 角田みづほ 松下次男 小林茂男 富沢音二

平成2年度

常務理事 邊見長雄 事務局長 松本浩一

管理部長 田口紀雄 調査研究部長 神保侑史

庶務課長 岩丸大作 調査研究第3課長 巾 隆之

調査担当者 飯塚 誠 徳江秀夫 磯貝朗子 調査研究部補助員 並木綾子

庶務課 国定 均 小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 補助員 野島のぶ江 今井もと子

松井美智子 角田みづほ 松井美智代 松下次男 富沢音二 浅見宜記

7. 整理主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

8. 整理期間 平成3年4月1日～平成5年3月31日

9. 整理組織 事務担当職員

常務理事 邊見長雄 事務局長 松本浩一 近藤 功(平成4年度)

管理部長 佐藤 勉 調査研究部長 神保侑史

庶務課長 岩丸大作 斎藤俊一(平成4年度) 調査研究第3課長 巾 隆之

庶務課 国定 均 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津 茂 高橋定義(平成4年)

非常勤嘱託員 松下 登 補助員 野島のぶ江 今井もと子 角田みづほ 松井美智代

塩浦ひろみ

調査研究部補助員 並木綾子 普及資料課補助員 吉田笑子(図書室司書)

整理担当職員 主任調査研究員 飯塚 誠

主任調査研究員 徳江秀夫(平成3年10月1日～平成4年3月31日)

嘱託員 浅井良子 補助員 岩渕フミ子 宇佐美征子 金子ミツ子 狩野芳子

新谷さか江 須田育美 萩原光枝 蜂巢綾子 牧野裕美 八峠美津子

山崎由紀枝

嘱託員 長沼久美子 補助員 尾田正子 佐子昭子 藤美代子 高梨房江
千代谷和子 戸神晴美

10. 写真撮影は、遺構は調査担当者が行い、遺物は佐藤元彦(技師)による。
11. 本書の編集は飯塚誠が行い、執筆分担は各文末に記したが、全体の統一を図るため、飯塚が一部加除筆した。石器については岩崎泰一、縄文土器については小野和之に執筆をお願いし、人歯・骨の鑑定結果及び科学分析に関しては依頼原稿を転載した。写真図版の構成は、飯塚・徳江・牧野が行った。
12. 石材の鑑定は飯島静男(群馬地質研究会所属)をお願いした。
13. 実測図のトレースは、株式会社 測 研に委託した他、須田・牧野・八峠が行った。
14. 基準測量及び遺構実測は、株式会社 測 研に委託した。
15. 酷暑や厳寒の厳しい自然条件の中で、長期に亘る発掘調査に従事して下さった方々のお名前を記して感謝したい。(あいうえお順・敬称略)

凡 例

1. 遺構番号については、原則として発掘調査時に付したものを使用したが、当初の名称が適切でないものについては改めた。
2. 遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として以下の通りとし、スケールを入れて示した。
 竪穴住居跡 1:60 細部 1:20
 古墳 全体図 1:160 石室 1:40
 溝 1:80 土坑 1:60
 遺物実測図 土器 1:4 石器 1:2 埴輪 1:5 金属器 1:2 玉類 1:1
 また、一つの遺物実測図版中で縮尺率の異なるものを併載した場合には、スケールと対応しないものについては、以下のマークを付した。
 1:1 ■ 1:2 ▲ 1:3 ● 1:4 △ 1:6 ○ 1:8 □
 なお、遺物写真図版の縮尺率は統一されていない。
3. 遺構図中の方位記号は座標北を示す。
4. 遺構の面積はプランニメーターで3回計測したものの平均値を示した。
5. 遺物重量の計測には電磁式はかりを使用した。
6. 遺物観察表中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。

目 次

卷頭写真	(4) 土 坑 ……………133
序	(5) グリッド出土の遺物 ……………134
例 言	4. 古墳時代の遺構と遺物
凡 例	(1) 古 墳 ……………138
	(2) 竪穴住居跡 ……………310
	(3) 土 坑 ……………317
	(4) 墓 跡 ……………318
I 発掘調査の経過	5. 平安時代の遺構と遺物
1. 発掘調査に至る経過……………1	(1) 竪穴住居跡 ……………320
2. 発掘調査の方法と経過……………2	(2) 溝 跡 ……………322
II 遺跡の位置と環境	6. 所属時期不明の遺構
1. 遺跡の位置と地形……………4	(1) 土 坑 ……………324
2. 周辺遺跡の分布……………6	(2) ピット ……………328
3. 遺跡の概要と基本土層……………9	7. 発掘区周辺の古墳 ……………330
III 検出された遺構と遺物	IV 科学分析
1. 先土器時代の出土遺物……………10	(1) 埴 輪 ……………342
2. 縄文時代の出土遺物……………12	(2) ガラス・金属製品 ……………357
3. 弥生時代の遺構と遺物	(3) 古墳出土の人歯・骨 ……………361
(1) 竪穴住居跡……………33	V 調査のまとめ……………368
(2) 墓 跡 ……………124	
(3) 溝 跡 ……………132	

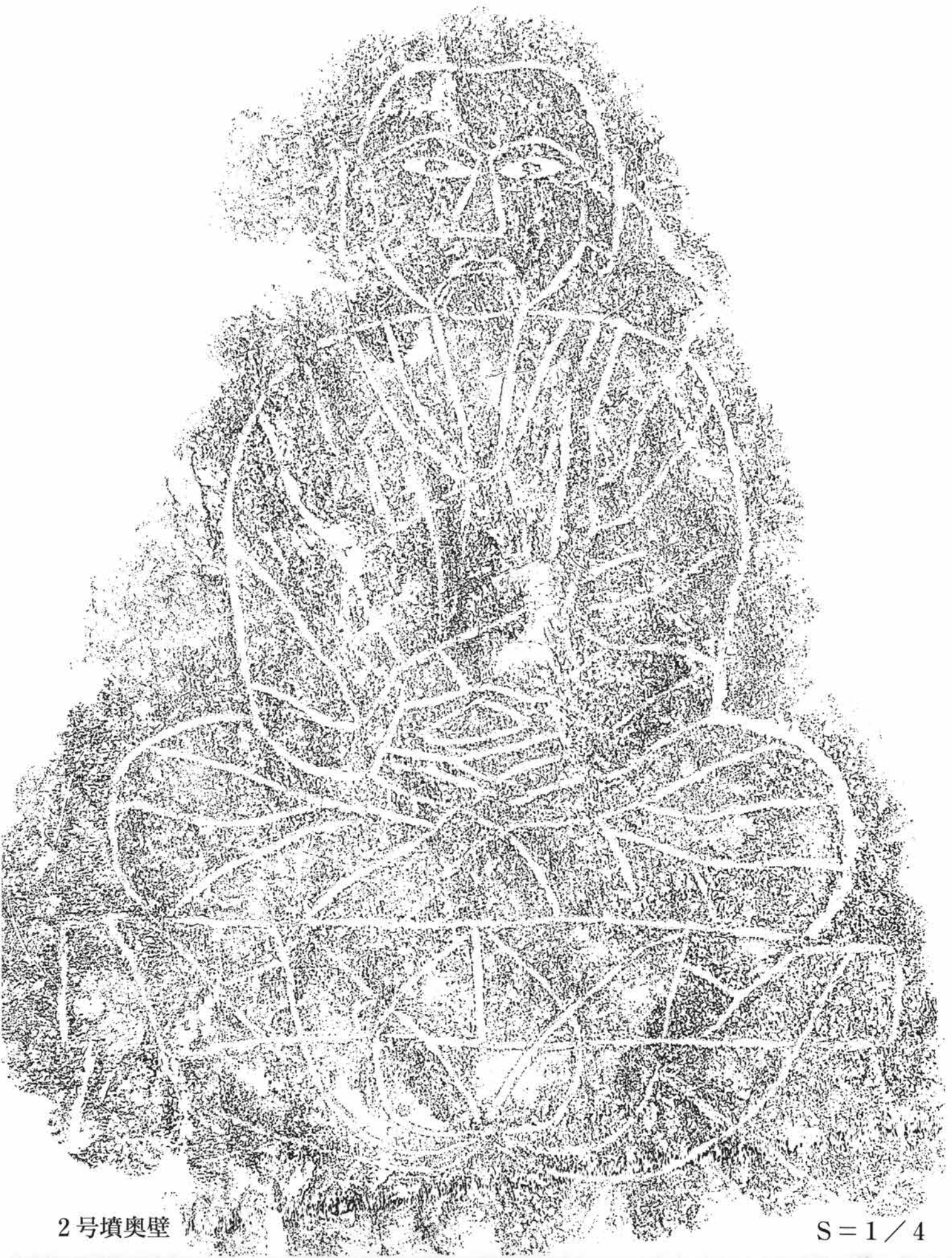
挿図目次

- 第 1 図 調査グリッド設定図
- 第 2 図 少林山台遺跡位置図
- 第 3 図 周辺遺跡分布図
- 第 4 図 基本土層
- 第 5 図 先土器時代調査グリッド位置図
- 第 6 図 先土器時代の出土遺物
- 第 7 図 縄文土器出土位置図 (1)
- 第 8 図 縄文土器出土位置図 (2)
- 第 9 図 縄文土器拓影・実測図 (1)
- 第 10 図 縄文土器拓影・実測図 (2)
- 第 11 図 縄文土器拓影・実測図 (3)
- 第 12 図 石器出土位置図
- 第 13 図 グリッド出土石器実測図 (1)
- 第 14 図 グリッド出土石器実測図 (2)
- 第 15 図 グリッド出土石器実測図 (3)
- 第 16 図 グリッド出土石器実測図 (4)
- 第 17 図 グリッド出土石器実測図 (5)
- 第 18 図 グリッド出土石器実測図 (6)
- 第 19 図 グリッド出土石器実測図 (7)
- 第 20 図 グリッド出土石器実測図 (8)
- 第 21 図 グリッド出土石器実測図 (9)
- 第 22 図 グリッド出土石器実測図 (10)
- 第 23 図 グリッド出土石器実測図 (11)
- 第 24 図 1号住居実測図
- 第 25 図 1号住居掘り方実測図
- 第 26 図 1号住居出土遺物実測図
- 第 27 図 2号住居実測図
- 第 28 図 2号住居炉実測図
- 第 29 図 2号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 30 図 2号住居出土遺物実測図 (2)
- 第 31 図 3号住居実測図
- 第 32 図 3号住居炉実測図
- 第 33 図 3号住居掘り方実測図
- 第 34 図 4号住居実測図
- 第 35 図 4号住居断面実測図
- 第 36 図 4号住居炉実測図
- 第 37 図 4号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 38 図 4号住居出土遺物実測図 (2)
- 第 39 図 5号住居実測図
- 第 40 図 5号住居断面・炉・貯蔵穴実測図
- 第 41 図 5号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 42 図 5号住居出土遺物実測図 (2)
- 第 43 図 6号住居実測図
- 第 44 図 6号住居出土遺物実測図
- 第 45 図 7号住居実測図
- 第 46 図 7号住居出土遺物実測図
- 第 47 図 8号住居実測図
- 第 48 図 8号住居炉実測図
- 第 49 図 8号住居出土遺物実測図
- 第 50 図 9号住居実測図
- 第 51 図 9号住居炉・掘り方実測図
- 第 52 図 9号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 53 図 9号住居出土遺物実測図 (2)
- 第 54 図 10号住居出土遺物実測図
- 第 55 図 10号住居実測図
- 第 56 図 11号住居実測図
- 第 57 図 11号住居掘り方実測図
- 第 58 図 11号住居炉実測図
- 第 59 図 11号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 60 図 11号住居出土遺物実測図 (2)
- 第 61 図 11号住居出土遺物実測図 (3)
- 第 62 図 12号住居出土遺物実測図
- 第 63 図 12号住居実測図
- 第 64 図 13号住居実測図
- 第 65 図 13号住居掘り方実測図
- 第 66 図 13号住居出土遺物実測図
- 第 67 図 14号住居実測図
- 第 68 図 14号住居炉実測図
- 第 69 図 14号住居出土遺物実測図
- 第 70 図 15号住居実測図
- 第 71 図 15号住居炉実測図
- 第 72 図 15号住居出土遺物実測図
- 第 73 図 16号住居実測図
- 第 74 図 16号住居出土遺物実測図
- 第 75 図 18号住居実測図
- 第 76 図 18号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 77 図 18号住居出土遺物実測図 (2)
- 第 78 図 18号住居出土遺物実測図 (3)
- 第 79 図 19号住居実測図
- 第 80 図 19号住居貯蔵穴・炉実測図
- 第 81 図 19号住居断面・掘り方実測図
- 第 82 図 19号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 83 図 19号住居出土遺物実測図 (2)
- 第 84 図 20号住居実測図
- 第 85 図 20号住居出土遺物実測図
- 第 86 図 22号住居実測図
- 第 87 図 22号住居出土遺物実測図 (1)
- 第 88 図 22号住居実測図 (2)
- 第 89 図 23号住居実測図
- 第 90 図 23号住居出土遺物実測図
- 第 91 図 23号住居炉実測図
- 第 92 図 24・25号住居実測図
- 第 93 図 24号住居炉実測図
- 第 94 図 24号住居出土遺物実測図
- 第 95 図 25号住居出土遺物実測図
- 第 96 図 26号住居実測図
- 第 97 図 26号住居出土遺物実測図
- 第 98 図 28号住居実測図
- 第 99 図 28号住居掘り方実測図
- 第100 図 28号住居炉実測図
- 第101 図 28号住居出土遺物実測図 (1)
- 第102 図 28号住居出土遺物実測図 (2)
- 第103 図 28号住居出土遺物実測図 (3)
- 第104 図 28号住居出土遺物実測図 (4)
- 第105 図 29号住居実測図
- 第106 図 29号住居炉実測図
- 第107 図 29号住居出土遺物実測図
- 第108 図 30号住居実測図
- 第109 図 30号住居炉実測図
- 第110 図 30号住居出土遺物実測図 (1)
- 第111 図 30号住居実測図 (2)
- 第112 図 30号住居実測図 (3)
- 第113 図 32号住居炉実測図
- 第114 図 32号住居実測図
- 第115 図 32号住居出土遺物実測図 (1)
- 第116 図 32号住居出土遺物実測図 (2)
- 第117 図 32号住居出土遺物実測図 (3)
- 第118 図 墓跡位置図
- 第119 図 1号墓実測図
- 第120 図 2号墓実測図
- 第121 図 3号墓実測図

- 第122図 4号墓実測図
 第123図 5号墓実測図
 第124図 6・7号墓実測図
 第125図 8・9号墓実測図
 第126図 3号溝実測図
 第127図 22号土坑実測図
 第128図 20号土坑実測図
 第129図 20号土坑出土遺物実測図
 第130図 グリッド出土遺物実測図
 第131図 1号墳墳丘実測図
 第132図 2号墳前庭地層断面実測図
 第133図 2号墳墳丘実測図
 第134図 2号墳葺石実測図
 第135図 2号墳墳丘地層断面実測図
 第136図 2号墳石室裏込め被覆実測図
 第137図 2号墳石室展開図
 第138図 2号墳石室断面図
 第139図 2号墳石室根石・掘り方実測図
 第140図 2号墳石室検討図
 第141図 2号墳出土埴輪実測図(1)
 第142図 2号墳出土埴輪実測図(2)
 第143図 2号墳出土埴輪実測図(3)
 第144図 2号墳出土形象埴輪実測図(1)
 第145図 2号墳出土形象埴輪実測図(2)
 第146図 2号墳出土形象埴輪実測図(3)
 第147図 2号墳出土形象埴輪実測図(4)
 第148図 2号墳出土形象埴輪実測図(5)
 第149図 2号墳出土形象埴輪実測図(6)
 第150図 2号墳出土形象埴輪実測図(7)
 第151図 2号墳出土遺物実測図(1)
 第152図 2号墳出土遺物実測図(2)
 第153図 2号墳出土遺物実測図(3)
 第154図 2号墳副葬品実測図
 第155図 3号墳周堀地層断面実測図
 第156図 3号墳墳丘実測図
 第157図 3号墳墳丘地形実測図
 第158図 3号墳出土円筒埴輪実測図(1)
 第159図 3号墳出土円筒埴輪実測図(2)
 第160図 3号墳出土円筒埴輪実測図(3)
 第161図 3号墳出土円筒埴輪実測図(4)
 第162図 3号墳出土円筒埴輪実測図(5)
 第163図 3号墳出土円筒埴輪実測図(6)
 第164図 3号墳出土円筒埴輪実測図(7)
 第165図 3号墳出土円筒埴輪実測図(8)
 第166図 3号墳出土円筒埴輪実測図(9)
 第167図 3号墳出土遺物実測図
 第168図 4号墳墳丘実測図
 第169図 4号墳周堀断面実測図
 第170図 4号墳石室実測図
 第171図 4号墳出土円筒埴輪実測図
 第172図 4号墳出土形象埴輪実測図
 第173図 4号墳出土遺物実測図(1)
 第174図 4号墳出土遺物実測図(2)
 第175図 5号墳周堀地層断面実測図
 第176図 5号墳墳丘実測図
 第177図 5号墳出土埴輪実測図
 第178図 5号墳出土遺物実測図
 第179図 6号墳周堀地層断面実測図
 第180図 6号墳墳丘実測図
 第181図 6号墳石室裏込め被覆実測図
 第182図 6号墳石室展開図
 第183図 6号墳出土埴輪実測図
 第184図 6号墳副葬品実測図
 第185図 7号墳周堀地層断面実測図
 第186図 7号墳墳丘実測図
 第187図 7号墳葺石実測図
 第188図 7号墳石室裏込め被覆実測図
 第189図 7号墳墳丘地層断面実測図(1)
 第190図 7号墳墳丘地層断面実測図(2)
 第191図 7号墳石室展開図
 第192図 7号墳石室根石・掘り方実測図
 第193図 7号墳出土円筒埴輪実測図
 第194図 7号墳出土形象埴輪実測図
 第195図 7号墳副葬品実測図(1)
 第196図 7号墳副葬品実測図(2)
 第197図 8号墳周堀地層断面実測図
 第198図 8号墳墳丘実測図
 第199図 8号墳出土埴輪実測図
 第200図 8号墳出土遺物実測図
 第201図 9号墳周堀地層断面実測図
 第202図 9号墳墳丘実測図
 第203図 9号墳石室展開図
 第204図 9号墳石室断面図
 第205図 9号墳石室根石・掘り方実測図
 第206図 9号墳出土円筒埴輪実測図
 第207図 9号墳出土形象埴輪実測図
 第208図 9号墳出土遺物実測図(1)
 第209図 9号墳出土遺物実測図(2)
 第210図 9号墳副葬品実測図
 第211図 10号墳地層断面実測図
 第212図 10号墳墳丘実測図
 第213図 10号墳出土遺物実測図
 第214図 11号墳周堀断面実測図
 第215図 11号墳墳丘実測図
 第216図 11号墳石室裏込め被覆実測図
 第217図 11号墳石室展開図
 第218図 11号墳石室断面図
 第219図 11号墳石室根石実測図
 第220図 11号墳出土円筒埴輪実測図(1)
 第221図 11号墳出土円筒埴輪実測図(2)
 第222図 11号墳出土円筒埴輪実測図(3)
 第223図 11号墳出土円筒埴輪実測図(4)
 第224図 11号墳出土円筒埴輪実測図(5)
 第225図 11号墳出土遺物実測図
 第226図 11号墳出土ガラス玉検討図
 第227図 12号墳周堀地層断面実測図
 第228図 12号墳墳丘実測図
 第229図 12号墳石室裏込め被覆実測図
 第230図 12号墳石室展開図
 第231図 12号墳石室正面・舗石面実測図
 第232図 12号墳石室断面図
 第233図 12号墳羨道部遺物出土状態実測図
 第234図 12号墳石室根石・掘り方実測図
 第235図 12号墳出土円筒埴輪実測図
 第236図 12号墳出土形象埴輪実測図(1)
 第237図 12号墳出土形象埴輪実測図(2)
 第238図 12号墳出土形象埴輪実測図(3)
 第239図 12号墳副葬品実測図(1)
 第240図 12号墳副葬品実測図(2)
 第241図 12号墳副葬品実測図(3)
 第242図 12号墳副葬品実測図(4)
 第243図 12号墳副葬品実測図(5)
 第244図 12号墳副葬品実測図(6)
 第245図 12号墳出土遺物実測図

第246図	14号墳墳丘実測図	第308図	31号住居実測図
第247図	14号墳石室裏込め被覆実測図	第309図	31号住居カマド実測図
第248図	14号墳石室展開図	第310図	31号住居出土遺物実測図
第249図	14号墳石室断面図	第311図	1・2号溝実測図
第250図	14号墳石室根石・掘り方実測図	第312図	土坑実測図(1)
第251図	14号墳出土遺物実測図	第313図	土坑実測図(2)
第252図	14号墳副葬品実測図(1)	第314図	土坑実測図(3)
第253図	14号墳副葬品実測図(2)	第315図	土坑実測図(4)
第254図	15号墳墳丘実測図	第316図	21号墳周辺の時期不明ピット
第255図	15号墳石室展開図	第317図	A・B号墳周辺地形図
第256図	15号墳石室根石・掘り方実測図	第318図	A号墳石室実測図
第257図	15号墳副葬品実測図	第319図	B号墳石室実測図
第258図	17号墳周堀・基壇断面実測図	第320図	C号墳周辺地形図
第259図	17号墳墳丘実測図	第321図	C号墳石室実測図
第260図	17号墳葺石実測図	第322図	D号墳周辺地形図
第261図	17号墳石室裏込め被覆実測図	第323図	D号墳石室展開図
第262図	17号墳石室展開図	第324図	D号墳石室断面実測図
第263図	17号墳石室断面図	第325図	E号墳周辺地形図
第264図	17号墳石室平面図	第326図	E号墳石室展開図
第265図	17号墳石室検討図	第327図	E号墳石室実測図
第266図	17号墳出土円筒埴輪実測図(1)	第328図	埴輪ヘラ記号参考図
第267図	17号墳出土円筒埴輪実測図(2)	第329図	無脚半球形雲珠参考図
第268図	17号墳出土円筒埴輪実測図(3)	第330図	変形横穴式石室(1)
第269図	17号墳出土形象埴輪実測図	第331図	変形横穴式石室(2)
第270図	17号墳出土遺物実測図(1)	第332図	飯沼和雄氏所蔵資料実測図
第271図	17号墳出土遺物実測図(2)		
第272図	17号墳副葬品実測図		
第273図	18号墳墳丘実測図		
第274図	18号墳墳丘地形実測図		
第275図	19号墳周堀地層断面実測図		
第276図	19号墳断面実測図		
第277図	19号墳墳丘実測図		
第278図	19号墳出土埴輪実測図		
第279図	20号墳出土遺物実測図		
第280図	20号墳墳丘実測図		
第281図	21号墳周堀地層断面実測図		
第282図	21号墳墳丘実測図		
第283図	21号墳出土円筒埴輪実測図(1)		
第284図	21号墳出土円筒埴輪実測図(2)		
第285図	21号墳出土円筒埴輪実測図(3)		
第286図	21号墳出土円筒埴輪実測図(4)		
第287図	21号墳出土円筒埴輪実測図(5)		
第288図	21号墳出土円筒埴輪実測図(6)		
第289図	21号墳出土遺物実測図		
第290図	22号墳副葬品実測図		
第291図	22号墳周辺地形図		
第292図	22号墳石室平面図		
第293図	22号墳石室展開図		
第294図	22号墳石室断面図		
第295図	22号墳石室根石・掘り方実測図		
第296図	17号住居実測図		
第297図	17号住居炉実測図		
第298図	17号住居出土遺物実測図		
第299図	21号住居実測図		
第300図	21号住居出土遺物実測図(1)		
第301図	21号住居出土遺物実測図(2)		
第302図	27号住居実測図		
第303図	27号住居出土遺物実測図(1)		
第304図	27号住居出土遺物実測図(2)		
第305図	土坑実測図		
第306図	土坑出土遺物実測図		
第307図	10号墓実測図		

少林山台遺跡



I 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経過

少林山台遺跡の発掘調査は、少林山砂防施設工事に伴って実施された事業である。

岩野谷丘陵では、本遺跡地をはじめとする数箇所ですり出しの被害が生じている。数軒の民家は、家屋に亀裂が生じたり、倒壊の恐れがあることから移転を余儀なくされた。また、碓氷川の対岸を走る国道18号も、地すりを起こした軟弱地盤が川を跨いで隆起したことによって屈曲してしまい、改修を行ったこともあった。

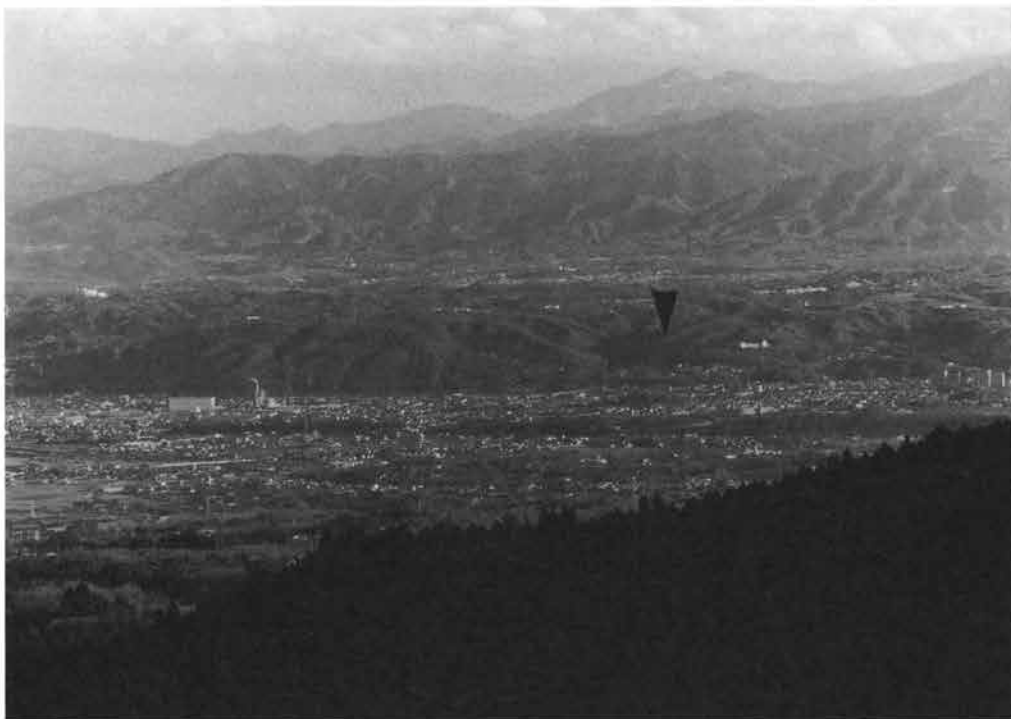
このような地すりの原因は、地下に軟弱な地盤が有る為と考えられており、過去においても幾度かの対策が講じられてきた。地下の帯水層中に在る地下水を集水井に集めて、隧道によって強制的に排水することによって地すりの発生を防止する為の工事や雨水の浸透を極力防止する為の排水溝の設置等によって被害を防止してきた。大規模な被害は顕在化しなくなったものの、果樹園の支柱の倒壊や耕地の小規模な陥没は依然として続いてきた。そこで、抜本

的な対策工事として、軟弱地盤の上に乗っている山体の土砂を排除して圧力を軽減することによって地すりを防止する工法が実施されることになった。

工事の対象地は、少林山古墳群として周知の遺跡であったため、工事の実施に先立って、群馬県教育委員会文化財保護課は、少林山砂防施設工事に伴う埋蔵文化財試掘トレンチ調査を、平成元年2月6日～2月10日に実施し、遺跡の範囲及び員数を把握し、2月22日付けで高崎土木事務所所長宛に、開発にあたっては発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じるよう通知した。

発掘調査は、平成元年6月1日付けで、群馬県知事清水一郎(群馬県土木部砂防課)と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で埋蔵文化財発掘調査の委託契約が締結され、実施に移された。

発掘途中において、山体斜面の擁護壁工事の為の仮設道路の用地交渉や掘削した表土の置場所等の問題及び遺構数の増加等によって幾度かの紆余曲折はあったが、地元の人々や高崎市及び群馬町・新東村(排土の置場所)の協力を得て、無事に調査を終了することができた。(飯塚)



2. 発掘調査の方法と経過

検調査方法) 調査対象地の広さは、東西方向・南北方向とも125mで、砂防施設工事を行う16,500㎡であるが、この範囲内について、国家座標IX系の $X=36,600 \cdot Y=-78,200$ を原点として、5m四方のグリッドを設定した。東西方向は5m毎にアラビア数字を、南北方向は5m毎にアルファベット(A~Z・a~)を付して、グリッド名は北東隅のポイントに拠った。なお、グリッド及び水準点の設定は、高崎土木事務所よりデータの提供を受け、(株)測研に委託して行った。

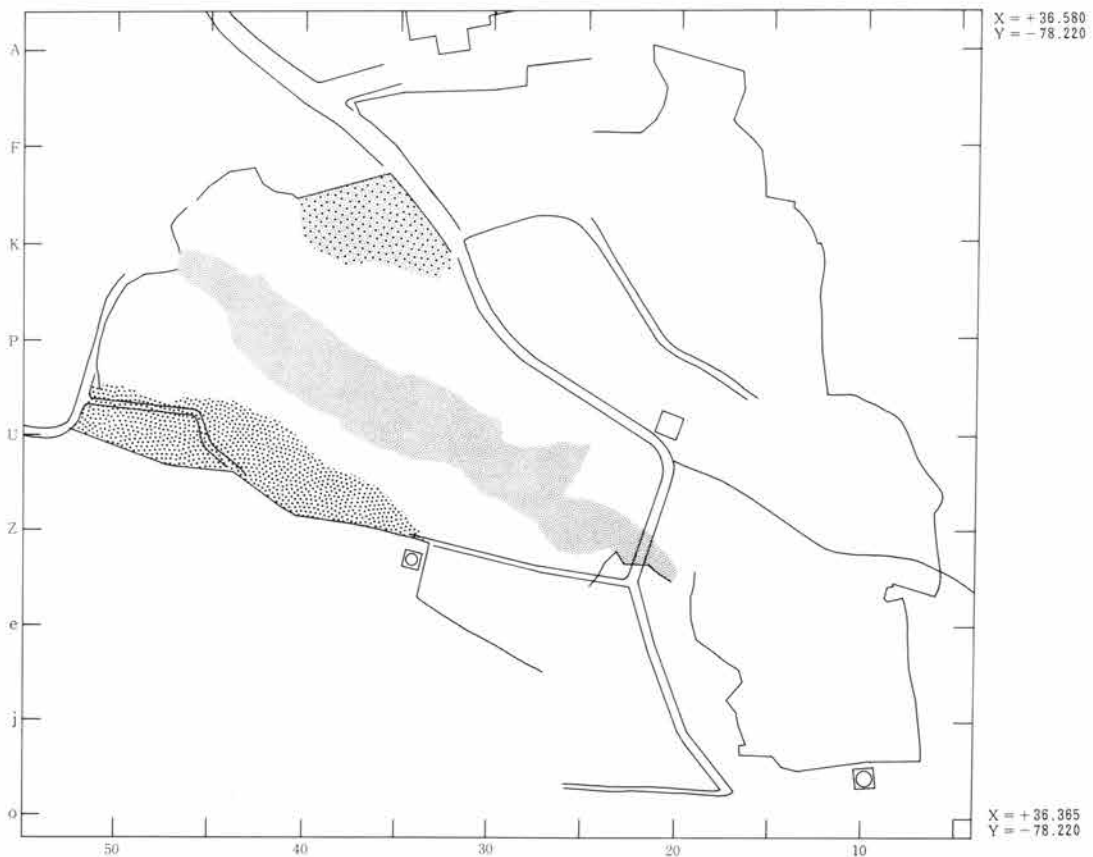
調査対象地全面の表土除去は重機((株)信沢工業)を使用し、遺構確認作業及び覆土除去は人力に拠ったが、古墳の封土断ち割り調査は全体工程との関係から重機を使用した。

個別遺構の調査では、堅穴住居跡・土坑等は覆土の地層断面観察用ベルトを残して掘り下げた。古墳

については、現況図を作成して調査を進め、構築時の原況図化が終了した時点で、構築過程の解明のために墳丘・石室の解体調査を実施した。また、旧石器時代を対象とした調査では、各グリッドの南東隅に 2×2 mの小グリッドを設定して、人力で掘り下げた。密度の差はあるが全面積の約7%を調査したが、表採遺物2点の他には、遺構・遺物とも検出されなかった。

実測図は、遺構の種類と状態に応じて適当な縮尺で図化した。平面図は、簡易遣り方測量・平板測量で、立・断面図は、簡易遣り方測量で作成した。図面記録の作成は委託業者と担当者及び作業員が行った。

写真は、35mmモノクロ・カラーリバーサル写真と 6×9 モノクロ写真とをその都度使い分けて、担当者が撮影した。遺跡全体及び大型遺構の俯瞰写真撮影にはモニタリングカメラとローリングタワーを使用し、地上撮影に加えて、高所作業車・ラジコンへ



第1図 調査グリッド設定図

リコプター(K&Mエンタープライズ)・セスナ機
(株)技研)による航空写真撮影も適宜行った。

調査時における所見は、担当者が適宜作成して、
整理作業の際の資料とした。

(調査日誌抄)

平成元年

- 7月28日 養成講座の受講生が見学
- 9月13日 関東甲信越地区埋文行政担当者会議に出
席したメンバーが視察
- 10月18日 茨城県土木部都市施設課職員3名来跡
- 11月11・12日 現地説明会を開催
- 11月21日 通商産業省工業技術院地質調査所寒川旭
氏来跡

12月2日 群馬歴史散歩の会黒田氏来跡

12月8日 練馬万葉会来跡

平成2年

- 2月7日 はと保育園園児来跡
- 2月0日 高崎市立城南小の社会科資料室整備資料
として遺跡写真9枚を譲渡
- 5月11日 発掘調査事務所が荒らされ、古墳の副葬
品2点が盗難にあう
- 5月10日 高崎市立新高尾小6年生の歴史学習のた
め遺物を公開
- 5月23日 高崎市立片岡小児童見学
- 5月31日 高崎市立塚沢小6年生150名見学
- 8月8日 神奈川考古学同好会24名
- 10月17日 高崎市立豊岡中文化祭の研究テーマ「少
林山とその周辺」のために来跡
- 10月26日 県教委の生涯学習ビデオ撮影のため中日
映画社梶山氏来跡

(整理の経過)

少林山台遺跡の整理作業には、平成3年4月1日
から平成5年3月31日の2カ年を要した。平成3年
度当初においては、担当者1名と補助員7名で開始
したが、下半期には担当者2名と補助員13名体制に
なった。出土遺物の洗浄及び注記作業は、発掘調査
時の悪天候の日に殆ど完了していたが、遺物量が多
かったために、接合・復原作業に多くの日時を費や
した。なお、金属遺物の錆落としは、保存処理室のス
タッフの指導の元に新谷・萩原・蜂巢が当たった。
小さな金属器の実測作業は、岩淵・宇佐美・山崎・
金子が主に行った。事実報告に関しては、徳江の指
導のもとに浅井が、集落関係の遺構を中心に整理し
た。古墳関係の遺構については、平成4年度に、担
当者1名と補助員7名とで整理し、都合30カ月を要
した全体の整理作業を完了させ、発掘調査報告書を
刊行した。

出土遺物の実測は、兩年度に互って担当者・補助
員が直接行った他、スリースペースに拠る機械実測
を行った。トレースは、業者委託に付した他は主に
須田・牧野・八峠が行った。説明文作成は、印刷時
の効率化を図るため、基本的にWPを使用した。が、
須田及び経験年数の浅い狩野の協力が大きかった。
また、遺物写真図版の構成では、牧野が基本的なレ
イアウトを作成した。(飯塚)

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地形

少林山台遺跡は、高崎市の市街地から約4km西方の鼻高町字台・栗木沢に所在する。本地区は市域の北西部に当たり、安中市岩井・大谷地区に接する。

JR信越本線群馬八幡駅からは南方0.8kmの距離に有り、黄檗宗の名刹・少林山達磨寺の南側台地上に位置する。

高崎市は、関東平野の深奥部に位置し、市域の東南部には前橋台地と呼ばれる低台地が広がる。標高100km付近を境にそれより高位部は榛名山東南麓の裾野地形の端部に当たる。市域の西部には岩野谷丘陵、通称観音山という標高200～300km程の低丘陵が連なり、碓氷川を挟み、松井田(秋間)丘陵へと続いている。

岩野谷丘陵はその丘体を流下する雁行川や荒久沢川、岩井川等の小河川による開析が進行し、小規模な沖積地や侵食谷が奥深くまで延び、複雑に入り組んだ地形が刻まれている。そのような急峻な地形の中にも、比較的平坦な頂部や緩斜面も見られる。特に、本遺跡の南側、鼻高町南鼻高地区から乗附町大平地区にかけては、標高250m前後の幅広い原形面が広がり、大平台遺跡を初めとした縄文時代の遺跡や古墳が広範囲に所在している。丘陵の北端には関東山地に源を発する碓氷川が東流し、その侵食を受けた急峻な崖線が形成されている。また、碓氷川は本遺跡と対岸の通称八幡丘陵とそれに付随する低台地との間に幅約800km程の低地帯を作り、左岸には近年まで旧河道跡を利用した水田が広範囲に広がっていた。

なお、この丘陵は、第三紀中新世～鮮新世の堆積層を基盤とし、その上にローム層が累重するものである。その中の凝灰岩層は現在も丘陵中の数地点でその露頭を観察することができるが、古墳時代には既に舟形石棺や横穴式石室の石材として利用されており、高崎市周辺にその分布が認められる。また、

良質の粘土が産出する。本遺跡とはやや距離を隔てるが寺尾町小塚では9世紀～10世紀初頭の窯跡が発見され、灰原から瓦や須恵器片が出土している。さらに、県内出土の須恵器の胎土分析からはこの地域に古墳時代の窯跡の存在も推定されている。その他に夾炭層も数層見られ、本遺跡周辺でも燃料資源として、近年まで亜炭の採掘が行われていた。

周辺の土地利用についてみると、1878(明治10)年に編纂された『上野国郡誌』に拠ると、鼻高町(旧碓氷郡鼻高村)における租税対象地の総面積は127町1畝27歩で、畑地が72町1反3畝5歩であるのに対し、田地は16町2反7畝6歩に過ぎない。その田地も碓氷川に接し、現在は鼻高団地が造成された地区に集中しており、その他の地域は水田耕作には極めて不適当な地勢で、一帯では畑作を中心とした農業が行われていた地域であったことが窺える。その畑作も陸稲或は麦作地は少なく、蔬菜・桑・果樹の各園として利用されており、遺跡地の調査前の地目も梨或は桑園がその大半であった。

本遺跡の立地についてももう少し微視的に観察すると、本遺跡は調査区の南東部を扇央部として北西方向に傾斜する扇形の傾斜地上に展開している。西側は北流する寺沢川により、また、東側は蟹沢と称される侵食谷により画されており、調査区の最高位部の標高は182km、低位部は北端で標高150km、北西端で146kmを測り、最大比高差は36kmとなる。この傾斜地には現状では埋没してしまい識別が困難であるが、表流水の侵食あるいは地入りによって形成されたと考えられる微弱な谷地形があり、黒褐色土や暗褐色土が堆積していた。これに対応する尾根筋には古墳や弥生時代の竪穴住居の立地が集中しており、微地形の高位部を意識した占地がなされたことが看取できる。

このような地形も1960(昭和35)年頃から周辺一帯で始まった地入りで大小無数の陥没溝や段差を生じ、住居や古墳がその形状を著しく改変したことは調査成果の各項で記述する通りである。特に調査地の南側寄り、i-14グリッドからK-47グリッドに



第 2 図 少林山台遺跡位置図

II 遺跡の位置と環境

かけては、N-56°-Wの走向で幅約20km、段差3～4km規模の大陥没が生じ、周囲の景観を一変させると共に、土地利用に大きな制約を加えることとなった。(徳江)

2. 周辺遺跡の分布

先土器時代～弥生時代の遺跡は、碓氷川対岸の八幡丘陵上において幾つか調査されている。先土器時代の遺跡は、安中市・古城遺跡においてナイフ型石器等が出土している。昭和46・47年には、八幡霊園の造成に伴い、高崎市・若田遺跡が調査され、縄文時代前期～後期にかけての住居跡27軒や土坑等が確認されている。弥生時代の遺跡は、高崎市北部環状線内で検出された引間遺跡や住宅団地の造成に伴って調査された八幡遺跡において、弥生時代後期の集落が検出されている。岩野谷丘陵上における弥生時代集落は、御部入古墳群の調査時に確認されているが、部分的な調査であったため全貌は明らかにされていない。

本遺跡周辺の古墳時代の遺跡を概観すると以下の様になる。

昭和47・48年に、県立みやま養護学校の建設に伴って調査された大平台遺跡においては、古墳時代前期の方形周溝墓2基が検出されている。トレンチ調査のため全貌は明らかでないが、一辺21.5m四方の規模を持ち、2基が隣接した状態で検出されている。周辺の他のトレンチにおいては検出されてい

1. 長瀬西古墳
2. 八幡古墳群
3. D号古墳
4. E号古墳
5. 台遺跡
6. 稲荷山古墳
7. 開山堂古墳
8. 妙義山古墳
9. 小星山古墳
10. 上並榎稲荷山古墳

いので、比較的小規模な群を構成していたものと思われる。古墳時代前期及び中期の墓制資料としては、姥山古墳に10個余りの凝灰岩製割竹形石棺が露出している。また、発掘調査を経ていないので詳細は不明であるが、安中市・岩野谷村57号墳は径18m程の円墳であるが、鏡・刀・甲・滑石製盤等の出土が伝えられており、B種横ハケの円筒埴輪片も散布している。安中市上間仁田の経塚古墳からも滑石製品(盤・刀子)が出土している。

昭和42・43年に行われた御部入古墳群の調査では、6世紀中葉～8世紀初頭に及ぶ22基の古墳について詳細な資料が得られている。分析の結果では、丘陵斜面の標高の低い地点から築造が開始され、徐々に高位に展開して行ったことが確認されている。また、凝灰岩截石切組積両袖型横穴式石室を持つ御部入古墳(鶯塚古墳)とほぼ並ぶ、7世紀後半の墓制資料としては、凝灰岩層を抉りぬいて構築された横穴墓が2カ所で発見されている。ひとつは吉井町字小暮に所在し、室町時代の石仏が祀られていることから「薬師穴」と呼ばれている。群馬県史の編纂事業に伴って、石川正之助によって実測調査がなされ、分析が加えられた結果、7世紀後半代の掘削との推定が下されている。同じく、吉井町大字上奥平字大黒には、「穴大黒」と呼ばれ、東側に向かって開口する横穴が在る。前面は崩れているが、内部は瓢箪形を呈する2室で構成されている。右側がやや小振り、左側の穴の底面は低くなっており、天井は両方共ドーム状を呈している。出土遺物等は不明であるが、

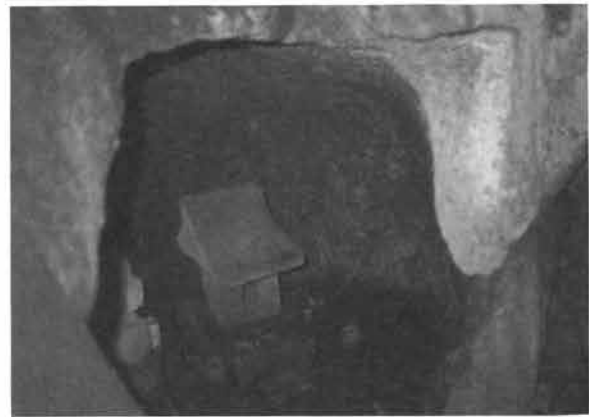
11. 六郷村6号古墳
12. 虚空蔵山古墳
13. 蛇塚古墳
14. 乗附廃寺
15. 高崎市109号古墳
16. 石原稲荷山古墳
17. 神明塚古墳
18. 頼政神社古墳
19. 高崎市218号古墳
20. 御部入古墳群



II 遺跡の位置と環境

前述のものとほぼ同時期になるものと思われる。

奈良・平安時代には、岩野谷丘陵に須恵器・瓦窯が営まれ、乗附廃寺の存在等も知られているが全貌は明らかにされていない。 (飯塚)



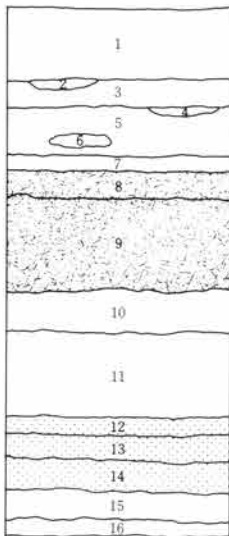
3. 遺跡の概要と基本土層

本遺跡は傾斜地に展開する為、それぞれの調査地点によって、土の堆積状況が著しく異なる。北東部の急斜面においては、薄い表土の直下に礫を多量に含む暗灰色シルトが堆積しており、古墳が築造されたやや平坦な場所には、斜面上位から供給された土砂が複雑に堆積している。本遺跡の模式的な標準土層は下図の通りであるが、各層の遺存状態は芳しくない。先土器時代を対象としたグリッドの深掘り調査の成果や古墳の墳丘下の整地面下の状況等を参考にして作成したものである。

本遺跡は地氾りの影響が顕著であったが、その発生時期を特定することはできなかった。大平台遺跡の調査においては、縄文時代中期以降に地氾りが発生したことが確認されているが、やはり時期を特定できる資料は得られていない。今後、D・E号墳の発掘調査を待って、古墳群の詳細な分析を行って、原地形の復元等にも取り組んで見たいと思う。

(飯塚)

1. 耕作土。暗褐色土。
2. 浅間A軽石層
3. 黒色土。軽石を含む。
4. 浅間B軽石。
5. 明褐色土。白色軽石を含む。
6. 浅間C軽石。
7. 茶褐色粘質土。縄文包含層。
8. YP層。10枚以上の降下単位が認められる。
9. YP層。粗粒。
10. 明褐色土。黄褐色ローム粒を含む。
11. 褐色土。
12. BP層。粗粒。径5mm程のものが目立つ。
13. BP層。細粒。
14. BP層。黒色粒子が顕著に認められる。
15. 暗灰色砂質土。黄色・白色軽石を含む。
16. 暗灰色シルト質土。礫を多く含む。



第4図 基本土層



III 検出された遺構と遺物

1. 先土器時代の出土遺物

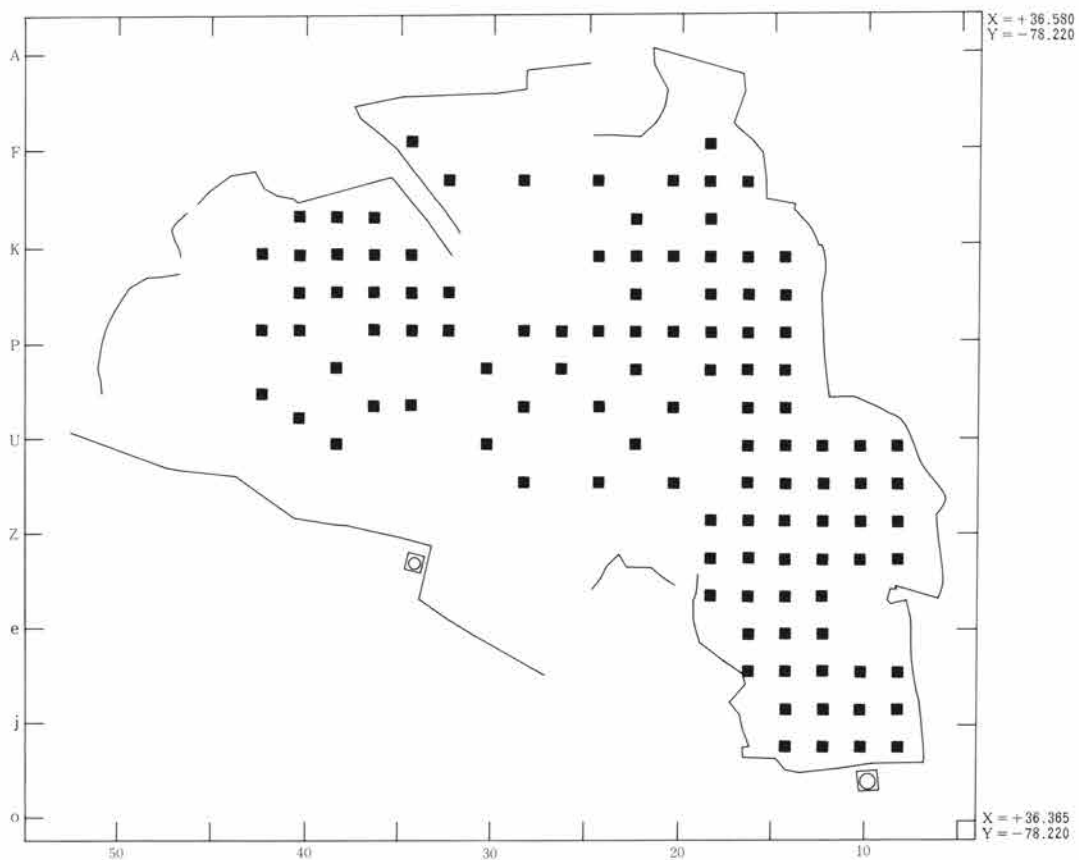
調査の過程で2点の槍先形尖頭器が出土したため、当該資料の検出(第5図)を試みた。試掘調査の結果、暗色帯より上のローム層が堆積すること、丘陵が背後に迫る東側と南側の地点ではローム層が堆積せず、凝灰岩を含む基盤層(崖錐堆積に起源する)が露出していること、調査区内には当該資料の存在は確認できないこと等々の所見を得た。

槍先形尖頭器は2点(第6図1・2)とも調査区の南を走る大規模な陥没溝から出土している。

第6図1は、柳葉形状を呈す槍先形尖頭器である。調査の段階で上端部分を大きく欠損するため判定は困難だが、左右の側縁は上端方向に緩く狭まる傾向が看取され、多分に先端部分を逸している可能性が

強い。表裏両面とも風化が著しいため剥離の詳細な観察は困難だが、剥離が全面を覆う。器体中央付近の剥離は粗く部分的に階段状を呈す一方、器体基部には押圧剥離に近い剥離を施している。全般に剥離は錯交的で、やや換れた状態を示している。器体は5mm前後に薄く作り出され概ね完成状態を示す、と判断されよう。長さ6.0cm(推定長8.0cm)・幅2.2cm・重さ3.5gを測る。黒色頁岩。

第6図2は、木葉形状を呈す幅広の槍先形尖頭器である。剥離初期に生じる幅広の縦長剥片を用い、片側に面的な調整加工を施す。側縁形状は左右対象ではなく、右側縁が少し歪む。調整加工は左側縁と右側縁では大きく異なり、左側縁には押圧剥離に近い繊細な剥離を施す一方、右側縁には階段状の剥離が著しい。器体の上下両端を欠損する。出土資料は若干斑晶を含む黒曜石を用いており、上下両端ともこの部分から欠損している。裏面基部には部分的に



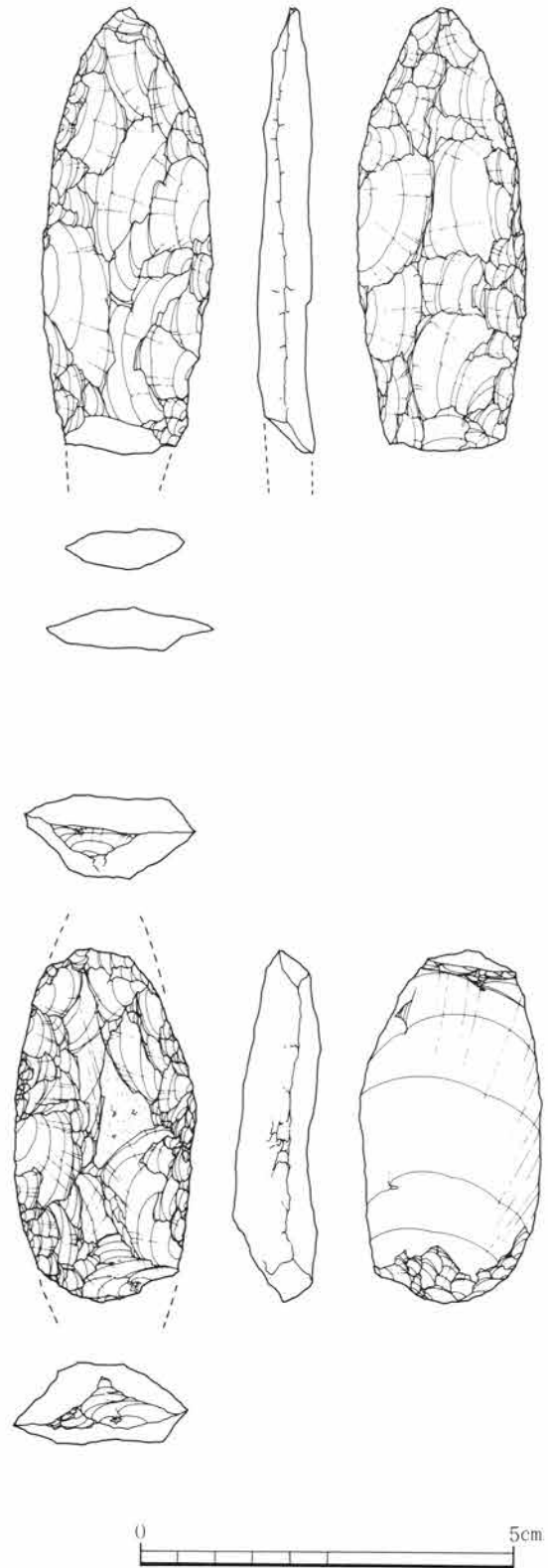
第5図 先土器時代調査グリッド位置図

欠損以後の剝離が見られ、再度器体の加工を試みている。長さ4.7cm(推定長6.6cm)・幅2.4cm・重さ4.2gを測る。黒曜石。

出土資料は2点(第6図1：9号墳、第6図2：5号墳)とも古墳の陥没地点に出土している。出土状態の詳細が明確ではなく、そのため出土資料の位置づけには制約が著しい。ここでは特に剝離状態の差を踏まえ若干の検討を加えていきたい。

既に述べた通り、出土資料には剝離状態の差が著しい。同じ欠損資料でも一様には位置づけられない可能性が高く、前者の槍先形尖頭器には完成状態の搬入が、後者の槍先形尖頭器には一部器体の再生が想定されよう。評価する際に、前者は若干器軸が振れる点で完成状態と断定可能か、また、後者の場合には出土地点周辺の試掘が粗く、試掘地点周辺の状況が明確ではないため推定の域を出ない。が、後者の例は器体形状が左右対象ではないこと、調整状態が左右で異なること、欠損部分には欠損以後に剝離を施していることなどから器体の再生を試みている可能性が極めて高い、と考えている。剝離状態の差を踏まえ検討した結果、各々の資料には異なる評価を下した。先にも述べた通り、層位的所見に乏しく同一時期の所産か否か断定できないわけだが、両者とも推定長は6cm～8cmの中に収まり中形の部類に入り、形状や調整に多様な在り方を示す段階以後に位置づく可能性が高い。前者は最大幅を基部付近に有しており、この点を重視するならより新しい段階の細石刃石器群に後出するものとも思える。また、後者は斑晶部分で欠損するとはいえ、斑晶の量は少なく、良質な部類の黒曜石を用いている。本県では黒曜石を用いる例は細石刃石器群の後には極めて少なく、層位的にはA s - S P 降下前後の段階に位置づけられよう。

(岩崎)



第6図 先土器時代の出土遺物

2. 縄文時代の出土遺物

調査区の北東部分に位置する3・4号墳は、後世の土地利用のために封土の全てが削平されていた。遺構確認面の一部は、粘性の強い黒褐色土の自然堆積土層にまで達し、古墳調査中に多数の縄文土器片が出土した。縄文土器の包含層は、黒褐色粘質土とその下層の茶褐色土層で、厚さ5～30cmであったが、S-15グリッドからP-14グリッドの方向には南北方向の浅い侵食谷が埋没しており、50～70cmの厚さの黒褐色土が堆積していた。Q-20グリッドからJ-17グリッドにかけても同様な埋没土の堆積が認められた。

遺跡の位置と地形の項で述べた様に、本遺跡は岩野谷丘陵、通称観音山丘陵上に位置し、周辺は複雑な侵食地形を呈しているが、本遺跡の南方約1.2kmの距離にある大平台遺跡では縄文時代前期～中期の竪穴住居35軒や土坑等が検出されている。この他にも、鼻高町立石や乗附町長坂等、本遺跡に南接する丘陵頂部の、標高約250m前後を測る平坦面上には多数の縄文時代の遺跡や遺物散布地が確認されている。このような周辺地域における歴史的環境を考慮すると、本遺跡の立地は北向きの斜面上ではあるが、縄文時代の遺構が存在することが充分予想された。

そこで、黒褐色土の堆積が顕著な、グリッドナンバーのIからSラインの間と20ライン以東については、弥生時代の住居の検出を兼ねて、一辺5mの方眼を設定し、一区画毎に包含層を確認し、縄文時代の遺構の検出に努めた。その結果、3・4・6・17・18号住居と命名した弥生時代～古墳時代前期の住居と、時期の確定は困難であったが数箇所の倒木痕が確認されたが、縄文時代の竪穴住居或は集石・焼土痕等の遺構は検出されなかったため、土器・石器の平面分布と出土レベルの記録を作成し、旧石器時代の調査へと移行した。

縄文土器は総点数648点が出土し、早期～晩期の各時期に互っているが、いずれも小破片で、全体の形状、或は文様構成の推定可能な個体は無かった。最

も分布の集中した箇所は、グリッドナンバーの25・26ライン以東で、GとVラインに挟まれた北東斜面で、標高163～165mの範囲で、黒褐色土の堆積が良好な地点であった。

なお、11号墳北半部では、諸磯b式土器を初めとして、多時期に亘る土器の分布が認められた。また、3・4・18・19号墳の周辺でも出土数が集中する傾向が認められた。これは、古墳の築造に伴って墳丘内に遺物包含層が残存し保護されたためや、反対に周堀の掘削により包含層が攪乱を受けたことに起因すると考えられる。このようにしてみると縄文土器の包含層は、遺物の内包状況に粗密の程度差こそあれ調査区全域に存在していたものが、後世の土地利用の結果、その分布に偏りが認められるようになった可能性が考えられる。

各時期の土器分布の概略は、次の通りである。早期は茅山上層式で、13号住居周辺で3片を検出したが、他に絡条体圧痕文の土器も3片出土している。

前期は、花積下層式10片、諸磯a式11片、諸磯b式3片、諸磯c式19片で、いずれも調査区の北東斜面を中心に散在していた。黒浜式は398片と出土点数も多く、広範囲に分布していた。調査区北東斜面の他に、27・28号住居の立地する北斜面や11・12号墳からも出土している。

中期は、五領ヶ台式5片、阿玉台式14片、勝坂式49片、加曾利E式27片と、型式不明の68片が出土した。阿玉台式・勝坂式は北東斜面の北半部に点在していた。

後期は10片、晩期は27片で、中期の阿玉台式や勝坂式と同様の分布であった。

石器は、打製石斧・乳棒状石器・凹石・すり石・石皿・三角錐形石器・打製石鏃・石匙・多孔石等の定形石器の他に、不定形の剝片石器も出土した。

凹石とすり石が大多数を占め、59点を数えた。出土状況は、土器の分布と同様に広範囲に亘り、北東斜面を中心に弥生時代住居の埋没土層中からも多数が検出されている。すり石の材質は、粗粒安山石が主体で、楕円形を呈するものの他に、棒状を呈し稜

線に沿って使用面が形成されている、いわゆる穀磨石も多く出土した。これらの端部には顕著な敲打痕が認められる。

打製石鏃は14点出土したが、広範囲から散漫な状況で出土している。材質は黒曜石・チャートを主体とするが、黒色頁石・珪質頁石等多彩である。

多孔石の出土は1点で、21号墳の葺石に再利用されていた。(徳江)

(1) 土器

縄文時代の遺構は検出されていないが、古墳の盛土や住居の埋没土中等より、多くの土器片が出土した。以下、出土土器のおよその時期分けと説明を加える。

第1群(第9図、図版4・5)

胎土中に繊維を含み、早期末から前期に比定される一群である。形式的には野島(子母口)・茅山上層・花積下層・関山・黒浜(有尾)式期である。

1・2は繊維を含み、内外面に条痕文を持つ。3・4は同一個体片である。縄文地文で微隆帯が見られ、隆帯に沿って絡条体圧痕文が施文される。5はやや太めの縄文地に絡条体圧痕文がかなり深く並行して施文される。6は折り返された口縁が肥厚、LRの縄文が施文されているが摩滅が著しい。7・8は同一個体、RLのやや粗い縄文が施文されている。9もRLの縄文が施文されているがかなり不規則である。10はLRの縄文が施文されている。胎土中に径2～3mmの石英粒の混入が目立つ。11・12はRLの縄文が施文されている、11は条間が空いている。13は羽状縄文である。14は尖底土器の底部である、器肉は厚く縄文施文されているが摩滅しているため方向は不明瞭である。15・16はLRの縄文。17・20・22は羽状縄文が施文される。18・19・23・24・25・26・27は直前段合撚である。18は半截竹管による曲線文を描き中を平行線文で充填、下位に平行沈線2条を付す。26は口唇部が僅かに残る。28・29は底部片である。28は摩滅が著しく、施文は不明。29はRLの縄文が施文されている。かなりの上げ底である。

第2群(第9・10図、図版5)

前期後半の諸磯式期である。形式的には諸磯a・b・c式期である。

30はRLの縄文が施文されている、波状口縁部片。36はRLの縄文地に横位沈線が見られる。34・35・37～41は地文に横位、縦位の集合沈線を持つ、34・35は口縁部片、やや大きな耳状貼付け文、円形文が付けられている。38も同様である。37は横方向の矢羽根状の集合沈線が充填されている。

第3群(第9～11図、図版5～7)

中期前半の五領ケ台・阿玉台・勝坂式期である。

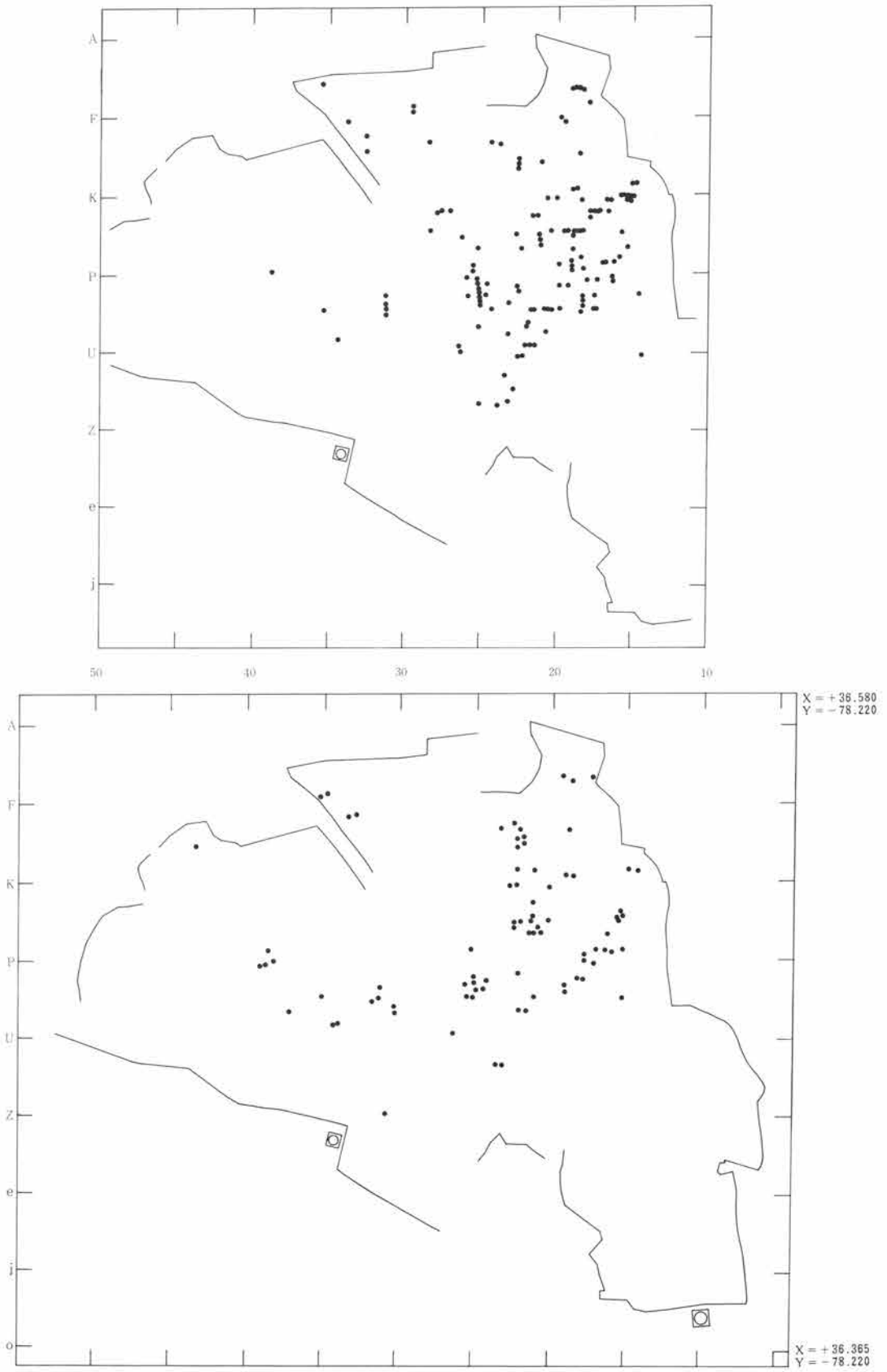
31は口縁部片である。平行沈線に沿って刺突文・押圧文が見られる。口唇部は内削ぎ状となる。32・33は同一個体であろう。縦位の集合沈線地にやや間隔をおいた平行沈線を施文する。42～64はいずれも勝坂式。隆帯を貼り付け、沈線による波状文・曲線文を描く、細片のため復元できなかったが同一個体片が多く含まれる。42は勝坂2式、口縁は外反し頸部に4本の沈線が巡る。断面三角の隆帯上に連続爪形文、隆帯に沿って2条の沈線が巡る。下位に隆帯による文様が描かれており、隆帯に刻み文・沈線が巡る。46は隆帯と沈線による曲線文が描かれる。50はやや内傾する口縁部で、横位隆帯を持ち、これに沿って平行沈線および連続山形文が描かれる。51・52も同じ。58・61・62は縦方向の沈線が施される。59・61は隆帯文を持つ。59は隆帯により平行線が描かれ、縦に短い隆帯が付けられている。地文は撚糸。63・64は底部片である。64は横方向に隆帯が一周する。65～67は阿玉台式土器である。65はやや偏平な隆帯で三角のモチーフを描き、これに沿って連続刺突文が見られる。66・67は縦に隆線、交差して連続爪形文が見られる。

第4群(第11図・図版7)

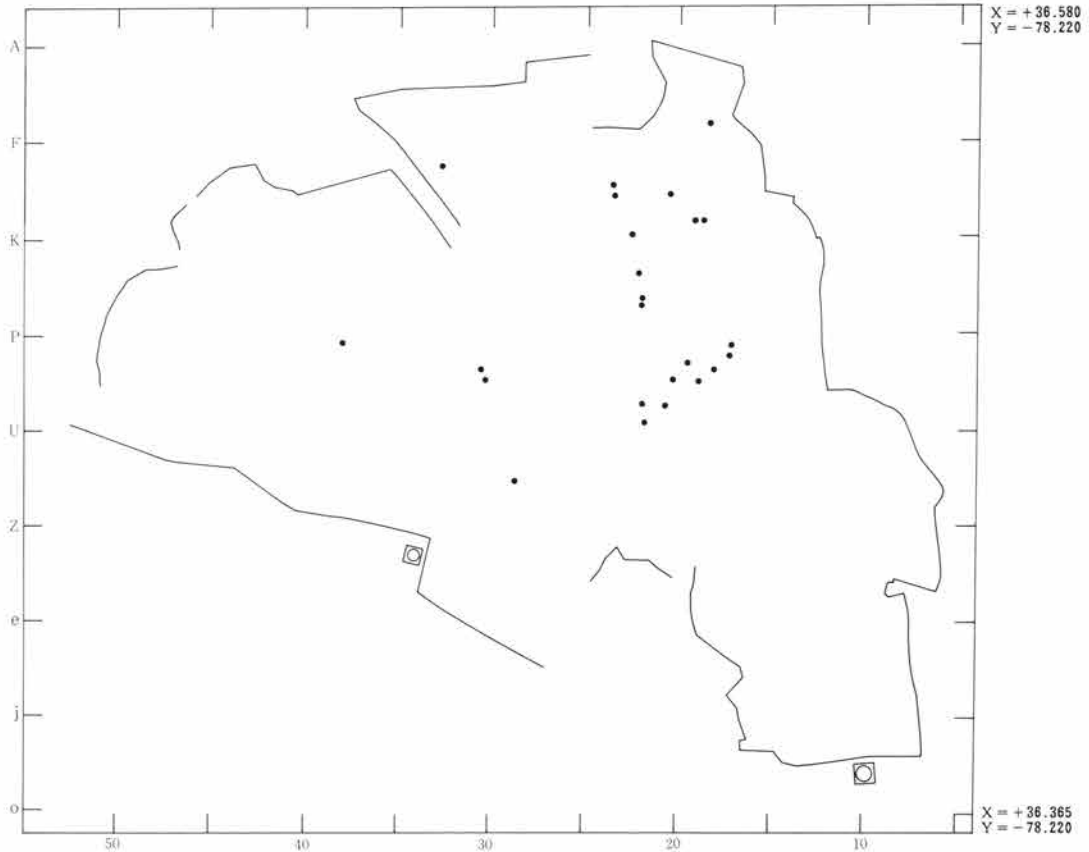
中期後半に位置付けられる一群である。

68は口縁に沿って沈線を巡らす、沈線で区画された磨り消し縄文。69も縄文地に磨り消し縄文。70は隆帯による渦巻き文。71は磨り消し縄文、取っ手が付いていたものと思われる。

III 検出された遺構と遺物



第 7 図 縄文土器出土位置図 (1)



第 8 図 縄文土器出土位置図 (2)

第 5 群 (第11図・図版 7)

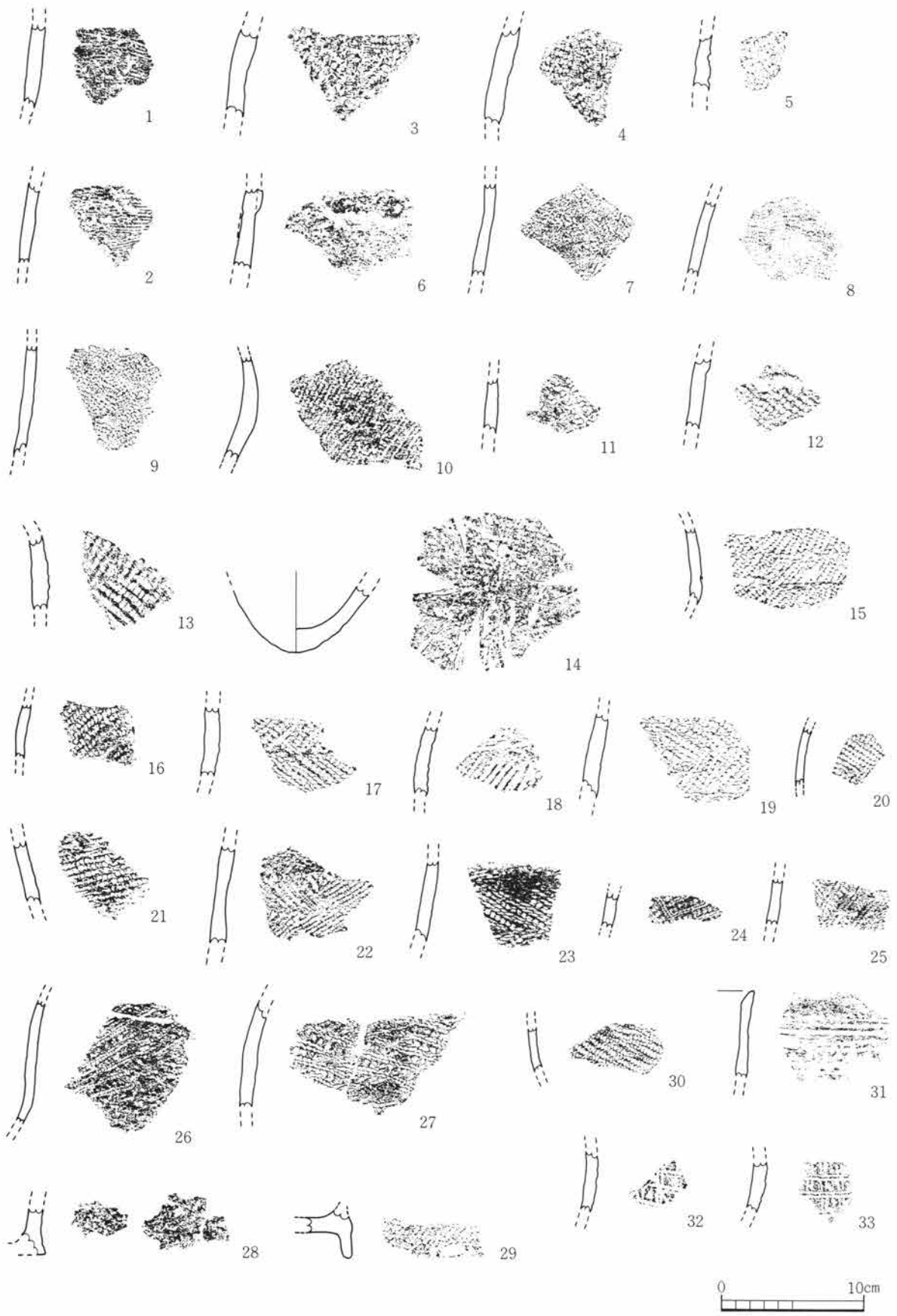
後期の堀之内 2 式土器である。

80は浅鉢形土器である、口縁に 2 本の隆帯と貼付文が見られる。

第 6 群 (第11図・図版 7)

75~91は晩期の土器である。いずれも比較的薄手の作りで、砂粒が目立つ土器である。75~81は口縁部片。75・77は口縁部が一部三角に高まる。以下横位の沈線。76は縄文地文に横位沈線。78は口唇部がやや外反し浮線文を持つ。79・81・83も浮線文を持つ。84は横方向に粗く条痕文。85は地文に細かい条痕文を持ち横方向の沈線。86・87・88・91は地文に条痕文、粗く沈線文。89は地文に L R の縄文。横位沈線。90は縦方向に粗く集合沈線。 (小野)

III 検出された遺構と遺物

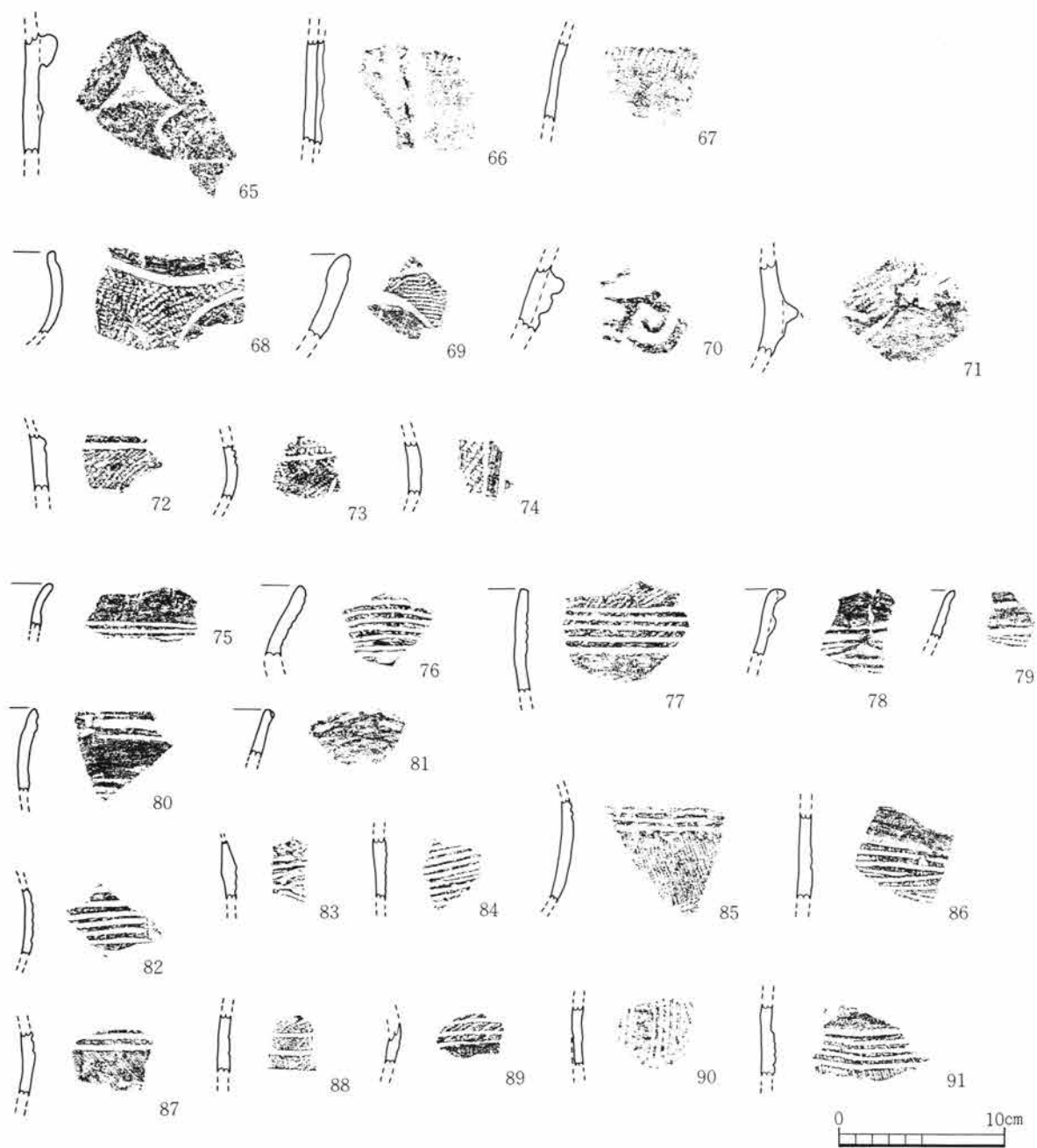


第 9 図 縄文土器拓影・実測図 (1)

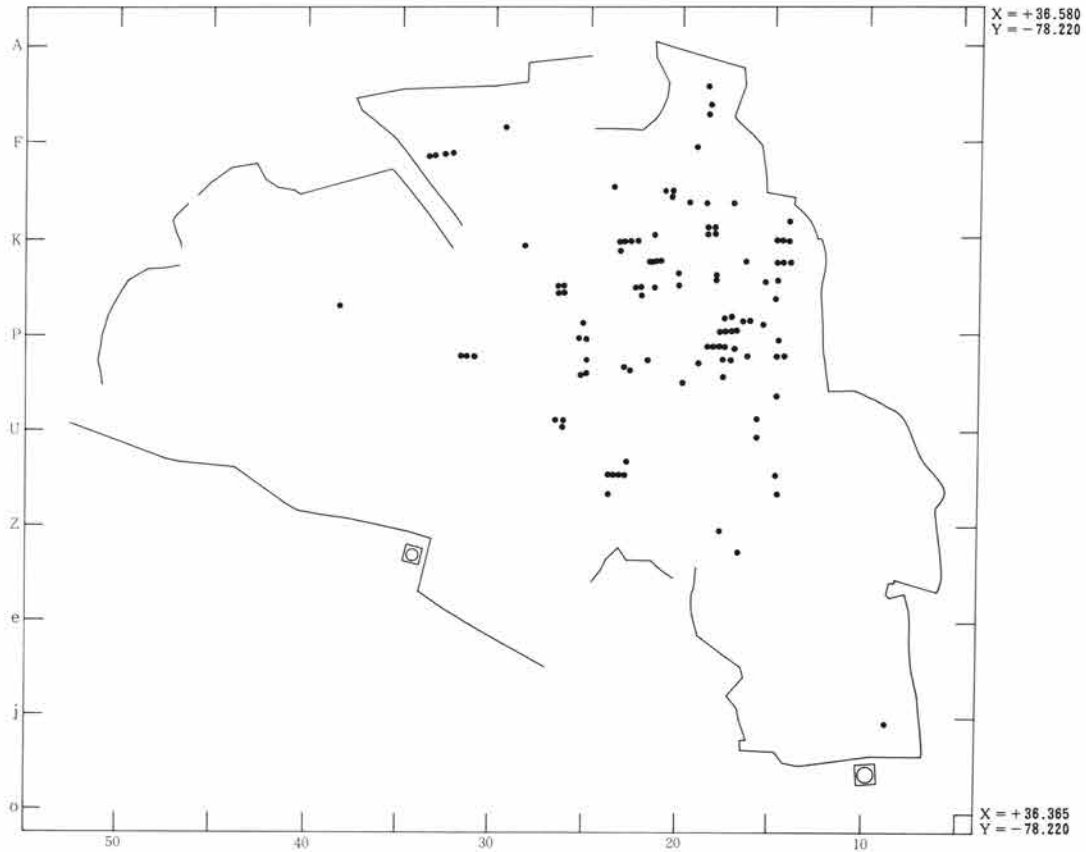


第10図 縄文土器拓影・実測図(2)

III 検出された遺構と遺物



第11図 縄文土器拓影・実測図(3)



第12図 石器出土位置図

(2) 石器

早期から晩期に及ぶ土器の出土が示す通り、石器も多様性に富み、石鏃や打製石斧には早期から前期に特徴的な例、中期から後期に特徴的な例が見られ、出土資料は各期に及ぶ。

石鏃(第13図1~19)、無茎鏃17点(1~17)、有茎鏃1点(18)、尖基鏃1点(19)が出土しており、無茎鏃が圧倒的に多い。無茎鏃は基部形状の在り方から以下に大別され、若干基部が抉れる例(1~5)、基部が深く抉れる例(6~9・15)、基部がU字状に深く抉れる例(10~13)からなる。一部を除き、各々の石鏃は長幅比が1:1を示す例(4・5・7・8)と、長幅比が2:1を示す二等辺三角形に近い形状を呈す例(1~3・6・9)からなる。石材は黒曜石や珪岩類を多用している。

打製石斧(第14~17図)、短冊状を呈す例(20~27)、器体の中央付近が抉れる分銅形に近い形状を呈す例(29~33)、表裏両面に礫面を残す大形の例

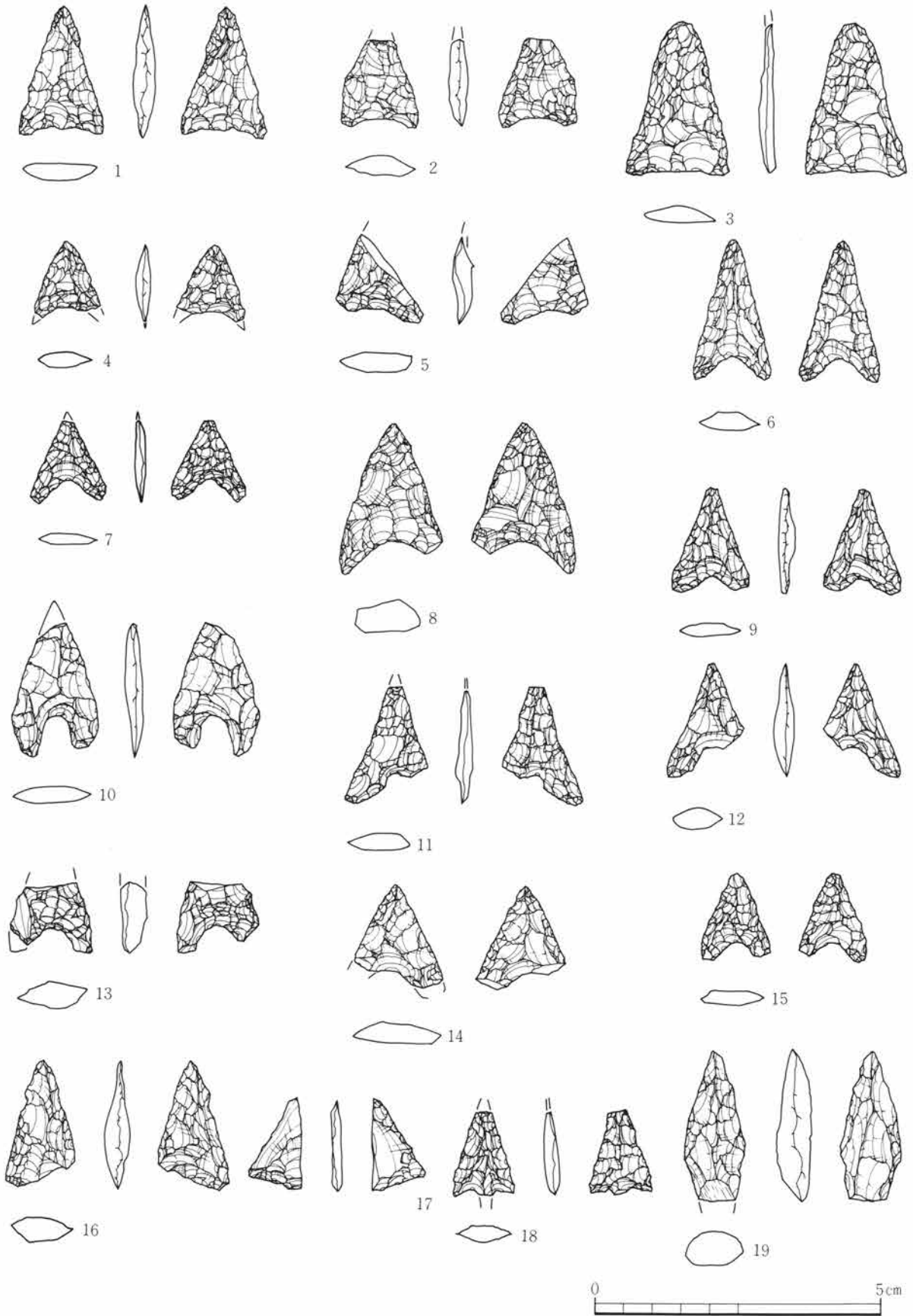
(28・37)からなる。短冊状を呈す例は片側に礫面を残す例が多く、また、このなかには揆状を呈す例(25・27)も若干存在している。25・27は前期初頭の段階には確実に存在しており、前期後半には見られない例である。石材には珪質泥岩を多用する。

削器(第17図38・39)、横長剥片を用いる。剥離の状態は上下両端で異なり、上端に粗い加工を、下端には微細な加工を施している。38は凸刃状の、39は凹刃状の刃部を作出している。

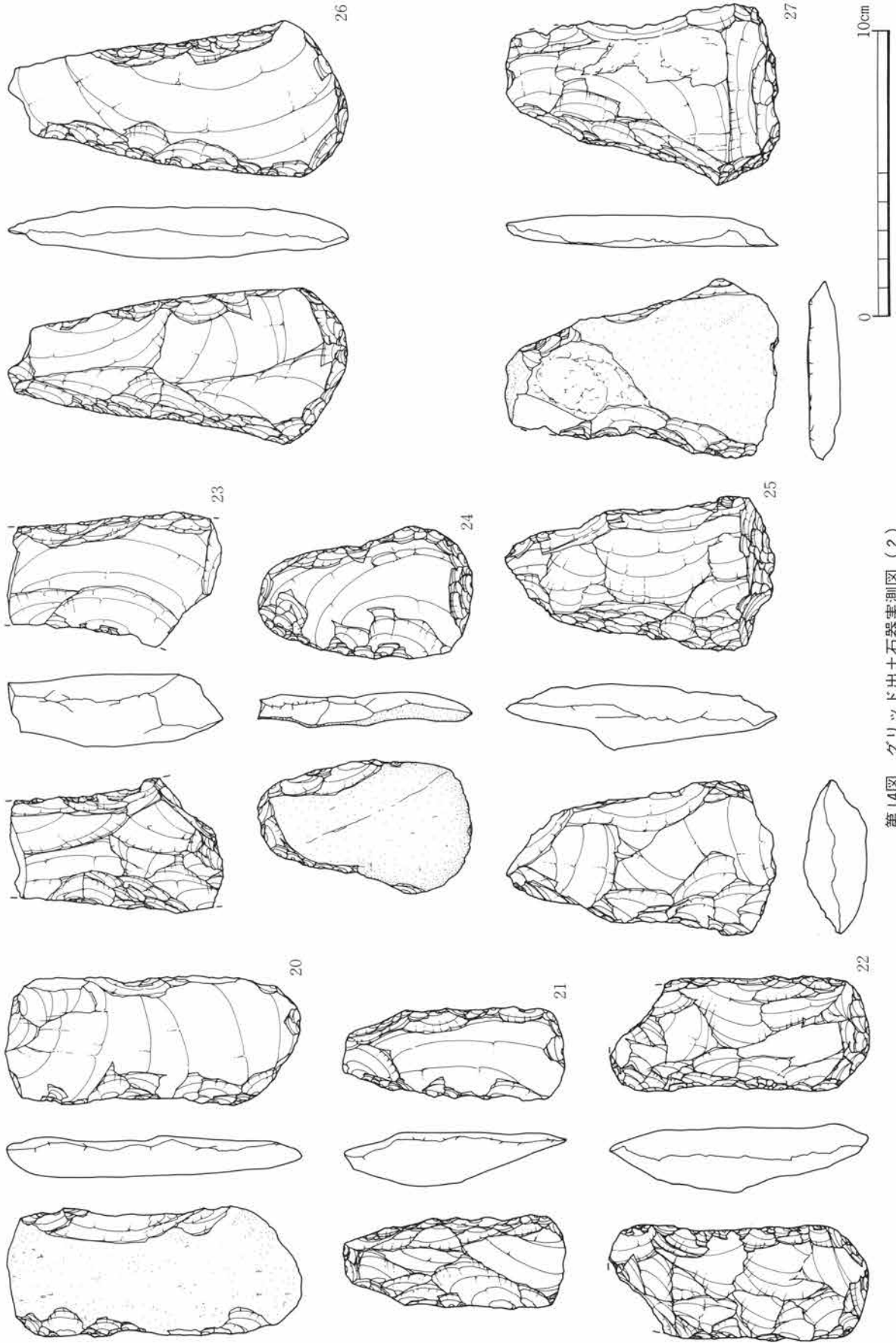
三角錐形石器(第17図40)、1点のみ出土している。加工は全面に及び、裏面に残す場合が多い礫面は全く見られない。「握り部」と機能部(底面部)の在り方からみて再生・使用が著しい。黒色頁岩。

凹み石ほか(第18~23図)、凹み石・磨石・石皿・多孔石・砥石が出土している。磨石には棒状礫を用いる頻度が高く、なかには典型的な穀磨石(74)も存在している。概して使用部位・選択石材・形状は一般的な在り方を示している。(岩崎)

III 検出された遺構と遺物

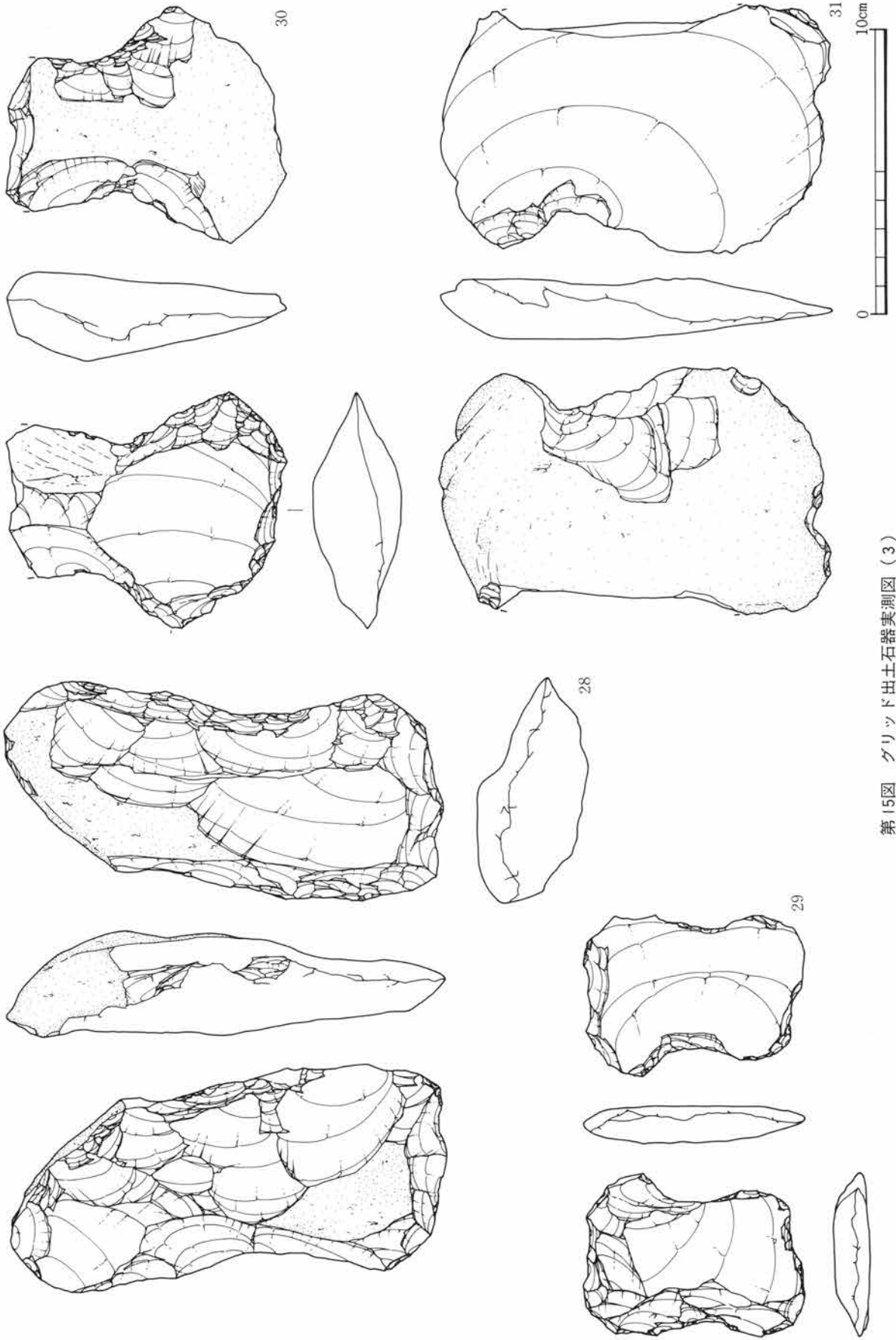


第13図 グリッド出土石器実測図(1)

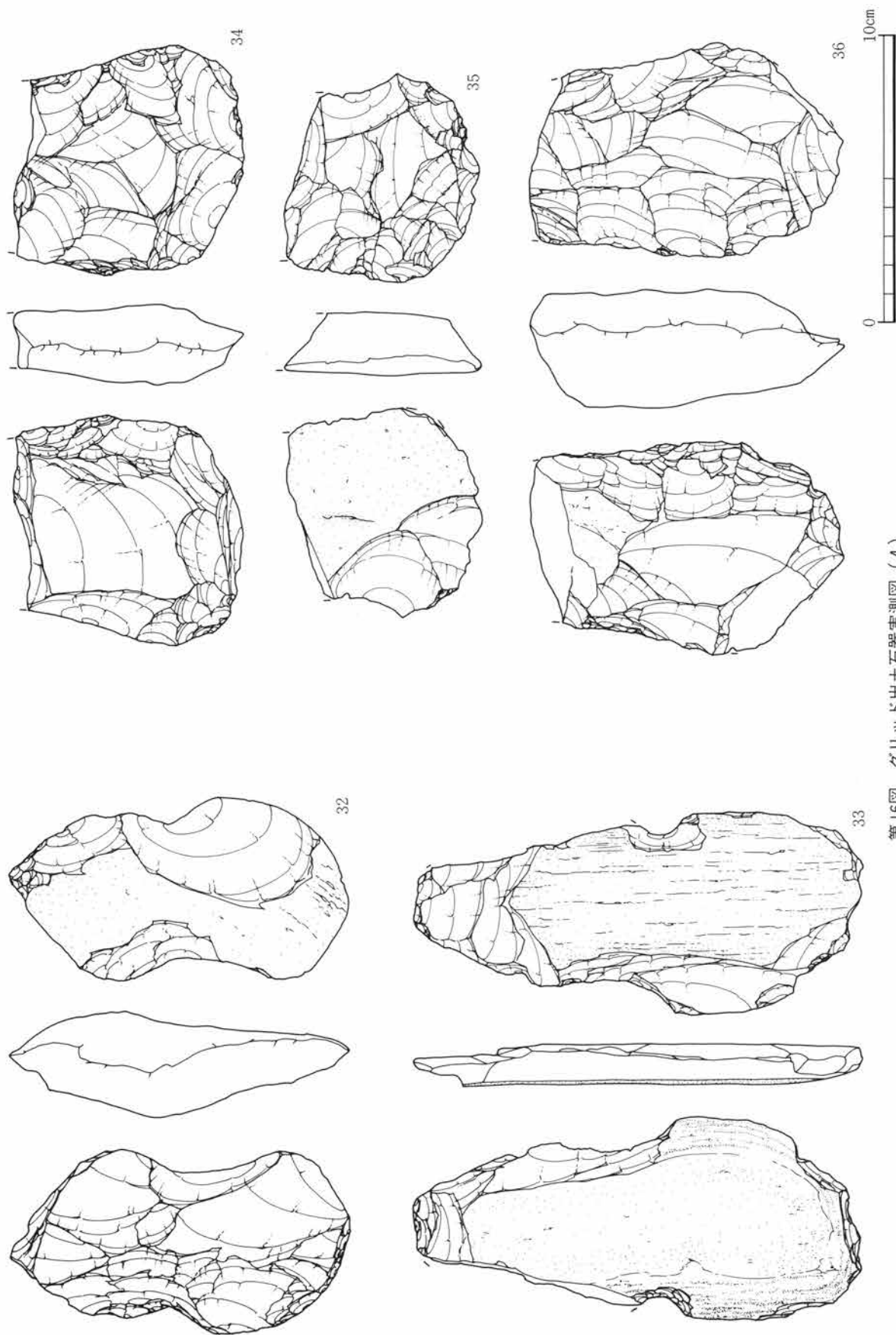


第14図 グリッド出土石器実測図(2)

III 検出された遺構と遺物

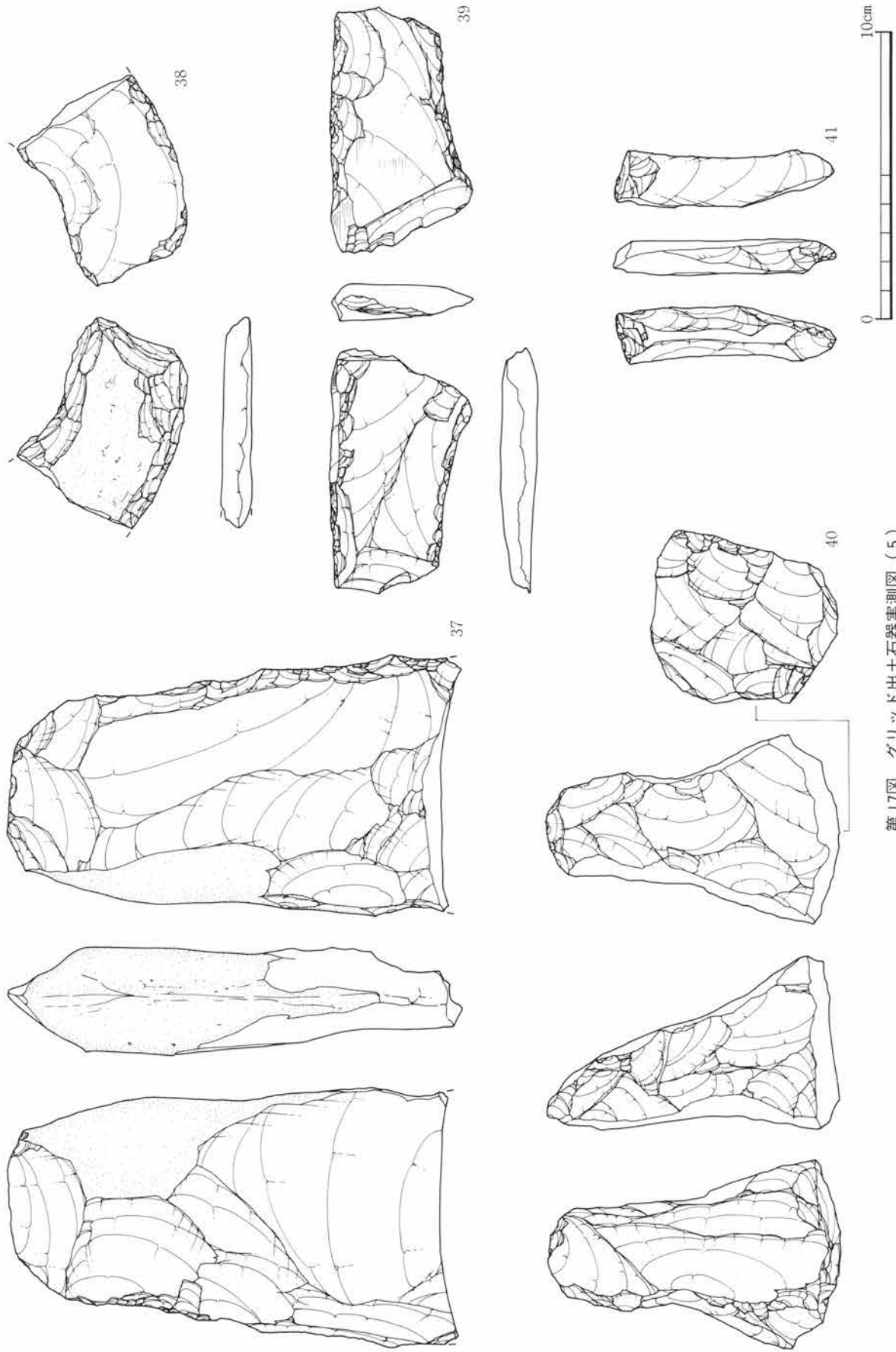


第15図 グリッド出土石器実測図(3)

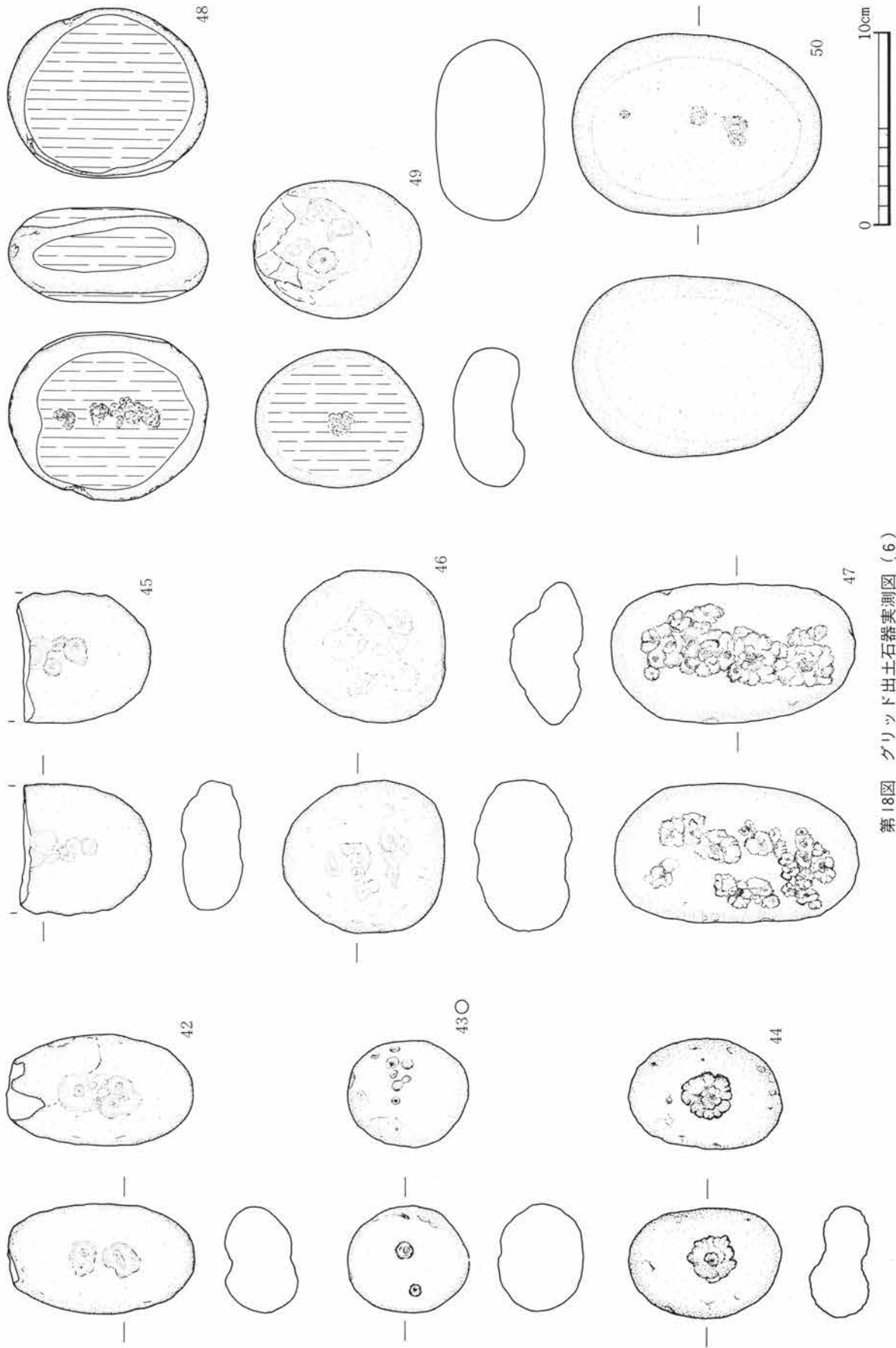


第16図 グリッド出土石器実測図(4)

III 検出された遺構と遺物

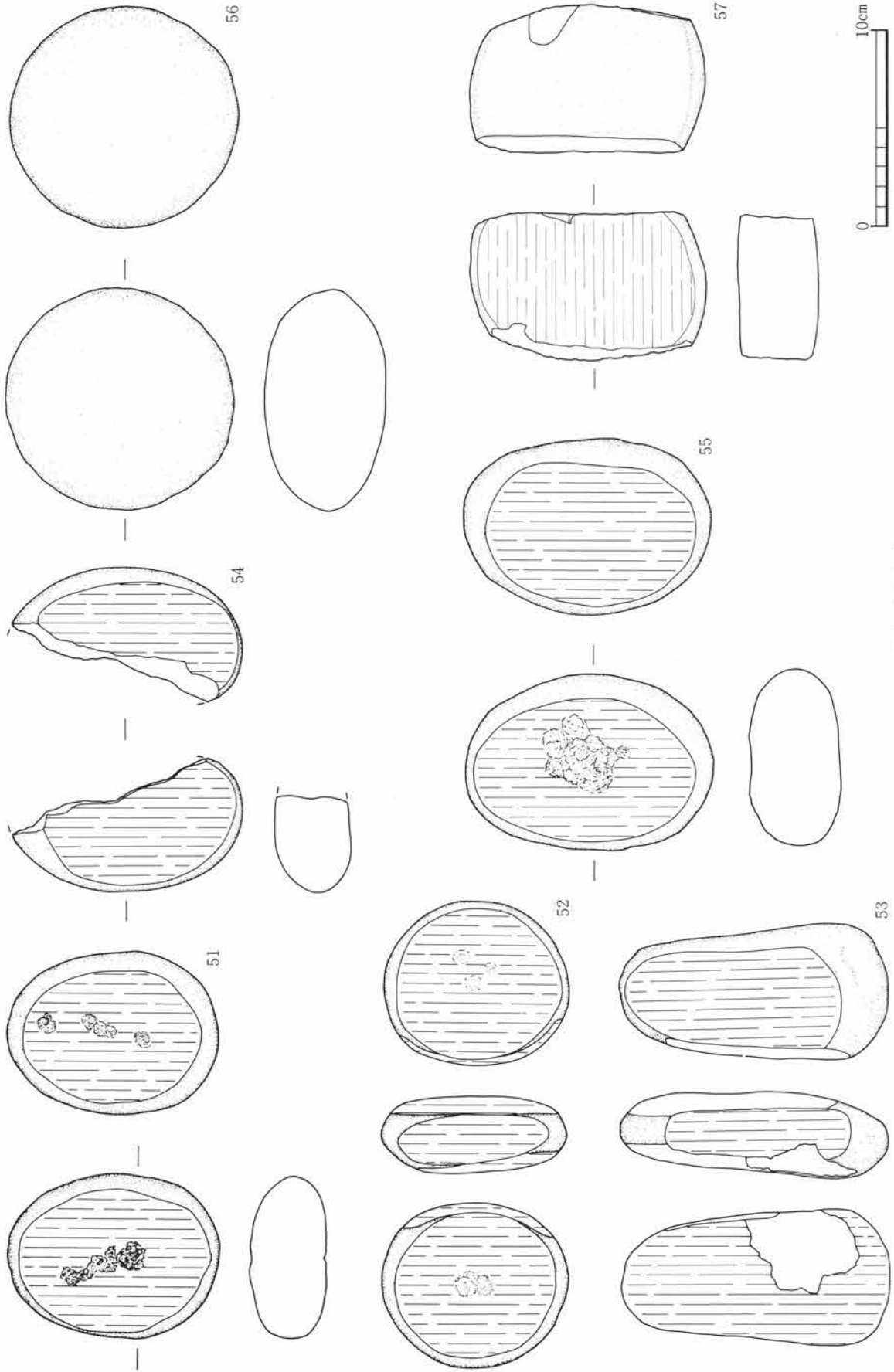


第17図 グリッド出土石器実測図(5)

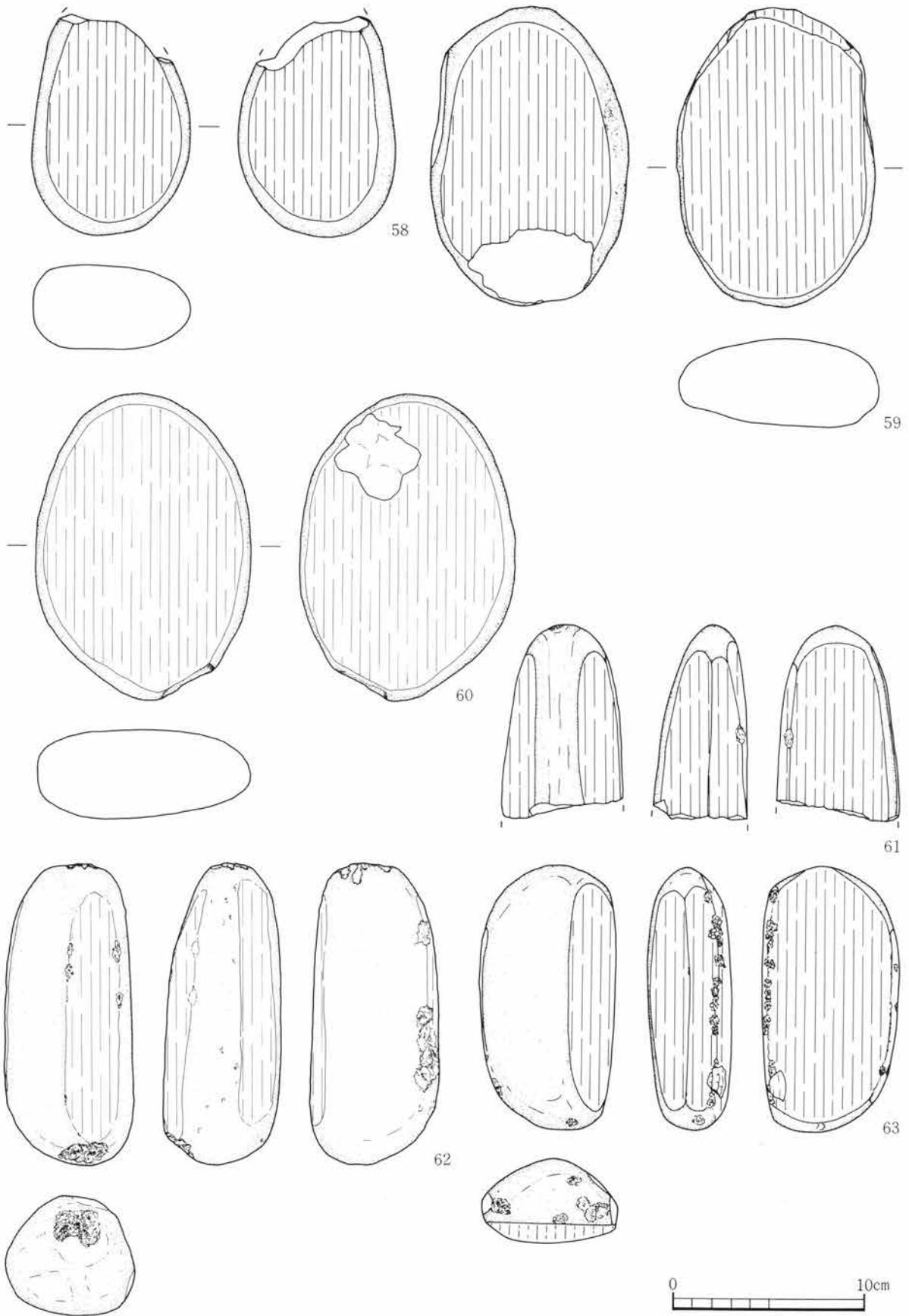


第18図 グリッド出土石器実測図(6)

III 検出された遺構と遺物

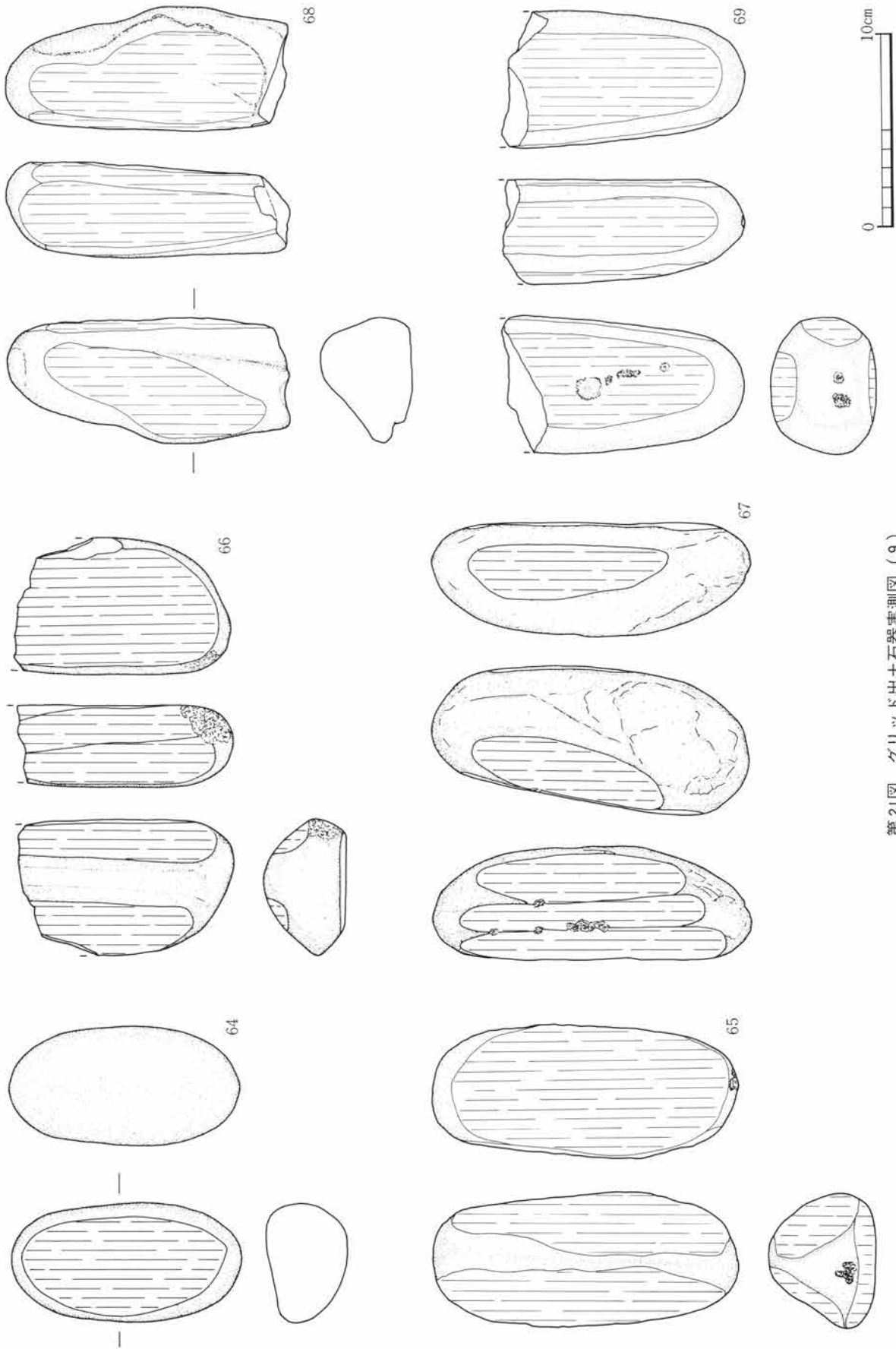


第19図 グリッド出土石器実測図(7)

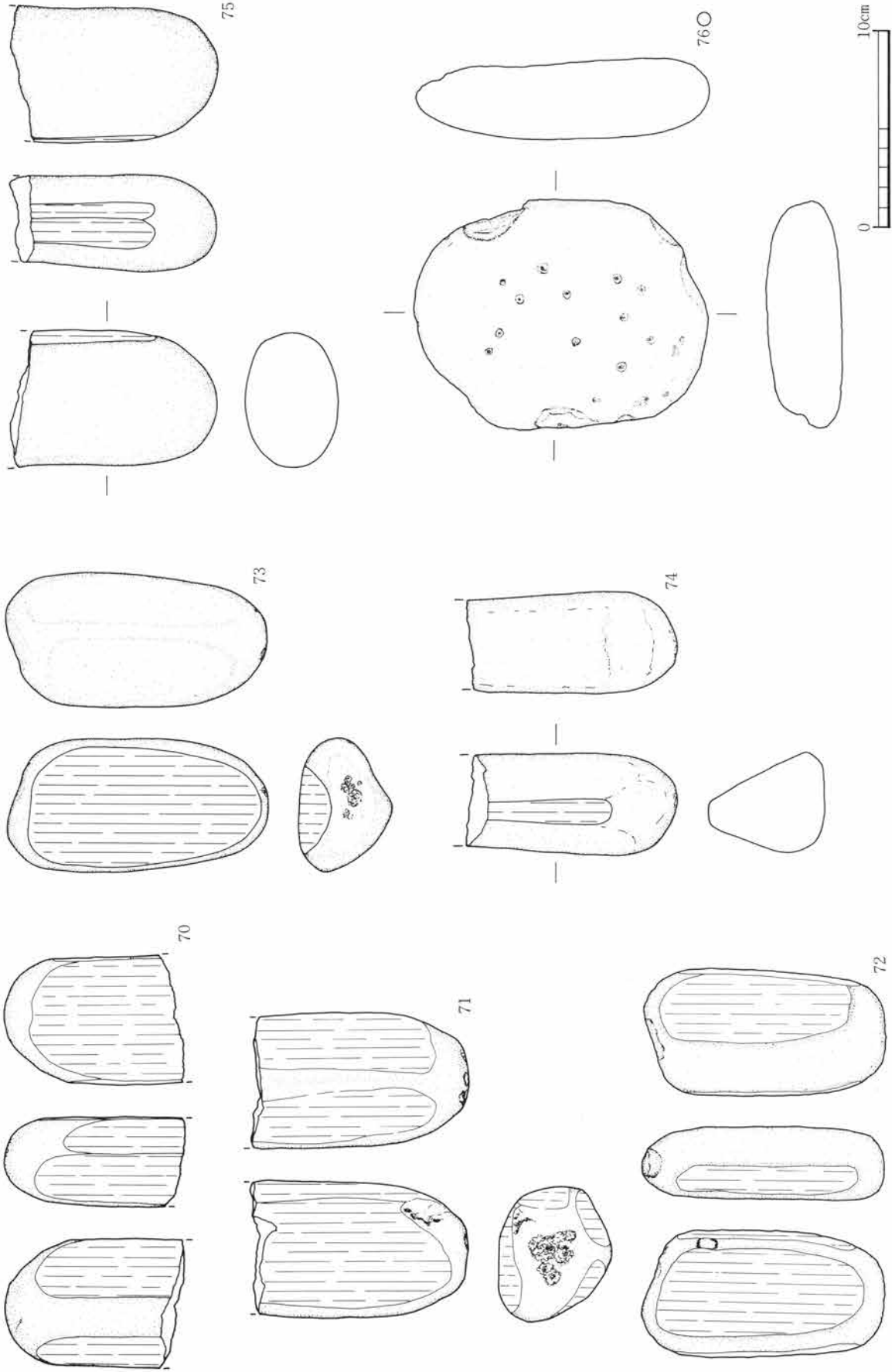


第20図 グリッド出土石器実測図(8)

III 検出された遺構と遺物

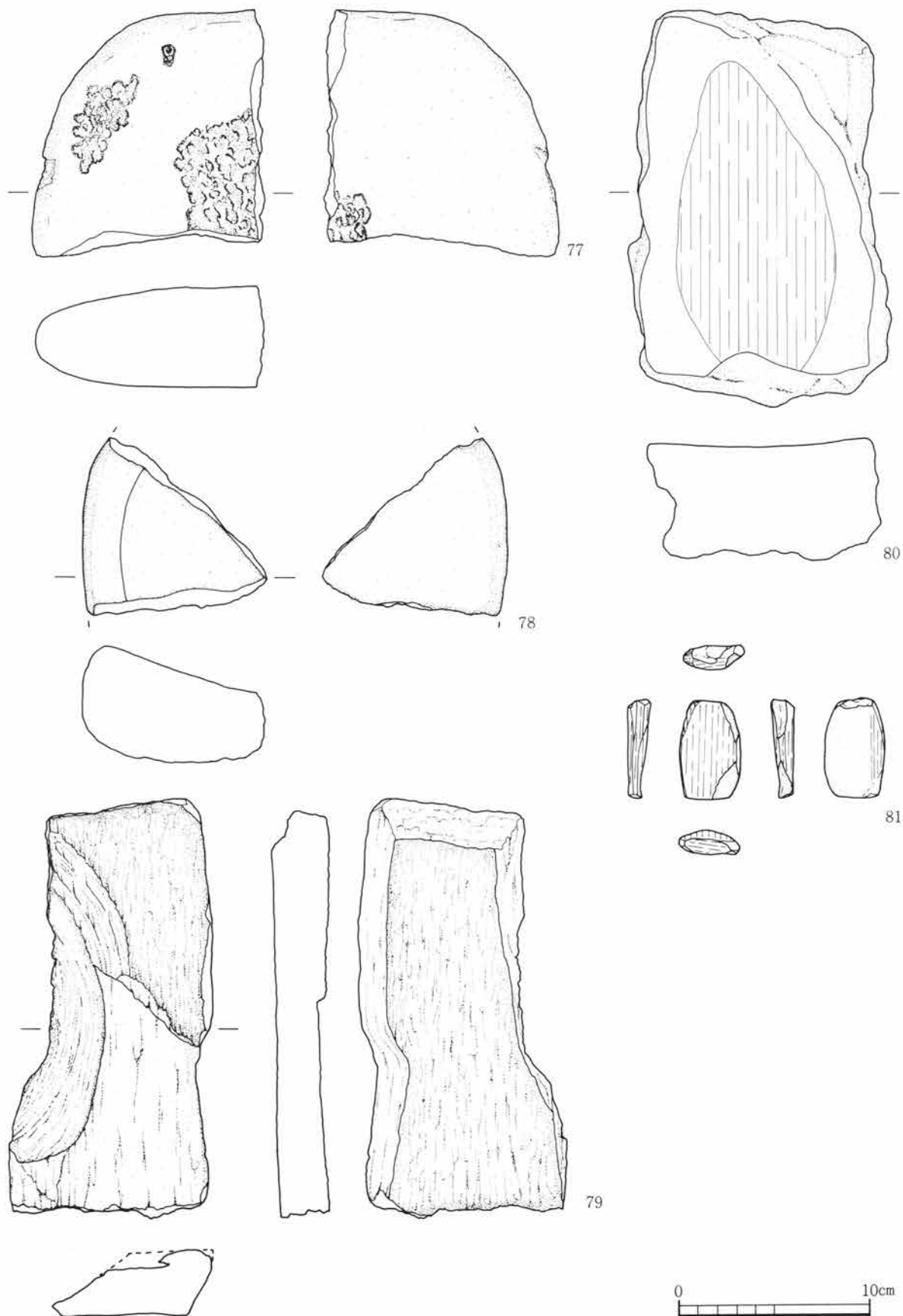


第21図 グリッド出土石器実測図(9)



第22図 グリッド出土石器実測図(10)

III 検出された遺構と遺物



第23図 グリッド出土石器実測図 (11)

出土遺物観察表《石器》第 図

番号	器種	長さ・幅 厚さ (cm)	石 材 重さ (g)	出土位置
1 123	石鏃	2.3・1.5 0.3	チャート 1.04	P-14 No2
2 149	石鏃	1.5・1.4 0.35	チャート 0.7	表採
3 144	石鏃	2.6・1.8 0.3	流紋岩 1.28	a-16
4 150	石鏃	1.3・1.2 0.25	チャート 0.37	表採
5 87	石鏃	1.6・1.5 0.35	黒曜石 0.56	18号墳 No 1
6 113	石鏃	2.5・1.4 0.3	珩質頁岩 0.71	L・M-18
7 77	石鏃	1.4・1.35 0.2	黒曜石 0.9	6号墳 No 5
8 146	石鏃	1.7・1.8 0.3	黒曜石 0.9	トレンチ46
9 126	石鏃	1.8・1.4 0.25	チャート 0.49	P・Q-25・26
10 112	石鏃	2.3・1.5 0.3	黒色頁岩 0.94	L・M-18
11 91	石鏃	2.0・1.3 0.3	赤色珩質岩 0.53	Q-31溝 No 1
12 92	石鏃	2.0・1.2 0.4	黒色安山岩 0.6	Q-31溝 No 2
13 79	石鏃	1.2・1.5 0.45	黒曜石 0.68	6号墳 No 7
14 143	石鏃	1.4・1.5 0.35	黒色頁岩 0.74	Z-17
15 148	石鏃	1.5・1.2 0.25	黒曜石 0.31	表採
16 151	石鏃	2.2・1.2 0.45	チャート 0.9	表採
17 80	石鏃	1.05・1.0 0.15	黒曜石 0.18	6号墳
18 78	石鏃	1.5・1.1 0.3	黒曜石 0.36	6号墳 No 6
19 89	石鏃	2.65・1.05 0.6	珩質頁岩 1.83	21号墳
20 155	打製石斧	10.3・4.4 1.4	88	3号墳
21 81	打製石斧	7.8・3.1 1.9	黒色頁岩 4.94	9号墳
22 73	打製石斧	9.1・4.0 2.3	硬質泥岩 87	4号墳
23 70	打製石斧	7.3・4.6 2.5	硬質泥岩 98	4号墳
24 93	打製石斧	7.1・4.6 1.2	変質安山岩 60	C-18
25 161	打製石斧	9.5・5.3 2.2	99	V-22
26 69	打製石斧	11.9・5.4 1.8	粗粒安山岩 118	3号墳
27 140	打製石斧	9.5・6.2 1.1	珩質頁岩 80	W-14
28 94	打製石斧	15.0・7.1 3.7	硬質泥岩 452	D-17
29 159	打製石斧	7.8・5.5 1.3	79	21号墳

番号	器種	長さ・幅 厚さ (cm)	石 材 重さ (g)	出土位置
30 145	打製石斧	9.8・7.4 3.0	硬質泥岩 202	i-8
31 138	打製石斧	13.5・8.4 2.1	珩質頁岩 327	U-15
32 86	打製石斧	11.8・5.8 3.4	珩質頁岩 238	12号墳
33 71	打製石斧	15.5・7.0 1.4	雲母石英片岩 203	4号墳
34 157	打製石斧	8.1・7.7 2.8	211	21号墳
35 83	打製石斧	6.8・7.3 2.2	砂岩 121	9号墳
36 154	打製石斧	10.8・7.4 4.1	383	3号墳
37 88	打製石斧	15.1・8.9 3.7	硬質泥岩 608	18号墳
38 72	打製石斧	5.6・6.9 1.1	珩質変岩 53	4号墳
39 156	石刃	8.5・4.9 1.3	70	9号墳
40 124	スタンプ 型石器	10.2・6.4 5.8	黒色頁岩 348	P-17
41 147	剥蕩	7.8・1.8 1.2	硬質泥岩 21.1	表採
42 116	凹石	9.8・5.7 3.8	粗粒安山岩 249	O-17
43 139	凹石	13.0・11.2 9.0	粗粒安山岩 1475	X-23
44 75	凹石	8.0・5.8 3.0	粗粒安山岩 173	4号墳
45 117	凹石	6.7・6.8 3.1	粗粒安山岩 193	O-17
46 109	凹石	8.5・7.9 5.1	粗粒安山岩 431	L-21
47 98	凹石	12.8・7.3 3.7	粗粒安山岩 329	J-18 No2
48 148	凹石 すり石	10.5・8.9 5.0	粗粒安山岩 703	W-14
49 101	凹石 すり石	8.8・7.2 3.7	粗粒安山岩 313	K-14 No11
50 99	凹石 すり石	13.0・9.5 5.6	粗粒安山岩 1145	K-14 No1
51 125	凹石 すり石	10.9・8.4 3.9	粗粒安山岩 490	P-17
52 132	凹石 すり石	9.5・8.3 4.0	粗粒安山岩 462	Q-16
53 110	すり石	13.8・7.0 4.2	粗粒安山岩 630	L-21
54 100	凹石 すり石	11.8・5.4 3.9	粗粒安山岩 376	K-14 No2
55 135	凹石	12.8・9.0 4.6	粗粒安山岩 669	R-17
56 134	すり石	11.8・11.3 6.2	粗粒安山岩 950	Q-31 No1
57 96	すり石	12.1・7.5 4.2	砂岩 619	J-14
58 118	すり石	11.1・8.3 4.4	粗粒安山岩 684	O-17
59 114	すり石	15.5・10.4 4.4	粗粒安山岩 1156	M-14 No4

III 検出された遺構と遺物

番号	器種	長さ・幅 厚さ(cm)	石 材 重さ(g)	出土位置
60 108	すり石	15.9・11.4 4.2	粗粒安山岩 1187	L-21
61 137	すり石	9.6・6.4 4.9	粗粒安山岩 398	T-15
62 130	すり石	15.6・6.8 6.2	粗粒安山岩 1026	Q-14 No2
63 127	すり石	13.8・7.2 4.4	粗粒安山岩 676	Q-14 No1
64 152	すり石	12.1・6.2 4.2	469	Q-31 No3
65 95	すり石	16.1・6.8 5.6	粗粒安山岩 881	G-12
66 115	すり石	11.3・7.1 4.3	粗粒安山岩 544	N-14 No1
67 136	すり石	16.6・5.9 7.2	閃緑岩 1085	S-14
68 104	すり石	14.6・6.4 5.0	粗粒安山岩 694	L-14 No8
69 97	凹石 すり石	12.4・7.1 5.5	粗粒安山岩 797	J-17 No1
70 119	すり石	8.8・6.1 4.0	粗粒安山岩 441	O-17

番号	器種	長さ・幅 厚さ(cm)	石 材 重さ(g)	出土位置
71 76	すり石	10.9・6.8 5.8	粗粒安山岩 732	4号墳
72 105	すり石	12.4・6.4 3.7	粗粒安山岩 518	L-14 No41
73 120	すり石	13.4・6.8 4.8	粗粒安山岩 638	O-17
74 103	すり石	10.6・5.2 6.0	粗粒安山岩 483	L-14 No3
75 107	すり石	10.4・6.8 5.0	粗粒安山岩 600	L-20
76 90	多孔石	31.1・23.1 7.6	粗粒安山岩 9.17	21号墳 葺石
77 153	すり石	12.0・12.2 5.2	1319	Q-31
78 128	石皿	9.2・9.3 5.3	粗粒安山岩 549	Q-31 No19
79 68	石皿	21.5・10.0 3.0	緑色片岩 1094	2号墳
80 121	すり石	20.2・13.3 6.1	粗粒安山岩 2820	O-16
81 74	砥石?	5.2・3.2 1.3	硬質泥岩 26.2	4号墳



3. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号住居《第24～26図、図版13・29》

lx置 T-23グリッド

形状・規模 削平が進行しており全体形状を把握することが困難であった。柱穴も床面精査時には判然としなかったが、P1・2が主柱穴であり、炉が副次的なものであるとすれば、他の住居形態の例から東西方向に長軸を有する隅丸矩形を呈していたと考えられる。残存規模は東西方向が3.96m、南北方向は床面の硬化部分の在り方や掘り方のピットの位置等を考慮すると5.70mになる。

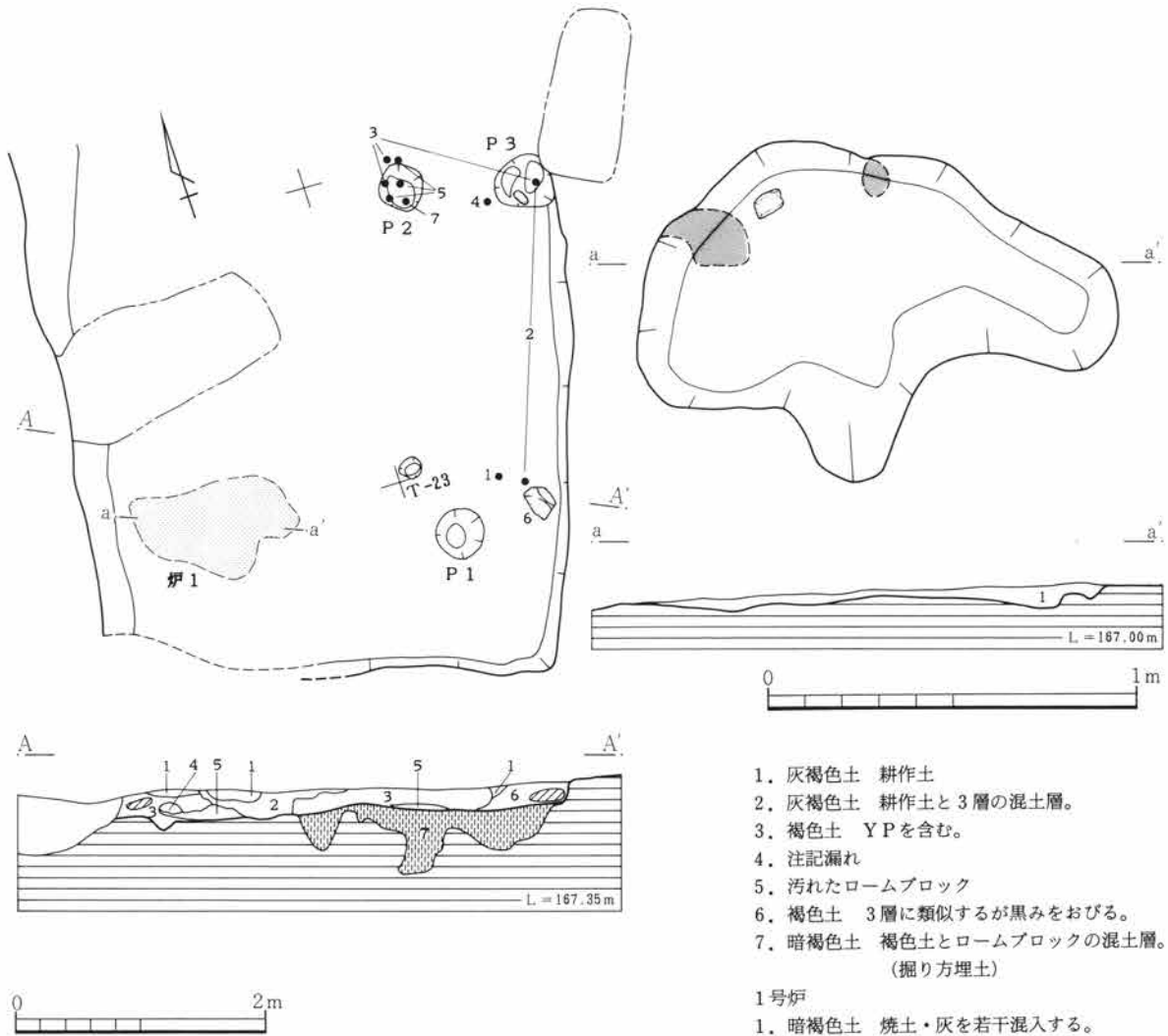
東壁方位 N-20°-W

周壁 ローム層を掘り込んでいたが、南東隅を中心にした一部分しか検出できなかった。東壁4.00m・南壁1.90mが確認できた。残存壁高は良好な南壁で28cmであった。

床面 P1・2の西側、炉と7号土坑により削平された部分の周囲に6m程の硬化面があった。掘り方部分は貼床というよりも踏み固めによる硬化と思われる。掘り方では、P1・2の周囲に小ピットが多数掘られていた。径は20～50cm、深さは5～60cm程であった。

埋没土 YPを含む褐色土が堆積しており、壁際は黒みを帯びていた。

炉 P1の西側、南壁寄りに焼土の小ブロックの散布が認められた。掘り込みは殆ど無く、主体的に使



第24図 1号住居実測図

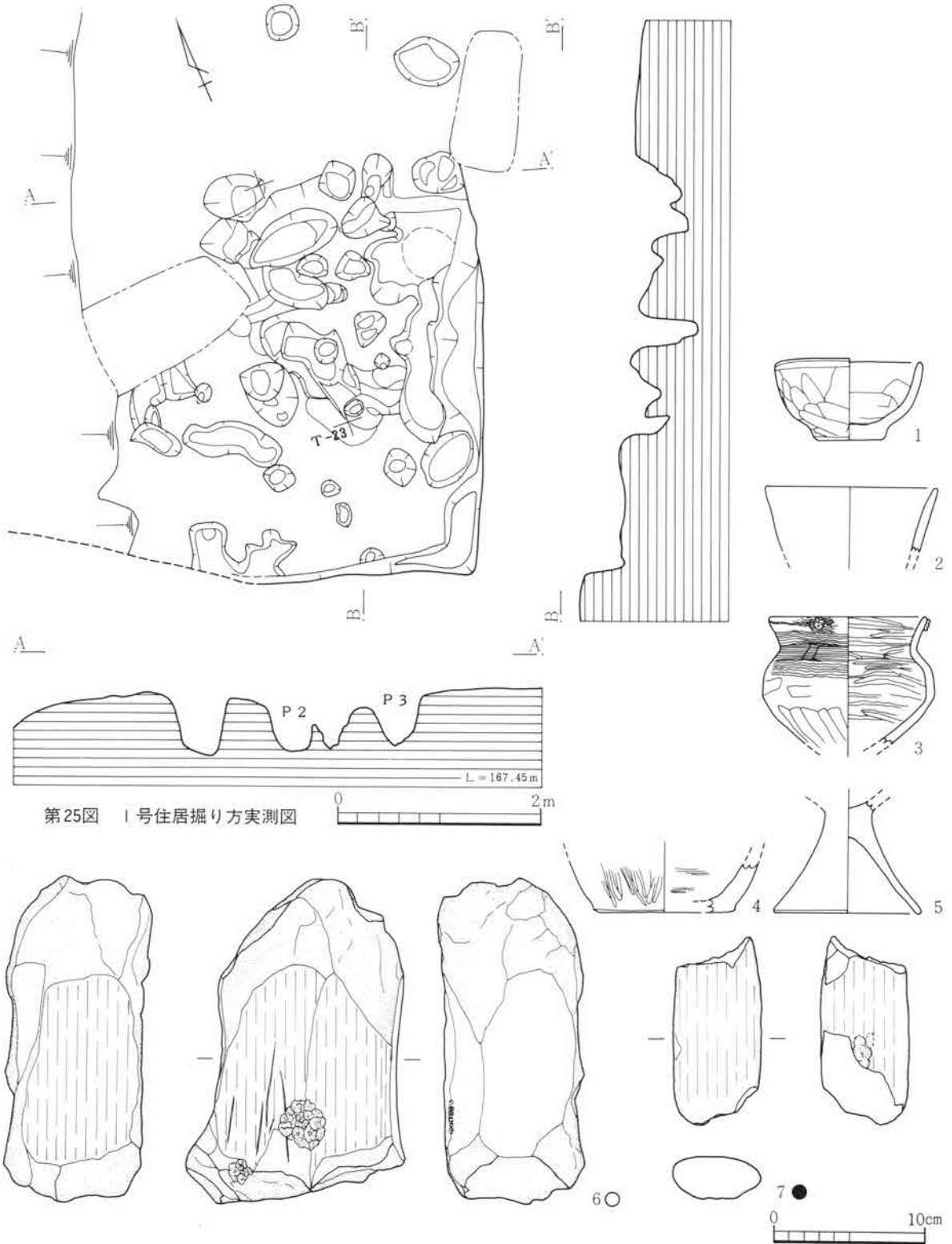
III 検出された遺構と遺物

用されたものとは考えられない。

貯蔵穴 東壁際のP3がそれと思われる。径52×44cm・深さ51cmを測り、炭化物・ローム粒を混じえた

褐色土中からは土器片が多数出土した。

柱穴 床面検出時には判然としなかったが掘り方精査時に検出した小ピット群中から形状・規模を考慮



第25図 I号住居掘り方実測図

第26図 I号住居出土遺物実測図

し、P1・2が支柱穴に該当すると考えられる。

P1 径約50cm・深さ57cm

P2 径36×34cm・深さ49cm

遺物の出土状況 15点を取り上げたがいずれも小破片である。鉢(1)は19号墳の周堀との重複部分から出土した。また、大型の置き砥石(6)が東壁際の床面直上から出土している。

他の遺構との関連 西側は9号墳の周堀により削平を受け、全体形状の把握を困難にしている。7号土坑は本住居に後出する。(徳江)

2号住居《第27～30図、図版14・29・30》

位置 N-26グリッド 北下りの斜面に立地しており、北側は21号墳の周堀により削平されていた。

形状・規模 東西方向に長軸を有すると考えられ、隅丸矩形を呈していたと思われるが、確認できた明確な隅は南東部分のみである。これは西側の残存壁高が低くなることも一因であるが、壁面を構成する地山と埋没土との識別が困難で、明確なプラン・壁

面を検出できなかったことにも起因する。南東隅は鋭角をなすが、東壁の走向はP2とP3の配列状況とも合致しており、住居の全体形状も幾分不整形なものであったと考えられる。規模は、東西方向6.87mを測り、南北方向の残存長は5.25mである。

周壁 ローム層を掘り込んで構築されていたが、地山自体が暗褐色土の大型ブロックを多数含んでいたため、これと埋没土との識別を誤認した箇所があった。残存壁高は斜面上位の南東隅が良好で、47cmを測り、南壁は30～40cmであった。

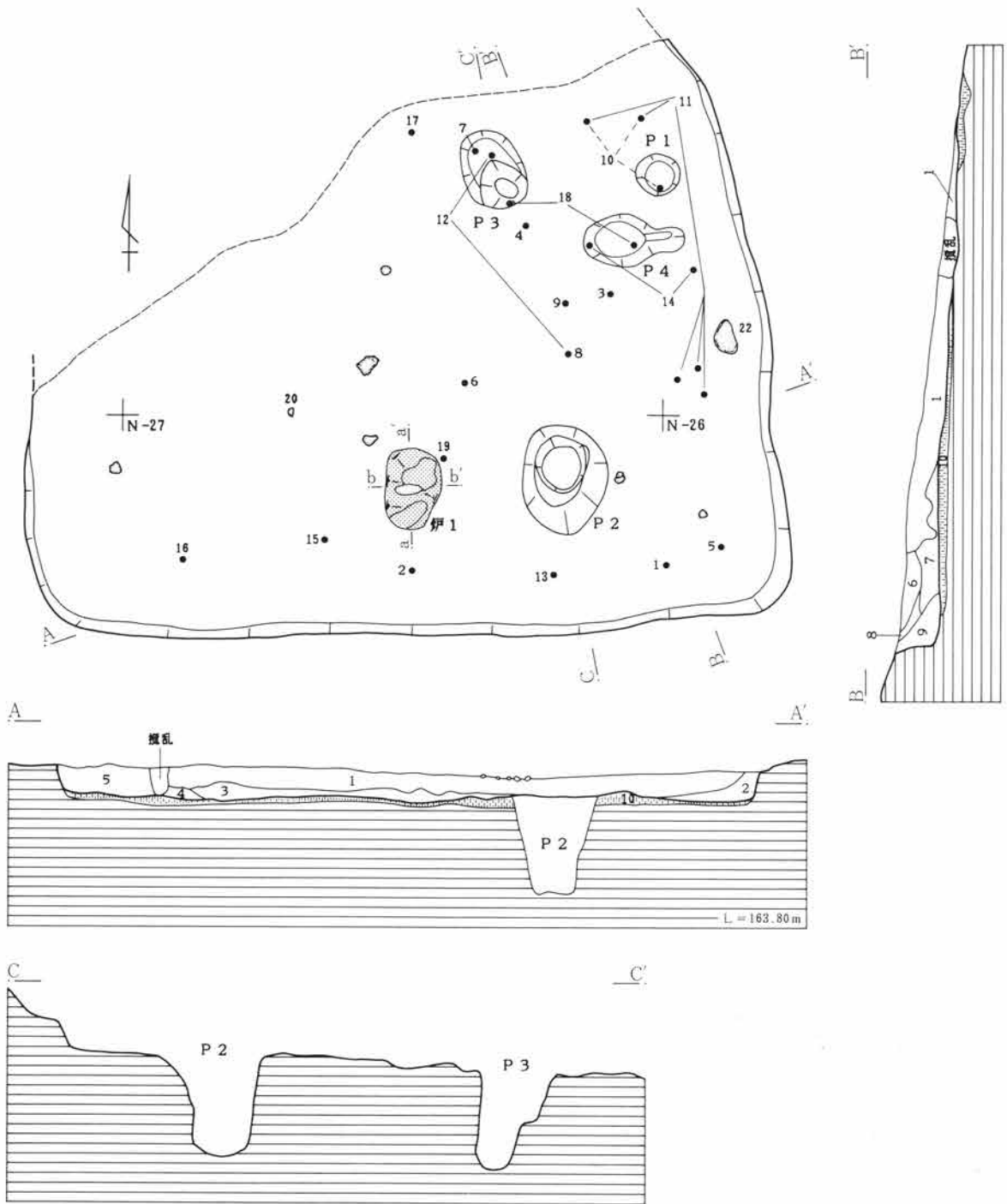
床面 全体がローム層中に形成されていた。YP層に間近なため、床面にYP粒が顕著に確認できた。特に踏み固められた面は無く、炉の周辺はかえって軟弱であった。

埋没土 暗褐色土が堆積していた。南壁際は混入物で細分できた。

炉 P2の西側に接してある。他の住居の例からすると補助的な炉が設置される位置であるが、本住居での検出はこの一基だけであった。掘り込みは南北



III 検出された遺構と遺物



2号住居

1. 暗褐色土 黒褐色土のブロック、ロームの小粒・小ブロックを多量に含み、茶みが強い。YPもまばらに混入する。
2. 暗褐色土 YPの混入は少量になる。
3. 暗褐色土 ロームブロックの混入が多くなる。
4. 暗褐色土とロームブロックの混土層
5. 暗褐色土を主体とするロームブロックとの混土層
6. 暗褐色土 1層に類似するが黄みが強い。
7. 暗褐色土 黄白色土のブロックを混入する。
8. 暗褐色土 1層に類似するがYPの混入が少なくなる。
9. 暗褐色土 ロームブロックが混入する。
10. 黄茶褐色の汚れたロームと暗褐色土の混土層 (掘り方埋土)



第27図 2号住居実測図

に長軸を持つ81×55cmの楕円形で、中央に棒状の粗粒安山岩の円礫が置かれていた。焼土・炭化物の散布は薄く、床面もあまり火熱を受けていなかった。

貯蔵穴 位置的にはP 1が好位置と思われるが、南西に接してP 4があり、共に土器が出土している。

P 1は径52cmの円形で、深さ38cmである。中層から台付甕(10)の一部が出土し、北側の床面直上から出土した破片と接合した。P 4は径53×49cmの長円形で、深さ20cm、東側には長さ40cm程の斜行する小溝が付随している。底面近くから甕(18)が出土し、P 3出土の破片と接合した。付随する溝の在り方を重視すればP 4は入り口施設に伴うものであろうか。

柱穴 東側の支柱穴と考えられるP 2とP 3を検出したが、いずれも柱痕は確認できなかった。Y P層を掘り抜いているため、掘り方の上半は外反が著しく、立ち上がると共に埋没土の下層にはY Pが多量に混入していた。また、P 3の上位から中位付近で甕(12)と台付甕(7)が出土している。

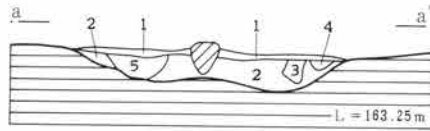
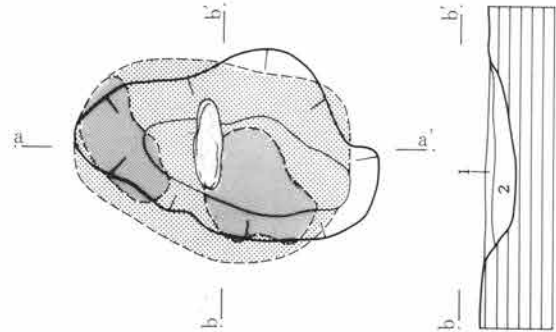
P 2 径100×75cm・深さ94cm

P 3 径76×46cm・深さ90cm

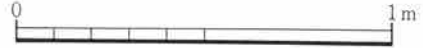
遺物の出土状況 完形品の出土は無かったが、南東隅寄りの小型甕(1)と東壁際の壺(11)が床面からの出土である。南西隅寄りからは高坏(16)が出土している。

備考 調査途中、P 2の西側に集石が確認できた。その時点では住居の埋没過程に伴うものと判断したが、2号墓と共通する在り方から、墓墳の可能性が考えられるため、本報告では本住居とは別遺構として、新たに6号墓として別項で取り扱うこととした。

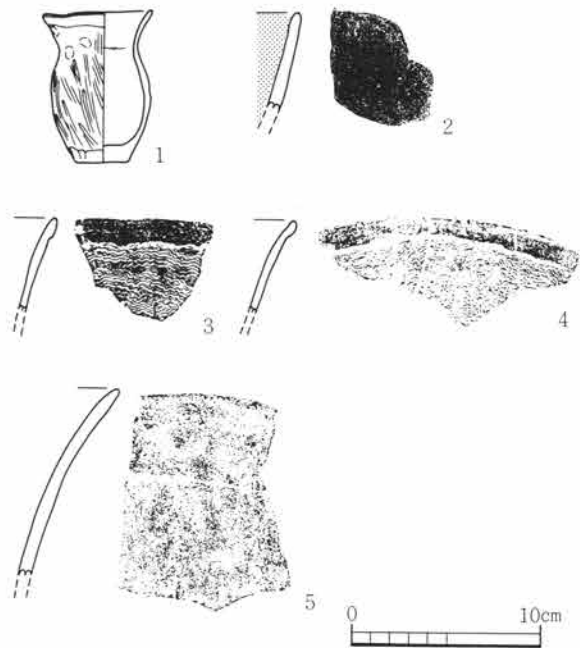
他の遺構との関連 北側に21号墳、南東に10号墳が有り、共に本住居に後出する。(徳江)



1. 暗褐色土 ローム粒・軽石・焼土粒を含む。炭化物が若干混入する。
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土ブロックを多量に混入する。炭化物が若干混入する。
3. 炭化物のブロック
4. 暗褐色土 炭化物の混入は少量になる。
5. 暗褐色土 焼土・炭化物が若干混入する。

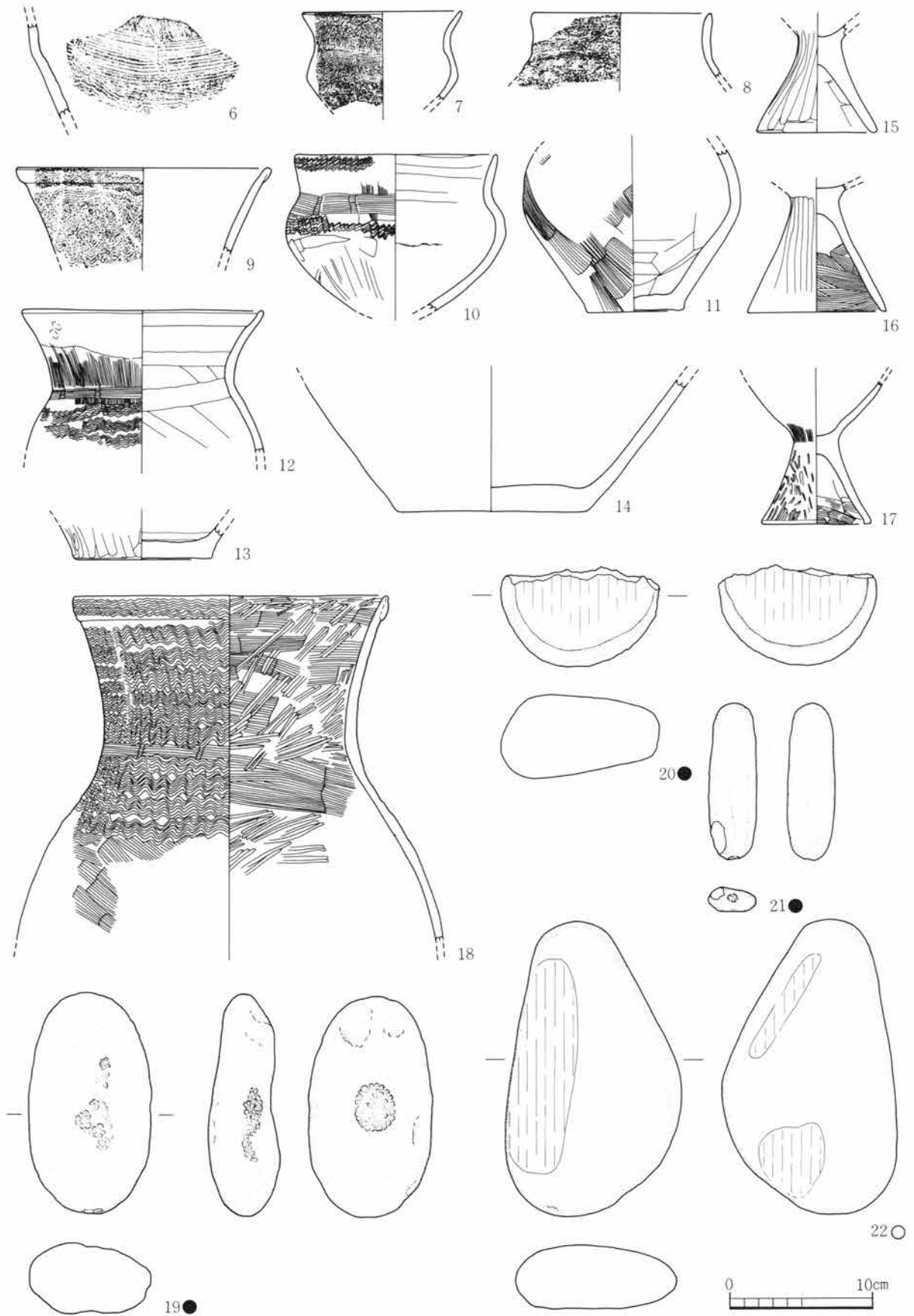


第28図 2号住居炉実測図



第29図 2号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第30図 2号住居出土遺物実測図(2)

3号住居《第31～33図、図版14・30》

位置 N-16グリッド 北下りの緩斜面に構築されていた。

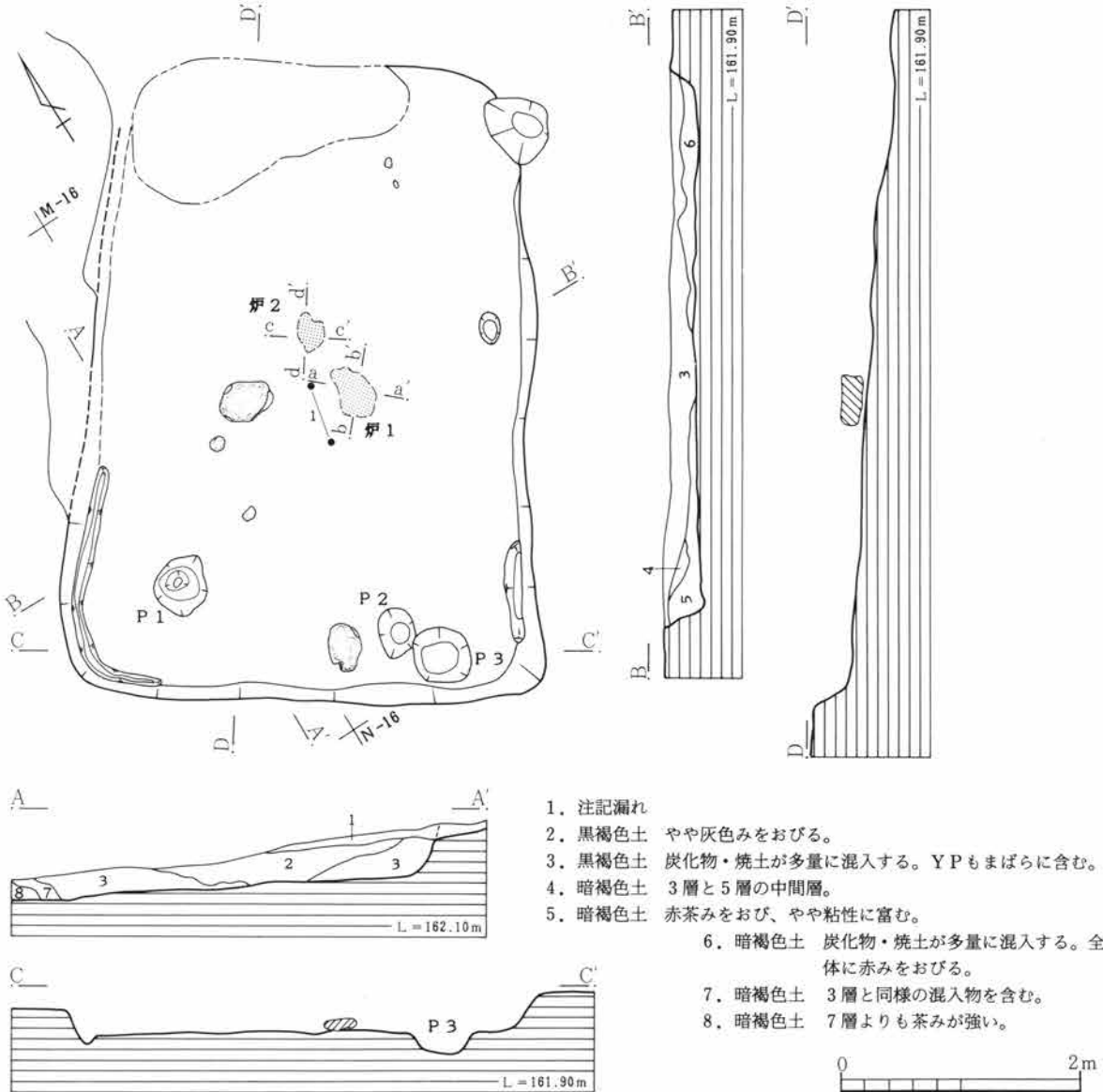
形状・規模 南北方向に長軸を有する縦長の長方形を呈し、南側の両隅はやや丸みを持つ。また、北壁は風倒木の埋没土の影響により、検出が困難であったが、掘り方精査時に壁面の掘り込みと思われる多少の段差を確認した。規模は、長軸方向で5.37m、短軸方向で4.00mを測る。長軸対短軸の比率は1.34:1である。

長軸方位 N-34°-W 面積 18.2㎡

周壁 東壁と北壁の東半部が攪乱を受けていたため

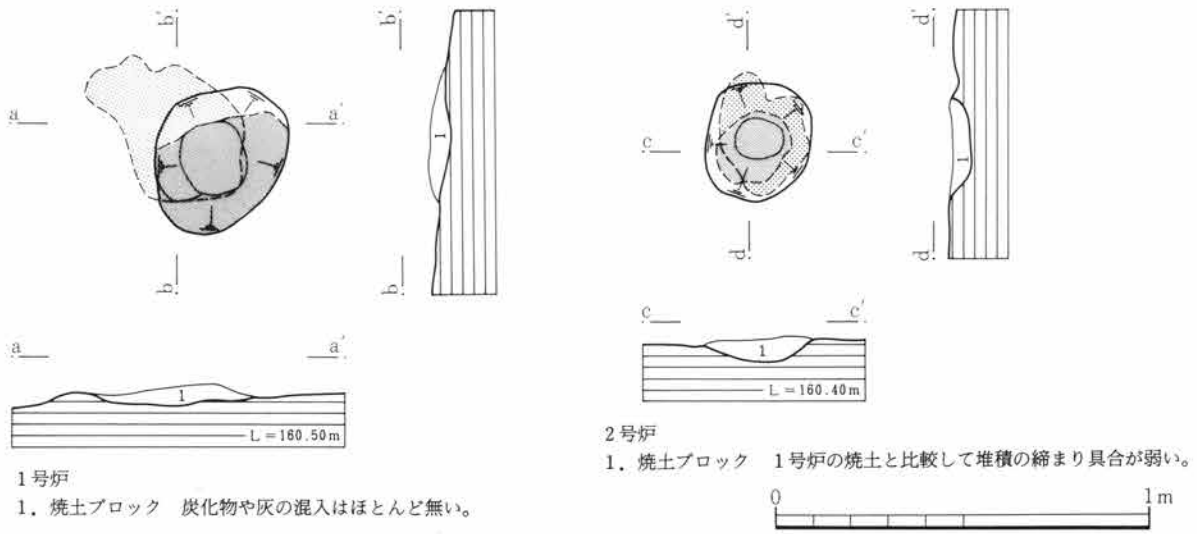
に、全周の立ち上がりを確認することはできなかった。その他の壁は、最も良好な所で残存深度18.2cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。なお、北壁は斜面の低位部に当たるため、明確な壁面を検出することが困難であった。

床面 北半は地山の変換点にあり、白色鉱物粒を多く含む黒褐色土からなっていたが、北東部は風倒木の埋没土である黒褐色土が広がっていた。南半はロームを床面とし、床面下にごく浅い掘り方が認められた。全体に踏み固められた感じは無く、貼床は確認できなかった。周溝は南壁と西壁のコーナー部及び東壁南側のみに認められ、幅13.0cm・深さ6.0cmを

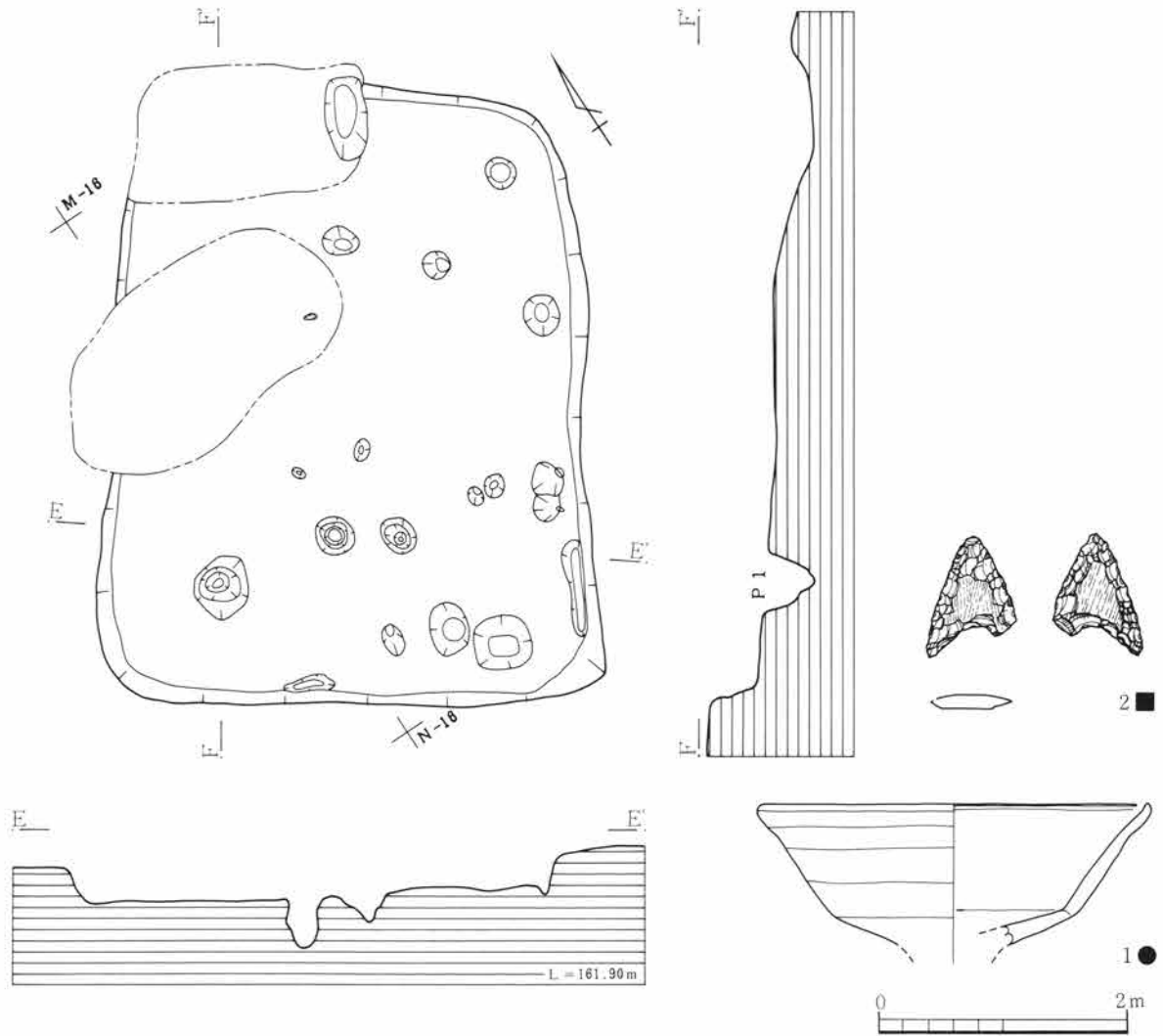


第31図 3号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



第32図 3号住居炉実測図



第33図 3号住居掘り方実測図

測る。

埋没土 南壁方向から北壁方向にかけての自然埋没の状況が土層断面により確認された。

炉 住居の中央付近で、近接した2基の炉を確認した。1号炉は、長軸43cm・短軸34cm・深さ3.0cmで、楕円形を呈する。2号炉は、長軸33cm・短軸28cm・深さ4.5cmで、円形を呈する。共に小型で最終使用面には焼土が厚く堆積していた。その上層には若干の炭化物・灰が散布していた。掘り込みは皿状を呈し、いわゆる枕石として使用された円礫等は認められなかったが、炉の南西寄り、46×34cm大の上面が平坦な台石が出土した。床面とのレベル差が小さいことから、本住居の生活に密着していたと思われる。

貯蔵穴 南壁東隅の位置に有るP3が貯蔵穴と考えられる。径54.0×50.0cm・深さ22.5cmの円形を呈する。埋没土は暗褐色土であり締まりが無く、ロームの小ブロックが下層に混入していた。埋没土中からの出土遺物は確認できなかったが、炭化物が僅かに認められた。西へ42cm程離れた位置から30×40cm大の自然礫が出土した。

柱穴 2本の柱穴を確認した。P1は対角線上に位置するが、P2は主柱穴の位置としては妥当性に欠けるとと思われる。

P1 径53.0×46.5cm・深さ54.5cm

P2 径43.0×31.0cm・深さ59.5cm

遺物の出土状況 比較的少量であり、形状を保つものも少ない。1号炉と2号炉の中間地点より高坏が出土した他に礫片・黒耀石が出土した（根岸）

4号住居《第34～38図、図版15・30・31》

位置 K-19グリッド 北下りの緩斜面に構築されていた。

形状・規模 東西方向に長軸を有する長方形を呈する。四隅はしっかりしており、残存状態も他の住居に比べると良好である。東西方向7.20m・南北方向4.70mを測り、長軸対短軸の比率は1.53：1である。

長軸方位 N-46°-E 面積 31.0m²

周壁 南壁は粘性の強い暗褐色土とその下のローム層を掘り込んでおり、東西の壁もローム層を掘り込んでいた。北壁は東西のコーナー付近ではローム層まで達しておらず、良く締まった軽石混じりの黒褐色粘性土中に掘り込まれていた。四壁とも垂直に近い立ち上がりを呈していた。

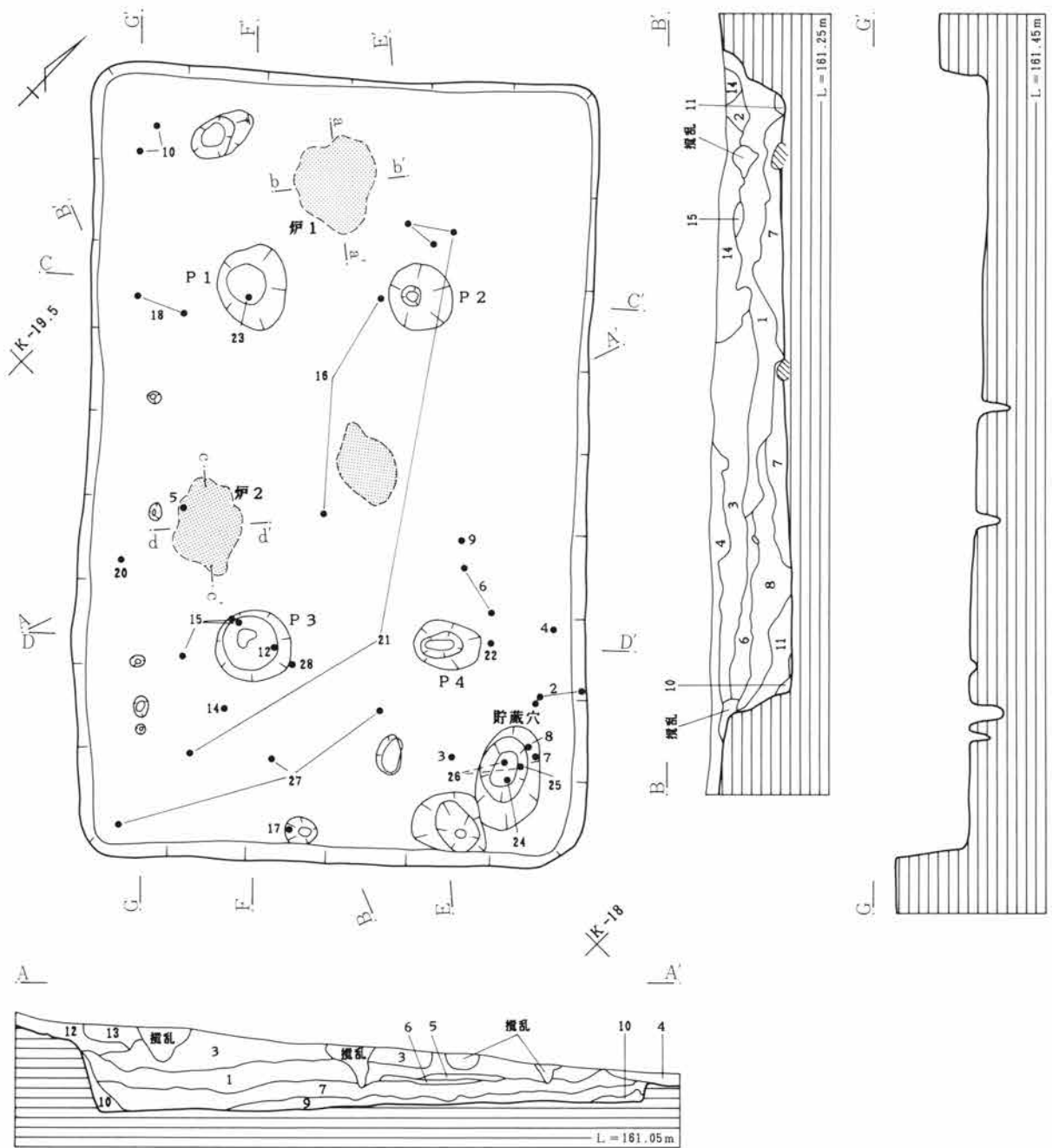
床面 ローム層中に床面を構築しており、貯蔵穴周辺以外では貼床は確認できなかった。全体的に良く踏み固められ、良好な状態であった。床面はほぼ平衡を保つように構築されていたが、南から北にかけては5～7cm程度、西から東にかけては14cmのレベル差が認められた。

埋没土 軽石を含みや粘性のある暗褐色土が主体的に堆積していた。全体的に炭化物の混入が見られたが、特に住居西半部では、床面から20～30cm上位の付近で顕著であった。最も良好な部分では、厚さ2cm程の板状になるが、炭化材の方向に規則性は認められなかった。

炉 西壁寄りの中央部で1号炉、南壁寄り中央から1m程東に寄った位置で2号炉が検出された。1号炉は径72.0cmの円形で、東側には南北方向に長軸をとる炉石が設置されていた。埋没土の中には、焼土・炭化物が混入していた。2号炉は径58～59cmの円形で、北側には東西方向に長軸をとる炉石が置かれていた。床面より約10cm下部で、良く焼き締まった焼土が8～10cmの厚さで堆積していた。

貯蔵穴 北東隅に位置している。97×60cmの楕円形で、深さは21cmを測り、底面はほぼ平らに掘り込まれていた。貯蔵穴西端部より北壁に向かい、7cmの段差が認められた。貯蔵穴上面からは、壺の口縁部

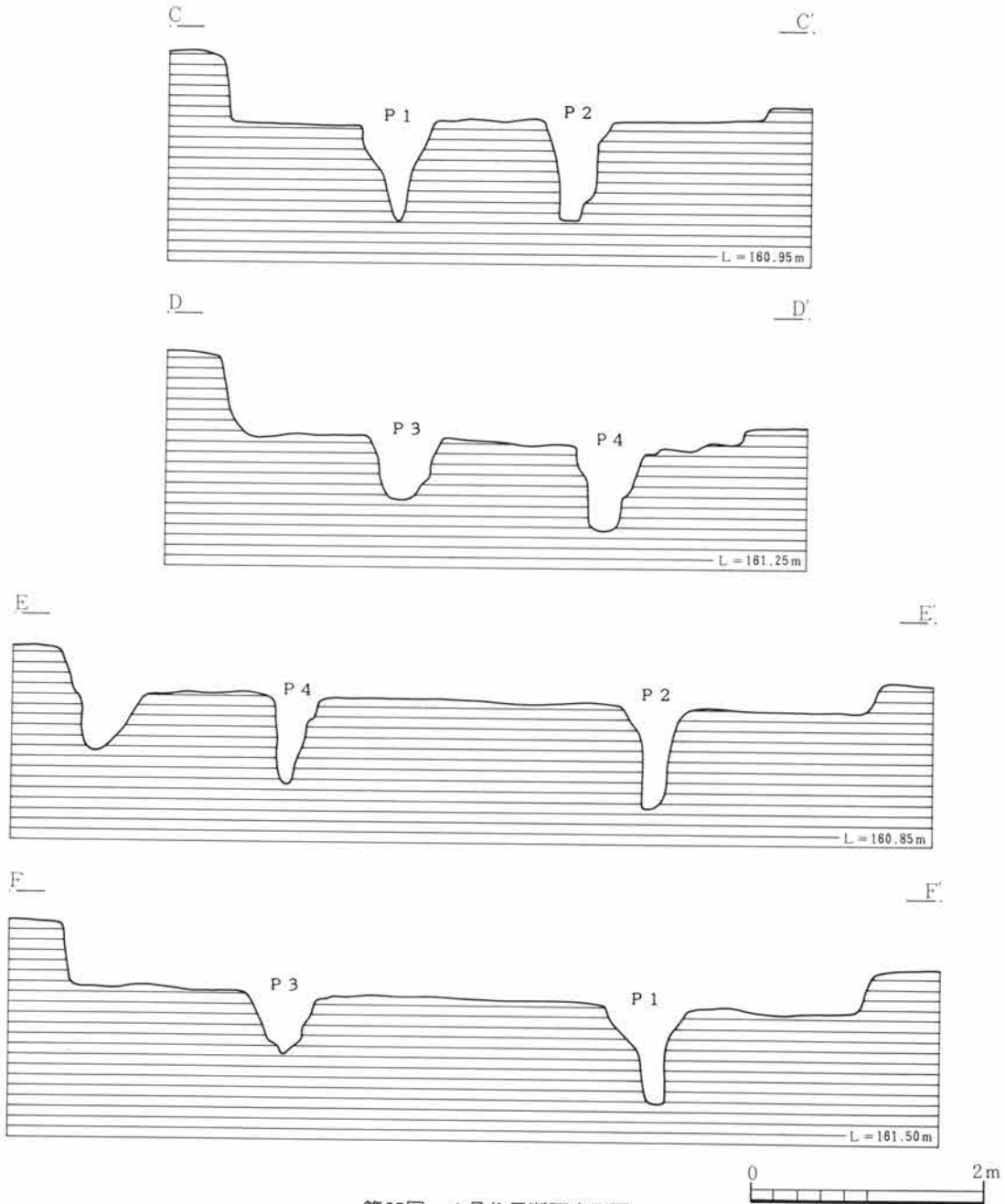
III 検出された遺構と遺物



- | | |
|---|--|
| <p>1. 暗褐色土 ローム粒・軽石が多量に混入する。固く締まり、粘性をおびる。</p> <p>2. 暗褐色土 1層と比較してローム粒の混入が少量で、色調は暗い。</p> <p>3. 暗褐色土 1層よりも若干ローム粒の混入が少ない。</p> <p>4. 暗褐色土 2層よりも締まるが粘性に欠ける。(覆土か)</p> <p>5. 黒褐色土 炭化物が多量に混入する。</p> <p>6. 暗褐色土 炭化物が混入する。</p> <p>7. 黒褐色粘質土の小ブロックとローム粒の混入層で軽石の混入は少なくなる。</p> | <p>8. 暗褐色土 5層よりも黒褐色粘質土が混入。上部には大型の炭化物が散見する。</p> <p>9. 暗褐色土 5層より黒みを増す。ロームの混入は極端に少なくなり締まる。</p> <p>10. 黒褐色土 やや粘性をおびる。</p> <p>11. 黒褐色土 ローム粒を含み7層よりも茶みをおびる。</p> <p>12. 暗褐色土 粘性をおびる。軽石がまばらに混入する。</p> <p>13. 暗褐色土 色調は黒く、軽石の混入も少量になる。</p> <p>14. 暗褐色土 軽石、炭化物が散見する。</p> <p>15. 暗褐色土 ローム粒が散見する。</p> |
|---|--|



第34図 4号住居実測図



第35図 4号住居断面実測図

(7)が下向きに、(26)が上向きに検出され、東端部では甕(24)が検出されている。どれも床面とほぼ同じレベルであった。また、近接する穴も貯蔵穴として使用された可能性が考えられる。

柱穴 支柱穴4本が確認された。P2では柱痕を確認することができた。P1でも甕(23)の埋没により明確ではないものの、柱痕らしき落ち込みが見られた。P1・2・4と比較して、P3は深さが47cmと浅くなっている。なお、P4では掘り方が南北に長

い楕円形となること及びP1・2での断面の観察結果より推して、柱材として板材を用いた可能性が考えられる。

P1 径58×57cm・深さ84cm

P2 径53×43cm・深さ84cm

P3 径45×44cm・深さ47cm

P4 径42×27cm・深さ72cm

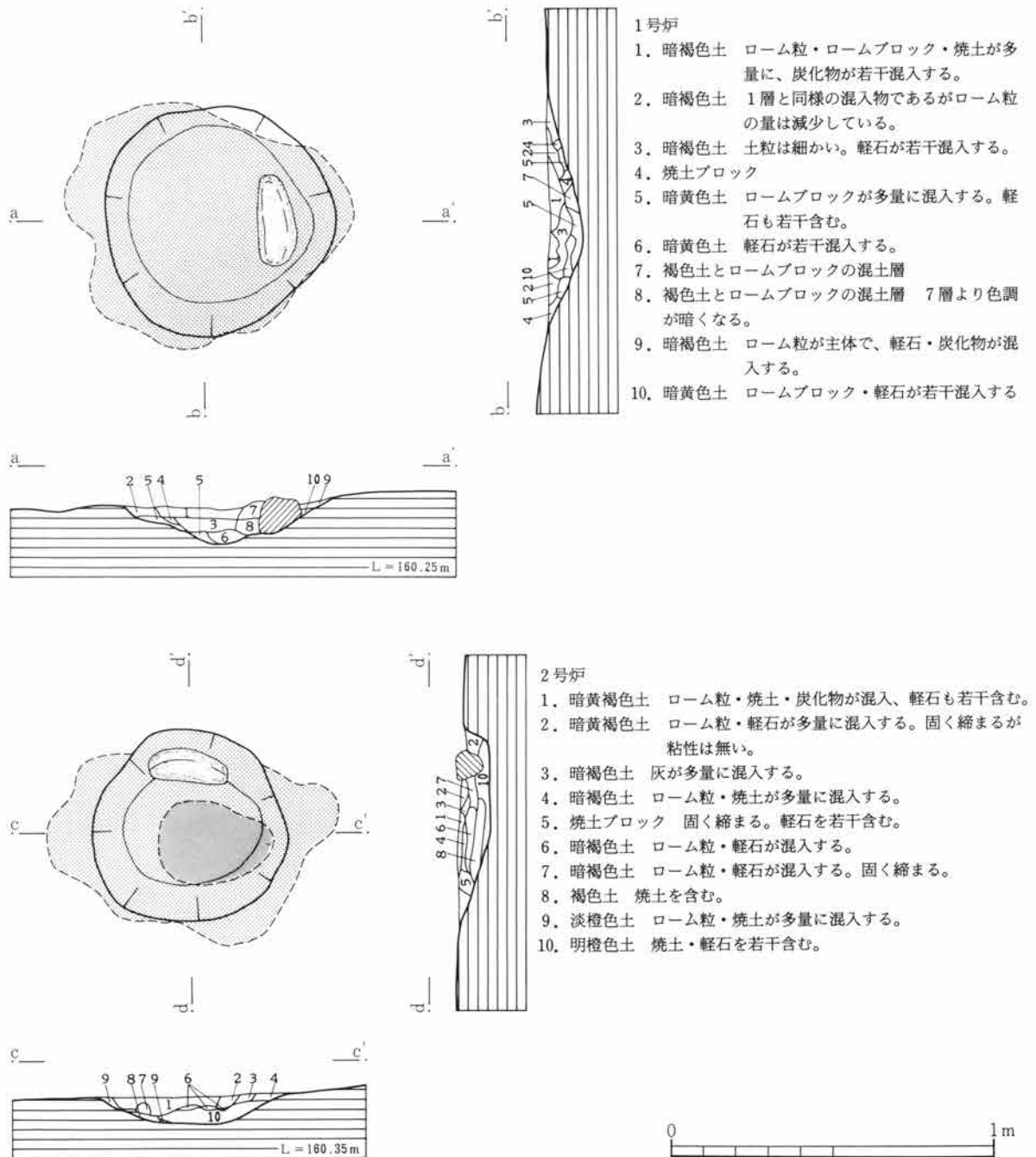
遺物の出土状況 前述の貯蔵穴付近の遺物、壺口縁部(7・26)・甕(24)は、いずれも床面から5～7cm

III 検出された遺構と遺物

程離れていた。P 1 埋没土中の甕(23)は、柱が抜かれた後で落ち込んだものと思われる。他に、小型壺・高坏・鉢等が出土している。

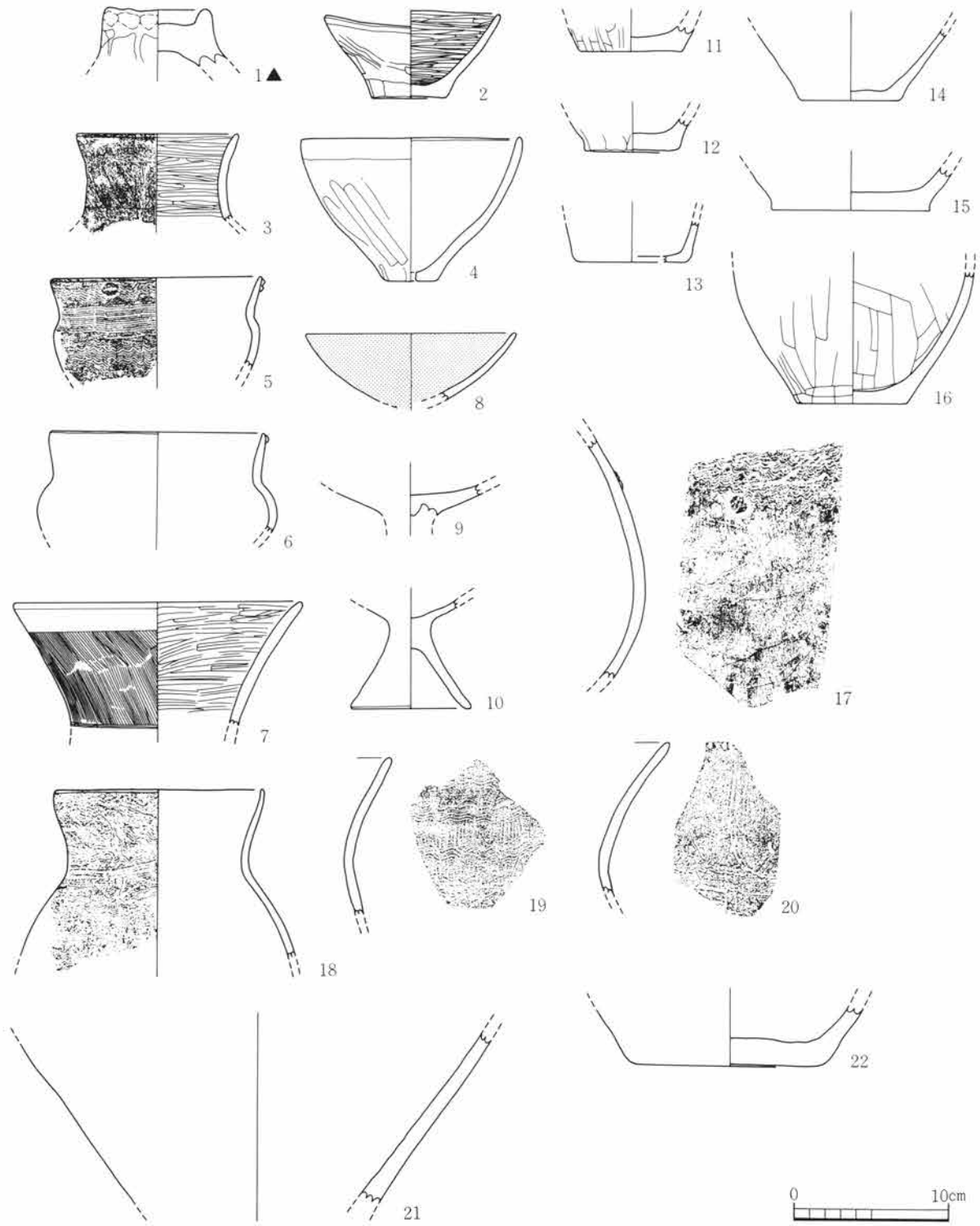
備考 住居中央部に、南北方向に長い長方形に焼土の認められる範囲があり、径72×64cm・深さ3cm程の落ち込みが見られた。また、住居東半部では、南壁から50cm離れた所に、径10~20cmの小ピットが5基確認された。深さは6~30cmと均一ではないが、

ほぼ一直線に並んでいたのも、何らかの施設が有った可能性が考えられる。(磯貝)



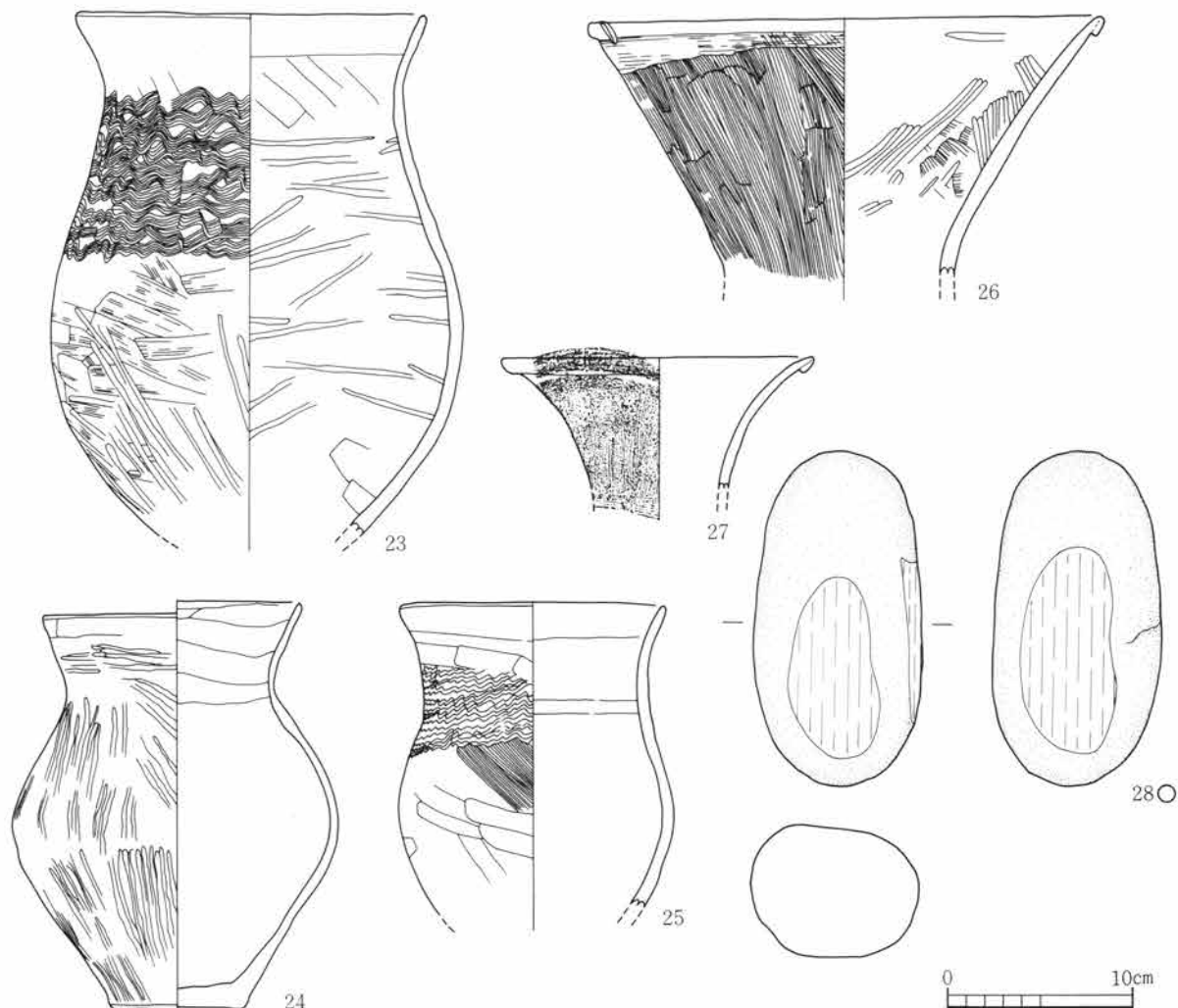
第36図 4号住居炉実測図

3. 弥生時代の遺構と遺物



第37図 4号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第38図 4号住居出土遺物実測図(2)

5号住居《第39～42図、図版16・31》

位置 K-22グリッド 3号墳の北側墳丘部分に位置する。

形状・規模 残存状態は必ずしも良好ではなかったが、床面の範囲から、東西方向に長軸を持つ矩形を呈していたことが判明した。南壁の両隅はいずれも丸みが弱いものであるが、南東隅が鈍角であるのに対し、南西隅は鋭角をなし、住居全体の形状は平行四辺形状を呈していたものと考えられる。規模は、東西方向7.25m、南北方向の残存長は5.46mを測った。

長軸方位 N-58°-W 残存面積 36.20㎡

周壁 本住居は北下りの緩斜面に立地したこと、後出して重複する3号墳の周堀の掘削、耕作による

攪乱などの要因が重なり、北壁の全てと西壁の大半が削平されていた。残存部分の観察によれば、壁面は、黒みが強く粘性のある褐色土及びその下層のローム層を掘削して構築され、垂直に近い立ち上がりを保っていた。壁高は、残存の良好な南東隅で85cmを測った。

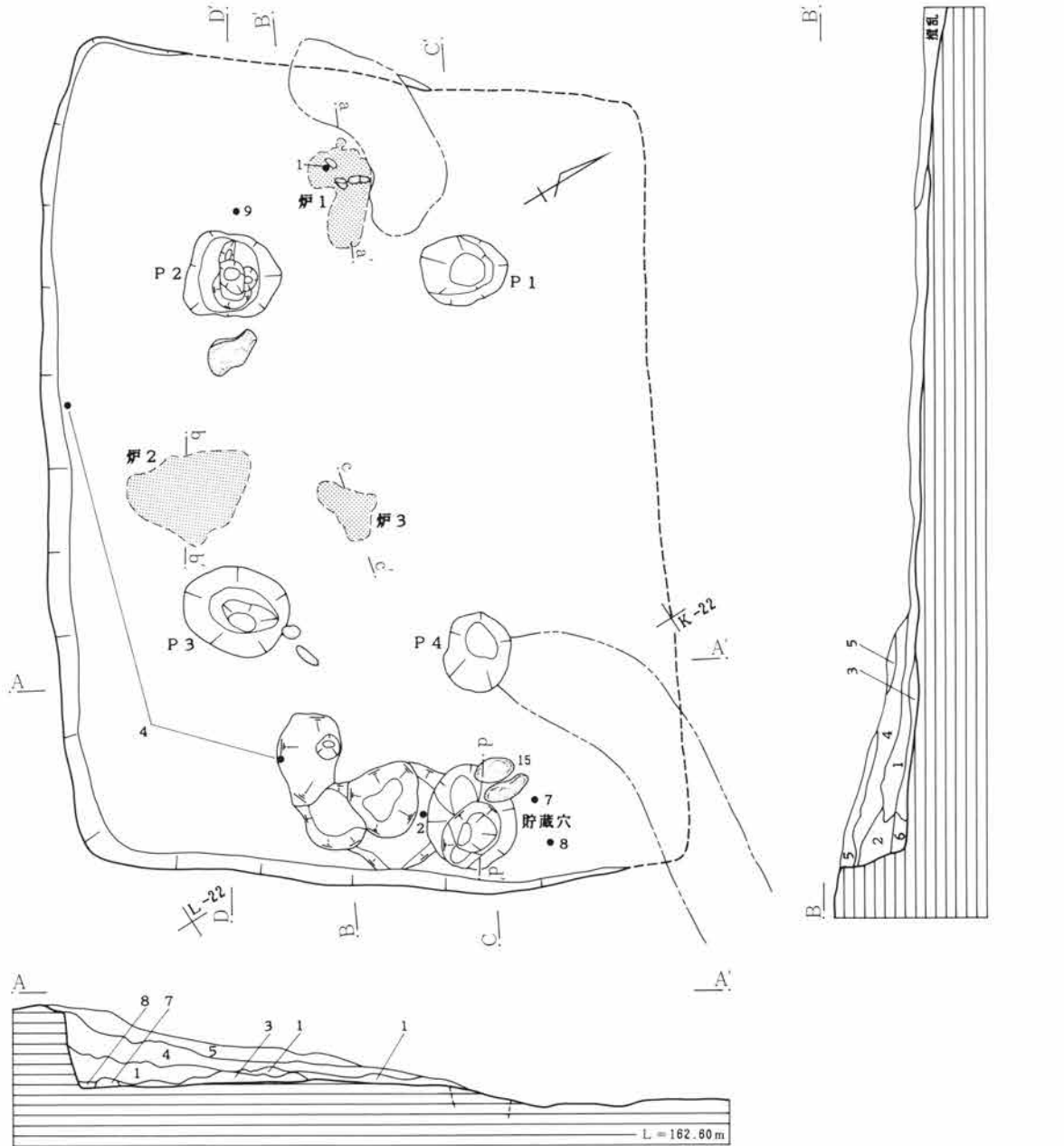
床面 ローム層中にあり、柱穴の掘り方部分を除いて貼床は認められなかった。全体に良好な状況であるが、東側が特に硬く踏み固められていた。床面は平衡を保つように企画・掘削されたと思われるが、全体的には南側から北側に向けて下がっており、5cm程のレベル差が生じていた。また、表面には小さな起伏が多く、これに炭化物が落ち込んでいた。

埋没土 遺構内全体に炭化物の残存・混入が多かつ

たが、特に埋没土の残存が良好であった東側により顕著であった。部分的に床面が赤化した所も見られたが、炭化物の出土は床面から5cm程上層までが多く、床面との間には暗褐色土の間層が確認された。東壁際の貯蔵穴南側には、長さ95cm・幅20cmの大き

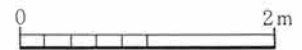
さの物と長さ35cm・幅20cmの大きさの板状の炭化物が認められた。

炉 床面の3箇所に焼土の散布が認められたが西壁際の1号が主体的に機能していたもので、2・3号炉はいずれも補助的な役割あるいは機能分担がな

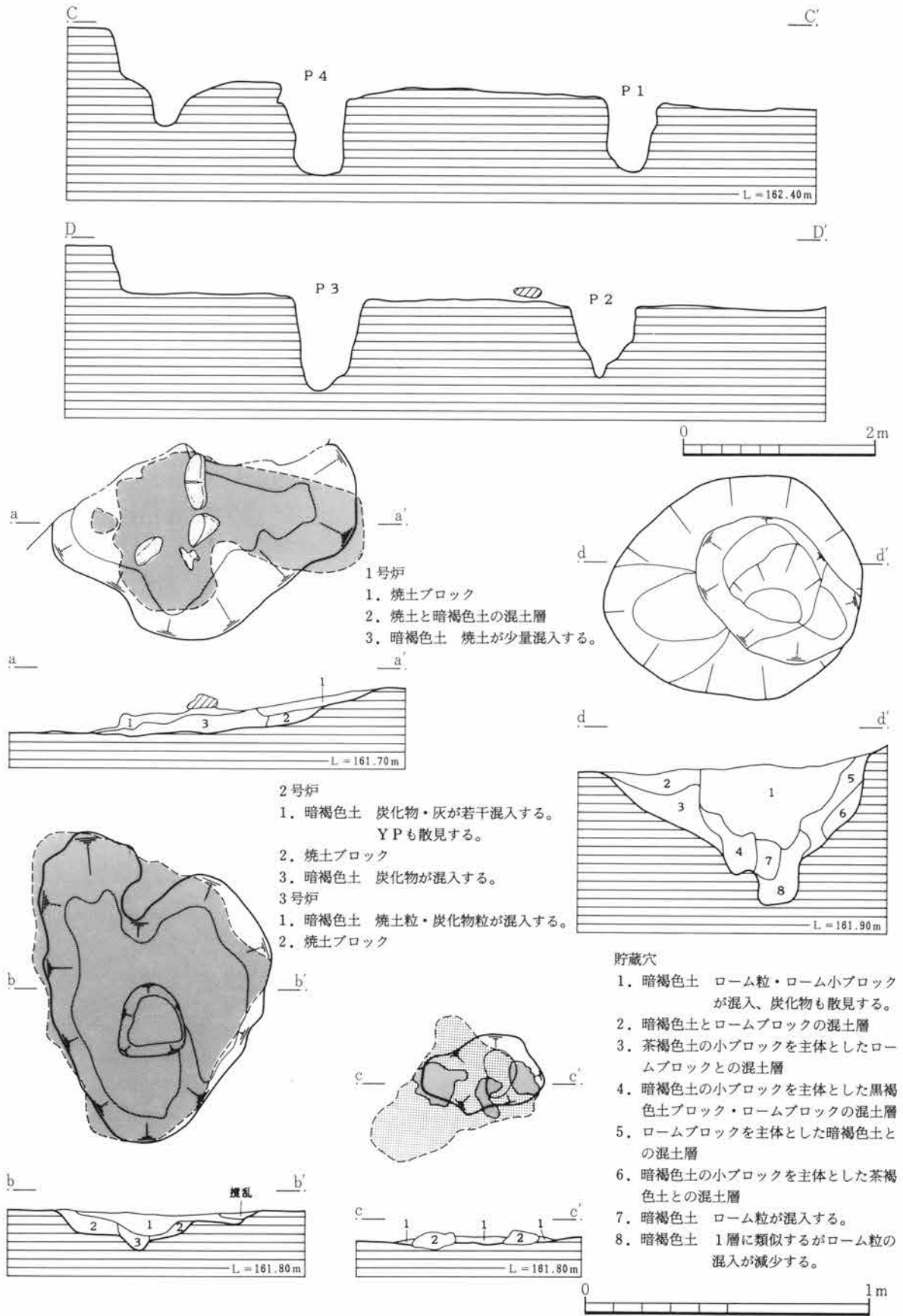


1. 暗褐色土 炭化物が多量に混入する。ロームブロック・焼土粒が散見する。
2. 暗褐色土 色調がやや暗くなり1~1.5cm大の炭化物が散見する。
3. 暗褐色土 炭化物の混入がさらに増加する。
4. 暗褐色土 軽石が霜降り状に混入、茶褐色土・炭化物も散見する。
5. 黒褐色土 軽石がまばらに混入する。
6. 暗褐色土 軽石・炭化物の混入は1層より減少する。やや粘性を増す。
7. 暗褐色土とロームブロック・ローム粒の混土層 YPも多量に混入する。
8. 暗褐色土を主体としたロームブロックとの混土層

第39図 5号住居実測図



III 検出された遺構と遺物



第40図 5号住居断面・炉・貯蔵穴実測図

れていたと考えられる。

1号炉は北西部を後世の攪乱により欠失しているが、住居の長軸方向に長軸をとる106×78cm以上の楕円形を呈し、浅い皿状の掘り込みを有していた。炉内には2個の円礫が置かれ、それよりも西側の底面は全面が焼土化し、厚さ1～2cmの焼土層が形成されていた。使用面から蓋(1)が出土している。

2号炉はP3の南西に位置する。南北に長軸を有する109×82cmの楕円形を基本とした掘り方を有していたと考えられる。覆土は暗褐色土で、細粒の炭化物が多量に混入していた。埋没土中には少量ではあるが灰も散見された。使用面は皿状に厚く焼土が堆積していたが北東部分はその度合が弱かった。

3号炉は住居の中央やや南側にある。焼土のブロックが3箇所に見られ、これらを包括するように深さ2cm程の僅かな掘り込みがあった。炉としての機能を有していたか否かは判定し難い。

貯蔵穴 東壁際、中央からやや北側に位置する。径93×80cmの大きさで、東西に長軸を有する楕円形を呈していたが、原形は円形に近いものであったと思

われる。北側の上端には緩やかな帯状の隆起が認められ、壺(7・8)や長さ40cm程の棒状の円礫が集中していた。

柱穴 4本が検出され、いずれも支柱穴と考えられる。配置は住居の平面形と相似の関係にあると思われる。P3とP2の中心点を結合する線とP2とP4の中心点を結合する線のなす夾角は鈍角を形成する。

P1 径75×60cm・深さ75cm

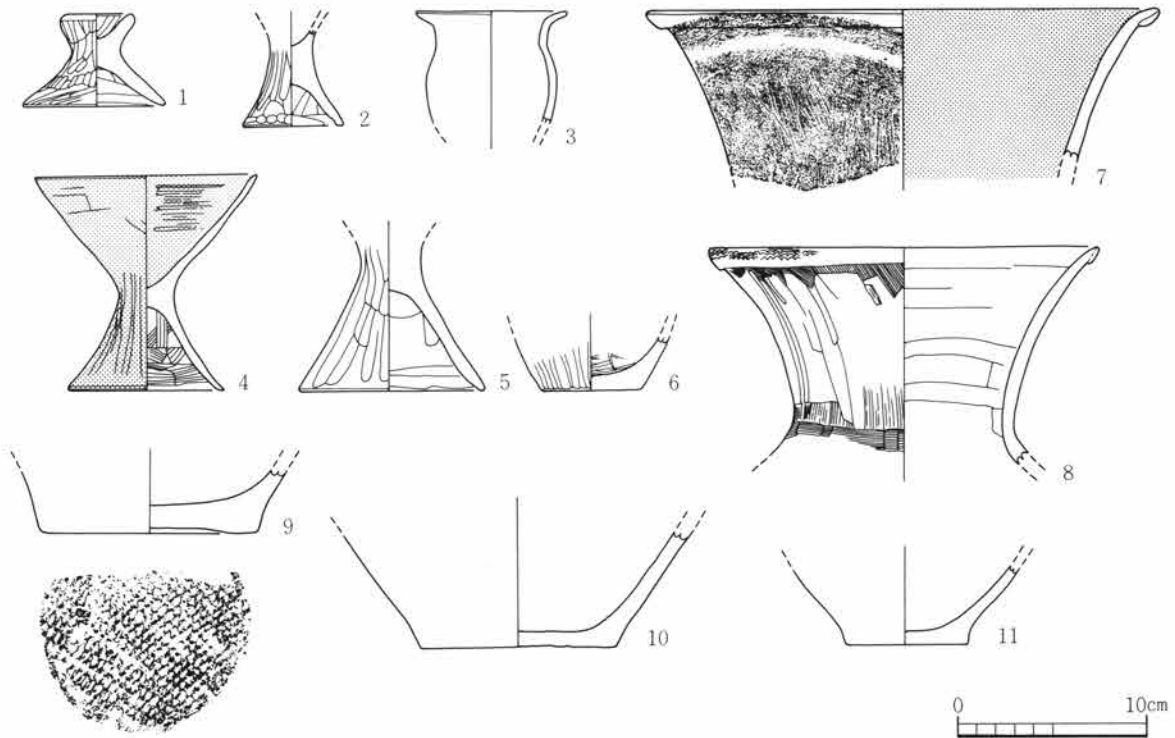
P2 径84×78cm・深さ77cm

P3 径94×77cm・深さ77cm

P4 径70×53cm・深さ96cm

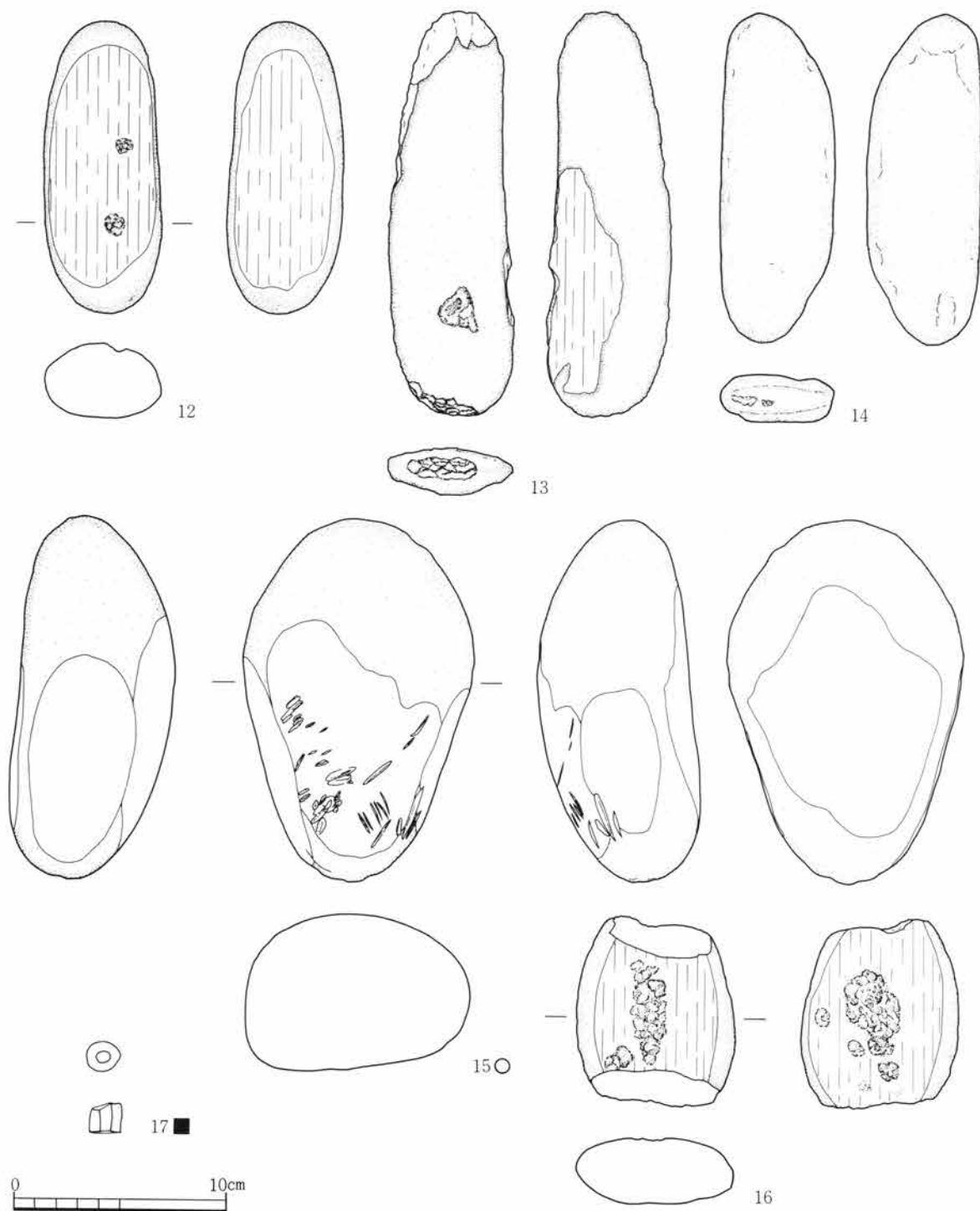
遺物の出土状況 床面直上からの出土は少なく、貯蔵穴の北側から、壺の口縁部(8)と甕の破片が出土した。その他は細片であるが、壺(7)・高坏(4)がある。また、砥石(15)が出土している。

備考 東壁際、貯蔵穴の南側の床面には、深さ5～13cmの浅い皿状の掘り込みが3箇所認められたが、性格は不明である。(徳江)



第41図 5号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第42図 5号住居出土遺物実測図(2)

6号住居《第43・44図、図版15・31》

位置 O-16グリッド 北下がりの緩斜面に有り、4号墳の北東部と重複していた。

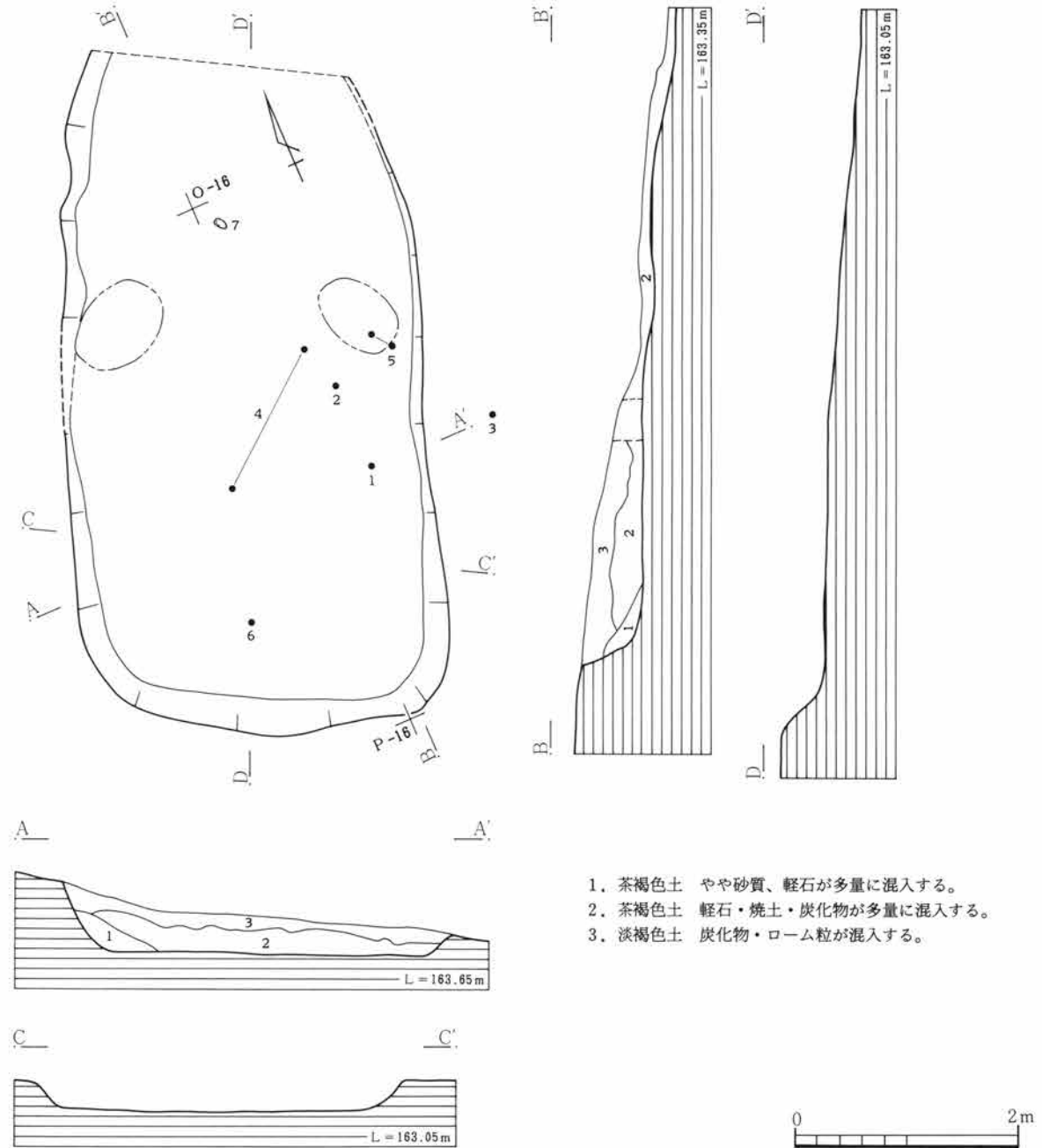
形状・規模 斜面下位の北壁は削平されてしまっており、全形は確認できなかったが、南北方向に長軸を有する不整隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向が3.26mを測り、南北方向は西壁において7.60mまで確認できた。

長軸方位 N-20°-W 残存面積 33.4m²

周壁 上部は削平され、ローム層中に掘り込まれた壁面を検出した。最も残りの良かった南西部で42cmの高さまで確認したが、壁面はやや上開きになっていた。

床面 ローム層を整地した床が検出されたが、余りしっかりと踏み固められていなかった。北側の一部に倒木痕が認められた他は、ほぼ平坦であった。

炉 検出されなかった。覆土中には焼土・炭化物粒が混ざっていたが、床面上には焼土化した部分すら



1. 茶褐色土 やや砂質、軽石が多量に混入する。
2. 茶褐色土 軽石・焼土・炭化物が多量に混入する。
3. 淡褐色土 炭化物・ローム粒が混入する。

第43図 6号住居実測図

III 検出された遺構と遺物

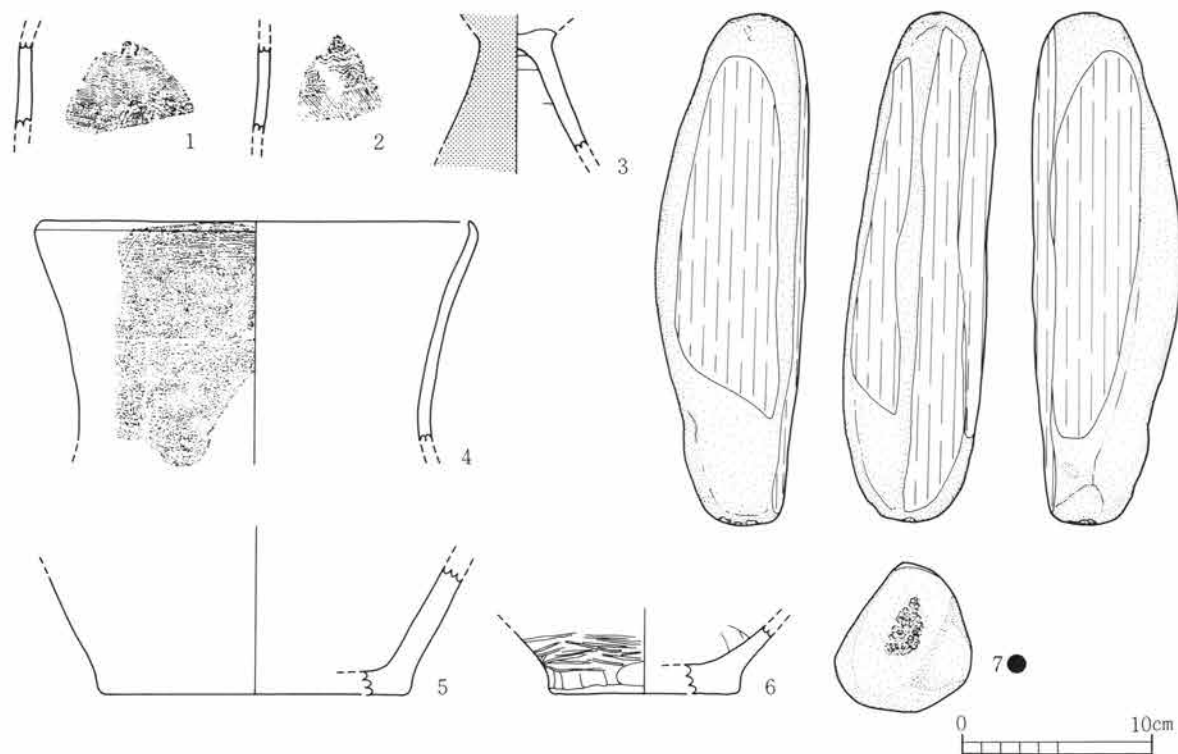
確認できなかった。北側の中央部から棒状の礫が出土しているの、或はこの付近に炉があったのかも知れないが、石の表面には被熱の痕跡は認められなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

遺物の出土状況 小破片がほぼ全域に散在して出土したが、床面に密着したものは少なく、後に混入したと思われるものが多かった。

備考 北側に、本住居に後出する2基の土坑が重複していた。 (飯塚)



第44図 6号住居出土遺物実測図

7号住居《第45・46図、図版17・32・33》

位置 K-25グリッド 21号墳の東側に隣接して位置する。

形状・規模 北下がりの斜面に掘り込まれていた上に、後世の攪乱による削平のため、残存状況が芳しくなく、プランの確認が困難であった。現状での平面形は、東西方向に長軸を有する長方形と思われる、南東隅はやや鈍角を示す。規模は、東西方向6.40mを測り、南北方向の残存長は2.70mである。

長軸方位 N-88°-W 残存面積 14.1㎡

周壁 耕作による攪乱と遊歩道の設置により、南壁と東西両壁の一部が確認できたのみである。ローム

層を掘り込んで壁を構築しており、最も良好な南壁の残存壁高は、46cmである。

床面 YPを含むローム層中に構築していた。残存した床面は、全体的に良く踏み固められていた。南東隅で確認された掘り方の一部では貼床が認められたが、その他の部分では検出できなかった。

埋没土 ロームブロック・ローム粒を含む暗褐色土が堆積していた。

炉 明確に確認することはできなかった。P1の北約1mの所に焼土が散在し、削平された炉の痕跡と思われる。

柱穴 P1・P4が柱穴と思われるが、柱痕を確認

することはできなかった。

P 1 径81.0×63.0cm・深さ41.0cm

P 2 径78.0×51.0cm・深さ54.0cm

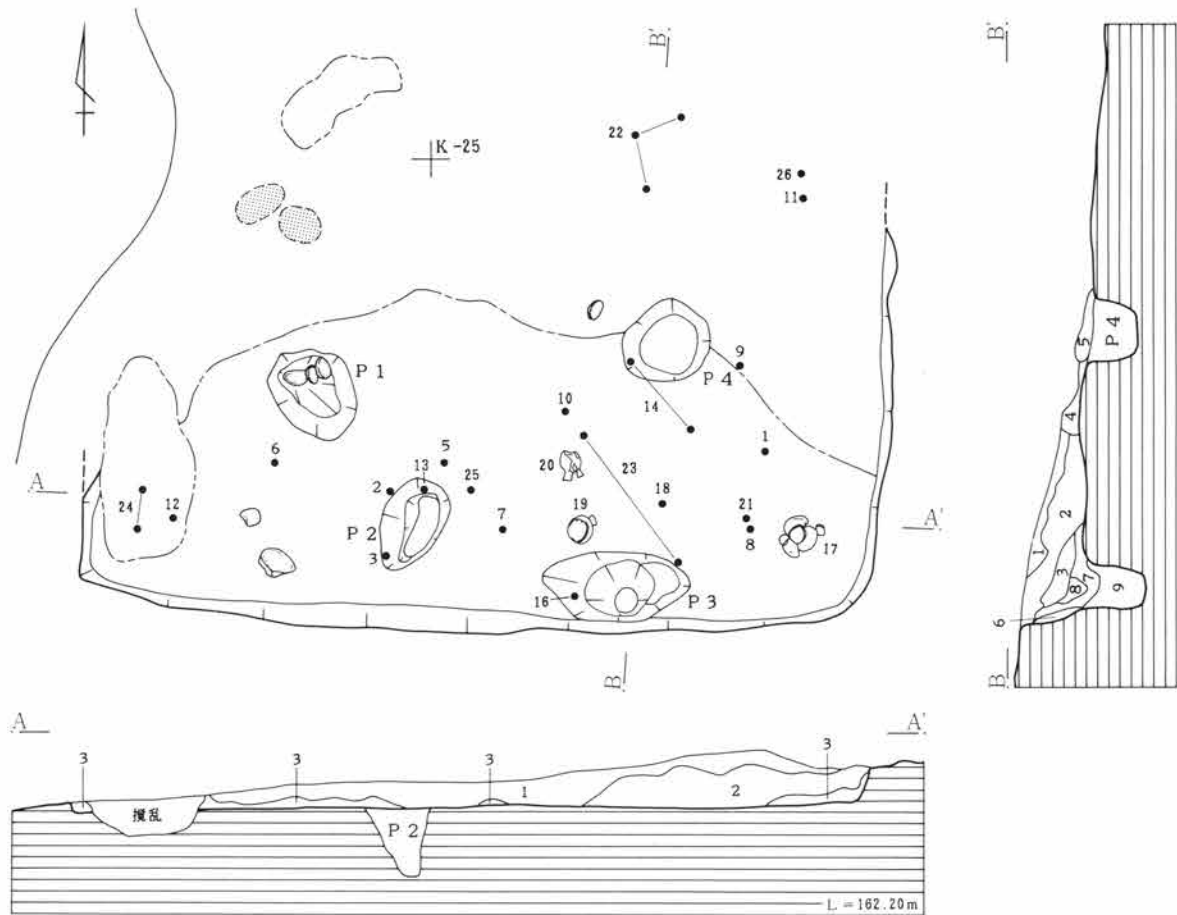
P 3 径119.0×55.0cm・深さ61.0cm

P 4 径72.0×66.0cm・深さ45.0cm

遺物の出土状況 住居の南東隅に集中する傾向が見受けられた。床面からは、壺の口縁部～頸部(17)、高坏脚部(5・6・7)が出土した。台付甕(19)と小型壺(20)は、レンズ状に堆積する埋没土中にあり、住居の埋没過程で廃棄されたものと思われる。

備考 床面の検出状況、残存状況等により東西方向に長軸を有すると考えたが、北東側に位置する11号

住居と比較し、確認された炉の痕跡が他の住居に見られる補助的な炉と考えた場合には、南北方向に長軸を有する可能性も考えられる。(磯貝)



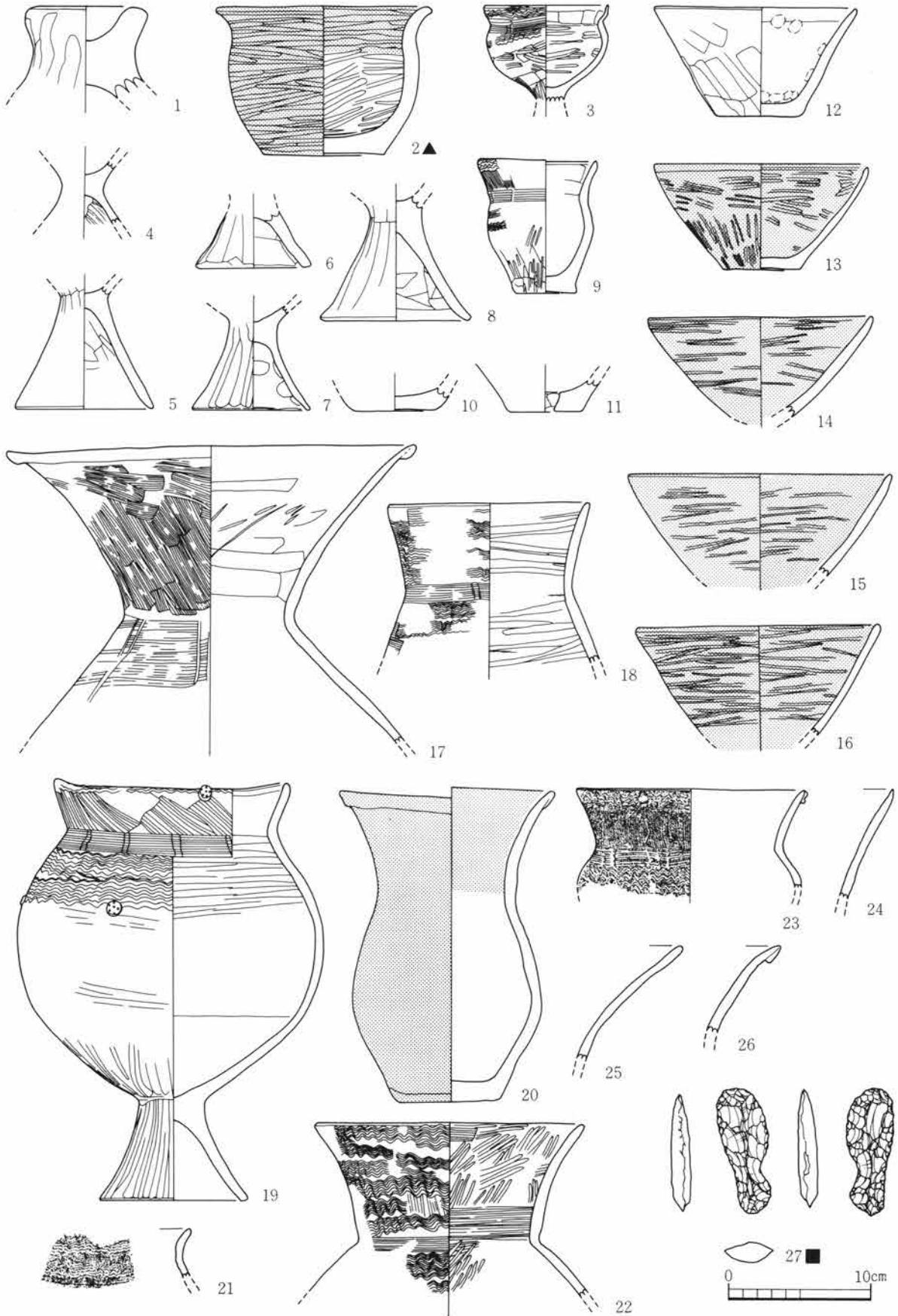
1. 暗褐色土 大粒のローム粒・炭化物・軽石が混入する。粘性をおび固く締まる。
2. 暗褐色土 1層より混入物が減少し、褐色みを増す。
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックが多量に混入する。
4. 暗褐色土 3層よりロームブロックの混入は減少する。
5. 暗褐色土 ローム粒・軽石・小礫が混入する。粘性をおびる。

6. 暗黄褐色土 ロームブロックが多く、粘性・締まりを欠く。
7. 暗褐色土 3層に類似するがロームブロックが増加する。
8. 暗褐色土 ローム粒が混入する。ロームブロック・軽石も少量散見する。
9. 暗褐色土 ローム粒が多量に混入し、締まりを欠く。



第45図 7号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



第46図 7号住居出土遺物実測図

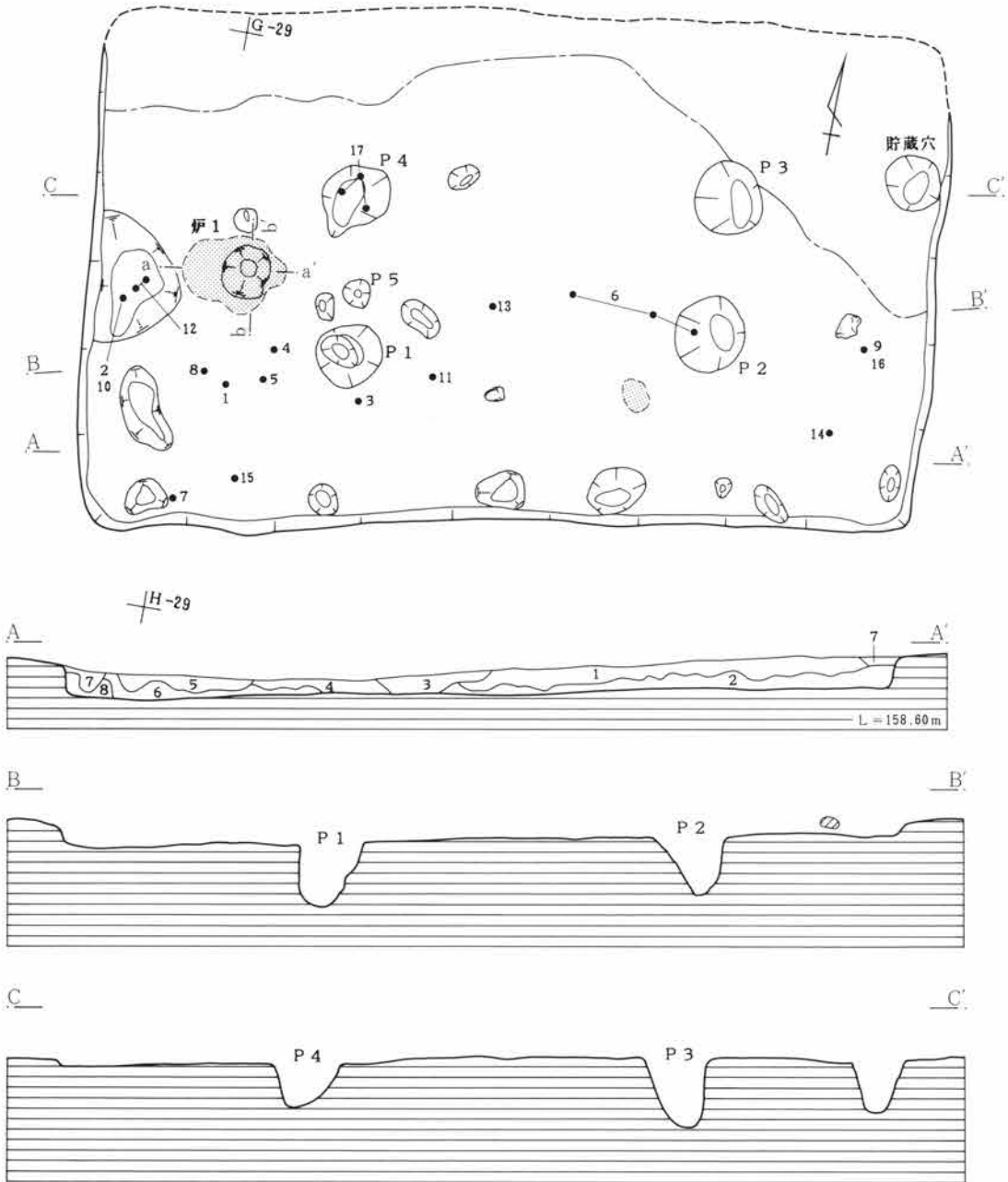
8号住居《第47～49図、図版17・33》

位置 G-28グリッド 1号墳の北側の北緩斜面に立地する。

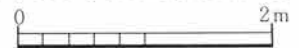
形状・規模 耕作に伴うサク列のために、北壁は確認できなかった。東西両壁が南壁に対して直交して

おらず、やや東に振れていたため、平面形は、東西方向に長軸を有する平行四辺形を呈する。規模は、東西方向7.20mを測り、南北方向の残存長は4.10mであった。長軸対短軸の比率は1.9：1である。

長軸方位 N-81°-E 残存面積 26.8m²

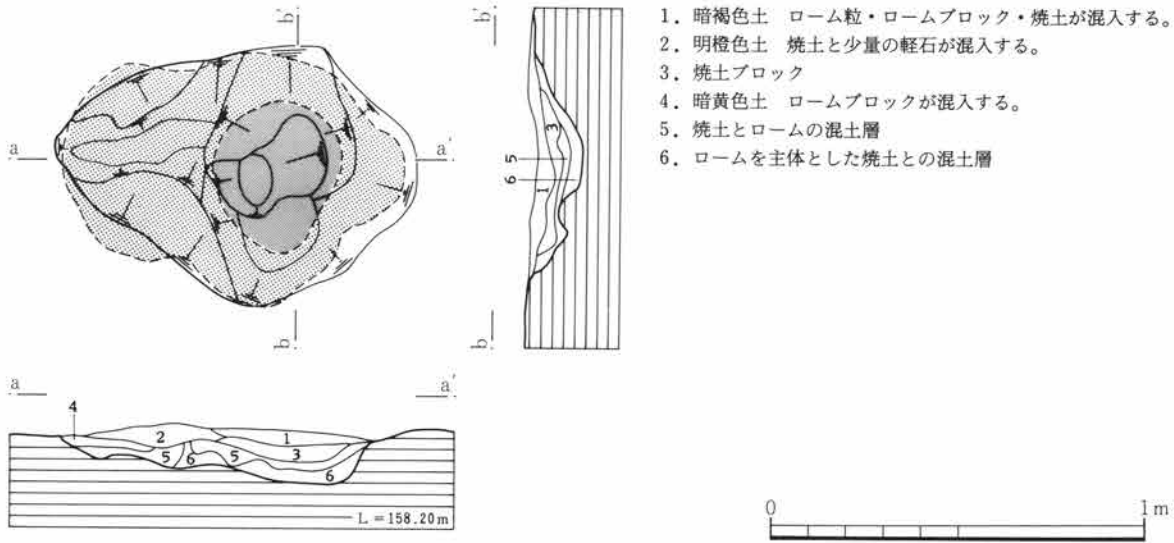


1. 暗褐色土 多量の軽石と、ローム粒・ロームブロックが混入する。炭化物の混入は若干である。
2. 1層よりもロームブロックの混入が増加し、軽石は減少する。
3. 暗褐色土 炭化物の混入が顕著になる。
4. 暗褐色土 軽石の混入が増加する。
5. 褐色土 ロームブロック・炭化物・焼土粒が混入する。
6. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックが多量に混入する。
7. 暗褐色土 ローム粒・炭化物が混入する。
8. 暗黄色土 ロームブロックが多量に、軽石が少量混入する。



第47図 8号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



第48図 8号住居炉実測図

周壁 南壁は暗褐色のローム層を掘り込んでおり、下部ではY Pの混入が見られた。耕作により、東壁の約2分の1と、西壁の約5分の1が削平されていた。残存壁高は、良好な南側で32cmであった。

床面 ローム層中に構築されている。北壁付近は削平され確認できなかった。掘り方は無く、貼床も検出されなかった。

埋没土 ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が堆積していた。量の寡多はあるが、全体的に炭化物の混入が見られた。

炉 西壁の中央から1.3m程東寄りに位置する。92×66cmの不整楕円形で、床面から10cm程で使用面が確認された。使用面は、5cm程の厚さで固く焼土化していた。掘り方は皿状に掘り込まれ、深さは13cmであった。

貯蔵穴 東壁際に位置するピットが貯蔵穴と思われる。径45×50cmの円形で、深さは39cmである。中には、炭化物を含み、締まりの無い暗褐色土が堆積していた。

柱穴 主柱穴4本を確認した。P 1の埋没土上部には、柱材の補強に使ったと思われる、灰白色粘土ブロックが10cm程の厚さで見られた。また、主柱穴の掘り方は、それぞれ、住居の短軸とほぼ平行に長径をとる楕円形を呈しており、柱材として板材を用いた可能性も考えられる。

1. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土が混入する。
2. 明橙色土 焼土と少量の軽石が混入する。
3. 焼土ブロック
4. 暗黄色土 ロームブロックが混入する。
5. 焼土とロームの混土層
6. ロームを主体とした焼土との混土層

P 1 径55×36cm・深さ52cm

P 2 径60×62cm・深さ50cm

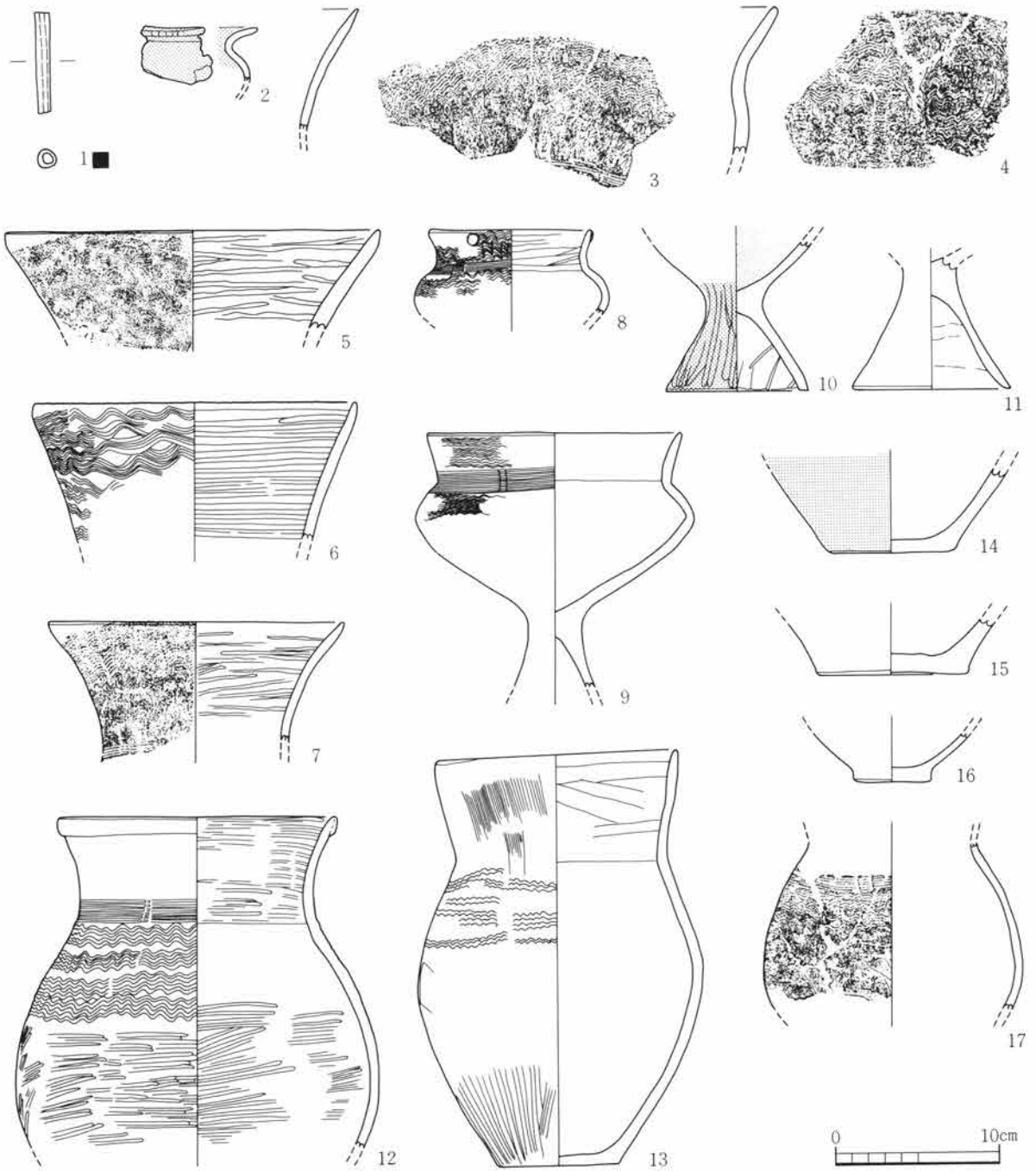
P 3 径56×62cm・深さ60cm

P 4 径54×60cm・深さ37cm

P 5 径24×24cm・深さ18cm

遺物の出土状態 床面直上からは完形の甕(13)、壺口縁部(5)、赤色に塗彩された高坏(10)等が出土した。また、同じく床面から、赤色珪岩製の管玉(1)も出土している。

備考 南壁際には6基の小ピットが掘り込まれていた。規模は径25～50cmで、楕円形を呈していた。4号住居でも南壁際の東半部に同様なピットが検出されており、何らかの施設があった可能性が考えられる。(磯貝)



第49図 8号住居出土遺物実測図

III 検出された遺構と遺物

9号住居《第50～53図、図版18・34・35》

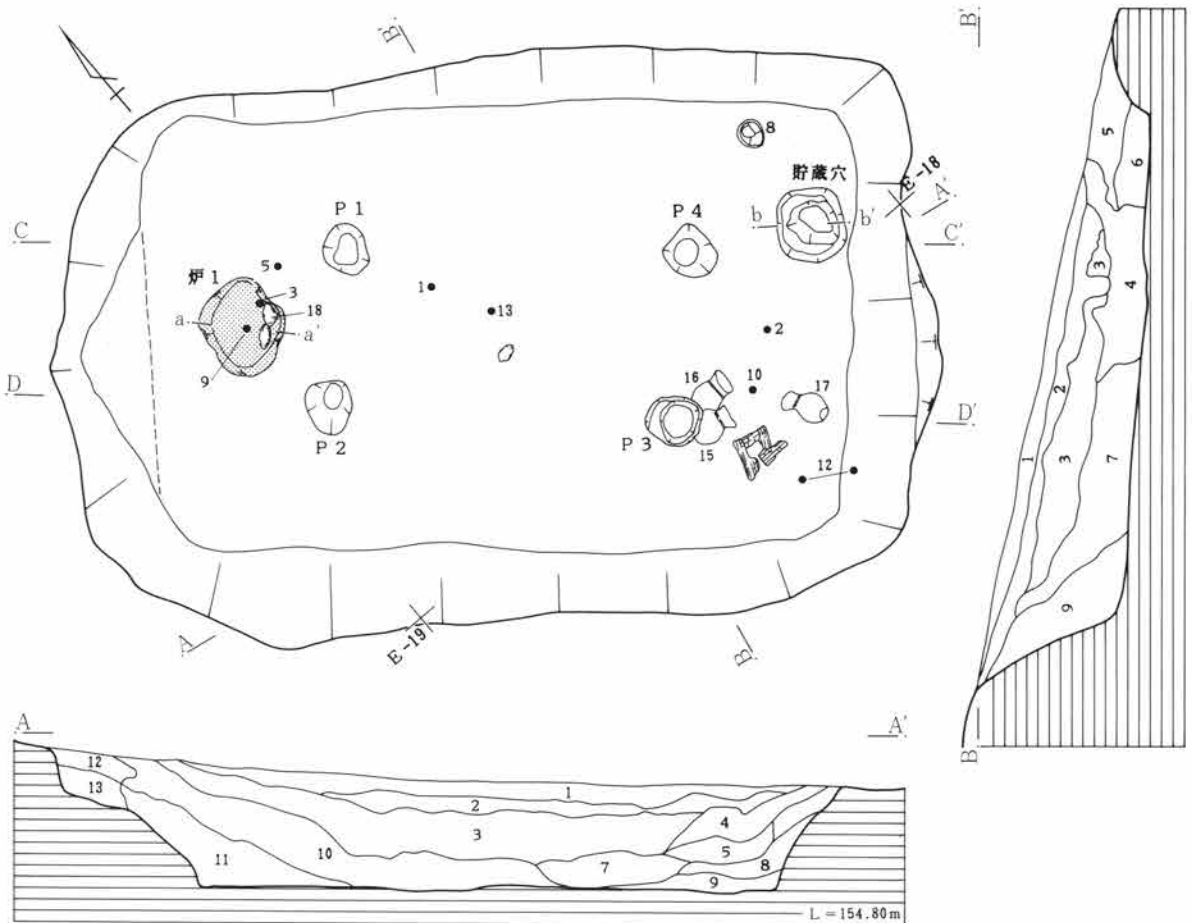
位置 E-18グリッド 2号墳北東側の北下がり斜面に位置しており、南北両壁の確認面での比高差は1.28mである。

形状・規模 平面形は、現状で東西方向に長軸を有する矩形を呈している。原形は各隅がやや丸みを帯びていたと思われるが、各辺とも比較的整然としていた。図中の西壁の張り出しは壁面と埋没土の識別が困難であった部分で、掘り過ぎた感がある。規模は、検出面の上端で東西方向6.66m・南北方向4.48m、下端で東西方向5.50m・南北方向3.58mを測つ

た。下端での長軸対短軸の比率は1.54：1である。

長軸方位 N-51°-W 面積 19.90㎡

周壁 南壁は粘性の強い暗褐色土層とローム層を掘り込んで構築されていたが、北壁においては暗褐色土の堆積は確認できなかった。壁面の残存は、斜面下位に当たる北壁が不良で、特に北西隅では7m程しかなかった。これに対し、南壁はいずれも1mを超え、南東隅では1.22mを測った。また、各壁とも立ち上がりが傾斜しており、床面と壁面のなす仰角は南壁で60°、東壁で65°であった。これは、埋没土の堆積状況の観察から、住居が埋没する過程で壁面

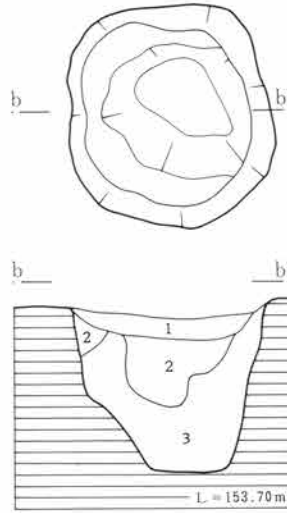
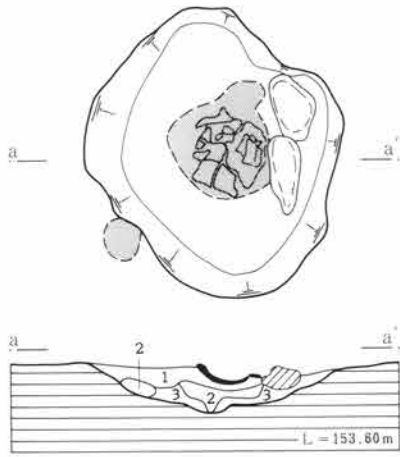


- | | |
|--|--|
| <p>1. 暗褐色土 軽石・ローム粒・炭化物が少量ずつ混入する。</p> <p>2. 暗褐色土 1層に類似するが炭化物の混入が多くなる。</p> <p>3. 茶褐色土 ローム粒・炭化物が少量混入する。</p> <p>4. 茶褐色土 Y Pがまばらに混入する。</p> <p>5. 暗褐色土 ロームブロックが混入する。</p> <p>6. 暗褐色土 Y Pが混入する。</p> <p>7. 暗褐色土 茶褐色土の小ブロックと径1cm前後の炭化物が混入する。</p> <p>8. 暗褐色土 7層と比較して茶みが強くなるが、炭化物の混入は減少する。</p> | <p>9. 暗褐色土とロームブロックの混土層 7層と同様の炭化物が混入する。</p> <p>10. 茶褐色土と暗褐色土の小ブロック同士の混土層 軽石・炭化物の混入は減少する。</p> <p>11. 茶褐色土・暗褐色土・ロームのブロック同士の混土層 下部にロームブロックの混入が顕著である。</p> <p>12. 茶褐色土 やや粘性をおびる。</p> <p>13. 暗褐色土 やや粘性をおびる。</p> |
|--|--|

第50図 9号住居実測図



3. 弥生時代の遺構と遺物



1号炉

- 1. 暗褐色土 焼土・炭化物が少量混入する。
- 2. 焼土ブロック
- 3. 暗褐色土 炭化物が多量に混入する。

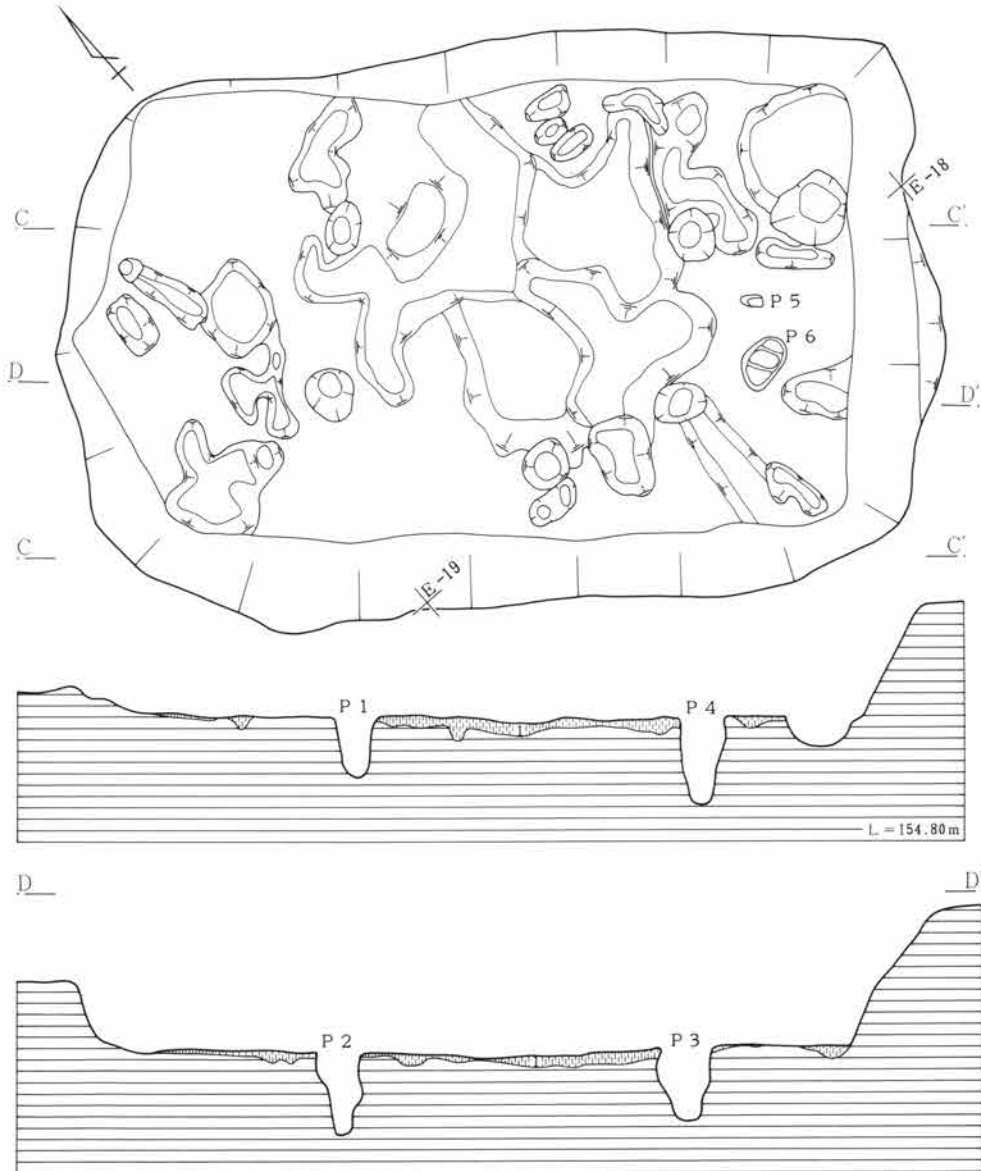
貯蔵穴

- 1. 暗褐色土 ローム粒が混入する。
- 2. 暗褐色土 径1~2cmの炭化物が少量混入する。
- 3. 暗褐色土とロームブロックの混土層 2層と同様の炭化物が混入する。



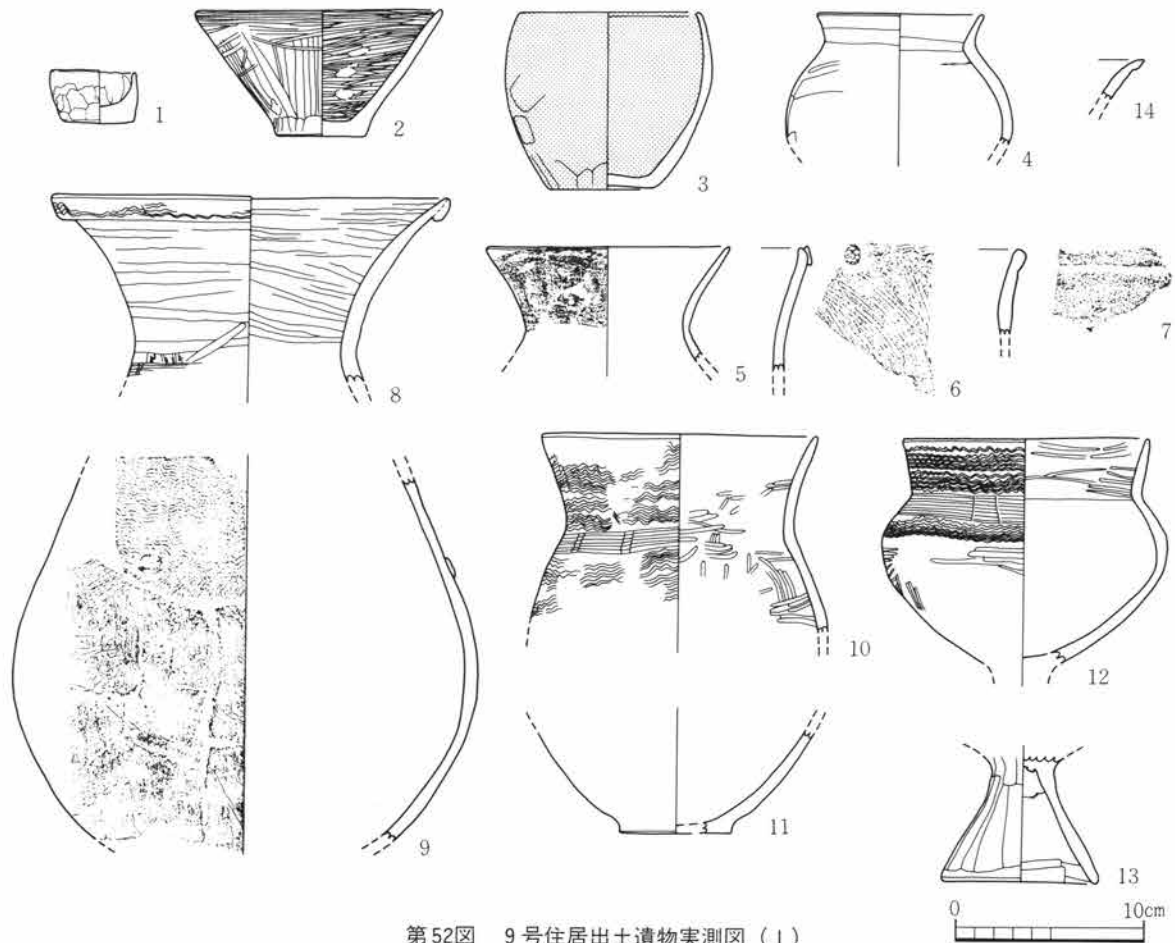
掘り方

- 1. 暗褐色土 ロームの小ブロック・ローム粒、YPが多量に混入する。



第51図 9号住居炉・掘り方実測図

III 検出された遺構と遺物



第52図 9号住居出土遺物実測図(1)

が崩落したためと考えられる。

床面 深さ5~10cm前後の土坑あるいはピット状の掘り方を有し、部分的に軟弱な部分も有ったが、基本的にはローム層を掘り込んでいるため、非常に硬く踏み固められていた。

埋没土 量の多寡はあるものの、全層を通じて炭化物の混入が顕著であり、下層はP3の南東部分のブロックを初め、径1~2cmの物が床面間近まで認められた。堆積土はYPを混入する褐色土で、色調・炭化物の混入状況から細分した。また、下層、特に壁際にはロームブロックが多量に混入していた。

炉 P1とP2の中間、西壁際に位置する。南北方向に長軸を有する、径77×70cmの楕円形であるが、原形は円形に近いものであったと思われる。掘り込みの東寄り、即ち住居の内部寄りに、長さ20cm程の円礫2個が縦位に置かれていた。礫の西側からは壺の胴上半部(9)が出土しが、火熱を受けて赤化し脆

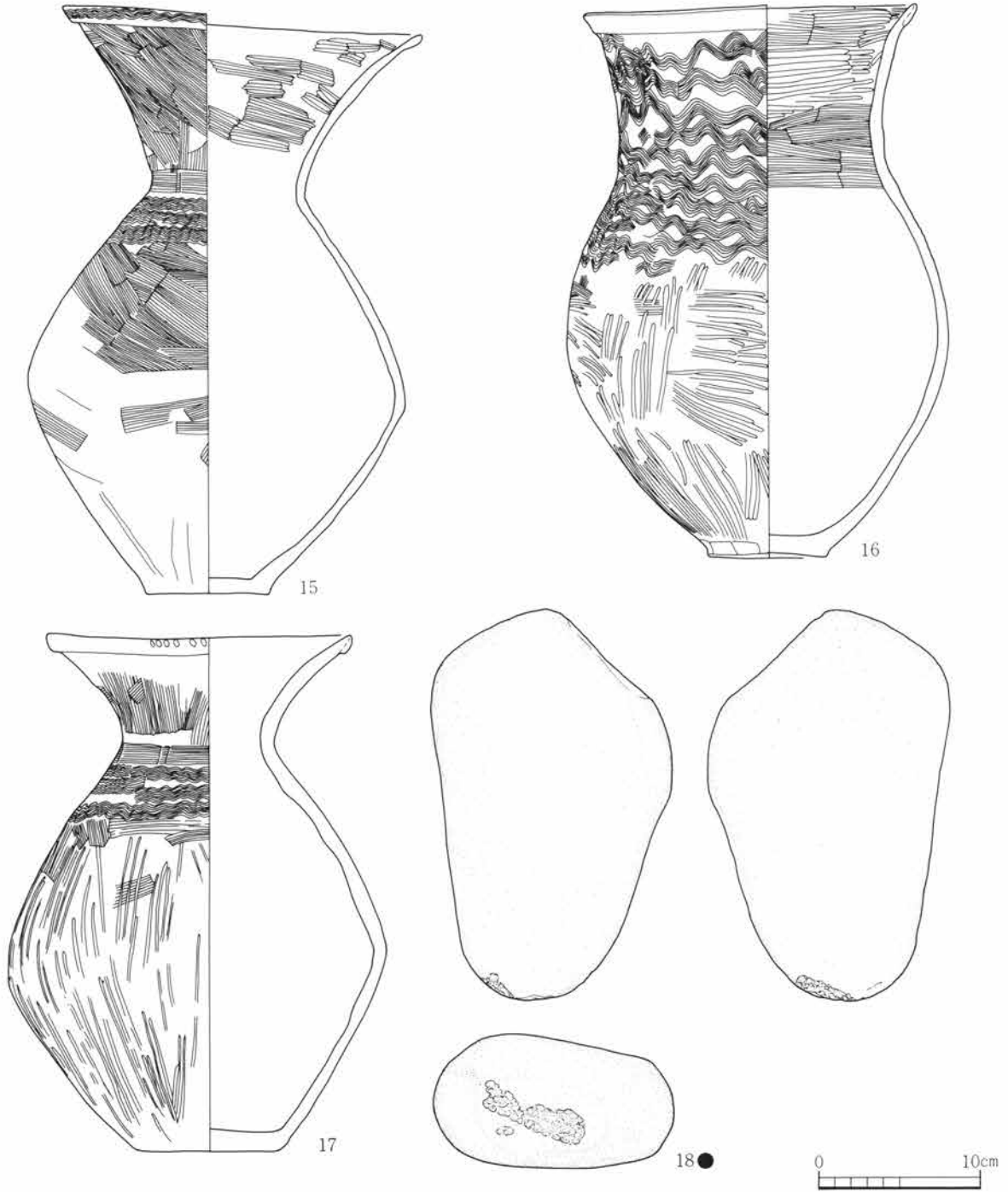
弱になっていた。焼土はこの土器を中心に散布し、土器の下位にも2~3cmの厚さで堆積していた。また、炉の東側の床面は、特にその硬度を増していた。
貯蔵穴 P4の東側、壁面に接して位置する。径59×53cmの円形で、深さは30cmであった。炭化物を混入する暗褐色土が堆積していた。

柱穴 支柱穴4本を検出した。心々間の距離はP3とP4が1.34mであるのに対し、P1とP2は1.14mしかなく、P2がやや内側に寄って掘削されている。P3は柱痕を確認できなかったが、埋没土の上層に黄色土が見られた。これは掘り方上面を貼った土層と考えられる。また、中位には暗灰色の粘質土塊が入っており、補強材に使用されたものと思われる。

P1 径41×37cm・深さ50cm

P2 径44×38cm・深さ61cm

P3 径42×40cm・深さ94cm



第53図 9号住居出土遺物実測図(2)

P 4 径50×40cm・深さ71cm

遺物の出土状況 炉内出土の壺(9)の他には床面からの出土は無い。P 3の東側からは壺(15・17)・甕(16)の完形品が横倒状態で出土したが、床面からは6~24cm遊離していた。北東隅出土の壺(8)は、口縁部のみが伏せられた状態で出土した。

備考 掘り方精査時に検出したP 5・P 6はいずれ

も小規模のピットであるが、位置的には入り口施設の造作される所であり、掘削深度も他の掘り方よりもやや深い点が注視される所である。

P 5 径18×9cm・深さ13cm

P 6 径32×18cm・深さ18cm

(徳江)

10号住居《第54・55図、図版16・35》

位置 F-19グリッド

形状・規模 東西方向に長軸を有する矩形で、四隅の丸みは他の住居と比較して弱く各辺とも整然としていた。各壁面とも直線的傾向を強く残していた。規模は、東西方向が上端で4.95m、南北方向は3.60mである。下端では東西方向が4.35m、南北方向は3.94mを測った。長軸と短軸の比率は1.1:1である。

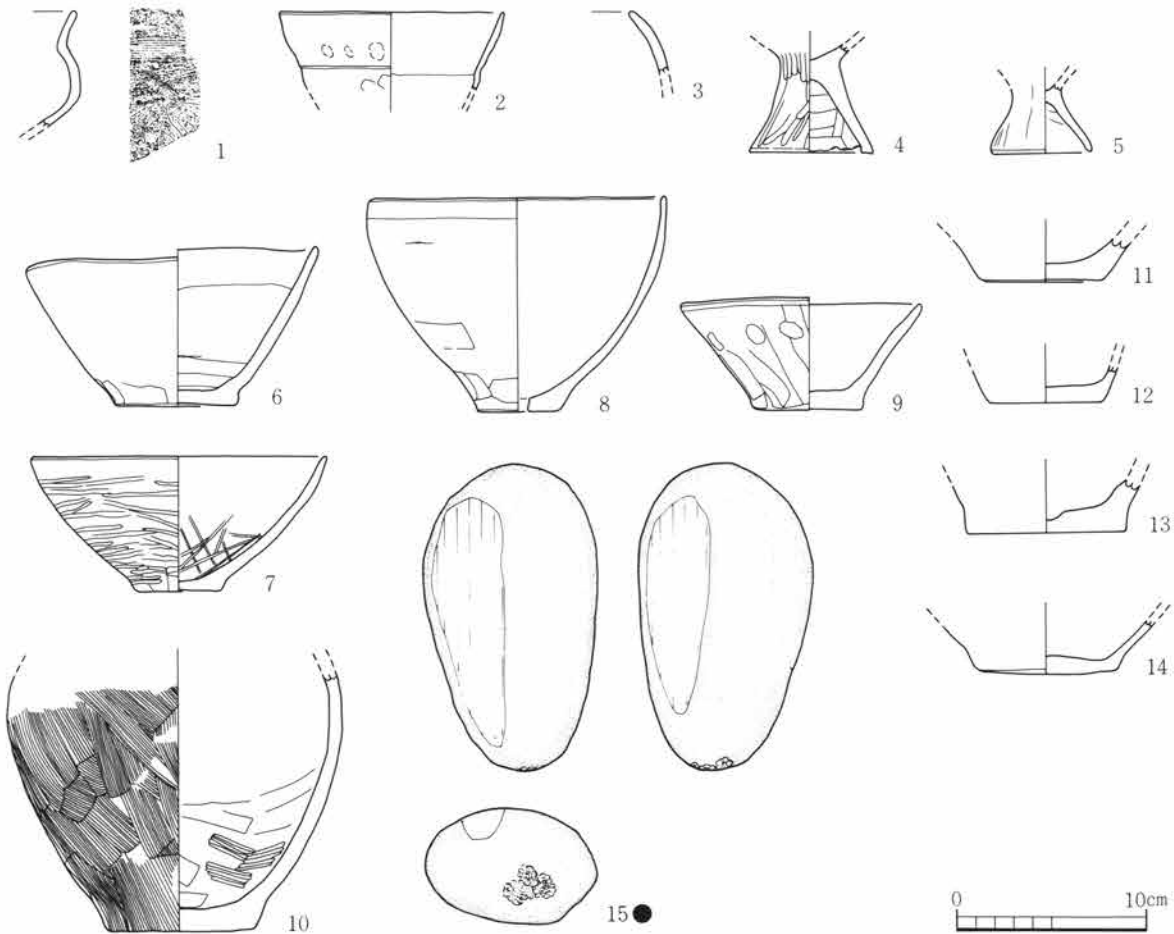
長軸方位 N-59°-W 面積 13.20㎡

周壁 北下がりの斜面に立地するため、斜面下位の北壁は残存状況が著しく不良であった。高位部の壁面には一部、上位に暗褐色土が堆積していたが、その他は四周をローム層中に掘り込んでいた。壁面の残存は良好な南壁で90~109cm、不良な北壁で34cm前後であった。四壁とも検出時の立ち上がりが傾斜しており、床面と壁面のなす仰角は南壁で71°、北壁で79°であ

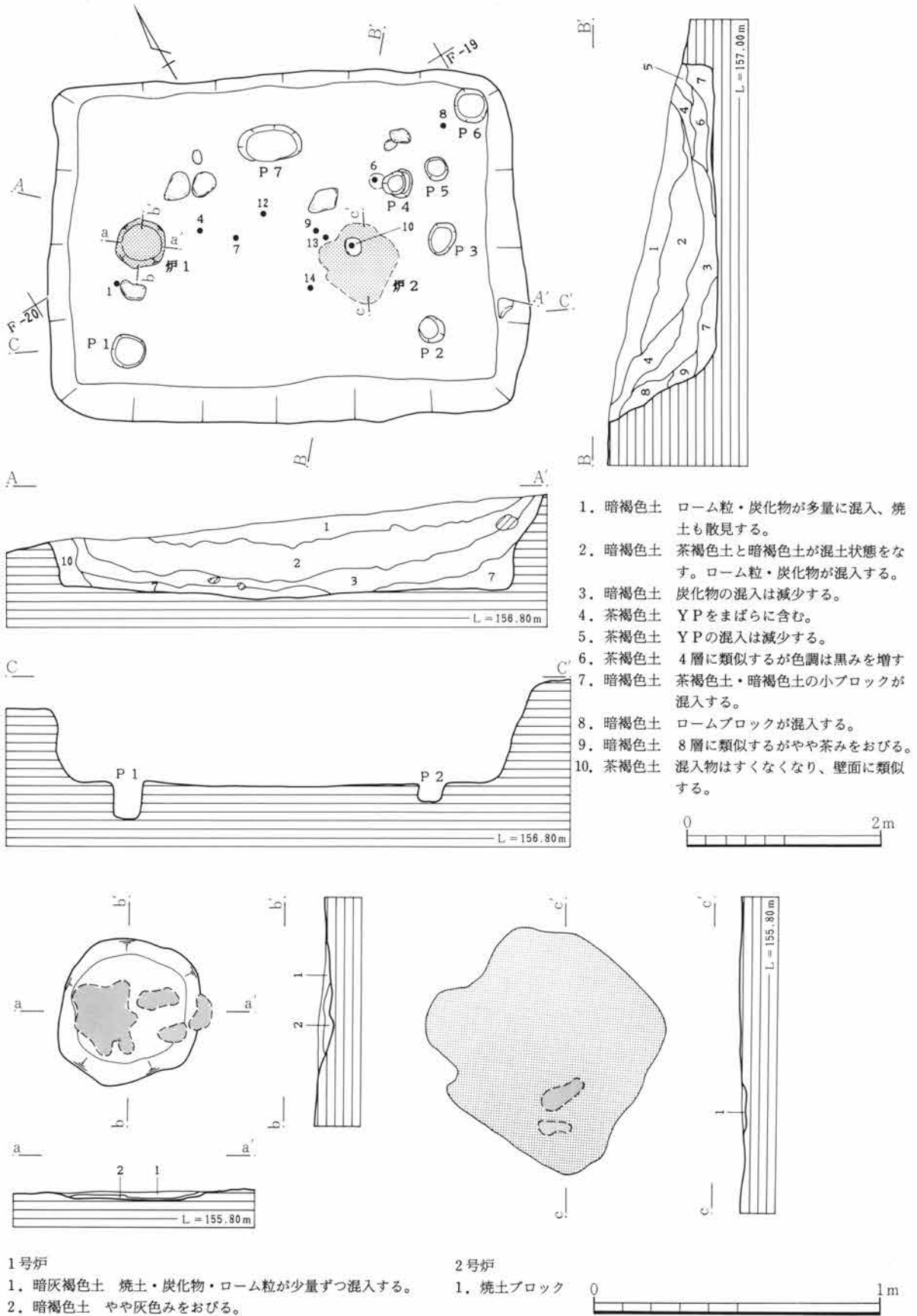
った。

床面 他の住居と比較して全体に柔らかかった。これは床面が形成された土層がYPを多量に含む汚れたローム層であることが原因と考えられる。その中でも1号炉の周辺、2号炉の南西側、住居の北東隅部分の狭い範囲でやや踏み固められた状況が看取された。また、取り立てて掘り方の掘削がなされていないのに床面は起伏が大きく、中央は皿状に落ち込んでいた。埋没土 暗褐色土が堆積しており、炭化物・ローム粒の混入状態で細分できた。

炉 西壁寄りの中央に1号炉がある。円形の掘り込みを持ち、径51×47cmの規模を測った。使用面中における焼土の範囲は狭く、ブロック状に残存していたに過ぎない。また、中央からやや東壁に寄った位置の床面が焼土化し、硬化した部分が有った。図中では2号炉と呼称したが掘り込みは無く、主体的に



第54図 10号住居出土遺物実測図



第55図 10号住居実測図

III 検出された遺構と遺物

機能したとは考え難い。

貯蔵穴 北東隅にあるP 6にその可能性がある。規模は、径が36×34cm、深さ32cmを測る。埋没土は灰色みを帯る褐色土で、炭化物が微量に混入する。

柱穴 小ピットを7本検出したが、規模・位置を考慮すると、支柱穴と断定できるものはなかった。

P 1 径36×35cm・深さ35cm

P 2 径28×26cm・深さ19cm

P 3 径36×28cm・深さ12cm

P 4 径32×28cm・深さ18cm 2本重複

P 5 径25×24cm・深さ17cm

P 7 径67×38cm・深さ21cm

遺物の出土状況 床面直上からの出土は、P 4の西側からの鉢(6)と、P 6の南西からの甑(8)とがある。また、埋没土中の高位から多数の破片が出土している。(徳江)

11号住居《第56～61図、図版18・19・35～37》

位置 N-22グリッド 3号墳の墳丘直下に検出された、本遺跡中最大規模を有する大型住居であり、集落のほぼ中央に位置していた。

形状・規模 南壁が3号墳の周堀によって削平されていたが、南北方向に長軸を有する長方形を呈する。規模は、東西方向6.5mを測り、南北方向の残存長は11.30mである。

長軸方位 N-29°30'-E 残存面積 62.4m²

周壁 東西両壁はローム層を掘り込んで構築されていた。北壁は立ち上がりのみが暗褐色のローム漸移層中で検出されたが、上部は攪乱を受けていたために確認できなかった。西壁は3号墳の周堀により約3分の1が削平を受けていたが、東壁は柱穴の位置から考えると殆どが残存していると思われる。

床面 ローム層中に構築されており、周壁付近を除いては良く踏み固められていた。東・西・北の壁際で掘り方が確認され、特に北壁際が顕著であった。また、壁際に5基のピットが検出されており、支柱穴を補助する壁柱穴の可能性も考えられる。

埋没土 暗褐色土を主体としており、量の寡多はあ

るものの全体に軽石の混入が見られた。上層では炭化物の混入が顕著であり、下層ほどロームの混入が多かった。

炉 2基が検出された。1号炉は西壁より1cm程東寄り、P 3の北側に位置する。規模は100×63cmを測り、楕円形を呈する。炉の東半部で堅固に焼土化した使用面が検出され、西半部は17cm程の深さに掘り込まれ、炉石が設置されていた。2号炉は、北壁中央より1.5m程南寄り、P 1とP 2の間に位置する。規模は85×75cmを測り、楕円形を呈する。南半部に焼土の散布が多く見られたが、1号炉ほど堅固な使用面は検出されなかった。掘り方は深さ14cm程で、皿状に掘り込んでいた。

柱穴 支柱穴P 1～P 4の4基を確認した。P 1では、柱穴中央部付近より北側に炭化物が散布しており、埋没土中1層では斜方向に3本の炭化物が4～6cmの厚さで確認されている。この炭化物散布範囲の床面から、甕(21)・台付甕(17)・高坏(5)が出土した。どのピットでも柱痕を確認することはできなかった。

P 1 径105×92cm・深さ84cm

P 2 径126×117cm・深さ69cm

P 3 径150×115cm・深さ67cm

P 4 径138×115cm・深さ98cm

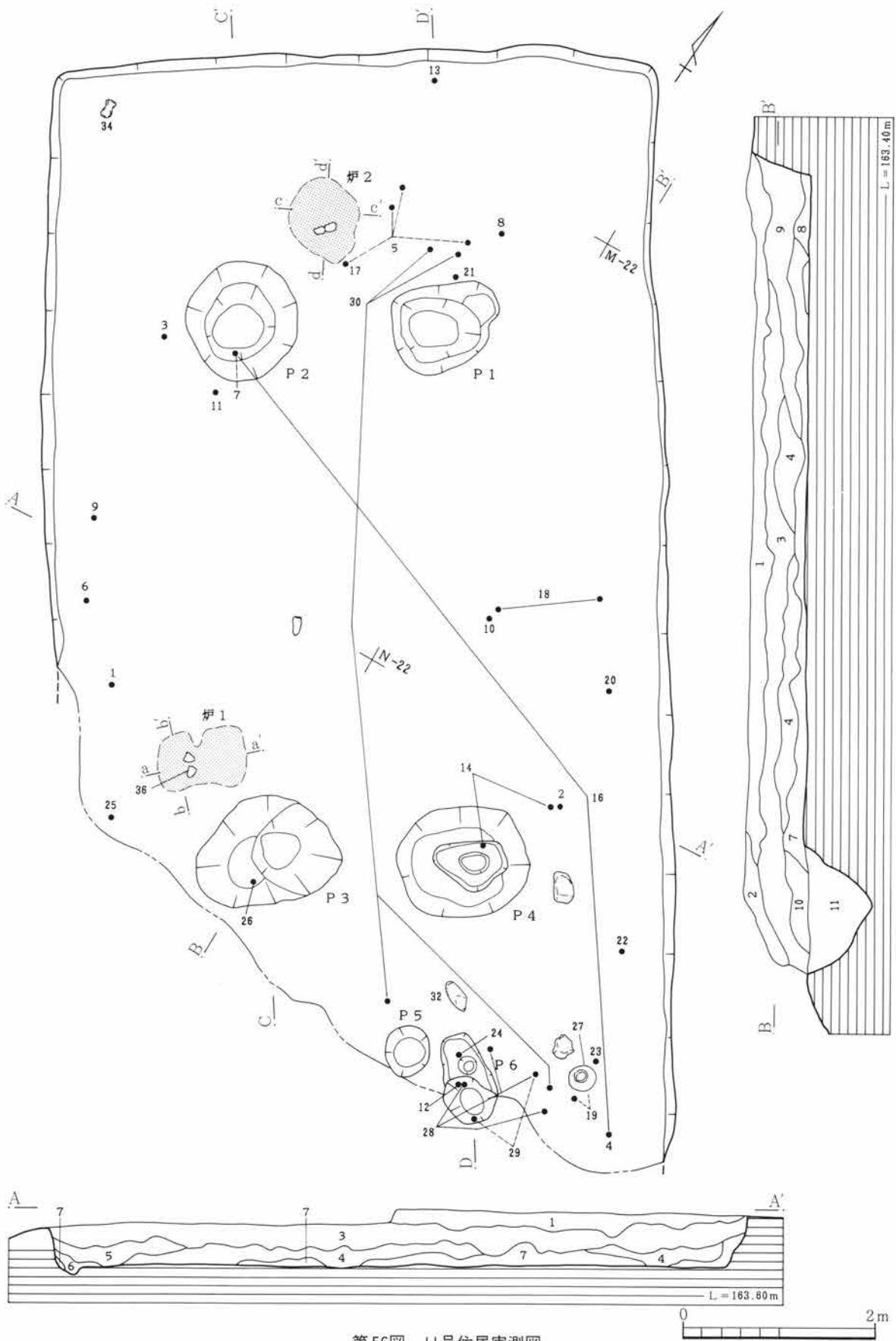
P 5 径55×47cm・深さ48cm

P 6 径①54×50cm ②50×44cm・深さ65cm

貯蔵穴 P 6内からは甕の口縁部(24)と台付甕(12)が出土しており、貯蔵穴の可能性も考えられる。

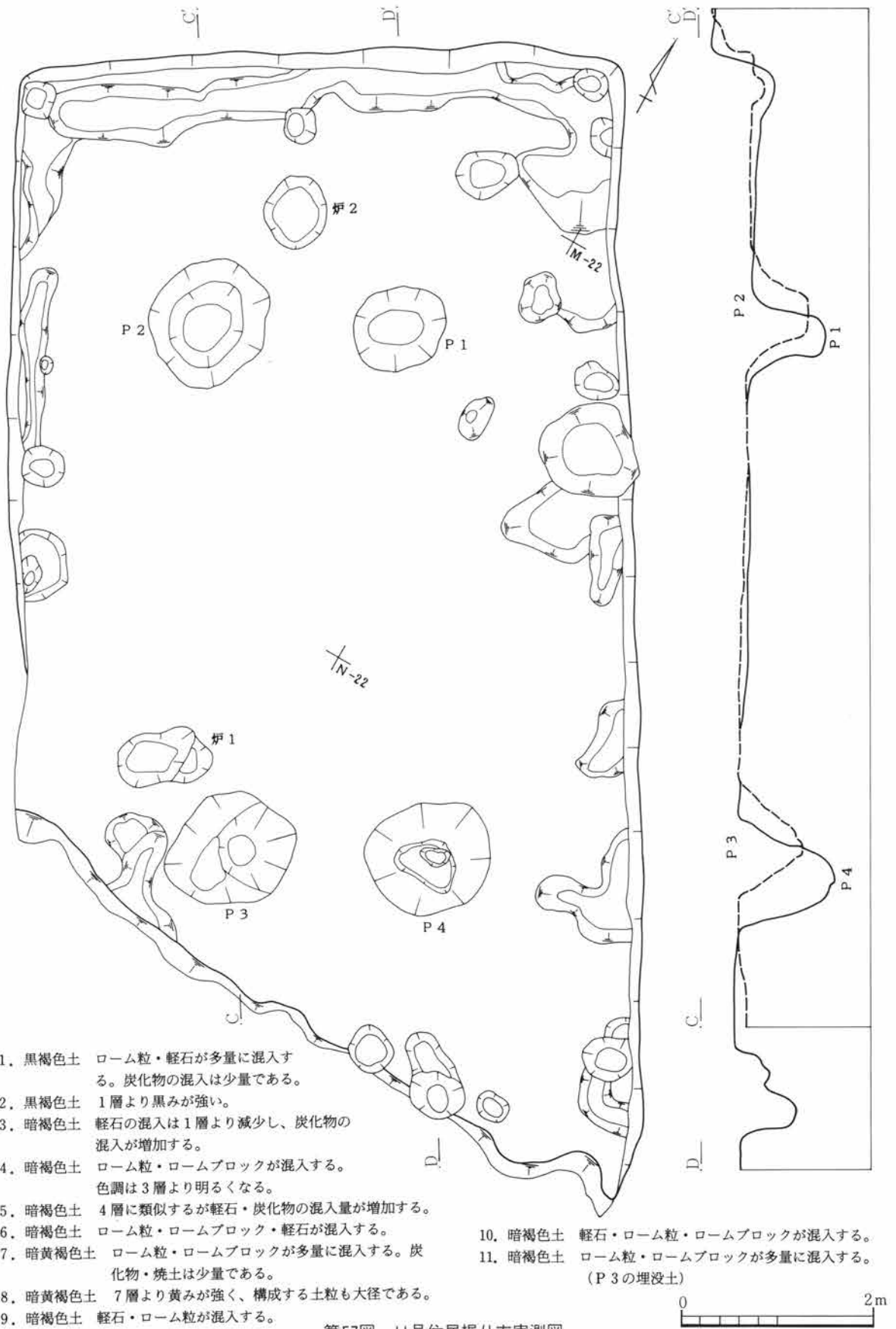
遺物の出土状況 P 1の北側とP 6の東側に遺物の集中する傾向が見られた。床面直上からは、壺(25・27・28・30)、甕(20・21)及び台付甕(10・13・17・19)等が出土した。また、台付甕(16)は北西の柱穴であるP 2内の破片と南東端出土破片とで接合関係があり、壺(30)もP 1北側の破片とP 6東の南東隅出土破片が接合しており、どちらも床面に近い位置から出土している。

備考 掘り方調査時に、掘り方埋土中に焼土粒・焼土ブロックの混入が確認された。特に、1号炉の北東側で多く散見された。これらは、床面精査時には認められなかったものである。(磯貝)



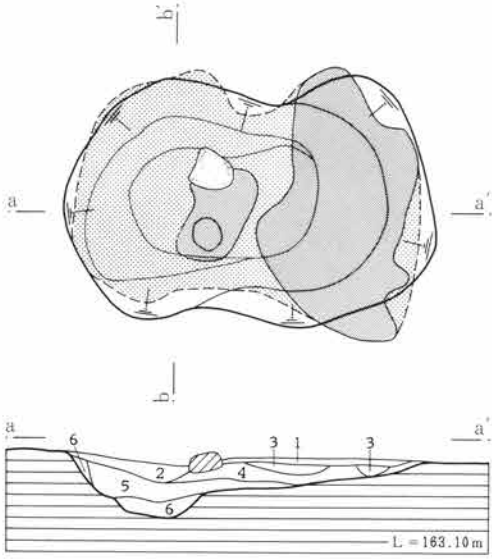
第56図 11号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



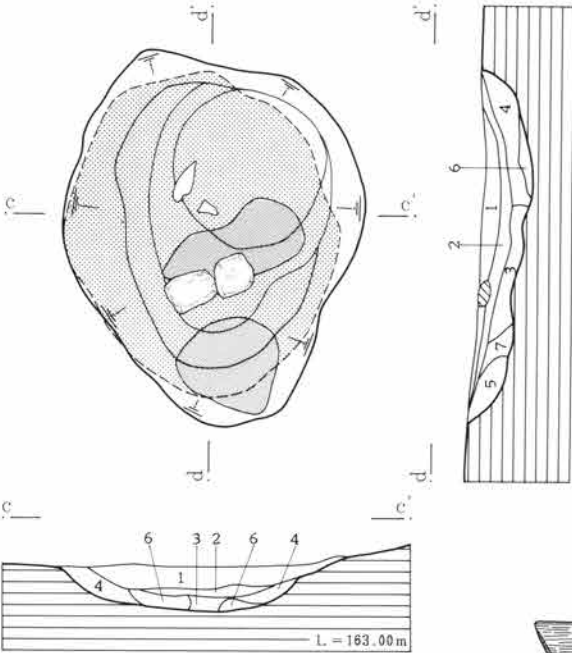
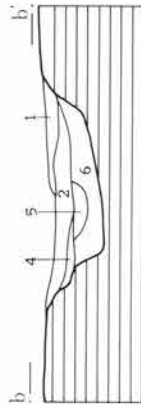
1. 黒褐色土 ローム粒・軽石が多量に混入する。炭化物の混入は少量である。
2. 黒褐色土 1層より黒みが強い。
3. 暗褐色土 軽石の混入は1層より減少し、炭化物の混入が増加する。
4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックが混入する。色調は3層より明るくなる。
5. 暗褐色土 4層に類似するが軽石・炭化物の混入量が増加する。
6. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・軽石が混入する。
7. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックが多量に混入する。炭化物・焼土は少量である。
8. 暗黄褐色土 7層より黄みが強く、構成する土粒も大径である。
9. 暗褐色土 軽石・ローム粒が混入する。
10. 暗褐色土 軽石・ローム粒・ロームブロックが混入する。
11. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックが多量に混入する。(P3の埋没土)

第57図 11号住居掘り方実測図



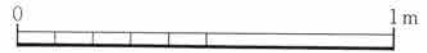
1号炉

1. 暗褐色土 炭化物・焼土粒が混入、ローム粒も若干混入する。
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒が混入する。
3. 暗褐色土 焼土粒が多量に混入する。
4. 暗黄褐色土 多量のロームと、軽石が混入する。
5. 暗黄色土 ロームが多量に混入する。
6. 暗黄色土 ローム粒・焼土粒が混入する。

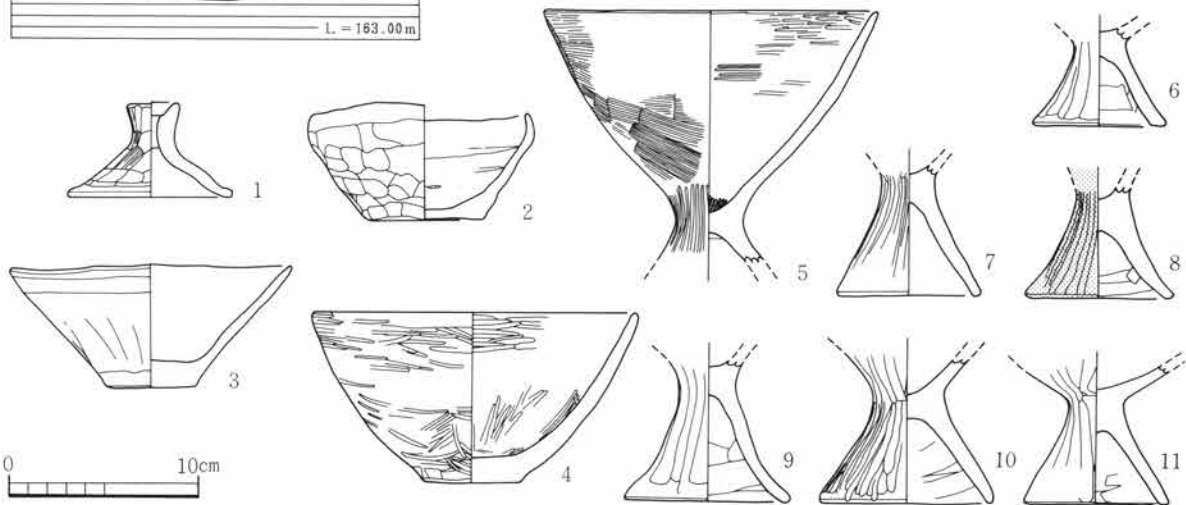


2号炉 58図

1. 暗褐色土 炭化物・焼土粒が混入する。
2. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒が多量に混入する。
3. 暗褐色土 多量のローム粒・ロームブロックと、焼土粒が混入する。
4. 暗褐色土 ローム粒・軽石が混入する。
5. 暗褐色土 4層の混入物に焼土粒が加わる。
6. 暗黄色土 細粒のロームが混入する。
7. 暗黄色土 ロームブロックが混入する。

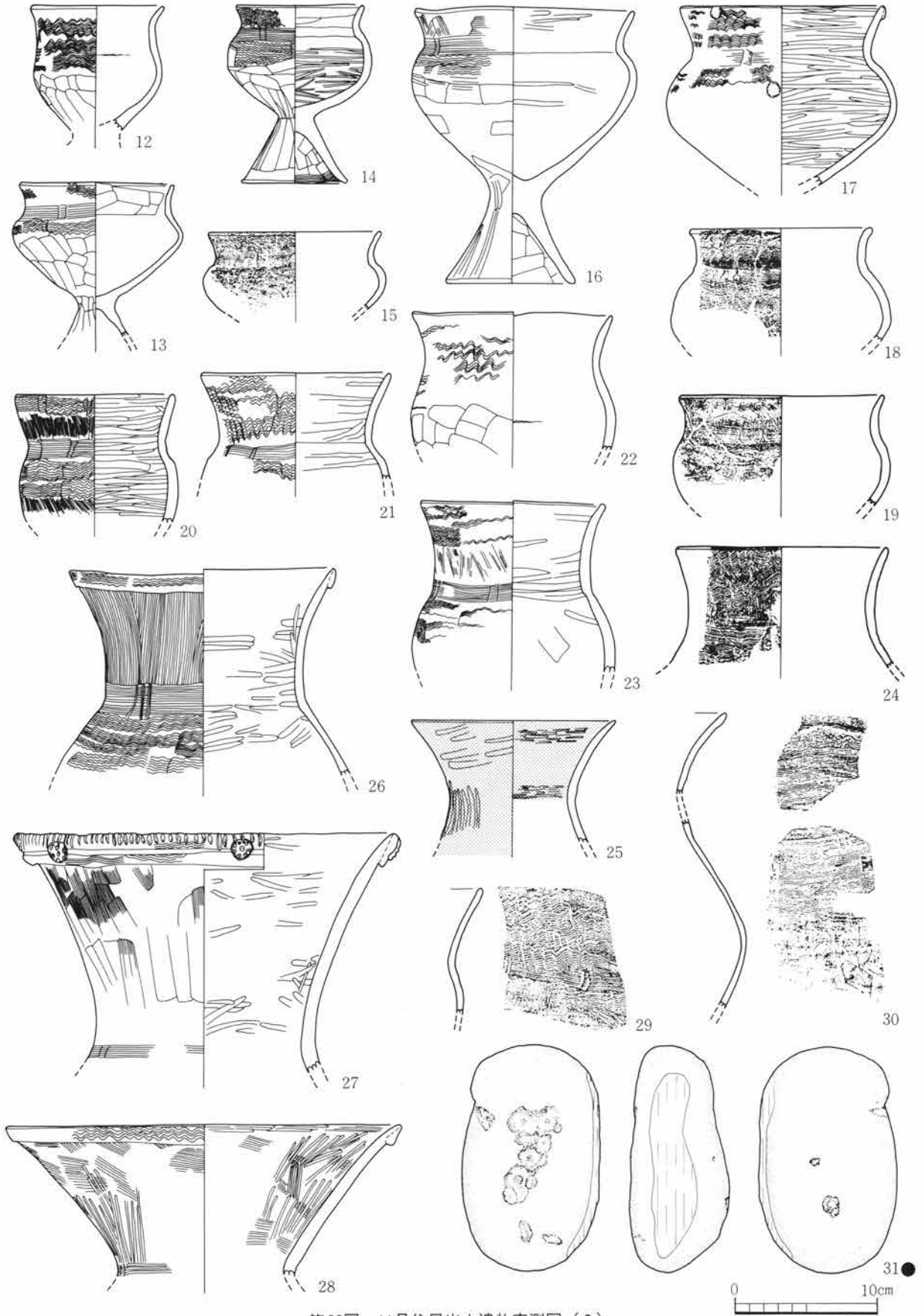


第58図 11号住居炉実測図

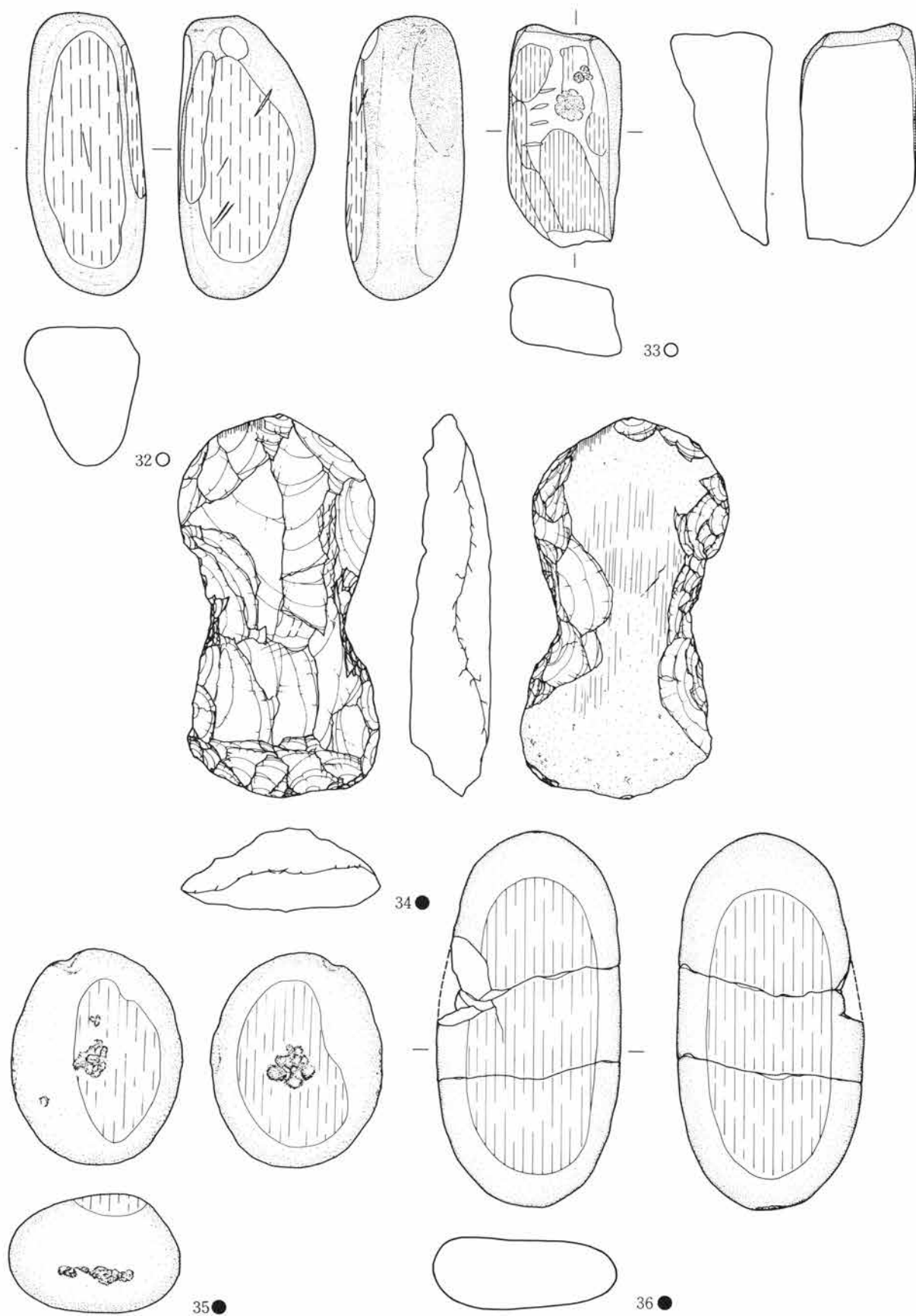


第59図 11号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第60図 11号住居出土遺物実測図(2)



第61図 11号住居出土遺物実測図(3)

III 検出された遺構と遺物

12号住居《第62・63図、図版20・37》

位置 M-20グリッド

形状・規模 北下がりの緩斜面に構築されており、地山の土と埋没土とが非常に近似する軽石を含む黒褐色土であったことと、住居の殆どが3号墳の構築により削平されていたため、上面ではプランが把握できず、トレンチによる確認を行った。しかし、傾斜地のため、基盤面が途中で暗褐色土のロームから軽石の混入する黒褐色土へと変化し、プラン確認・床面の検出共に困難であった。そのため、周壁の検出時に壁と地山とが識別できず、南北両壁及び西壁の一部しか確認できなかった。

周壁 全体の半分以上を、3号墳の周堀によって削平されていた。全体的に軽石を含む黒褐色土を掘り込んで構築されていたと思われる。南壁で一部ローム層を掘り込んでいる部分が確認された。

床面 軽石を含む黒褐色土中に構築されており、部分的にロームブロックを含む面が認められた。床面は締まりを欠き、トレンチ調査の際も確認は困難であった。焼土粒・炭化物が混入し、埋没土と比較して、幾分が締まりのあると思われた面を床面とした。

埋没土 軽石を含む黒褐色土を主体とする。床面・周壁付近には、ローム・焼土粒・炭化物の混入が認められた。

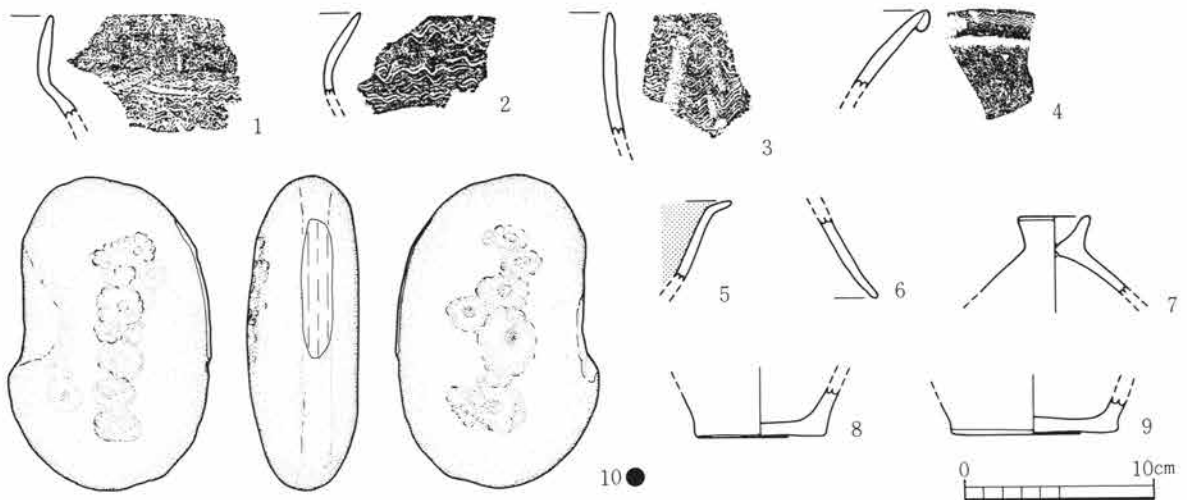
炉 西壁寄りの中央部で検出された。規模は48×32cmで、深さ5cm程の皿状の落ち込みがあった。ほぼ

中央部に焼土ブロックが確認されたが、堅固な使用面は無く、西側に焼土・炭化物が散見された。

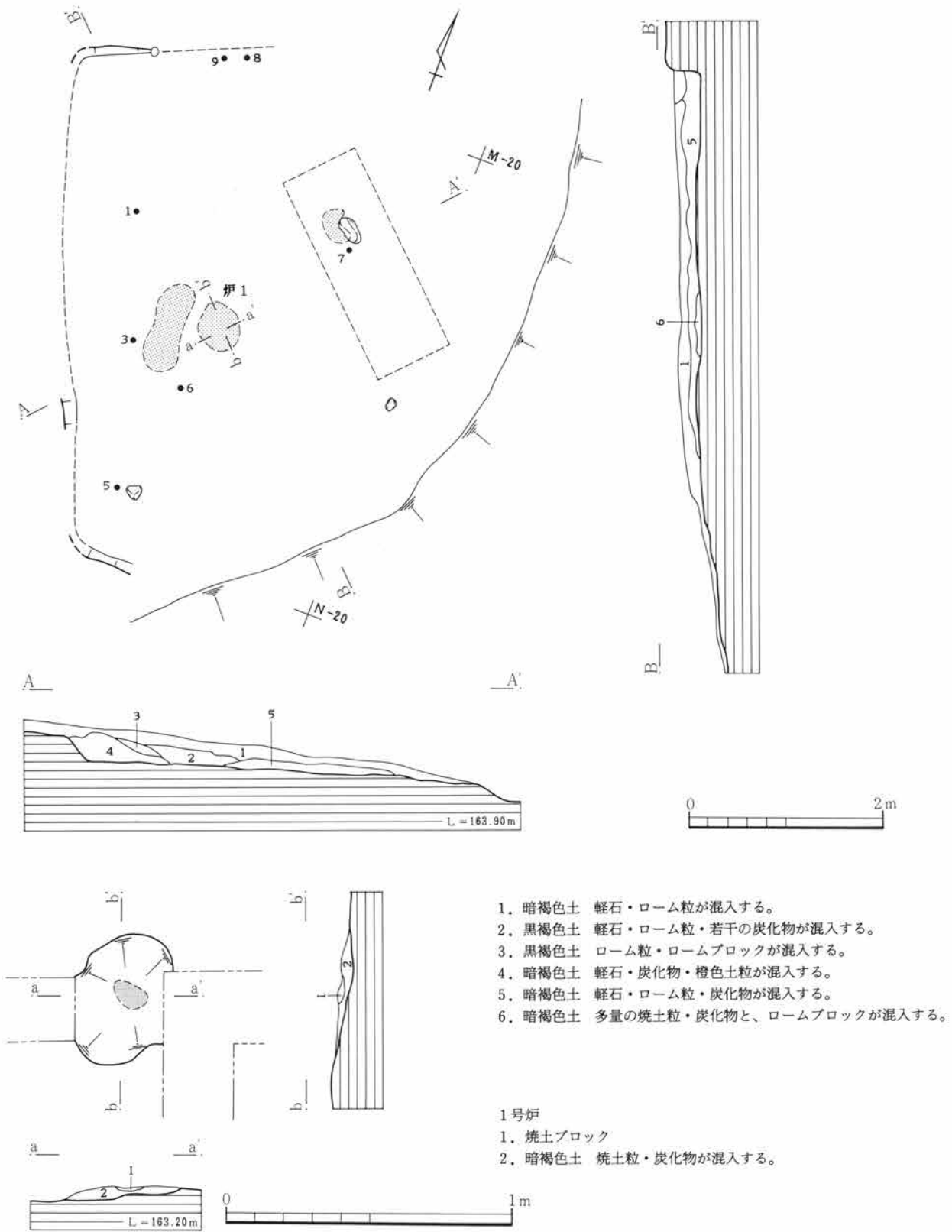
遺物の出土状況 殆どが小破片で接合関係も見られなかった。床面直上からは甕の底部(8・9)、高坏(5)、高坏脚部(6)等が出土した。また、蓋(7)は4号墓の下で検出され、床面から4cm程浮いており、4号墓に伴う遺物の可能性も考えられる。

備考 前述の通り、プラン・床面の検出が非常に困難であった。また、炉とした部分も他の住居と比較してはっきりしておらず、積極的に住居とする条件を満たしているとは言い難い。また、4号墓と重複していたことを考えると、一応は住居として扱ったが、4号墓に伴う溝状の遺構の存在を考えることもできる。調査中に確定すべきことであったが、集石が墓跡に伴うものであるとする判断が遅れ、不備な資料となってしまった。

重複する遺構 4号墓、3号墳と重複するが、どちらも住居より後出するものである。(磯貝)



第62図 12号住居出土遺物実測図



第63図 12号住居実測図

13号住居《第64～66図、図版20・37》

位置 Q-19グリッド

形状・規模 4号墳及び近年掘削されたと思われる土坑との重複により、西側部分が削平を受け、全体形状を把握するに至らなかった。検出した北壁・東壁の状況や貯蔵穴の位置等から、東西方向に長軸を有する矩形を呈していたと推察される。東側の両隅は残存状況が劣悪で判然としない点も多いが、丸みの弱い整然とした形状のようである。東西方向の残存長は4.76m、南北方向は4.34mであった。

長軸方位 N-59°-W

残存面積 21.65㎡(推定26㎡)

周壁 壁は削平が著しく、残存の良好であった北壁で高さ14～23cm、東壁・南壁は3～5cmであった。北壁は、やや茶みを帯た暗褐色土と粘性の強い黒褐色土を掘り抜き、一部ローム層に達していた。

床面 小さな起伏が認められたが、全体には南から北に向けて緩やかに下がっていた。ローム層を掘り込んで形成され、全体に良く踏み固められていた。南西部分を除き、深さ5～15cm程の土坑状の掘り方が重なっていた。この部分の床面は暗褐色土とロームの小ブロックの混土による貼床が施されていた。

埋没土 暗褐色土が堆積していたが、炭化物が多量に混入しており、部分的に大型の板状あるいは棒状の炭化材が見られた。特に、北東部の貯蔵穴周辺に多い。厚さ1cm程の炭化材はいずれも床面から2～5cm程遊離して出土し、その下位には火熱を受け、赤灰色みを帯た暗褐色土が堆積していた。

炉 床面の西寄りと中央近くの2箇所にある。西寄りの1号炉は、径42×34cmの長円形を呈し、皿状の掘り込みを有していた。ほぼ全面に焼土が3～4cmの厚さで堆積していた。2号炉は、86×51cmの規模で、東西方向に長い不定形の範囲に焼土が散布していた。焼土の堆積は薄く、その上には炭化物・灰層が皮膜のように広がっていた。掘り方は円形のもものが3基連結してあり、最終時点では中央のものが主体的に機能していたようである。中央の掘り方内の南側寄りからは台付甕の脚部(6)が出土している。

貯蔵穴 北東隅に位置する。径65×59cm・深さ37cmの円形を呈し、底面は二段になり、径38×33cmの小ピットが穿たれており、暗褐色土が堆積していた。

柱穴 床面精査時には識別できなかったので掘り方面まで調査を進めた段階での検出に努めた。多数検出したピットの中でP2～6とP7が支柱穴と考えられる。P2とP3は同規模で、住居の建て替えによる柱穴の移動があったと考えられ、P4とP5も同様の関係と考えられる。P6は副え柱の掘り方の可能性がある。東壁寄りにあるP8～10とP12の4本の小ピットは深さ46cm以上で、東傾して掘削され、埋没土の上層に炭化物が若干混入している点が共通している。P10の平面形は矩形を呈していた。P1からは鉢(1)が出土している。

P1 径33×32cm・深さ10cm

P2 径53×43cm・深さ56cm 支柱穴

P3 径46×46cm・深さ37cm P2と重複

P4 径73cm・深さ38cm 支柱穴

P5 径70cm・深さ30cm P4と重複

P6 径38cm・深さ23cm P2と重複

P7 径48×32cm・深さ48cm 支柱穴

P8 径45×44cm・深さ51cm

P9 径36×32cm・深さ34cm

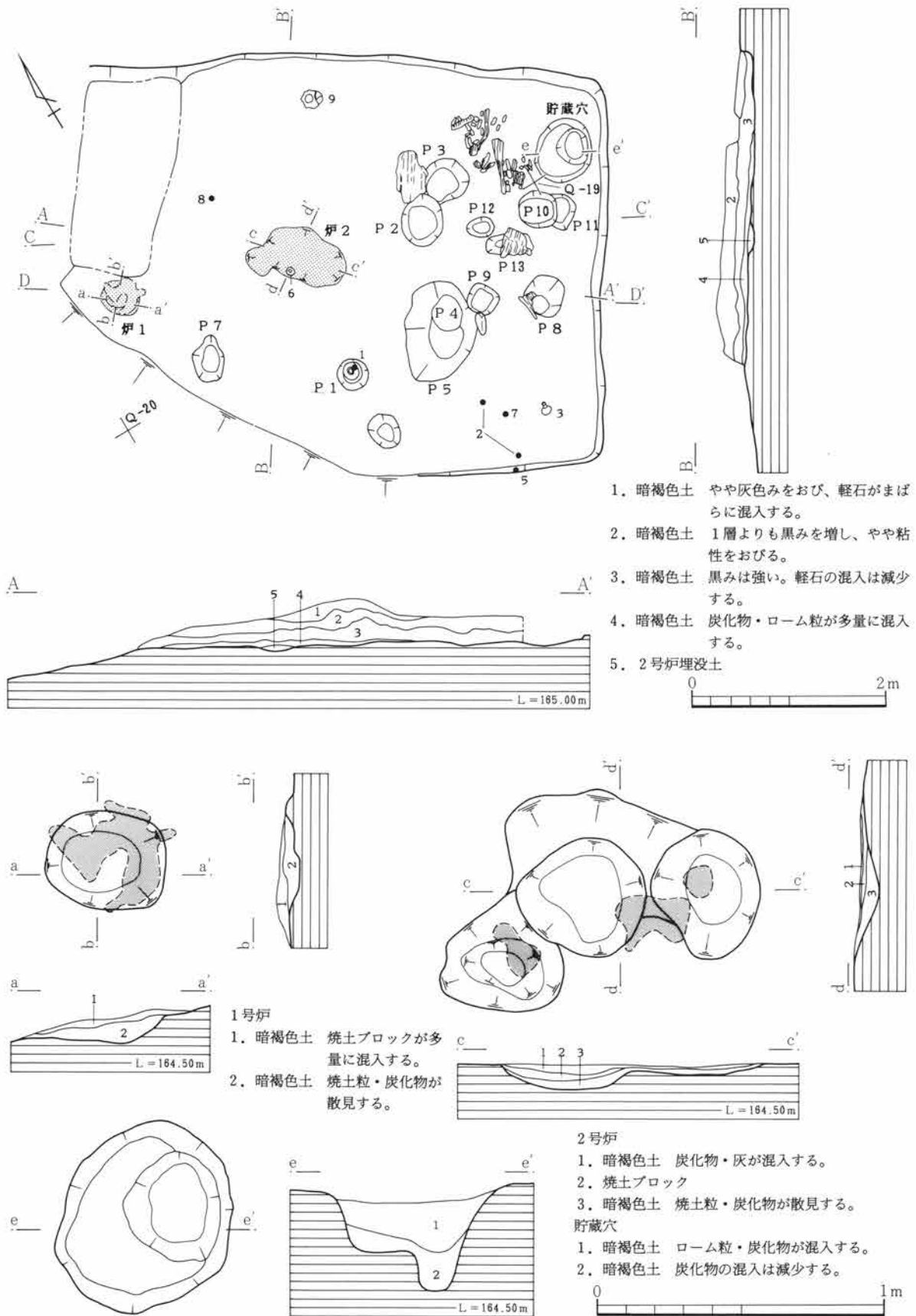
P10 径40×37cm・深さ17cm

P11 径36×21cm・深さ24cm

P12 径39×23cm・深さ36cm

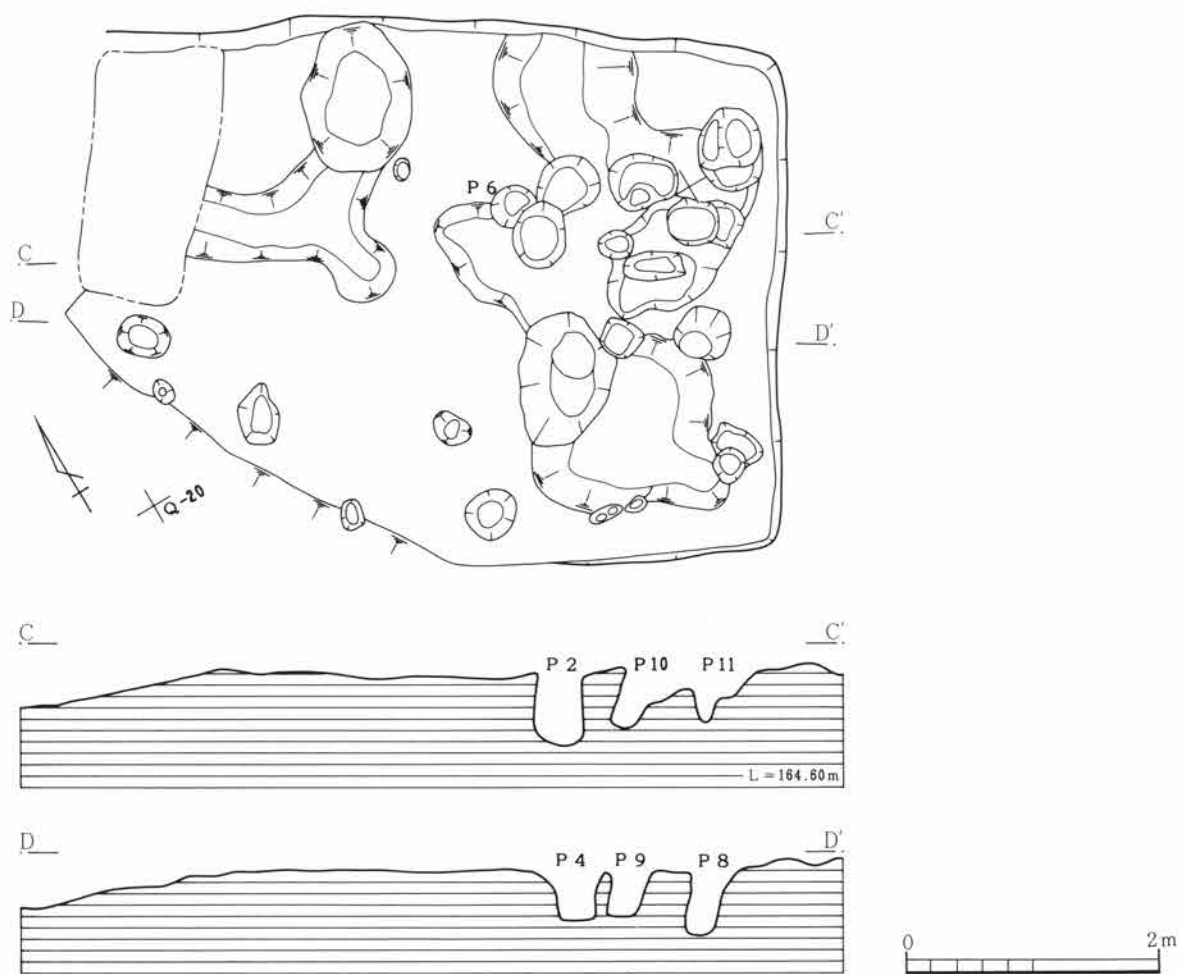
P13 径48×24cm・深さ43cm

遺物の出土状況 床面直上の遺物としては、西側寄りから出土した、甕(8)、壺の上半部(9)、小型台付甕(3)がある。(徳江)

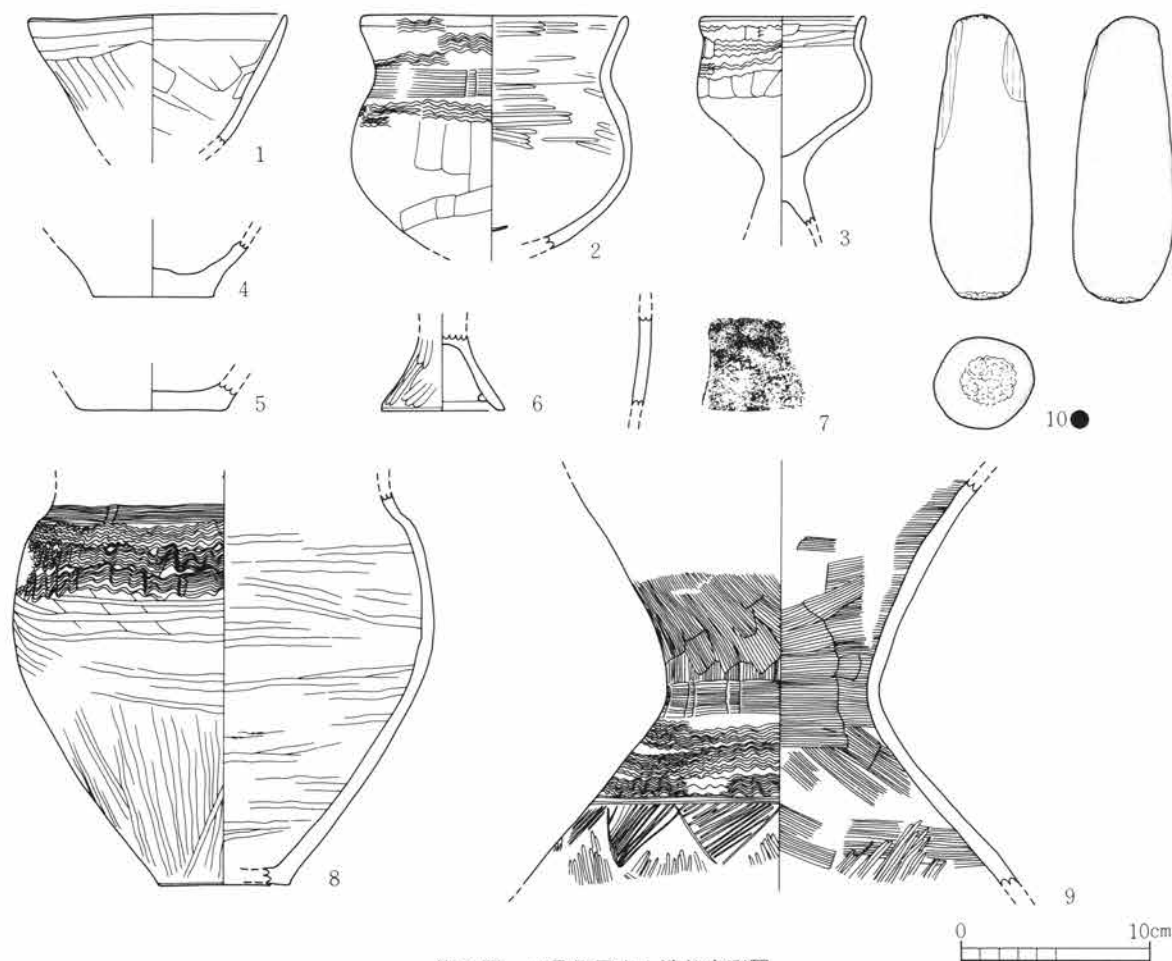


第64図 13号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



第65図 13号住居掘り方実測図



第66図 13号住居出土遺物実測図

14号住居《第67～69図、図版21・37》

位置 R-20グリッド

形状・規模 北下がりの斜面に立地したことに加えて、4号墳の周堀と重複していたために南側の半分程しか検出できなかった。検出した規模は、東西方向7.52m、南北方向の残存長は4.00mであった。炉が他の住居と同様に長軸の中心軸線上に付設されていたとすれば、本住居は東西方向に長軸を持ち、幅の狭いプランを呈していたことになる。

長軸方位 N-67°-W 残存面積 17.92㎡

周壁 壁面はローム層を掘り込んでほぼ垂直に構築されていたと考えられる。堆積土層の観察からは埋没過程で壁面が崩壊し、傾斜面が形成される様子が看取できた。残存壁高は南壁の南西隅寄りで41cmを測った。

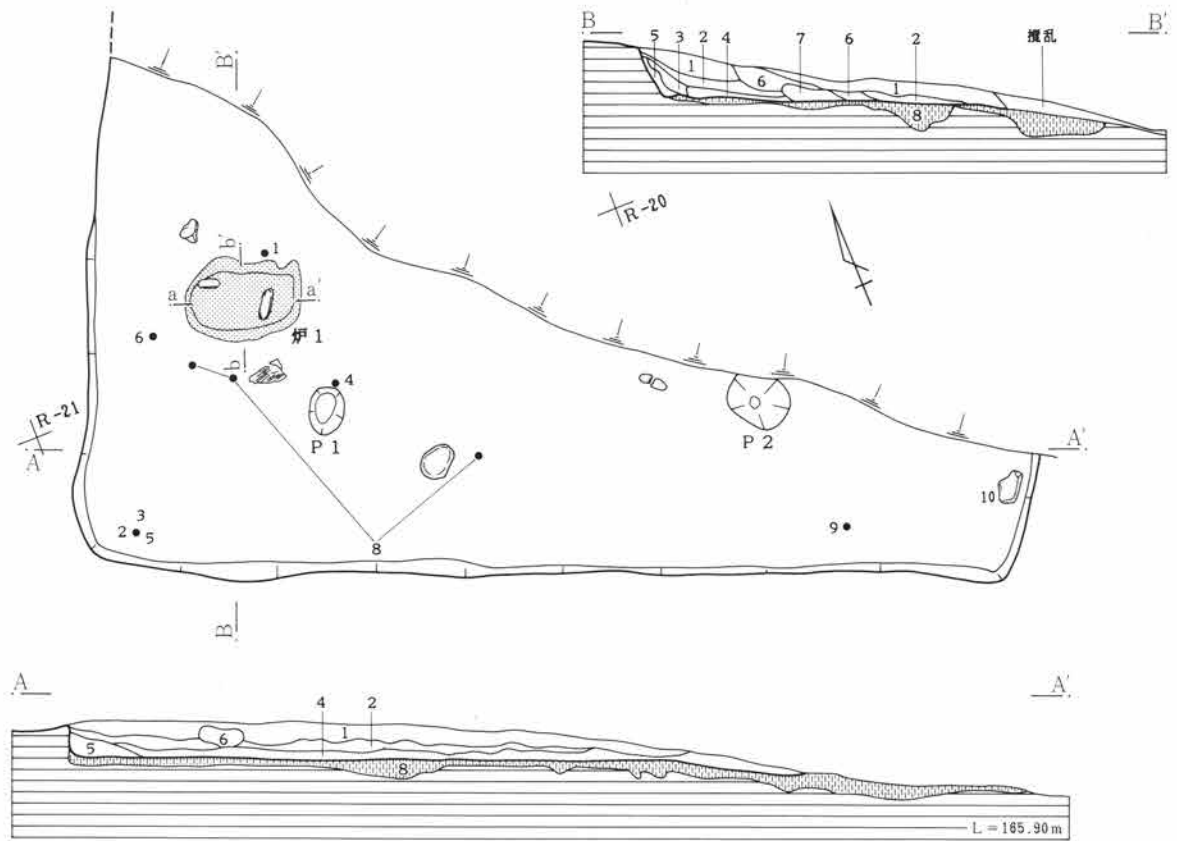
床面 全体に良く踏み固められていた。掘り方は全面に2～3cmの厚さでロームブロックの混土層が堆積しており、極端に下がり土坑状を呈する部分は無かった。

埋没土 暗褐色土が堆積していた。ただし、炉の南側からは焼土を多量に検出した。60×60cm程の範囲に径5cm程の焼土のブロックが炭化物や暗褐色の粘質土ブロックと混在状態をなしており、床面からは20cm程遊離していた。炭化物はこの他にも所々に小片が認められた。

炉 西壁寄りに位置し、住居の長軸方向に長軸を持つ長円形の掘り方を有していた。中央のやや東寄りに円礫を配し、上層には焼土がほぼ全体に広がっていた。焼土の厚さは1cm程である。

柱穴 判然としなかったが、炉の南東側1m、及び

III 検出された遺構と遺物



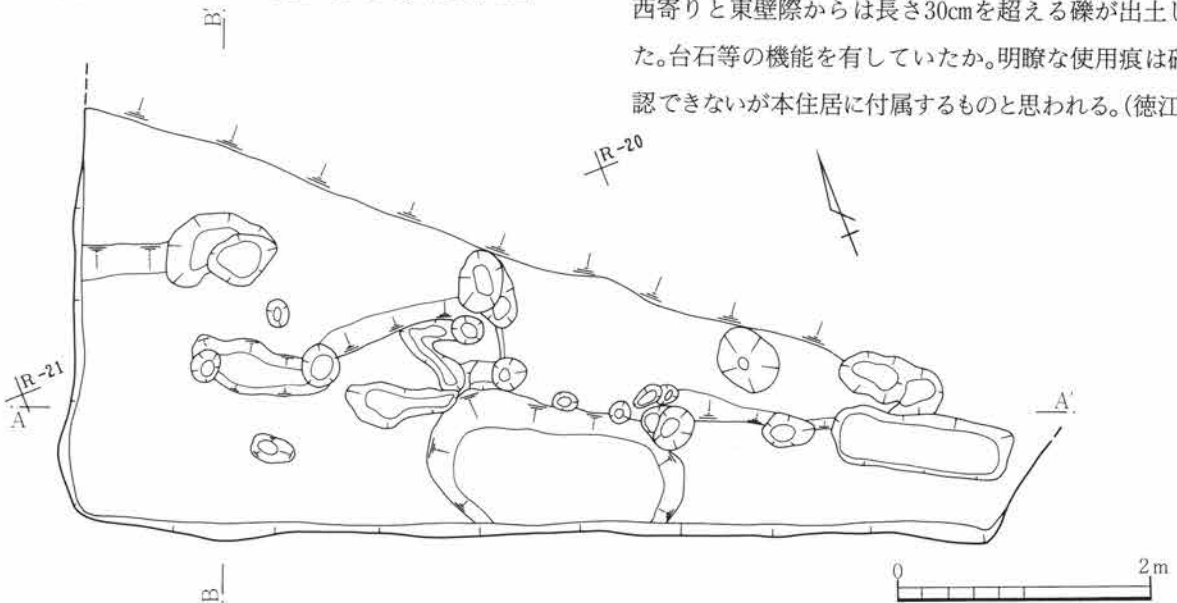
1. 暗褐色土 軽石・黒褐色土の小ブロックが少量混入する。
2. 暗褐色土 色調は黒みを増す。軽石の混入は減少、反対に黒褐色土の量が増加する。
3. 暗褐色土 2層よりも色調が暗い。
4. 暗褐色土 ロームブロックが混入、炭化物も少量含まれる。
5. 暗褐色土とロームブロックの混土层
6. 暗褐色土 多量の焼土ブロックと少量の炭化物が混入する。
7. 暗褐色土 6層に類似するが焼土粒の混入は減少する。
8. 暗褐色土 ロームブロックが多量に混入する。(掘り方埋土)

東側4.2mの所で検出したピットにその可能性がある。

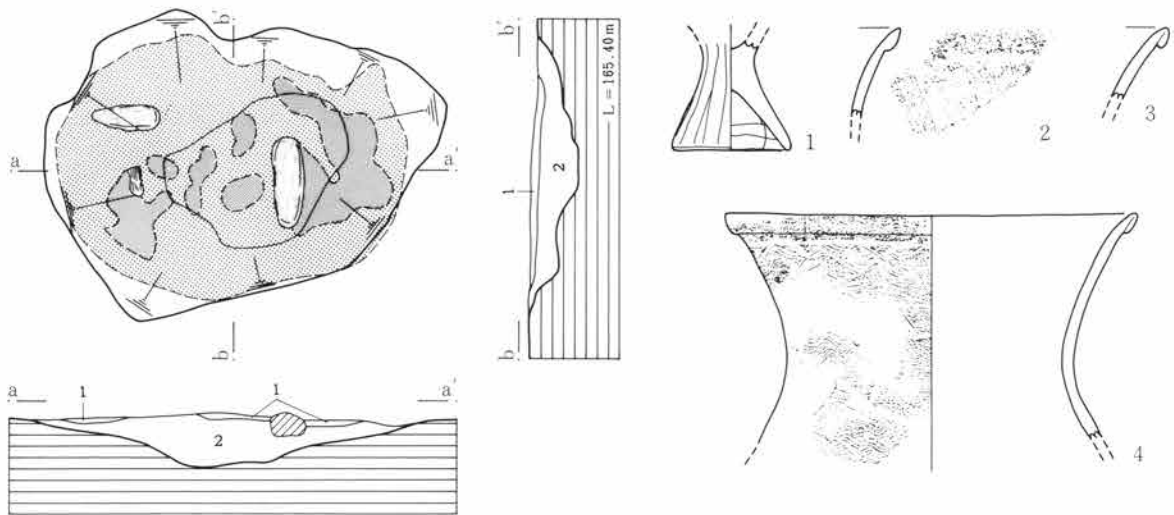
P 1 径38×28cm・深さ26cm

P 2 径38×28cm・深さ58cm

遺物の出土状況 いずれも小破片で、全体形状を把握できるものは出土していない。床面の中央からやや西寄りと東壁際からは長さ30cmを超える礫が出土した。台石等の機能を有していたか。明瞭な使用痕は確認できないが本住居に付属するものと思われる。(徳江)



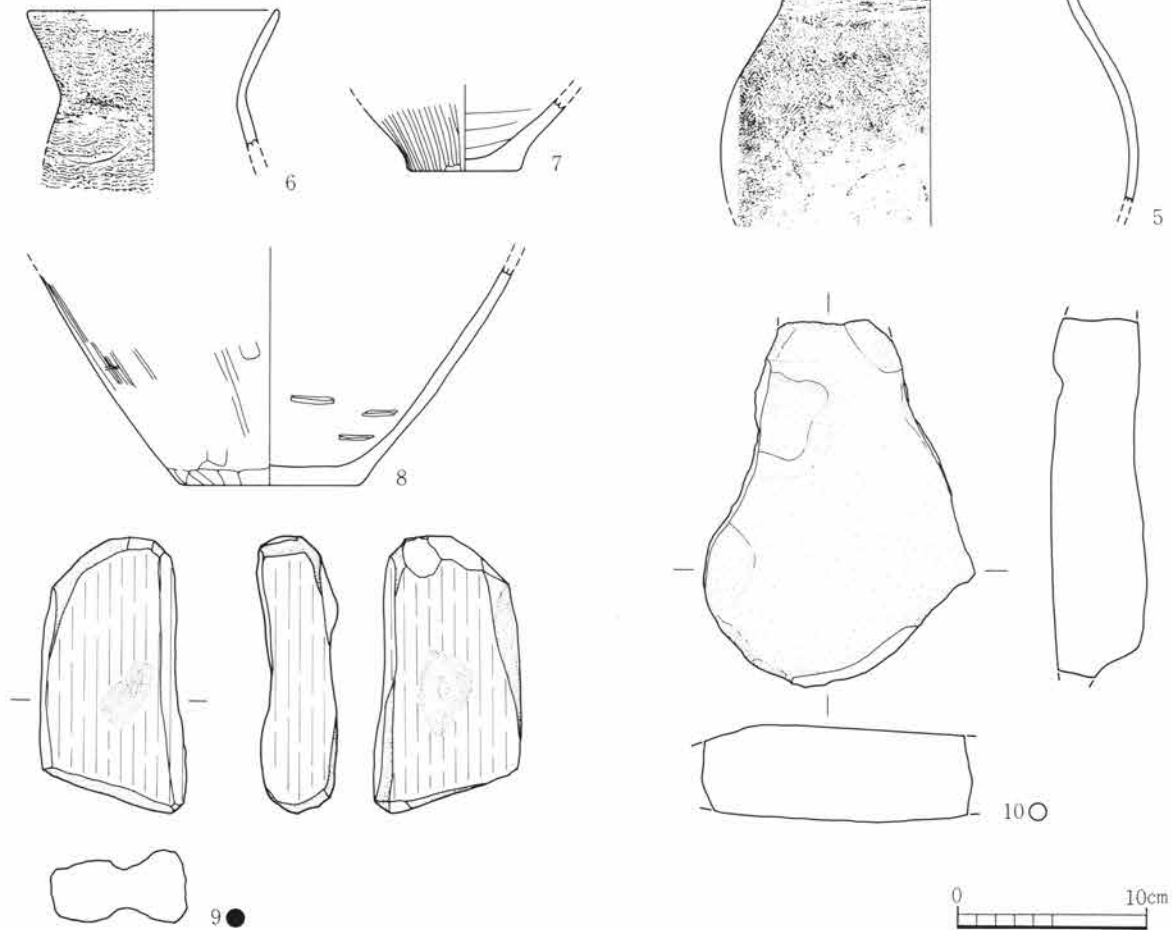
第67図 14号住居実測図



1. 焼土ブロック
2. 暗灰褐色土 焼土の小ブロック・炭化物が混入する。



第68図 14号住居炉実測図



第69図 14号住居出土遺物実測図

III 検出された遺構と遺物

15号住居《第70～72図、図版22》

位置 T-20グリッド

形状・規模 北西下がりの緩斜面に立地し、19号墳との重複もあり残存状態は不良で、南側の高位部分のみを検出した。柱穴や炉の位置から、東西に長軸を有する矩形を呈していたと考えられる。規模は東西方向6.72m、南北方向は床面の残存長が3.15m、南壁からP3の中心点までは4.27mある。炉が、他の住居例のように、短軸の中間点に付設されたとすれば、本住居の短軸は5.5m前後が推定でき、全体形状も横幅の有るものとなる。

長軸方位 N-61°-W 残存面積 19.67㎡

周壁 黒褐色の粘質土層を掘り込み、ローム層の上面に達している。残存壁高は南壁が30cm以上で、最も良好なP1の南側で40cmを測った。壁面は崩落しながら埋没したものか、扶れるよう立ち上がっており、下端の検出ラインの一つ手前の床面に直線的なラインが認められた。

床面 多少の起伏があるが全体的には平坦な面が形成されていた。掘り方は、柱穴を結ぶラインの外側と壁際が、11号住居と同様に布掘り状に掘り下げていた可能性もあろうか。深さは3～7cm前後と浅いが、所々に径20～35cmの小ピットが見られた。埋土は、黒褐色土とロームのブロックを混ぜたもので全体に良く踏み固められていた。

埋没土 暗褐色土が堆積していた。

炉 遺構検出作業の影響で形状に歪みが生じたかったが、掘り方から原形はほぼ円形であったと推測される。検出時の規模は径98×83cmであった。使用面の東側では焼土ブロックが、西側では炭化物の薄い層が認められた。

柱穴 P1～3が主柱穴と考えられるが、これに対応する北西部分の柱穴は精査を重ねたが検出されなかった。P4は掘り方面の精査時に確認したものであるが、深さが55cmと他の掘り方の状況と異なる。掘り込みは東側に小ピットを伴い、東壁面方向にやや傾斜している。周囲も精査したが、単独で存在したようである。

P1 径62×57cm・深さ70cm

P2 径90×74cm・深さ58cm

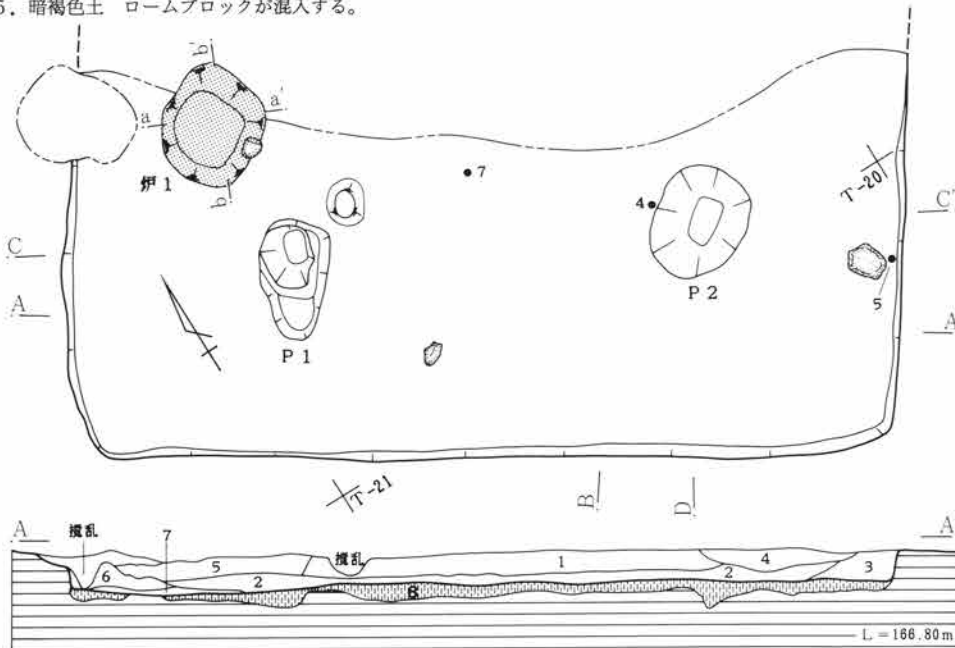
P3 径42×38cm・深さ19cm

P4 径52×38cm・深さ55cm

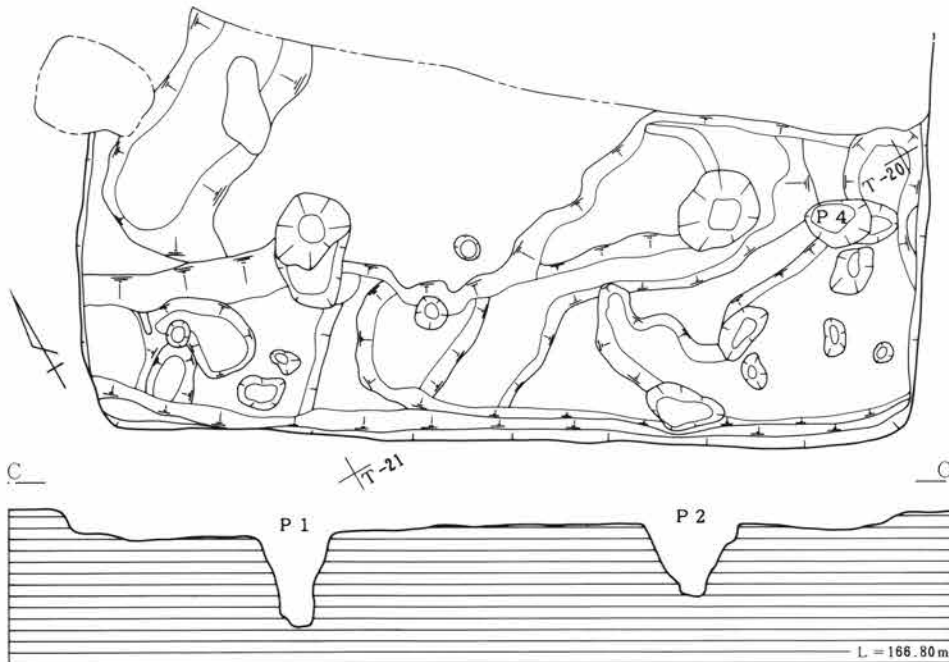
遺物の出土状況 土器は細片のみで、いずれも埋没土中からの出土である。東壁際の床面からは長さ31cmの礫が出土した。14号住居や16号住居にも同様なものが見られた。

他の遺構との関連 1号土坑と重複する。19号墳は本住居を削平して築造されている。(徳江)

1. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・軽石が少量ずつ混入する。
2. 暗褐色土 1層よりも黒みが強く、粗粒である。
3. 暗褐色土 ロームブロックが多く、茶みをおびている。炭化物が散見する。
4. 暗褐色土 ローム粒が少量混入する。灰色みをおびる。
5. 暗褐色土 ロームブロックが混入する。



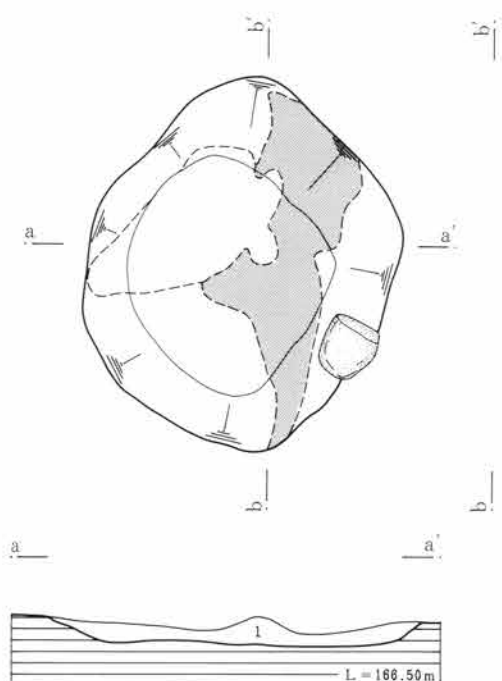
1. 暗褐色土 軽石・ローム粒がまばらに混入、炭化物はごく少量含まれる。
2. 暗褐色土 1層と比較して軽石・ローム粒の混入は減少する。
3. 暗褐色土 ローム粒の混入が増加し、色調が茶みをおびる。
4. 暗褐色土 ローム粒・炭化物が多量に混入する。
5. 暗褐色土 ロームブロックが多量に混入する。
6. 暗褐色土 ロームブロック・炭化物が少量ずつ混入する。
7. 暗褐色土 黒褐色土が多量に混入する。
8. ロームブロック・暗褐色土の小ブロック・黒褐色土の混土層（掘り方埋土）



第70図 15号住居実測図



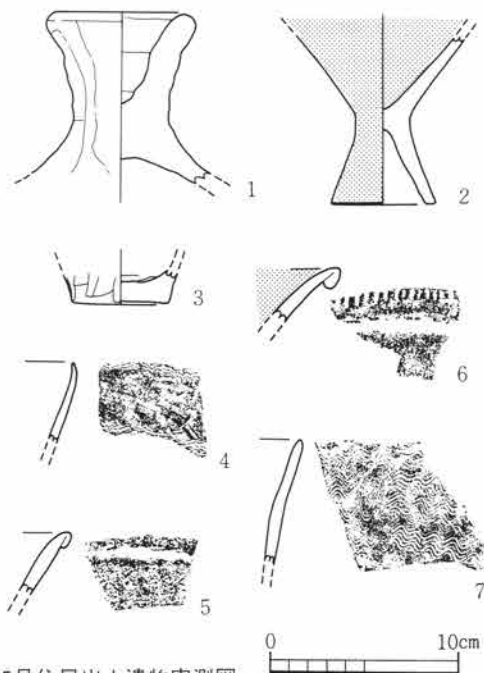
III 検出された遺構と遺物



1. 暗褐色土 焼土粒・炭化物が多量に混入する。



第71図 15号住居炉実測図



第72図 15号住居出土遺物実測図

16号住居《第73・74図、図版21・38》

位置 S-21グリッド

形状・規模 南北に長軸を有する矩形で、南壁の走向がやや歪んでいた。西壁の南西隅寄りには攪乱を受けていた。北側の立ち上がりも、削平を受けたためか、判然としなかった。規模は南北方向3.30m、東西方向2.70mを測り、長軸と短軸の比率は1.22：1で、幅の広い形状であった。

長軸方位 N-19°-E 面積 7.80㎡

周壁 黒褐色の粘質土層を掘り込んでおり、一部はローム層に達した部分もあった。

床面 北側に向かって緩やかに傾斜している。ローム層の最上面に形成されており、南半部は踏み固められていたが、特に、南東隅が顕著であった。北半部は貼床で、浅い掘り方を有していた。

埋没土 暗褐色土が堆積していた。ローム粒の混入の度合や色調の相違で細分できた。炉の南側には50cm四方の範囲に炭化物が散在し、その上層には灰白色の粘土ブロックが認められた。

炉 北西隅寄りに位置し、南北方向に長軸を持つ長円形を呈する。規模は77×60cmであった。使用面には、甕(4)の口縁部と胴部の破片各1片が弧状に設置され、弧内には焼土が厚く堆積していた。また、炉の南東部分にはロームブロックの高まりが帯状に見られた。

柱穴 東壁際に接するピットが3本検出された。P2からは土器片が出土しており、貯蔵穴の可能性もある。

P1 径27×24cm・深さ14cm

P2 径46×35cm・深さ28cm

P3 径37×36cm・深さ12cm

遺物の出土状況 P1の北側、壁面に接して大型の壺(5)が出土した。また、P2とP3の間からは長さ30cmの礫(1)が出土している。

備考 P2の西側には90×40cmの範囲で汚れた灰白色粘土の高まりが認められた。高さは10cm程で、最下層には炭化物が入り込み、これらが床面の上に置かれたことが確認できる。塊下の床面は緩やかに凹

んでいた。

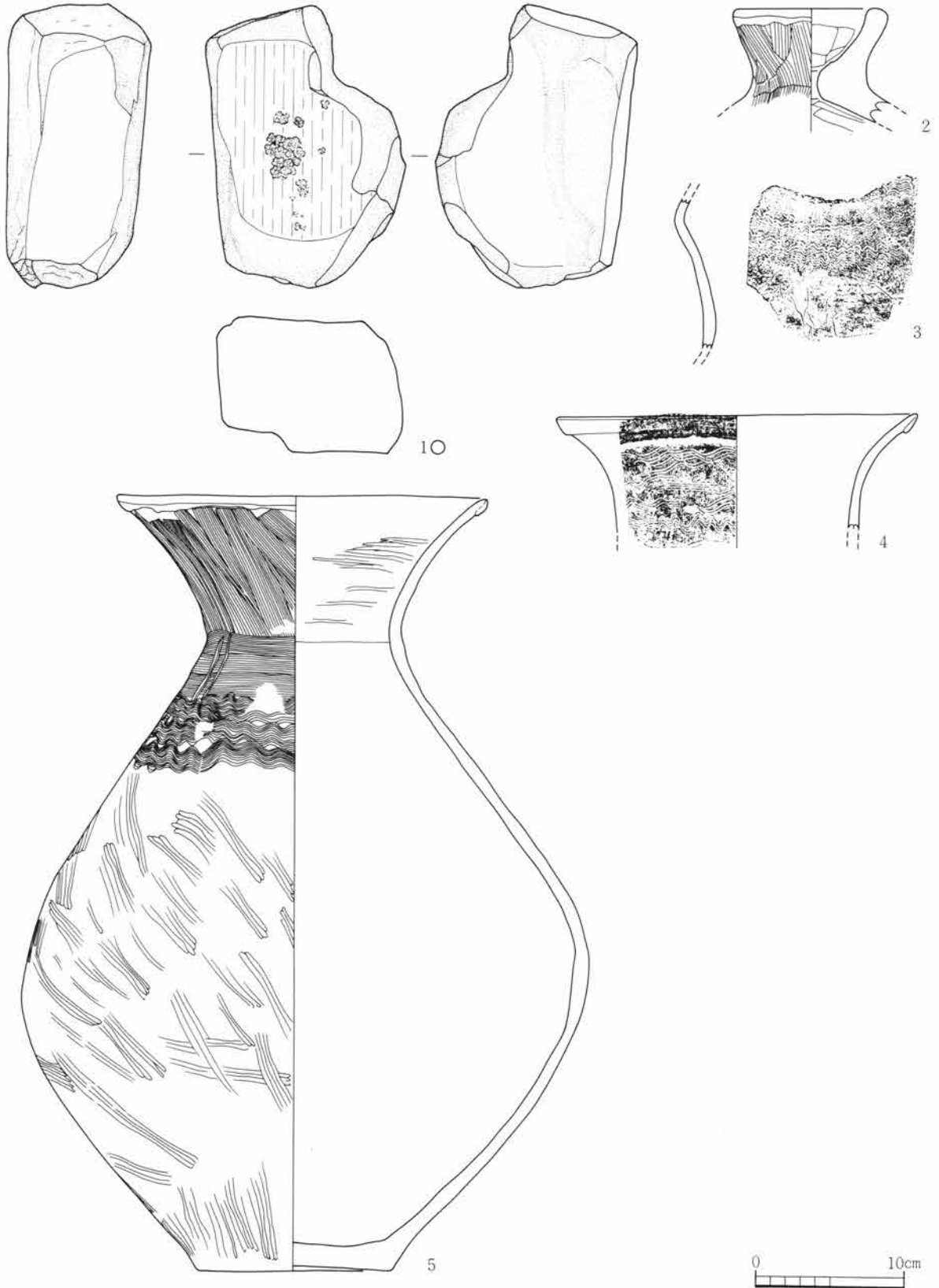
他の遺構との関連 19号墳が築造されている。

(徳江)



第73図 16号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



第74図 16号住居出土遺物実測図

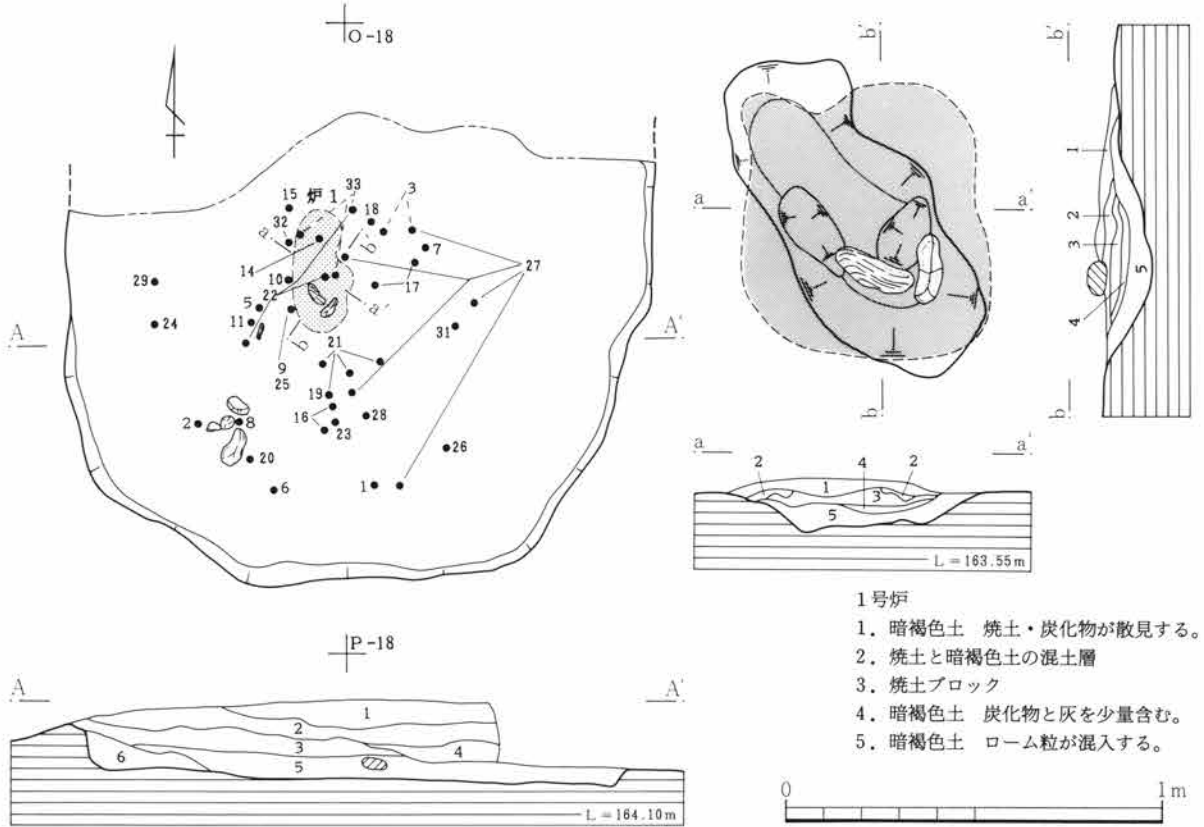
18号住居《第75～78図、図版22・39》

位置 O-18グリッド 4号墳の北側墳丘端、北西下がりの緩斜面に立地する。

形状・規模 埋没土の識別が困難で、南側を中心と

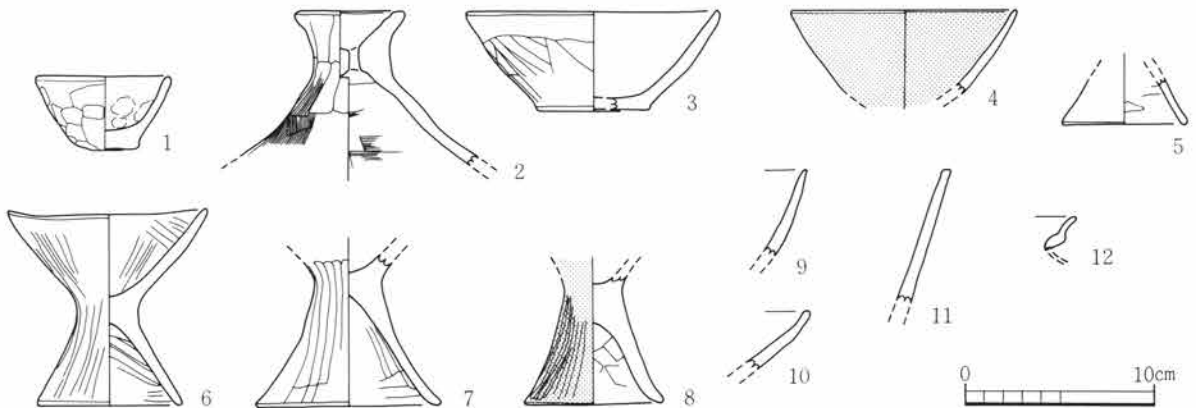
した一部分のみの検出にとどまった。規模は、東西方向が4.66mを測り、南北方向の残存長は3.70mで、北側は削平されていた。

周壁 黒褐色粘質土を掘り込んでおり、これを手掛



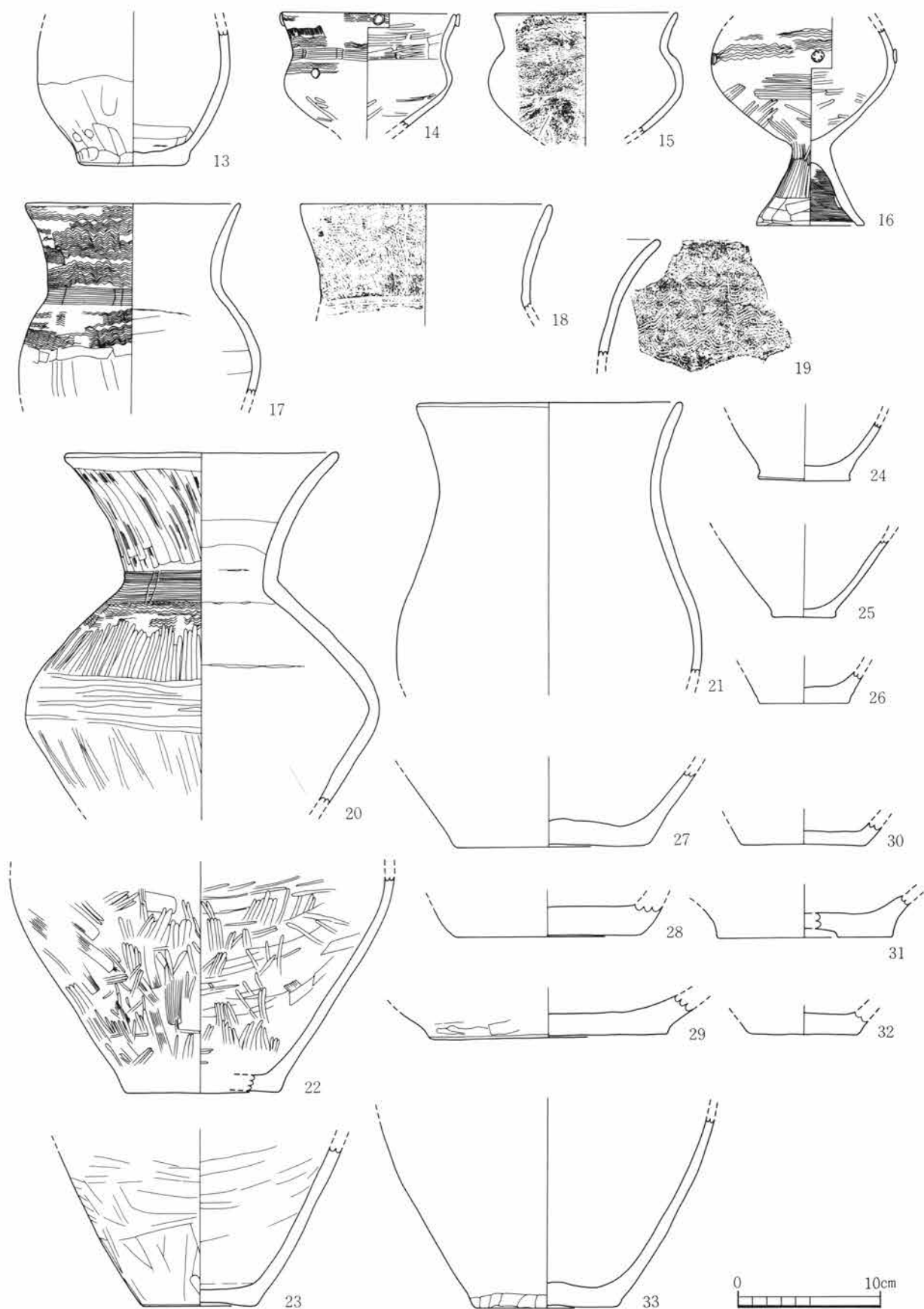
1. 暗茶褐色土 暗褐色土と茶褐色土ブロックが混土状態をなす。軽石・ローム粒が少量混入する。
2. 暗褐色土 黒みをおびる。軽石の混入は1層よりも顕著である。炭化物も少量混入する。
3. 暗褐色土 茶みをおびる。焼土粒・炭化物の混入は少量である。
4. 暗茶褐色土 炭化物・軽石が微量混入する。
5. 暗茶褐色土 軽石の混入はほとんど無くなる。
6. 暗茶褐色土 4・5層より茶みが増し、混入物も無く、締まる。

第75図 18号住居実測図



第76図 18号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第77図 18号住居出土遺物実測図(2)

かりに壁面の検出に努めたが、南壁の西側部分を除いてはこの土層の残存が薄く、その上層に堆積する暗茶褐色土と埋没土の識別が困難であった。残存壁高は、南壁の西側部分で38~44cmと良好であった他は、いずれも10cm前後であった。

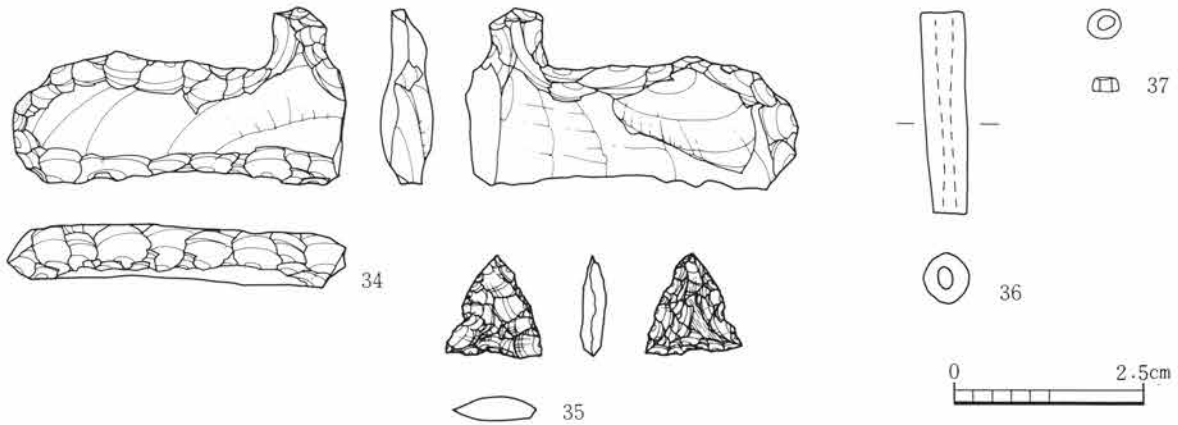
床面 炉は黒褐色土層を掘り込んでおり、床面は壁面に向かって徐々に高くなりながらも同一土層中に形成されていた。柱穴及び貯蔵穴は検出できなかった。

埋没土 暗褐色土と暗茶褐色土が堆積していた。土器の混入は中層の3・4の両層に多かった。

炉 東西方向のほぼ中間に位置するか。掘り方は、南北方向96cm・東西方向44cmの長円形であるが、最

終使用面は70×63cmの円形の範囲に焼土・炭化物が散らばっていた。また、南側寄りには長さ20cm程の円礫2個が鉤の手状に置かれ、その周辺に掘り方の形状と重なるように焼土ブロックが散布していた。

遺物の出土状況 多量の土器が大小の礫を混じえて出土している。大多数が床面から10~30cm程遊離しており、壁面から50cm程間隔を空けている状態は、これらの遺物が本住居が埋没する過程で流入したことを表していると考えられる。原形を復元できたものは少量であった。高坏の出土点数が多いことが特徴的であった。珪質頁岩製の管玉(36)、ガラス小玉(37)各1個体も出土している。(徳江)



第78図 18号住居出土遺物実測図(3)

19号住居《第79~83図、図版23・39・40》

位置 P-25グリッド

形状・規模 東西方向に長軸を有する長方形を呈すると考えられるが、北下がりの斜面に構築されていたため、北壁を確認することはできなかった。規模は、東西方向が6.57mを測り、南北方向の残存長は3.64mである。

長軸方位 N-70°-W 残存面積 24.5m²

周壁 ローム層を掘り込んで構築されていたが、南東隅では、粘性を帯びた褐色土を掘り込んでいた。

床面 ローム層中に構築されており、全体的に良く踏み固められていた。南東隅付近では、地山がYPを含む粘性を帯びた黄褐色土となっていたため、幾

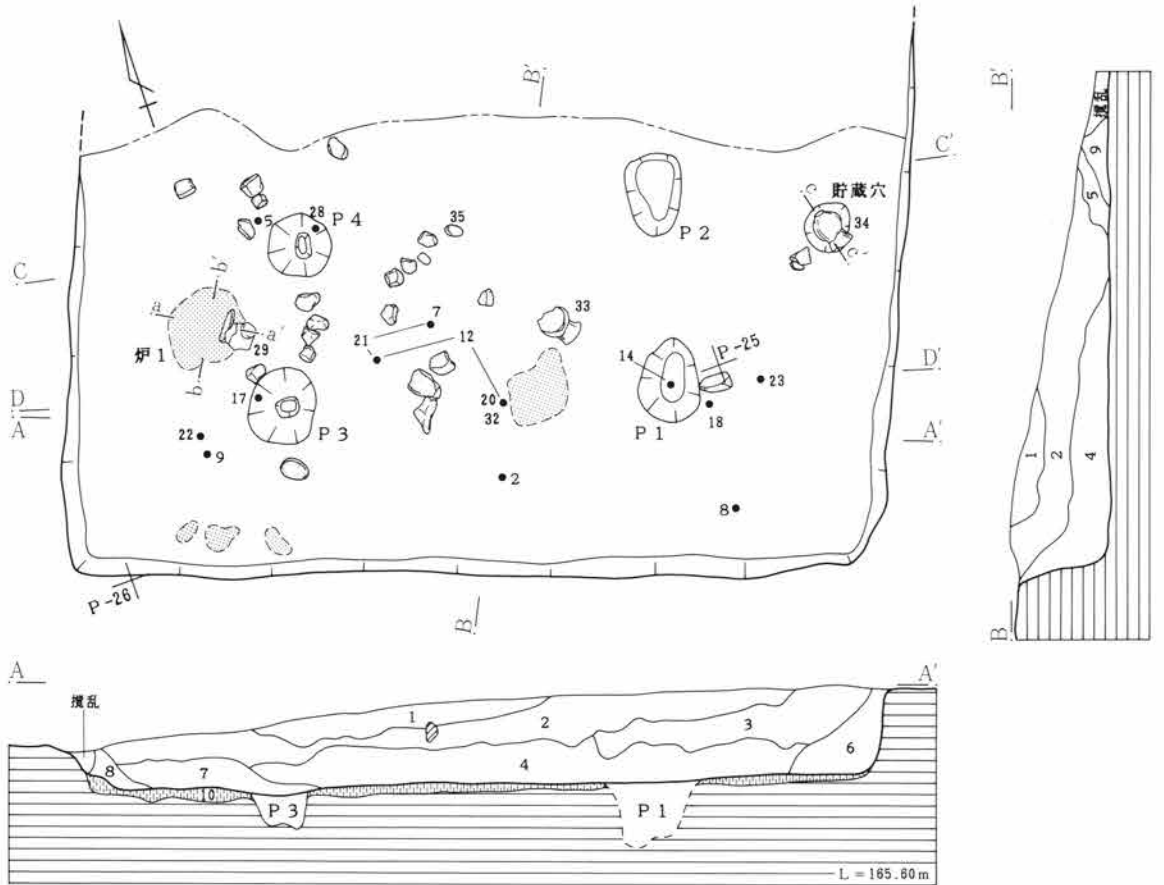
分暗く見えた。南西壁付近では、床面直上から粒子の大きなロームが焼けた土がブロック状に検出された。掘り方は住居東半部で確認されたが、地山との識別が困難な部分があった。

埋没土 褐色土を主体としていた。全体的に量の寡多はあるが、ローム粒・ロームブロック・炭化物の混入が見られた。

炉 西壁中央から1m程東寄りの所に位置する。床面から約4cm下位で堅固な使用面となる。規模は径58×63cmで、円形を呈し、13cm程の深さまで皿状に掘り込んでいた。

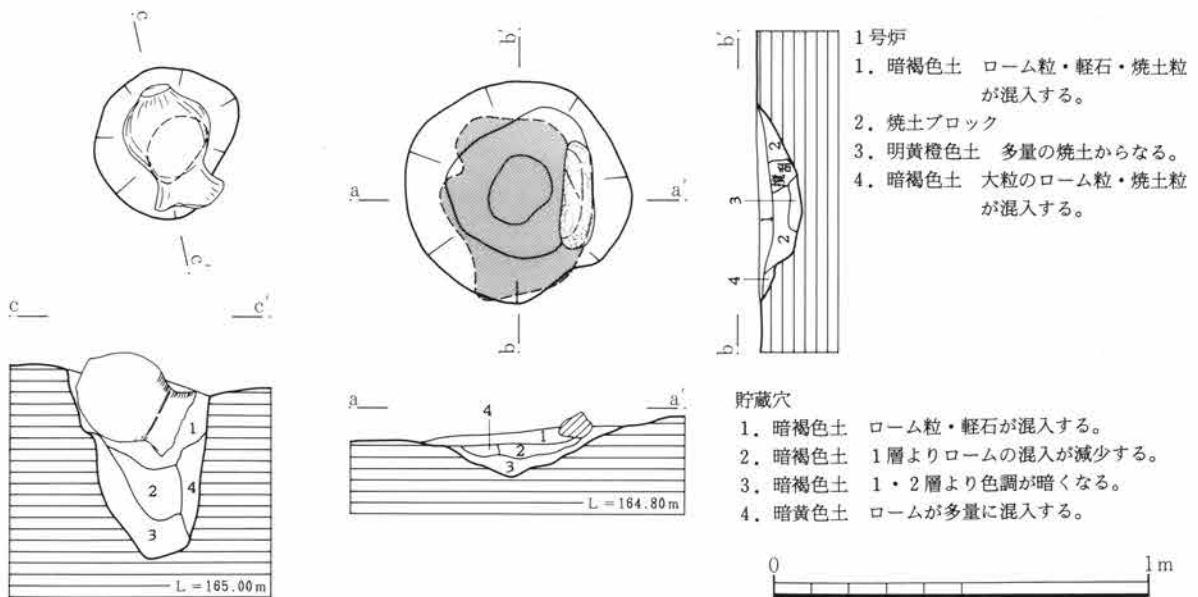
貯蔵穴 北東部の壁際に位置していた。規模は径40×41cm・深さ43cmで、円形を呈する。内部にはロー

III 検出された遺構と遺物

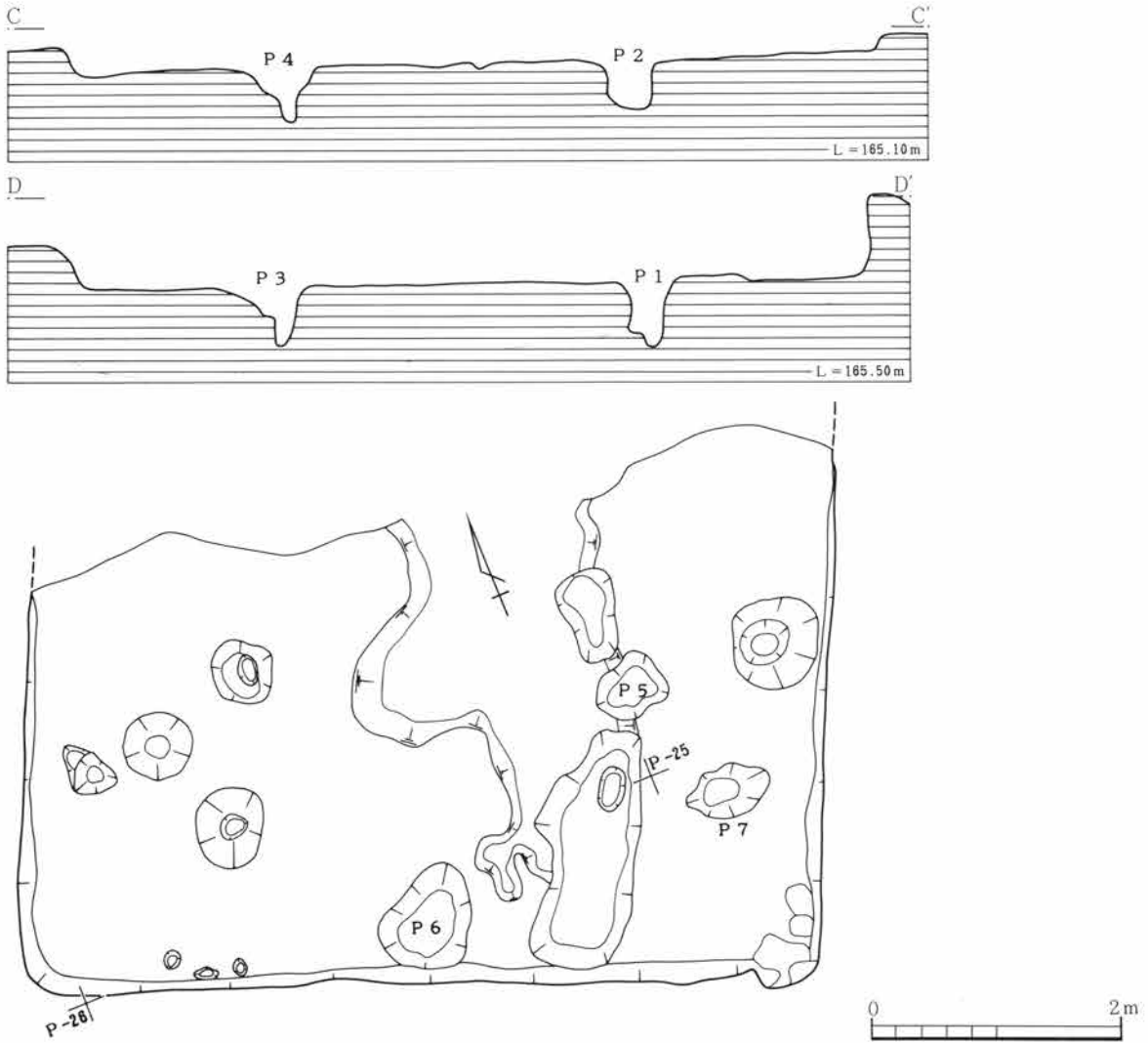


- | | |
|---------------------------------|---|
| 1. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックの混入が顕著である。 | 7. 暗褐色土 6層より色調がやや明るくなり、軽石が混入する。 |
| 2. 暗褐色土 軽石・炭化物の混入が顕著である。 | 8. 暗黄褐色土 細粒の土粒から構成され、ローム粒が混入する。 |
| 3. 暗黄褐色土 1層より褐色みを増す。 | 9. 暗褐色土 軽石・ローム粒が混入する。締まりが無い。 |
| 4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックが混入する。 | 10. 暗黄色土 軽石・ローム粒・暗褐色土のブロックが混入する。
(掘り方埋土) |
| 5. 暗褐色土 4層よりも色調が明るく、軽石の混入が目立つ。 | |
| 6. 暗褐色土 ロームブロック・炭化物が混入する。 | |

第79図 19号住居実測図



第80図 19号住居貯蔵穴・炉実測図



第81図 19号住居断面・掘り方実測図

ム粒・軽石を含む暗褐色土が堆積していた。上層から、口縁を下にした完形の甕(34)が出土した。

柱穴 P1～P4の支柱穴を検出した。規模・掘削深度は4基ともほぼ同様である。P5～P7は床面下からの検出である。

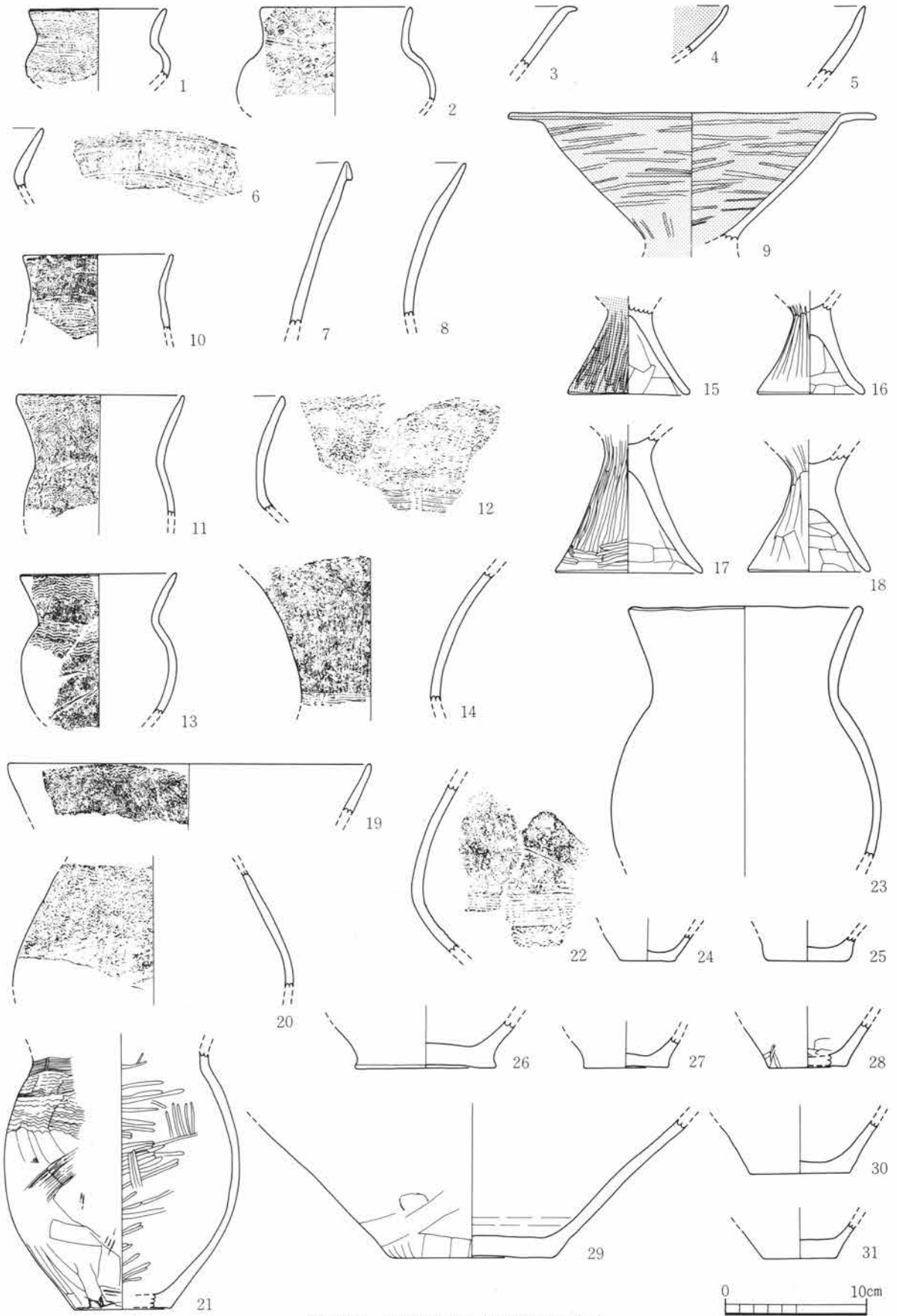
- P1 径67×48cm・深さ35cm
- P2 径66×43cm・深さ50cm
- P3 径62×54cm・深さ38cm
- P4 径53×50.5cm・深さ46cm
- P5 径58×44cm・深さ26cm
- P6 径87×74cm・深さ54cm
- P7 径72×42cm・深さ38cm

遺物の出土状況 全体的に床面直上からの出土は少なく、5～20cm程度の間層を挟んで出土している。

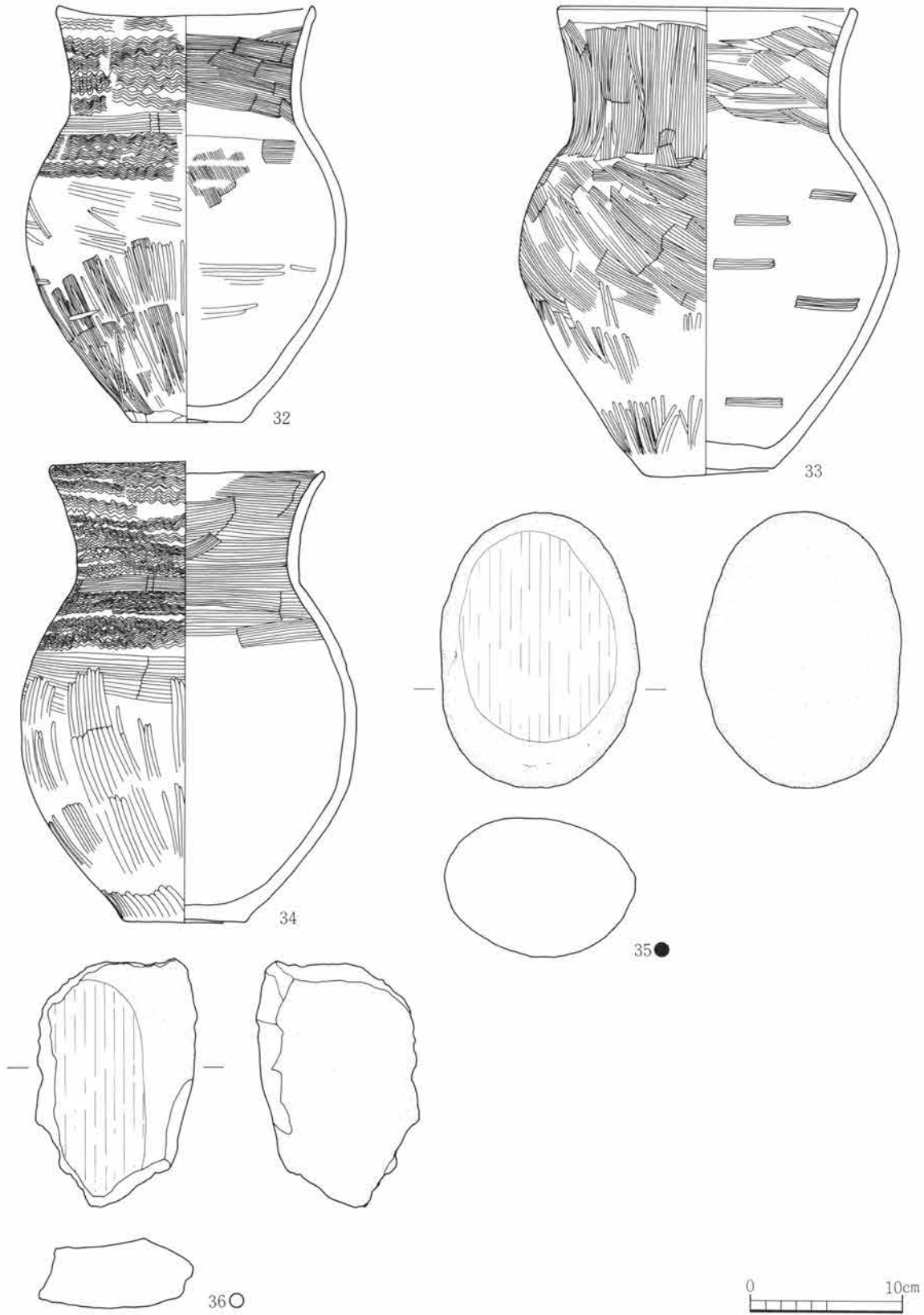
前述の貯蔵穴内の甕(34)の他、床面からの出土は高坏脚部(18)のみである。甕(32)は10cm、(21)は6cm、(33)は埋没土中からの出土であり、高坏脚部(9)も床面から8cmの間層を挟んでの出土である。また、掘り方から検出されたP5の中では、甕または壺の胴部が潰れ、上に石が置かれた状態が確認されている。

備考 P1とP3の間から出土している甕(32)の下から検出された焼土は、住居南西隅で検出された焼土と同様に、粒子の粗いロームの表面が焼土化したものであった。(磯貝)

III 検出された遺構と遺物



第82図 19号住居出土遺物実測図(1)



第83図 19号住居出土遺物実測図(2)

III 検出された遺構と遺物

20号住居《第84・85図、図版23・40》

位置 R-25グリッド

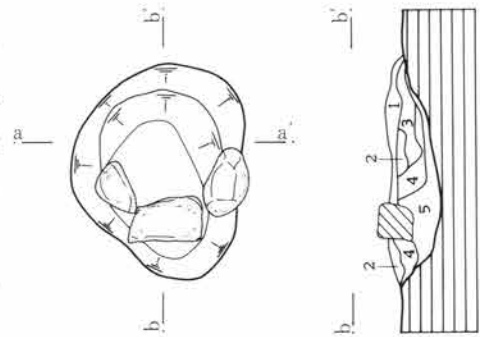
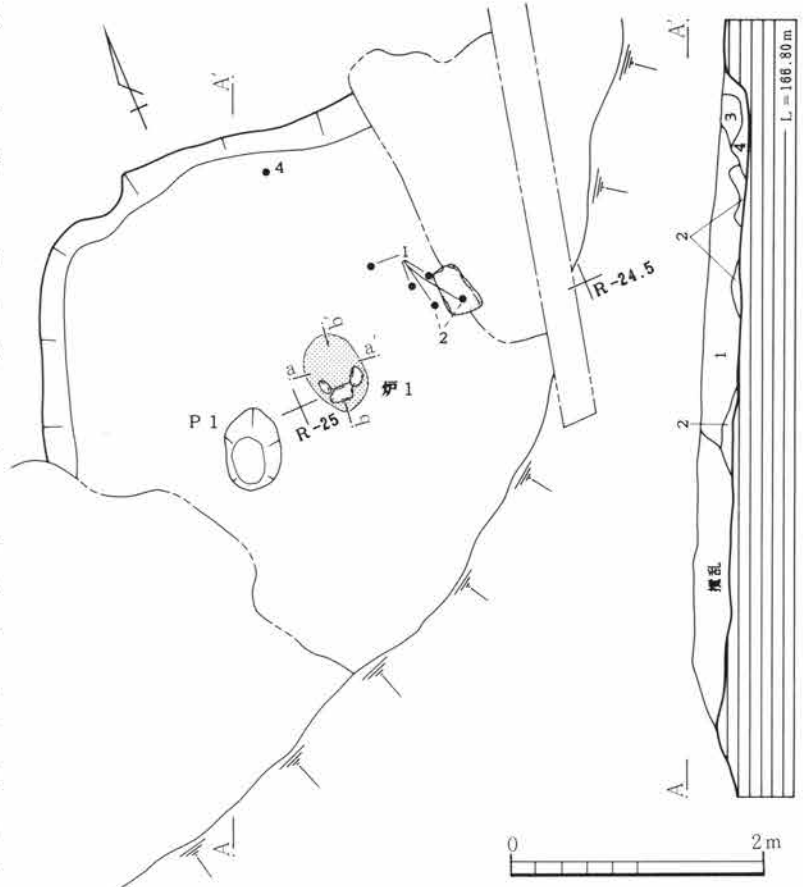
形状・規模 南北方向に長軸を有する矩形を呈すると思われるが、18号墳の周堀と耕作による攪乱が多く、残存状態は非常に悪かった。住居の北西隅の一部を検出したのみであった。東西方向4.40m・南北方向4.60m以上の規模を有する。

周壁 ローム層を掘り込んで構築していたが、傾斜地の頂部に立地し、18号墳と重複することにより明確なラインを検出することができず、やや斜めに立ち上がりの見られた所を壁と認めた。残存深度も26cmと浅い。

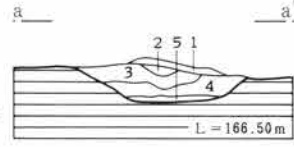
床面 ローム層中に床面を構築していた。攪乱や住居構築以前の倒木痕があり、床面の縮まりを欠いていた。また、焼土の散布も炉の付近以外では認められなかった。

埋没土 ローム粒・軽石(YP?)を含む暗褐色土で埋没していた。攪乱の多い割には、埋没土の縮まりは良く、18号墳の墳丘下にあったためかと思われる。周壁・床面近くでは、ロームブロックの混入が認められた。

炉 残存部分のほぼ中央部、北壁より南へ1.8cmの所に設置されていた。規模は56.0×45.0cmで、楕円形を呈し、北側が開くコ字状の石組が付設されていた。床面から、1～3cmの深さで使用面となり、約5cm



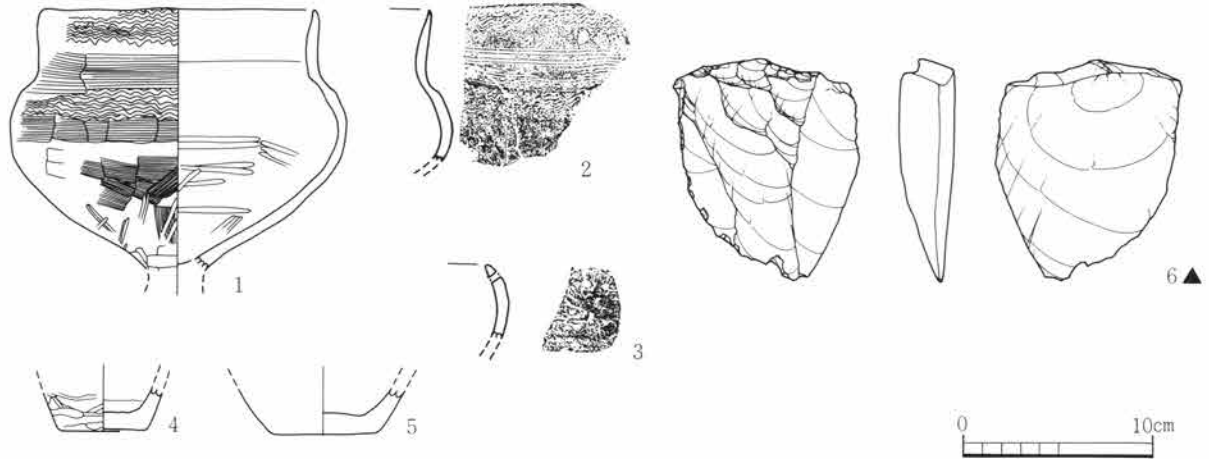
1. 暗褐色土 ローム粒・軽石が多量に混入、固く締まる。
2. 暗黄褐色土 1層にロームブロックが加わる。
3. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックが多量に混入する。
4. 暗黄褐色土 3層よりもロームブロックが大型になる。



- 1号炉
1. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒が混入する。
 2. 焼土ブロック 焼き締まっている。
 3. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒・軽石が混入、炭化物も少量認められる。
 4. 暗黄褐色土 ローム粒・軽石が多量に混入する。
 5. 暗黄褐色土 4層よりも黄みが強い。



第84図 20号住居実測図



第85図 20号住居出土遺物実測図

の厚さで固く焼土化していた。

柱穴 炉の西側に検出したピットが柱穴に相当すると思われる。相対する位置にあるべき柱穴は、倒木痕により検出することはできず、南側にあるべき柱穴も検出できなかった。

P 1 径65.0×44.5cm・深さ31.0cm

遺物の出土状況 住居の東側半分に、遺物の集中する傾向が認められた。床面から4.8cm上位で小型台付甕(1)が、床面直上からは甕の底部(5)が出土した。

他の遺構との関係 18号墳と重複しており、住居よりも後出するものである。炉の東側には倒木痕があり、底面及び上層にY Pが含まれ、中から縄文土器片が出土している。(磁具)

22号住居《第86～88図、図版24・41・43》

位置 V-23グリッド

形状・規模 南北方向に長軸を持つ矩形であるが、北壁部分は地割れの影響で土層に乱れが生じ、検出面が判然としなかった。規模は、南北方向5.88m、東西方向4.03mを測り、両軸の比率は1.46：1である。四隅とも丸みを帯びているが、南西隅は他に比較してより顕著である。6号墳周堀の掘削により、東西両壁の中央から北壁寄りにかけての2m程を欠失する。

長軸方位 N-24°-W 面積 24.05m²

周壁 茶褐色の粘質土とその下位のローム層を掘り込んで形成されていた。傾斜地上位の南壁での残存

高は30cm以上で、中央部分では51cmを測った。その他の壁では10～30cm前後であった。

床面 遺構内に東西方向の亀裂が2本走り、弱い段差ができていた。ローム層中に構築され、全体に良く踏み固められていた。面は自然地形同様、北壁に向かって著しく傾斜し、南壁際と北壁際との比高差が36cm有った。性格不明のピットが穿ってある他は基本的に掘り方は無かった。

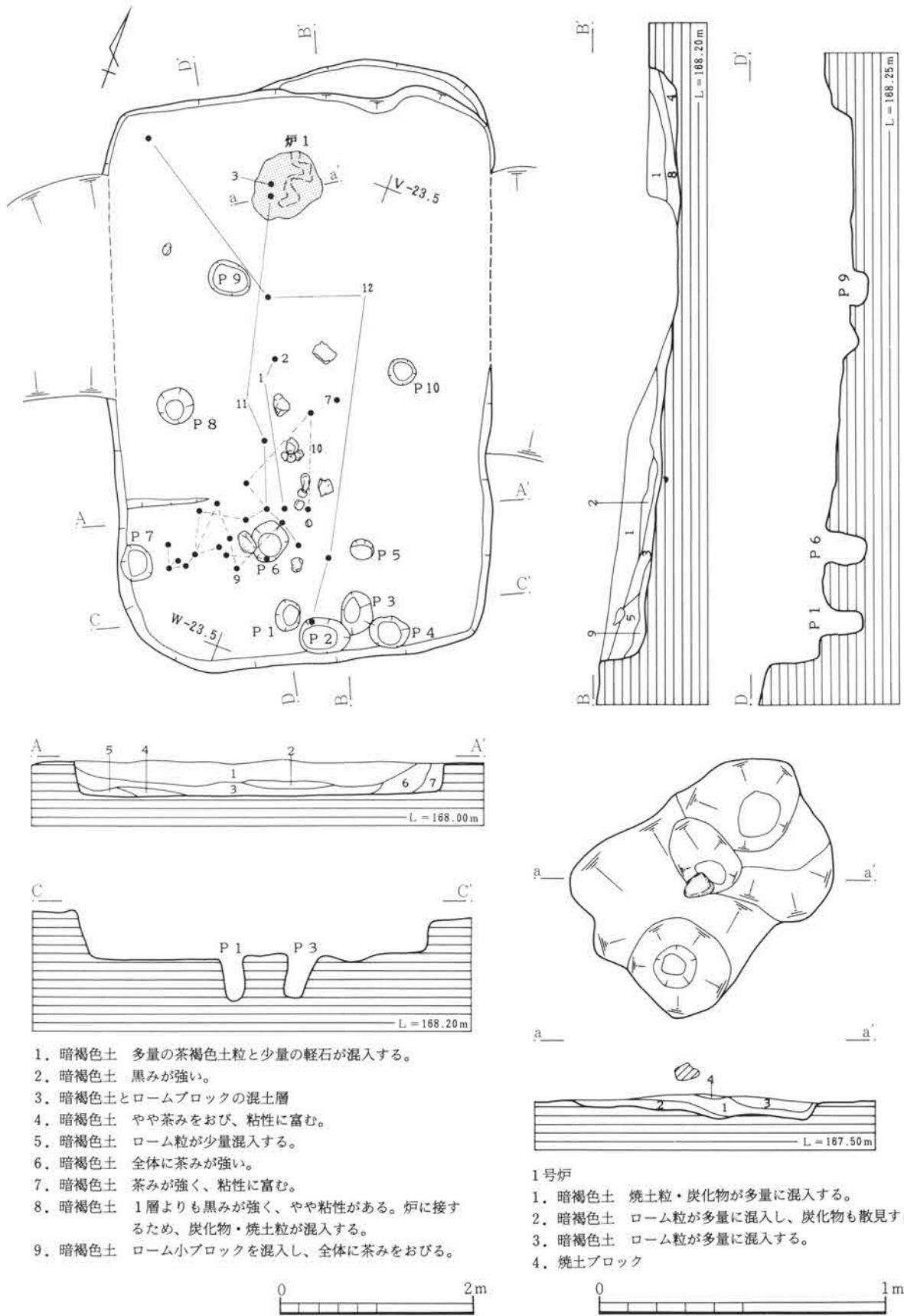
埋没土 暗褐色土が堆積していた。壁際の下層にはロームブロックが混入していた。

炉 中央、北壁寄りに位置する。6号墳調査の影響で形状に乱れが生じている。上層には焼土ブロックが散在した。掘り方は90×58cmの楕円形の平面で、皿状の掘り込みを呈するが、部分的にピット状に深くなる部分が有った。

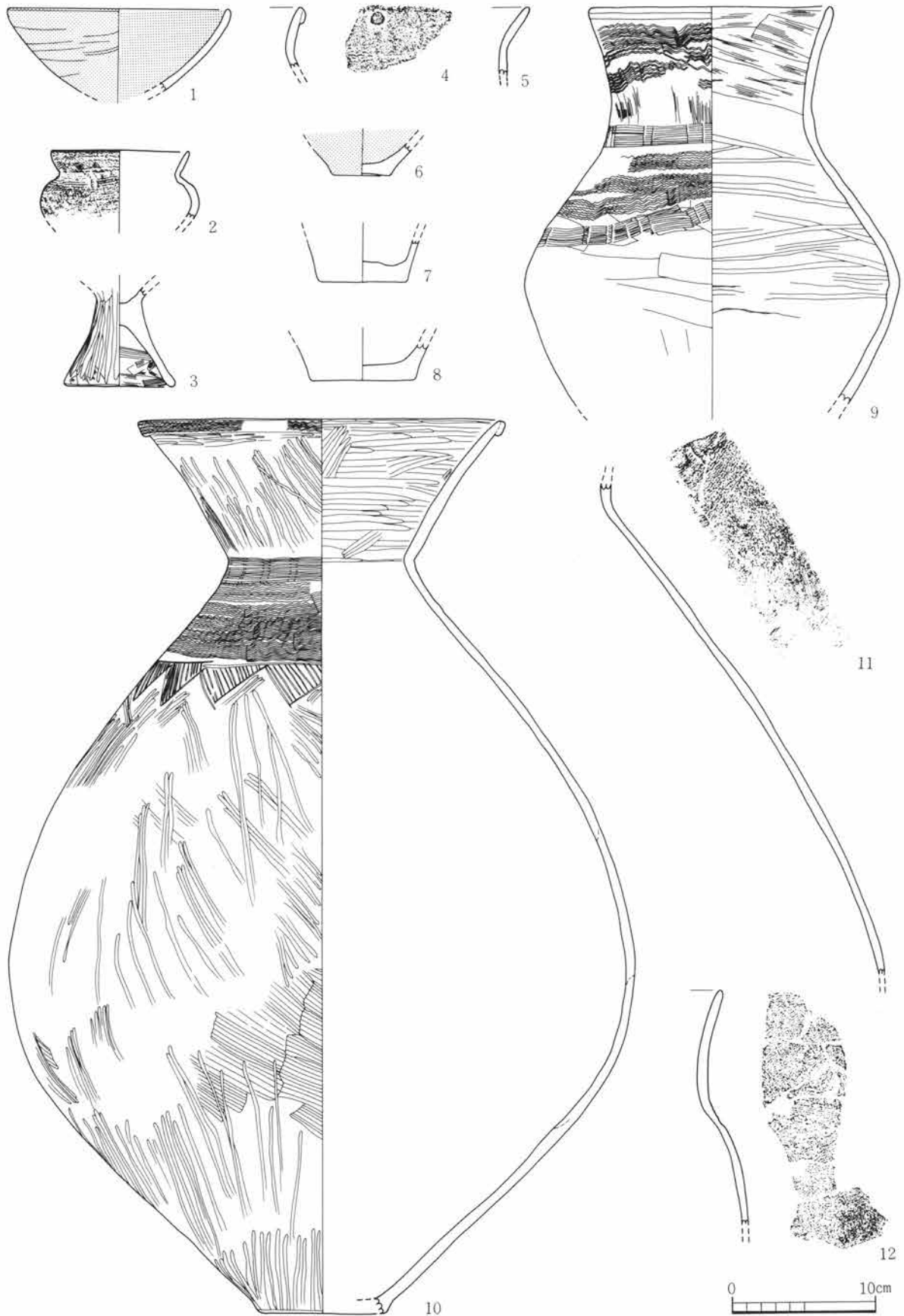
柱穴 合計10本のピットを検出したが、位置や規模等を勘案すると、支柱穴と確定できるものは無かった。中央南壁寄りには6本のピットが有り、P 1・3・6は深さ40cmを超えるものであった。

遺物の出土状況 床面直上からの土器の出土は少ない。南壁寄りでは、床面から10～30cm程遊離して多数の土器片が出土したが、この中で壺(9・10)の形状が復元できた。また、打製石斧(13)は本住居に伴うものと考えられる。(徳江)

III 検出された遺構と遺物

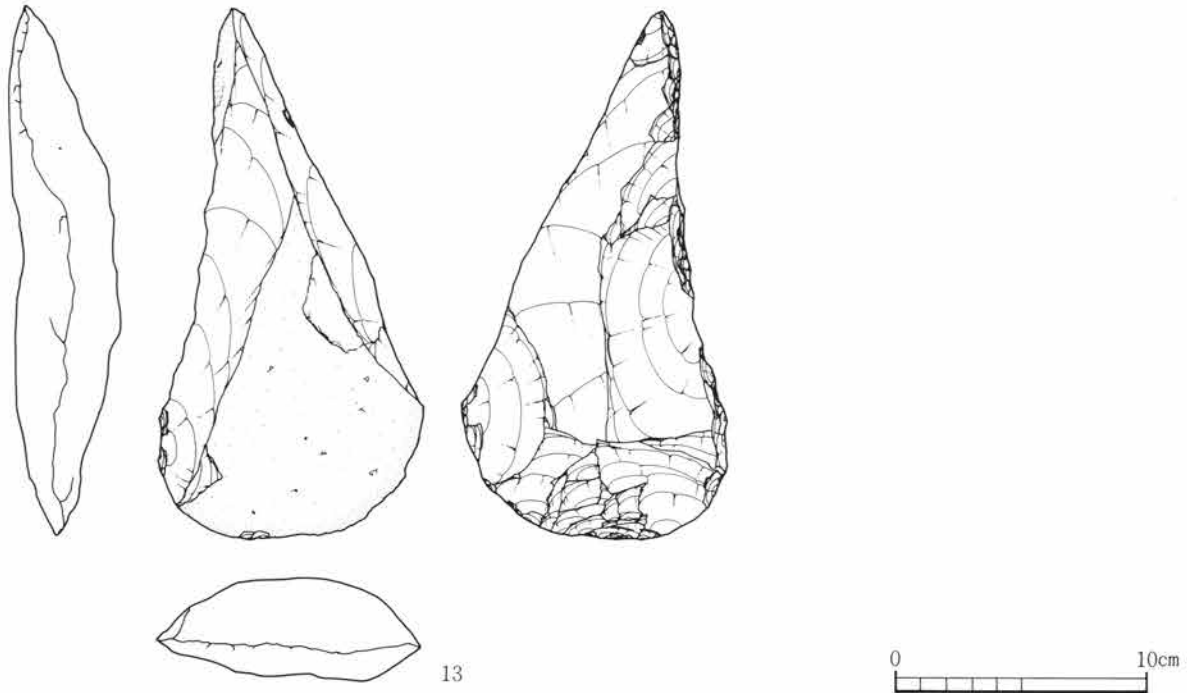


第86図 22号住居実測図



第87図 22号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第88図 22号住居実測図(2)

23号住居《第89～91図、図版24・42・43》

位置 U-22グリッド

形状・規模 東西方向に長軸を有するが、南壁はこれに添うように農耕路、用水路が設置され、床面を含め攪乱を受けていた。北壁も東西方向の攪乱溝によりその大部分を欠失する。また、プラン内に3本の地割れが走り、床面をはじめ形状を著しく歪めていた。19号墳の周堀が東壁中央を削平していた。規模は、東西方向7.50mを測り、南北方向の残存長は4.40mであった。

長軸方位 N-52°-W

残存面積 35.50㎡(推定39.50㎡)

周壁 削平が著しく原形を大きく損なっていると考えられるが、黒褐色土及びローム層を掘り込んで形成されていた。残存の良好な南壁東端で48～60cmを測った他は、30cm以下であった。

床面 ローム層中に構築されている。P1とP4よりも東側で、地割れによって生じた段差から東側は硬く、良好に踏み固められていた。また、1号炉の北側で、大型壺(6)の周辺も同様に硬化していた。掘り方は基本的には無かった。

埋没土 暗褐色土が堆積していた。中位に暗褐色土ブロックとロームブロックの混土層が認められた。

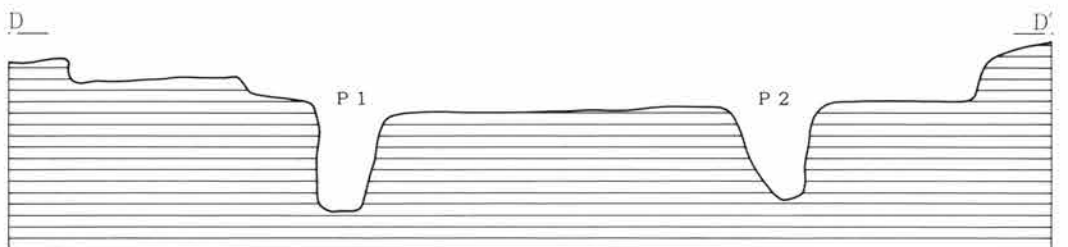
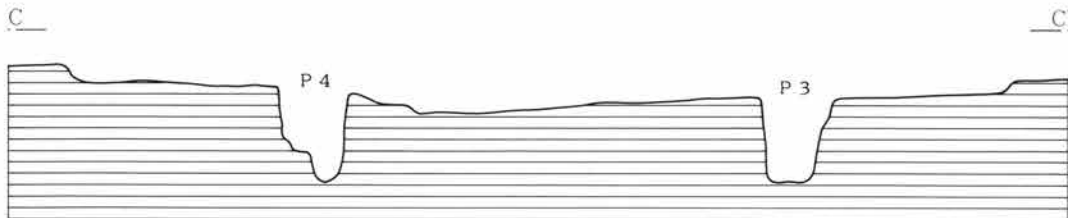
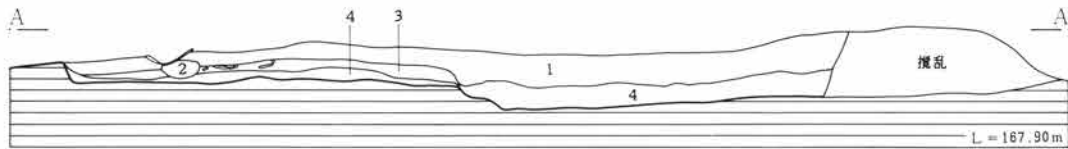
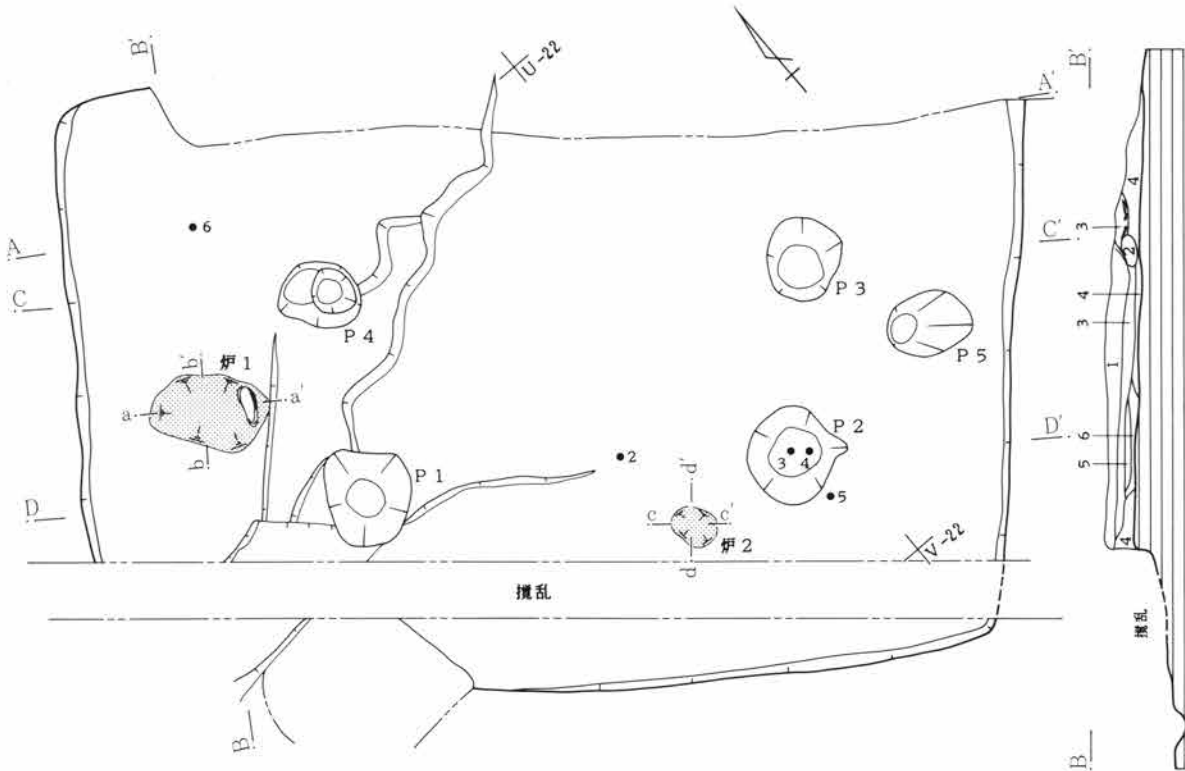
炉 中央、西壁寄りに主体的に機能していたと考えられる1号炉が、P2の西側に小規模な2号炉がある。1号炉は住居の長軸と同様に、東西方向が長い長円形の掘り込みを持つ。規模は94×58cmで、東側寄りには、長さ30cmの棒状の円礫が置かれていた。使用面は全体が焼土化しており、西側はこの周縁に炭化物・灰の広がりがあった。円礫の西側から出土した土器片は火熱を受けていた。

2号炉は径33cmの円形の掘り方を持ち、使用面全体が焼土化していた。炭化物・灰は少量であった。

柱穴 5本のピットを検出した。P1～4が主柱穴と考えられる。P2の底面からは甕(4)が出土し、埋没土中からは台付甕(3)が出土している。P3の中位には礫が入り込んでいた。P5は東傾する掘り方を持つもので、埋没土はローム粒を多量に含む暗褐色土であった。貯蔵穴の可能性もあるが、むしろ入り口施設に関するものであろうか。

P1 径75×67cm・深さ75cm

P2 径79×77cm・深さ79cm

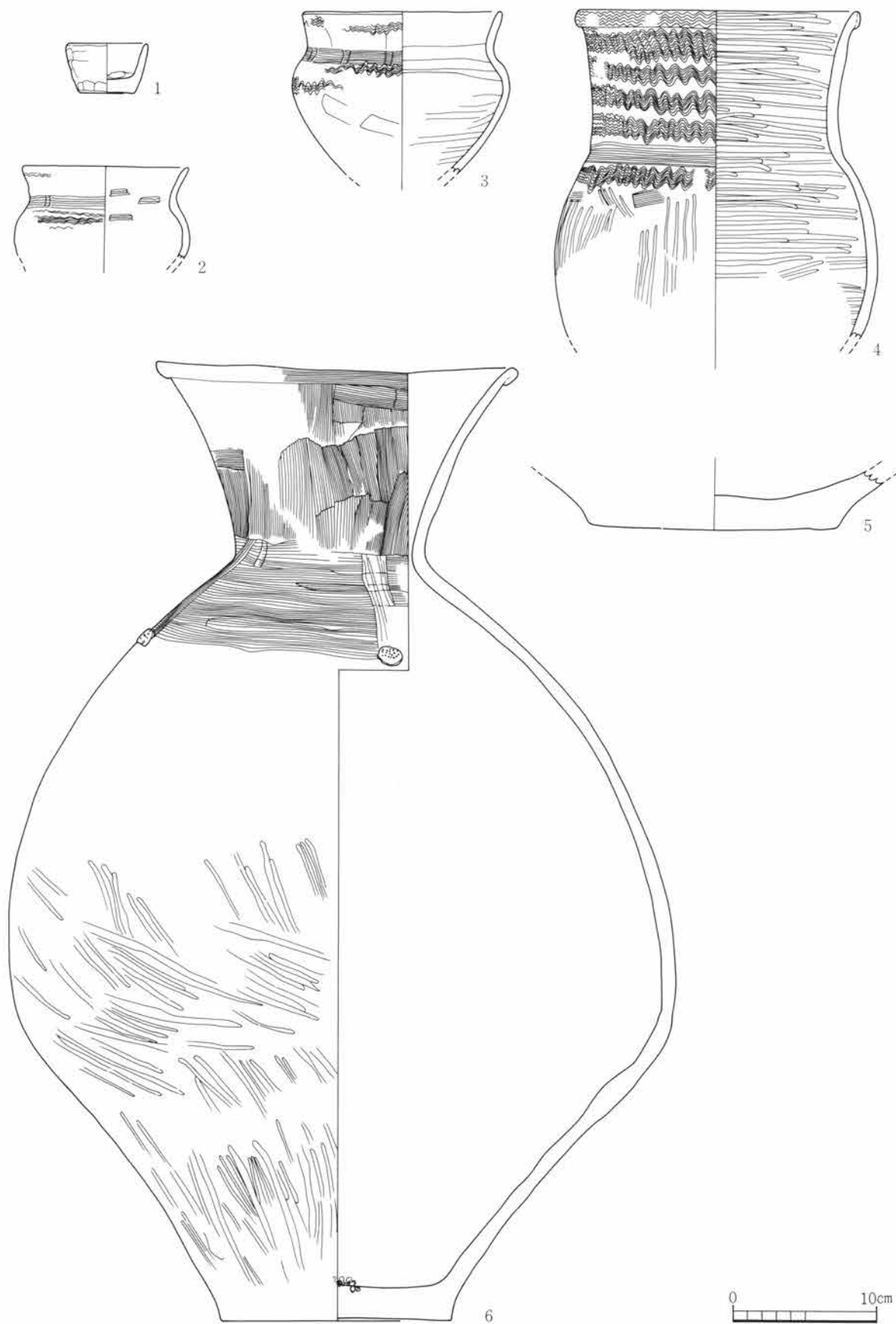


- | | |
|---------------------------------------|---------------------------|
| 1. 暗褐色土 軽石・茶褐色土粒・炭化物がまばらに混入する。 | 5. 暗褐色土ブロックと黄茶褐色土ブロックの混土層 |
| 2. 灰白色粘土のブロック | 6. 暗褐色土 焼土粒が混入する。 |
| 3. 暗褐色土 茶暗褐色土のブロックが多量に混入する。 | |
| 4. 暗褐色土 2層と同様の混入物であるが色調が黒みを増し、粘性をおびる。 | |



第89図 23号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



第90図 23号住居出土遺物実測図

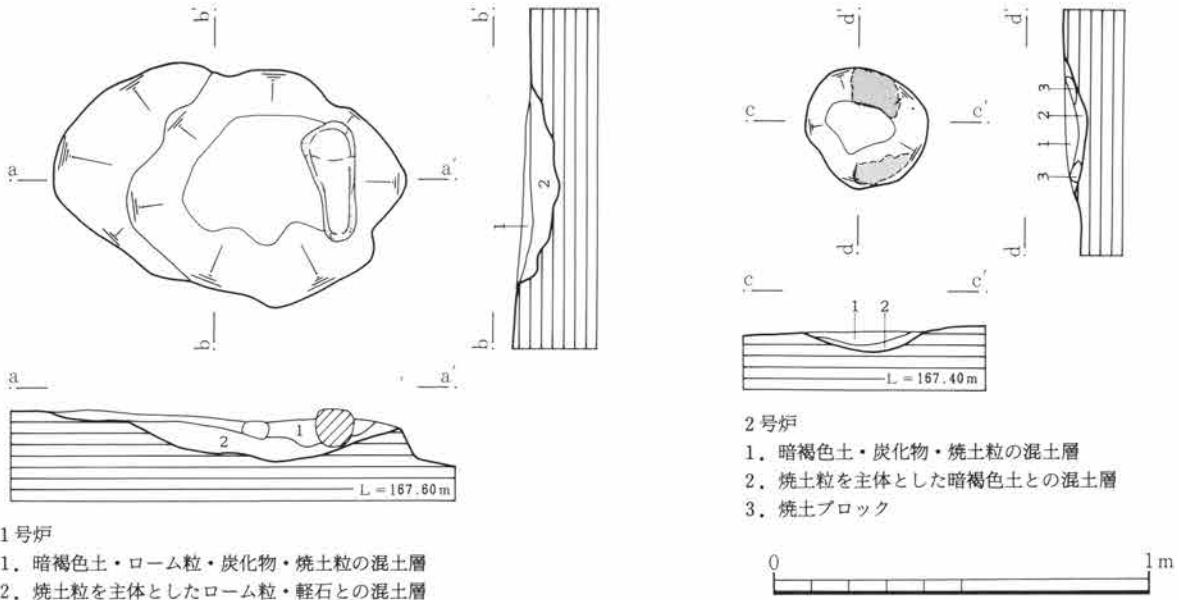
P 3 径65×58cm・深さ67cm

P 4 径63×52cm・深さ67cm

P 5 径67×52cm・深さ69cm

遺物の出土状況 遺物の残存は少量であった。炉の

北側からは壺(6)が出土している。この潰れた土器の直下には灰白色の粘土ブロックがあった。これらは床面から5cm程遊離しており、間層の土中には炭化物が多数認められた。(徳江)



第91図 23号住居炉実測図

24・25号住居《第92～95図、図版25・43・44》

位置 Q-23グリッド 18号墳の東側の北緩斜面に立地する。

形状・規模 24号住居は、南東隅がやや丸みを帯びており、東西壁が若干東側に振れた平行四辺形状を呈する。規模は東西方向10.27mを測り、南北方向の残存長は5.50mである。斜面下位の北側では、削平のために壁を検出することができなかった。

25号住居は、北半部が24号住居との重複によって確認できなかったが、東側に隣接する16号住居と同様に、規模の小さな住居と考えられる。形状は、南北方向に長軸を有する長方形と考えられる。規模は、東西方向3.26mを測り、南北方向の残存長は1.66mである。

24号住居長軸方位 N-61°-W

25号住居南壁走向 N-62°-W

周壁 24・25号住居ともローム層を掘り込んで構築されていた。24号住居北半部の壁は、18号墳周堀の影響及び傾斜面の影響により確認できなかったが、

ほぼ垂直に立ち上がっており、最大残存深度43cmを測る。

25号住居は、24号住居との重複により北壁と東西壁の北半部を確認することができなかった。残存深度は約30cmで、やや外傾していた。

床面 24・25号住居ともローム層中に構築されていた。24号住居ではYPを若干含んでおり、全体的に良く踏み固められていた。25号住居では、やや締まりを欠くが、白色軽石を含むロームで構築されていた。掘り方は検出されなかった。

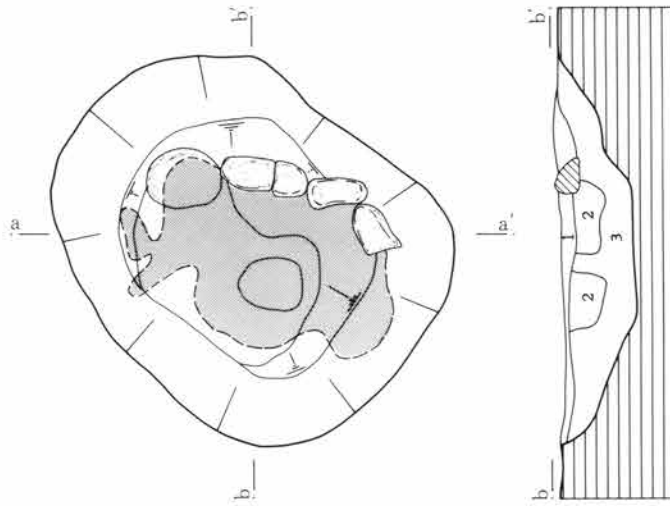
埋没土 24・25号住居とも埋没土は類似しており、ロームブロック・白色軽石を含む暗褐色土を主体とし、下層ではロームブロックの混入量が増加し、暗黄褐色を呈していた。

炉 24号住居において、2基の炉が確認された。1号炉は、南壁から1.5cm程北寄り、P 4の西側に構築されていた。規模は107×84.0cmで、楕円形を呈し、床面から約5cm下位で焼き締まった焼土の使用面となり、炉石がL字状に組み立てられていた。掘り方は深さ

24・25号住居

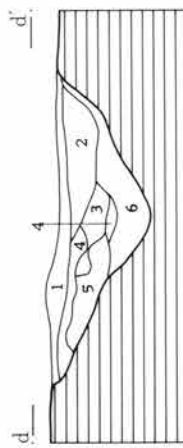
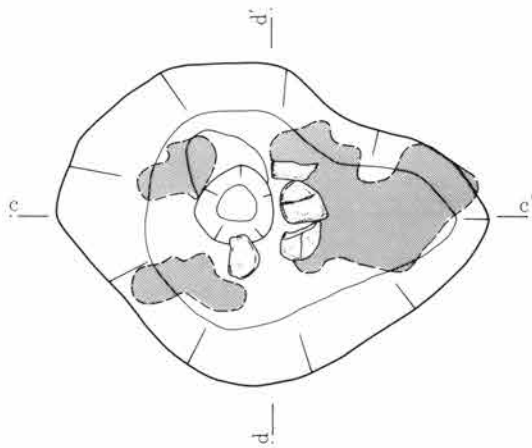
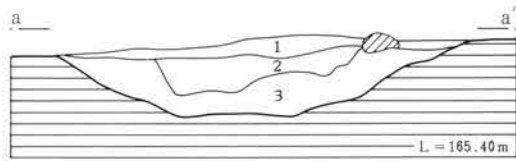
1. 暗褐色土 軽石・ローム粒が多量に混入する。
2. 暗褐色土 1層より色調が明るく、軽石の混入量が減少する。炭化物が若干混入する。
3. 暗褐色土 ローム小ブロックが若干混入する。
4. 暗黄褐色土 軽石と多量のロームブロックが混入する。固く締まっている。
5. 暗黄褐色土 軽石の混入は減少する。

6. 暗褐色土 ロームブロック・軽石が多量に混入する。
7. 暗褐色土 ロームブロックが多量に混入する。
8. 暗褐色土 軽石・ローム粒・ロームブロックが混入する。
9. 暗黄褐色土 軽石・多量のロームブロックが混入する。
1～7, 24号住居埋没土
8・9, 25号住居埋没土



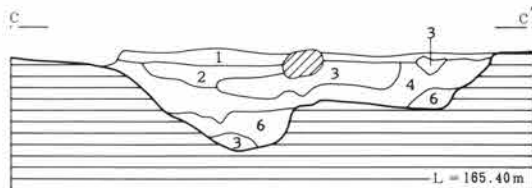
1号炉

1. 暗褐色土 ローム粒・焼土粒が多量に混入する。
2. 焼土ブロック
3. 暗黄褐色土 焼土粒と多量のローム細粒が混入する。



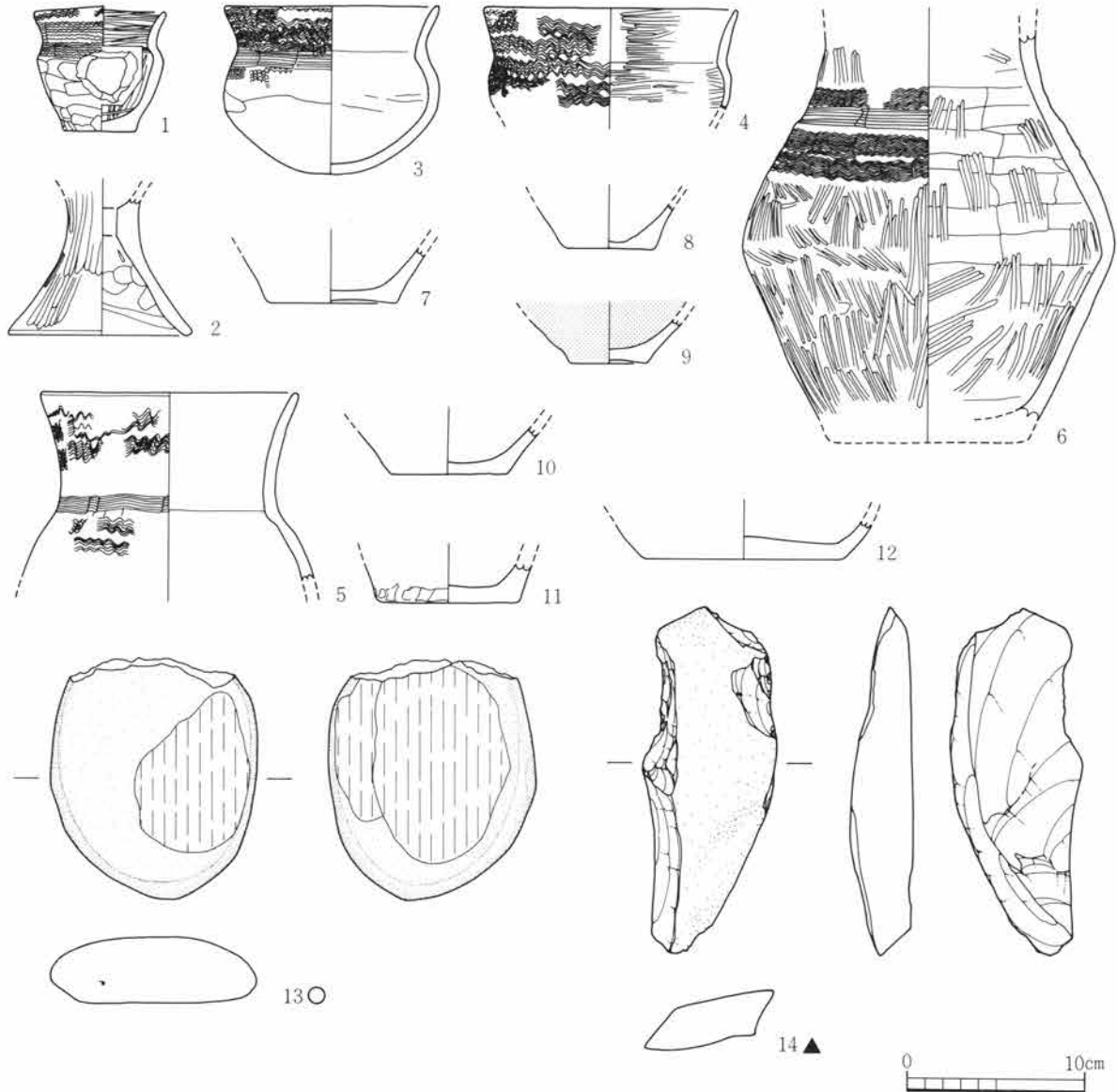
2号炉

1. 暗褐色土 多量の焼土粒と少量の炭化物が混入する。
2. 暗褐色土 焼土粒が多量に混入する。
3. 焼土ブロック
4. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・ロームブロックが混入する。
5. 暗褐色土 ロームの混入量が増す。
6. 暗黄褐色土 焼土粒・ローム粒が多量に混入する。



第93図 24号住居炉実測図

III 検出された遺構と遺物



第94図 24号住居出土遺物実測図

20cmの皿状に掘り込まれていた。2号炉は、西壁中央から1.5cm程東寄り、P 1 と P 2 の中間に構築されていた。規模は115×85.0cmで、不整楕円形を呈し、床面から約2cm下位で使用面となり、底部は約5cmの厚さで固く焼土化していた。掘り方は西から北にかけて深く掘り込まれていた。

25号住居では炉は検出されなかった。

柱穴 P 1～P 4 の支柱穴4本を確認した。西側柱穴のP 1・P 2 では東側のP 3・P 4 に比べ、掘削深度がやや深くなっていた。また、P 1 の埋没土中にYPが認められたが、YPの堆積層としてはレベルが高いため、柱材の補強のために使用されたと考

えられる。

P 1 径116×114cm・深さ116cm

P 2 径100×100cm・深さ103cm

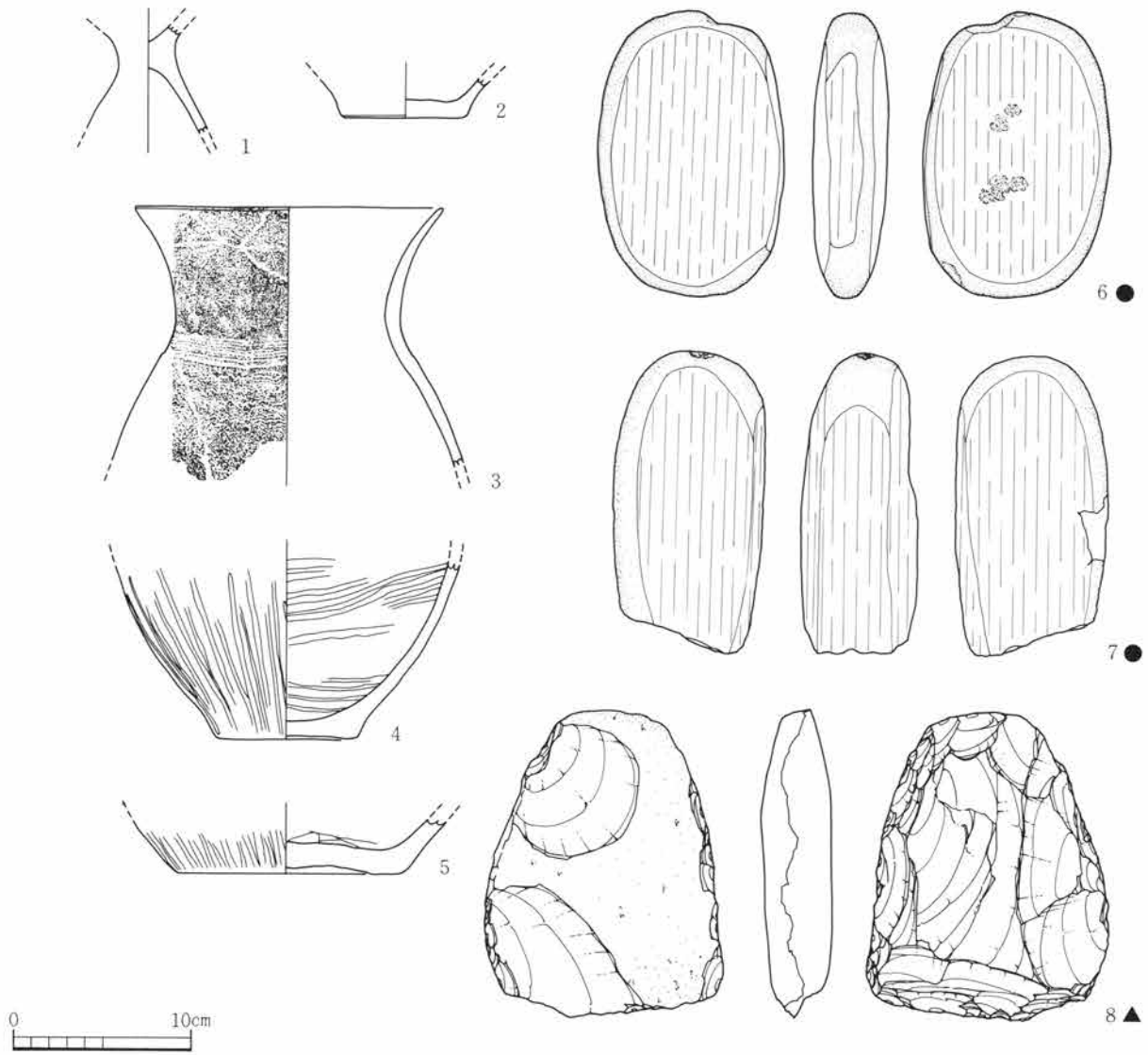
P 3 径104×100cm・深さ89cm

P 4 ①径50×58cm ②径77×82cm・深さ86cm

P 5 径100×56cm・深さ71cm

遺物の出土状況 24号住居では、8・9号墓との重複の影響によるためか、周壁近くに集中する傾向が見受けられた。床面直上からは、小型甕(1)・甕底部(11)・蓋(2)が出土し、床面から7cm程上位で甕(3・5)が出土している。

25号住居では床面直上から甕底部(2)が出土して



第95図 25号住居出土遺物実測図

おり、床面から3.5cm上位で甕(4)が出土した。

備考 P5は東壁から約1cm西側にあり、100×56cmの大きさで楕円形を呈しており、位置から見て入り口の施設として使用された可能性が考えられる。

他の遺構との関係 25号住居は24号住居に先行するものである。また、8・9号墓、18号墳と重複するが、どちらも後出するものである。(磯貝)

III 検出された遺構と遺物

26号住居《第96・97図、図版26・44》

位置 E-29グリッド

形状・規模 東西方向に長軸を有する隅丸長方形を呈する。規模は、東西方向5.80mを測り、南北方向の残存長は3.40mである。

長軸方位 N-82.5°-E 残存面積 17.54㎡

周壁 ローム層中に掘り込まれた壁面を確認した。

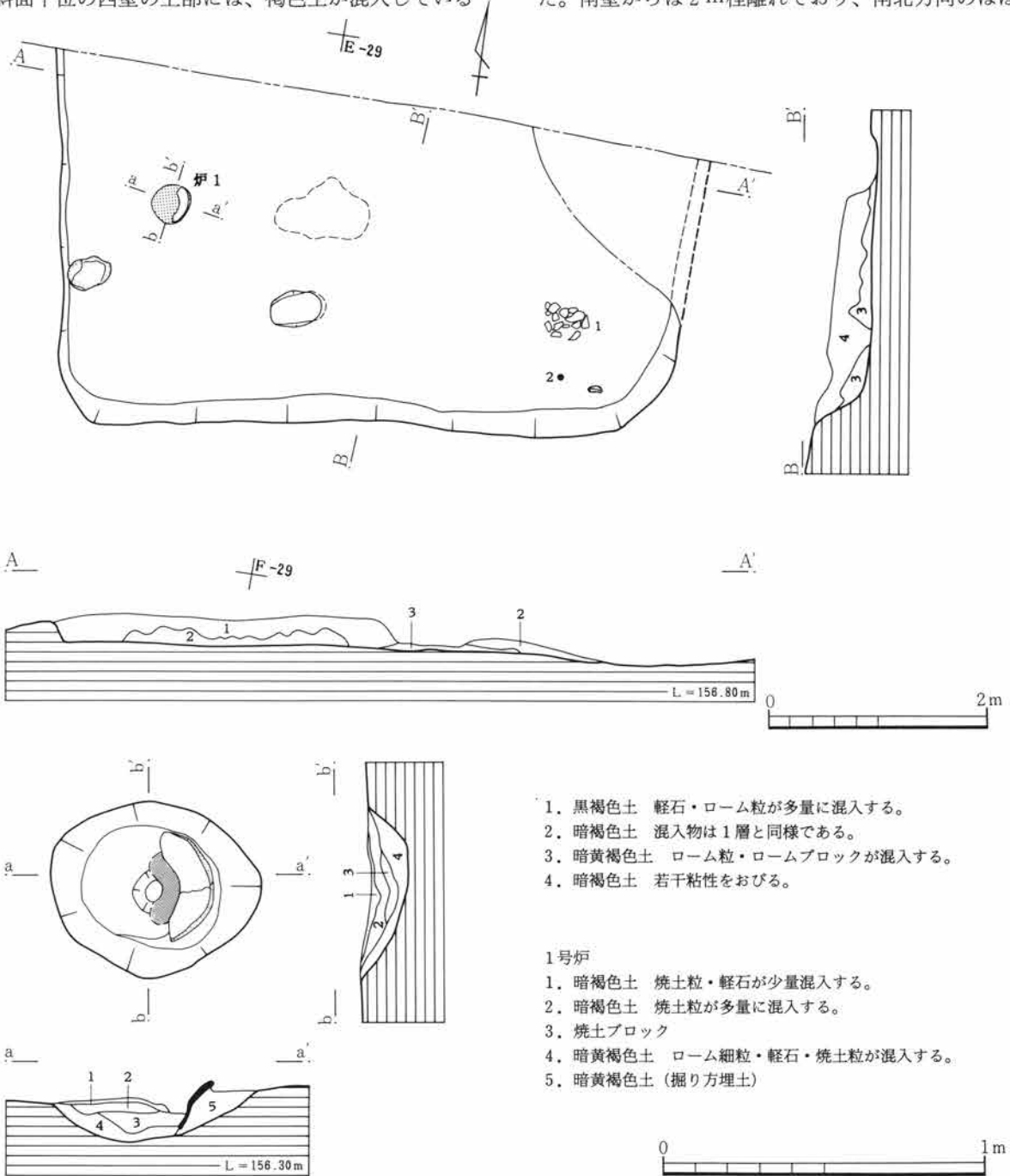
斜面下位の西壁の上部には、褐色土が混入している

部分が認められた。北側は調査区域外であり、東側は1号墳の周壁によって一部が削り取られていた。最大残存深度は39.0cmである。

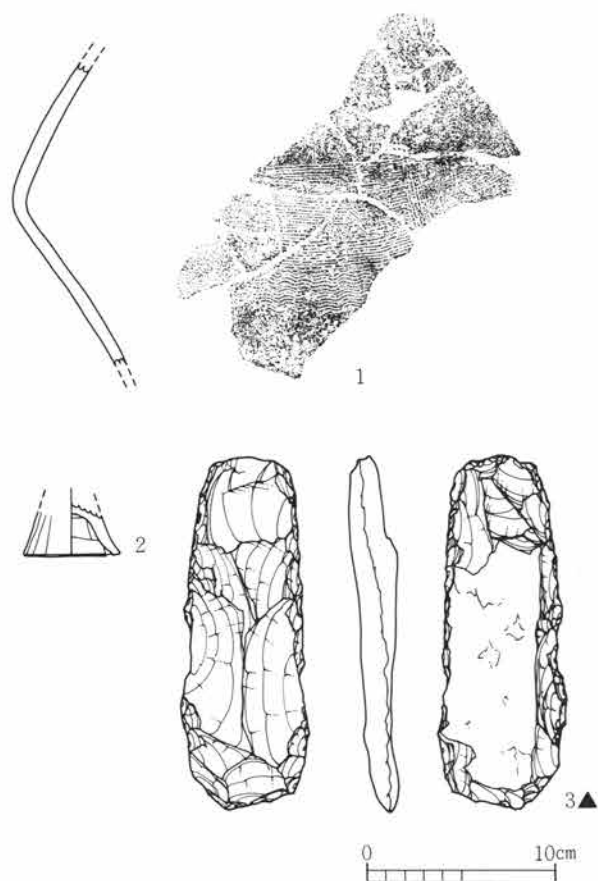
床面 ローム層を整地した床が検出されたが、余りしっかりと踏み固められていなかった。

埋没土 暗褐色土と暗黄褐色土が堆積していた。

炉 西壁から1m程東側に入った位置で検出された。南壁からは2m程離れており、南北方向のほぼ



第96図 26号住居実測図



第97図 26号住居出土遺物実測図

中央に置かれたものと考えられる。径約70cmの範囲に、焼土及び炭化物が多く散布していたが、東西方向がやや長い不整円形を呈していた。使用面は、床面よりも5cm程窪んでおり、固く焼き締まった焼土面が検出された。住居の内側寄りの東側には、いわゆる枕石の代わりに甕の胴部破片が埋め込まれていた。掘り方は、東西方向がやや長く、55×65cmの楕円形を呈し、深さ15cm程掘り込まれていた。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

遺物の出土状況 全体の出土量自体が少ないが、南半部に散在していた。南西部の礫は、本住居に伴う可能性も考えられるが定かではない。

備考 中央部で検出された礫集積は、本住居が廃棄された後に営まれた、6号墓に伴うものである。

(礫貝)

28号住居《第98～104図、図版26・44～47》

位置 G-32グリッド 北西方向に強く傾斜する斜面に位置し、長軸の走向は等高線とほぼ平行する。

形状・規模 東西方向に長軸を有する、隅丸矩形を呈する。7号墳の石室掘り方と重複しており、西壁から北壁の一部にかけて上面が削平されていたが、比較的良好な残存状態であった。規模は、東西方向6.50m、南北方向4.40mを測り、長軸対短軸の比率は1.48：1である。

長軸方位 N-47°-W 面積 25.33m²

周壁 東・西・南壁は粘性の強い褐色土、北壁をYPの混入する暗褐色土で構築されていた。残存深度は、最も良好な南西部で107cmを測る。

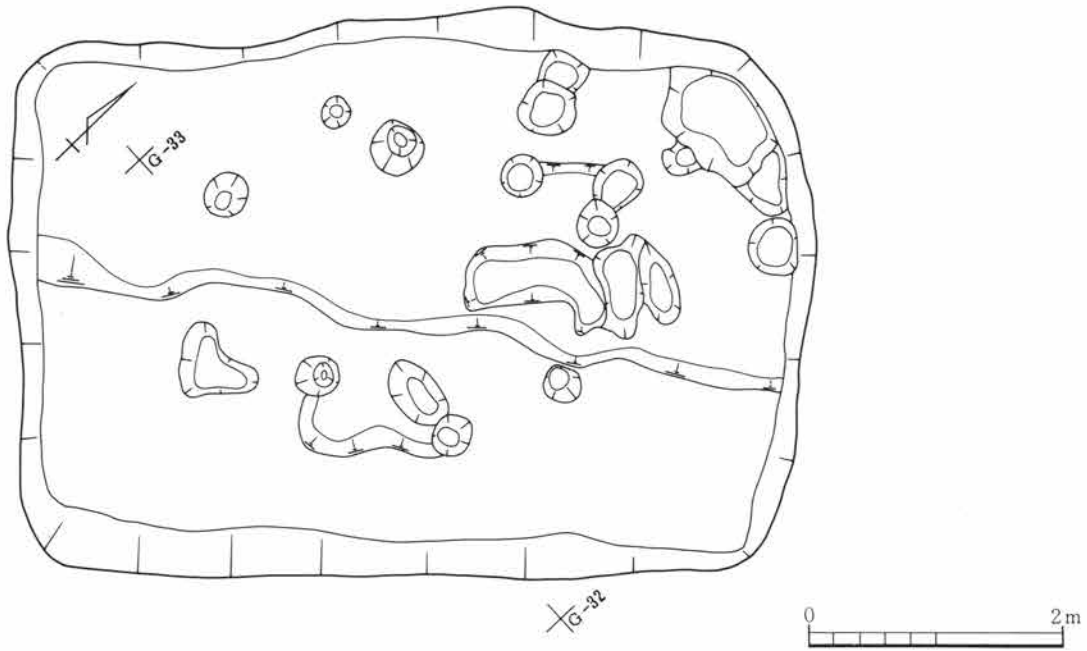
床面 YPを含むローム層中に構築されていた。全体的に良く踏み固められていたが、北壁から西壁にかけての壁際は締まりを欠く傾向にあった。北西隅付近の床面には、約5cmの厚さでロームが多く混入する土が堆積し、その層を挟むように上下に薄く炭化材が検出されたが、下層の炭化材は床面に密着していた。

埋没土 上層には軽石を含む黒褐色土、下層には全体的に量の寡多はあるものの炭化物・ロームの混入する暗褐色土が堆積していた。

炉 本住居からは、3基の炉が検出された。

1号炉は北壁中央より90cm南寄りで、P2とP5の中間に位置する。焼土ブロック・炭化物が散在したのみで、使用面のプランは明確なものではなく、焼土・炭化物の混入が認められなくなるまで掘り方とした。規模は、径73×75cm・深さ20cmである。2号炉は南壁から約1.0m北寄り、P1とP4の中央に位置する。1号炉とは対称の位置に有る。床面から3cm程下がった使用面には、北側に焼土ブロックが認められた。規模は径73×67cmで、円形を呈し、深さ8cmである。掘り方精査時にP6が検出され、その上部から台付甕(18)が出土した。

3号炉は住居西壁寄りの中央部に位置する。規模は径110×69cmで、楕円形を呈する。使用面は炉の周縁部では床面から1～2cm、中央部では5cm下位で



第99図 28号住居掘り方実測図

確認され、厚さ10cm程度の焼土ブロックが点在していた。

柱穴 P 1・2・4・5が支柱穴と思われる。南側の柱間が狭い台形状に配置されているが、いずれのピットも掘削深度・埋没土の状態が類似しているため、柱穴として妥当と思われる。

P 1 径36.0×29.5cm・深さ58.0cm

P 2 径46.0×38.0cm・深さ50.0cm

P 3 径43.0×47.0cm・深さ41.0cm

P 4 径35.0×32.0cm・深さ42.0cm

P 5 径32.0×30.0cm・深さ51.0cm

P 6 径35.0×33.0cm・深さ42.0cm

貯蔵穴 当初P 3が貯蔵穴になると思われたが、精査時にも貯蔵穴であるとする積極的な条件を見いだすことはできなかった。P 3は位置から見て、入り口施設に伴う造作と考えるほうが妥当性が高いと思われる。

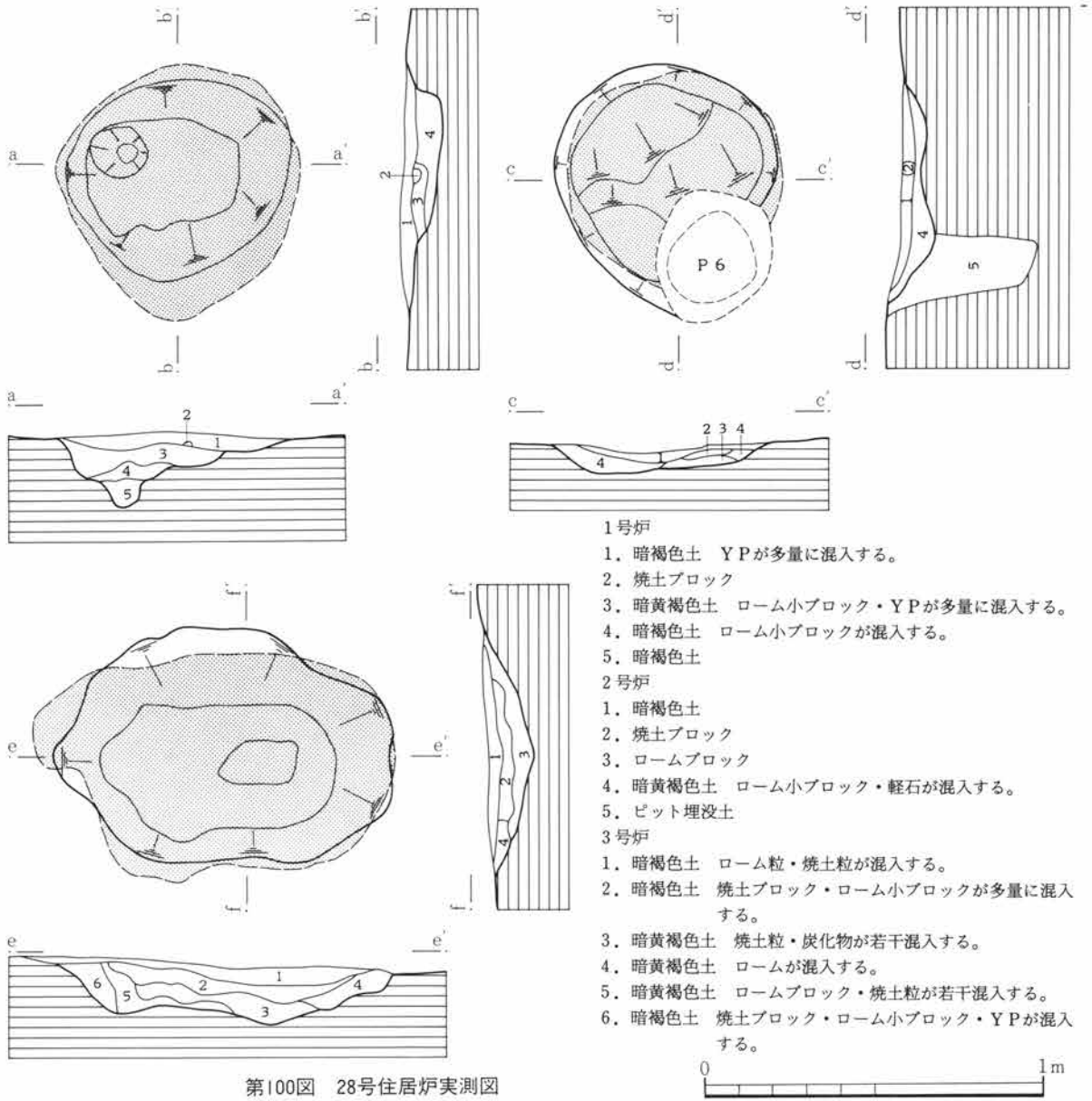
遺物の出土状況 住居中央部より西寄りにかけて遺物の集中する傾向が見られた。前述のP 6から台付甕(18)が出土している他、床面直上から出土している遺物には、高坏(4)・壺(24・31)・甕(30)がある。

備考 P 4の西側から出土した甕胴部は、その2/3が

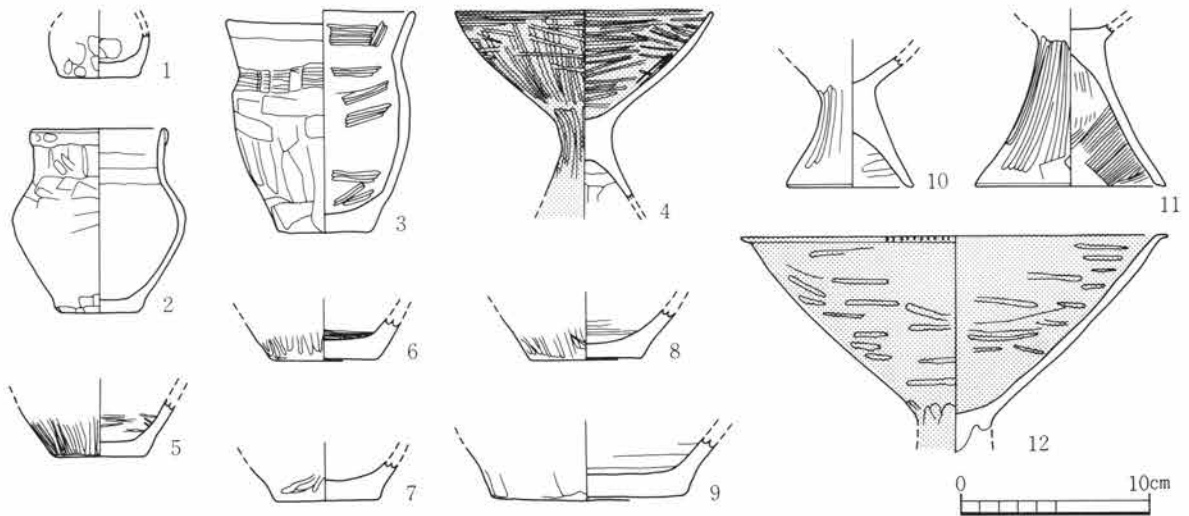
床面下に差し込まれ、周囲には灰白色粘質土が遺物を支えるような状態で確認された。この灰白色粘質土は、埋没土中には見られなかったもので、他遺構の重複も考えられるが確定し得なかった。

他の遺構との関連 7号墳の石室と重複しており、住居よりも後出するものである。(磯貝)

III 検出された遺構と遺物



第100図 28号住居炉実測図

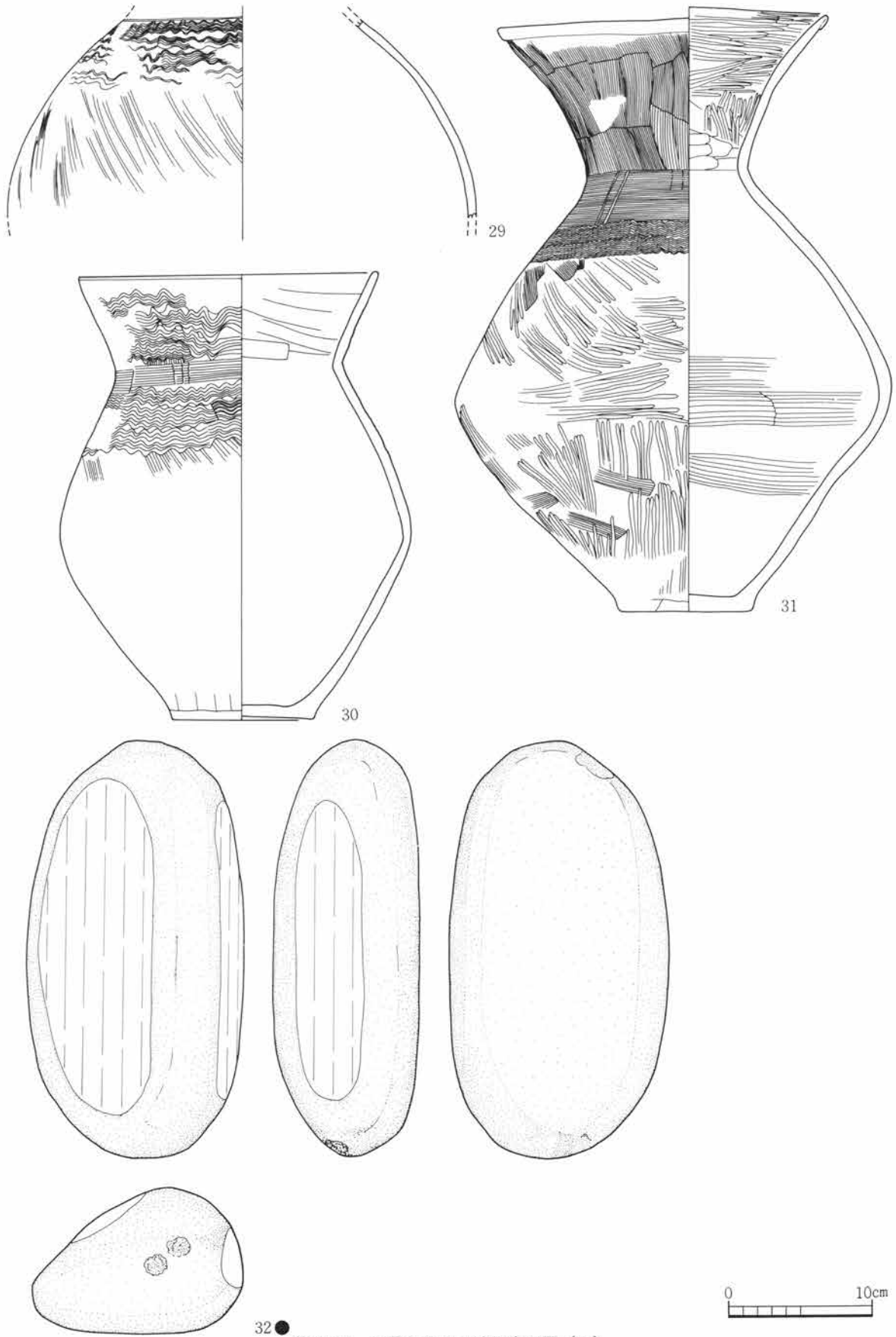


第101図 28号住居出土遺物実測図(1)

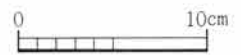
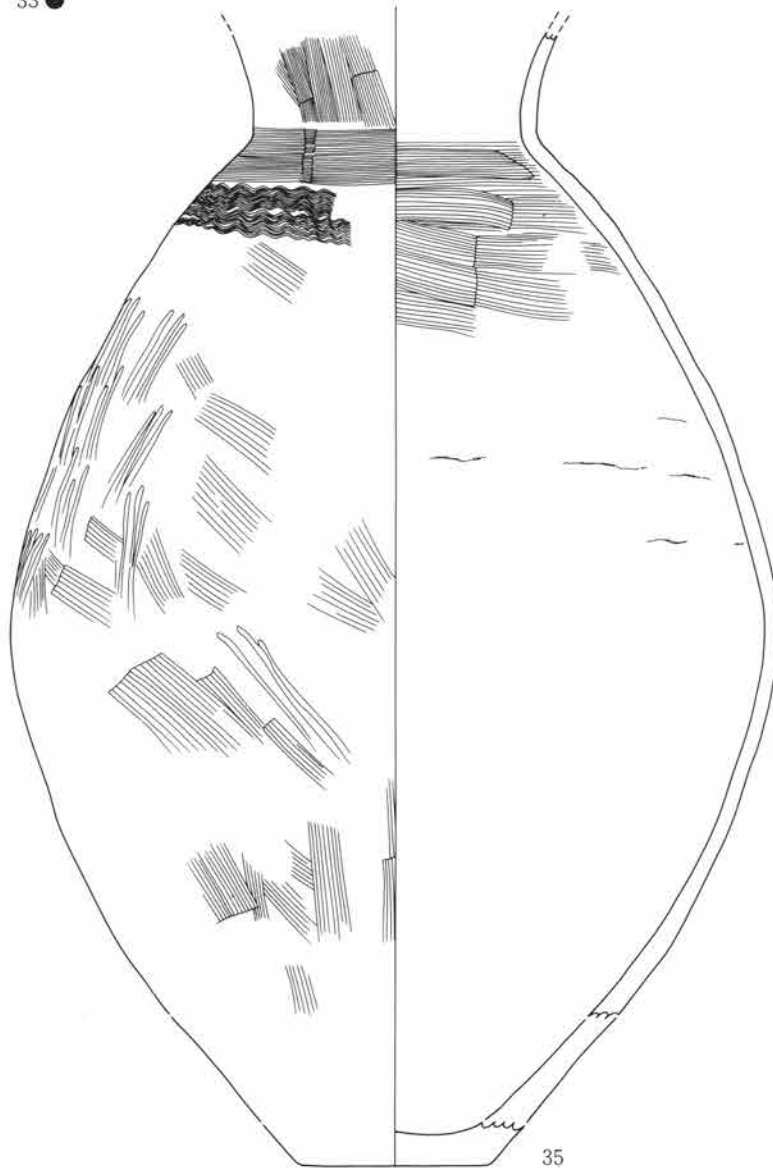
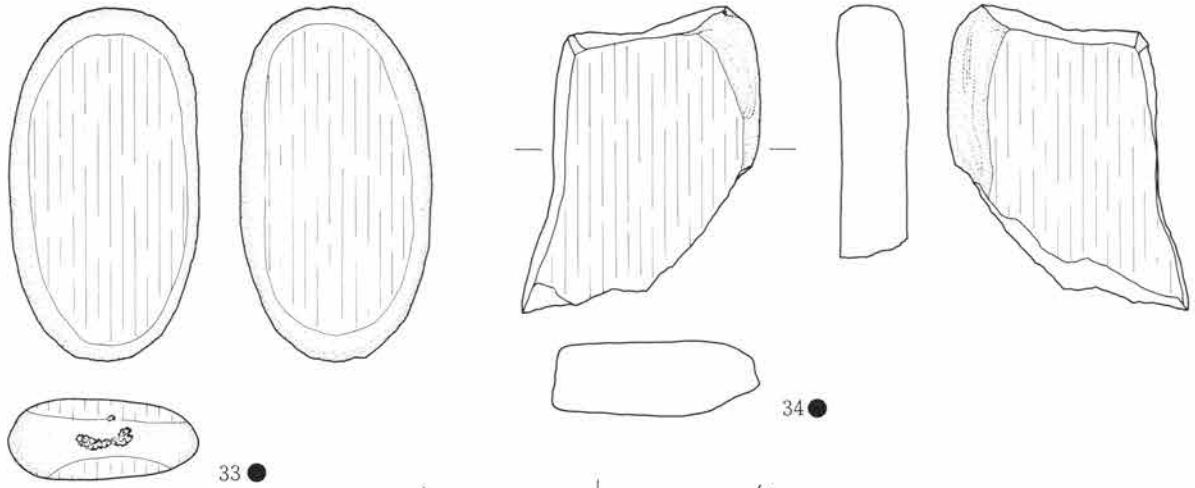


第102図 28号住居出土遺物実測図(2)

III 検出された遺構と遺物



32● 第103図 28号住居出土遺物実測図(3)



第104図 28号住居出土遺物実測図(4)



29号住居《第105～107図、図版25・47》

位置 F-33グリッド

形状・規模 東壁が大きく外側に張り出して、歪みが著しいが、東西方向に長軸を有する隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は、東西方向5.62mを測り、南北方向の残存長は4.30mである。

長軸方位 N-37°-W 面積 22.7㎡

周壁 斜面下位の西側の一部は削平されていたが、ローム層中に掘り込まれた壁面を確認した。最も良好な遺存状態にあった南東隅における最大残存深度は96.0cmである。

床面 ローム層を整地した床が検出された。所所にYPが現れていたが、固く踏み締められていた。

埋没土 暗褐色土を主体とする土によって埋まっていた。覆土中には炭化物が多く認められ、炉1の付近では、床面よりも5cm程上位には、焼土混じりの暗黄褐色土を挟んで、焼土と炭化物の層が検出された。

炉 1号炉は、西壁から50cm程東寄り、P1とP2の間に設置されていた。径64×72cmの円形で、使

用面は床面よりも17cm程下位に有った。2号炉は、P4の西隣に設置されていた。径31×34cmの円形で、使用面は床面よりも12cm程下位にあった。いずれにも、いわゆる枕石は残されていなかった。

貯蔵穴 北東隅のP5は、径56×70cm・深さ29cmの大きさで、不整円形を呈していたが、貯蔵穴である可能性が考えられる。

柱穴 P1～4の支柱穴4本を確認した。南側が狭い台形状に配置されており、西側にやや偏在していた。入り口に伴う明確な施設は検出されなかったが、炉の上部を嵩上げするための配慮かも知れない。

P1 径55×62cm・深さ46cm

P2 径37×42cm・深さ34cm

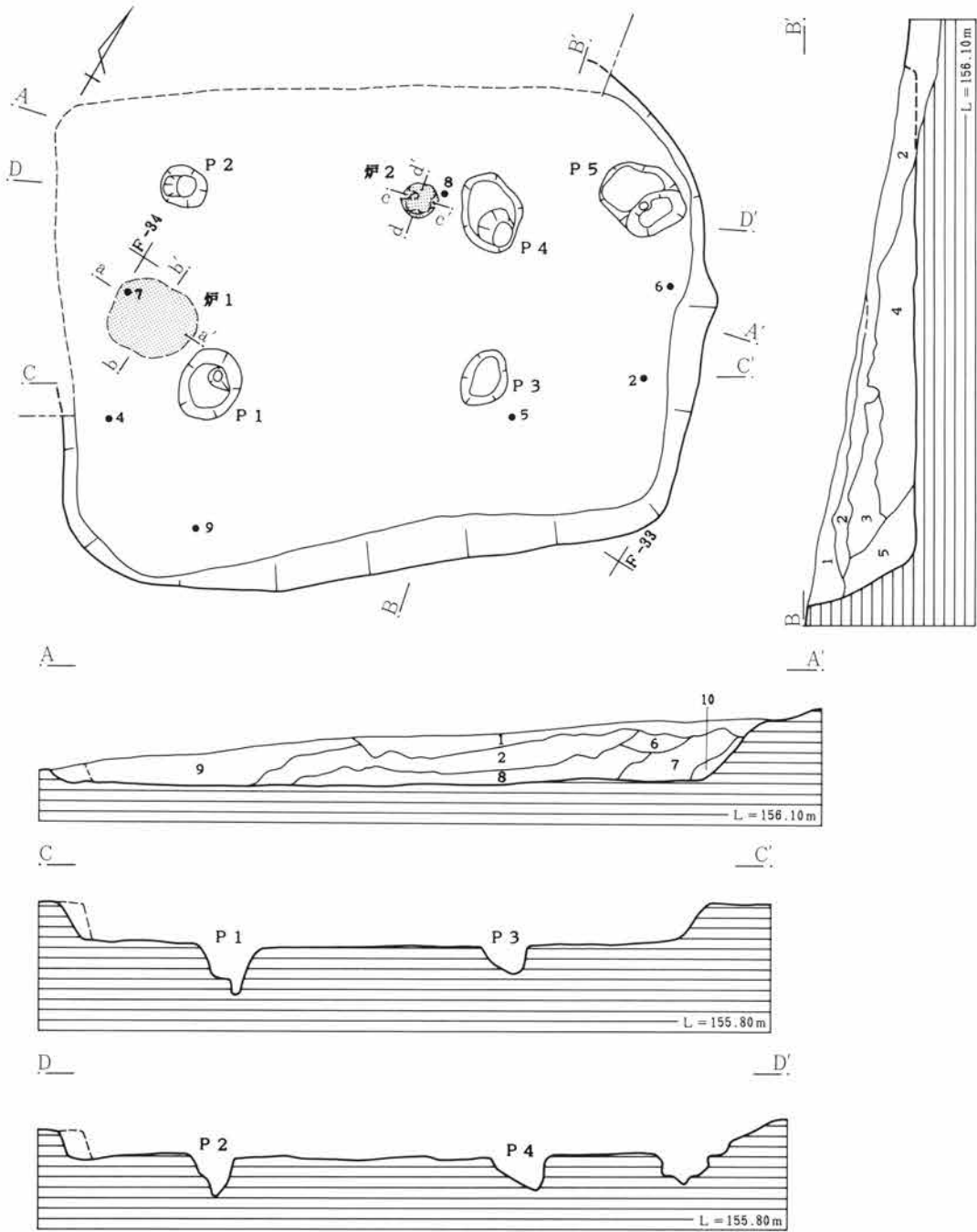
P3 径42×47cm・深さ23cm

P4 径53×68cm・深さ32cm

遺物の出土状況 床面全体に散在して出土した。

備考 本住居は焼失家屋の可能性が考えられるが、床面の状態や焼土・炭化物層が5cm程の間層を挟んで検出されていることから、断定はできない。

(飯塚)

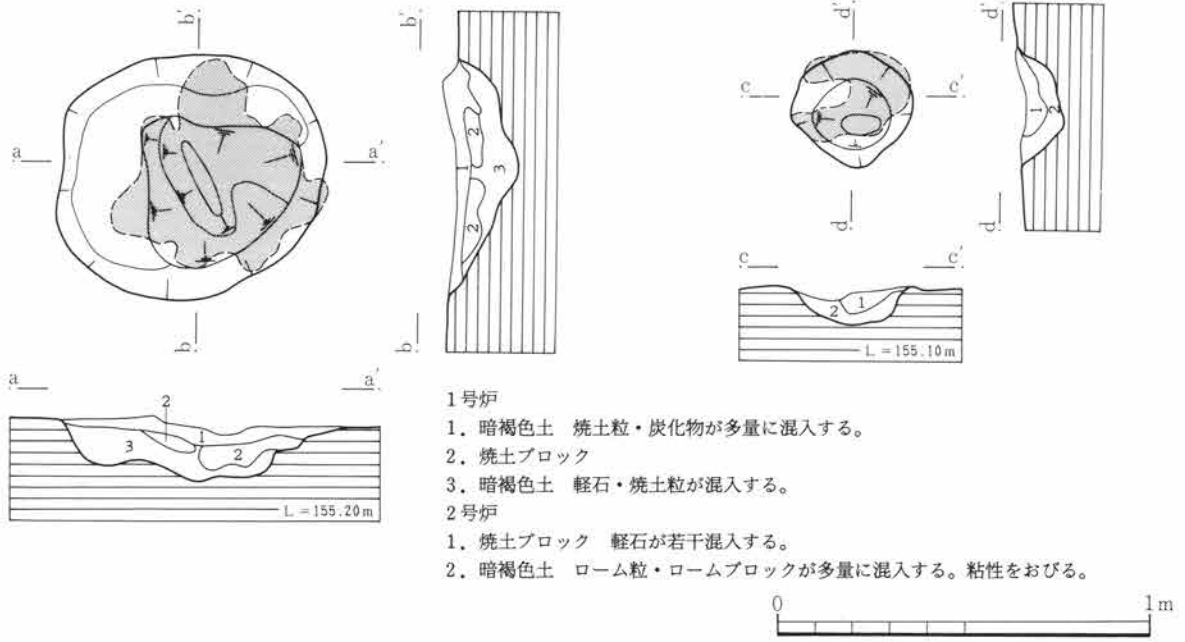


- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 黒褐色土 軽石・ローム粒が多量に混入する。 | 6. 暗褐色土 軽石が多量に混入する。 |
| 2. 暗褐色土 YP・ローム粒・ローム小ブロックが混入、炭化物も若干含む。 | 7. 暗褐色土 6層に類似するが色調は明るく、炭化物を含む。 |
| 3. 暗褐色土 YPの混入は減少し、色調は明るくなる。 | 8. 暗褐色土 軽石・ローム粒・炭化物が混入する。 |
| 4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・軽石が混入する。 | 9. 暗褐色土 ローム粒と多量の軽石が混入する。 |
| 5. 暗褐色土 YP・ロームブロックが多量に混入する。 | 10. 暗黄褐色土 ロームブロックが多量に混入する。 |

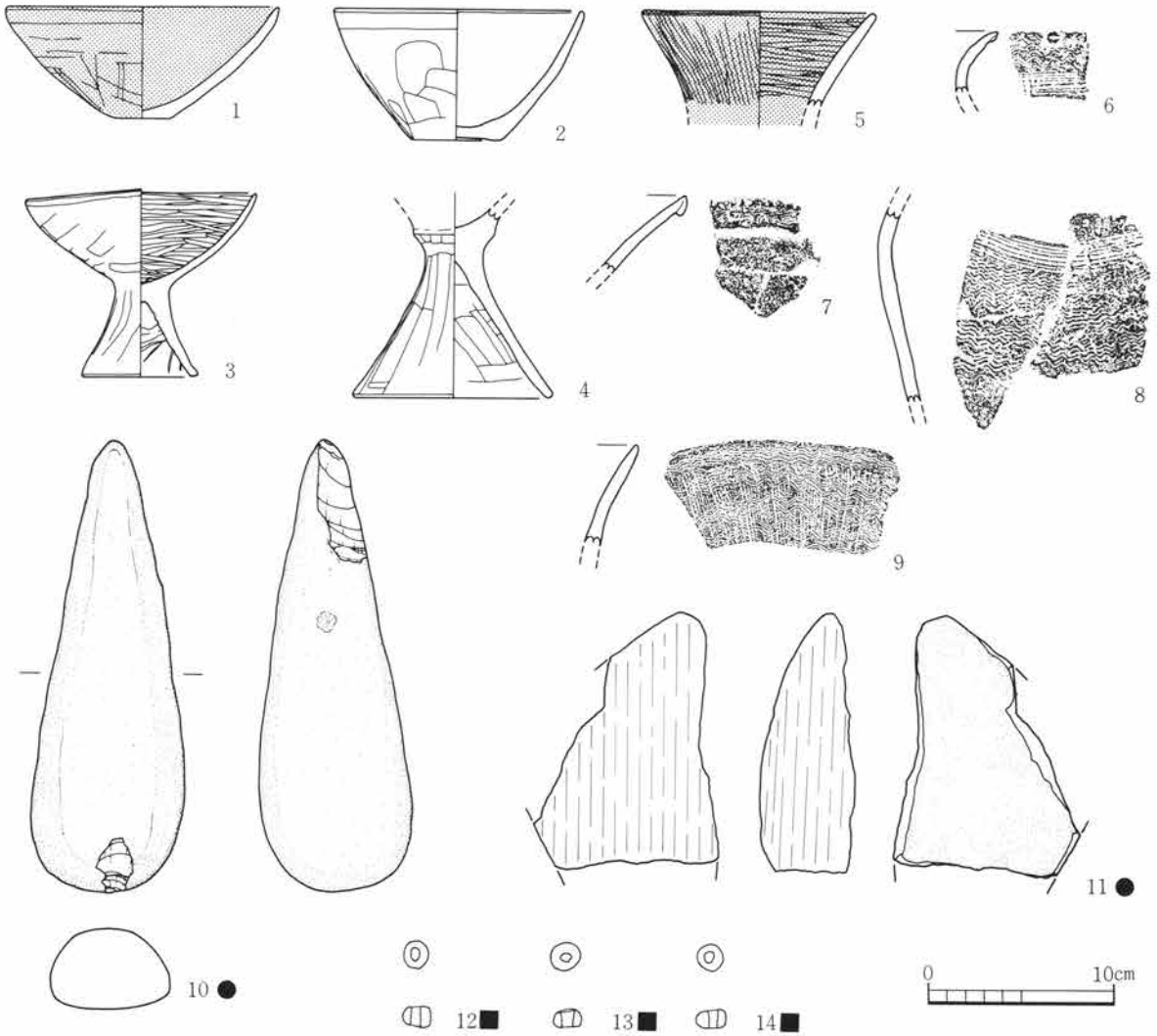


第105図 29号住居実測図

III 検出された遺構と遺物



第106図 29号住居炉実測図



第107図 29号住居出土遺物実測図

30号住居《第108～112図、図版27・47～49》

位置 H-21グリッド 2号墳東側の北緩斜面に古墳と重複して位置する。

形状・規模 南壁にやや丸みを持ち、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は、東西方向8.83m・南北方向6.14mを測る。長軸対短軸の比率は1.44：1である。

長軸方位 N-56°-W 面積 51.61㎡

周壁 南壁においては、YPを含む黄褐色の粘性の強いローム層を掘り込んでおり、西寄りになる程YPの混入量が多くなり、東隅に近くなるにつれ色調が暗くなり角礫を含むようになる。東西両壁及び北壁においては、粘性の強い暗褐色土を掘り込んでいた。

南壁の立ち上がりが外傾して丸みを持ち、仰角が約60度を示すのは、埋没時に壁面が崩落したためと考えられる。埋没土8層には周壁と同様の土が締まりなく堆積していた。

床面 YPを含むローム層中に構築されており、貼り床は認められなかった。周壁付近は締まりを欠く傾向があった。床面は南東隅から北西隅に向かって緩やかに傾斜し、レベル差は20cmであった。中央部やや北寄りから、南北方向に長軸を有し、不整形を呈する性格不明の土坑が確認された他は、掘り方は確認されなかった。土坑の規模は、114cm×80cm・深さ40cmを測る。

埋没土 上層に軽石・炭化物を含む黒褐色土、下層にロームブロックの混入する暗褐色土が堆積していた。

炉 床面精査時に3基が検出された。1号炉は住居西寄りの中央部、2号炉は南東隅から対角線方向に1.5cm離れ、3号炉は2号炉の西側1cmの所にそれぞれ位置する。1号炉は、径89×60cmで、楕円形を呈する。使用面と床面はほぼ同じレベルで、良く焼き締まった焼土面が確認された。炉の中央には南北方向に長軸を向けた偏平な石が置かれ、掘り方は深さ10cmで皿状に掘り込んでいた。2号炉は、径63×60cmで、円形を呈する。炉の北寄りに東西方向に長い

偏平な石が置かれていた。使用面は良く焼き締まっており、厚さ7cmの焼土の層が確認された。3号炉は、径75×46cmで、不整楕円形を呈する。使用面の焼土の上には多量の炭化物が散在し、焼土は良く焼き締まっていたが、周辺ほど軟弱であった。炉の北寄りには炉石を抜き取った痕跡と考えられる楕円形の凹みが見られた。掘り方は径55×42cmの楕円形で、深さ12cmの皿状の落ち込みが確認された。

柱穴 8基のピットが検出されているが、支柱穴と考えられるものは確認されなかった。

P 1 径50×47cm・深さ40cm

P 2 径68×40cm・深さ41cm

P 3 径57×45cm・深さ62cm

P 4 径54×52cm・深さ76cm

P 5 径58×47cm・深さ55cm

P 6 径50×40cm・深さ29cm

P 7 径64×58cm・深さ33cm

P 8 径54×58cm・深さ18cm

遺物の出土状況 床面から出土している遺物の中で、甕(34)が西壁に、壺(33)が北壁に立て掛けられた状態で検出された。また、壺(32)は(33)の東側で潰れた状態で検出された。

備考 P 1・2は東壁際に並列して位置し、P 2はやや斜めに掘り込まれていた。これらは、入り口施設に伴うものかと考えられる。P 3では、床面から約40cm掘り込んだところで掘り方に貼り付けるように円礫がはめこまれ、ピットを一周していた。また、それから8cm下がった所で2段に互って円礫が貼り込まれていた。ピット掘り方の補強に施されたものと思われる。

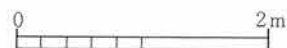
他の遺構との関係 2号墳の一部と重複しており、住居より後出するものである。(磯貝)

III 検出された遺構と遺物

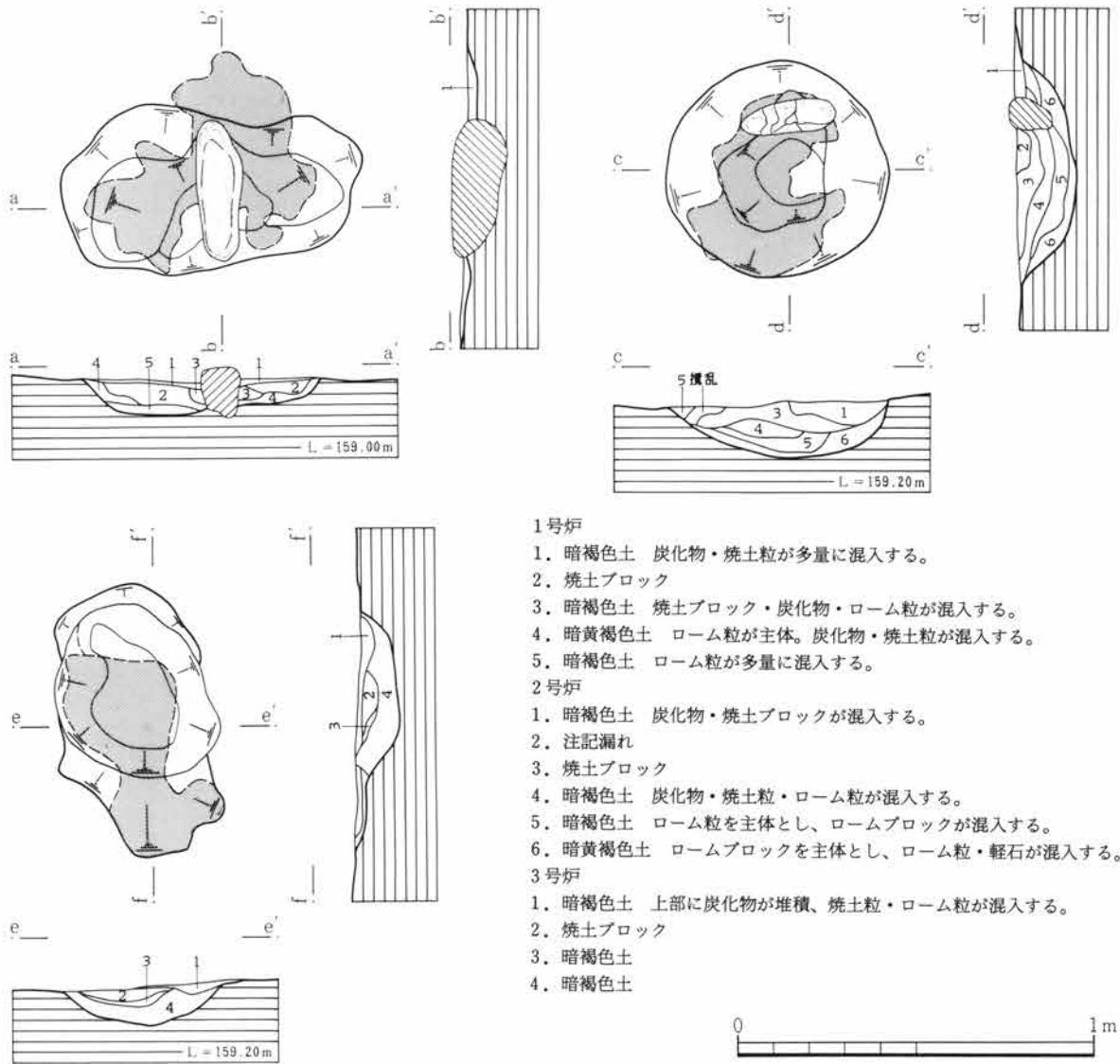


1. 黒褐色土 軽石・ローム粒が混入、炭化物も若干含む。締まりがある。
2. 黒褐色土 締まりが無くなる。
3. 黒褐色土 1層より混入物が多い。
4. 暗褐色土 軽石・ローム粒が混入する。
5. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロックが多量に混入する。
6. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭化物が混入する。
7. 暗褐色土 ロームブロックが多量に混入する。

8. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックが多量に混入する。粘性あり。
9. 暗黄褐色土 ローム粒を主体とし、軽石が混入する。
10. 暗褐色土 ローム粒が多量に混入する。やや締まりがある。
11. 暗褐色土とロームブロックの混土层
12. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックが混入する。
(10~12は掘り方埋土)



第108図 30号住居実測図



1号炉

1. 暗褐色土 炭化物・焼土粒が多量に混入する。
2. 焼土ブロック
3. 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物・ローム粒が混入する。
4. 暗黄褐色土 ローム粒が主体。炭化物・焼土粒が混入する。
5. 暗褐色土 ローム粒が多量に混入する。

2号炉

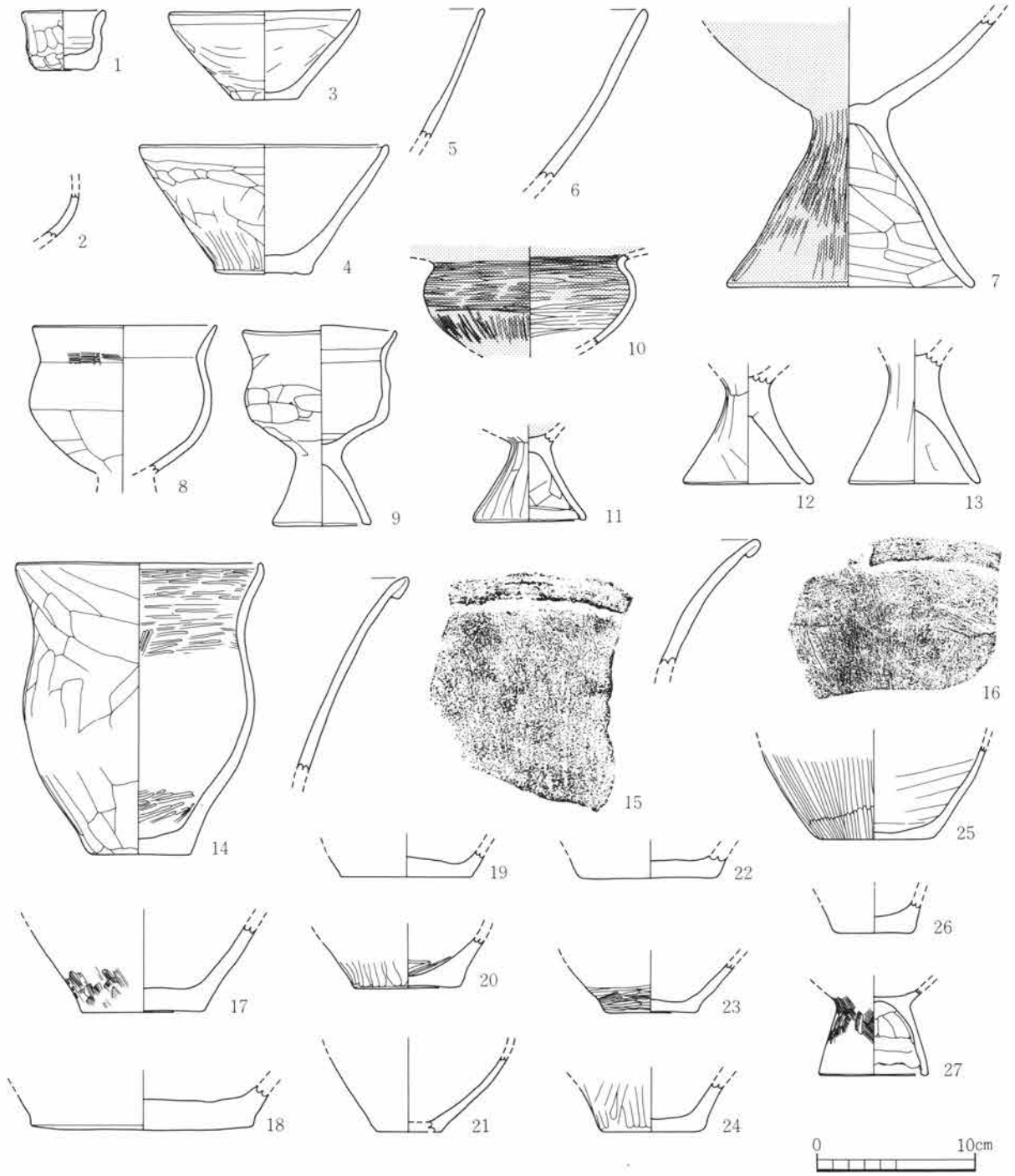
1. 暗褐色土 炭化物・焼土ブロックが混入する。
2. 注記漏れ
3. 焼土ブロック
4. 暗褐色土 炭化物・焼土粒・ローム粒が混入する。
5. 暗褐色土 ローム粒を主体とし、ロームブロックが混入する。
6. 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とし、ローム粒・軽石が混入する。

3号炉

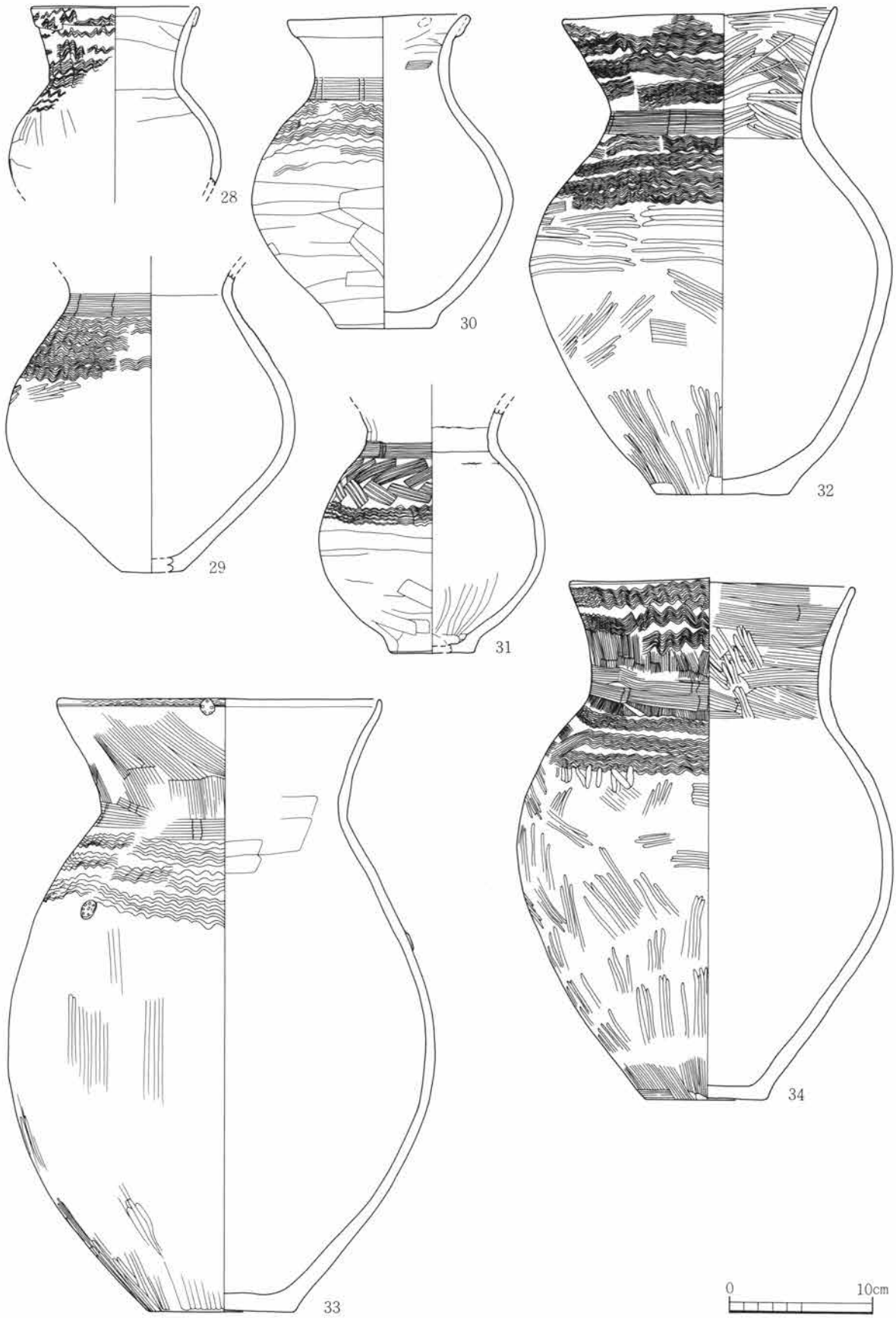
1. 暗褐色土 上部に炭化物が堆積、焼土粒・ローム粒が混入する。
2. 焼土ブロック
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土

第109図 30号住居炉実測図

III 検出された遺構と遺物

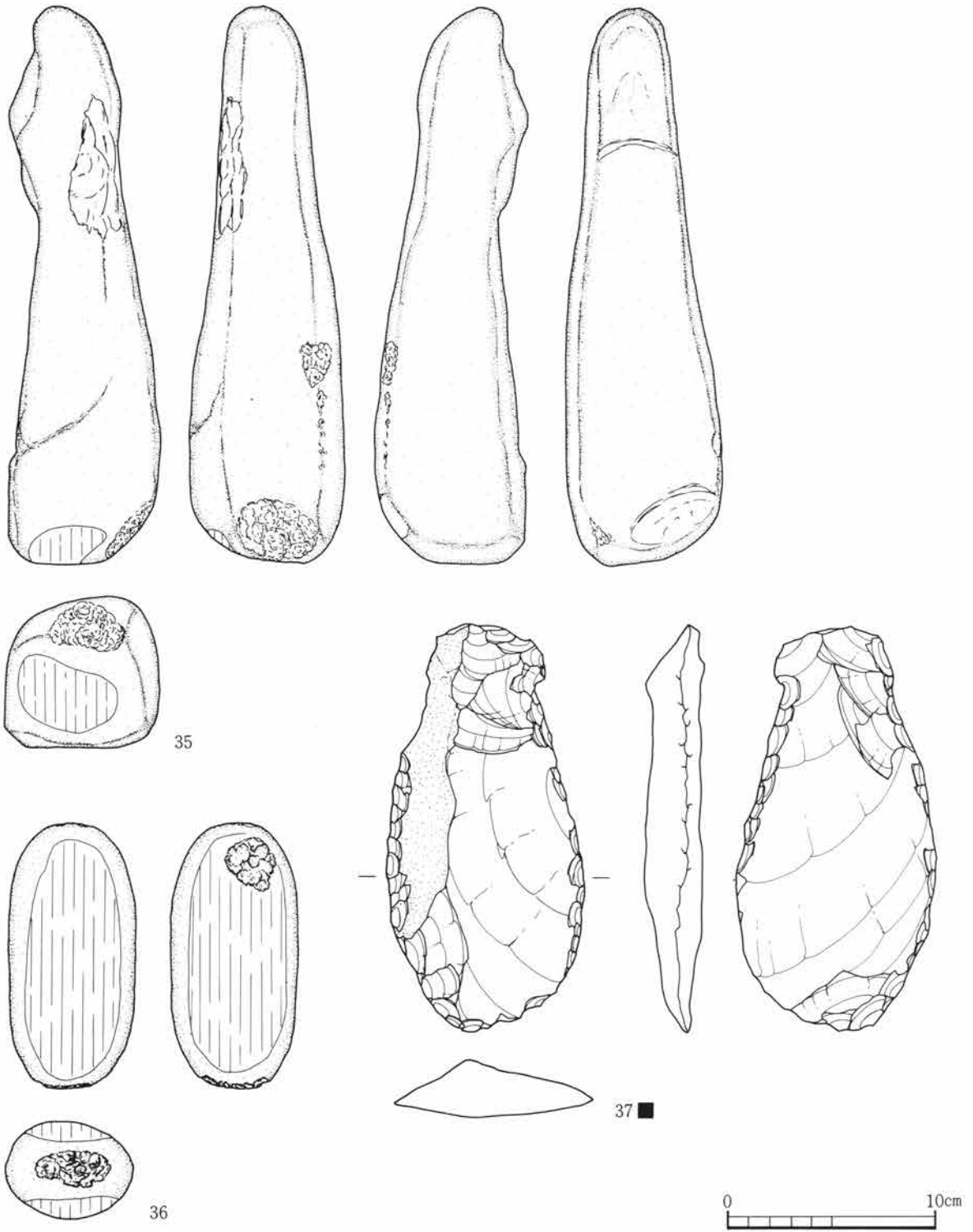


第110図 30号住居出土遺物実測図(1)



第111図 30号住居実測図(2)

III 検出された遺構と遺物



第112図 30号住居実測図(3)

32号住居《第113～117図、図版28・49～51》

位置 H-23グリッド

形状・規模 2号墳の墳丘下に有り、石室構築時の造成により、上部は攪乱を受けていた。また、北下がり斜面に立地するため、斜面下位に当たる北西隅の残存は劣悪であった。東西方向に長軸を有する矩形を呈し、各辺とも直線を意識しており、四隅も整然としていた。規模は、東西方向7.52m・南北方向5.32mを測る。長軸と短軸の比率は1.41：1である。

長軸方位 N-69°-W 面積 38.90m²

周壁 立ち上がりは、その後の崩落は有るものの、原形は垂直に近かったものと思われる。南壁は、黒色土のブロックを含み暗褐色みを帯びるローム層を掘り込んでおり、下位はYP層を切っている。南壁はローム層の上に黒みの強い暗褐色土が堆積していた。残存壁高は、良好な南東隅で104cm、劣悪な北西隅で22cmであった。

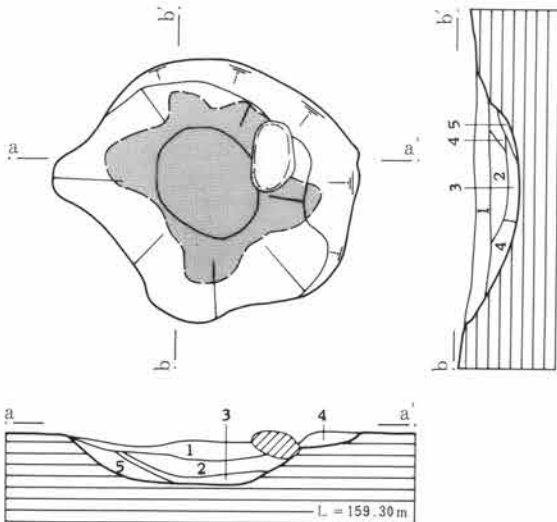
床面 全体に硬く踏み固められていたが、P1とP2の北側部分は地山中の土層の変換点に当たり、YPが多く含まれるため若干柔らかい面もある。ただ

し、P1の周囲には特に硬い面が広がっていた。

埋没土 暗褐色土とロームブロックを主体に構成された土層が堆積していた。

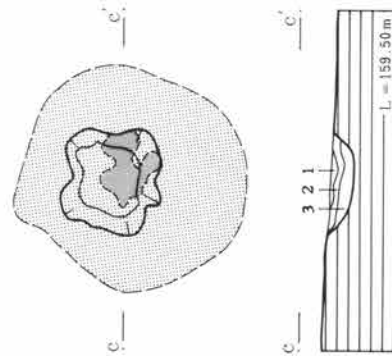
炉 中央、西壁寄りに主体的に機能したと考えられる1号炉が、南東隅に2号炉が有る。1号炉は82×68cmの長円形に近い形状である。皿状の掘り方を持ち、東側寄りに長さ18cmの円礫が置かれていた。中央部分には焼土が多量に残っていた。炉の西側からは壺(22)が出土し、潰れた破片の一部が使用面を覆っていた。2号炉は殆ど掘り込みらしいものは無く、径25cm程の小範囲に焼土が認められた。この周縁には、径60cm程の範囲に炭化物が薄く散っていた。

柱穴 P1～4が主柱穴と考えられる。短軸を3等分する位置に有り、P1とP4、P2とP3の心々距離は他の住居例と比較して短いものである。柱痕を確認できたものは無かった。掘り方は、床面での径と底面のそれが著しく異なり、逆載頭円錐形を呈していた。P5とP6は東壁の走向に沿うように1cmの間隔を置いて掘削されていた。入り口施設に関係するものと見ることもできるが、両者とも土器が出土している点がやや疑問な点である。また、この



1号炉

1. 暗褐色土 焼土粒・軽石が混入、炭化物も若干含む。固く締まる。
2. 焼土ブロック 固く締まる。
3. 黄茶褐色土 ローム粒・焼土粒が多量に混入する。
4. 暗褐色土 炭化物・焼土粒・ローム粒が混入、固く締まる。
5. 暗褐色土



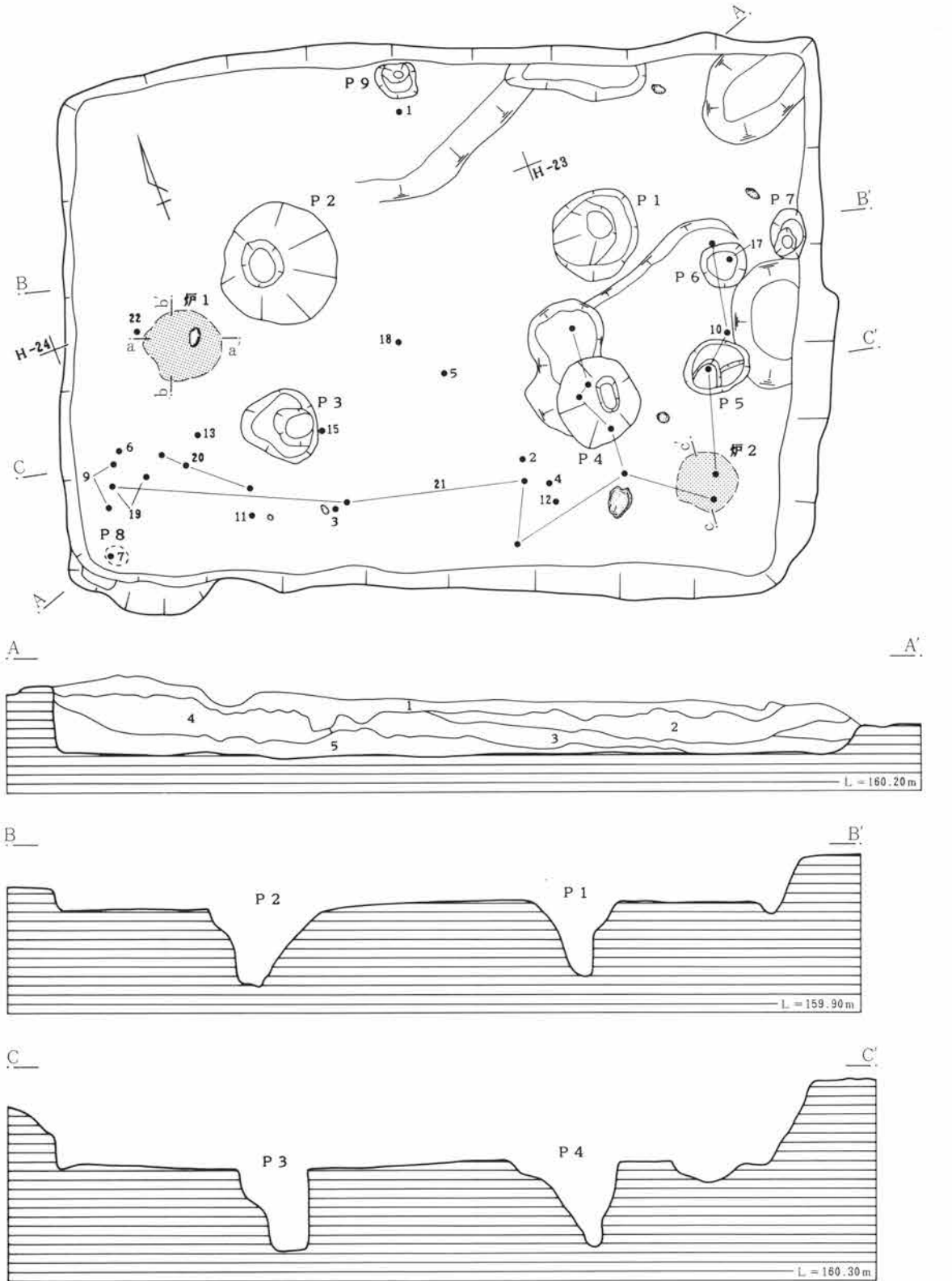
2号炉

1. 焼土ブロック 上部には炭化物が薄く堆積する。
2. 暗黄褐色土 ローム粒が多量に混入する。
3. 暗褐色土

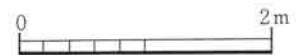


第113図 32号住居炉実測図

III 検出された遺構と遺物



1. 黒褐色土 2号墳石室構築の影響で固く締まる。
2. 暗茶褐色土 ローム小ブロック・ローム粒・黒色土小ブロックが多量に混入する。
3. 暗褐色土 ローム小ブロックが混入、炭化物も若干含まれる。
4. 暗褐色土 ロームブロックの混入が増加し、色調は茶みをおびる。
5. 暗褐色土とロームの小ブロックの混土層 炭化物が多量に混入する。



第114図 32号住居実測図

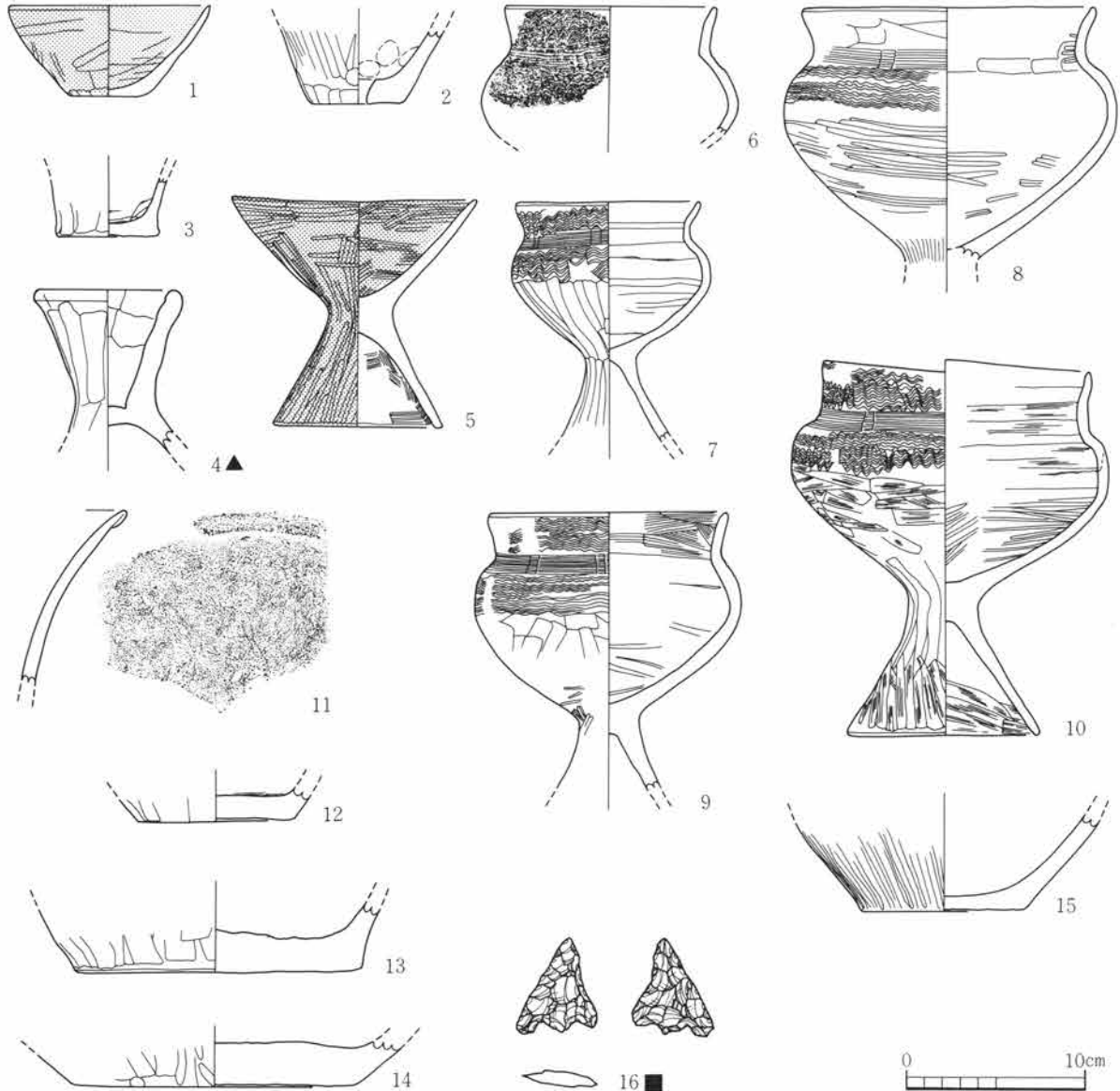
2 柱穴と壁面との間は浅く凹んでいた。P 7 は位置的には貯蔵穴の可能性もあるがやや小径であった。南西隅にはP 8 があり、台付甕(7)が入っていた。

- P 1 径87×86cm・深さ72cm
- P 2 径115×115cm・深さ72cm
- P 3 径75×70cm・深さ84cm
- P 4 径82×80cm・深さ82cm
- P 5 径66×54cm・深さ17cm
- P 6 径46×43cm・深さ19cm
- P 7 径50×35cm・深さ23cm
- P 9 径45×42cm・深さ24cm

遺物の出土状況 床面直上からの遺物は少ない。中央から壺(18)や高坏(5)が出土しているが、遺物全体の出土状況は、いわゆるレンズ状の堆積状態をなしていた。南東隅から出土した壺(21)がこれを端的に示しており、1 個体の土器が32cmのレベル差を以て長さ 3 m 程の範囲に大型破片となって散らばっていた。

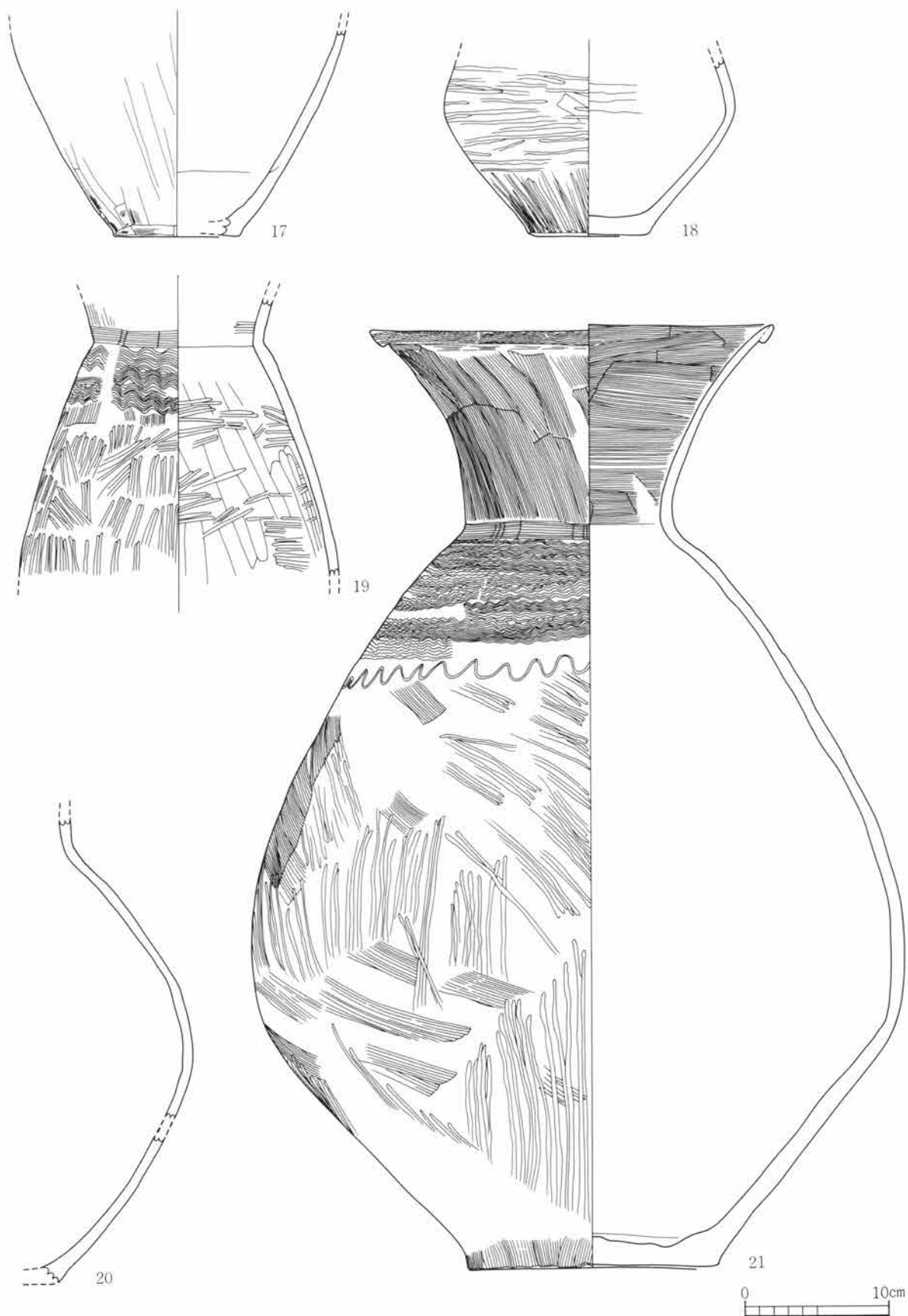
備考 P 8 は記録に不備があったため不明。

(徳江)

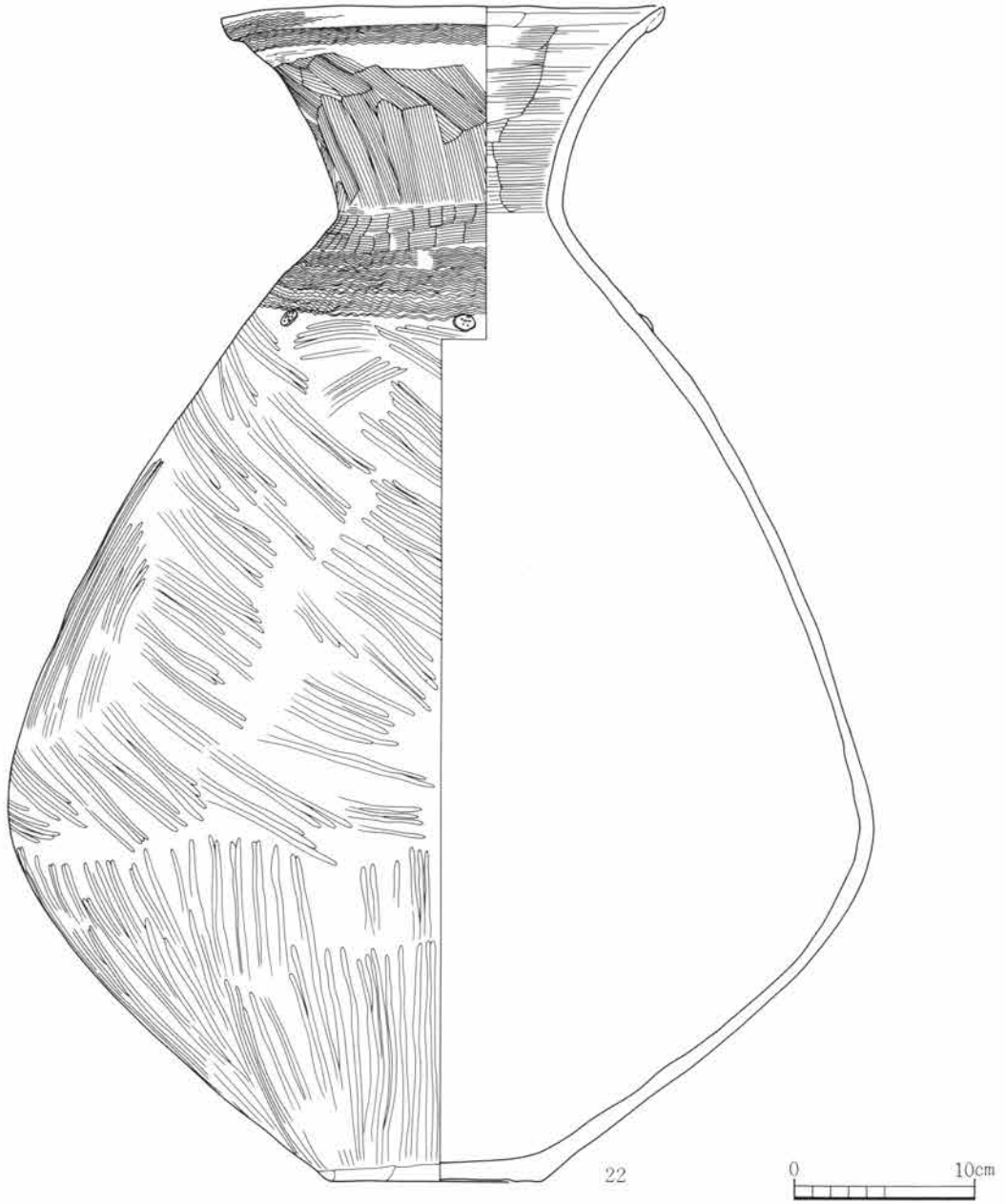


第115図 32号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第116図 32号住居出土遺物実測図(2)



第117図 32号住居出土遺物実測図(3)

III 検出された遺構と遺物

(2) 墓 跡

今回の調査では、弥生時代の墓跡は9基を調査したが、最初に、これらの遺構の調査の経緯について若干触れておく。

9基の中で、1～3号墓を除く6基は、いずれも弥生時代の竪穴住居と重複していた。該当の住居の調査時に、埋没土中から比較的整然とした集石を一箇所或は二箇所検出したが、この時点では明確な性格付けを行わないまま、住居遺構の床面や柱穴・炉を初めとした細部の検出に主眼を置いた調査を進行してしまった。

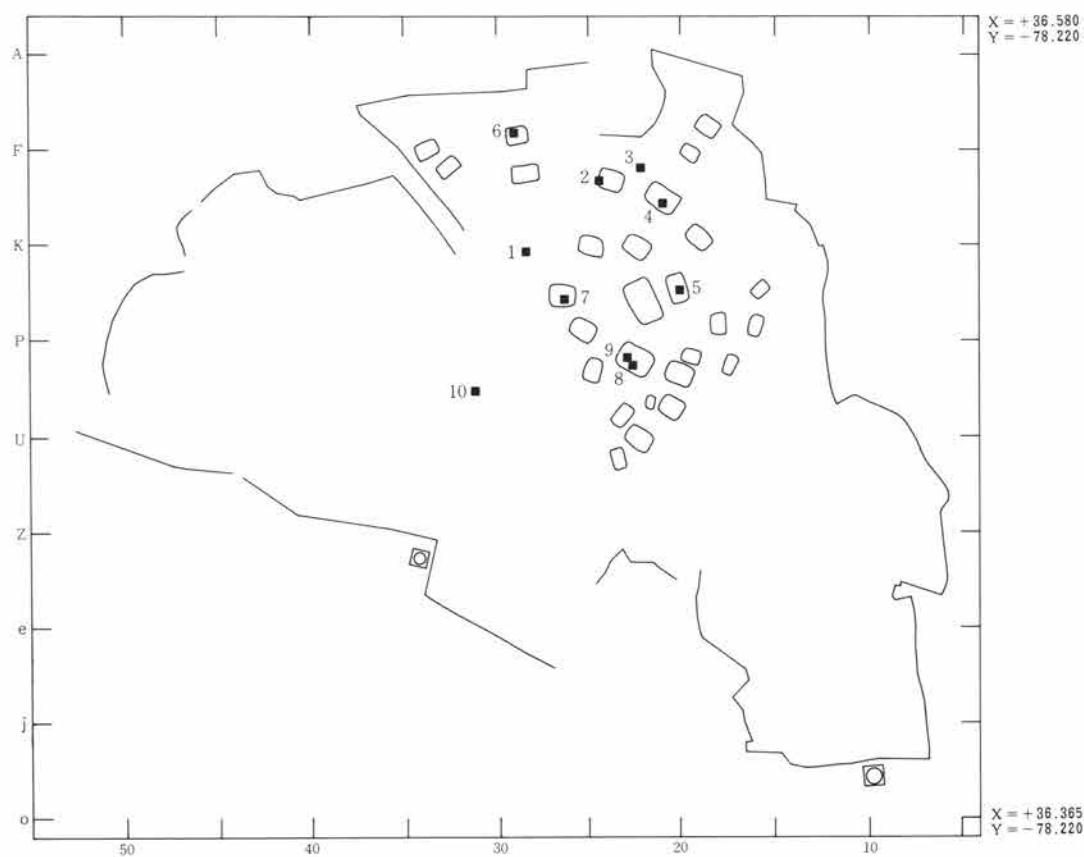
本遺跡の調査が終盤を向える頃、2号墳の墳丘下で検出した32号住居の調査に着手した。そして、この住居の西壁に重複し、集石を伴う土坑状の遺構を精査した。その時点になって初めて、それまで竪穴住居内で検出した集石は、二箇所で一対となり、土坑状の掘り方を伴う遺構であることが判明した。これらは、渋川市の有馬遺跡や有馬条里遺跡・中村遺

跡等で検出された、いわゆる礫床墓であり、住居の調査中に検出した集石は、小口部に見られる礫集積であると認識した。

また、21号墳の墳丘下に有った1号墓は、北側が削平されていたため、全体形状を把握することができず、判然としない点が残るものの、方形周溝墓であると考えられる。この墓も、21号墳の調査中にK-28グリッド地点、第119図の破線部分において集石が確認されており、他の礫床墓と同様の内部主体を有していた可能性がある。

上記のような経緯から、遺構の認定が不十分なままに調査してしまったため、礫床墓の全体形状を念頭に置いた情報の収集はなされることなく、掘り方の形状、埋葬部の状況、埋葬部や掘り方と礫集積の関係、埋没土・覆土の状態等重要な点が不明となってしまった。

以下、全体的なまとめを簡単に行った後に、各遺構毎に残された数少ない情報について記述してゆく。



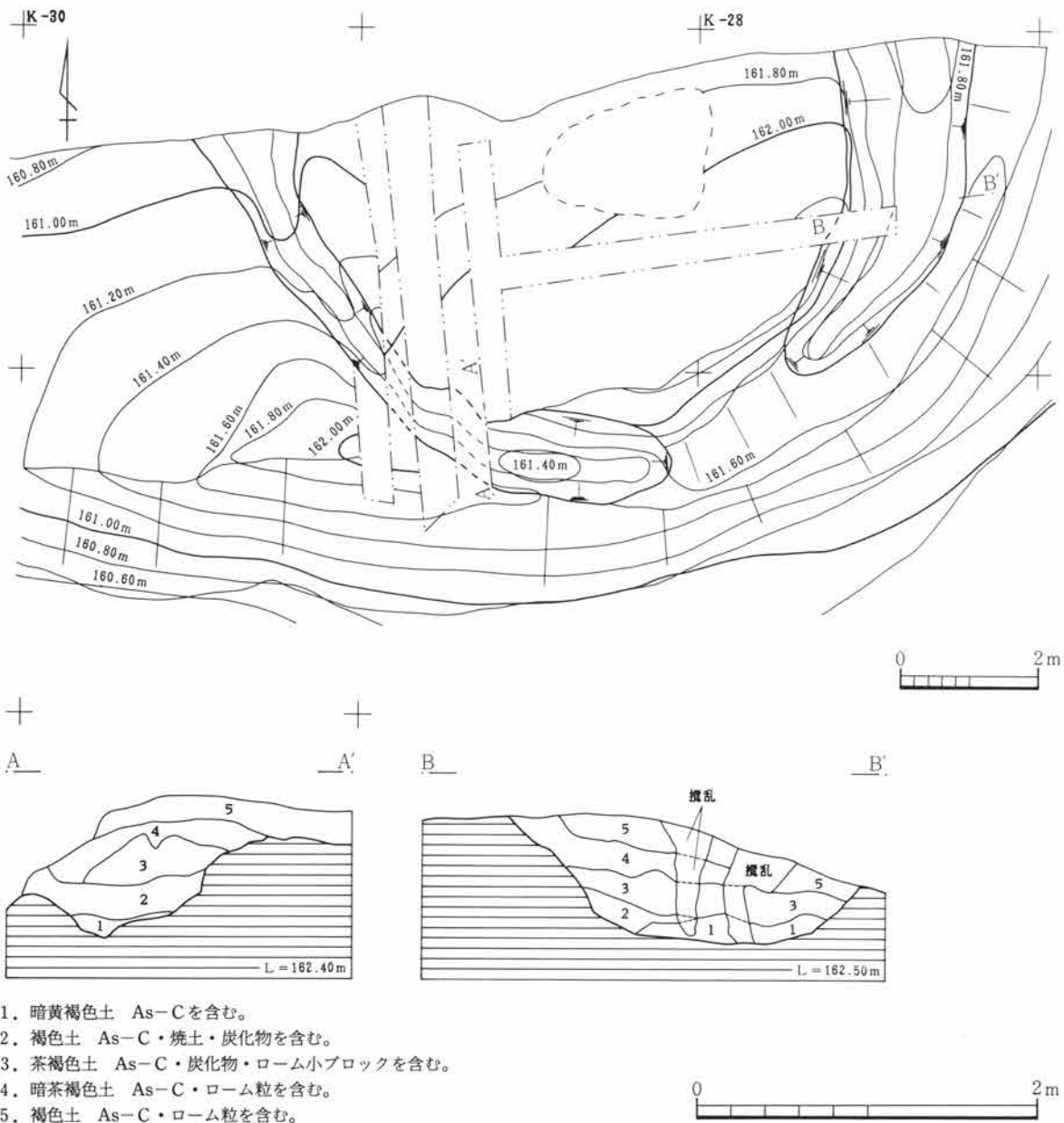
第118図 墓跡位置図

まず、分布状況であるが、本遺跡の竪穴住居は、調査区域の東側に集中する傾向にあり、微地形の高位部を中心に立地することは既に記述した通りである。墓跡は、その範囲よりもやや狭い占地傾向が看取できるが、調査区の北縁から6号墓が検出されていることを考えると、住居と同様に、調査区域北側の未調査区域にもその分布範囲が拡大するものと想定される。

形状については、1号墓が周溝を備え一辺8mを越える規模を有していたことが確認されたが、その

他では、3号墓には円形に巡る狭い周溝が伴っていた可能性がある。内部主体の礫集積だけが検出された2号墓については、周辺を詳細に精査したが周溝は検出されなかった。以上のことから、今回検出した礫床墓を内部主体に有する墓には、周溝の有無及びその巡る形状の相違により、三形態が存在していたことが推定される。

内部主体の礫床は、有馬遺跡における分類のA類（埋葬部に礫床を伴い、埋葬部を挟み両端に礫を集積する。）とC類（埋葬部を挟んで両端に礫を集積す



第119図 1号墓実測図

III 検出された遺構と遺物

る。礎床は伴わない)であった。

出土遺物の有ったものは2号墓のみである。その他については、重複した住居内の遺物出土状況を検討したが、該当する出土遺物は無かった。(徳江)

1号墓《第119図・図版52》

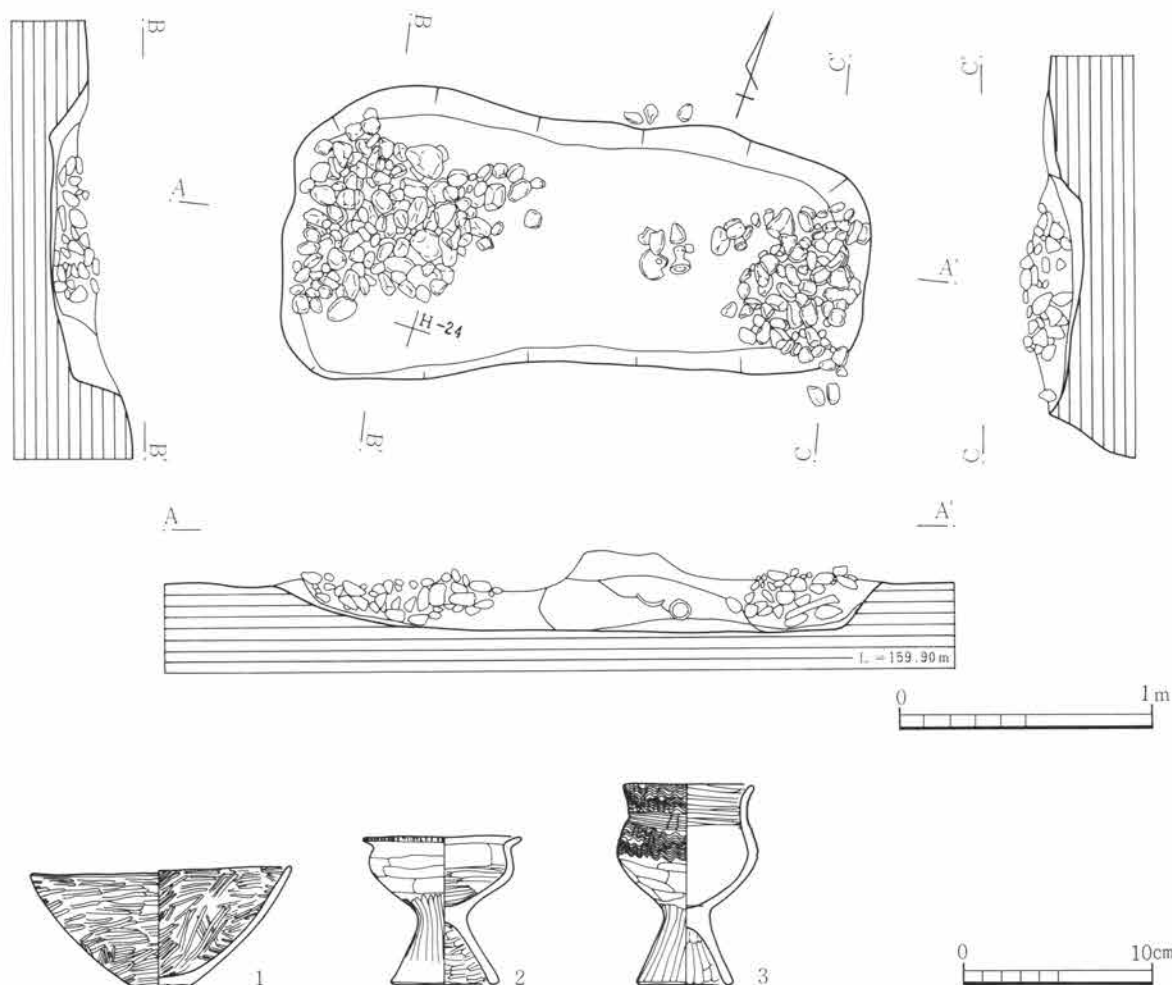
位置 K-28ポイント周辺に位置しており、21号墳と重複していた。

形状 北半部は削平されてしまっており、遺存部分の外縁部も、21号墳の墳丘を削り出す際に若干壊されていたため、全体の形状は把握できなかったが、長さ2.25m程のブリッジの両側に不定形な溝が検出された。溝の内縁部上端での規模は、東西方向8.15mを測るが、西側の溝は直線的な部分が目立ち、方形を意図したものであるのか円形を意図したもので

あるのか断定できない。また、ブリッジの数についても特定できない。

規模 東側の溝は、上端部幅2.10m・下端部幅0.75m・深さ70cm前後で、約5.50mの長さに亘ってローム層中に掘り込まれており、断面形は逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であったが、南側が徐々に立ち上がっており、ブリッジへと連なっていた。南北のレベル差は殆ど認められなかった。

西側の溝は、上端部幅1.55m・下端部幅0.70m・深さ70cm前後で、長さ9m程に亘って掘り込まれており、断面形は歪んだ逆台形状を呈する。底面はほぼ平坦であったが、南側の方が北側よりも50cm程高くなっており、東側の溝よりも低レベルにあった。直線的な部分が6m程有り、南側の3m程はやや内側に折れ曲がり、徐々に立ち上がってブリッジへと



第120図 2号墓実測図

連なっていた。

埋葬部 埋葬を裏付ける骨や歯等の資料は出土しなかったが、埋葬主体部については、東西の溝のほぼ中央部に、東西方向2.55m・南北方向1.80mの範囲に互って、ローム層中に小礫がめり込んだ部分が認められたことから推して、この部分に営まれていたものと考えられる。遺存状態が芳しくなかったが、有馬遺跡の形態分類のA類に相当するものと思われる。

備考 溝の覆土中位には焼土・炭化物が混入しており、古墳の築造に伴う整地作業によって埋められた可能性がある。

遺物は、弥生土器の小破片が数点出土したが、図示できる様な資料は無かった。 (飯塚)

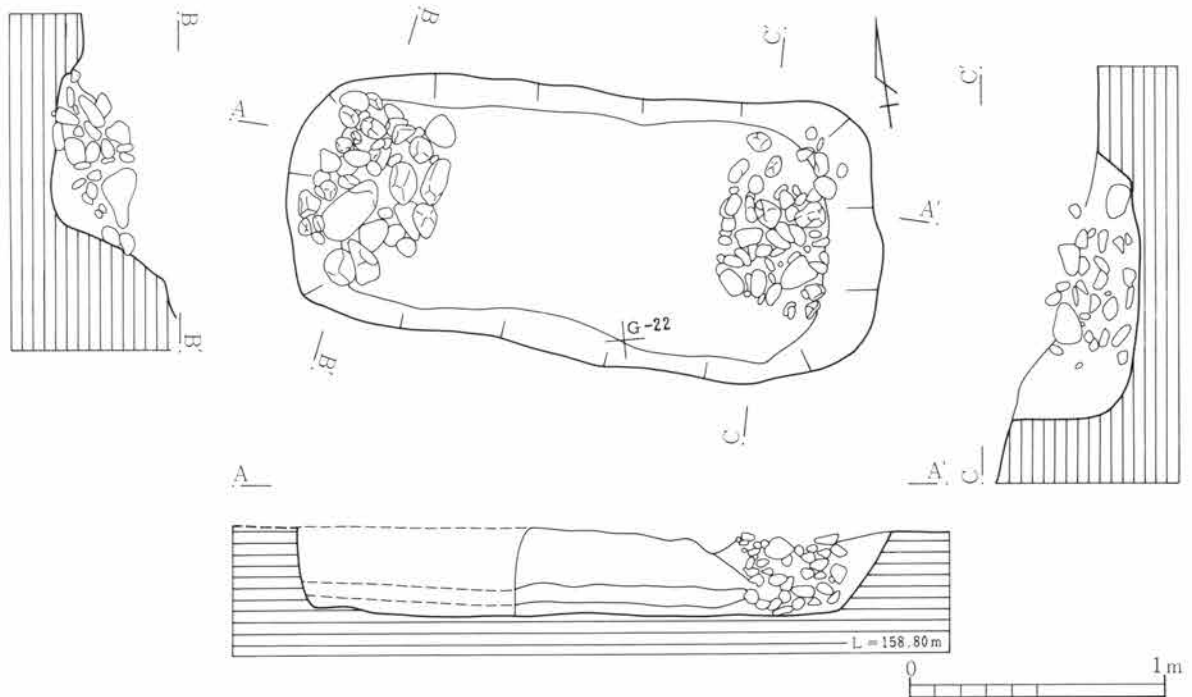
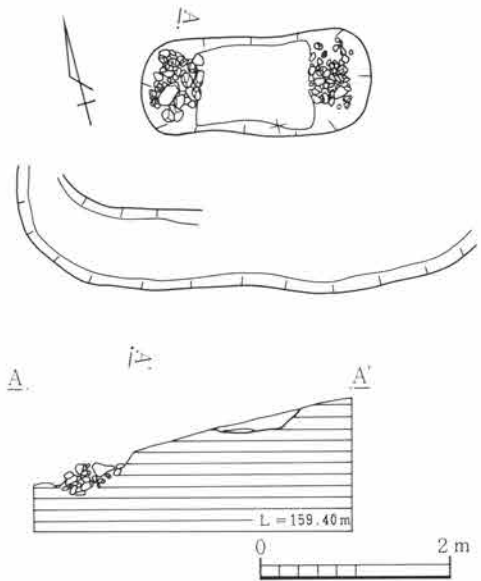
2号墓《第120図・図版52・56》(旧27号土坑)

位置 G-23グリッドに有り、32号住居の北壁と重複していた。

形状 矩形の掘り方を有し、両小口部に礫集積を備える。掘り方は、東西両端の幅にやや差異の生じる

矩形を呈し、規模は、長さ232cm・西端の幅117cm・東端の幅82cmを測る。底面は、東端に向けて緩やかに浅くなる。残存壁高は南壁の中央で約30cmを測った。長軸の方位はN-13°-Eである。

礫集積の状況 有馬遺跡の分類のC類に当たり、本遺跡では3・4・5・9号墓が同型と考えられたが、掘り方の検出に成功したのは2・3号墓跡だけである。東西の礫集積とも、両脇は土坑の壁面との間に



第121図 3号墓実測図

III 検出された遺構と遺物

間隙が有る。礫集積の規模は、西側が長さ71cm・幅62cm・残存高16cmで、東側は長さ42cm・幅58cm・残存高20cmである。使用された礫は円礫で、いわゆる河原石である。材質は粗粒安山岩が主体で、これはその他の墓跡でも同様の傾向にあった。

両礫集積の間の空間は、長さ118cm・幅52cmを測る。また、この間の埋没土は中央部分の上層に暗褐色土が見られ、下層に黄褐色土が堆積していた。

出土遺物 中央やや東寄りから小型高坏・鉢が出土し、この二つから20cm程離れた東側礫集積近くから小型台付甕が出土した。いずれも底面から3～10cm程離れていたが、他の遺跡例のように掘り方面の上に埋土が置かれ、底面の整形がなされていたとすれば、これらの土器は埋葬床面からの出土ということになる。(徳江)

3号墓《第121図・図版52》(旧28号土坑)

位置 G-21グリッドに有り、30号住居の北側に位置していた。

形状 2号墓と同様に、矩形の掘り方を有し、両小口部に礫集積を備えている。掘り方の規模は、長さ238cm・東端の幅107cm・西端の幅98cmを測る。長軸の方位はN-13°-Wである。

礫集積の状況 東側の礫集積は、長さ43cm・幅74cm・

残存高約30cmで、掘り方壁面との間には間隙が有り、軽石をまばらに含む暗褐色土が入り込んでいた。西側は、長さ54cm・幅74cm・残存高30cmであった。礫は、径10cm程のものが主体で、他の遺構と比較してやや大型のものが使用されていた。特に西側には大型のものが散見され、円礫よりも亜角礫に近いものが顕著であった。

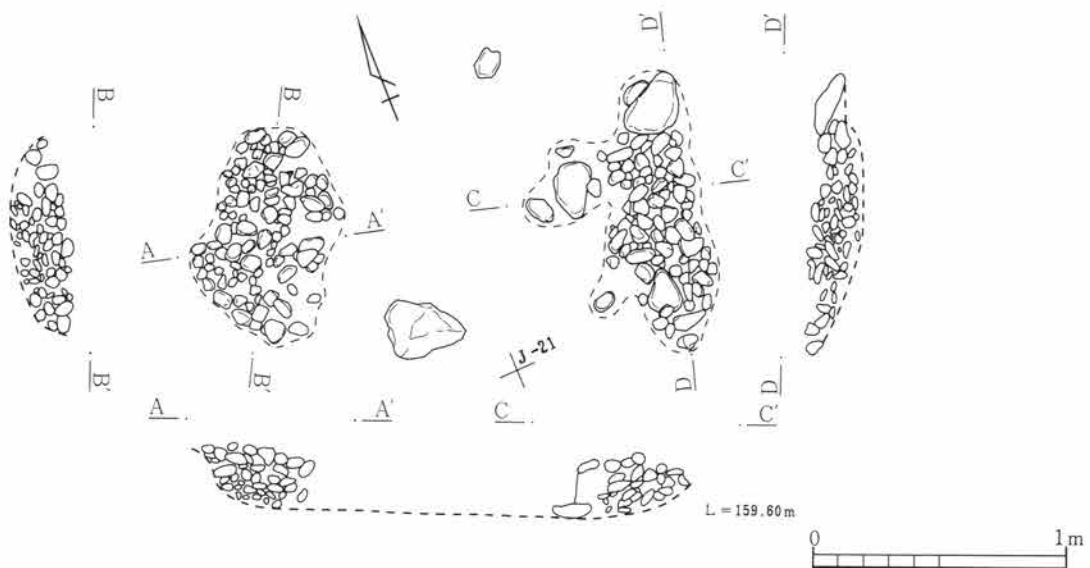
両礫集積の間の長さは110cmを測る。埋没土は3層に分離でき、最下層は埋葬床面を整形した土層とも考えられる。

備考 出土遺物は無かった。掘り方の南側に弧を呈する溝状の落ち込みが有る。斜面下位側に至っては堆積土の流失か或は後世の削平のためか途中から検出できなかった。検出長は4.6m、幅83cmで、白色軽石・炭化物をまばらに含む暗褐色土が堆積していた。墓跡との関係については判然としないが他遺跡の例から周溝となる可能性もある。(徳江)

4号墓《第122図・図版53》

位置 I-21グリッドに有り、30号住居のプラン内に納まっていた。住居の床面と集石下端との間には約20cmの間隔が有った。

形状 30号住居の埋没土との識別が困難で、全体形状を把握するに至らなかったが、東西方向に並ぶ二



第122図 4号墓実測図

箇所の集石が2・3号墓の礫集積に当たると考えられる。規模は、東西の礫集積の外端中央部を結んだ距離は2.62mを測り、その方位はN-22°-Eである。

礫集積の状況 西側の礫集積は、長さ約40cm・幅86cm・残存厚25cmを測る。径5cm前後の小円礫を積み上げているが、内端が比較的直立に近い残存であるのに対し、外端は緩やかな傾斜をなしており、掘り方壁面の形状を反映していると思われる。東側のものは、長さ約30cm・幅86cm・残存厚20cmである。この礫集積の北端には、長軸25cmの扁平な円礫が翼状に突出して置かれていた。両礫集積の間隔は約1.10cmを測り、東側寄りには長さ35cmの円礫が有り、これが遺構の底面を現していると考えられる。

備考 出土遺物は無かった。下位の30号住居の床面から小ピットを検出した。他遺跡の例に見られる礫集積周辺のピット、いわゆる小口穴とも考えられるが、調査時の観察が不十分で現時点では断定できない。
(徳江)

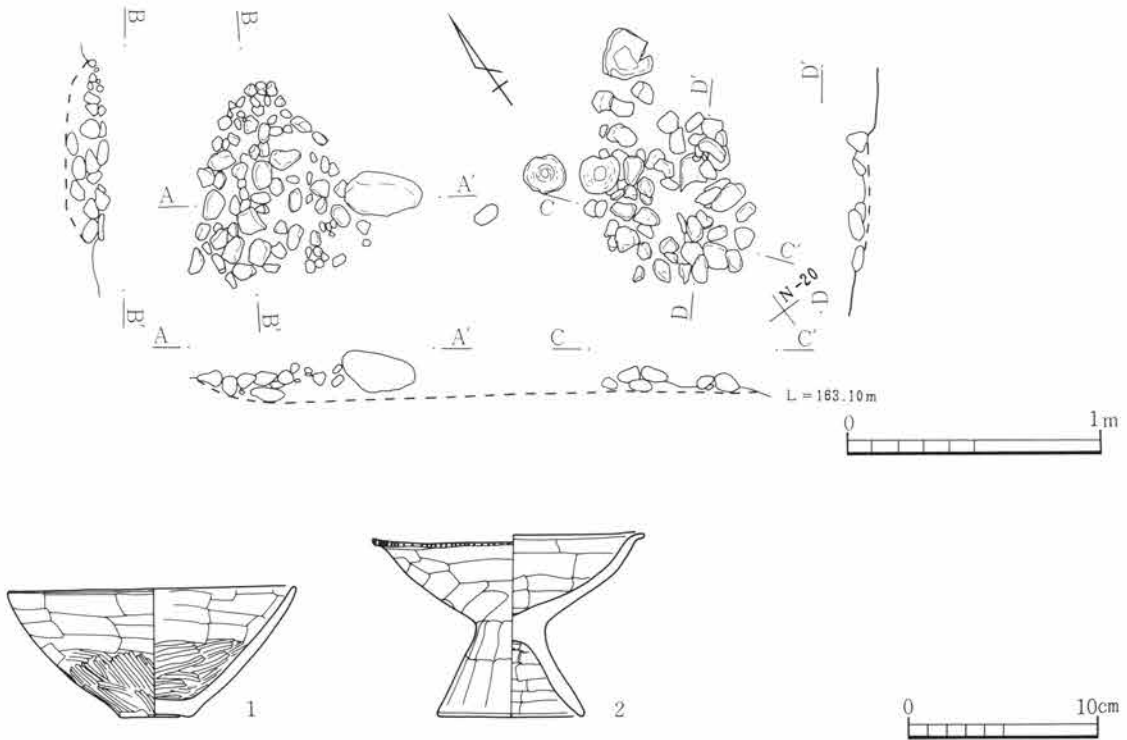
5号墓《第123図・図版53・56》

位置 M-20グリッドに有り、12号住居と重複していた。また、後出する3号墳の構築によって形状の変更を受けていたと考えられる。

形状 東西に並ぶ集石を二箇所検出し、これが共に小口部の礫集積と考えられる。両者の外端中央部を結んだ距離は1.46mを測り、その方位はN-38°-Eである。若干の掘り方が残存していたようであるが検出するに至らなかった。

礫集積の状況 西側の礫集積は、長さ62cm・幅82cmを測る。東側のものは、長さ60cm・幅80cmを測る。共に外端寄りの半分程が比較的整然としていただけで残存状態は不良であった。良好な部分でも礫の2・3石の重なりが見られただけである。両礫集積の間隔は約1.06mで、西側集積に接して長さ30cmの大型礫が検出されている。

出土遺物 東側礫集積寄りの底面に接して、高坏・鉢が共に倒立位で出土している。
(徳江)



第123図 5号墓実測図

III 検出された遺構と遺物

6号墓《第124図・図版53》

位置 E-29グリッドに有り、26号住居と重複していた。住居の床面と集石下端との間には約30cmの間隔があった。北側へ0.9mで調査区域外となる。

形状 小口部の礫集積と考えられる集石を一箇所検出した。他例のようにこれと対をなす集石を検出し得なかったが、礫集積が南北方向に配されていたとすれば、もう一箇所は調査区域外に及んでいた可能性が高い。遺構の方位はN-0°-Eを想定できる。

礫集積の状況 長さ53cm・幅84cmの範囲に、径2~5cm前後の比較的小型の円礫が置かれていたが、残存状態は劣悪であった。(徳江)

6号墓



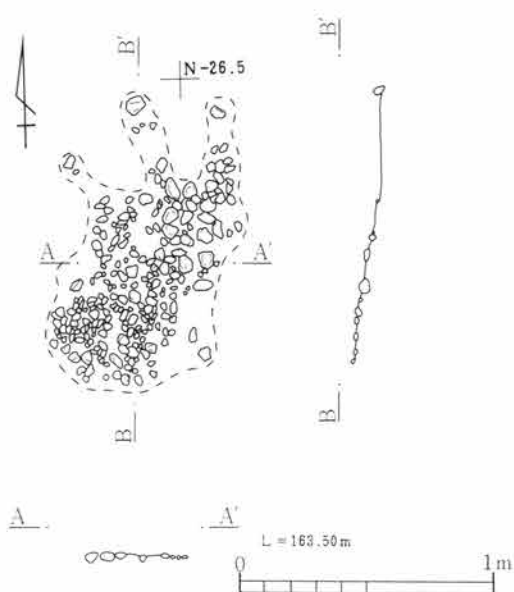
7号墓《第124図・図版53》

位置 N-25グリッドに有り、2号住居と重複していた。住居の床面との間隔は15~25cmである。

形状 6号墓と同様に集石を一箇所検出した。礫集積の一端と考えられるが、対をなすべきもう一箇所は検出できなかった。埋葬主体は西側に延びていたと思われ、遺構の方位はN-70°-Wを想定することができる。

礫集積の状況 長さ54cm・幅約100cmの範囲に、礫が一重に置かれていた。全体に径3~4cmの小円礫が多く、大型のものでも径11cm程であった。(徳江)

7号墓



8号墓《第125図・図版54》

位置 Q-22グリッドに有り、北側1.1mには9号墓が位置しており、共に24号住居のプラン内に納まっていた。住居の床面との間隔は約10cmである。

形状 有馬遺跡のA類に準じており、埋葬部に礫床を伴い、小口部には礫集積が見られた。集積は礫床を挟んで構築されたと考えられるが、東側のそれは礫床の一部と共に削平されており、全体形状は把握できなかった。

礫床の状況 礫床の規模は、残存長120cm・幅は50~58cmを測った。使用された礫は径5cm程の円礫が主体で、26cmの厚さに間隙なく詰め込まれていた。長軸の方位はN-23°-Eである。

第124図 6・7号墓実測図

礫集積の状況 小円礫が、長さ52cm・幅76cmの範囲に広がっており、残存厚は10cmである。残存上面と礫床面とは約15cmの段差をなしていた。(徳江)

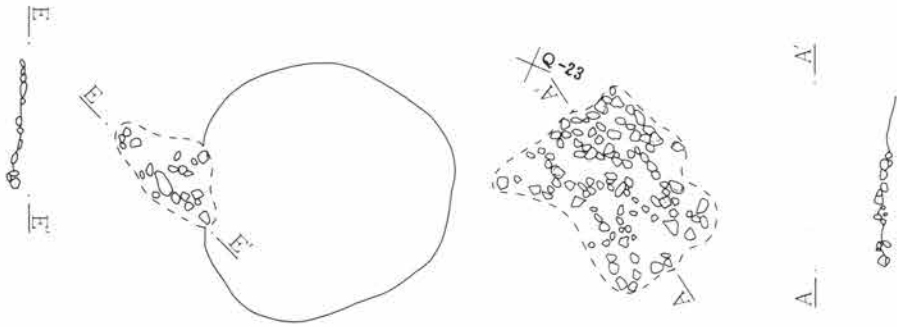
礫集積の状況 東側は、長さ82cm・幅82cmの範囲に散漫に広がっていた。西側は、長さ36cm・幅39cmの小範囲に有り、一部が残存したものと考えられる。(徳江)

9号墓《第125図・図版54》

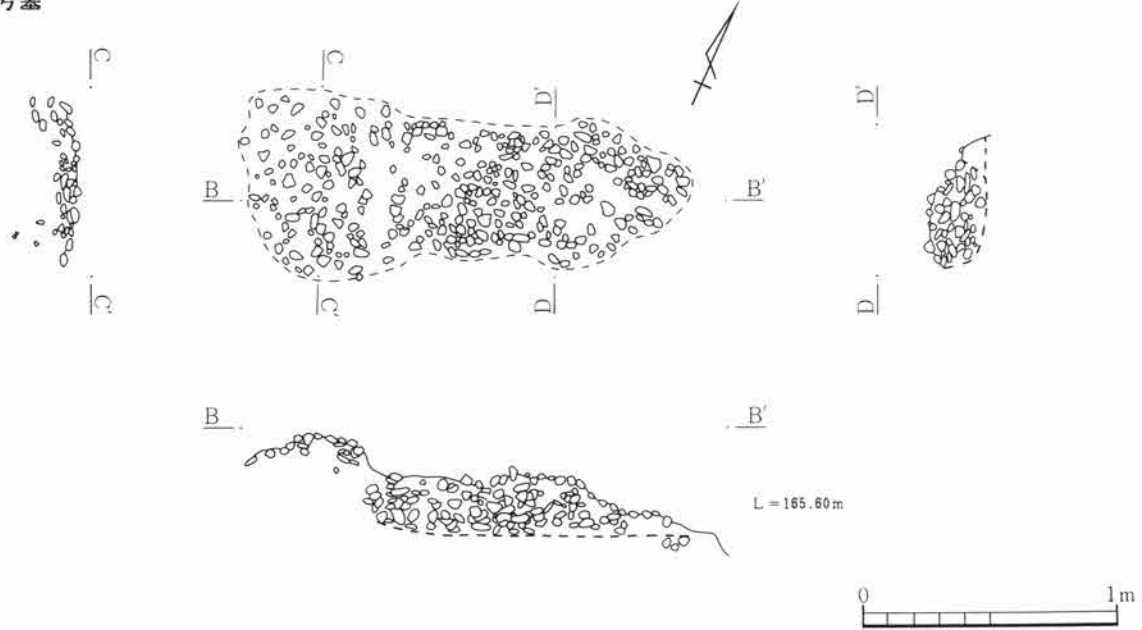
位置 Q-22グリッドに位置する。集石の下端と24号住居の床面とは、15~20cm離れていた。

形状 両小口部の礫集積を検出した。残存状況は極めて悪いが、長軸の方位は8号墓とほぼ平行していると考えられる。この二基は、周溝等の区画の存在は確認できなかったが、同一施設内に築造された埋葬施設であった可能性がある。

8号墓



9号墓



第125図 8・9号墓実測図

III 検出された遺構と遺物

(3) 溝跡

3号溝《第126図、図版55・56》

位置 O-38ポイント周辺で、12号墳の周堀を調査中に検出したものであるが、地氾りの影響が最も著しい部分に位置していたことに加えて、排水溝設置工事によって破壊されており、遺存状態が極めて悪かった。

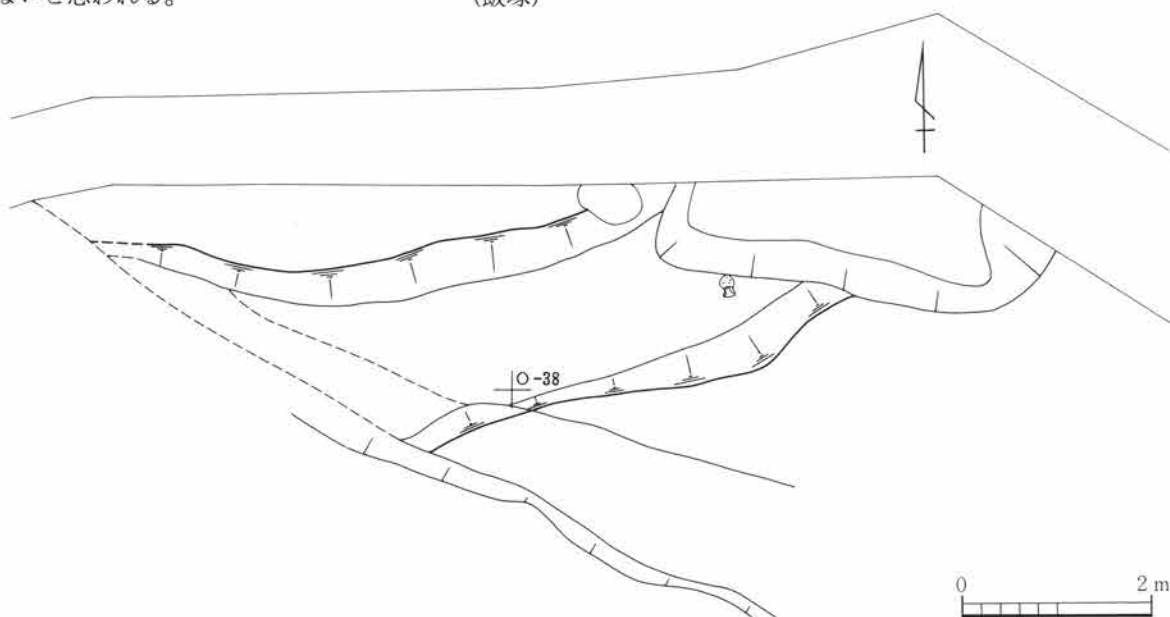
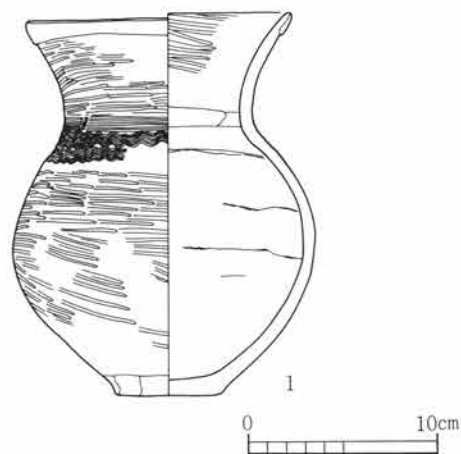
形状・規模 ローム層に掘り込まれた断面形は逆台形状を呈し、上端部幅200~220cm・下端部幅130cm・深さ30~40cmを測る。6mの長さに亘って検出したが、東側は排水溝によって破壊され、西側は地氾りに伴う陥没によって、端部を検出することができなかった。現存部の走向はN-80°-Eであったが、北西部の一部が若干折れ曲がる様な状況を呈していた。底面はほぼ平坦で、東西のレベル差も、東側が若干高い程度であった。

埋没土 覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物の出土状況 口縁部が少し欠けているが、ほぼ完形の壺が、東側の底面直上で横転した状態で出土した。

備考 検出状況が芳しくなかったために、単独の溝であるのか或は周溝墓の一部であるのか断定できない。しかし、集落に付随する環濠である可能性は少ないと思われる。

(飯塚)



第126図 3号溝実測図

(4) 土坑

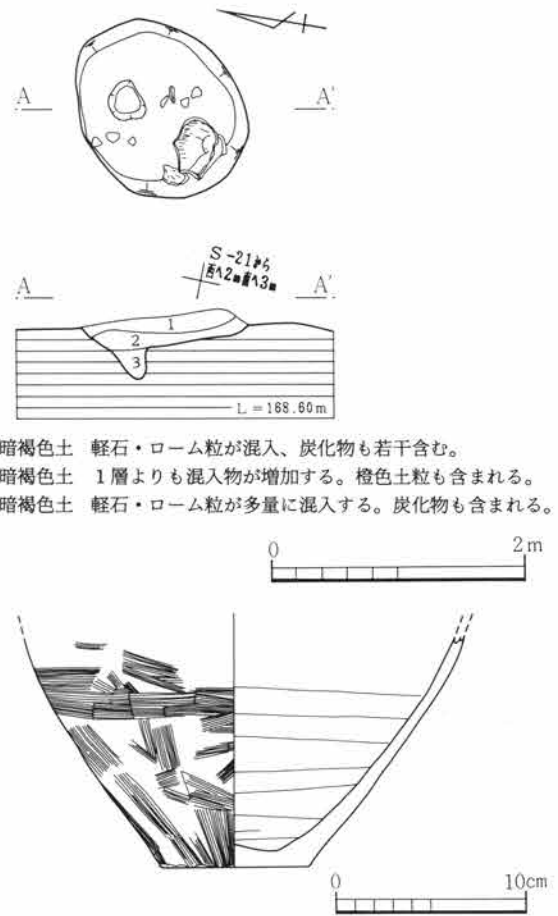
1号土坑《第127図、図版》旧22号土坑

位置 S-21ポイントから南へ2m

形状・規模 東西方向が若干長いが、径約150cmの不整形円形を呈する。深さは29cmを測り、底面はほぼ平坦であったが、北側に径30cm・深さ11cm程の小さな穴が穿たれていた。

遺物の出土状況 南西部の壁際から壺の底部が横転した状態で出土した他に、破片が7個検出された。

備考 覆土は、暗褐色土を主体としていたが、上層部には炭化物が混入していた。土壌分析は行っておらず、性格は不明である。
(飯塚)



1. 暗褐色土 軽石・ローム粒が混入、炭化物も若干含む。
2. 暗褐色土 1層よりも混入物が増加する。橙色土粒も含まれる。
3. 暗褐色土 軽石・ローム粒が多量に混入する。炭化物も含まれる。

第127図 22号土坑実測図

III 検出された遺構と遺物

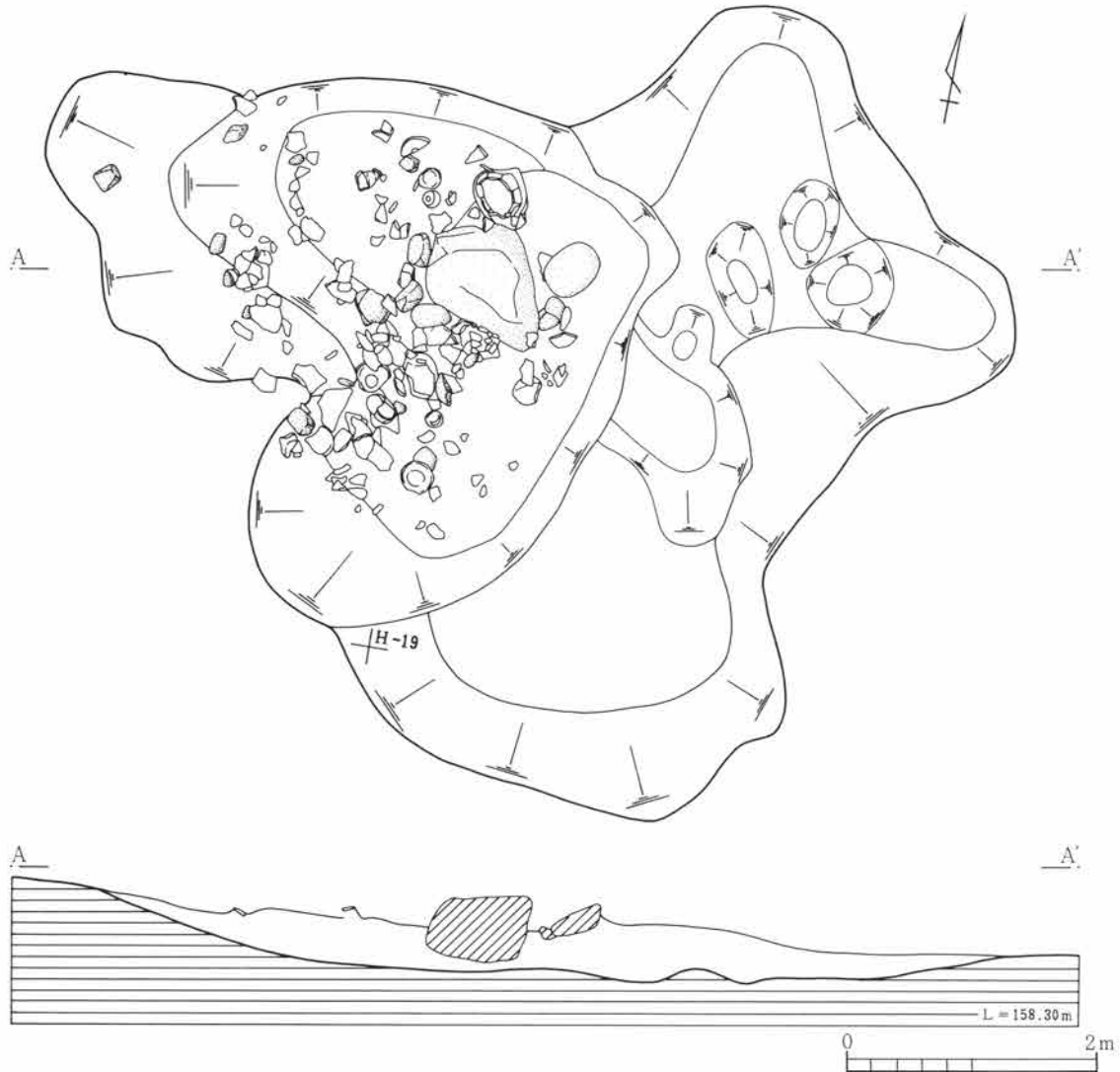
(5) グリッド出土の遺物

本遺跡では既述の通り、弥生時代後期の竪穴住居28軒を検出した。調査の過程では、住居が検出されなかった西側部分をも含めた、調査区全域から多数の弥生土器片が出土している。本項では、その中で遺構を伴わない地点における遺物の出土状況について簡略に記述しておく。

G-18グリッドは、4・32号住居に近接する地点で、これより北側は地形の傾斜の度が増し、9・10号住居に至る傾斜変換点に位置している。遺構確認作業時に、東西方向3.30m・南北方向2.80mの範囲から多数の土器片が出土したため、住居或は土坑の存在を想定したが、精査の結果、底面に小さな起

伏を持った凹地が確認できた。その形状からは人為的なものとの断定は困難である。この地点における表土の堆積は薄く、上層は後世の根切り溝により攪乱を受けていた。埋没土はローム粒や炭化物粒を含む暗褐色土で、この層中から壺・甕・高坏等の各種土器が破片状態で多数の礫と共に出土している。埋没が進行する過程で斜面の上位から入り込んだ状態のもの、底面から間層をおいたものが多数ある。これらの中には、第129図に示したような大型破片も有ったが、形状の復元できるものは無かった。結論的には、凹地に土器を投棄した状況が考えられる。

この他に土器が集中して出土した地点としては、縄文土器が多数出土した調査区北東斜面の中で、3



第128図 20号土坑実測図

3. 弥生時代の遺構と遺物

号住居の北側、グリッドナンバーのJ～M-14～17周辺がある。ただし、土器は小破片で、出土量も縄文土器よりも少量である。この内、K-14グリッドからは、第130図の珪質凝灰岩製管玉が出土している。18号住居の出土例から弥生時代の製品と考えられる。

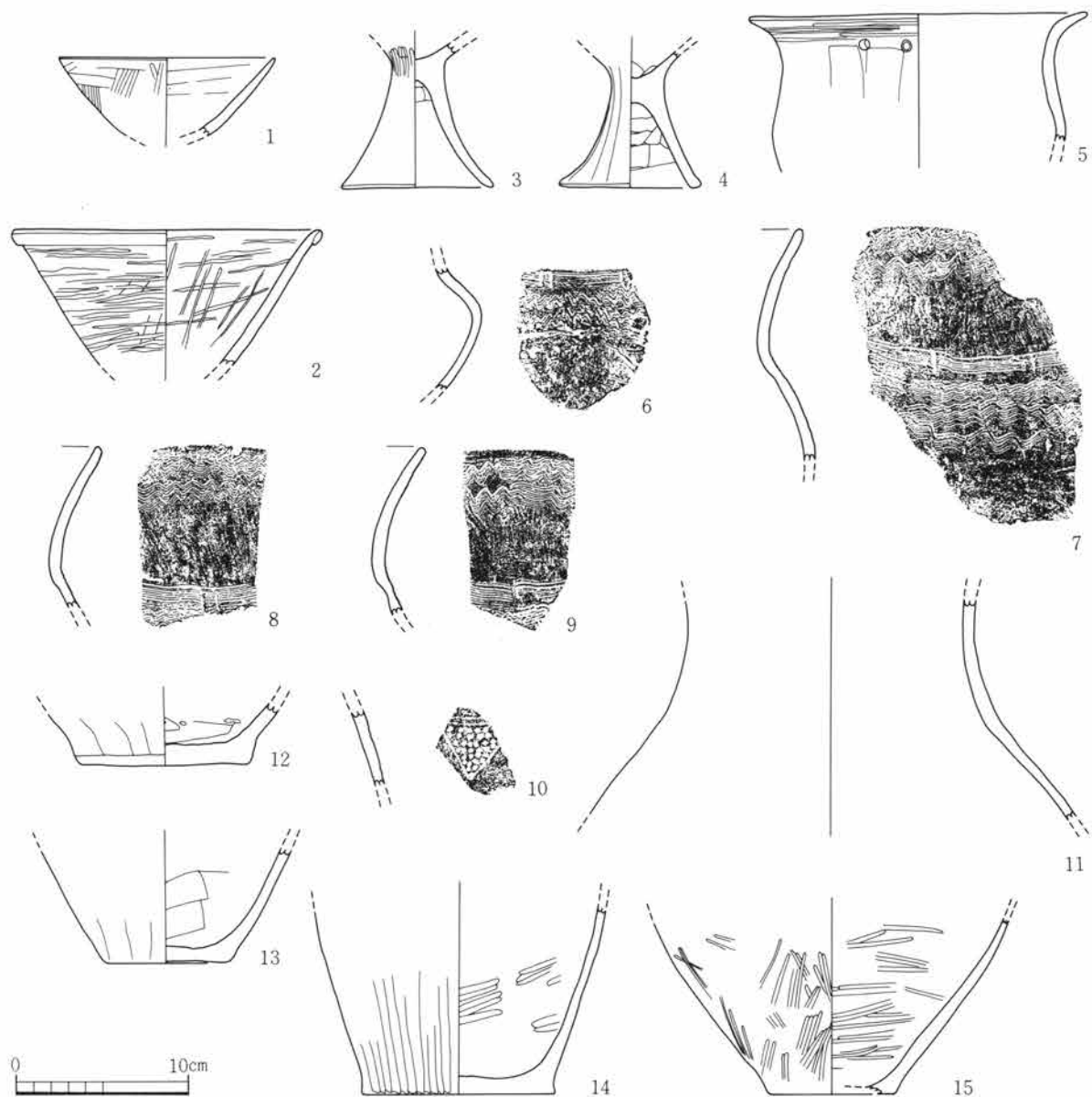
W-12グリッド周辺は、調査区の南東斜面がその傾斜角度を若干弱める地点で、少量の土器片が出土した。W-12グリッドでは集石も認められたが、時期の確定が困難で、他の基跡に見られた礫集石との比較はできなかった。

4号住居の北側約3mの距離にあるI-18・19グリッド周辺は、標高160m前後を測る。傾斜変換点に当たり、これから北側は9・10号住居に向けて急傾斜面が形成されている。この地点からの遺物の出土量は3号住居の北側と比較すると少量であったが、

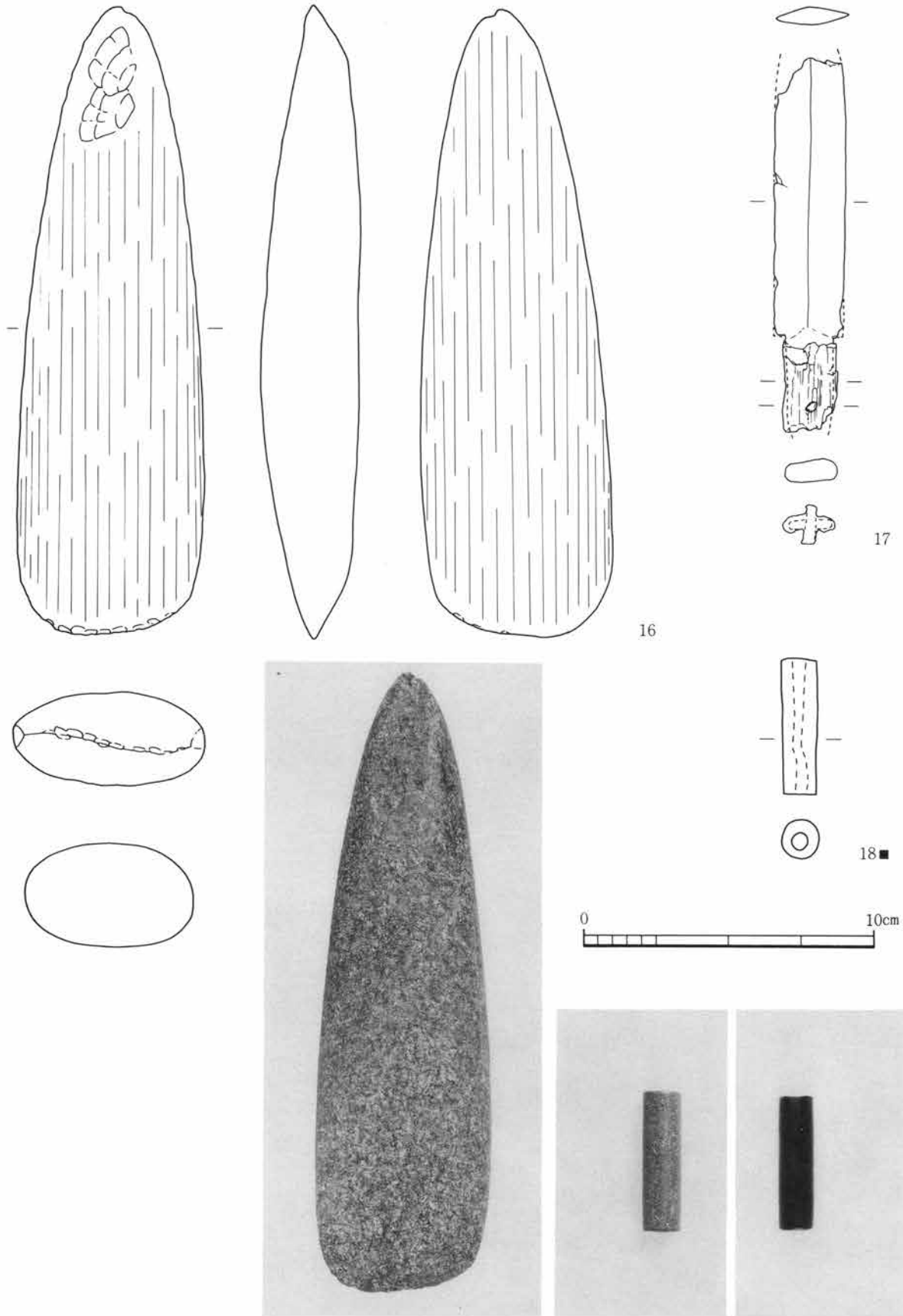
I-19グリッドからは第130図の鉄剣が出土した。また、これから西側へ2.5mのI-18グリッドの暗褐色土面では、焼土塊が東西方向に二箇所並んで確認された。近年のものとは考え難いが、時期の確定は困難であった。西側のものは範囲が広く、南北方向約2m・東西方向約1.4mの大きさで、楕円形を呈していた。上層の厚さ5cm程の焼土は固く締まり、周辺の土層も赤く硬化していた。東側のものは、直径約0.7mと直径約0.6mの小ブロックが二箇所、南北方向に並んでいた。(徳江)

※第130図の磨製石斧(16)は、18号墳の中央部から出土したものである。編集が終了した後に、縄文時代の遺物として取り扱うのが適切であるとの教示を受けたが、訂正できなかった。(飯塚)

III 検出された遺構と遺物



第129図 20号土坑出土遺物実測図



第130図 グリッド出土遺物実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 古墳

1号墳〈第131図〉

1. 位置と調査前の状態

D-27ポイント周辺に位置していた。調査対象地の北端に位置しており、大半が調査区域外に当たる為に部分的な資料を得られたに留まった。北西部が少林山達磨寺本堂裏の石垣工事に伴って掘り取られてしまっていたが、原形を比較的良く留めた古墳である。傾斜変換点付近に立地しており、傾斜角は10°程であり、標高は155m前後である。古墳群の中では、南東部に2号墳が接しており、西側と南側には5m程の距離を空けてそれぞれ7号墳・21号墳が所在した。また、北側に広がる傾斜角20°程の急斜面にも古墳の存在が確認されている。墳頂部には樺の大木が生い茂っているが、数箇所で天井石及び葺石と考えられる石材の露出も認められる。

2. 外部施設

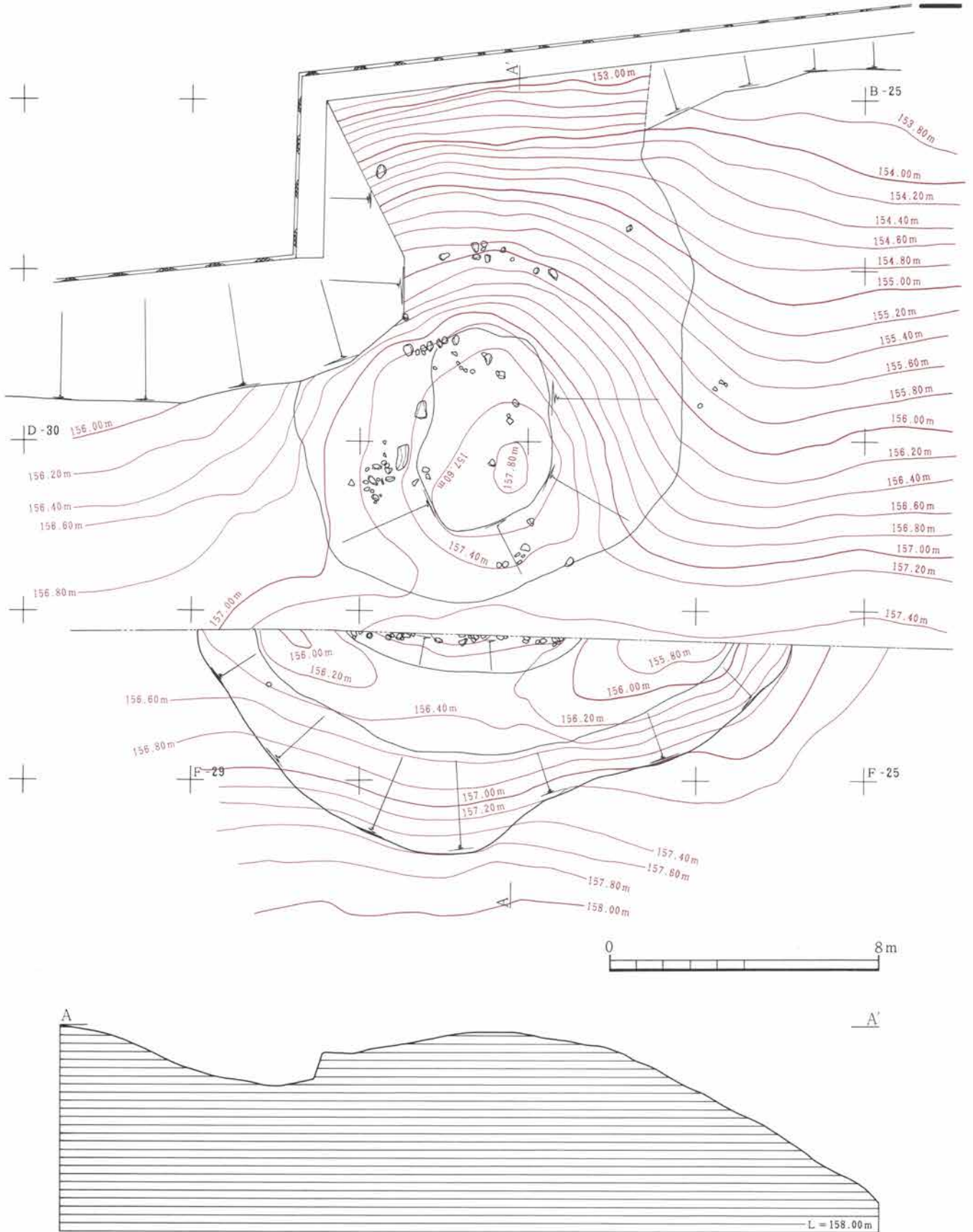
周堀の一部を発掘したものであり、詳細な全貌は不明であるが、現況測量の成果及び現状観察の結果から推して、径13m程の円墳と考えられる。周堀の底面から墳頂部までの高さは現状で150~160cmを測る。

周堀の外縁は20°前後の傾斜を以て掘り込まれており、底部での幅は230~300cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、最も高い南側の標高が156.3mで、東端部よりも西側の方が約20cm高くなっていた。底面から約20cm上部には、浅間B軽石の純層が約10cmの厚さで堆積しており、下部の黒褐色粘質土中からは崩落した葺石及び21号墳に樹立されていたと考えられる埴輪片が若干出土したが、本墳に直接伴うと考えられる遺物の出土は認められなかった。

3. 内部構造

未発掘ではあるが、天井石と考えられる石の並び方やピンポールでの探針調査に拠れば、西側方向に開口する横穴式石室を持つと思われる。(飯塚)





第131図 I号墳墳丘実測図

III 検出された遺構と遺物

2号墳《第132～154図、

図版58～61・96～106・145・146・155》

1. 位置と調査前の状態

H-23ポイント周辺に位置していた。調査区北東部分の傾斜変換点付近に立地しており、径9m・高さ2mの墳丘上には樺の大木がどっしりと根を下ろしていたが、保存状態の良い古墳であることは一目瞭然であった。主体部は開口しており、半ば土砂に埋まっていたが、奥壁に線刻された地藏菩薩像に対する信仰心は厚く、お賽銭としてあげられた昭和～平成元年の通貨が散らばっていた。また、墳丘上にも多くの磁石が納められており、妙見信仰に基づく方位除けの場所としても活用されていた。以上のような状況にある為に、現状保存を切望したが、工事との調整が図られなかったために万やむを得ず移築保存を前提として発掘調査を行った。

古墳群の中では北東隅に占地しており、南側に3号墳、南西側に21号墳がそれぞれ5m程の距離を空けて営まれ、北西側には1号墳が隣接していたが、東側は谷地形に移る為に他の古墳は構築されていなかった。標高は157～161mである。

なお、本墳は、「上毛古墳総覧」に碓井郡八幡村48号墳として搭載されているものであり、「タイヨウ塚」「天頭塚」とも呼ばれていた。

2. 外部施設

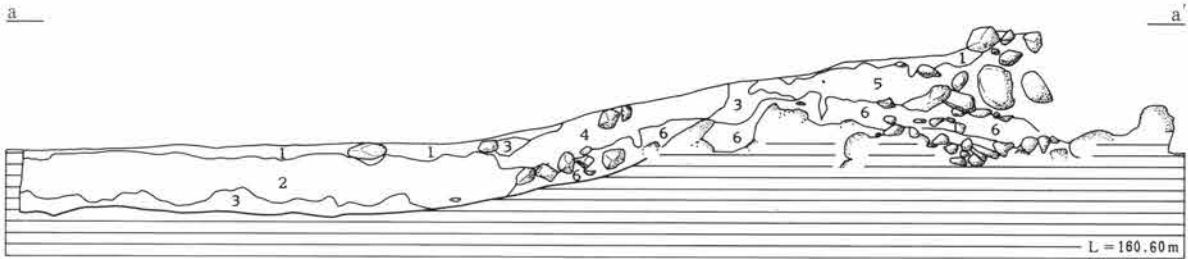
杉林として利用されていた西側及び斜面下位の北側・東側では削平されており、南側も農道となっていた為に遺存状態は極めて悪かったが、ローム層中に掘り込まれた周堀の下部が確認された。上幅2.8

～6.0m・下幅2.0～2.8m・深さ20cm前後で、断面形は凹レンズ状を呈し、内縁部は基壇葺石の根石と連続していた。確認された範囲での外縁部上端での最大径は約30mで、転落した葺石や埴輪の出土状況から推して、環状に巡っていたと考えられるが、古墳構築に当たっての地山整形は、北北東傾斜地の山側を、石室構築部分を中心に、僅かに削平した程度であったと思われる。

基壇は、墳丘が完成してから付け足されたものであり、盛土が墳丘の葺石を包み込んでいた。約50°の傾斜で高さ70cm程立ち上がる斜面には葺石が葺かれており、幅1.2～1.3mのテラス面となっていた。表面は水平でなく、10～15°の傾斜で墳丘側に上っていた。南側がやや歪んでいるが、基壇葺石の根石部分での径は約18mである。

石室開口部の前面は、テラス面が30cm程低くなっており、前庭が付設されていた。平面形は右側が開いた台形状を呈し、上底168cmで、下底には明確な区画は認められなかったが、下底300cm・高さは204cm前後と考えられる。整地面の上に30cm程盛土をして底面を整えてから、左右の側壁には2～3段の葺石を施していた。石室入口には、羨道両側壁の間に厚さ20cm程の平石が、平面がほぼ垂直になるように横たえて据えられており、上面は前庭の底面よりも5cm程突出していた。

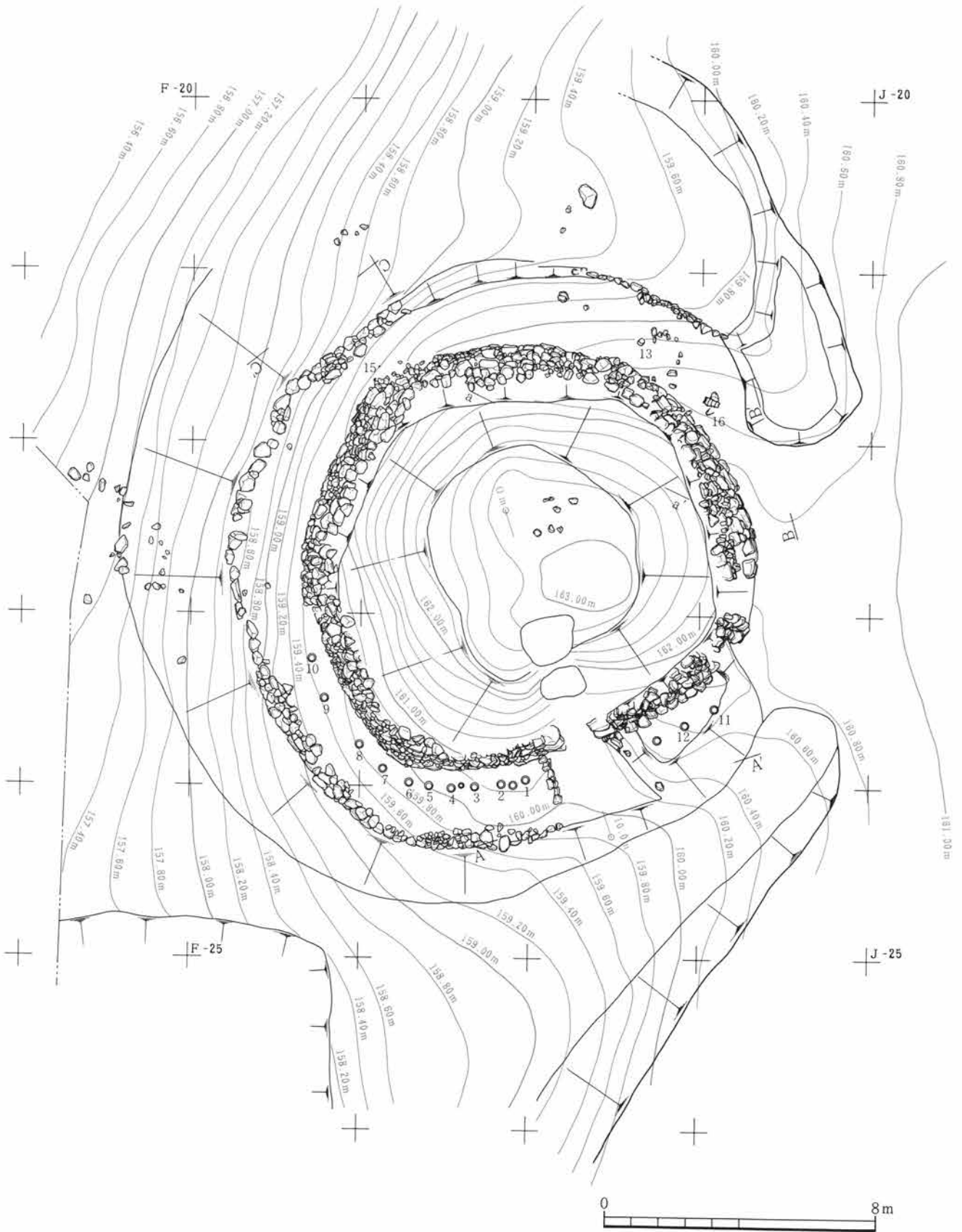
テラス面では、墳丘裾周りから60cm程外側に樹立されていた埴輪列が確認された。石室の左側10本・右側2本の計12本がほぼ原位置を保った状態で検出された。それぞれの埴輪は、60～70cmの間隔を空け



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1. 耕作土 | 4. 暗褐色土 柔らかく、締まりが無い。 |
| 2. 暗褐色土 A軽石を多量に含む。 | 5. A軽石層 |
| 3. 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。 | 6. 黒褐色土 遺物を多く含む。 |

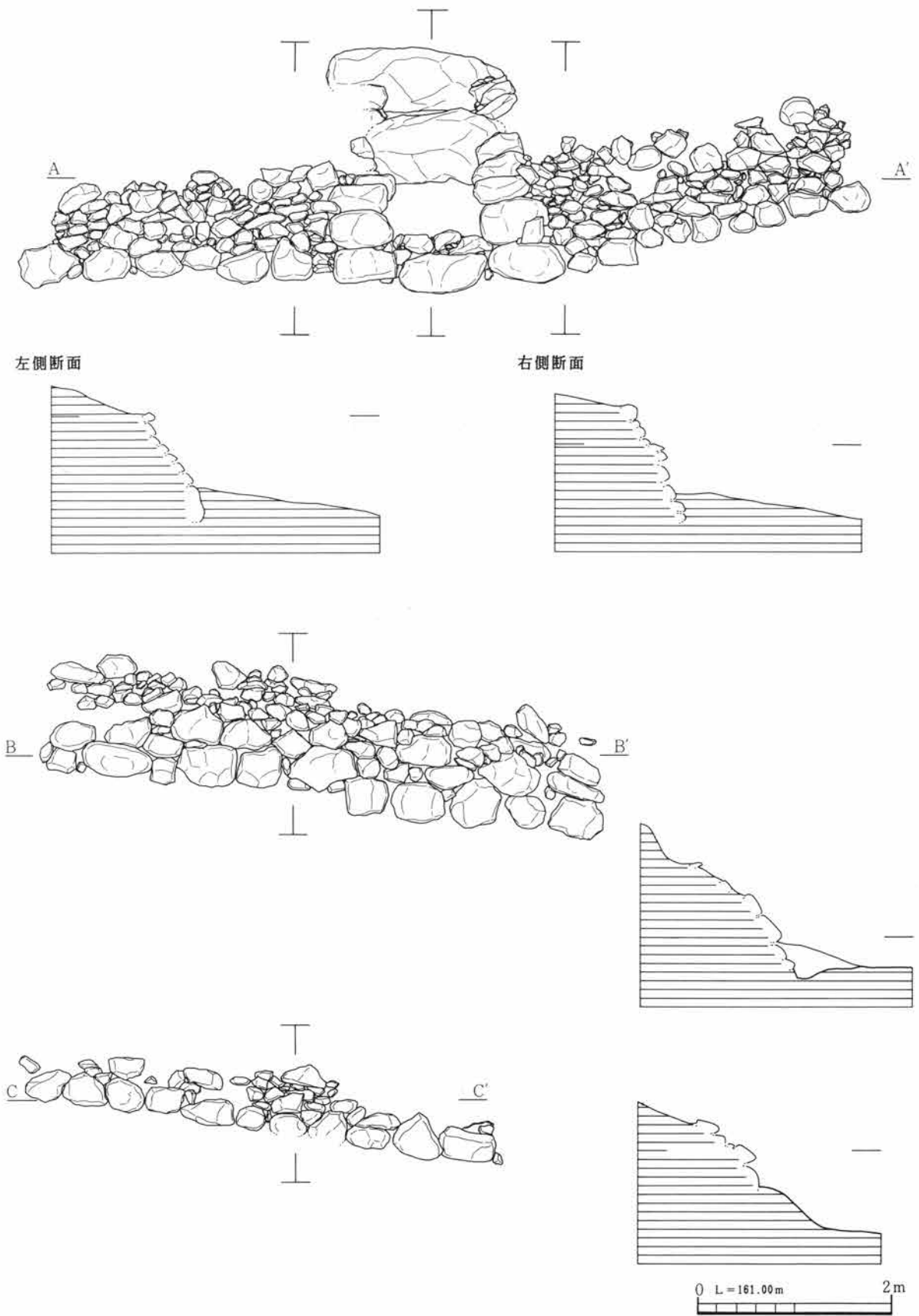


第132図 2号墳前庭地層断面実測図



第133図 2号墳丘実測図

III 検出された遺構と遺物



第134図 2号墳葺石実測図

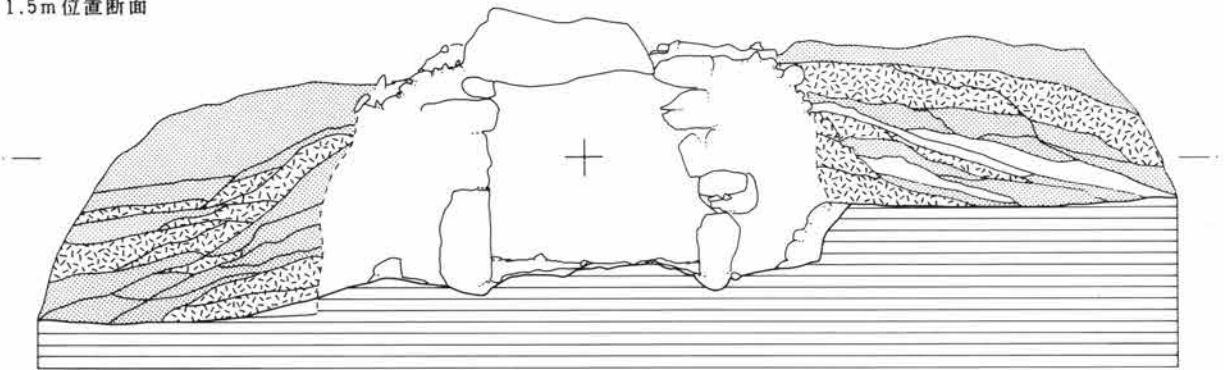
て、個別に、20cm程の深さで底径よりもやや大きめの穴を掘って据えられていた。

墳丘は、石室の開口方向である西南西部分が前面観を意識した為か直線状になり、背後に当たる東側部分もやや歪んでいた。墳丘葺石根石部分での径は約13mであり、高さは、前庭との比高差が約2.5mで奥壁上に架けられた天井石の上部に玉石と粘土を用いた石室の被覆が30cm程残っていたが、墳頂部は確認されなかった。

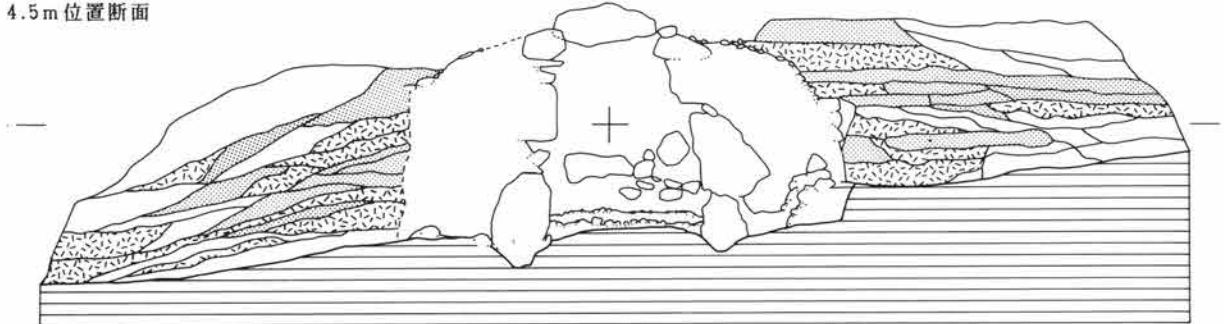
墳丘の築成は石室の構築と不離一体に為されたも

のであり、石室が完成した時点で若干の盛土整形を行って墳丘部を形成して葺石を葺いていることが確認された。二段築成の円墳ではあるが、傾斜地に構築されている上に、20~70cm大の粗粒安山岩の垂角礫を使用した葺石の作業工程上の影響による直線的な部分が有り、角のとれた五角形状の平面形を呈している。葺石は、50~70cm大の垂角礫の平面を据えて根石とし、その上にやや小振りな石を隙間なく積み上げていたが、立面では作業単位を示すような積み方は確認できなかった。

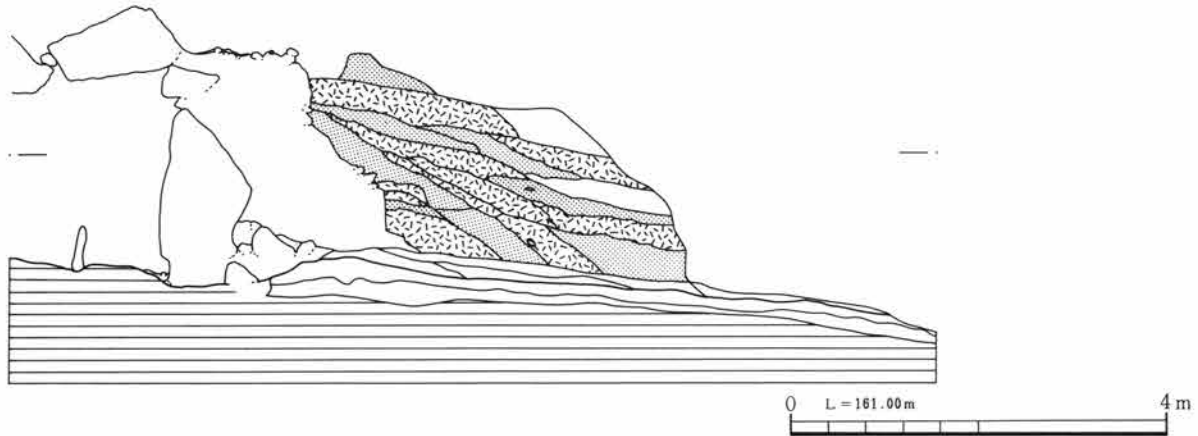
1.5m位置断面



4.5m位置断面



センター断面



第135図 2号墳墳丘地層断面実測図

III 検出された遺構と遺物



第136図 2号墳石室裏込め被覆実測図

封土はロームブロックの混入の割合から3種類に大別できるが、盛土作業全体の途中過程を示す硬化面は、傾斜の下位である谷側が傾斜しているのに対して、山側はほぼ水平になっていた。また、裏込め被覆の石積みも、山側は整然としていたが、谷側には認められなかった。

3. 内部構造

石室は、葺石根石が描く円のほぼ中央に位置し、南南東方向に開口する片袖型の横穴式石室である。玄室と羨道とは左側の袖及び3石の塊石からなる榦石によって区分されており、玄室は羨道の長さのほぼ2倍である。玄室の最奥部には3個の平石を横長に立てて間仕切りをして棺床を設けており、奥幅はほぼ一定しているが、半ばから徐々に幅を狭めながら羨道部に至る羽子板状のプランを呈していた。各部の計測値は以下の通りである。

玄室プランは、間口に対して奥行きの著しく長い方形で、両者の比はほぼ1:2.5である。羨道プランは、奥に広がる台形であり、玄室間口と羨道奥幅との差は左側に15cm有るのみで、右側では同一の石が玄室壁と羨道壁とに利用されていた。

石室床面は、羨道及び玄室前半部の天井石が除去されたことによって流れ込んだ土砂が奥壁に向かって斜めに厚く堆積しており、覆土の下部には浅間A軽石が5cm程の厚さで堆積していた。羨道部は完全に埋まっており、玄室の天井石が除去された部分から内部に入りできるようになっていたが、奥壁も1m程埋没していた。内部は攪乱されており、玄室の奥部では、中央の間仕切り石及び床面の石を除去して、火を焚いた痕跡も認められた。構築当初の玄室部床面は、掘り方底面に20~30cm大の塊石を約10cmの厚さで敷いた上に、玉石を10cm程敷き詰めて整えていたと考えられるが、玉石が残っていたのは左側の袖部付近のみであった。

副葬品は、轡が左袖隅の壁石に鑄着して原位置で出土した他は、覆土の篩作業によって検出したものである。

羨道の床は明確な面が捉えられなかったが、左側

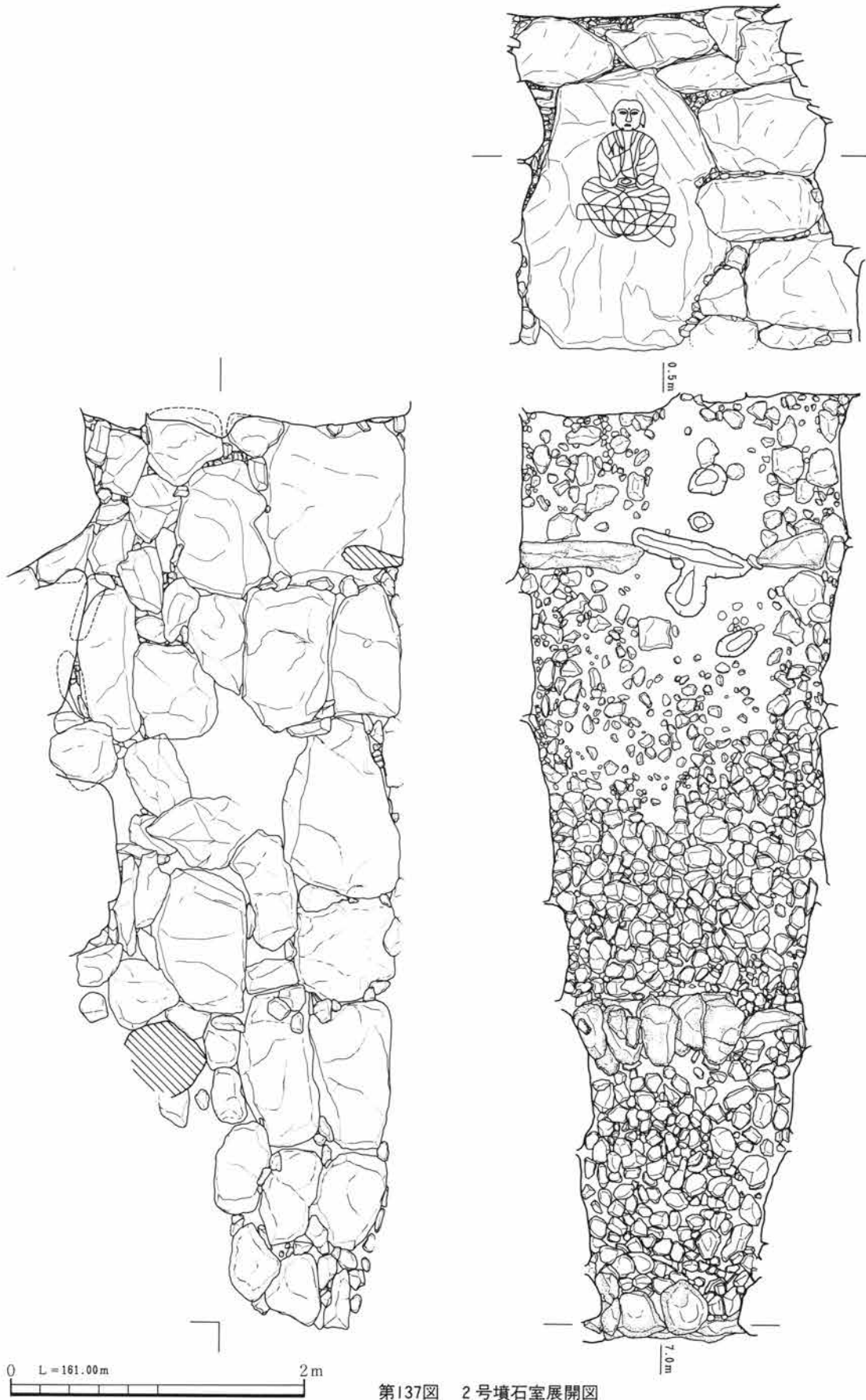
奥部及び石室入口の榦石の上には、小口積みにされた河原石が残っていたことから、間詰めによる閉塞がなされていたことが確認された。入口部の天井石は除去されてしまっていたが、奥部の天井石下面と入口の榦石上面との間隔が70cm程あることから、羨道は下がり勾配で玄室に至っていたものと考えられる。

石室の掘り方は、左側の掘り込み面は確認されなかったが、整地面から掘り込まれておりローム層に達していた。平面形は、手前が狭く、奥が広い不整隅丸方形で、幅5m・長さ8mの規模を持つ。底面は排水機能を考慮した為か、蒲鉾状に中央がやや盛り上がりしており、全体では標高の低い左壁際が20cm・玄室奥部が15cm程低くなっていた。

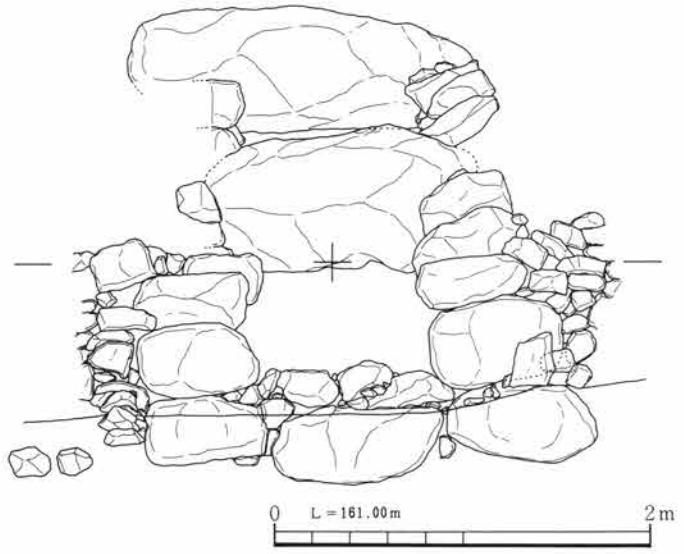
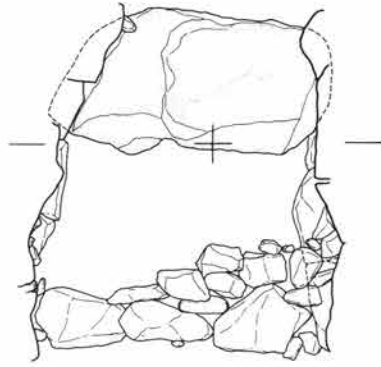
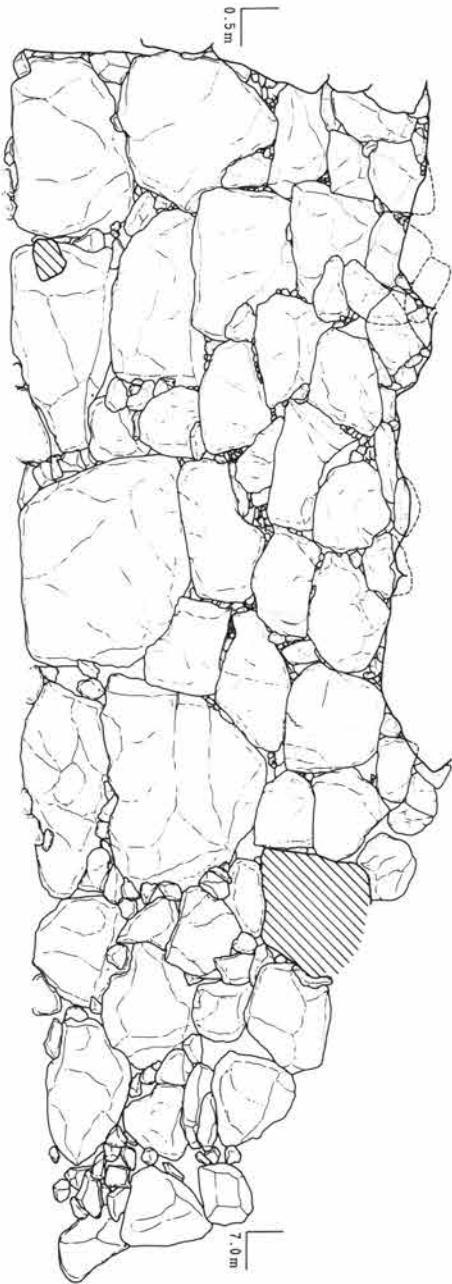
壁体および裏込めは、粗粒安山岩の直方体状の垂角礫によって構成されていた。奥壁は12石で構成されていたが、左側の最大の石は、石室高の6分の5に及ぶ高さ190cm・幅144cmのものを使用し、奥壁面の40%を1石でカバーしていた。設置するに当たっては、栗石を噛ませて石の平面がほぼ垂直になるように据えられており、右側の石を2段積んで保持していた。表面には、室町時代明応期の地藏菩薩の線刻が施されていた。左隅部は、左壁の下から3石目がやや張り出すが、天井までほぼ垂直に整えられていた。右隅部は、天井面で58cm程内側に傾き、幅は175cmを測る。

側壁は、羨道部前半の上部が破壊され、玄室左壁も樗の根の影響によって7石が崩落していた。玄室右壁は、やや孕み出した部分が認められたが、ほぼ完全に残っていた。

側壁の根石は平面を内部に向けた用材を栗石を支いながら設置して根石としており、掘り方との間隙には垂角礫と目潰し砂利を用いて裏込めを行っていた。この際、掘り法の法面側にやや大振りの石を据えて法止の効果を高めていた。上段は裏込め・裏込め被覆・盛土作業と一体となって小口面・横面を使用した壁石が順次積み上げられ上端部に至るが、左壁側の裏込被覆は整然としていなかった。壁材の大きさは次の通りであるが、羨道部に比べて玄室部の

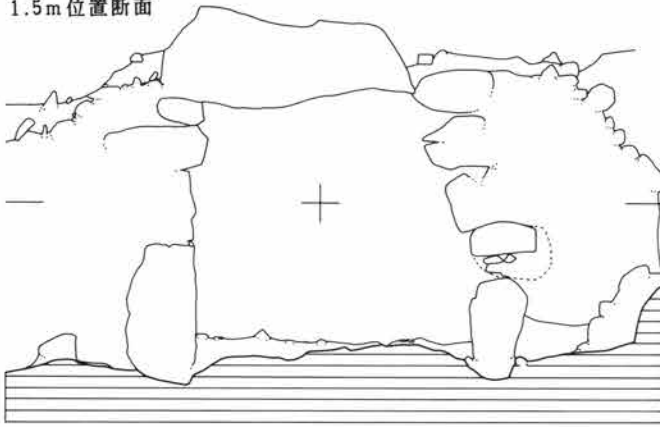


第137図 2号墳石室展開図

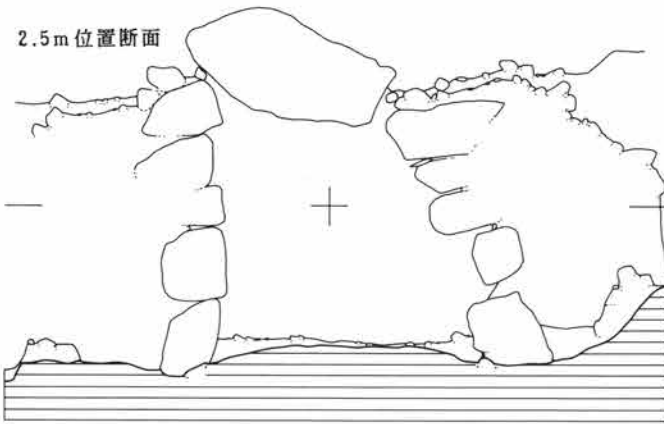


III 検出された遺構と遺物

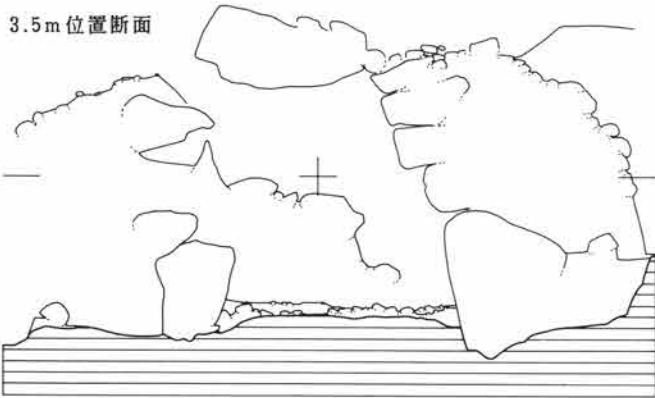
1.5m 位置断面



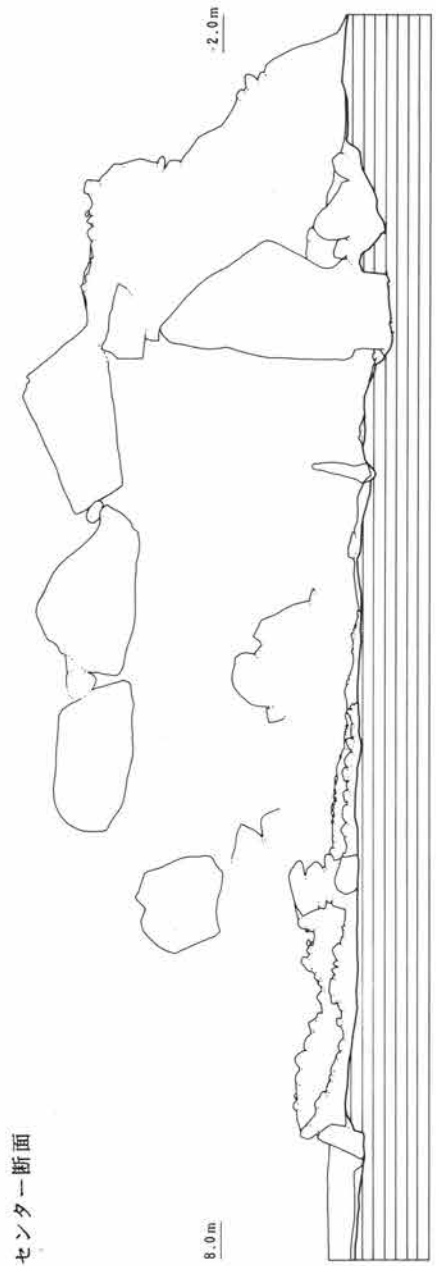
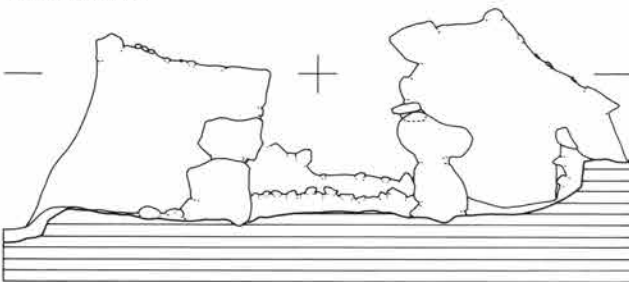
2.5m 位置断面



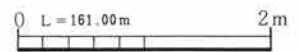
3.5m 位置断面



6.0m 位置断面



センター断面



第138図 2号墳石室断面図

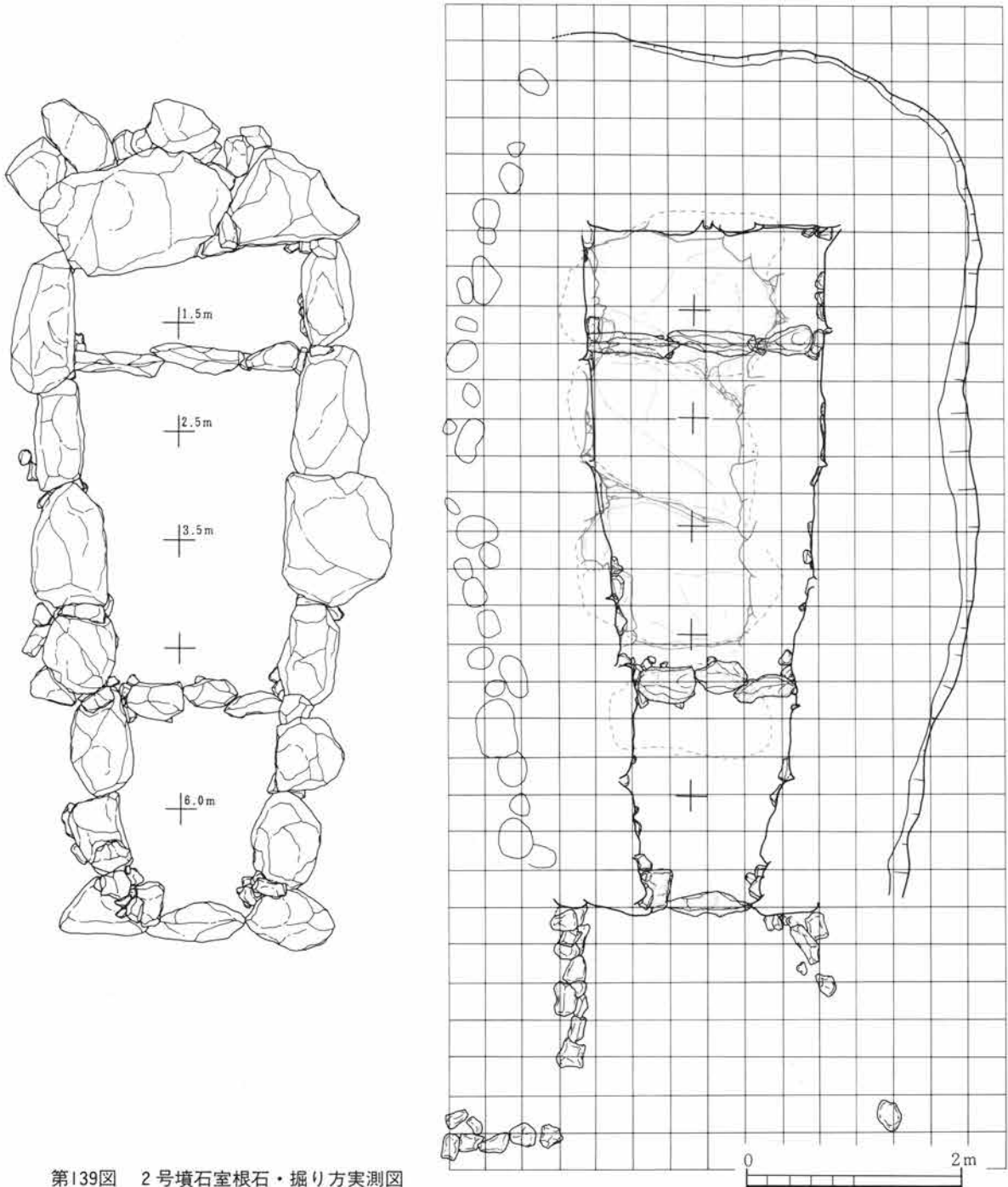
ほうに大きな石が使われていた。それぞれの壁材は奥側にもたせ掛けるように積まれており、乱石積ではあるが、奥壁側に斜めに目地が通るような積み方がなされており、底から約70cm・140cm上部では横方向の目地も通っていた。

左壁面はほぼ直立していたが、右壁面の上半部には15～25°の転びが認められた。

壁体の構築は、裏込被覆及び盛土の状況から推し

て、3工程で行われたと考えられる。

玄室の天井石は、3石が遺存しており、壁石の上端部の隙間に小振りな石を敷き詰めて平坦面を作って架け渡していたが、手前の石の上に奥の石が乗っており、隙間には人頭大の石が詰められていた。また、羨道の天井石は玄室の天井よりも一段下がっており、玄室の側壁を構築している途中で架けられたものであると考えられる。



第139図 2号墳石室根石・掘り方実測図

III 検出された遺構と遺物

2号墳石室左壁材法量一覧表

No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
22	12	60	50		☆	
23	23	51	79	☆		
24	20	15	40	☆		
25	23	47	65	☆		
26	13	39	42	☆		
27	31	44	73	☆		
28	41	97	76		☆	
29	9	48	59	☆		
32	56	61	86	☆		
33	39	54	105	☆		
35	14	23	52	☆		
36	32	57	85	☆		
37	14	61	66	☆		
38	26	16	33	☆		
39	26	20	34	☆		
40	13	35	52	☆		
41	25	39	58	☆		
42	51	60	62	☆		
43	38	71	73	☆		
44	59	92	64		☆	
49	12	28	46	☆		
50	39	64	72	☆		
51	30	30	55	☆		
52	47	50	102	☆		
55	71	95	77		☆	
56	30	34	40	☆		
59	19					
60	19	58	60	☆		
61	23	41	49	☆		
66	9	36	42	☆		
69	36	63	55		☆	
70		19	32			
71		35	52			
75	35	29	50	☆		
76	37	90	(6)65		☆	
84	35	54	68	☆		
85	38	52	70	☆		
86	42	72	64		☆	
87	49	104	90		☆	
88	57	92	58		☆	
97	100	132	58			☆
98	48	102	47			☆
99	77	102	71			☆
100	62	73	63		☆	
101	51	102	59		☆	
102	48	77	67		☆	
103						
107						
108						
109						
110						
111						
112						
113						

左壁

左壁

2号墳石室右壁材法量一覧表

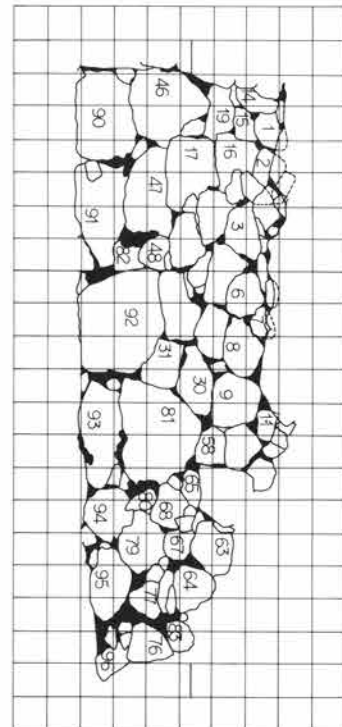
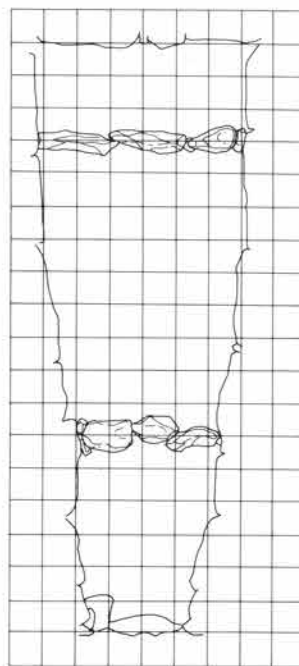
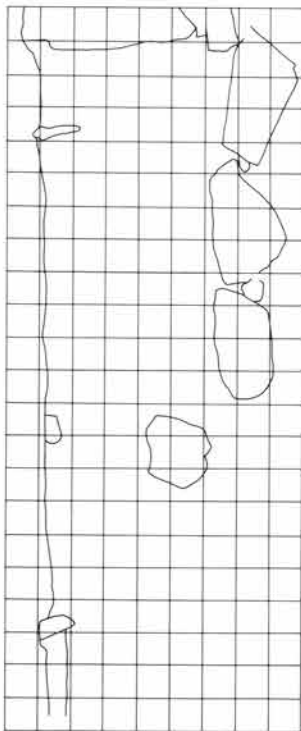
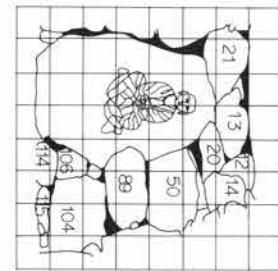
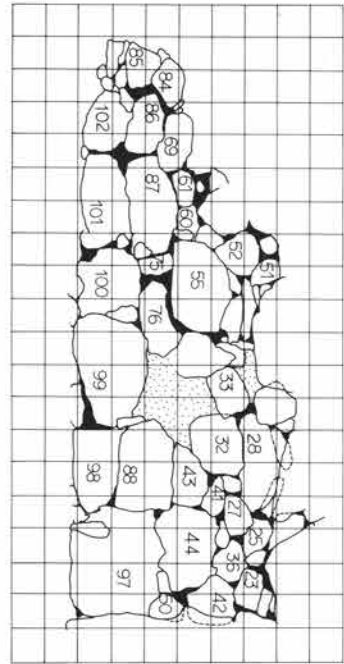
No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
1	30	59	79	☆		
2	33	45	76	☆		
3	38	67	100	☆		
4	11	41	51	☆		
5	14	32	40	☆		
6	40	38	21			☆
7	22	38	48	☆		
8	43	65	79	☆		
9	52	49	64	☆		
10	16	24	40	☆		
11	21	42	54	☆		
14	44	56	70	☆		
15	21	46	59	☆		
16	47	67	85	☆		
17	56	78	—			
18		53	60			
19	20	70	52		☆	
30	39	78	92	☆		
31	40	54	51		☆	
46	84	91	76			☆
47	50	100	86		☆	
48	31	44	79	☆		
58	29	56	54		☆	
62	28	17	32	☆		
63	45	46	56	☆		
64	44	47	61	☆		
65	23	59	59			
67	30	35	52	☆		
68	35	57	55		☆	
73	19	45	29		☆	
74		26	50			
76	49	43	(8)74	☆		
77	35	42	60	☆		
78	21	20	31	☆		
79	47	43	50	☆		
80	21	35	45	☆		
81	82	126	99		☆	
82	31	36	54	☆		
83	28	45	60	☆		
90	62	98	49			☆
91	48	122	73		☆	
92	90	126	102		☆	
93	47	94	58		☆	
94	45	71	72	☆		
95	44	91	64		☆	
96	37	57	82	☆		
107						
108						
109						
110						
111						
112						
113						
151		25	31			
152		33	40			
153		31	31			

崩落

右壁

2号墳石室奥壁材法量一覧表

No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
12	35	65	67	☆		
13	34	68	76	☆		
20	24	89	84		☆	
21	43	66	67	☆		
50	64	88	123	☆		
89	43	81	88	☆		
104	65	89	154	☆		



第140図 2号墳石室検討図

III 検出された遺構と遺物

4. 出土遺物

円筒埴輪は、全形が判明する資料は無いが、4種類が確認された。12は胴部に縦長の円形透孔が穿たれ、13は底部調整が施されている。11は3条凸帯になると思われる。17の透孔はほぼ円形で胴部の上端に穿たれ、底部の占める割合が多く、口縁部の長さは他の段に比べて短いものと考えられる。

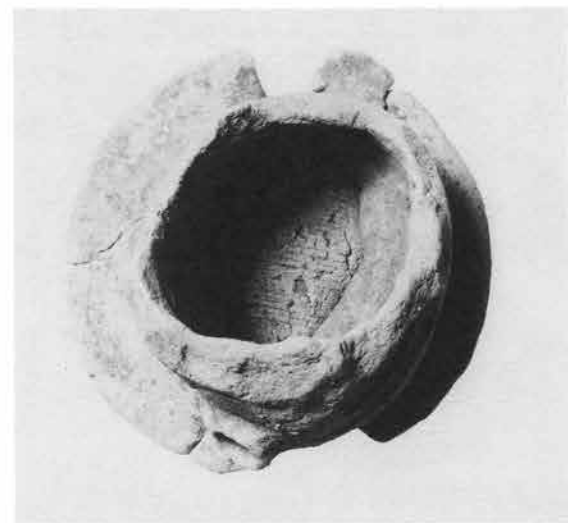
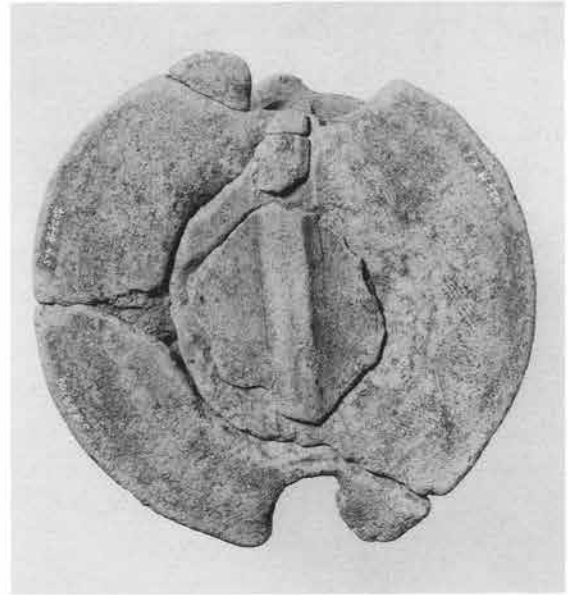
形象埴輪は、人物埴輪と器材埴輪（柄1・大刀6・槍2・靱6・盾3・サ1）が認められた。

1～12はテラス面に樹立された状態で残っていた物であり、8の中には河原石が入れられていた。3に接して人物1、5に接して人物2の女子像が出土している。1は腰部に大刀様のもので剥落した痕跡が認められるので、男子像の基部と考えられる。また、2・6は性別は判然としないが人物埴輪の基部と思われる。4の基部はやや大型であり、1に匹敵する、3の男子頭部の他に、3組の下げ髷（6・7、8・9、10）が出土していることから、男子像であった可能性が高い。7～10も形象埴輪の基部であると考えられる。11～13は石室の右側に残っていた物であり、円筒埴輪と考えられる。

器材埴輪は埴頂部に樹立されていたものが転落したのと考えられる。それぞれの種類の埴輪片が特定の箇所に集中して出土する傾向は認められなかったので、交互に組み合わせて配置されていたものと考えられる。個体数の少ない柄は前庭の右側壁際から、サは東側の埴丘部から出土している。16の朝顔形埴輪は、北東部のテラス面上に横たわっていた物であるが、3号墳の埴輪が移動したのと考えられる。

人物1・2は共に女性であるが、髷の製作技法が若干異なっていた。2は髷の粘土板を接合した際に中央部が窪んでしまった為か、別の粘土塊を埋め込んで整形していた。男子頭部は頂部まで巻き上げ成形で作られていた。顔面の塗彩等は残っていなかったが、鼻孔は刀子或はへら状の工具を突き刺して表している。耳朵は環状に粘土を貼り付けて表現しており、1には鼻と同様に孔が開けられていた。

大刀は勾金に三輪玉が付く物と鈴が付く物との2



種類が、盾は3種類が認められた。

前庭及び墳丘からは多数の須恵器が出土したが、2・17・20はテラス面に臥せられて据えられていた物である。須恵器の示す年代相は、6世紀後半から7世紀前半に亘っている。

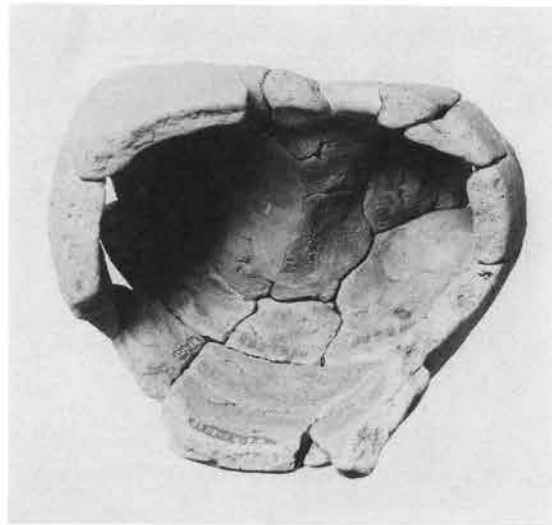
副葬品は、カ具立聞素環鏡板付轡・ガラス小玉・金銅製耳環・鉄鏃・弓飾金具・刀装具・刀子等が出土した。

なお、玄室の覆土中からは、文久永寶1、寛永通寶12、明治30年5銭、大正6・8・9・11・13年1銭、昭和6・9（2枚）・10・11・12年1銭が出土したが、これらが、石室が賭場等に再利用された資料であるのか、信仰に基づく遺物であるのかは判然としない。

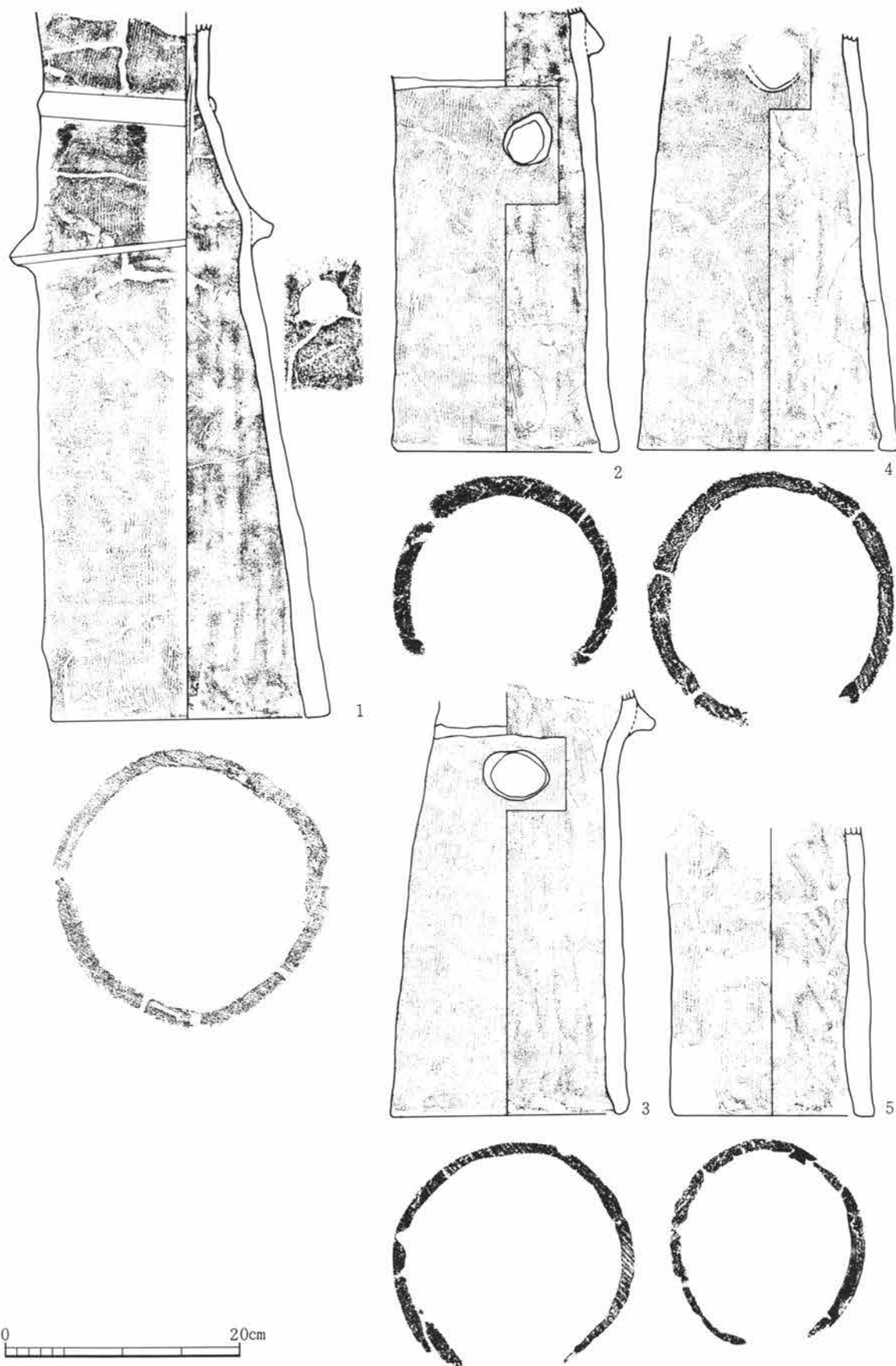
5. 備考

本古墳は、6世紀第3四半期の築造と考えられる。

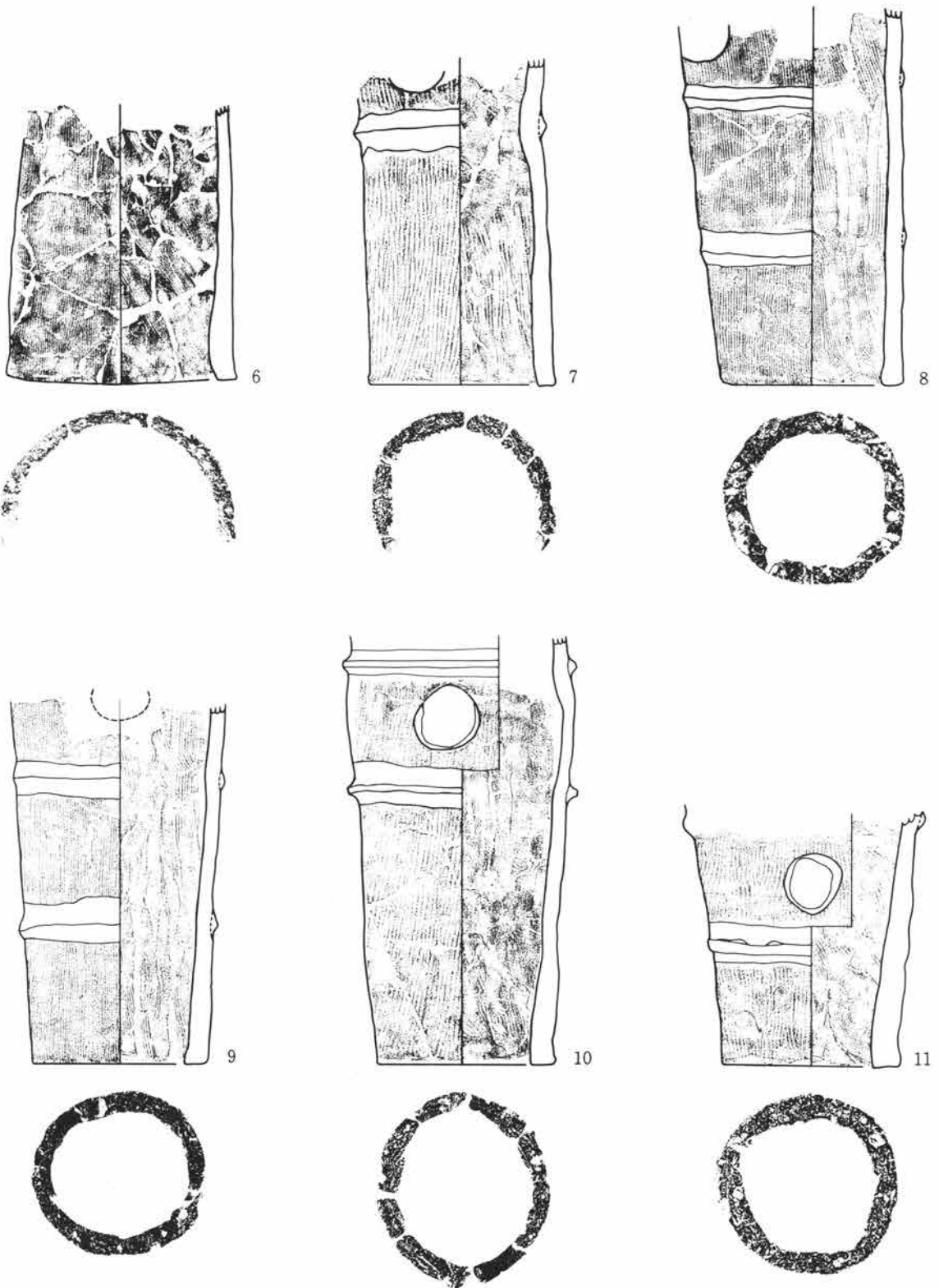
(飯塚)



III 検出された遺構と遺物



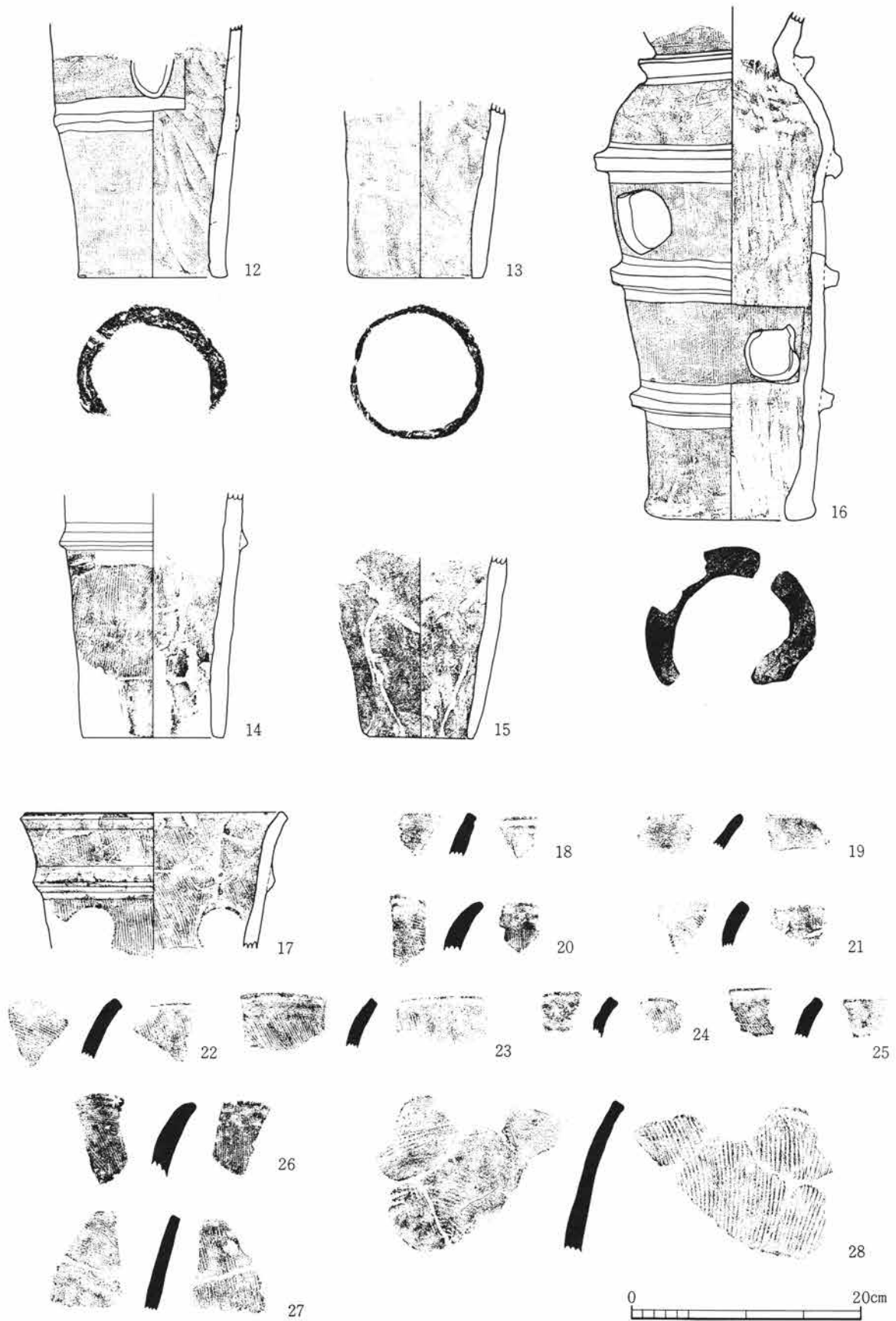
第141図 2号墳出土埴輪実測図(1)



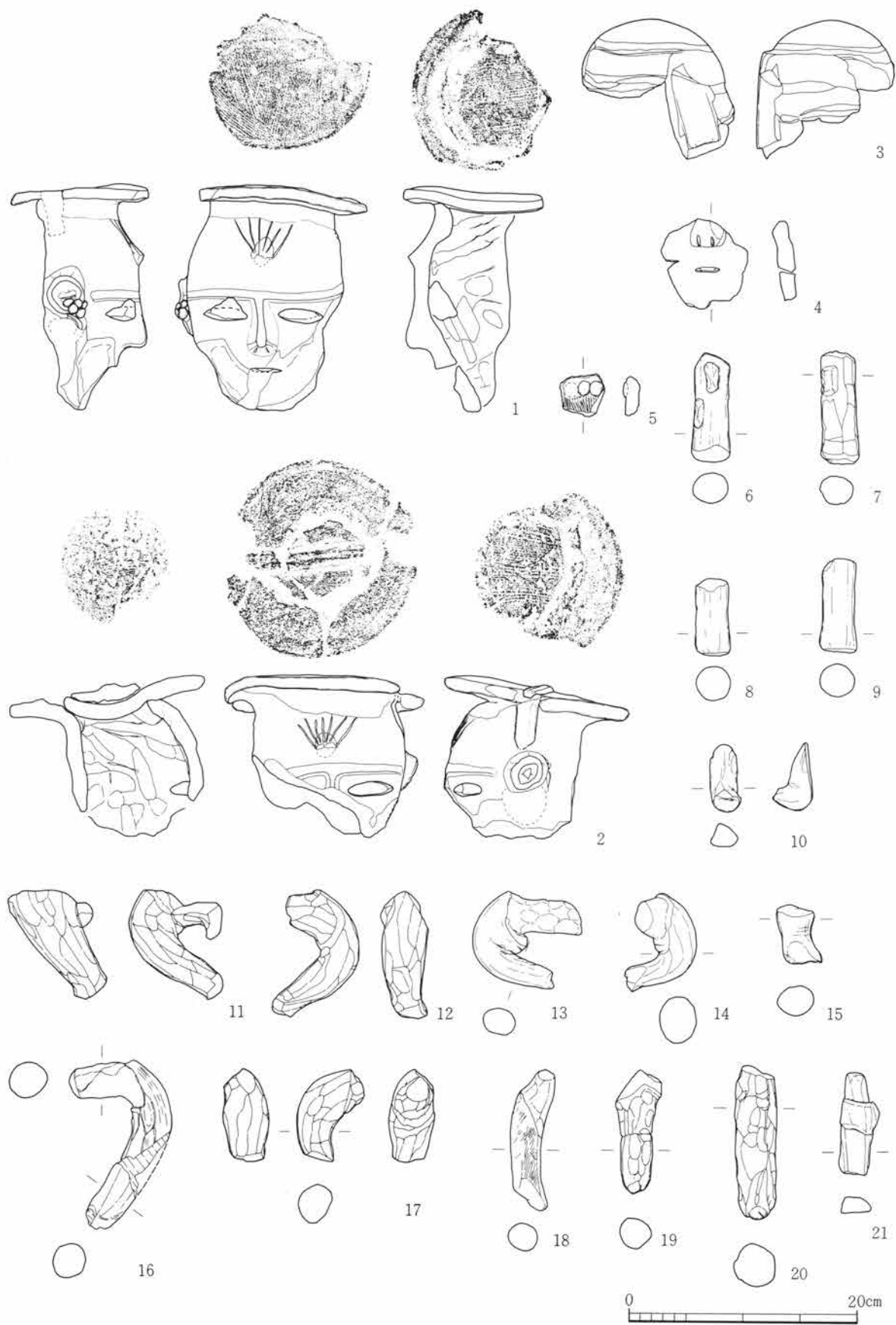
0 20cm

第142図 2号墳出土埴輪実測図(2)

III 検出された遺構と遺物



第143図 2号墳出土埴輪実測図(3)

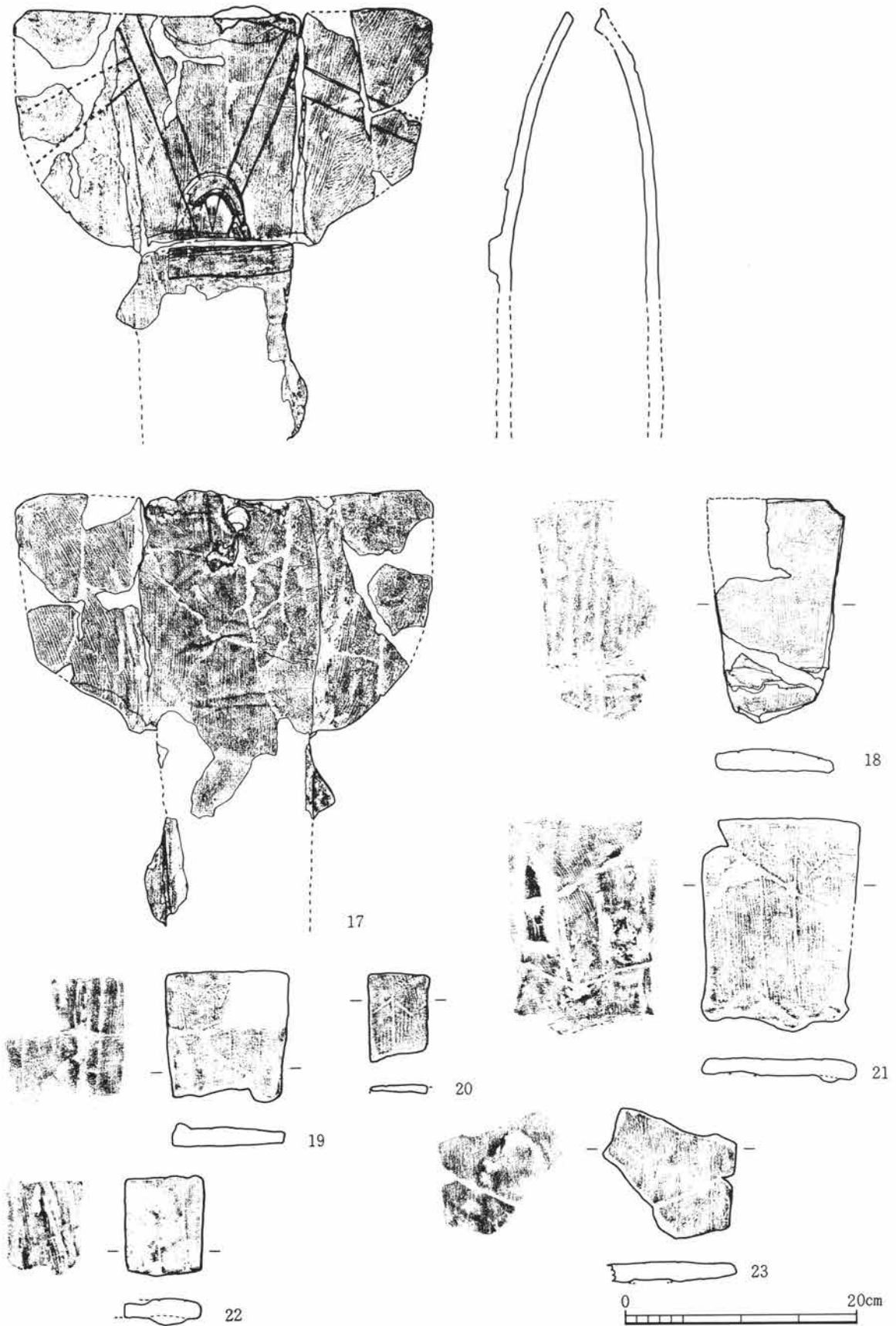


第144図 2号墳出土土形象埴輪実測図(1)

III 検出された遺構と遺物

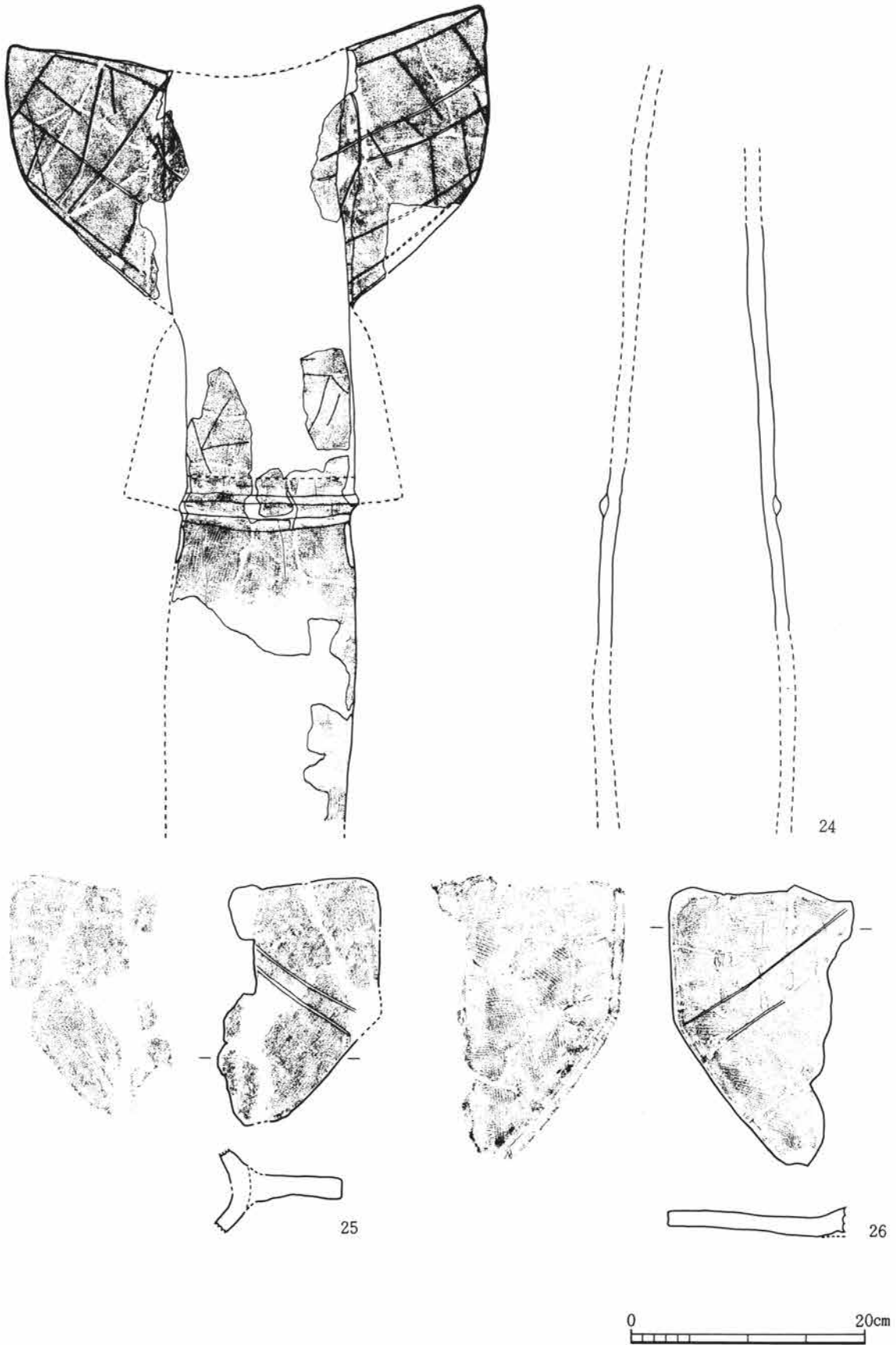


第145図 2号墳出土形象埴輪実測図(2)

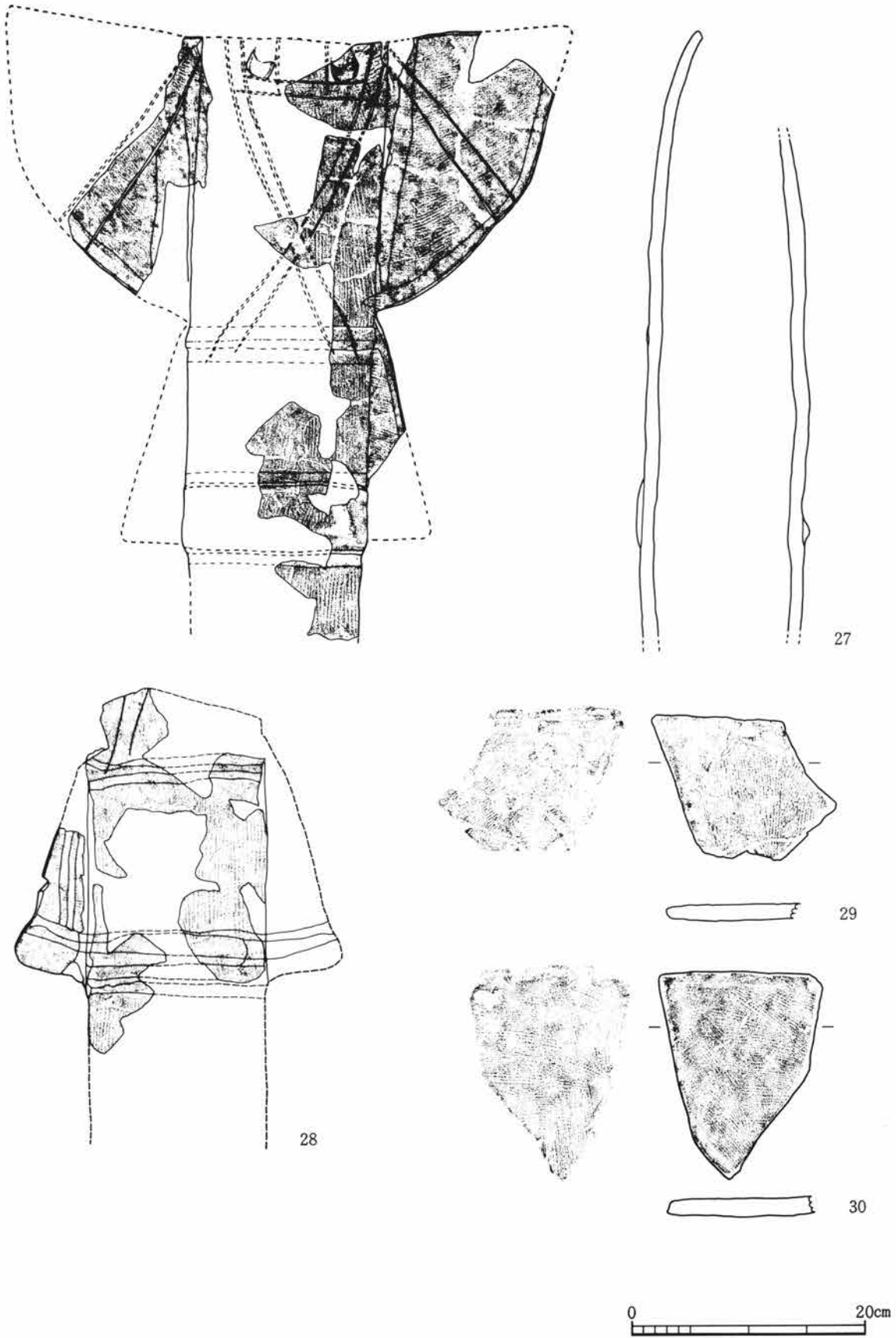


第146図 2号墳出土土形象埴輪実測図(3)

III 検出された遺構と遺物

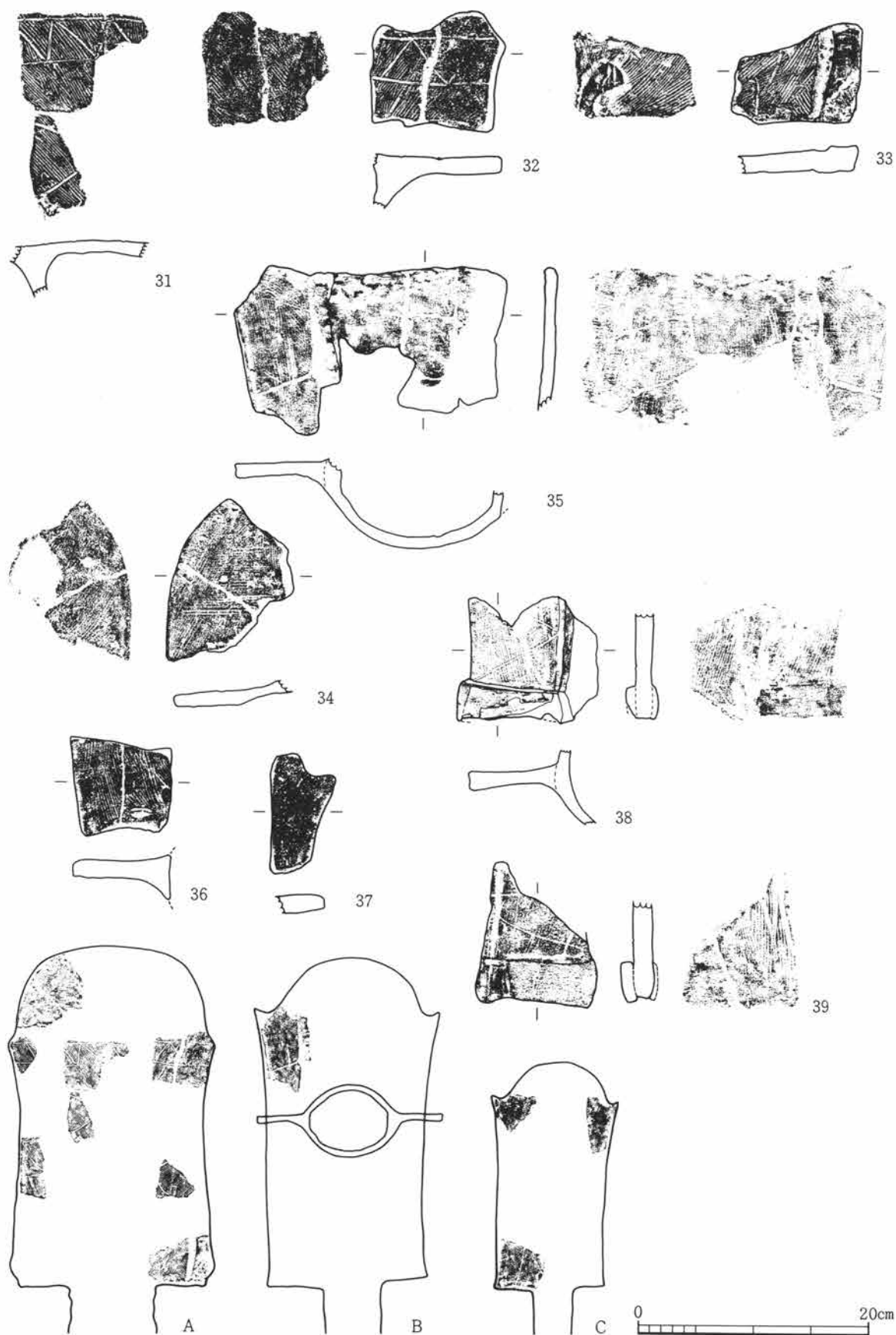


第147図 2号墳出土形象埴輪実測図(4)

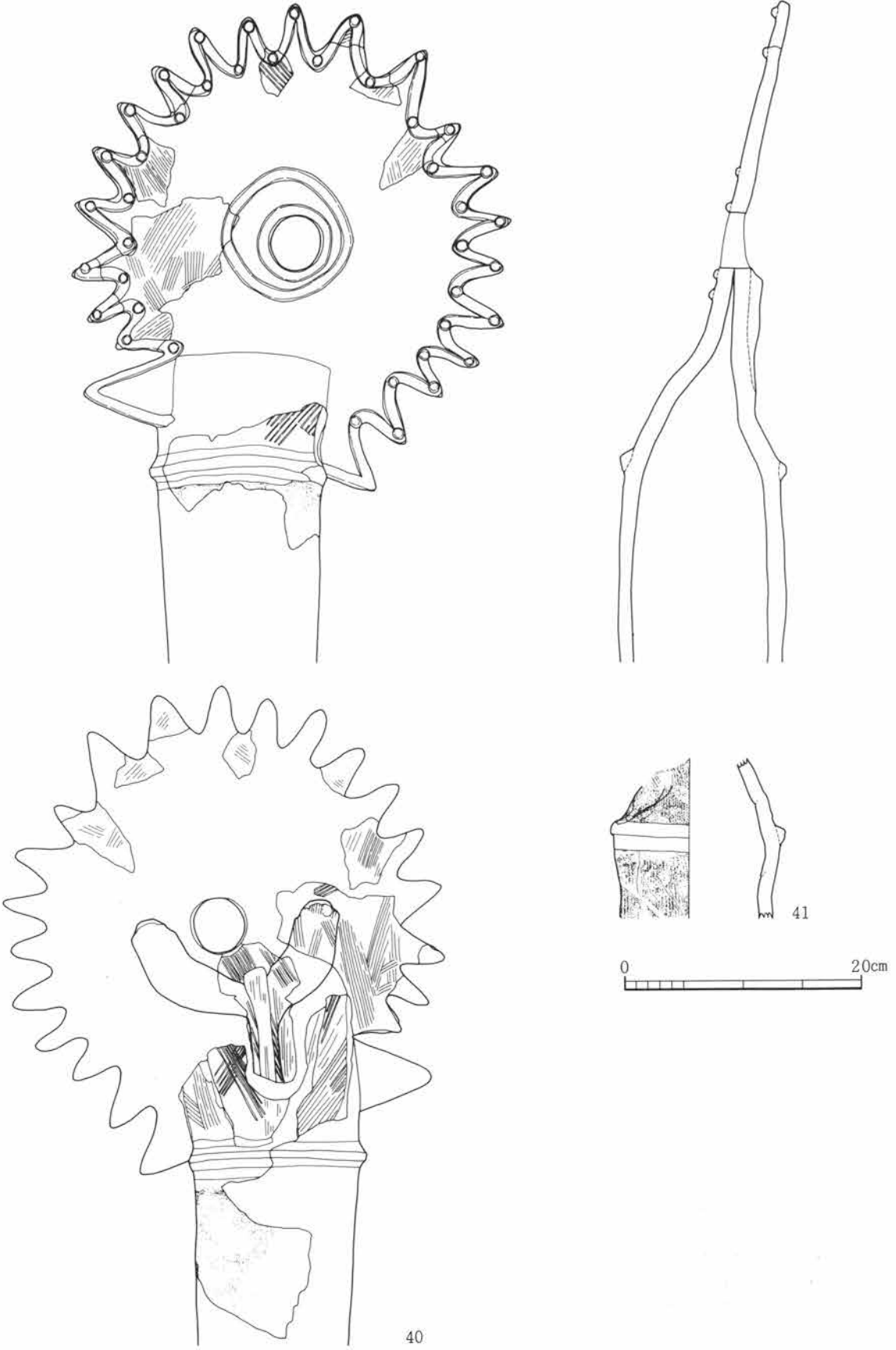


第148図 2号墳出土形象埴輪実測図(5)

III 検出された遺構と遺物

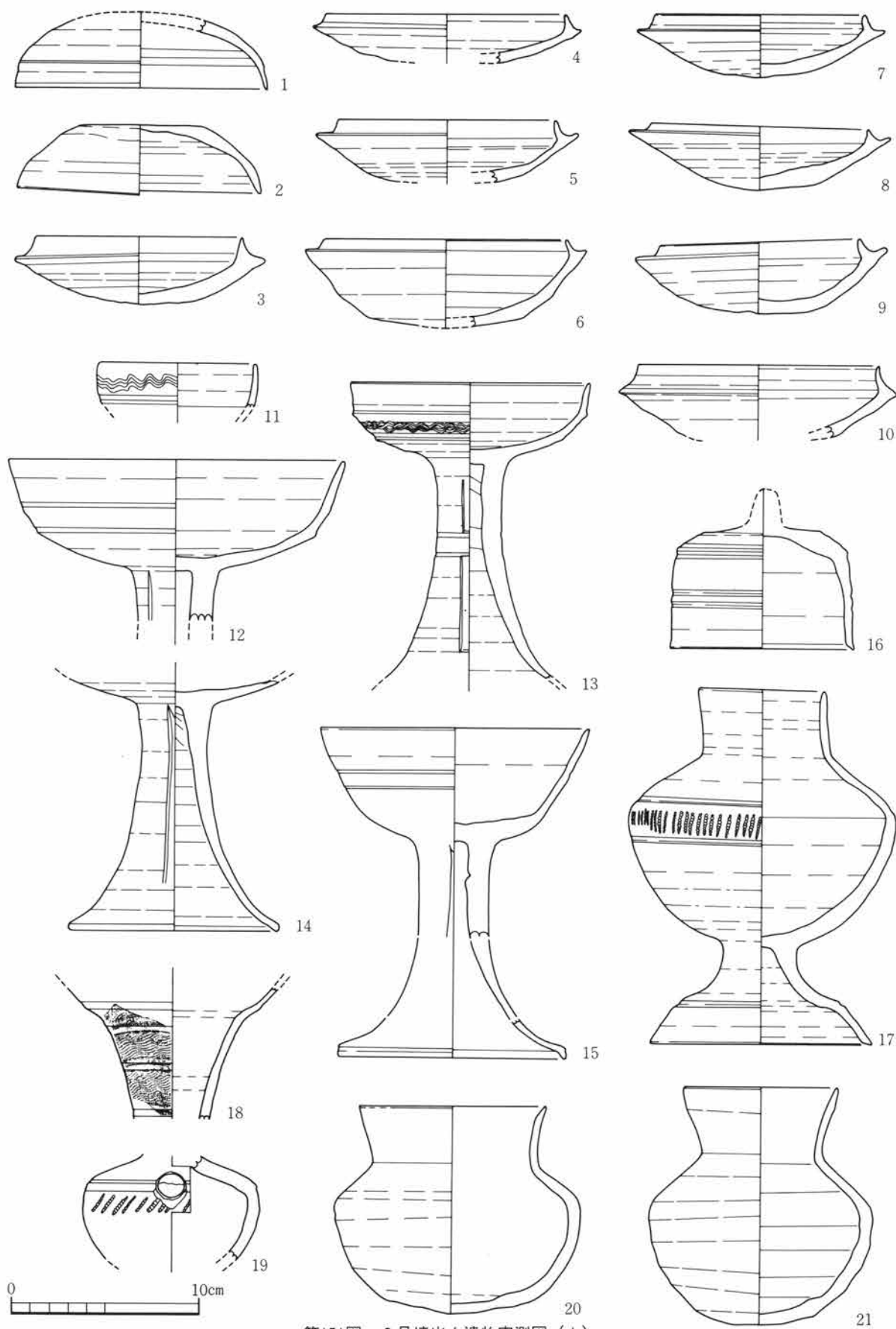


第149図 2号墳出土形象埴輪実測図(6)

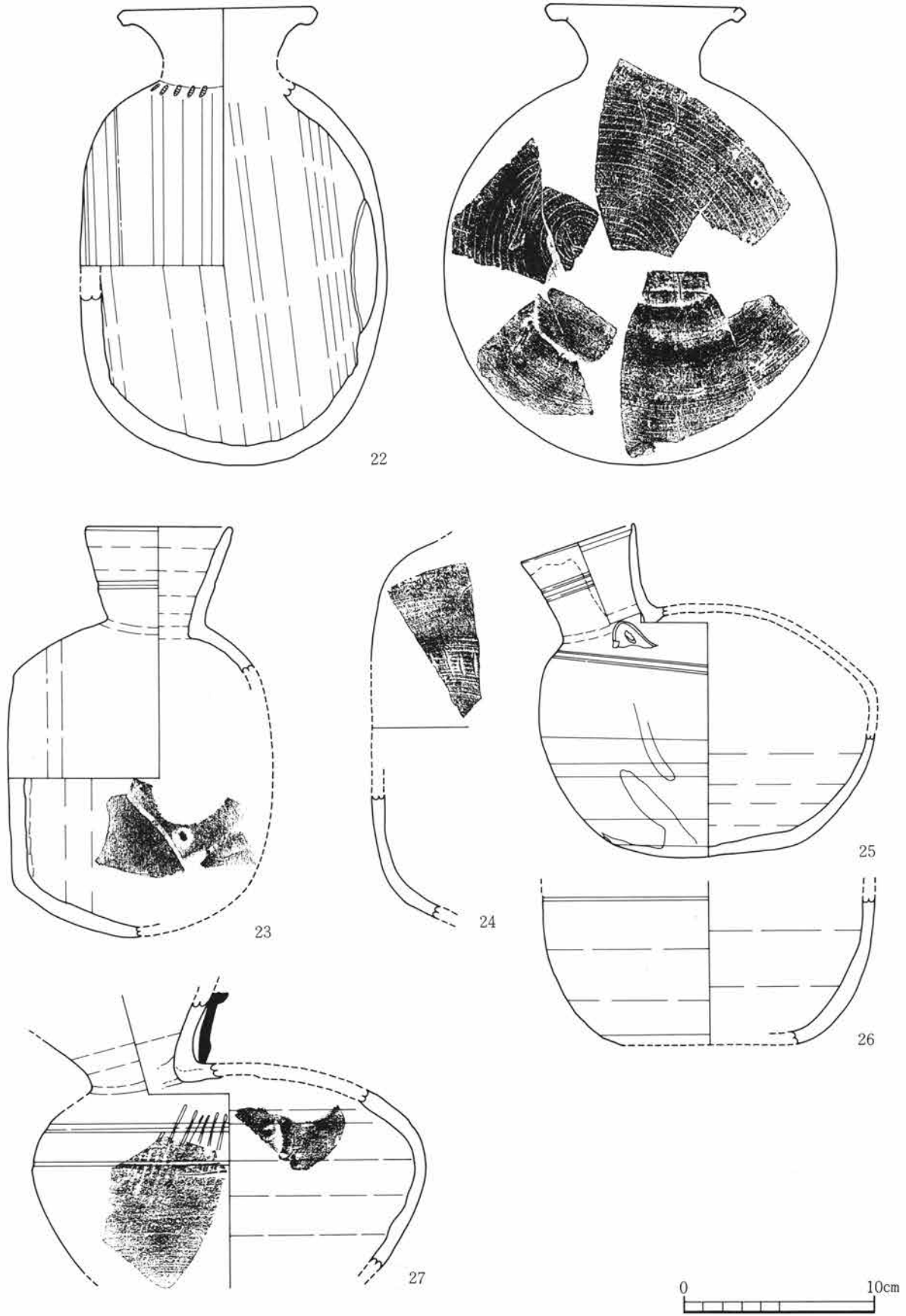


第150図 2号墳出土形象埴輪実測図(7)

III 検出された遺構と遺物

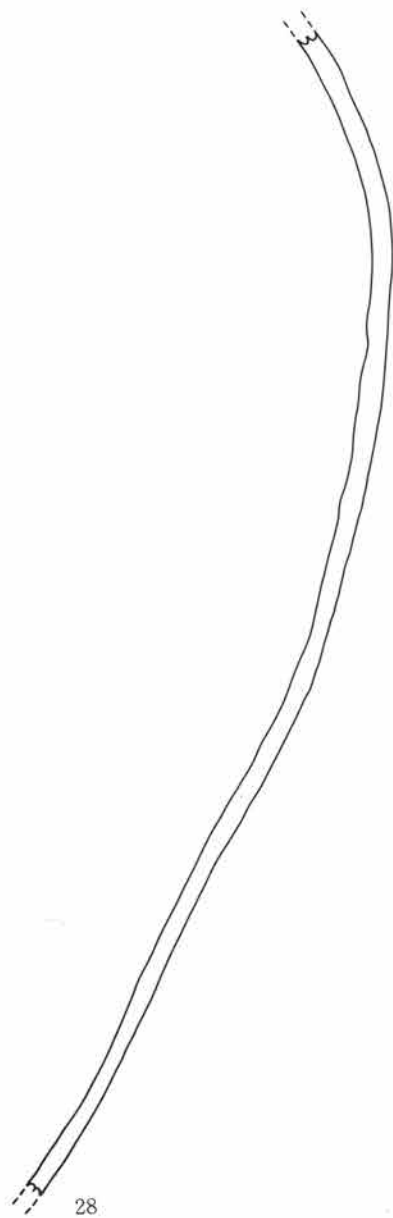
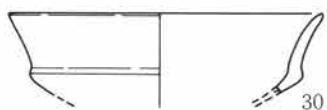
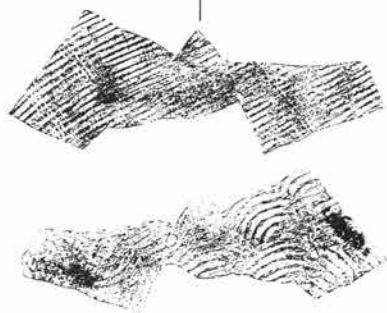
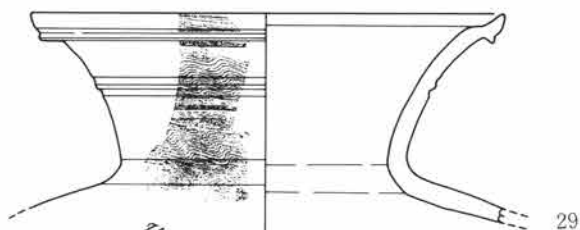
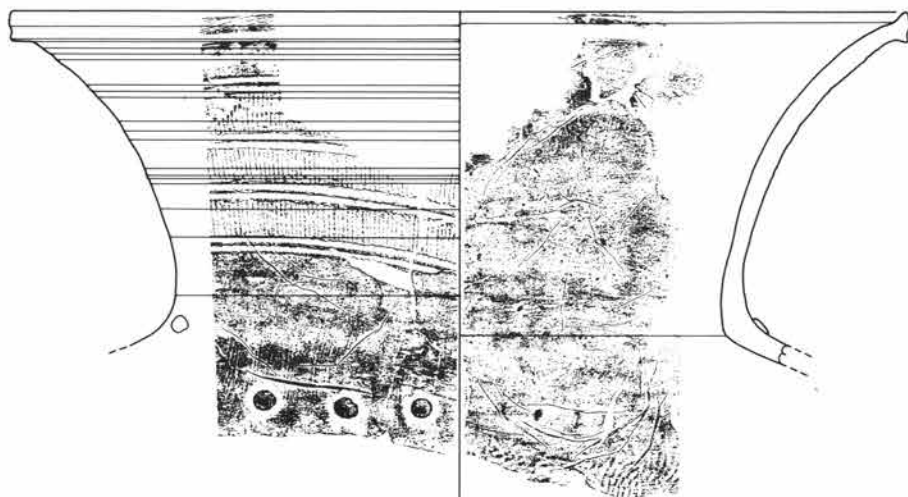


第151図 2号墳出土遺物実測図(1)



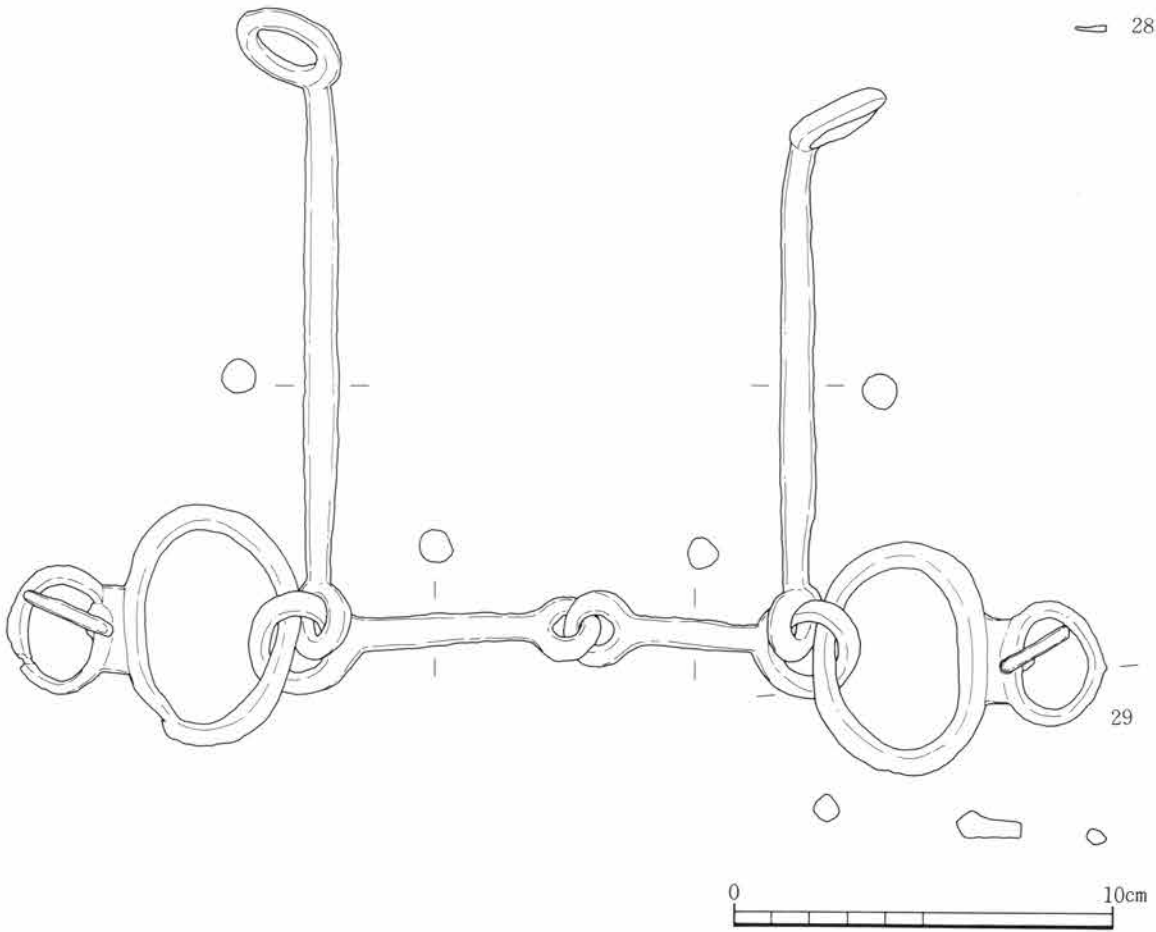
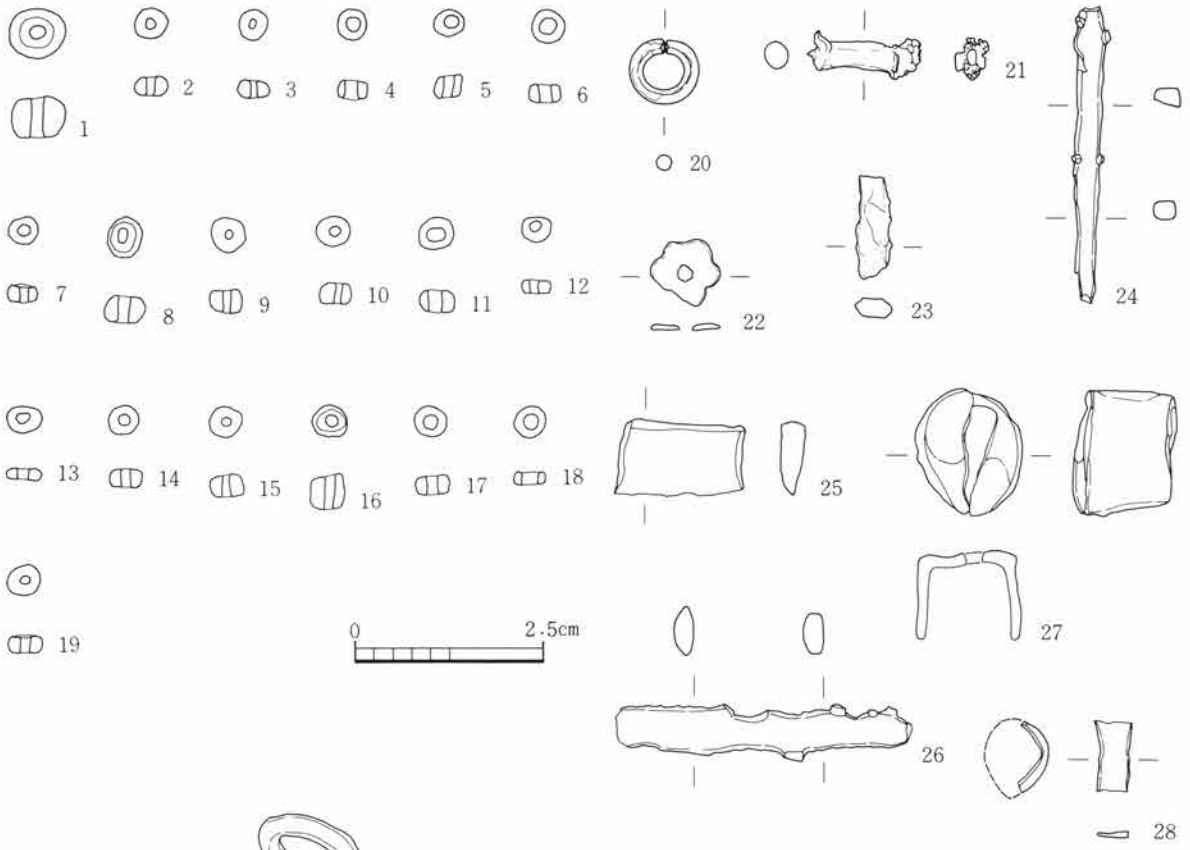
第152図 2号墳出土遺物実測図(2)

III 検出された遺構と遺物



第153図 2号墳出土遺物実測図(3)

4. 古墳時代の遺構と遺物



第154図 2号墳副葬品実測図

3号墳《第155～167図、図版62・63・109～120》

1. 位置と調査前の状態

M-22ポイント周辺に位置していた。北東緩斜面に立地しており、南西の一部が畑として利用されていたが、残りの大部分は杉林になっていた。2箇所集石と僅かな地膨れが観察されたことから、古墳と認定した。古墳群の中では東側に位置し、南東側に4号墳が隣接していた。東側は谷地形に移る為に他の古墳は構築されていなかったが、周りの2・10・18・19・21号墳とは適当な距離を隔てて占地していた。標高は162～164mである。

2. 外部施設

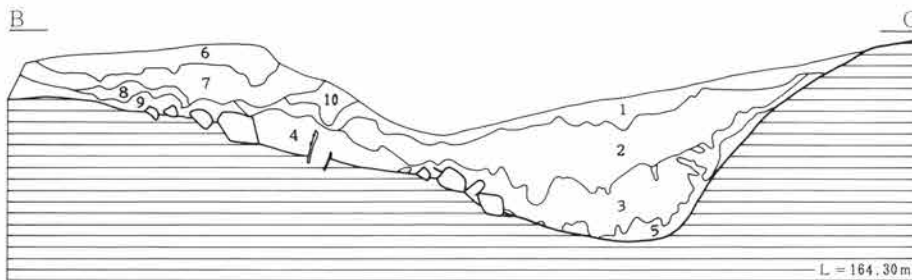
斜面下位の北側では削平されていたが、ローム層中に掘り込まれた、外縁部上端径23.2mの円形の周堀が確認された。上幅1.6～2.8m・下幅60～160cmで、断面形は逆台形を呈するが、内縁部は基壇葺石の根石と連続していた。底面はほぼ平坦であったが、斜面高位の南側と下位の北側とでは100cmのレベル差があり、南側での深さは150cmを測った。南東部の底面には、4m近い幅で礫が集中していた箇所があったが、性格は解明できなかった。なお、集中した礫を除去した下にも、地山のローム層中に多数の礫が混入していたので、或は自然地形の影響であるのかも知れない。

基壇は、地山を削り出して成形した後に若干の盛土で整形し、35°の傾斜で高さ40cm程立ち上がる斜面

には葺石が葺かれていた。上面は、15°度の傾斜で緩やかに傾斜して墳丘葺石へと続いており、幅約150cmのテラス面が巡っていた。基壇葺石根石での径は19.6mで、ほぼ正円に近く、均整がとれていた。テラス面には、墳丘裾周りから50cm程外側に、45本の円筒埴輪が樹立状態で遺存していた。埴輪は、須恵質の物19本と土師質の物との両方が存在した。色調の明瞭に異なる須恵質埴輪は、列の中でも目立つ存在であったと思われるが、特別な配慮を以て規則的に配置された状況は認められなかった。埴輪を樹立するに当たっては、基壇上面の土砂が流失している為に不明な部分も残るが、個別に、10cm程の深さで底径よりもやや大きめな穴を掘って据えられていた。なお、墳丘裾からの距離は区々であり、作業工程上の一単位を示すかのように3～5本が直線的に並んでいたが、規則性は見いだせなかった。また、墳頂部から転落した状態で検出された破片の中には朝顔形埴輪も交ざっていたが、テラス面においては原位置を保った物は発見されなかった。

墳丘も、基壇と同様に築かれており、30°前後の傾斜で高さ60cm程立ち上がっていたが、上部は削平されており、墳頂部は確認できなかった。墳丘葺石根石での規模は15.6mを測る。

葺石は、30～40cm大の粗粒安山岩の亜角礫の平面を外側に向けて据えて根石とし、その上にやや小振りな石を隙間なく積み上げていた。作業時の目安と

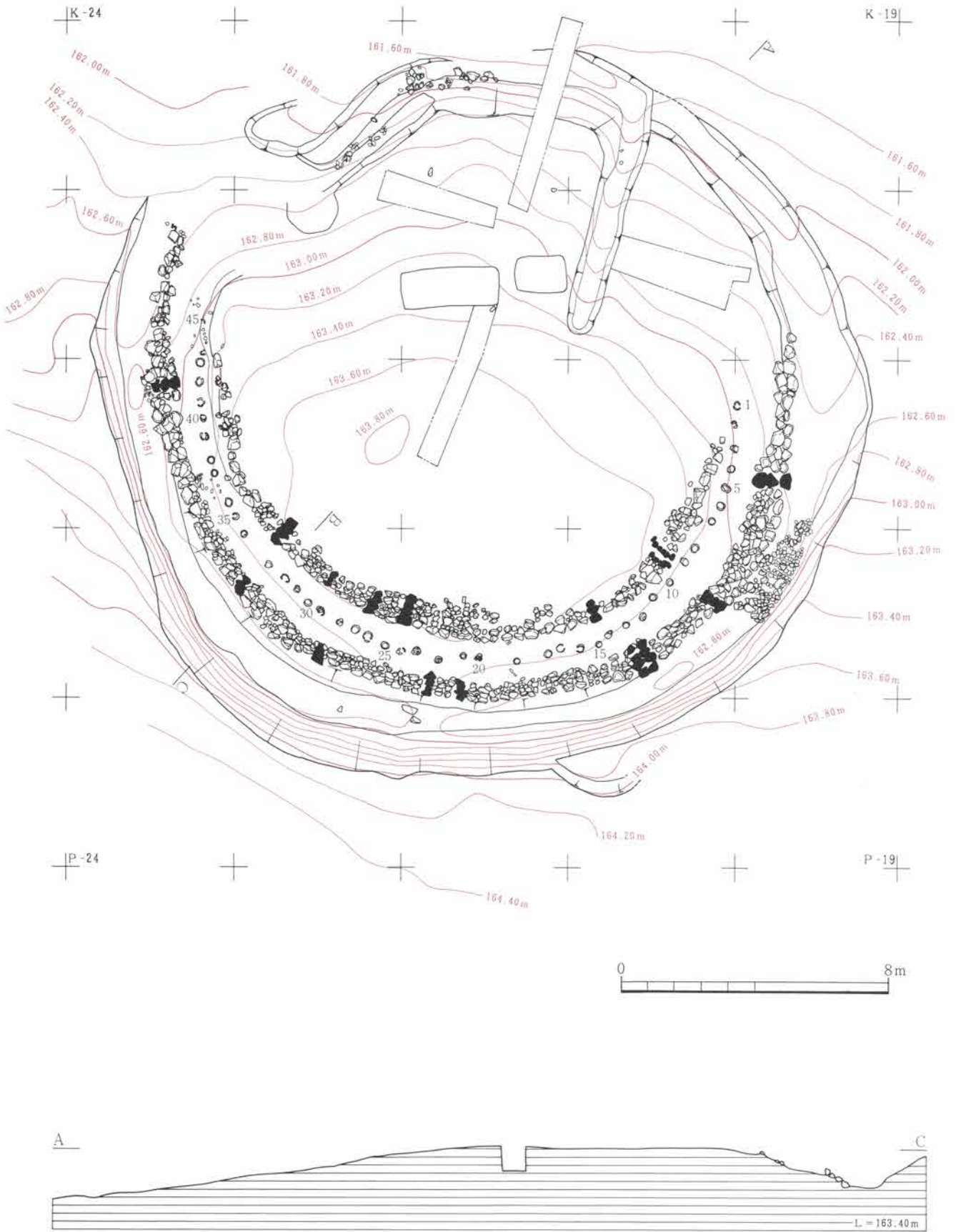


- 1. 黒褐色土 ローム粒・白色軽石を含み、よく締まる。
- 2. 黒褐色土 1層よりも柔らかく、炭化物を含む。
- 3. 黒褐色土 ローム粒・炭化物を多く含む。
- 4. 黒褐色土 3層よりも茶色く、埴輪を含む。
- 5. 黒褐色土とロームブロックの混土層。
- 6. 耕作土 B軽石を多量に含む。

- 7. 褐色土 B軽石を多量に含む。
- 8. 黒褐色土 B軽石を少し含む。
- 9. 褐色土 C軽石を含む。旧地表に近い。
- 10. B軽石と黒褐色土の混土層。



第155図 3号墳周堀地層断面実測図



第156図 3号墳墳丘実測図

III 検出された遺構と遺物

したと考えられる、縦方向に目地が通る部分が数箇所認められたが、規則性は認められなかった。

3. 内部施設

集石の認められた部分を中心にトレンチを設定して調査を行ったが、石捨て場用の土坑2基が確認されたのみで、主体部の痕跡すら検出されなかった。墳丘の依存状態等から推して堅穴系の埋葬施設を持った古墳であったと考えられる。

4. 出土遺物

北西部の周堀内からは、5世紀後半の特徴を備えている、土師器坏・高坏が出土した。何らかの儀礼に使用されたものと思われるが、性格は解明できなかった。

埴輪は、2条凸帯3段構成の普通円筒埴輪と朝顔形埴輪とが認められた。3種類に大別できるが、胎土・成整形技法等から、更に細分が可能である。

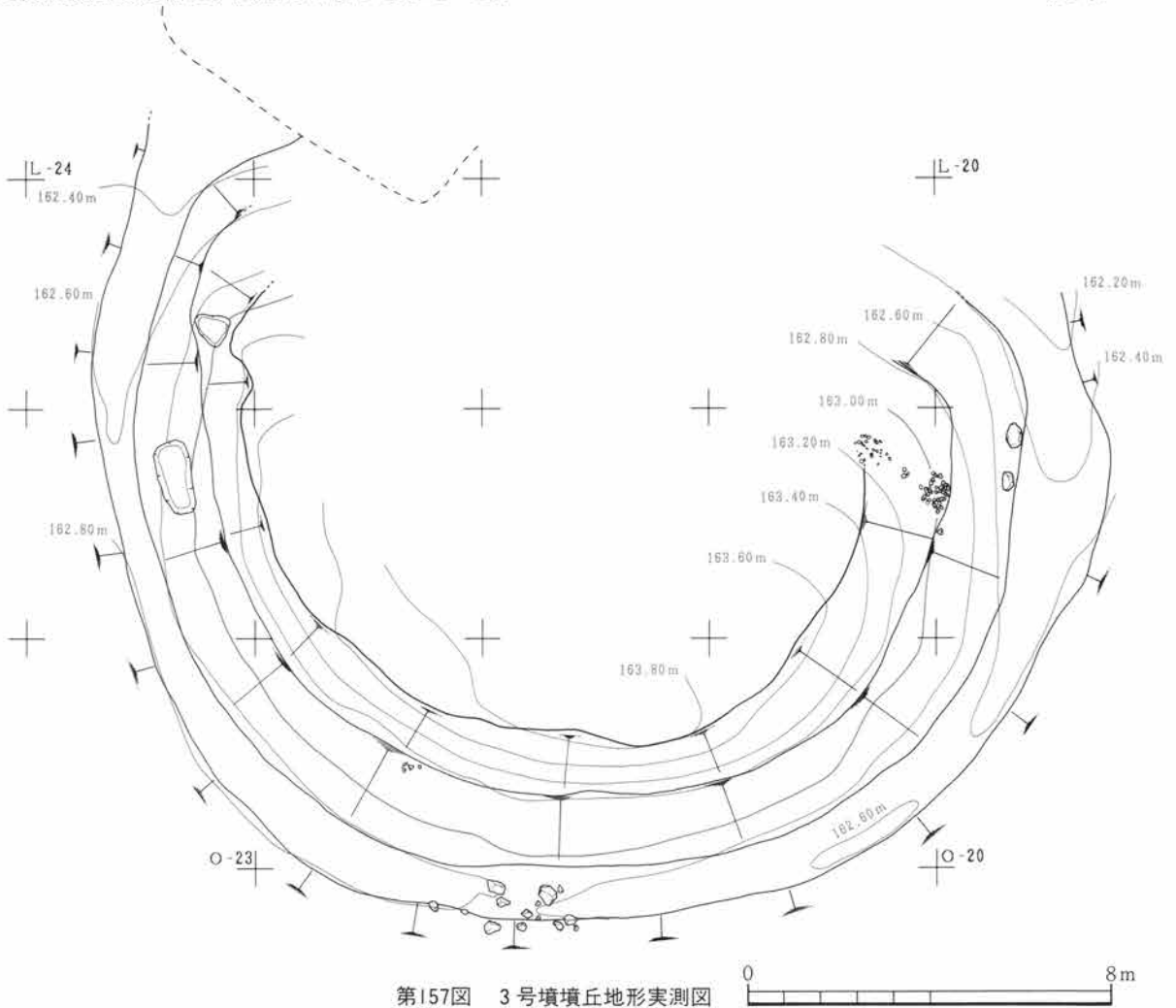
A類は須恵質埴輪で、底径対口径の比は1:1.7

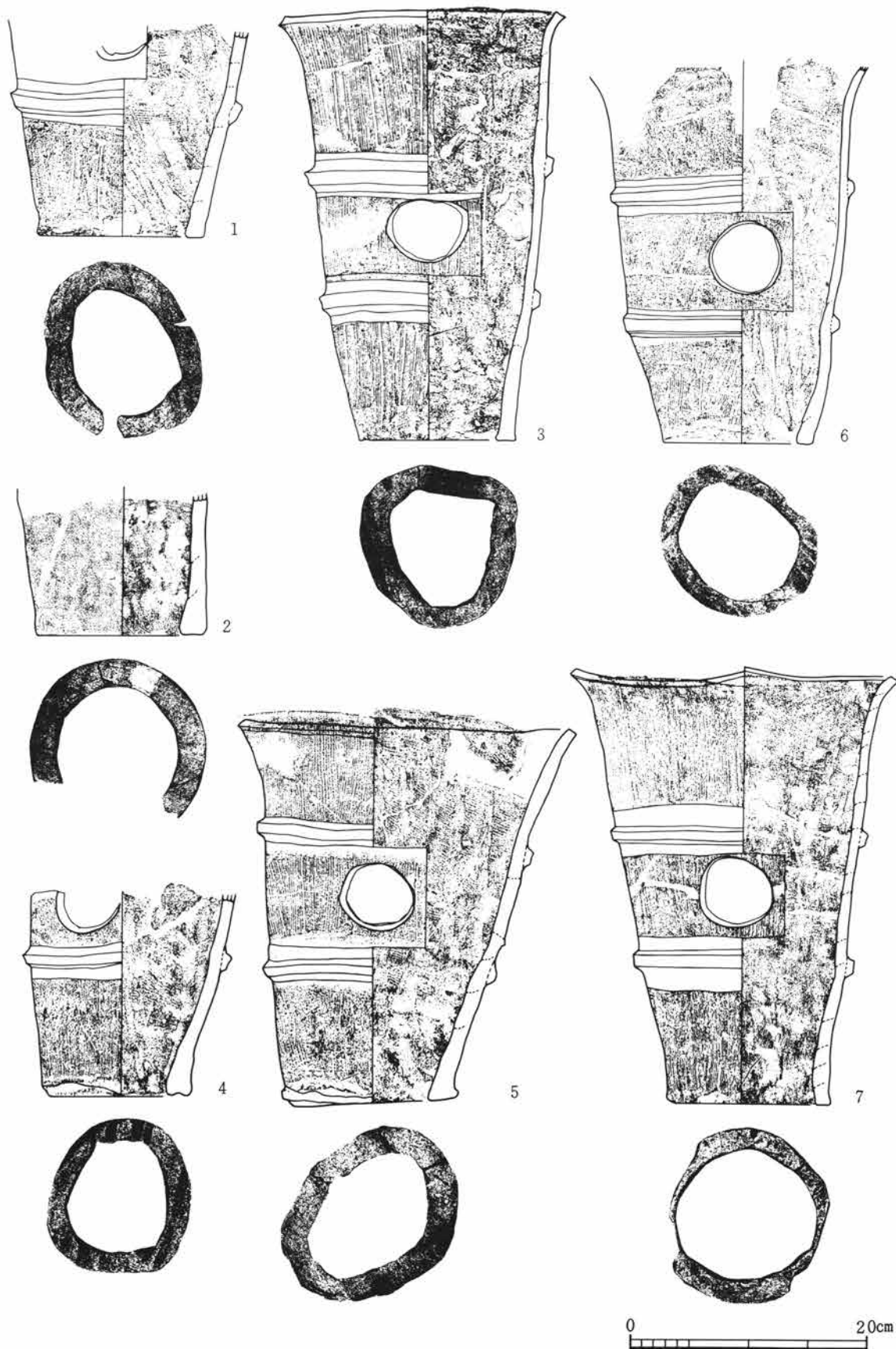
～1.9であり、胴部の中央部に円形の透孔が穿たれている。やや焼成が不良で、表面の剥落が目立つ物と、青灰色に良く焼け締まった物とがある。11は通有の資料とは反対の半円形透孔を持ち、口縁部に三角形の透孔を持つ。52はA類の朝顔形埴輪である。B類は土師質で、底径対口径の比は1:1.5～1.6であり、胴部の上端に横長の長円形の透孔が穿たれている。口縁部外面にヘラ記号が有る物もある。53はB類の朝顔形埴輪である。

C類は二次調整にB種横ハケが認められ、底径対口径の比は1:1.6であり、胴部の中央に円形の透孔が穿たれている。口縁部外面に赤色塗彩が施され、小孔が穿たれ、ヘラ記号が有る物もある。

5. 備考

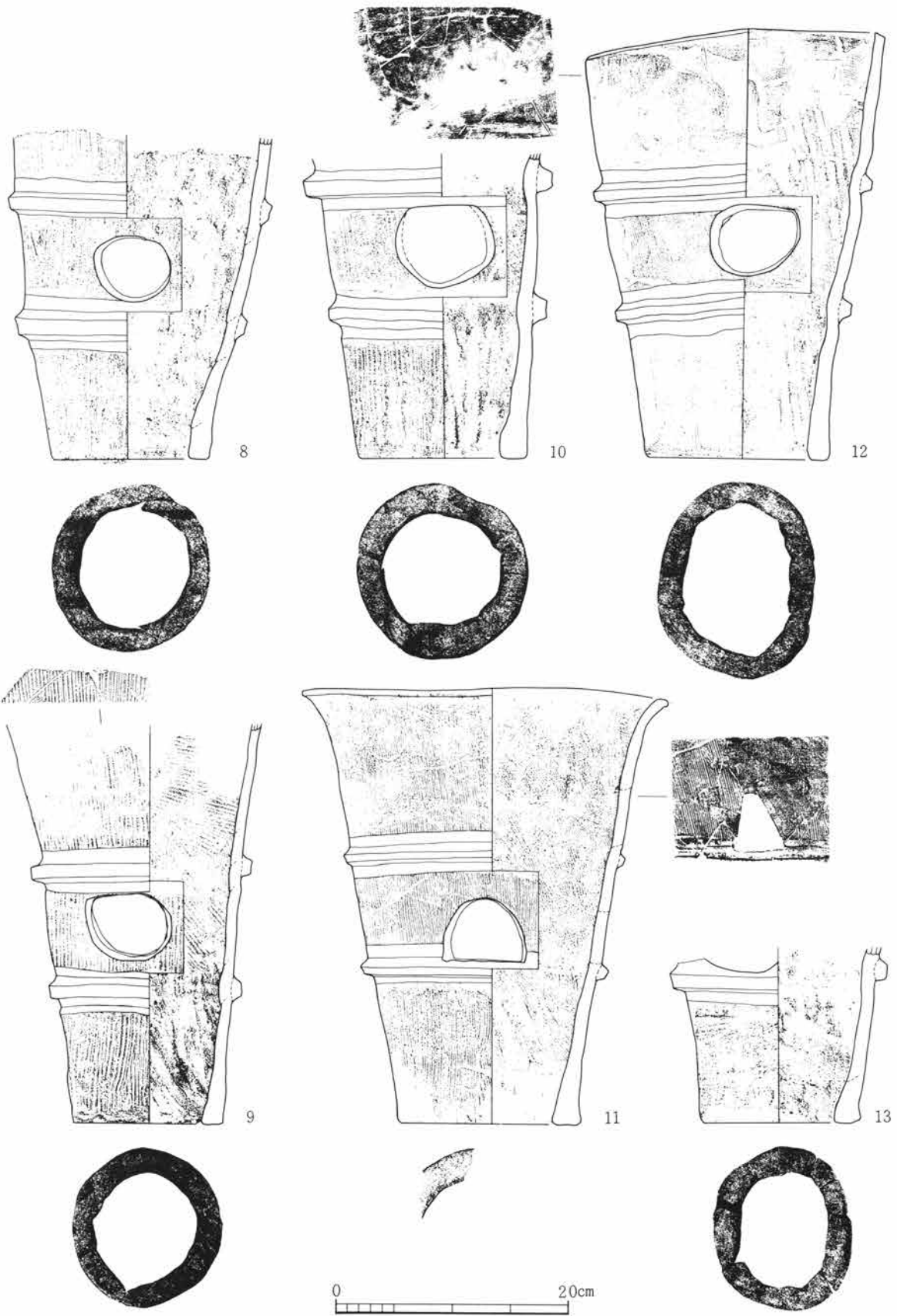
本古墳は、5世紀第2四半期の築造と考えられる。
(飯塚)



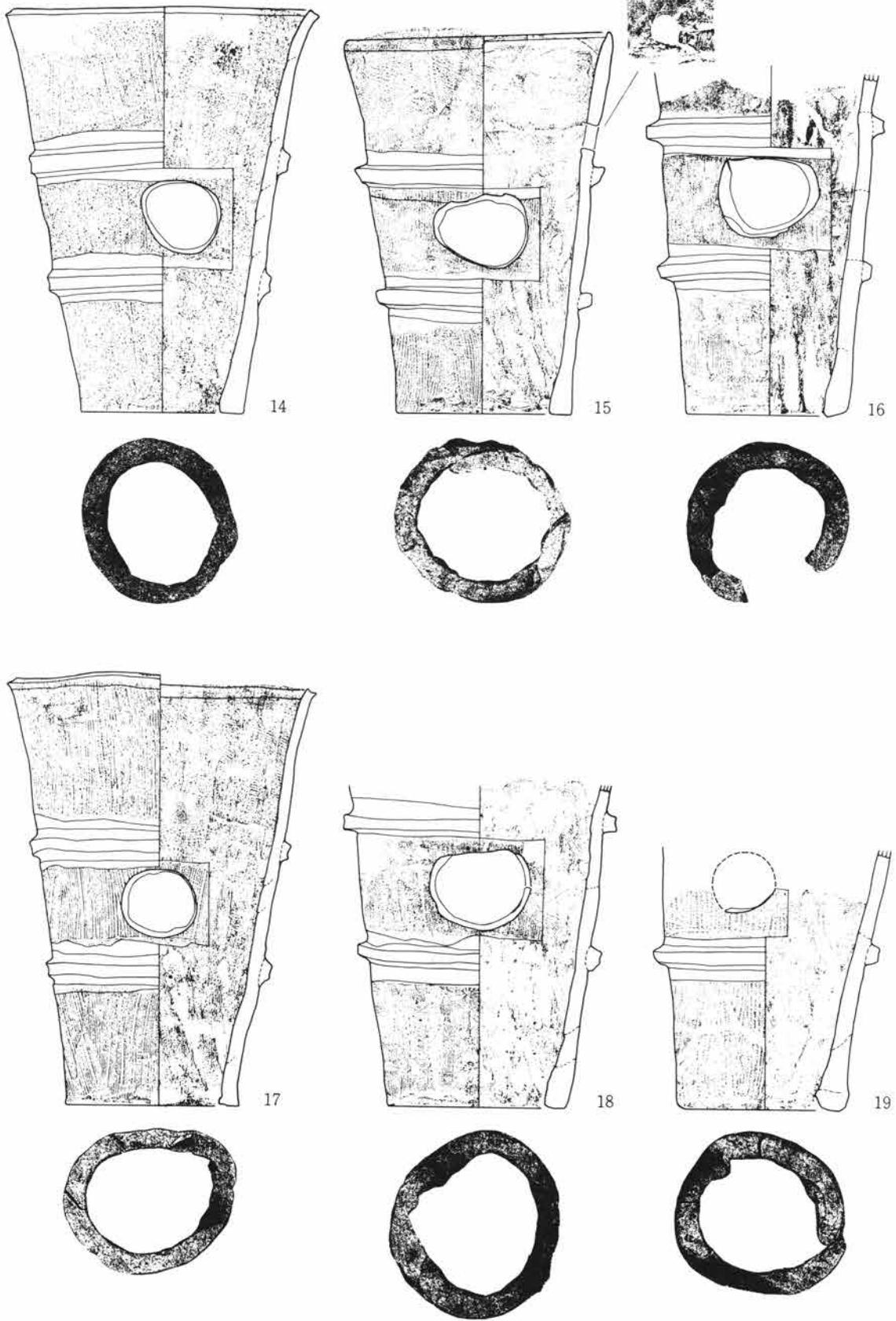


第158図 3号墳出土円筒埴輪実測図(1)

III 検出された遺構と遺物

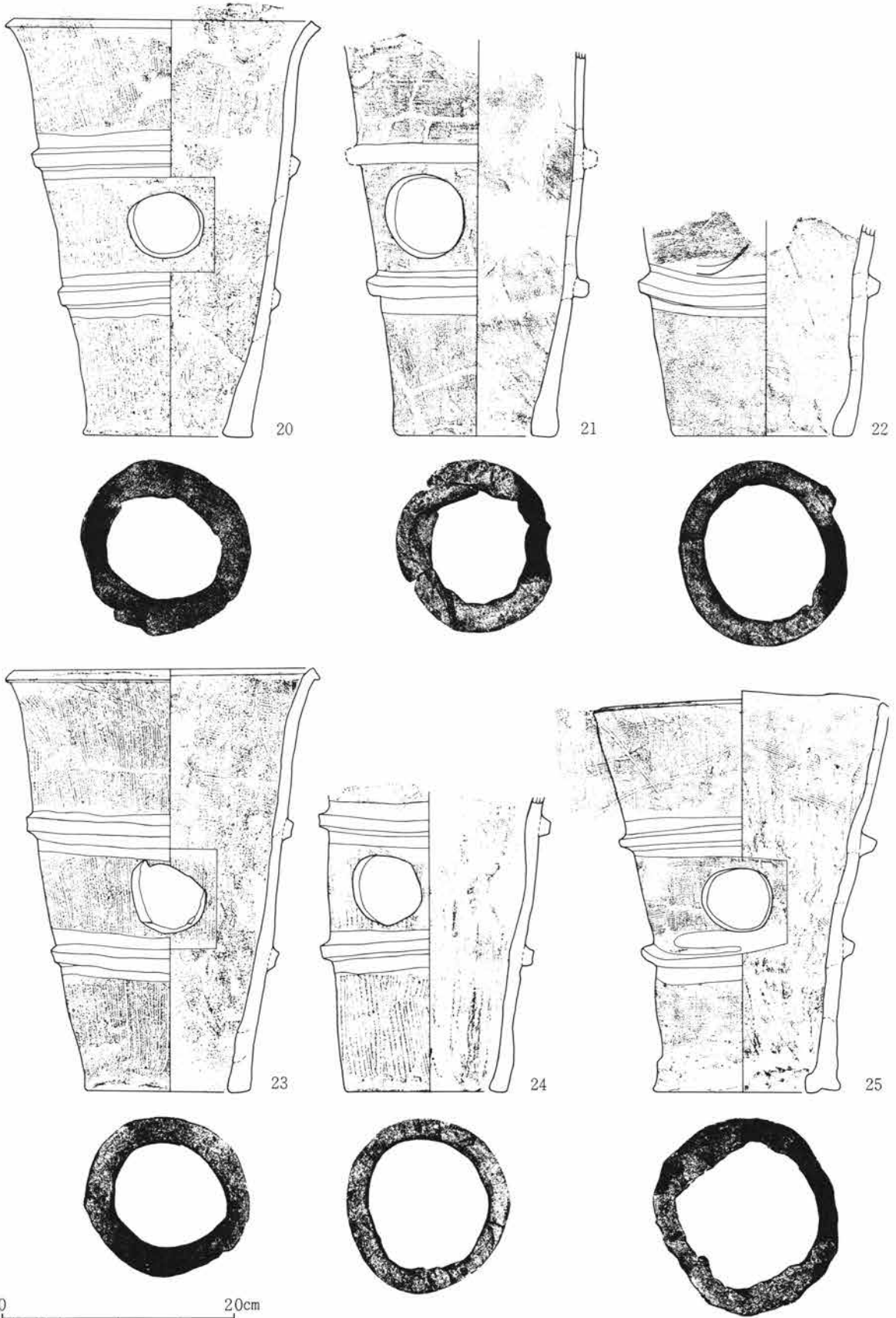


第159図 3号墳出土円筒埴輪実測図(2)

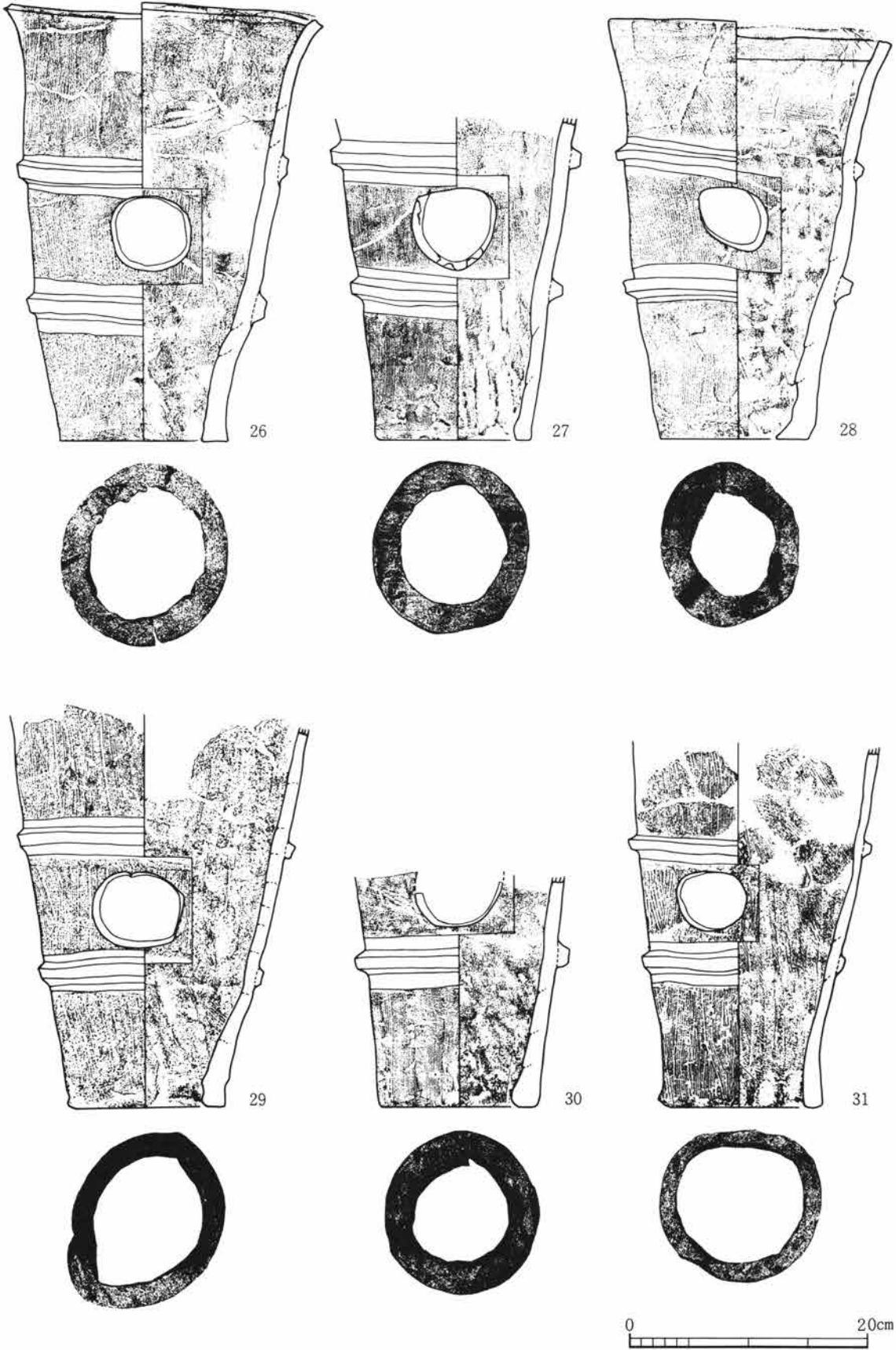


第160図 3号墳出土土円筒埴輪実測図(3)

III 検出された遺構と遺物

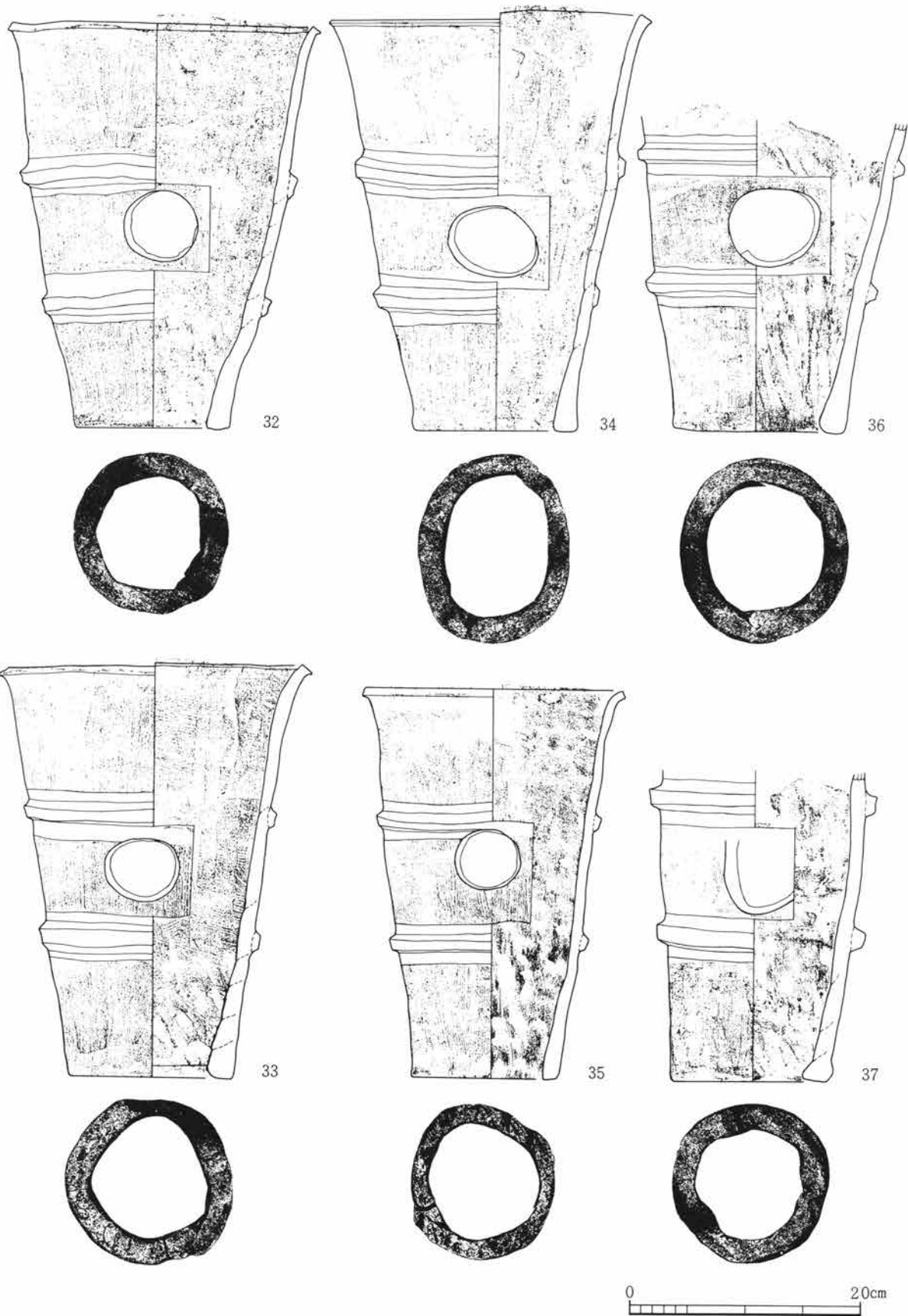


第161図 3号墳出土円筒埴輪実測図(4)

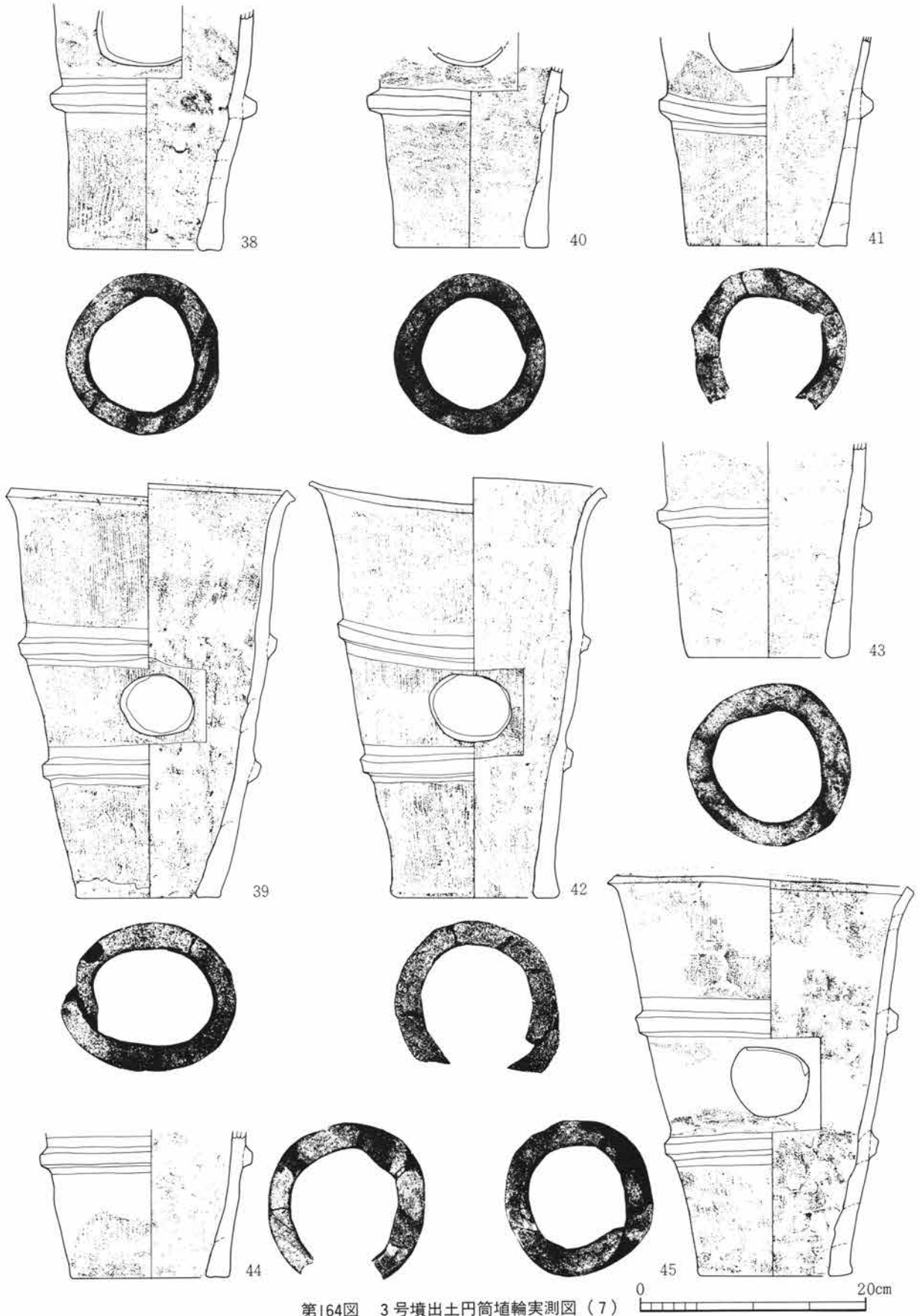


第162図 3号墳出土円筒埴輪実測図(5)

III 検出された遺構と遺物

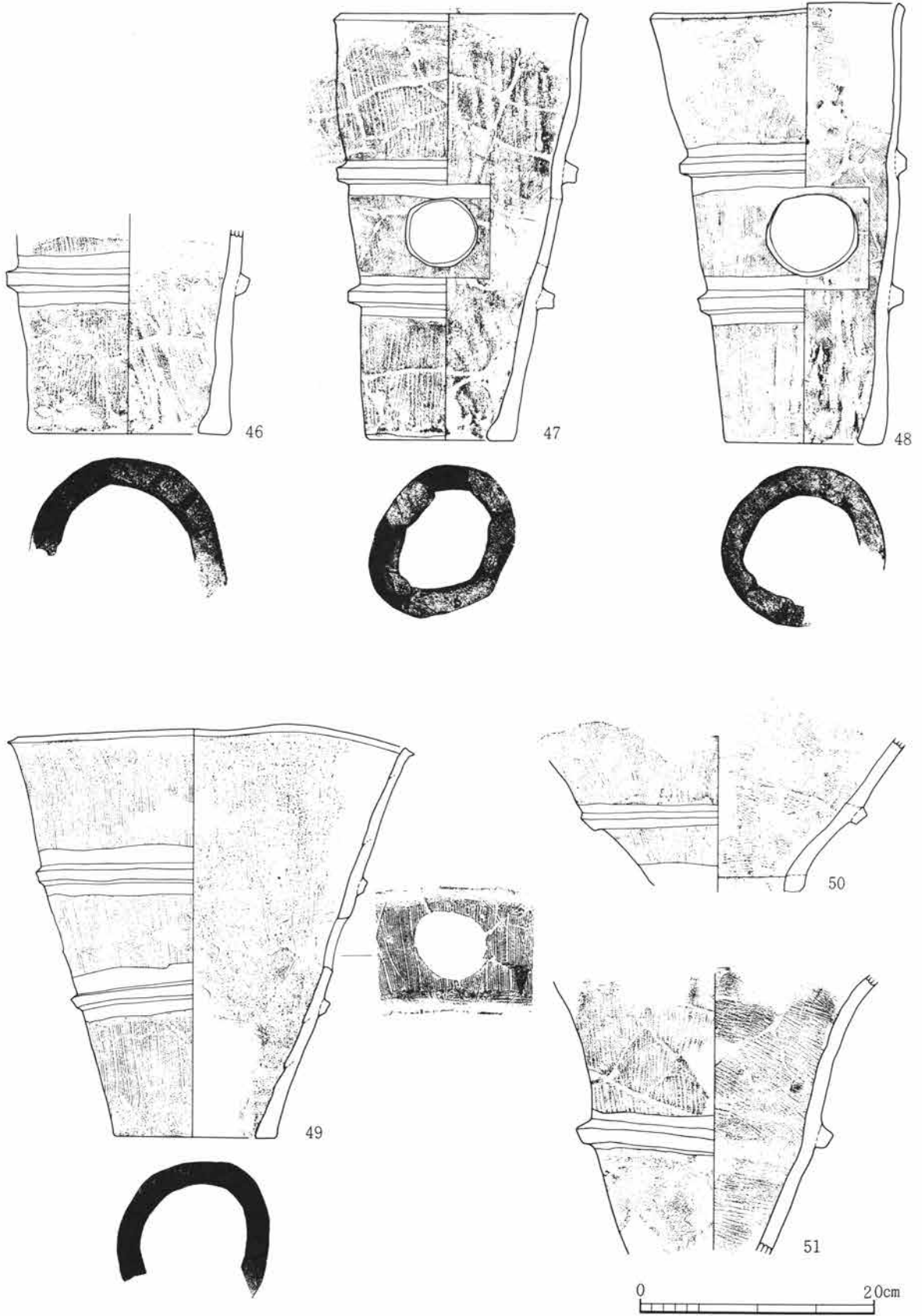


第163図 3号墳出土円筒埴輪実測図(6)

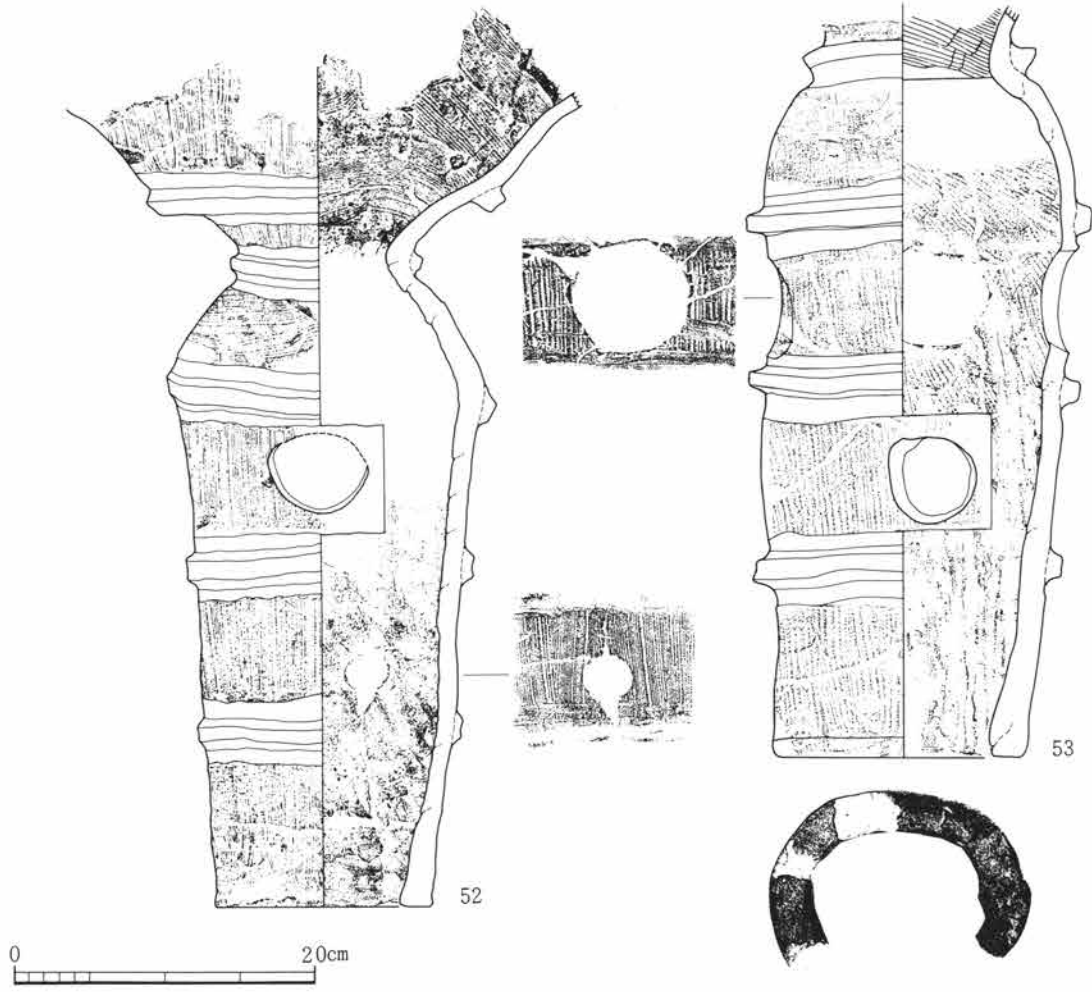


第164図 3号墳出土円筒埴輪実測図(7)

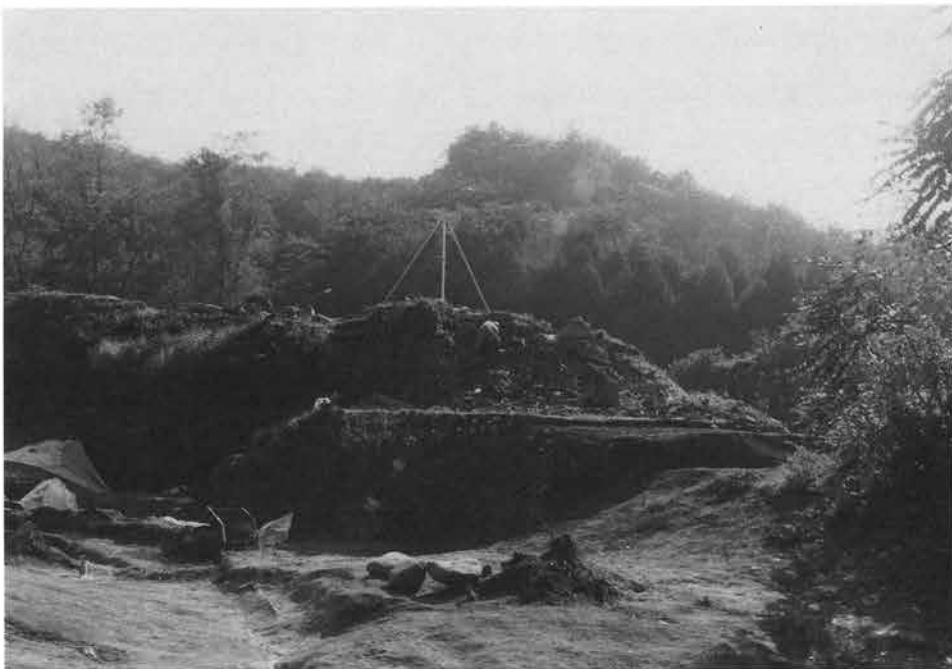
III 検出された遺構と遺物



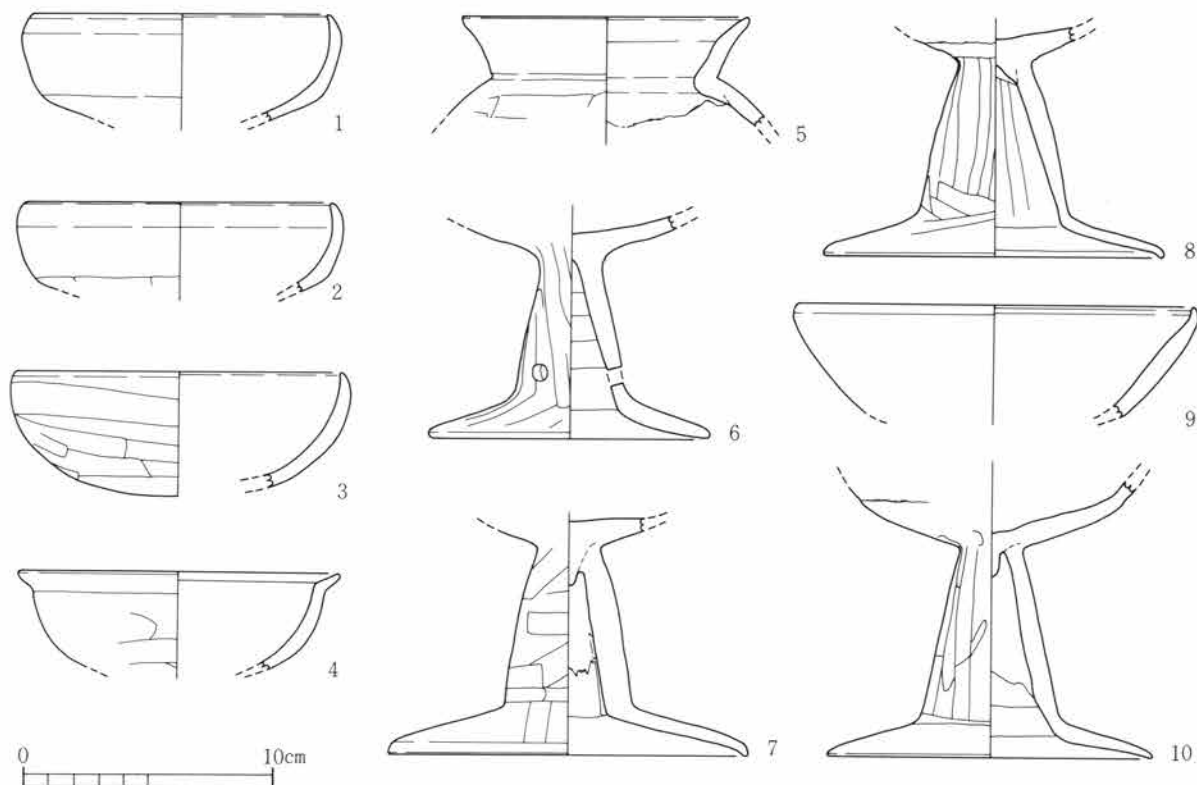
第165図 3号墳出土円筒埴輪実測図(8)



第166図 3号墳出土円筒埴輪実測図(9)



III 検出された遺構と遺物



第167図 3号墳出土遺物実測図

4号墳《第168～174図、

図版64・65・121・146・147・156》

1. 位置と調査前の状態

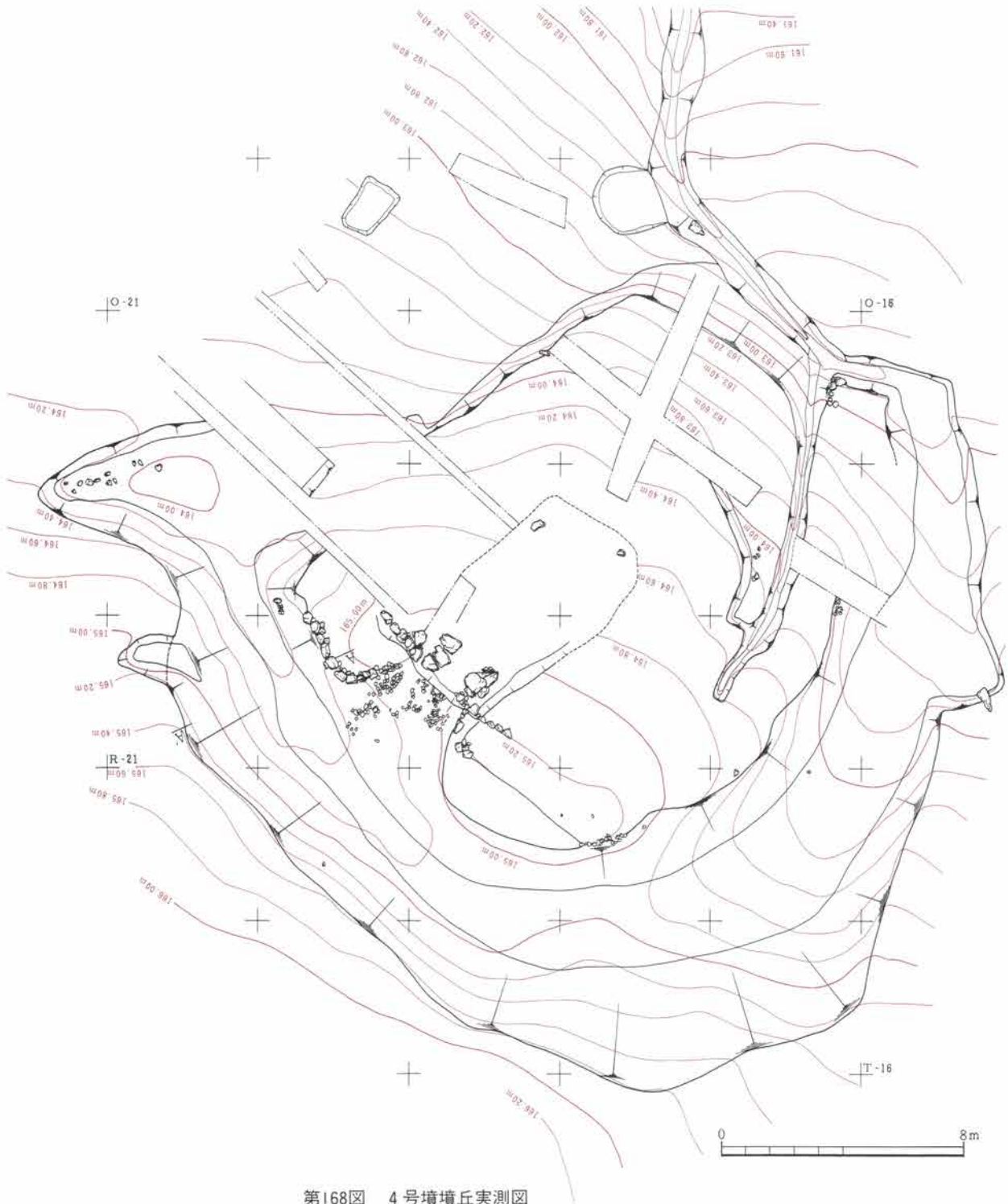
Q-18ポイント周辺に位置していた。北東緩斜面に立地しており、杉林に利用されていた。標高は、162～166mである。石垣状の集石と僅かな地膨れが観察されたことから、古墳と認定した。古墳群の中では東端に占地しており、北西側には3号墳が隣接しており、南西側に19・20号墳が5m程の距離を空けてそれぞれ営まれていた。

2. 外部施設

斜面下位の北側では削平されていたが、ローム層中に掘り込まれた周堀下部の一部が遺存していた。形状は、円墳であったと考えられるが、北西側の3号墳周堀に近接する付近で著しく形状を歪めると共に、南西側もやや幅広く、直線的になっており全体的に不整形になっていた。断面形は凹レンズ状を呈し、内縁部は基壇葺石の根石と連続していた。覆土は3層に大別でき、黒褐色土とロームブロックの混

土層の上に黒褐色土が乗り、最上部には浅間B軽石が堆積していた。規模は、上幅5～9m・下幅1.5～3.5m、深さは90cm前後であった。周堀上端での外径は約30m、内径は約20～23mである。

基壇外縁の葺石と墳丘葺石の根石及び前庭の石積みも僅かに残っていたことから、周堀底面から20cm程上位に、幅約2mのテラス面が巡る二段築成の古墳であることが確認された。規模は、基壇外周径約20m、墳丘径約15mである。なお、基壇は前庭の周辺を除いた部分では地山を削り出して成形されていた。周堀の遺存状況から推して、墳丘全体を同じ幅で環状に取り巻くのではなく、背後に行くに従って次第に幅を狭めながら収束していた可能性が高い。前庭は、等脚台形状を呈しており、上底2.4m・下底3.8m・高さ1.4m程の規模であったと考えられる。前庭部及びその前面の周堀内からは多数の須恵器が出土した。また、周堀内からは多くの埴輪片が出土したが、樹立状態で確認されたものが無い為に埴輪の配列状況は判然としない。



第168図 4号墳墳丘実測図

3. 内部施設

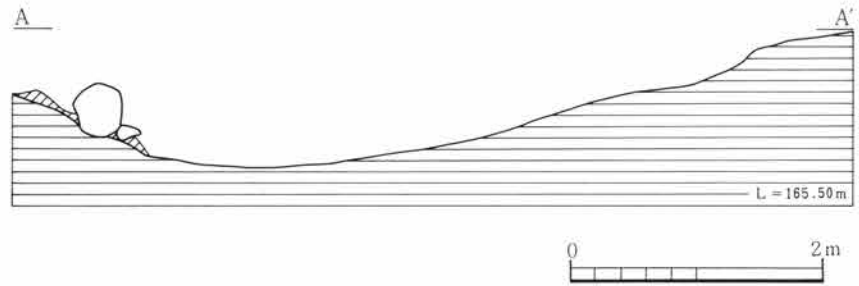
南西方向に開口する横穴式石室の羨道部の壁材6石と掘り方の一部を検出した。削平が著しく、遺存状態が芳しくなかったが、掘り方底面の地形の範囲等から推して、墳丘のほぼ中央部に奥壁を置いた両

袖型横穴式石室であったと考えられる。

規模は、遺存した壁材も削平に際して掘られた穴の中に落とし込まれており、原位置を保っていないが、現状での羨道幅は70cmである。

掘り方は、前庭部にも延びており、側壁の裏側1

III 検出された遺構と遺物



第169図 4号墳周堀断面実測図

mの範囲にはロームと褐色土の混土層を20cm程の厚さに盛ってテラス面を形成していた。確認された掘り方の規模は、全長8m・最大幅4.5mを測る。底面には径2cm前後の玉石が僅かに残っており、その間から副葬品の一部と考えられるガラス玉・靱尻金具・刀子が出土した。

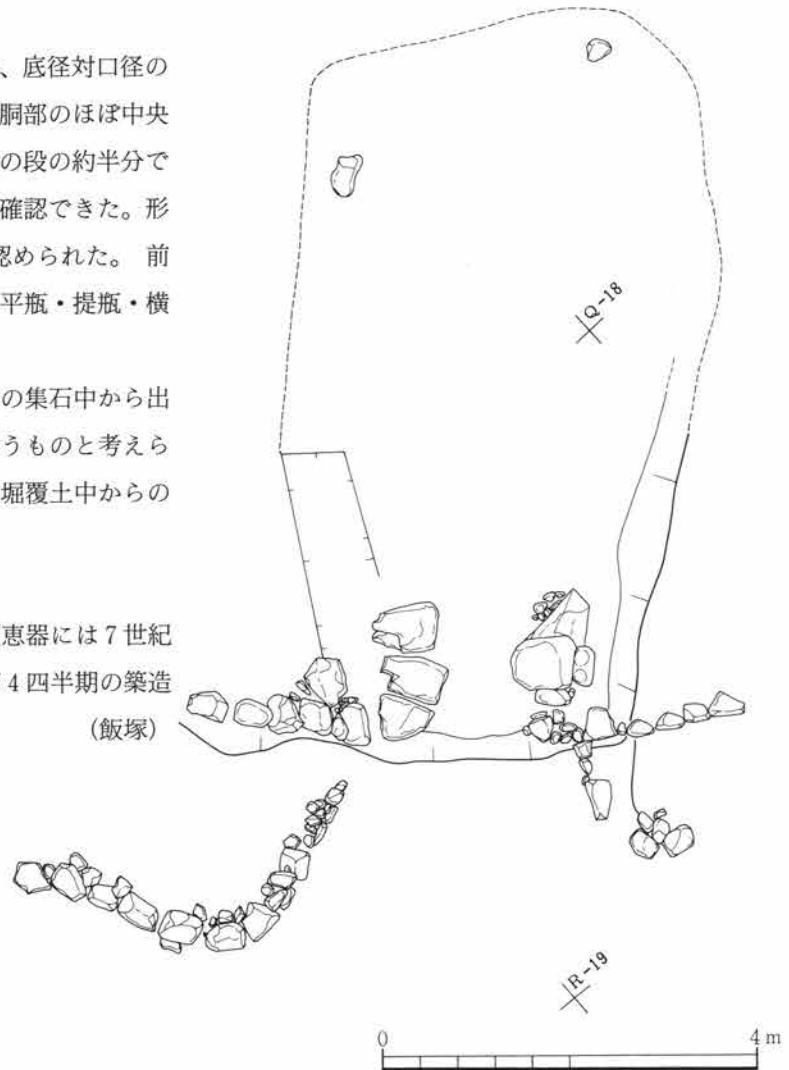
4. 出土遺物

円筒埴輪は、2条凸帯3段構成で、底径対口径の比は1:1.4である。透し孔は円形で胴部のほぼ中央に穿たれており、口縁部の長さは他の段の約半分である。朝顔形埴輪は、大小2種類が確認できた。形象埴輪は、人物と家形埴輪の破片が認められた。前庭の周辺からは、須恵器蓋・高坏・平瓶・提瓶・横瓶が出土した。

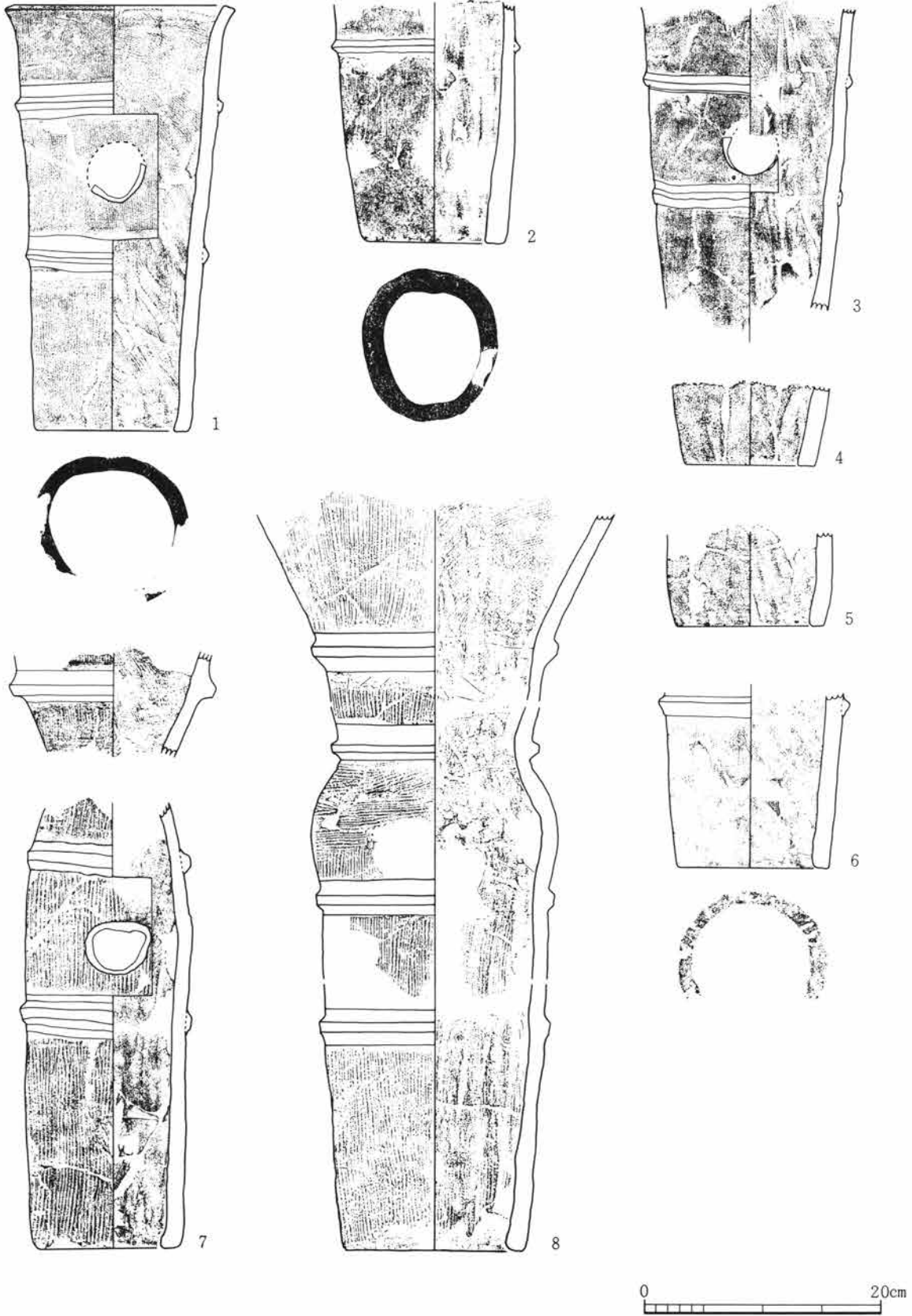
副葬品は、前述の物の他に北東部の集石中から出土した金銅製の圭頭柄頭も本墳に伴うものと考えられる。なお、滑石製模造品2点は周堀覆土中からの出土である。

5. 備考

本古墳は、前庭部より出土した須恵器には7世紀代の物も多く含まれるが、6世紀第4四半期の築造と考えられる。

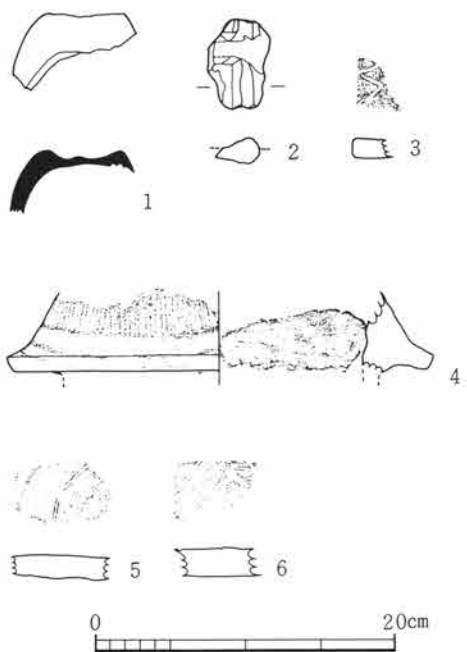


第170図 4号墳石室実測図



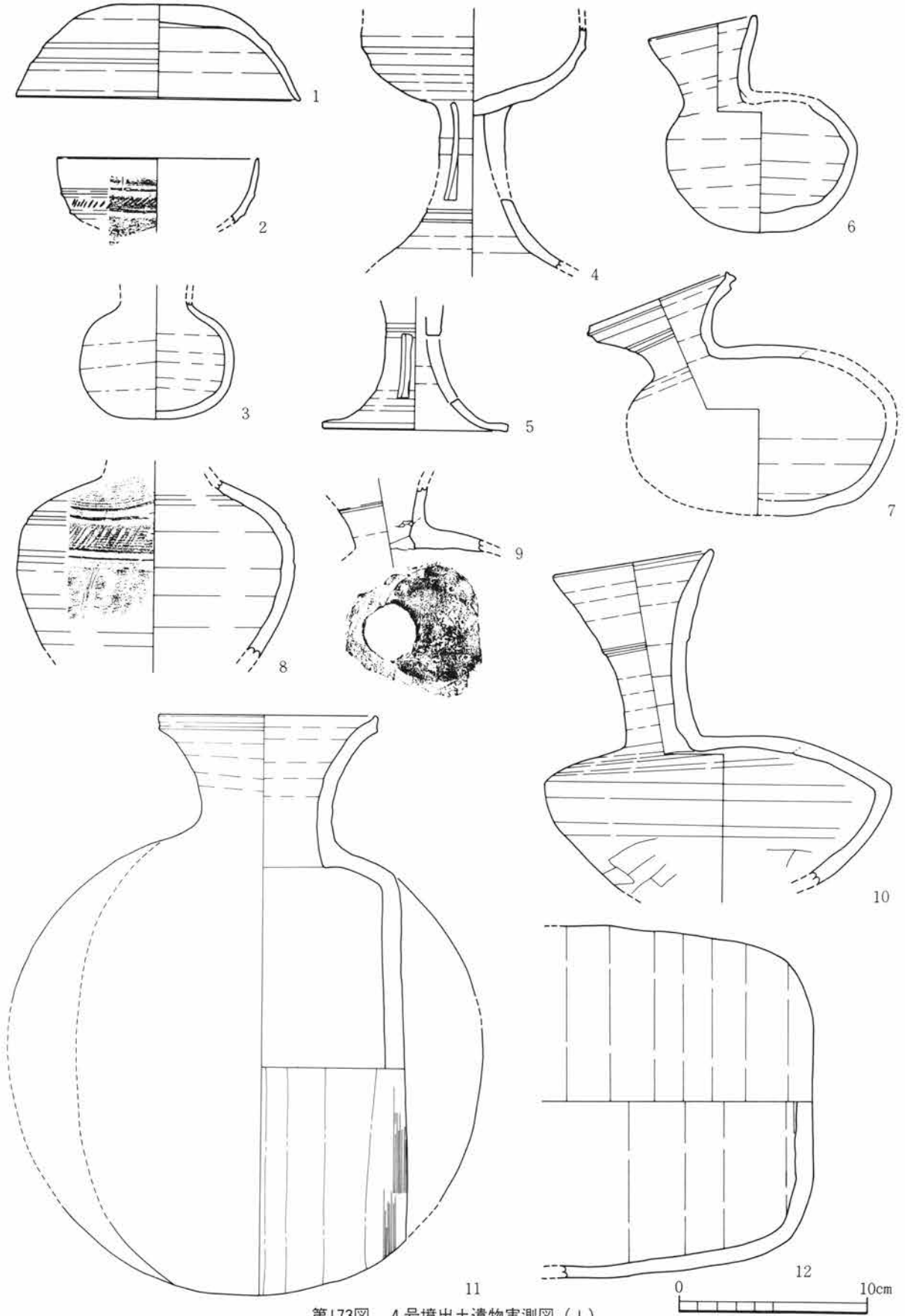
第171図 4号墳出土円筒埴輪実測図

III 検出された遺構と遺物



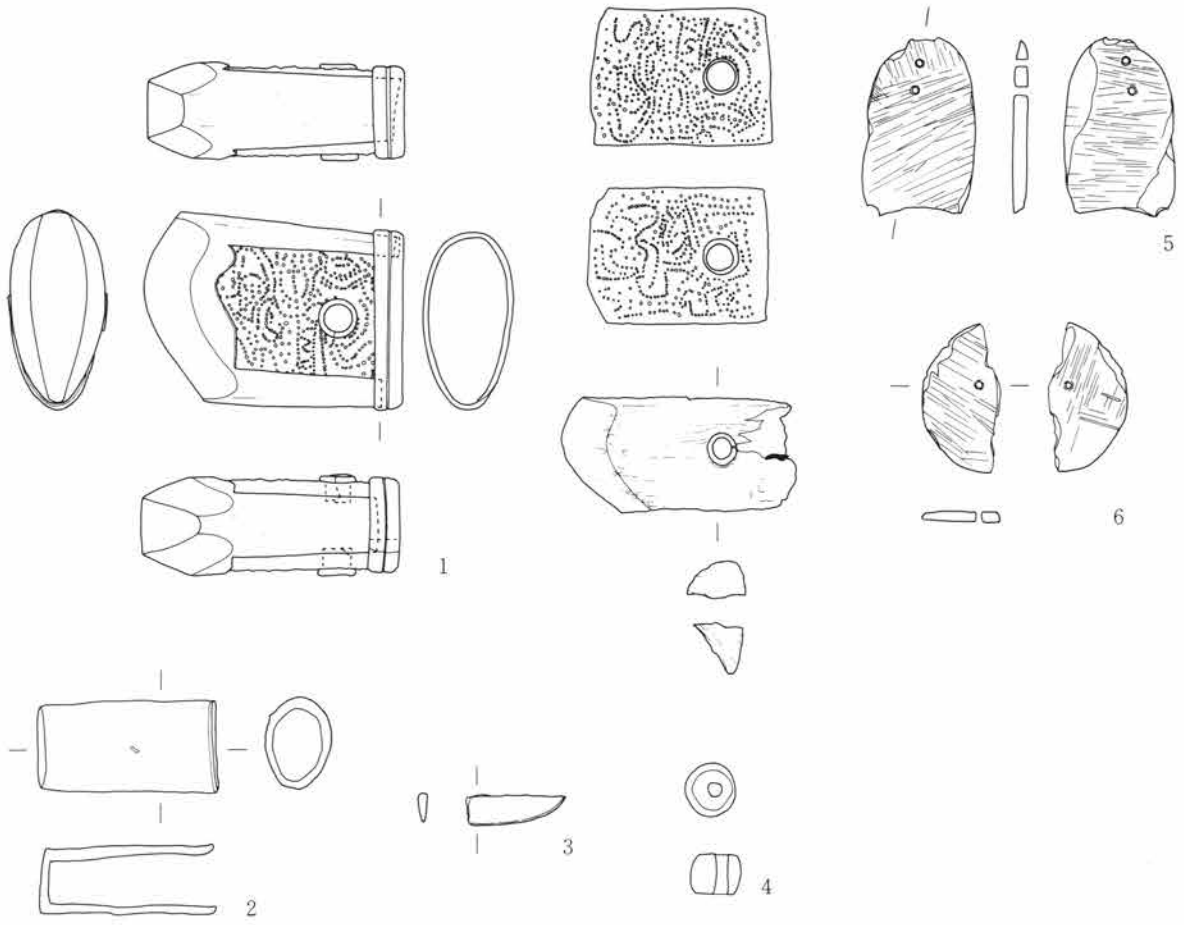
第172図 4号墳出土形象埴輪実測図



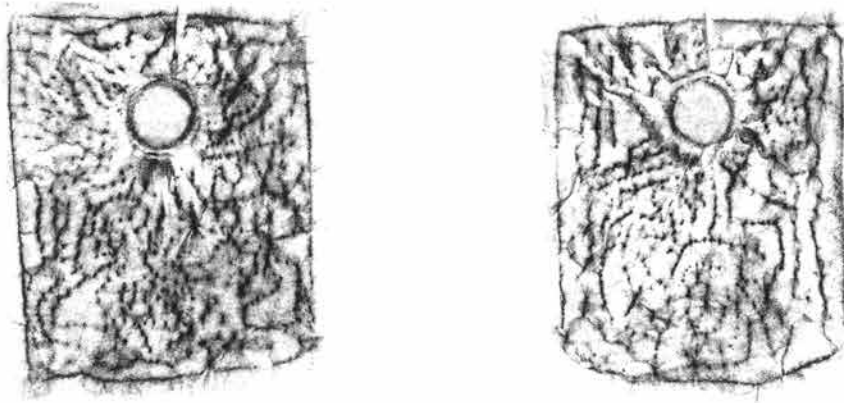


第173図 4号墳出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第174図 4号墳出土遺物実測図(2)



5号墳《第175～178図、

図版65・66・121・122・148》

1. 位置と調査前の状態

Z-21ポイント周辺に位置していた。北緩傾斜地に立地しており、畑によって削平されていたが、石室用材と思われる2個の石が残されていた為に、発掘調査前の現況観察時点で古墳と認定した。北西に6号墳・北東に20号墳が接するように構築されており、古墳群の南東部の端に占地していた。標高は、169～171mを測り、北西部には、地這りに伴う亀裂が南西から北東方向に走っており、段差が生じていた。

2. 外部施設

南西部が6m程途切れた、扶状を呈する周堀の下部が確認された。規模は、上幅120～230cm・下幅65～110cmで、深さは40cm前後であった。周堀上端での外径は16.4m、内径は12.6mである。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦であったが、斜面高位の南部と下位の北部とでは120cmのレベル差があった。なお、後世の攪乱による結果と考えられるが、覆土中に浅間B軽石の純堆積は認められなかった。また、覆土除去作業中に20～30cm大の垂角礫が出土しているので、葺石が圍繞していたと考えられるが、原位置を保った物が無く、その範囲や規模は不明である。埴輪は、周堀内に転落しており、樹立状態を保った物は殆ど無かったが、南東部において周堀の内縁から1m程内側に円筒埴輪の基部が一つだけ残っていた。出土した須恵器は、石室前面の周堀内に散在し

ていた物であり、周堀の途切れる部位は石室開口方位よりもやや西側にずれていた。

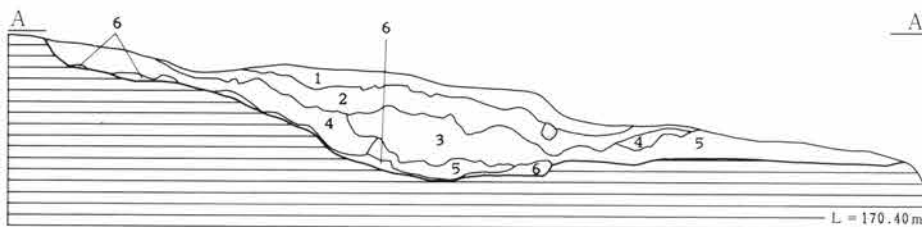
3. 内部施設

中心から1～2m南側に寄った位置に、130～140cmの間隔を空けて、2個の石室用材が遺存していた。周堀の形状から推して、南側に開口する横穴式石室を埋葬主体部としていたものと考えられる。遺存した2個の石は、位置や規模の点から玄室の壁材である可能性が高い。石室構築に当たっての掘り方は確認されず、左右の壁石は栗石をもって設置されていた。左壁は50×100cm・厚さ95cmの石の平面を横長に据えており、右壁は65×140cm・厚さ50cmを同様に据えていたが3個に割れていた。左壁の下部には床面に敷かれたと考えられる、径3cm前後の玉石が6cm程の厚さで残っており、更にその下部には30cm大の偏平な河原石の舗石が認められた。現状で想定される床面の標高は170.5m前後であり、開口方位はS-5°-Wと考えられる。

4. 出土遺物

円筒埴輪は、完形に復元できる接合資料は得られなかったが、2条凸帯3段構成の小型の円筒埴輪であると考えられる。底径対口径の比は1:1.7～1.8であり、円形を呈する透孔は胴部のやや上方に穿たれていたと思われる。基部の内面に、粘土板を作った時の横方向の刷毛目が残っている物が有り、削りによる基部調整を施された物も認められた。

形象埴輪は、人物と家が認められており、人物埴輪は、上げ髻と潰島田髻とが出土しているが、前述

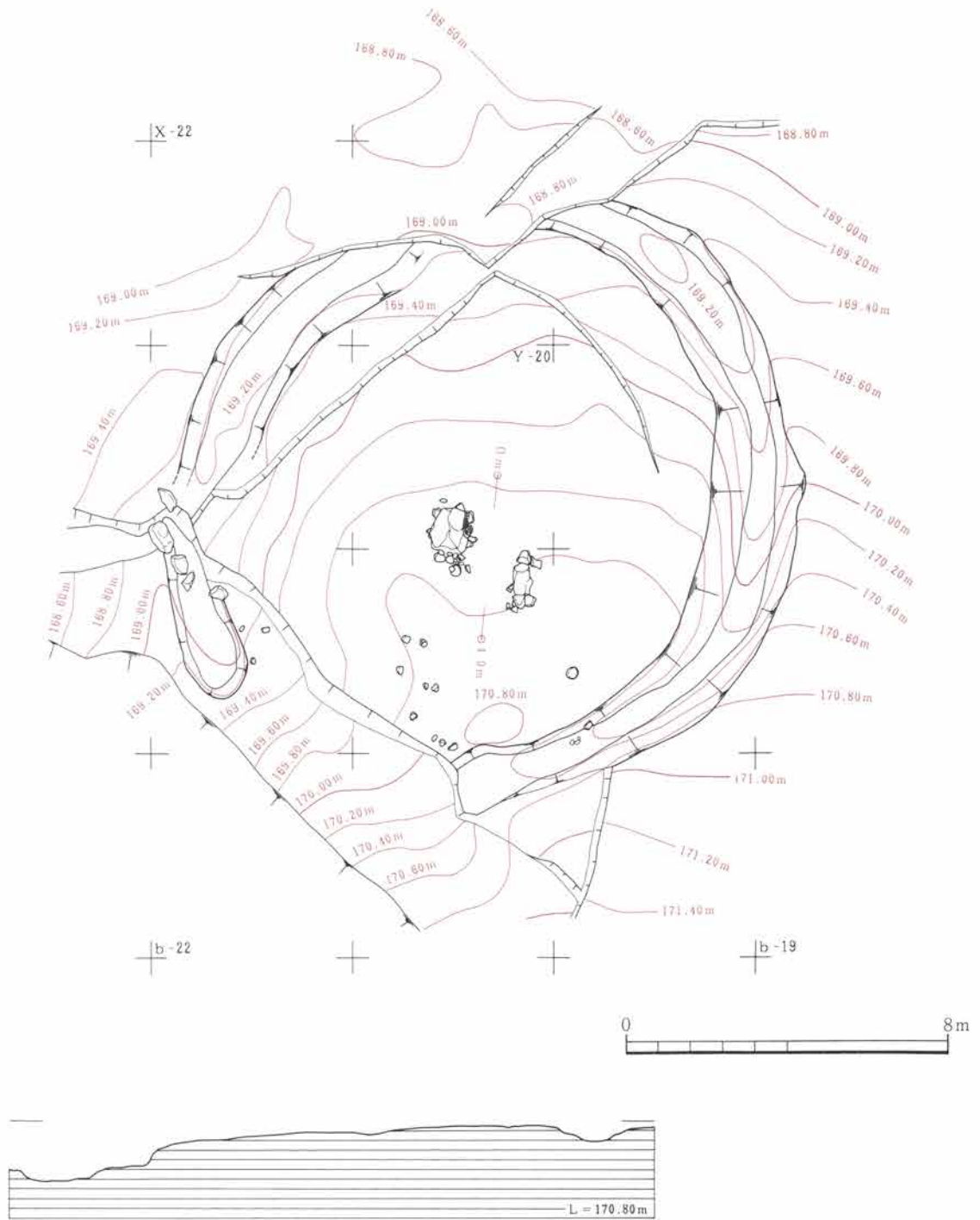


- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. 道路の敷石層 | 5. 暗褐色土 ローム粒を含む。 |
| 2. 褐色土 A軽石を多く含む。 | 6. 明褐色土 ローム粒を多く含み、固く締まる。 |
| 3. 黒褐色土 A軽石を少し含む。 | |
| 4. 褐色土 A軽石を斑点状に含み、よく締まる。 | |



第175図 5号墳周堀地層断面実測図

III 検出された遺構と遺物

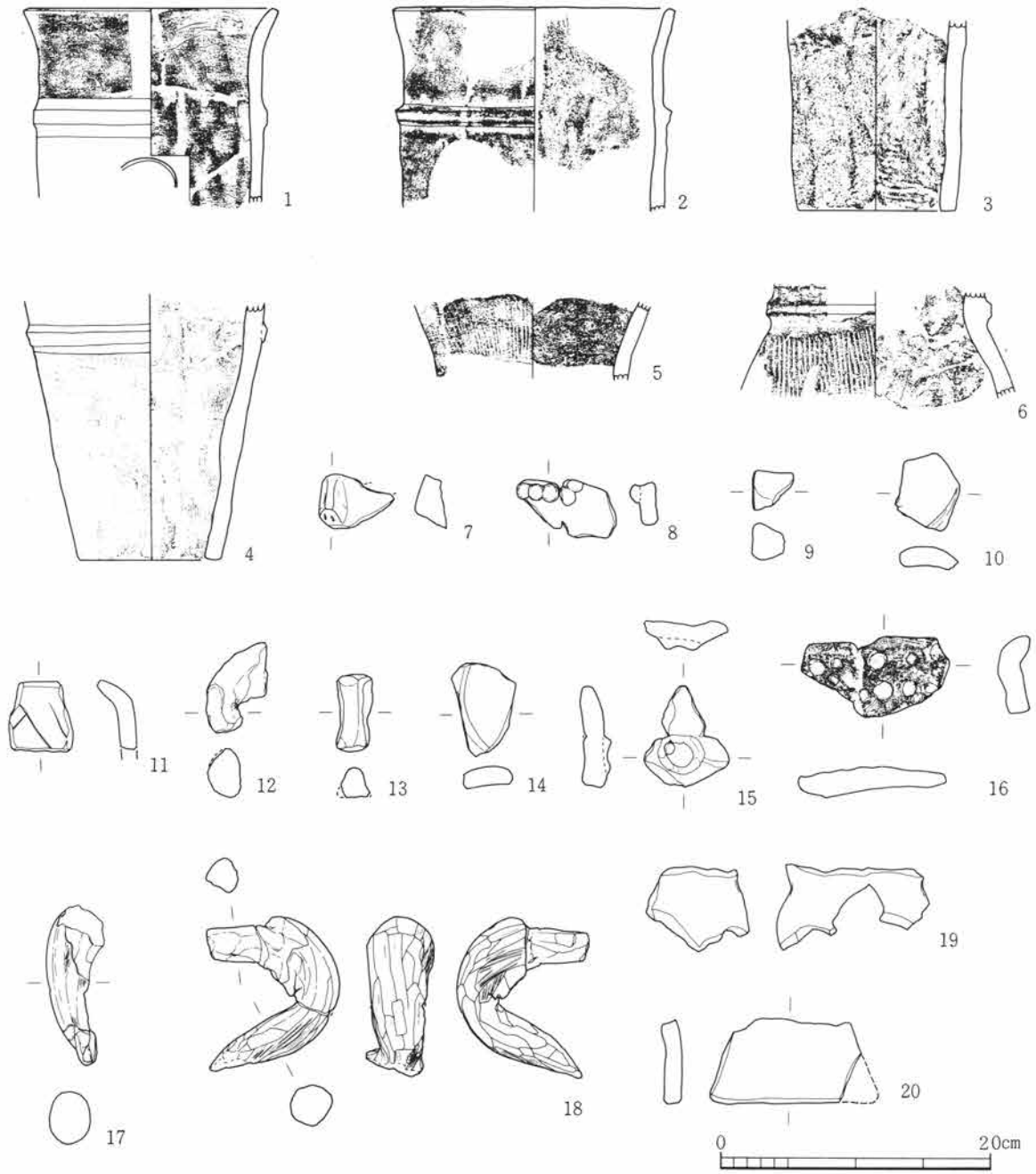


第176図 5号墳墳丘実測図

の通りその配列は不明である。また、西側の周堀中からは須恵器甕・蓋・☆・平瓶が出土した。

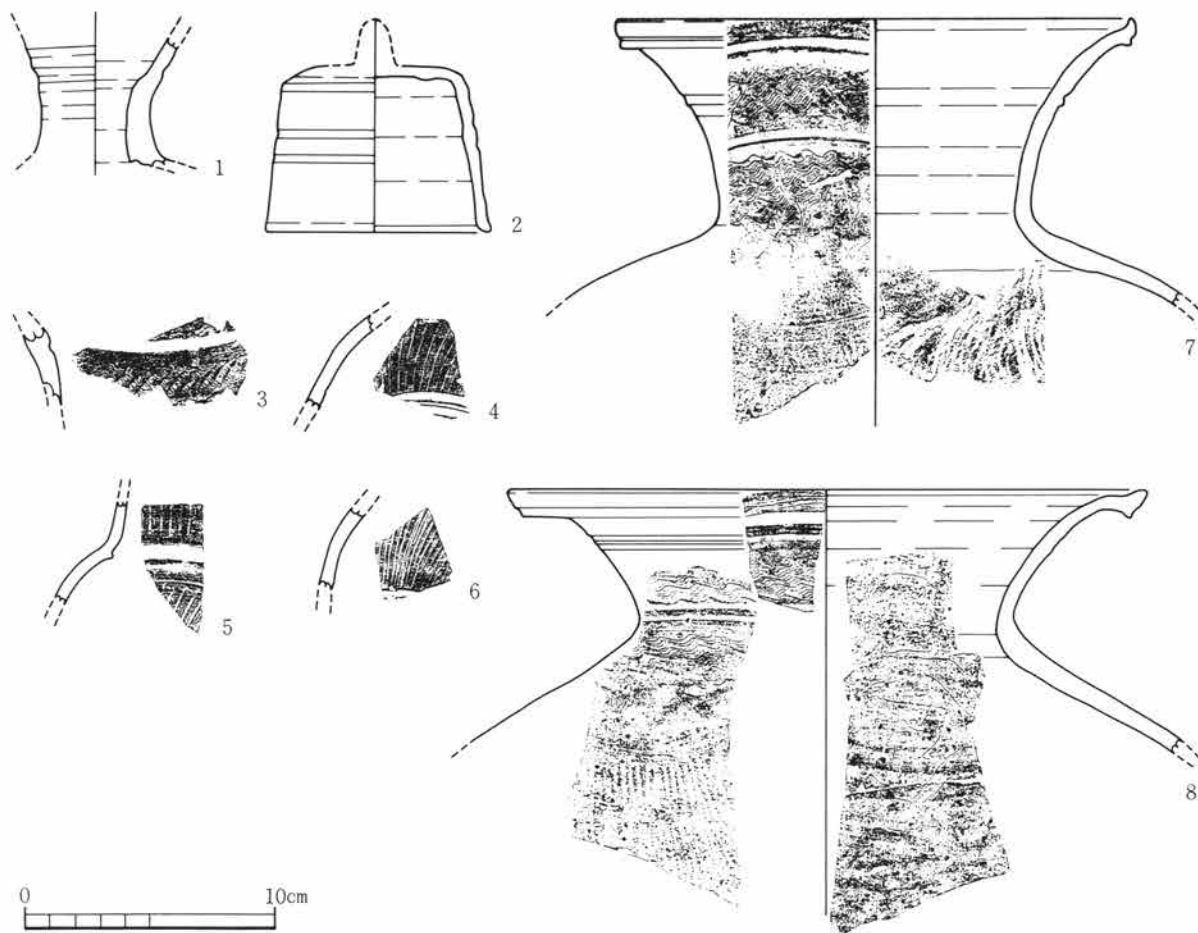
5. 備考

本古墳は、確たる証左に欠けるが、周堀の形態や埴輪の形状等から推して、6世紀末近くの築造と思われる。
(飯塚)



第177図 5号墳出土埴輪実測図

III 検出された遺構と遺物



第178図 5号墳出土遺物実測図

6号墳《第179～184図、図版67・68・123・156》

1. 位置と調査前の状態

X-23ポイント周辺に位置しており、農道脇の石置き場として利用されていた。南西部は地氾りに伴う陥没によって2～3m程沈降していたが、遺跡の中では比較的平坦な場所に立地していた。古墳群の中では、南東側に5号墳、北西側に9号墳、北側に19号墳が接して、北東方向には4m程の距離を空けて20号墳がそれぞれ営まれており、密集地帯の南端部に占地していた。

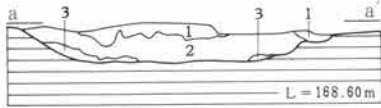
2. 外部施設

墳丘は耕作の為に削平されてしまっており、ローム層中に掘り込まれた環状に巡る周堀の形状によって円墳であることが確認された。規模は、上幅200～220cm・下幅65～150cmで、深さは30cm前後である。周堀上端での外径は17.6m、内径は13.2mで、傾斜

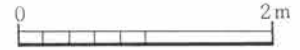
面に沿った南北方向がやや長い不整形円形を呈する。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦であったが、斜面高位の南側と下位の北側とでは160cmのレベル差があった。覆土除去作業中に20～30cm大の亜角礫が出土しているの、葺石が囲繞していたと考えられるが、原位置を保った物が無く、その範囲や規模は不明である。周堀内からは多くの埴輪片が出土したが、樹立状態で確認された物が無い為に埴輪の配列状況は判然としない。なお、形象埴輪の破片は、開口部の西側から出土した物が多かった。

3. 内部構造

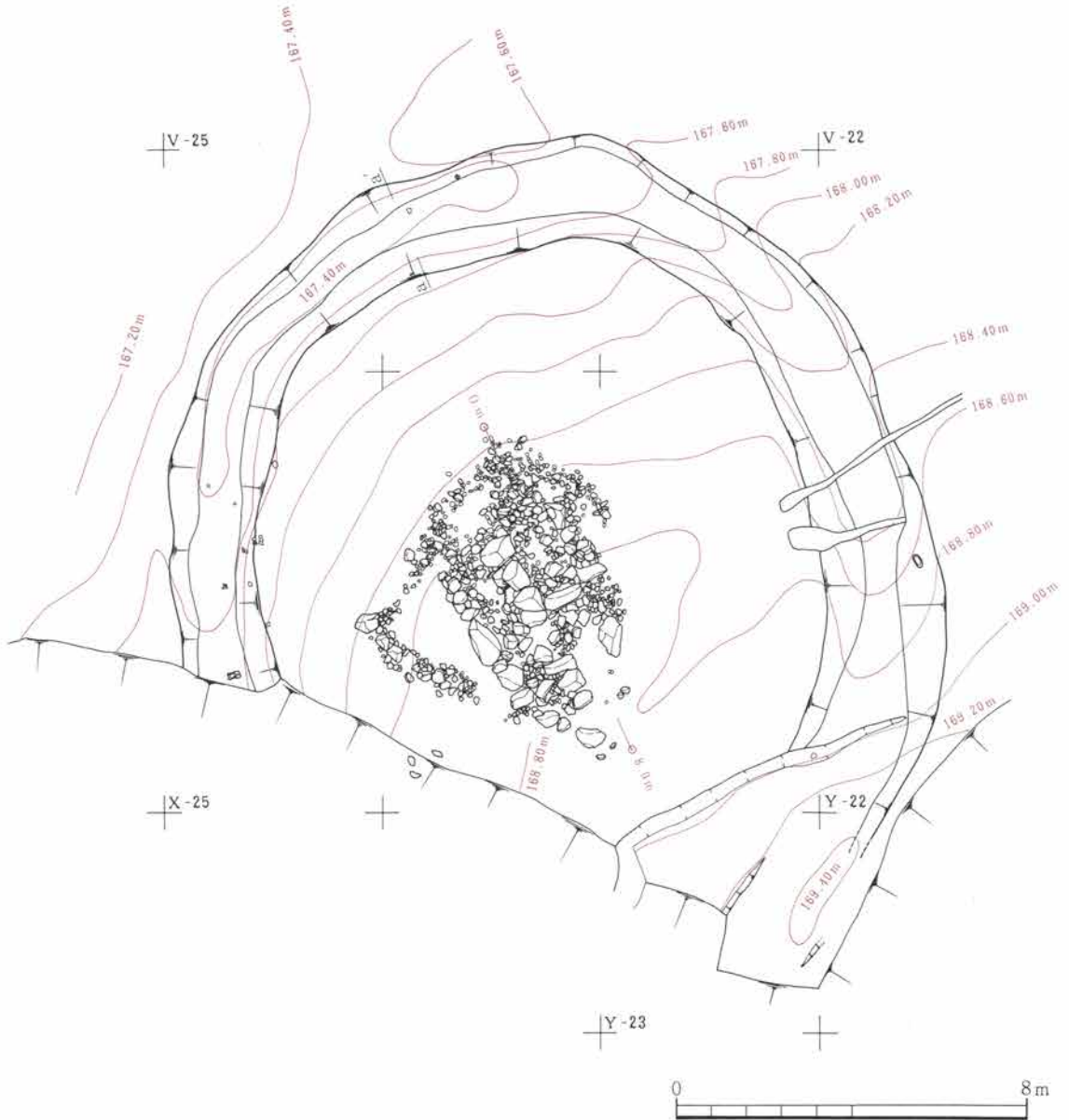
石室は、周堀が描く円のほぼ中央部に位置しており、南南東方向に開口する袖無型横穴式石室で、玄室と羨道とは框石によって区分されていた。玄室の奥部は既に撤去されており、羨道の前半部も地氾りの為に移動してしまっていた。なお、石室の構築面



- 1. 暗褐色土 灰白色軽石を含む。
- 2. 褐色土 遺物を多く含む。
- 3. 淡褐色粘質土 ローム粒を含む。



第179図 6号墳周堀地層断面実測図



第180図 6号墳墳丘実測図

は、当時の地表面を整地した直上或は浅い掘り方の内部であつたらしく、削平による影響の為に明確な掘り方は認められなかった。現状における各部の計測値は以下の通りである。

石室全長 500cm+ α 開口方位 S-25°-E

玄室長	240cm+ α	羨道長	260cm+ α
玄室奥幅	108cm+ α	羨道幅中	70cm
玄室前幅	97cm	使用尺	≒24cm

積み上げられていた石を除去したところ、石室床

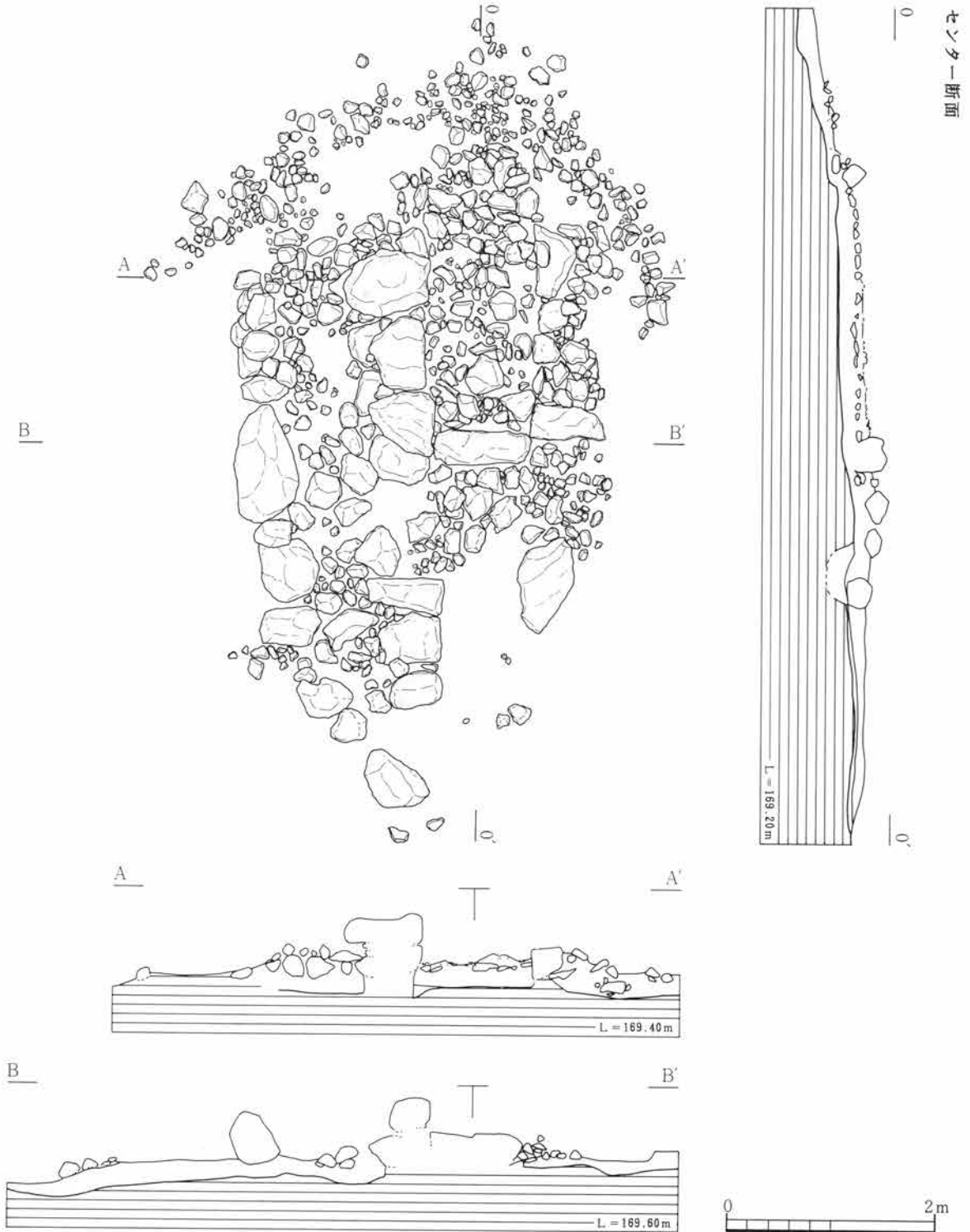
III 検出された遺構と遺物

面の大半が既に盗掘や片付けによって攪乱されてしまっていた。部分的に残っていた玄室部床面の観察では、標高168.80mの整地層の上に、厚さ5cm程の平石を用いた舗石の上に玉石を敷き詰めて床面としており、框石も壁体の根石と同時に設置されていた

ことが判明した。

閉塞の範囲及び羨道部の床面を認定することはできなかったが、框石の天端よりもやや低い高さで、攪乱されていない石が10個程残っていた。

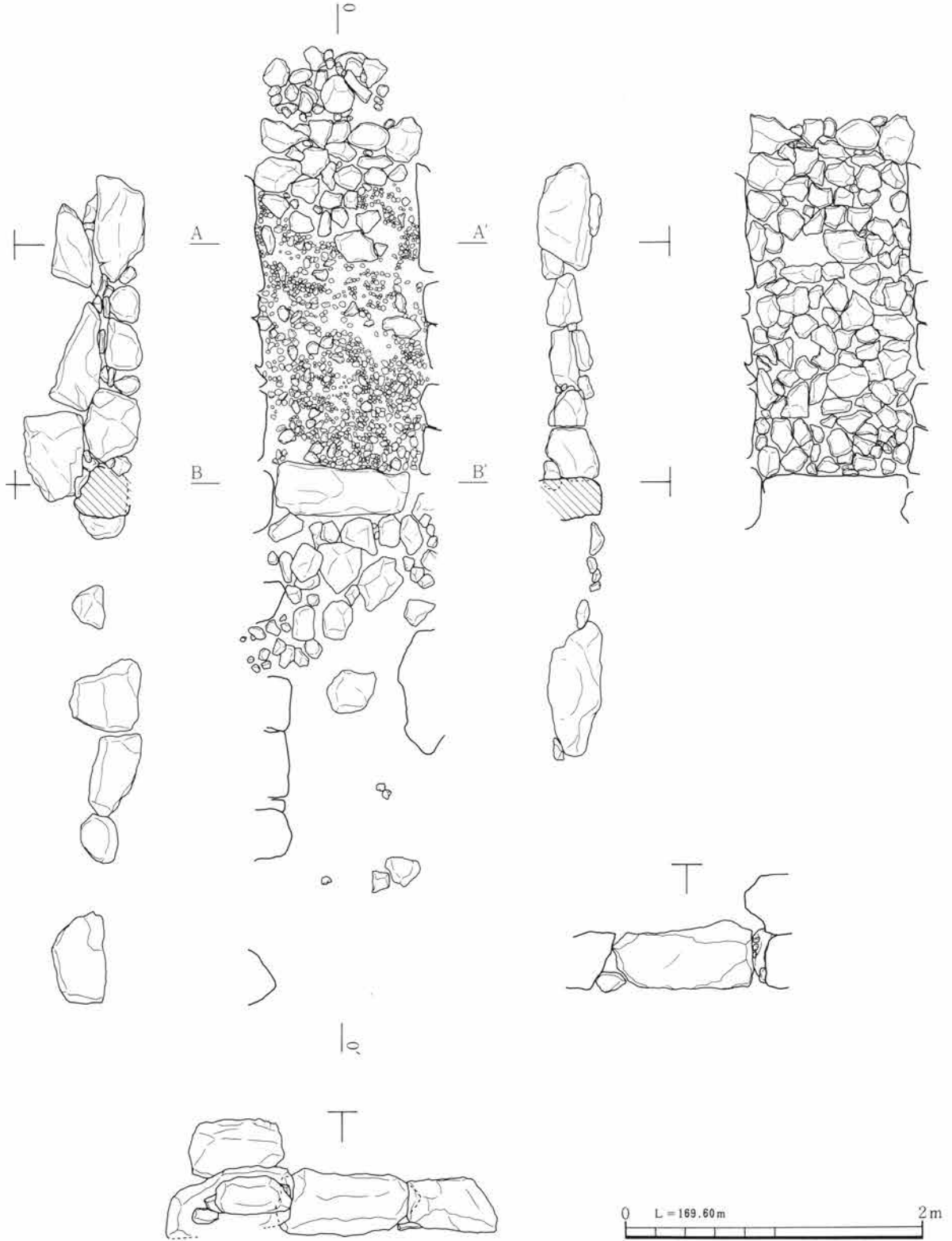
壁体は、粗粒安山岩の直方体状の亜角礫によって



第181図 6号墳石室裏込め被覆実測図

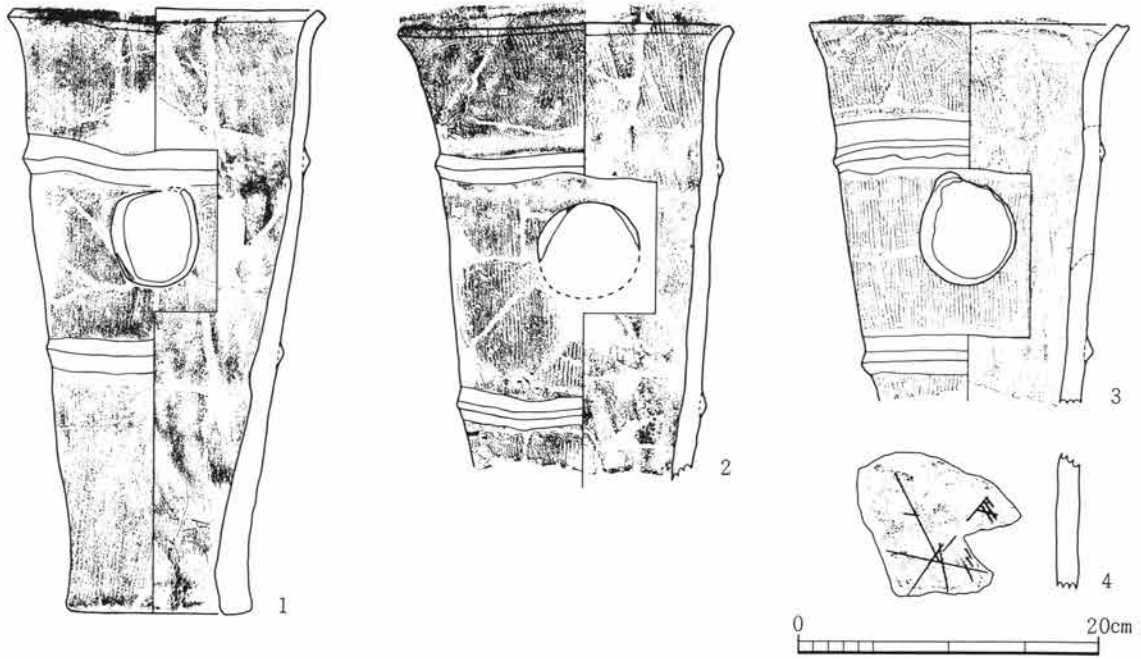
構築されていた。現状で、玄室部の左壁が2段（高さ78cm）残っていたが、他は根石の一部が遺存していたに過ぎない。壁石は小口面を内部に向けた用材

を栗石を支いながら設置して根石としていた。根石の天端がきれいに揃っていると同時に、2段目は3石しか残っていなかったが、互目積みによって構築



第182図 6号墳石室展開図

III 検出された遺構と遺物



第183図 6号墳出土埴輪実測図

して行った様子が看取された。

壁体の裏込めには、10~20cm大の石を寄せ掛けると同時に目潰し砂利を詰めており、30cm大の石を用いて裏込め被覆を行っていた。

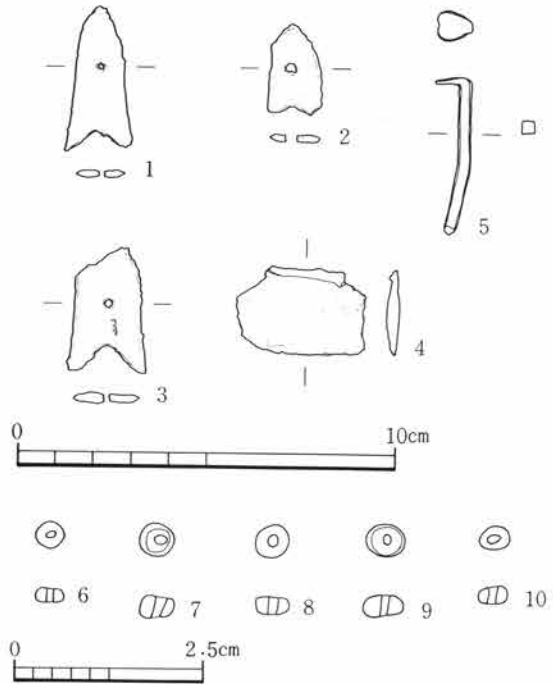
4. 出土遺物

円筒埴輪は、2条凸帯3段構成で、底径対口径の比は1:1.7である。透孔は長円形で胴部の上端に穿たれており、口縁部の長さは他の段の約半分である。形象埴輪は、家形埴輪の破片が認められた。

副葬品は、ガラス小玉5個・平根式鉄鏃3個・不明鉄製品1個が残っていただけである。銅釘は北東部の周堀より出土した物であるが、本墳に直接伴うものであるか否かは不明である。

被葬者を知る手掛かりとしては、若干の骨片(年齢・性別判定不能)が出土したのみであり、追葬の回数等は不明である。

5. 備考 西側の墳丘下部に21号住居跡(5世紀第4四半期)が営まれていたこと及び遺物の示す時期相からは、本墳の築造年代として6世紀第2四半期が考えられる。(飯塚)



第184図 6号墳副葬品実測図

7号墳《第185～196図、

図版69～72・123・124・157・158》

1. 位置と調査前の状態

G-33ポイント周辺に位置していた。傾斜角7°程の北西向きの緩斜面に立地し、標高は156m前後である。南西の一部は道路によって削り取られ、石垣が積まれており、墳頂部は整地されて少林山達磨寺の駐車場として利用されていた。古墳群の中では中央部に占拠しており、南西部に隣接する古墳が築かれていなかった他は、1号墳・8号墳・21号墳と境を接していた。

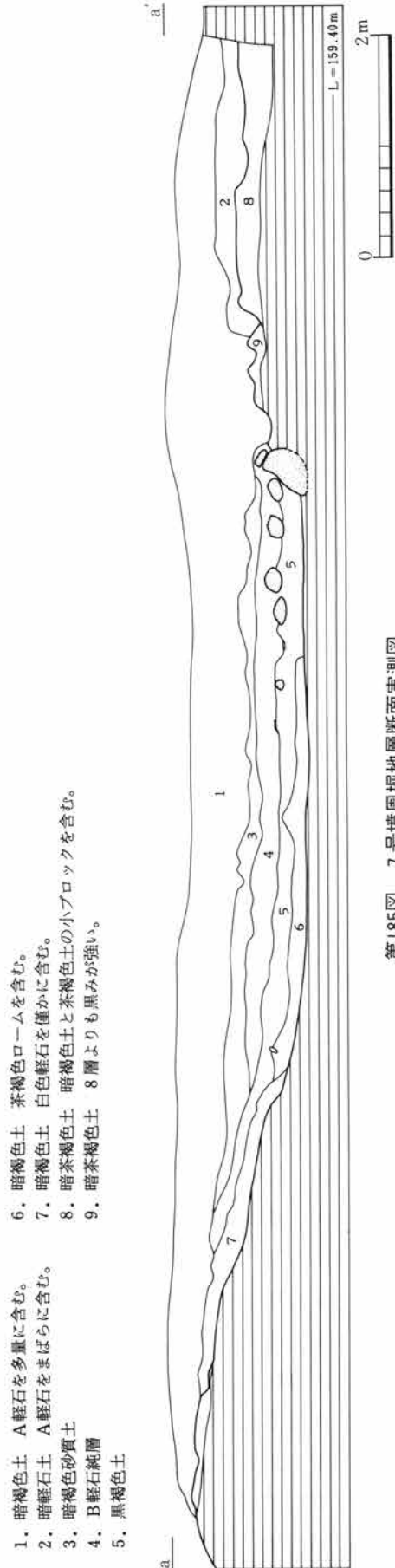
2. 外部施設

周堀 南東部において、不明瞭な形で検出された。上幅130～200cm・下幅45cm・深さ約50cmの規模で、南側から東側まで延びていたが、斜面下位の谷側では自然傾斜に解消されてしまっていた。基壇葺石との間隔が狭いことと併せて、周堀と言うよりはむしろ、古墳築造に伴う整地範囲の端部である可能性が高い。

墳丘の規模と形状 基壇外周径約20.6m・墳丘径約15.3mの二段築成の円墳であり、谷側からの現存高は3mを測るが、北西斜面に位置するにも拘わらず、南北方向がやや長い楕円形状を呈する。基壇は、地山の上に若干の盛土をして築かれており、周縁部の葺石が崩れている部分が多いが、現状で10°前後の傾斜を以て、高さ20～50cm・幅2.3～3.0mで墳丘を囲繞している。墳丘は45°前後の傾斜で截頭円錐状に整形されていたと考えられるが、墳頂部は確認されなかった。

封土はロームブロックの混入の度合から3種類に大別できるが、盛土作業全体の途中過程を示す硬化面は、傾斜の下位である谷側が傾斜しているのに対して、山側はほぼ水平になっていた。

葺石 基壇周縁及び墳丘斜面には部分的ながら粗粒安山岩の亜角礫を用いた葺石が遺存していた。葺き方については、相互の間隔は区々であるが、比較的大きな根石から直角若しくは右斜め上方に向けて階段状につながる、作業工程上の区画石と考えられる



- 1. 暗褐色土 A 軽石を多量に含む。
- 2. 暗褐色土 A 軽石をまばらに含む。
- 3. 暗褐色砂質土
- 4. B 軽石純層
- 5. 黒褐色土
- 6. 暗褐色土 茶褐色ロームを含む。
- 7. 暗褐色土 白色軽石を僅かに含む。
- 8. 暗茶褐色土 暗褐色土と茶褐色土の小ブロックを含む。
- 9. 暗茶褐色土 8層よりも黒みが強い。

第185図 7号墳周堀地層断面実測図

III 検出された遺構と遺物



第186図 7号墳墳丘実測図

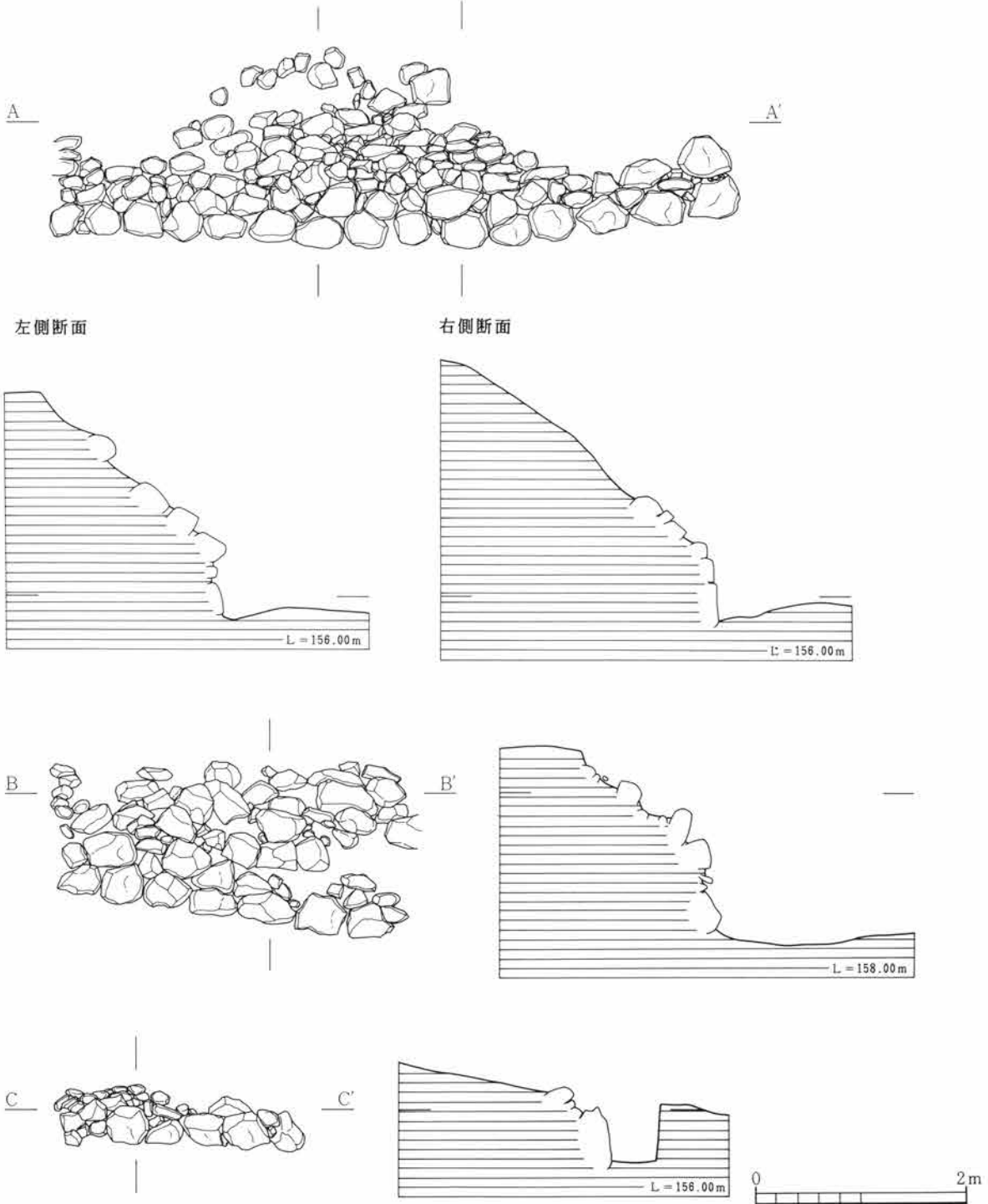
石列が確認された。また、石列の用材は他よりもやや大きめの石が使われており、整然と積み上げられていたが、区画内の他の部分については全体を敷き覆う様な状態であった。基壇部の葺石は、50°程の傾斜を以て約30cmの高さまで葺かれており、その上方は用材も小振りになり、やや傾斜を緩めて基壇上面の周縁部を覆っていた。墳丘部については、根石は

埋められている為に、他の用材は比較的大きさが揃っており、50°程の傾斜を以て葺かれていた。根石の底部の標高は南東部が最も高く、156.40mを測るが、東西方向で40cm・南北方向で280cmの差がある。封土の表面が風化してしまっていた為、不明な部分が多いが、葺石を固定するに当たって特別な土が用いられた形跡は認められなかった。従って、盛土と葺石との作業工程上における関係は確認し得なかった。

3. 内部施設

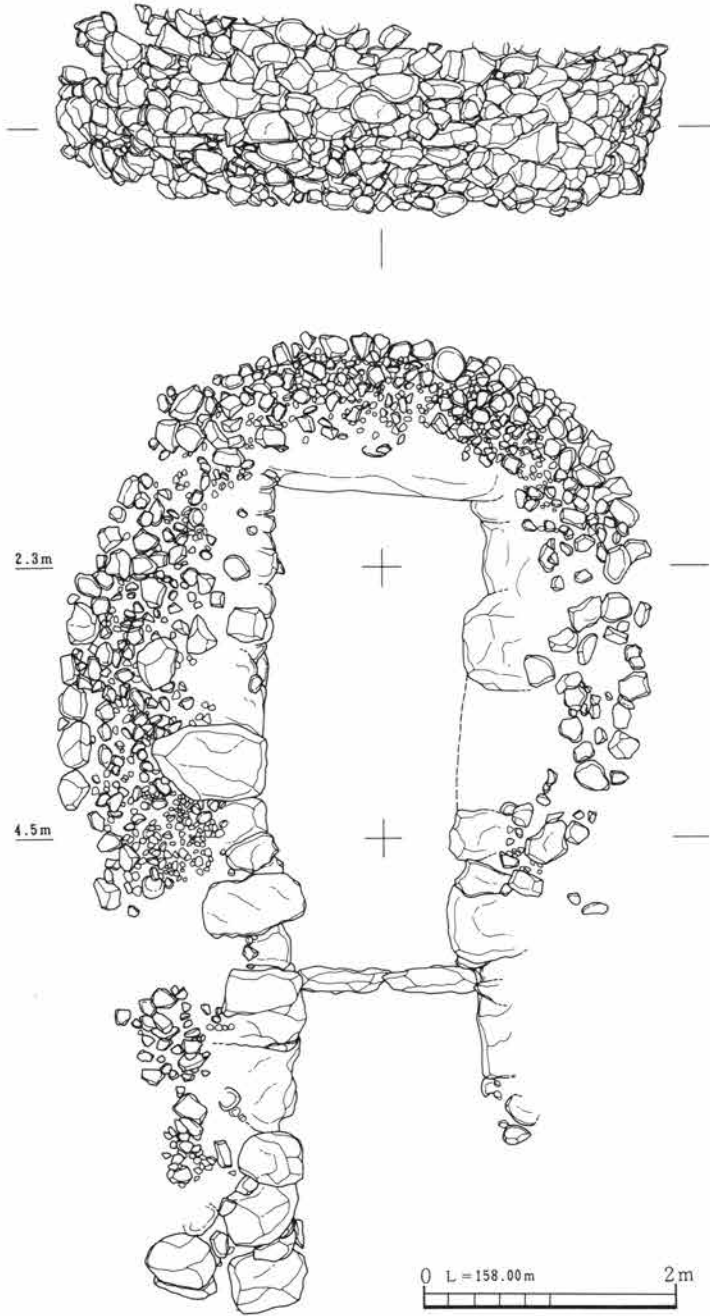
石室は、羨道入口部分が破壊されていたが、墳丘の中心よりも僅かに東寄りに位置し、西方向に開口する袖無型横穴式石室である。掘り方部分での大きさは墳丘径の6割を占めていた。平面形は、やや胴張りを呈する玄室と羨道とからなり、両者は2石か

らなる榎石によって区分されていた。奥から徐々に幅を狭めながら羨道部に至る笏型のプランを呈していた。各部の計測値は以下の通りである。



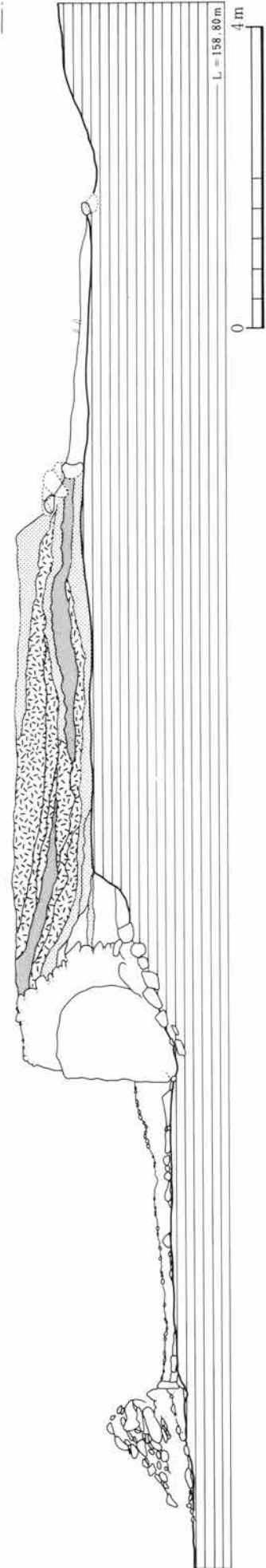
第187図 7号墳葺石実測図

III 検出された遺構と遺物

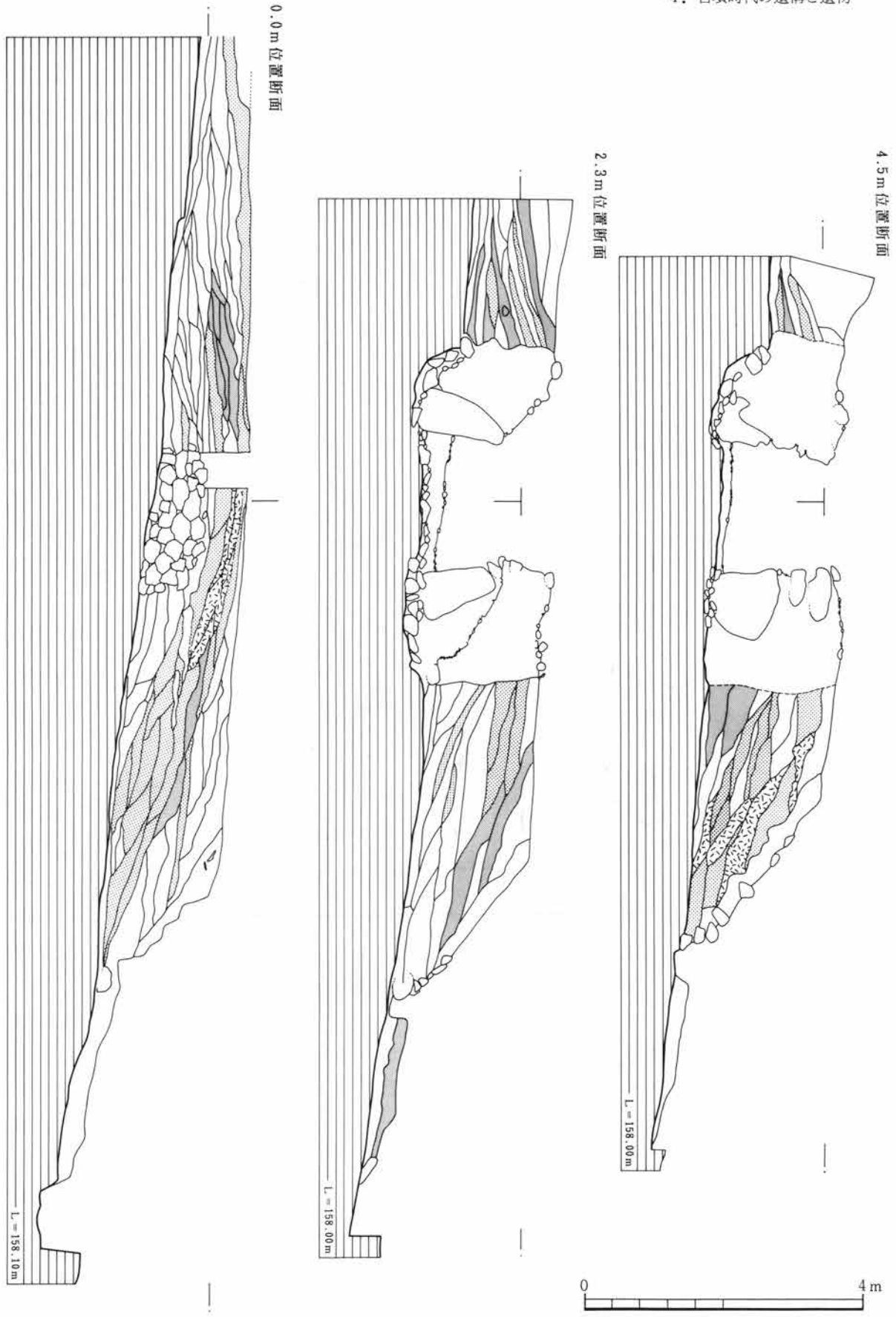


第188図 7号墳石室裏込被覆実測図

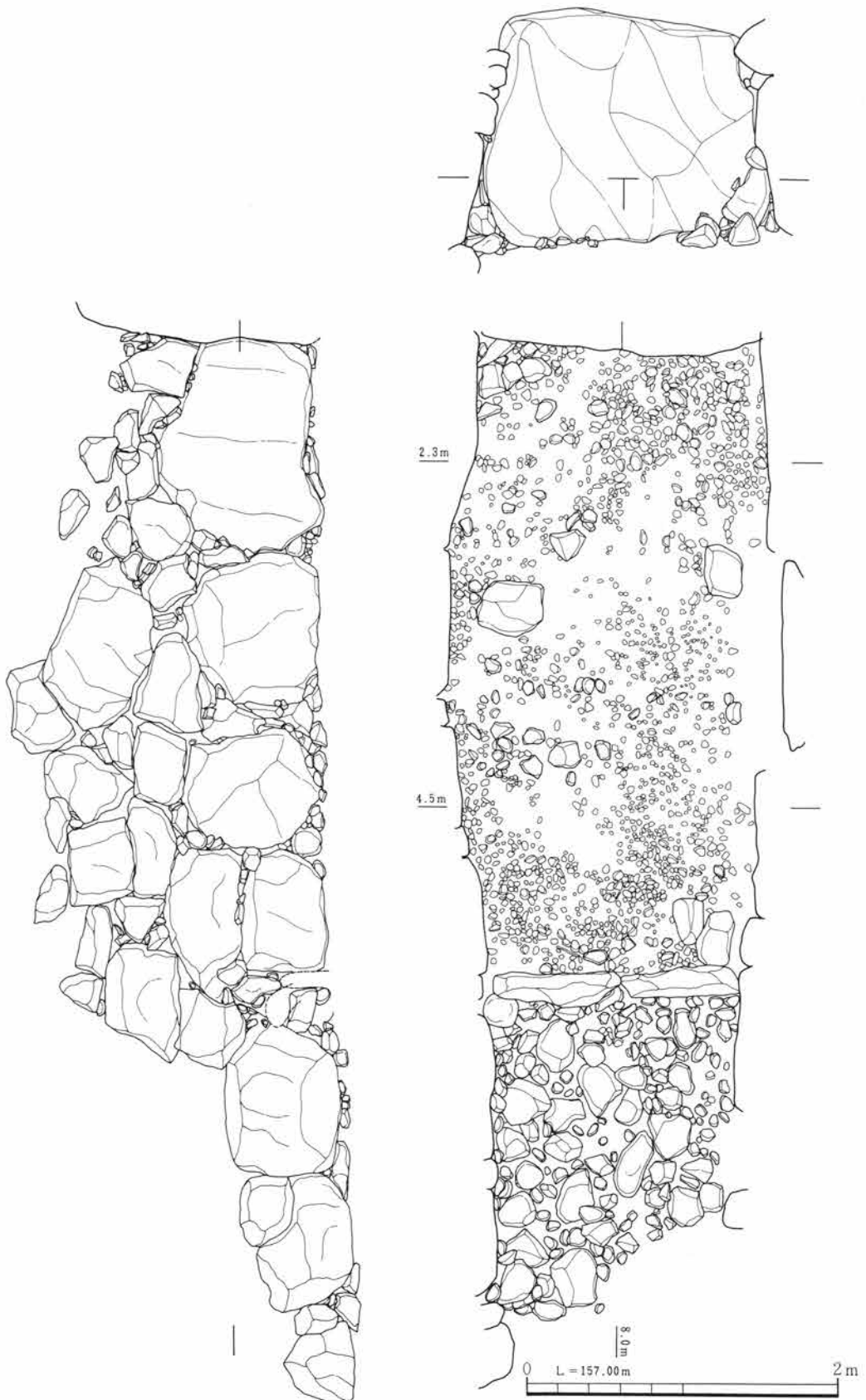
センター断面



第189図 7号墳墳丘地層断面実測図(1)



第190図 7号墳墳丘地層断面実測図(2)



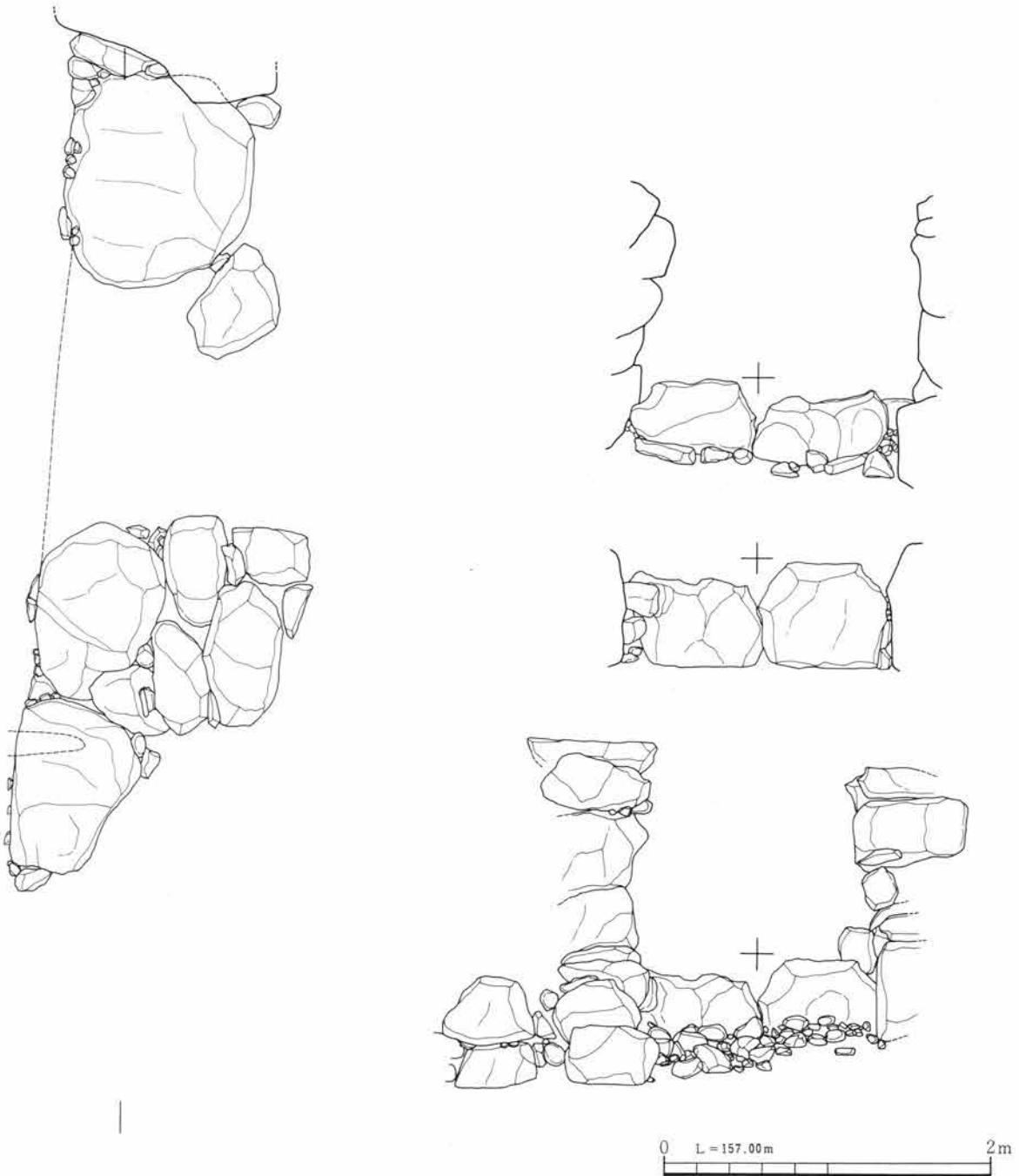
第191図 7号墳石室展開図

石室全長 661cm 開口方位 W-5°-N
 玄室長 396cm 羨道長 265cm
 玄室奥幅 180cm 羨道中幅 145cm
 玄室前幅 166cm
 玄室最大幅 195cm 使用尺 ≒24cm

玄室プランは、間口に対して奥行きの著しく長い

方形で、両者の比はほぼ1:2.4である。

石室には、整地作業に伴って天井石を除去して埋め立てた土砂がいっぱい詰まっていた。右側壁の内の1石が基部から折れて床面を直接覆っていたが、床面は盗掘によって攪乱されていた。構築当初の玄室部床面は、掘り方底面に10~20cm大の塊石を10cm程の厚さで敷いた上に、玉石を10cm程の厚さで



III 検出された遺構と遺物

敷き詰めて整えていたと考えられるが、玉石は奥側に寄せ集められていた。

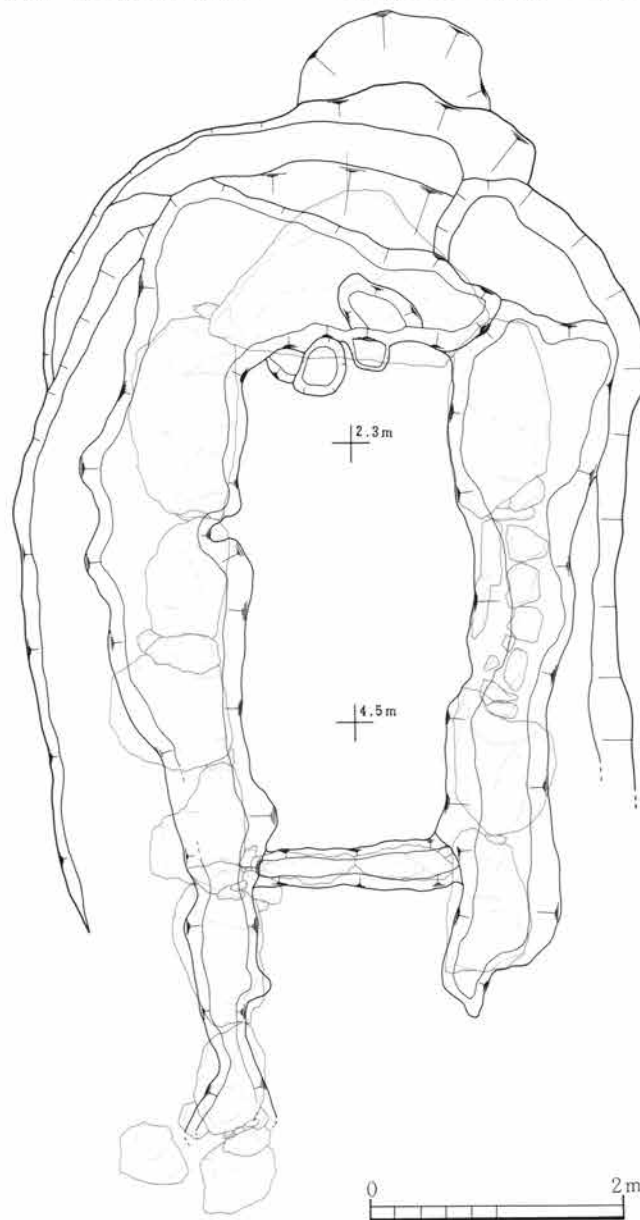
副葬品は玄室全体に散在していたが、右壁際では歯・骨と共に朱が検出されている。

框石から羨道部側には閉塞が施されていた。閉塞は、羨道奥部に河原石を積み上げて、間詰め技法によってなされていたと考えられる。なお、羨道部の床は明確な面が捉えられなかった。

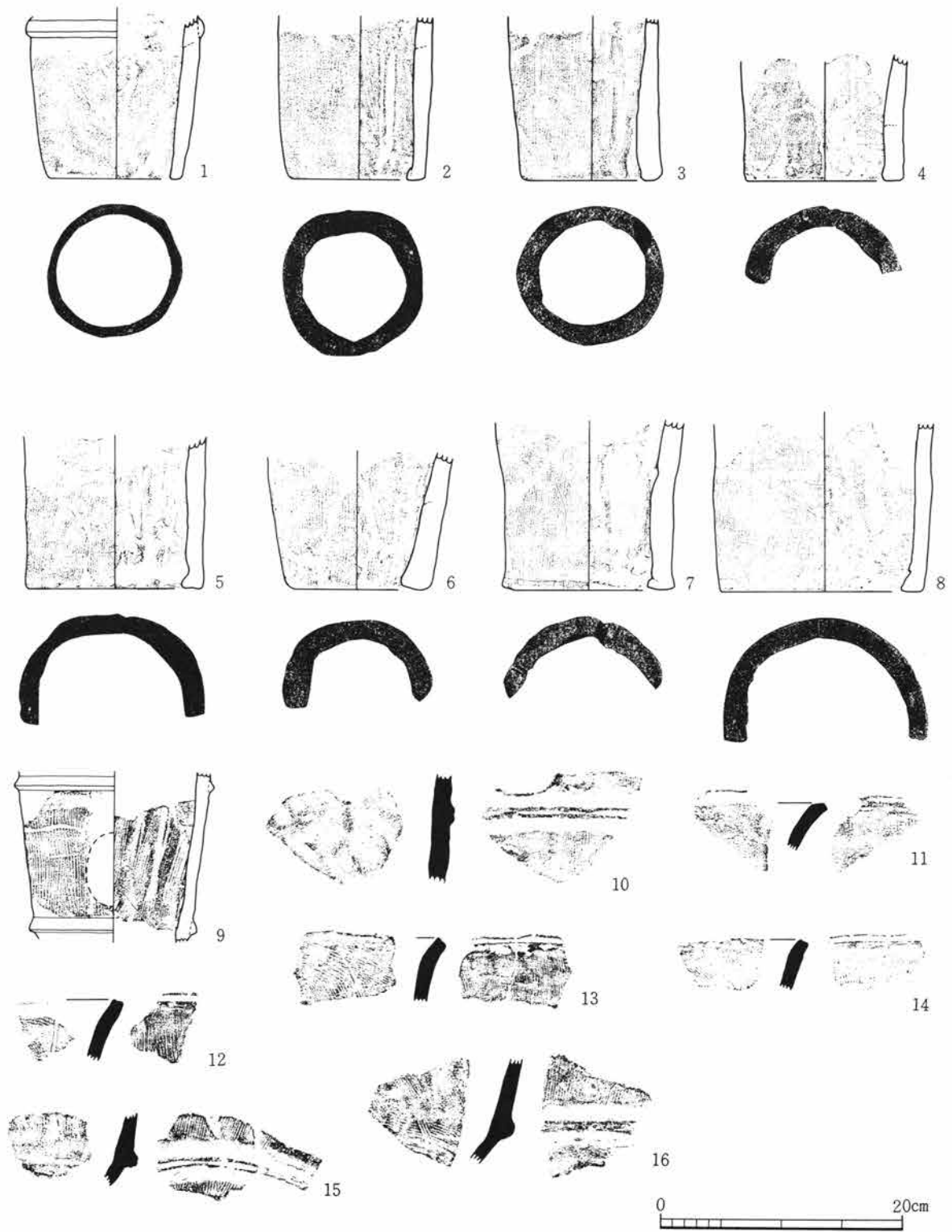
石室の掘り方は、整地面から約70°の傾きを以て、深さ80cm程掘り込まれておりローム層に達していた。平面形は西側が開く隅丸方形を呈し、規模は

奥壁の内面から約2.0m・南北方向の上端は約4.90mを測るが、石室は50cm程山側に偏らせて構築されていた。底面は蒲鉾状に中央が盛り上がり、全体では標高の低い左壁際が12cm、開口部が15cm程低くなっていた。根石を据える部分は更に溝状に掘り窪められていた。羨道部については、後世の攪乱のため、明確な掘り方を検出できなかった。

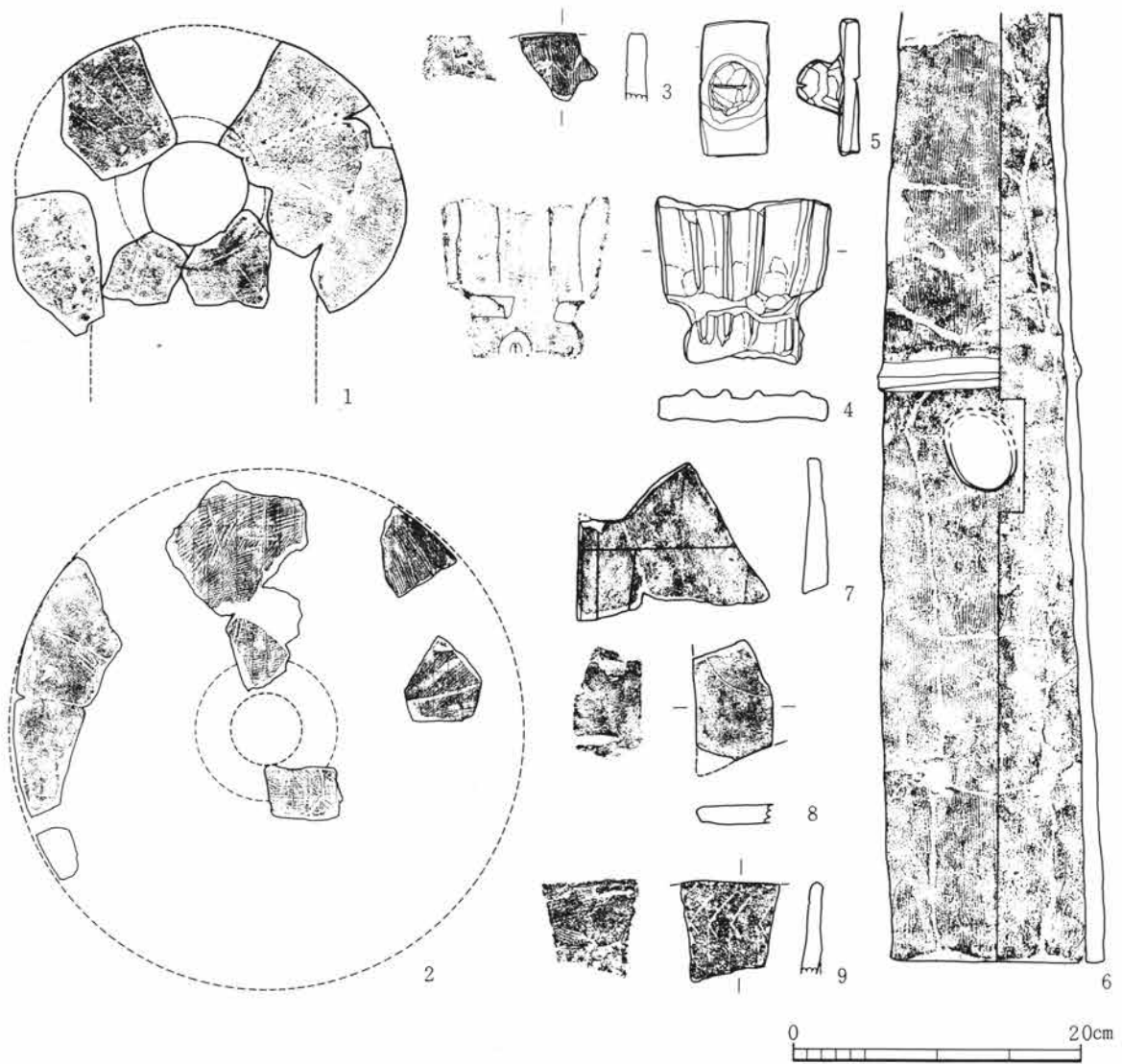
壁体及び裏込めは、粗粒安山岩の直方体状の垂角礫によって構成されていた。壁石は平面を内部に向けた用材を栗石を支いながら設置して根石としており、掘り方との間に垂角礫と目潰し砂利を用いて



第192図 7号墳石室根石・掘り方実測図



第193図 7号墳出土土円筒埴輪実測図



第194図 7号墳出土形象埴輪実測図

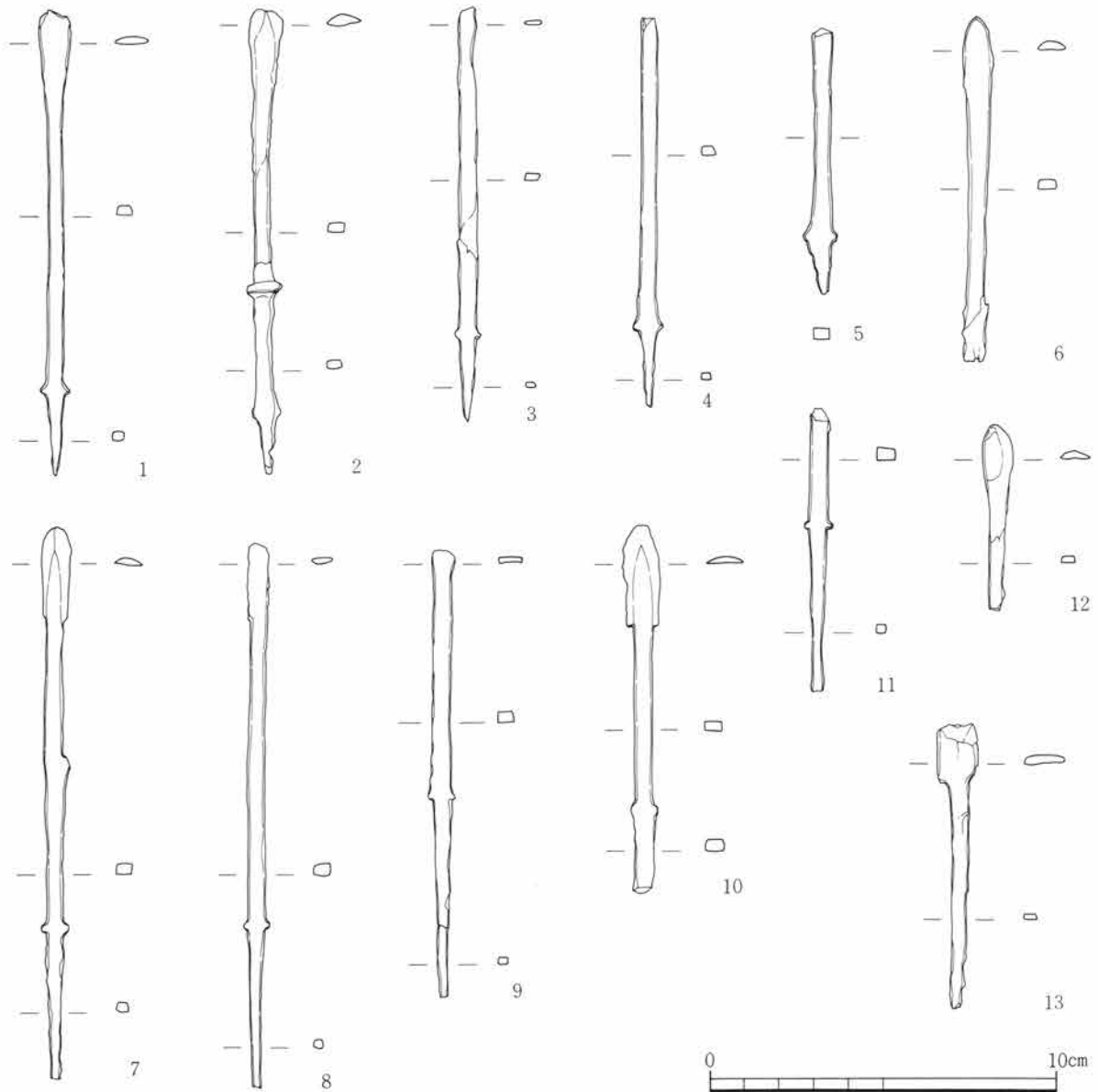
裏込めを行っていた。この際、掘り方の法面側にやや大振りの石を据えて法止の効果を高めていた。上段は、裏込め・裏込め被覆・盛土作業と一体となって、小口面・横面を使用した壁石が順次積み上げられていたが、天井石は既に除去されており上端部は確認されなかった。また、山側と谷側の裏込め自体の厚さに大きな差は認められなかったが、谷側においては裏込め被覆の整った石積みが検出されなかった。

奥壁は、幅2.20m・高さ1.50mの巨石を鏡石としてほぼ垂直に立て、1石のみで奥壁幅を規定していたが、上段が削平されていた為に、高さについては不明である。

側壁は、羨道及び玄室の右壁面が9°前後内傾していた。根石は奥から開口部に向けて順次設置されており、2石からなる栴石と左壁との隙間には小型の石を押し込んで固定していた。なお、玄室の最奥部には奥壁を挟み込んで固定させるために、他よりもやや大振りの石を据えていた。上段の石は、高さ1.0m・1.3m付近では横目地が良く通っていたが、同時に奥壁側に30°程寄せ掛けて安定を保つ様に積まれていた。羨道部は、根石のみが部分的に残存していただけであり、規模や開口部の傾斜等は不明である。

4. 出土遺物

円筒埴輪は、1～5までがテラス面に横倒し状態



第195図 7号墳副葬品実測図(1)

で残っていた物であるが、全形を窺える様な接合資料は認められなかった。基部の内面には、粘土板を作った時の横方向の刷毛目が残っている物が多く、削りによる基部調整が行われた物も認められる。

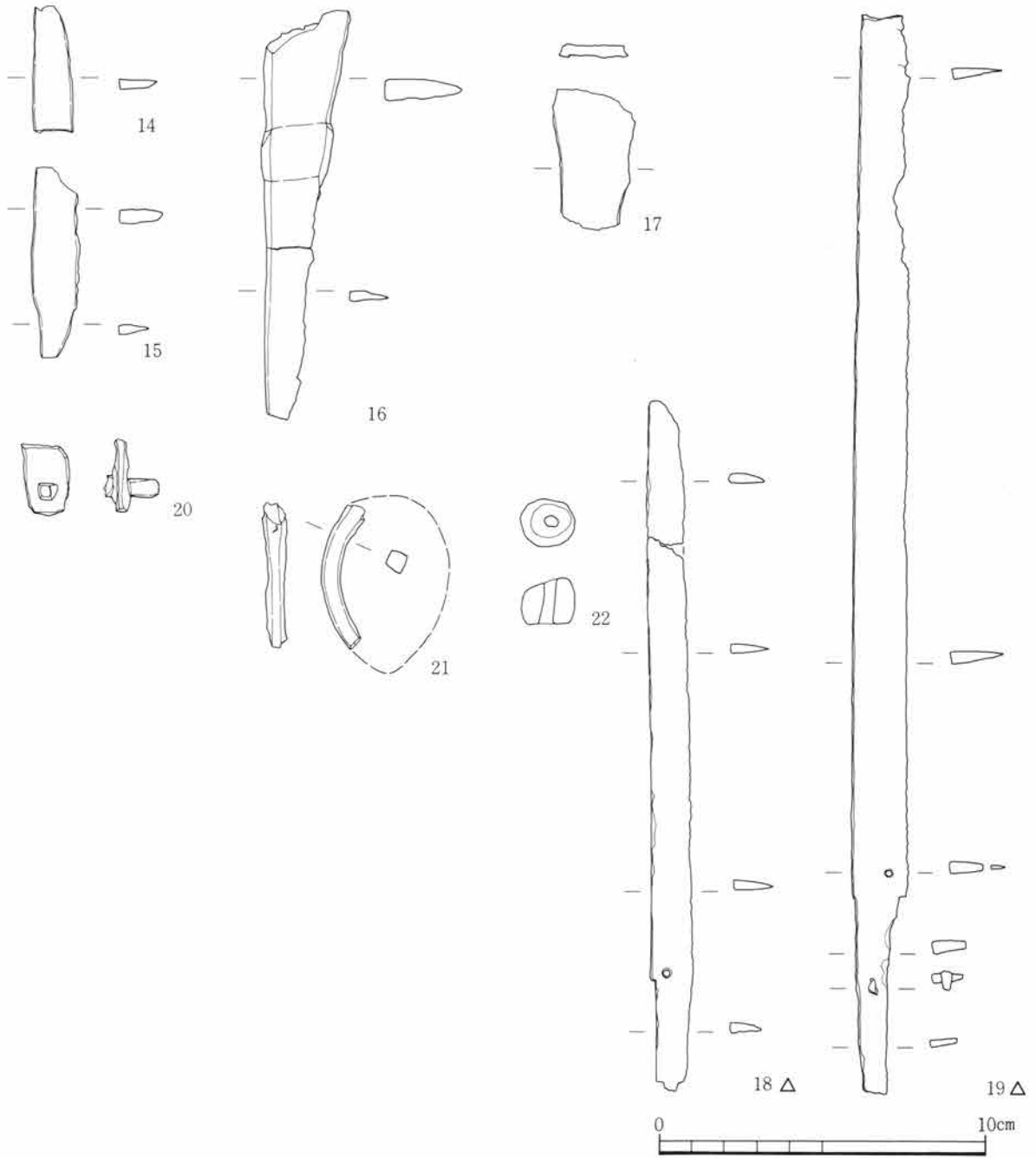
形象埴輪は、髷・靱・大刀・盾が認められた。髷は2種類有り、2には赤色塗彩が施されている。

金属器はいずれも攪乱状態で検出されたものであるが、大刀(18・19)は玄室の左奥隅に立て掛けられていた。21には銀象嵌が施されているが、全体の文様構成は不明である。

5. 備考

本古墳は、有力な根拠に欠けるが、6世紀前半の築造と考えられる。(飯塚)

III 検出された遺構と遺物



第196図 7号墳副葬品実測図(2)

8号墳《第197～200図、図版72・125・148》

1. 位置と調査前の状態

D-36ポイント周辺に位置していた円墳である。南東に7号墳が構築されており、北西の墓地内でも埴輪片を収集しているため、他の古墳が構築されていたことが考えられるが、調査した古墳の中では最も北に占地していた。北西緩傾斜地に立地しており、若い杉林の中に樺の老木が聳え、根元に多量の石が認められたので、発掘調査前の現況観察時点で古墳と認定した。標高は153m前後である。北側の大半は削平され、少神山達磨寺の境内になっており高さ4m程の石垣が積まれていたので、調査対象地が非常に限定されていたため部分的な資料しか残し得なかった。

2. 外部施設

南東部において、上幅120～150cm・下幅60cm前後の周堀を長さ6m程検出した。上端での外径は15.6m、内径は12.4mである。断面形は凹レンズ状を呈し、底面はほぼ平坦であった。

周堀内縁と墳丘との間には幅2mの基壇が巡っていた。現状で10°程の傾斜で内側が高くなっていたが、外側が削平されていたため、葺石の有無は不明である。

墳丘は、地山のローム層を削り出して成型した後、盛土で整形し、表面には葺石を葺いていたが、上

部は殆ど失われていた。葺石は、20cm大の粗粒安山岩を使用して45°程の角度を以て葺き上げられていた。根石部での径は8.3mである。

埴輪は、周堀の覆土中から出土しただけで、樹立状態を保った資料が無かったため配列の様子は不明である。

3. 内部施設

検出した部分が南側の僅かな部分であったため、何等の遺構も留めなかった。発掘中の聞き取り調査によると、横穴式石室を埋葬主体部としていたものと考えられるが詳細は不明である。

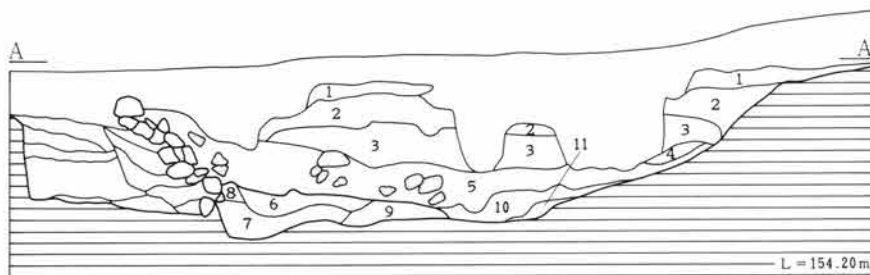
4. 出土遺物

円筒埴輪は、2条凸帯3段構成の円筒埴輪で、底径対口径の比は1:1.7である。透孔は縦長の円形である。口縁部内面に2条線のヘラ記号が刻まれた物も有る。

形象埴輪は、人物・靱・家形埴輪片が出土している。また、土師器坏・須恵器甕も出土した。

5. 備考

本古墳は、確たる証拠に欠けるが、6世紀後半代の築造であると考えられる。（飯塚）

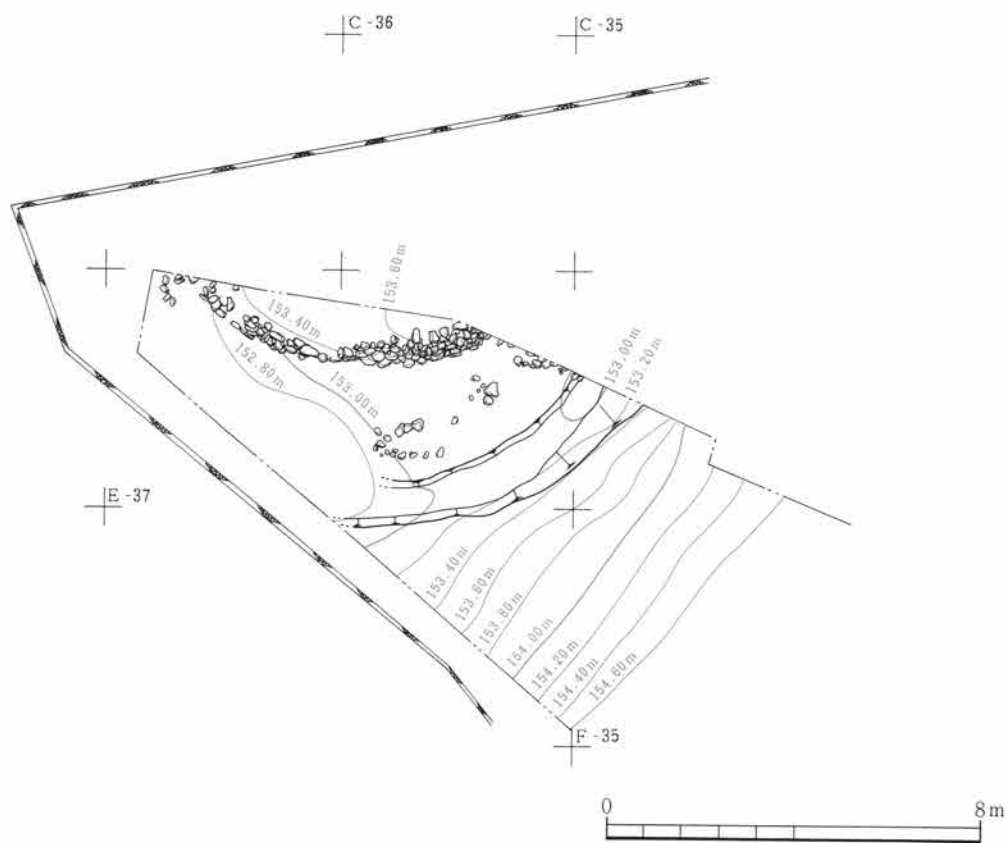


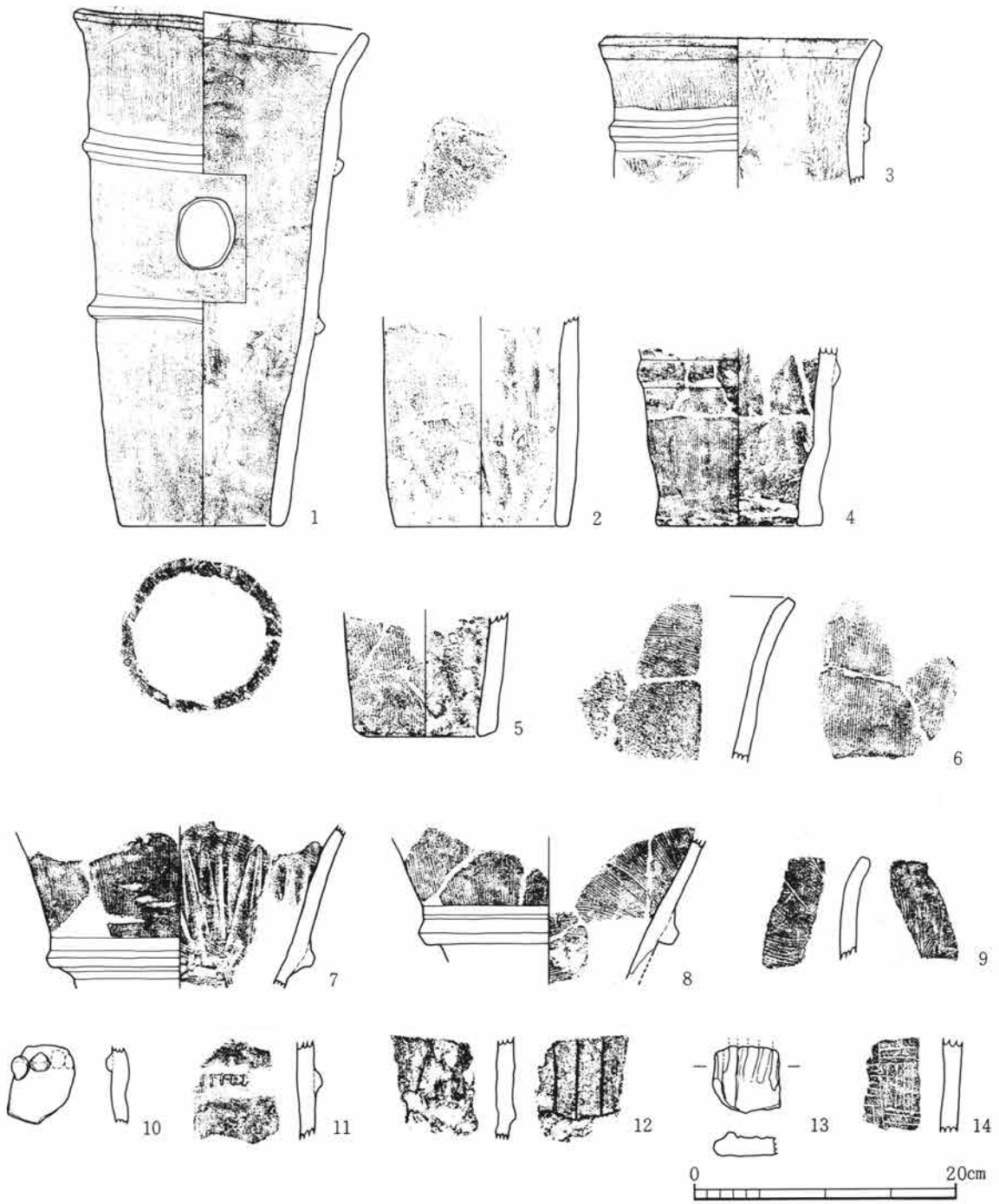
- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1. 表土 A軽石を多量に含む。 | 8. 暗褐色土 ロームブロックと多量の軽石を含む。 |
| 2. 灰褐色砂質土 A軽石を少し含む。 | 9. 暗褐色土 7層よりも軽石を多く含む。 |
| 3. 少し汚れたB軽石層。 | 10. 暗褐色土 ローム粒・軽石を多量に含む。 |
| 4. 暗褐色土 軽石・ローム粒を含み、固く締まる。 | 11. 暗褐色土 軽石を多量に含む。 |
| 5. 黒褐色土 軽石・ローム粒を含み、締まる。 | |
| 6. 黒褐色土 5層よりもローム粒を多く含む。 | |
| 7. 暗褐色土 多量のロームブロックと、軽石を含む。 | |



第197図 8号墳周堀地層断面実測図

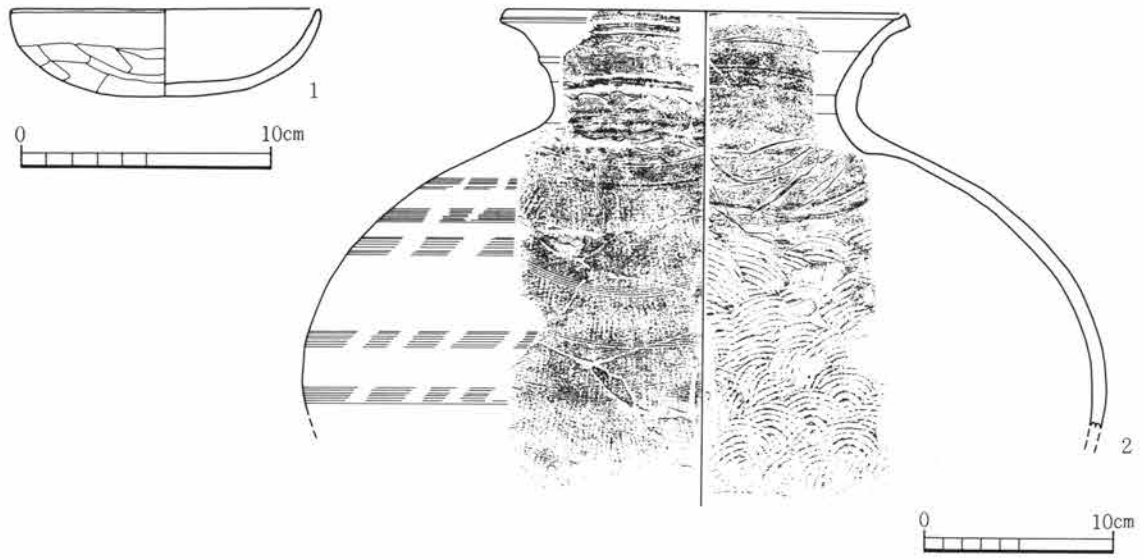
III 検出された遺構と遺物



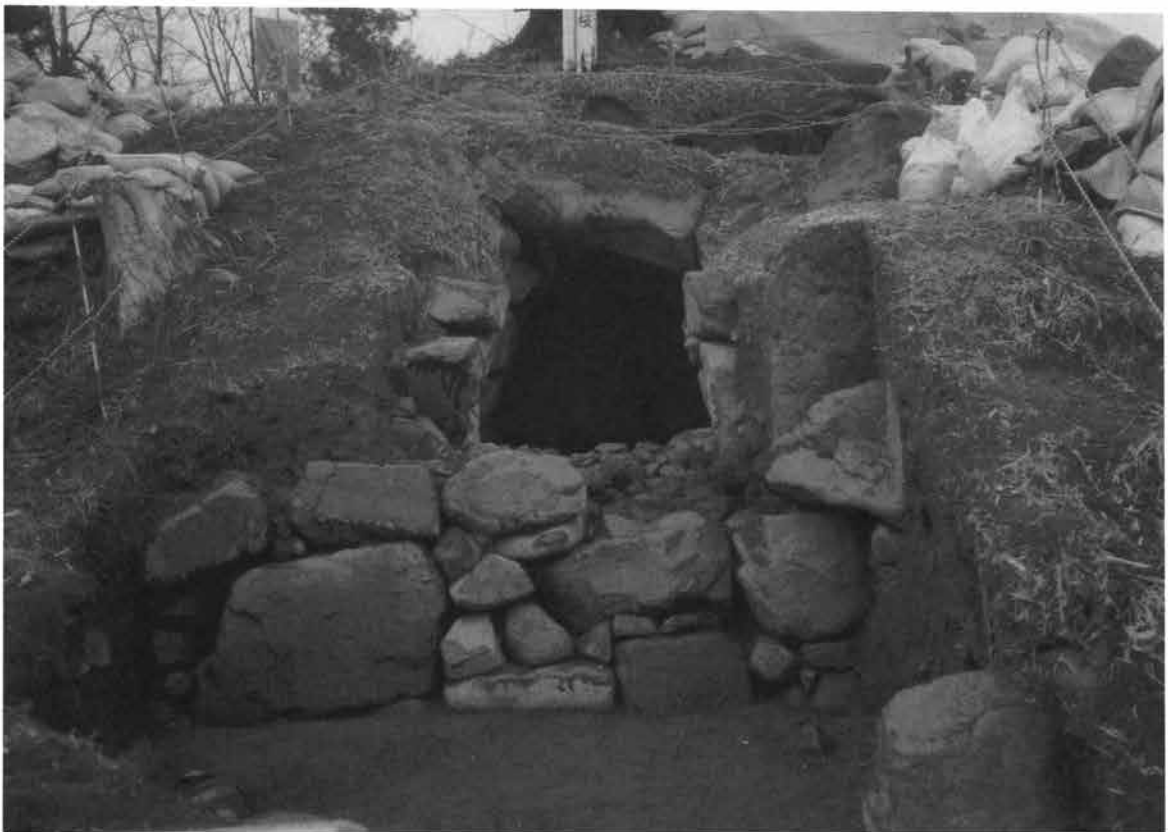


第199図 8号墳出土埴輪実測図

III 検出された遺構と遺物



第200図 8号墳出土遺物実測図



9号墳《第201～210図、図版73～75・125～127・
148～150・159・159》

1. 位置と調査前の状態

U-27ポイント周辺に位置していた。耕作の障害となる石の捨て場所として利用されており、径4m・高さ1m程の石山が築かれていた。北西緩斜面に立地しており、標高は167～168m前後である。北側の一部が自然遊歩道によって削られ、梨畑に利用されていた。南半部は地氾りに伴う陥没によって1m程窪んでいたが、石室用材が露出していた為に、古墳と認定した。古墳群の中では、中央からやや南寄りに占地しており、北側に18号墳、東側に6・19号墳、西側に11号墳が隣接して営まれていたが、南側には古墳は認められなかった。

2. 外部施設

耕作に伴う削平によって上部は失われていたが、ローム層中に掘り込まれた周堀下部が確認された。平面形は、周囲の古墳の周堀を避けるかのように、著しく歪んでおり、隅丸形状を呈していた。北東の一部は削平が著しく、検出されなかったが、環状に巡っていたものと考えられる。上幅2.0～2.8m・下幅60～80cm・深さ30cm前後で、断面形は凹レンズ状を呈していた。地氾りに伴って、西側に50cm前後移動していると考えられるが、外縁部上端での規模は、東西方向21.2m、内縁部上端では東西方向14.4m・南北方向15.6mを測る。覆土中からは、10～20cm大の亜角礫と埴輪が出土すると共に、石室前面には多量の須恵器が散らばっていた。

南西部において、石室開口部と周堀内縁上端との間が2.6m程離れていたことから、基壇の存在が推定されるが、一定の幅で巡るものか、背面側は収束してしまうのか定かではない。また、葺石の存在についても不明である。

埴輪は、殆どが小破片であり、樹立状態を保った物が無いために、配列状況は判然としない。

墳丘は、西側の一部に封土が僅かに残っており、石室開口部の左側に葺石の根石が長さ1m程遺存していたに過ぎないが、径13m程と考えられる。

3. 内部施設

石室は、墳丘の中央よりもやや南寄りに位置しており、胴張りを呈する玄室と羨道とからなる横穴式石室である。地氾りに伴って、全体が120cm程陥没すると共に、羨道部は更に130cm程陥没し、開口部も僅かに移動していた為、不確定な部分を残すが、玄室前端部の根石が小口積みであること及び玄室と羨道の幅に65cm程の差が認められることから、両袖型であったと考えられる。

天井石・奥壁及び上部の石は、地氾りによって生じた亀裂を埋める為に砕かれてしまっており、床面の一部にも攪乱が及んでいた。構築当初の玄室部床面は、掘り方底面に20～30cm大の塊石を一面に敷いた上に、玉石を20cm程の厚さで敷き詰めて整えていたと考えられる。なお、遺存した玄室床面の前端と羨道奥部とは、地氾りに伴って80～110cm離れていたが、氾り面の亀裂の幅は20～30cmであった。

副葬品は、玄室の前半部に散在して出土した。羨道の床は明確な面が捉えられなかった。開口部には、70×80cm・厚さ50cmの石の平面を垂直に立てて横長に据えており、高さ30cm程の上がり框になっていた。奥部には、4石からなる仕切り石の上部に閉塞に伴う石積みが認められたが、榎石であるのか、框構造になっていたのかは不明である。現状における各部の計測値は以下の通りである。

石室全長	545cm	開口方位	S-31°-W
玄室長	350cm	羨道長	195cm
玄室奥幅	132cm	羨道奥幅	120cm
玄室中幅	180cm	羨道前幅	115cm
玄室前幅	140cm		
玄室右袖	20cm	使用尺	≒35cm

石室は当時の地表面を整地した上に直接構築されており、下部には27号住居（5世紀第4四半期）が営まれていた。壁石が設置されていた部分が約10cm程窪んでおり、結果的に、蒲鉾状に中央部がやや盛り上がっていた。

壁体及び裏込めは、粗粒安山岩の直方体状の亜角

III 検出された遺構と遺物

礫によって構成されていた。壁石は平面を内部に向けた用材を栗石を支いながら設置し根石としていた。上段は、裏込め・裏込め被覆・盛土作業と一体となって小口面・横面を使用した壁石が順次積み上げられていたが、裏込め被覆の石積みは認められなかった。なお、玄室部においては、根石に50~60cm大の石を使用し、上部には1m程の大きさの石を使用していた。

4. 出土遺物

円筒埴輪は、全体の形状を窺える資料が得られなかったが、大小2種類の朝顔形埴輪が図化できた。形象埴輪は、家・人物・大刀・盾が認められた。副葬品は、土玉2・ガラス小玉7・鉄鏃2・弓飾り金具2・刀子・大刀・刀装具等が残っていた。ガラス玉は、発色材として銅を使用したと思われる、破断面での色調はグリーンを呈するが、材質が鉛ガラスである為に、表面は銀白化していた。

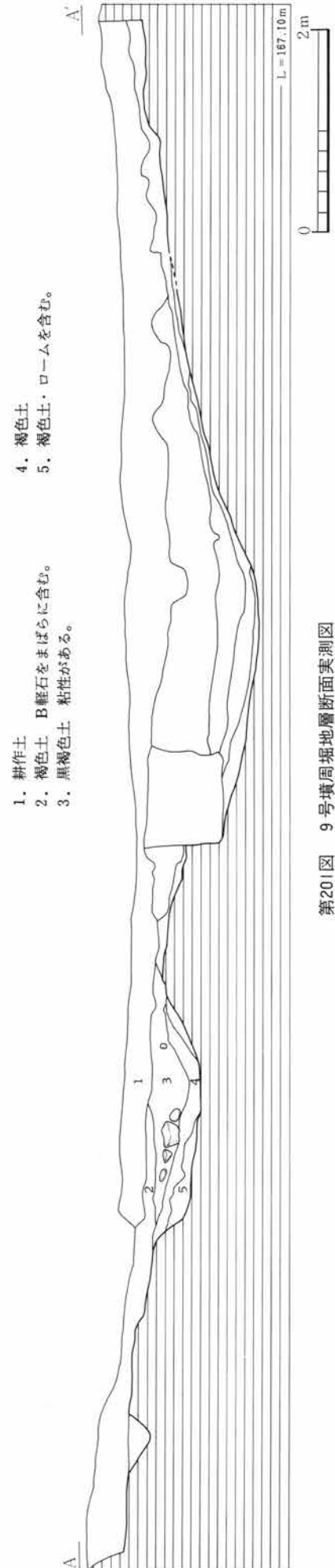
耳環2点が120cm程の間隔を空けて出土したが、発掘調査期間中に、調査事務所に保管して置いた物を、夜間に泥棒が侵入して持ち去ってしまった為に図化できなかった。1点は断面形が偏平な楕円形を呈し、径2cm程の比較的小型の物であり、他の1点は径3cm前後の大きさの物であった。

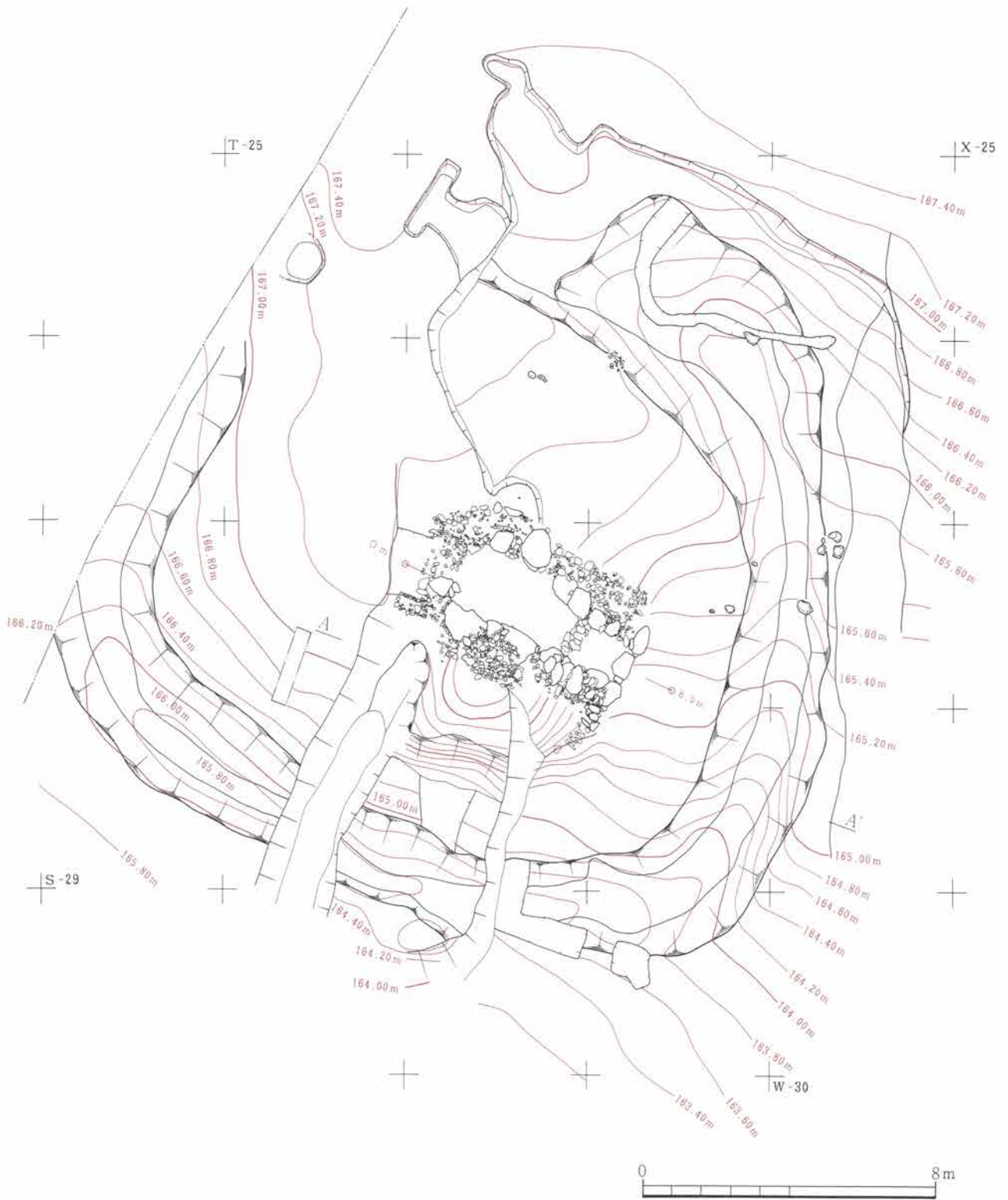
被葬者を知る手掛かりとしては、若干の歯と火葬骨片が出土したのみであり、追葬の回数等は不明である。火葬骨の出土は、石室の再利用を考える際の貴重な資料である。

石室の開口部前及び周堀内部から多量の須恵器が出土した。骨蔵器に使用されたと考えられる脚付短頸壺等も認められた。

5. 備考

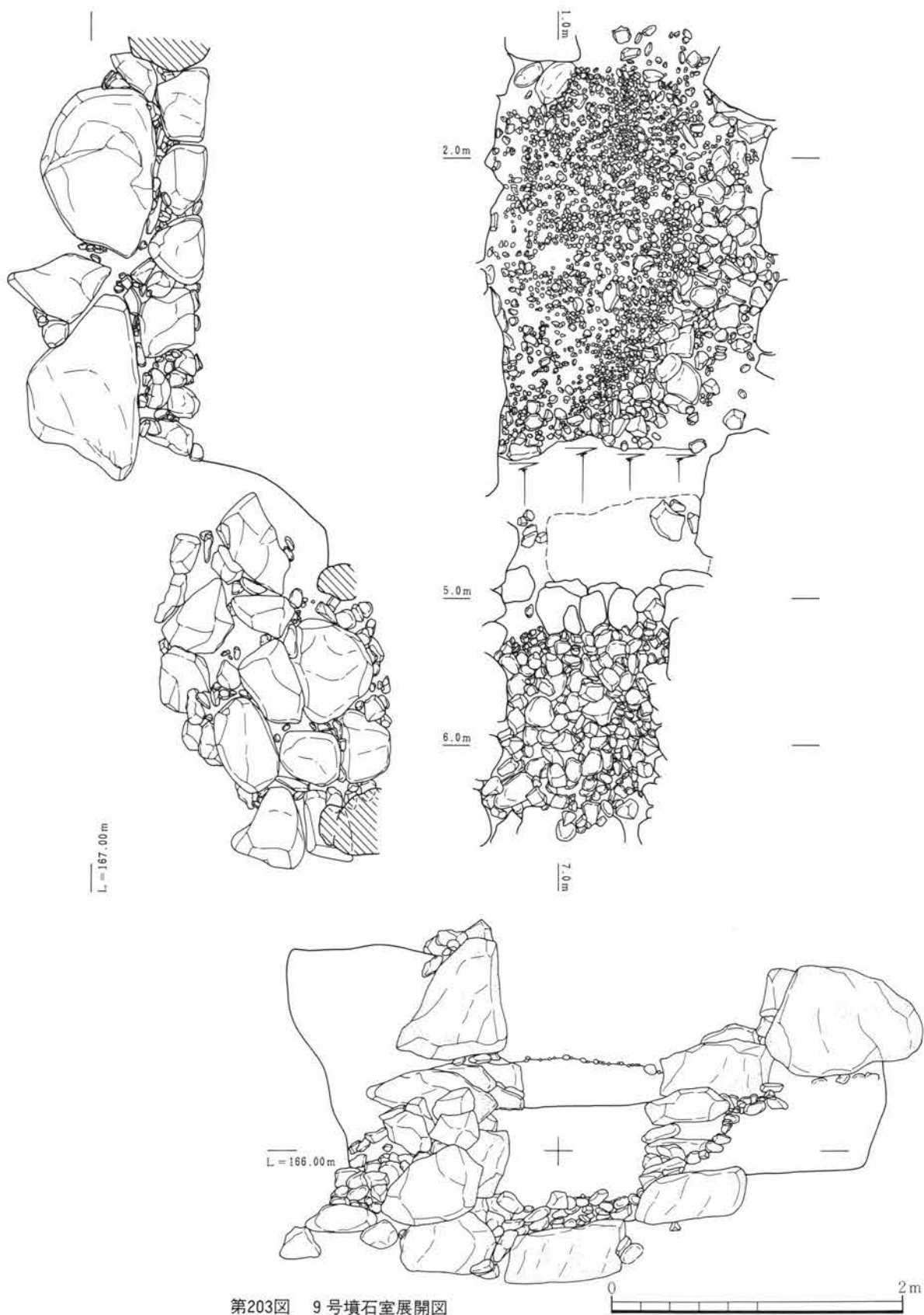
本古墳は、6世紀後半の築造と考えられるが、遺存状態が芳しくなく、不明な点が多い。(飯塚)





第202図 9号墳墳丘実測図

III 検出された遺構と遺物



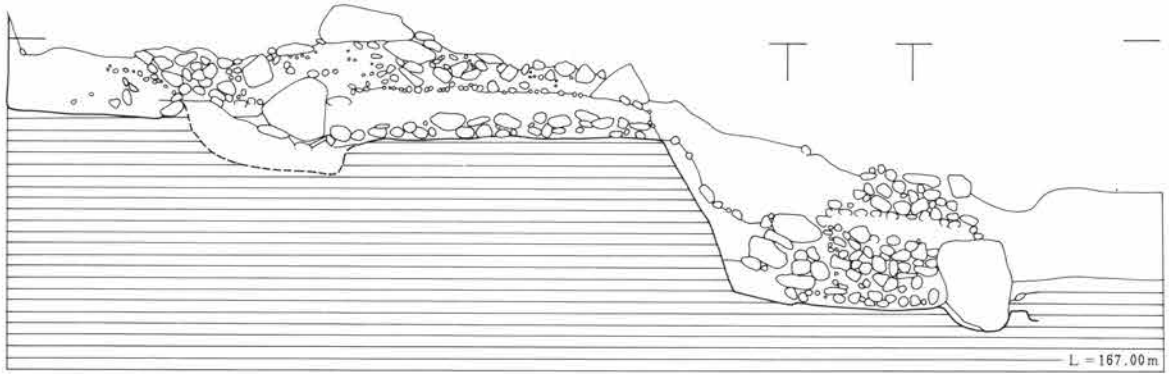
第203図 9号墳石室展開図

4. 古墳時代の遺構と遺物

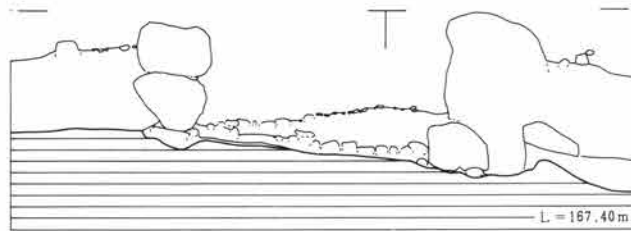


III 検出された遺構と遺物

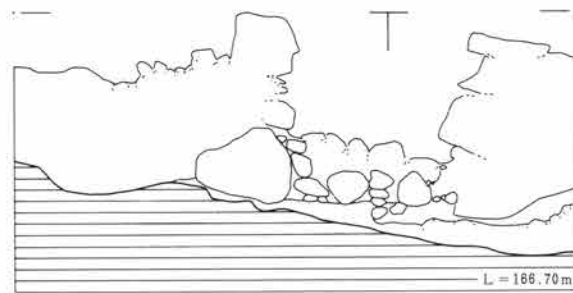
センター断面



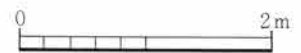
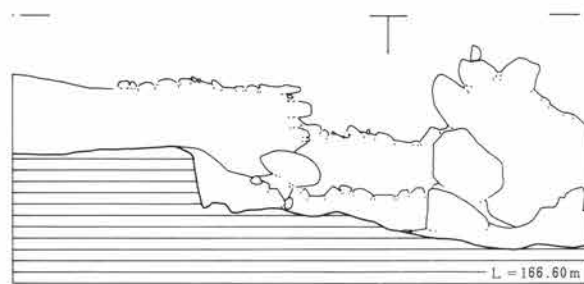
2.0m 位置断面



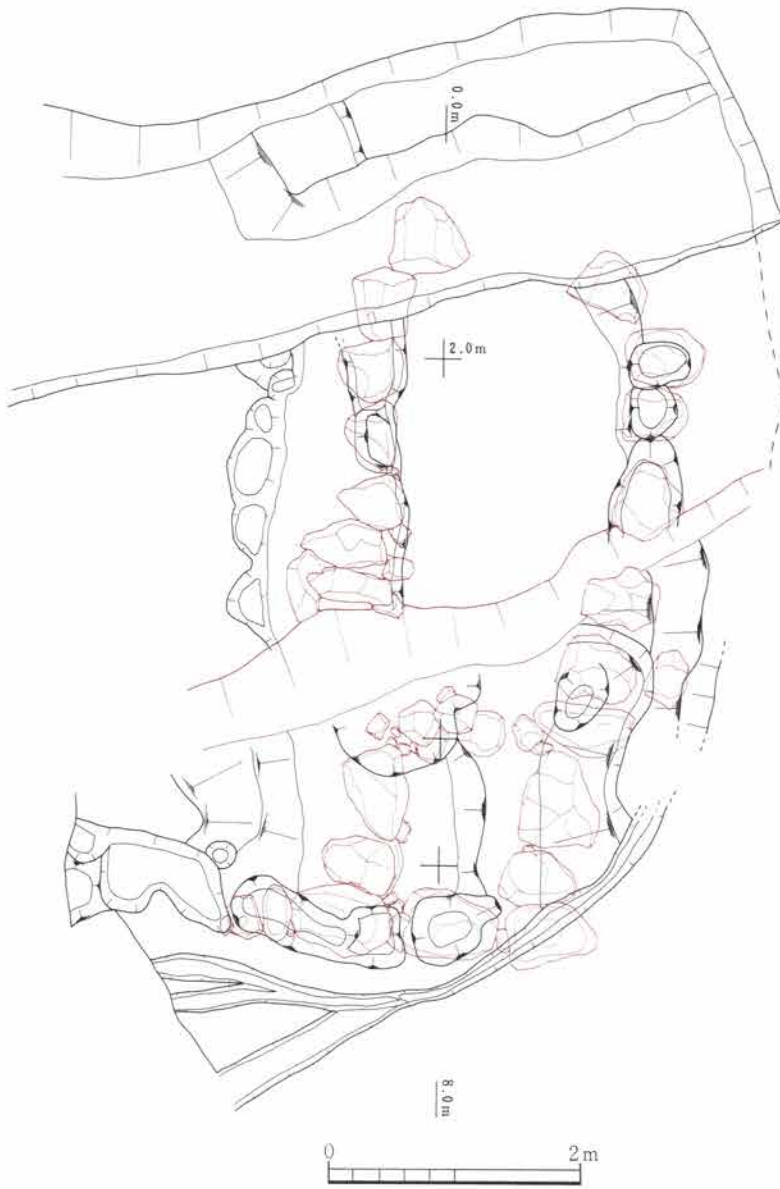
5.0m 位置断面



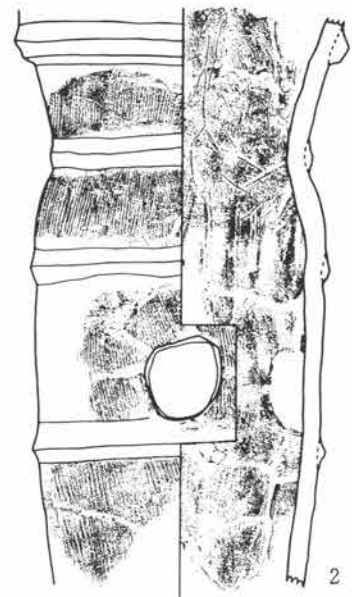
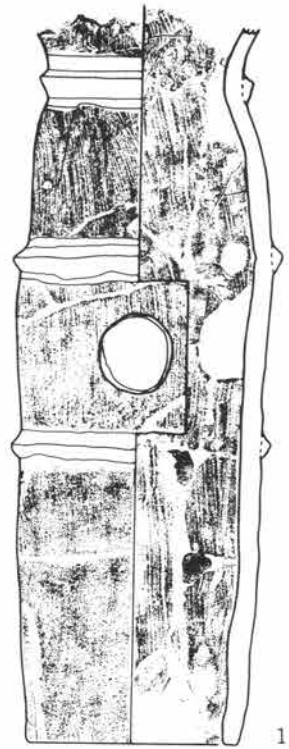
6.0m 位置断面



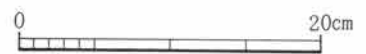
第204図 9号墳石室断面図



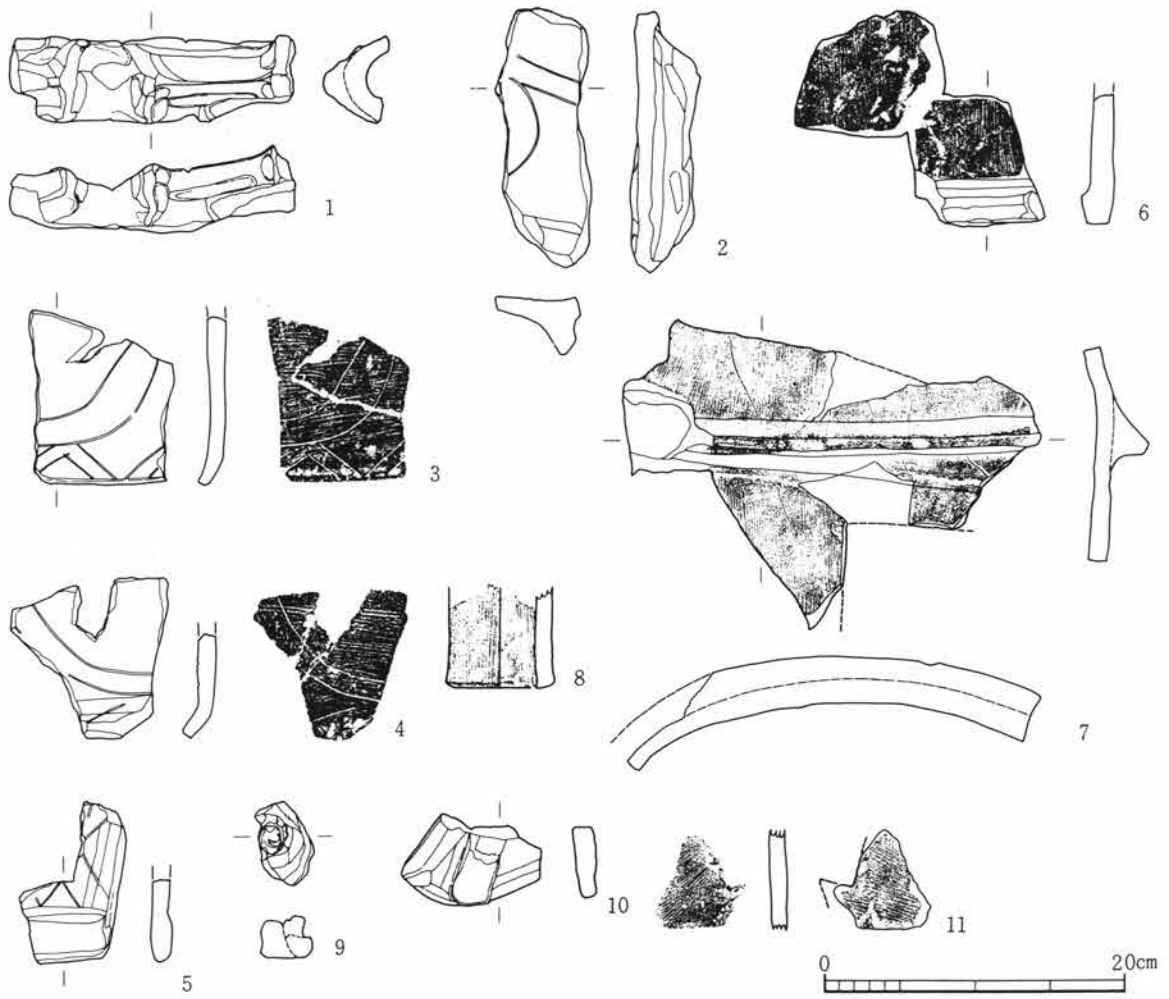
第205図 9号墳石室根石・掘り方実測図



第206図 9号墳出土土円筒埴輪実測図

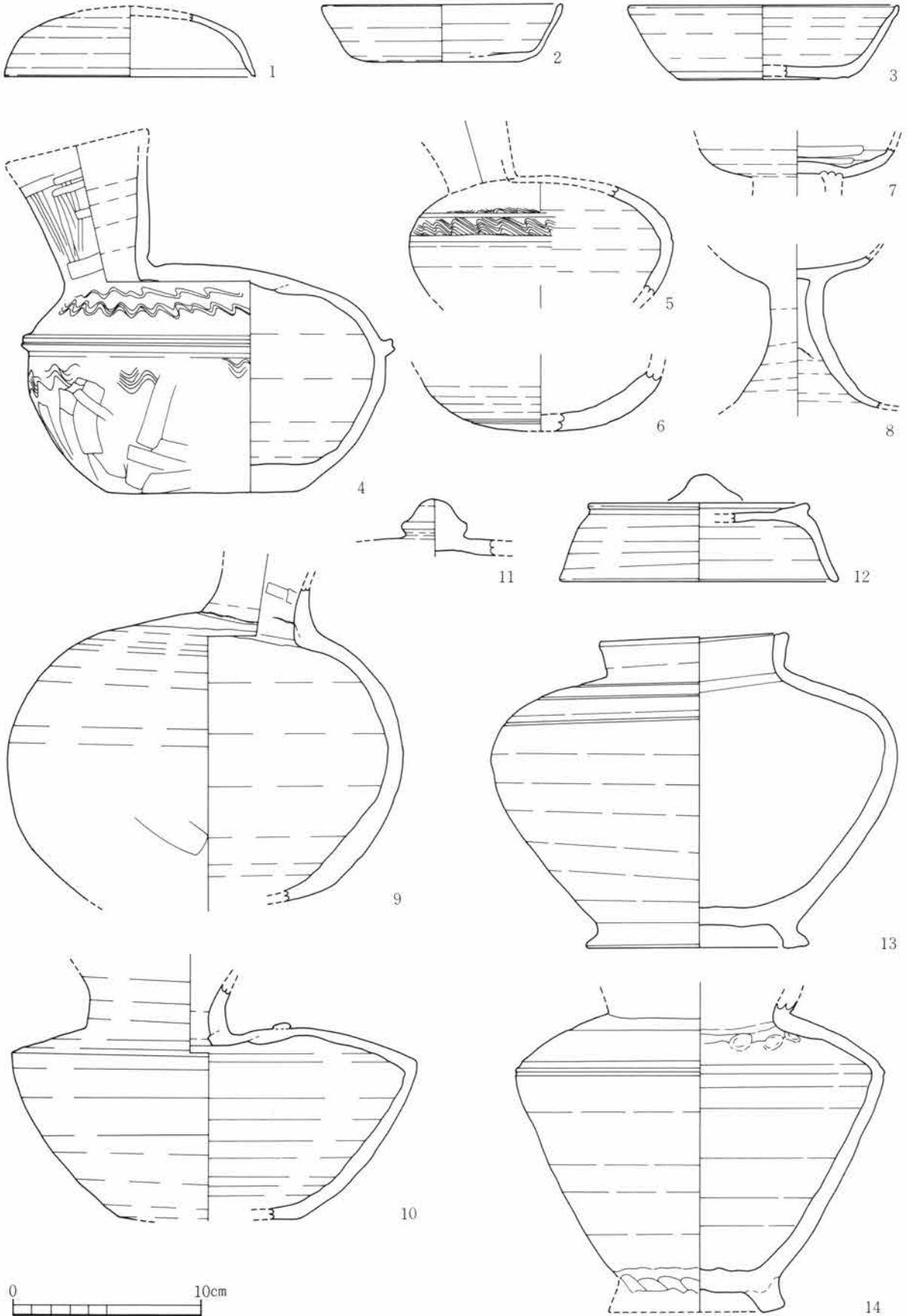


III 検出された遺構と遺物



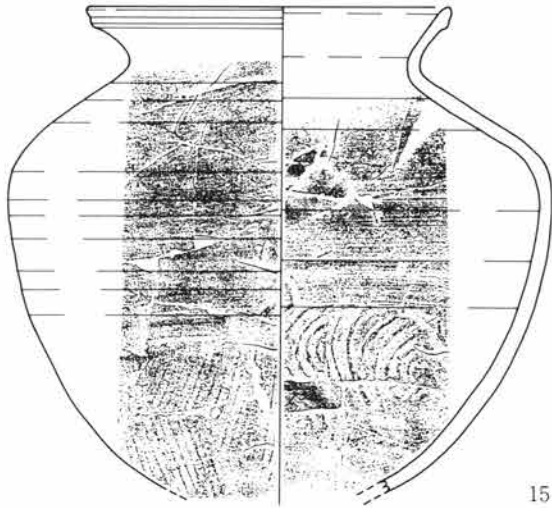
第207図 9号墳出土形象埴輪実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物

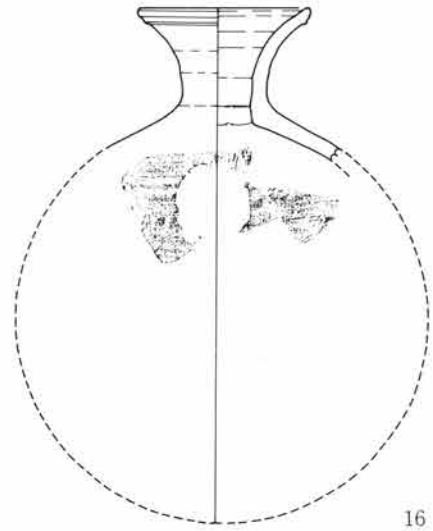


第208図 9号墳出土遺物実測図(1)

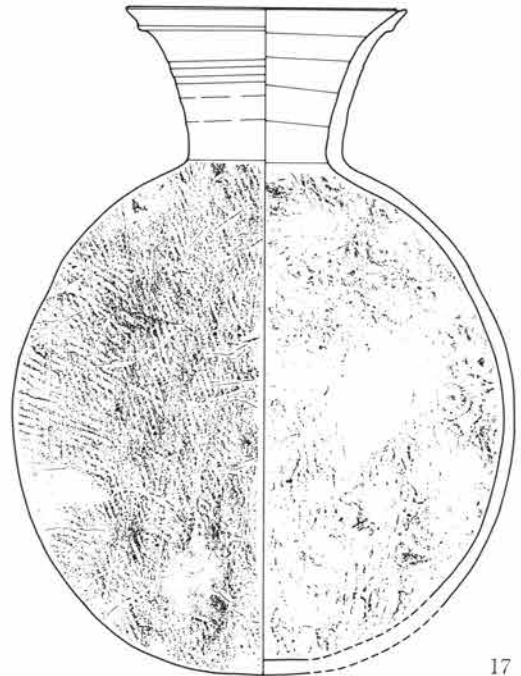
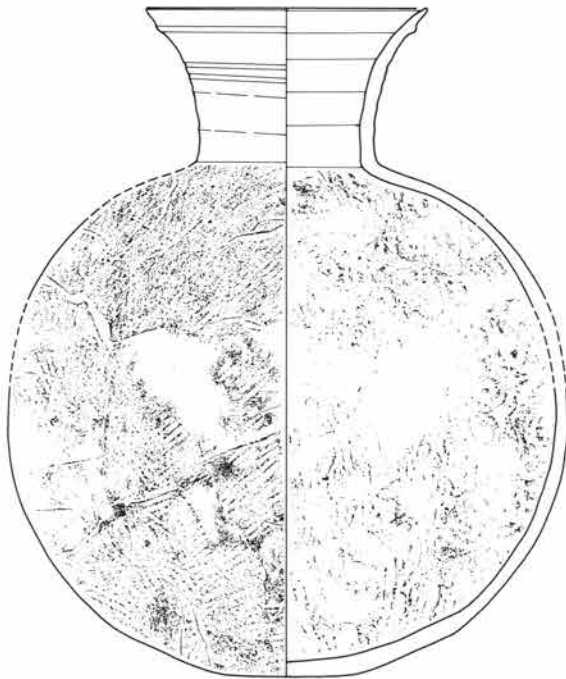
III 検出された遺構と遺物



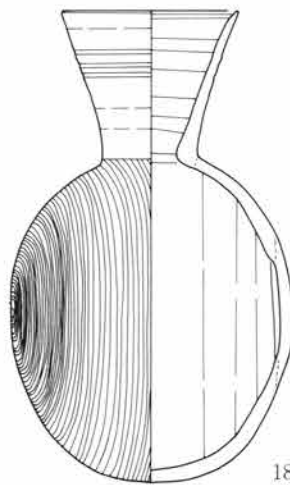
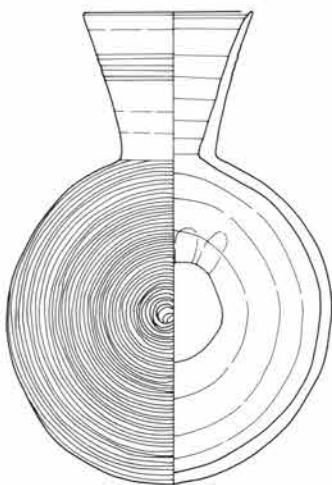
15



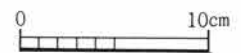
16



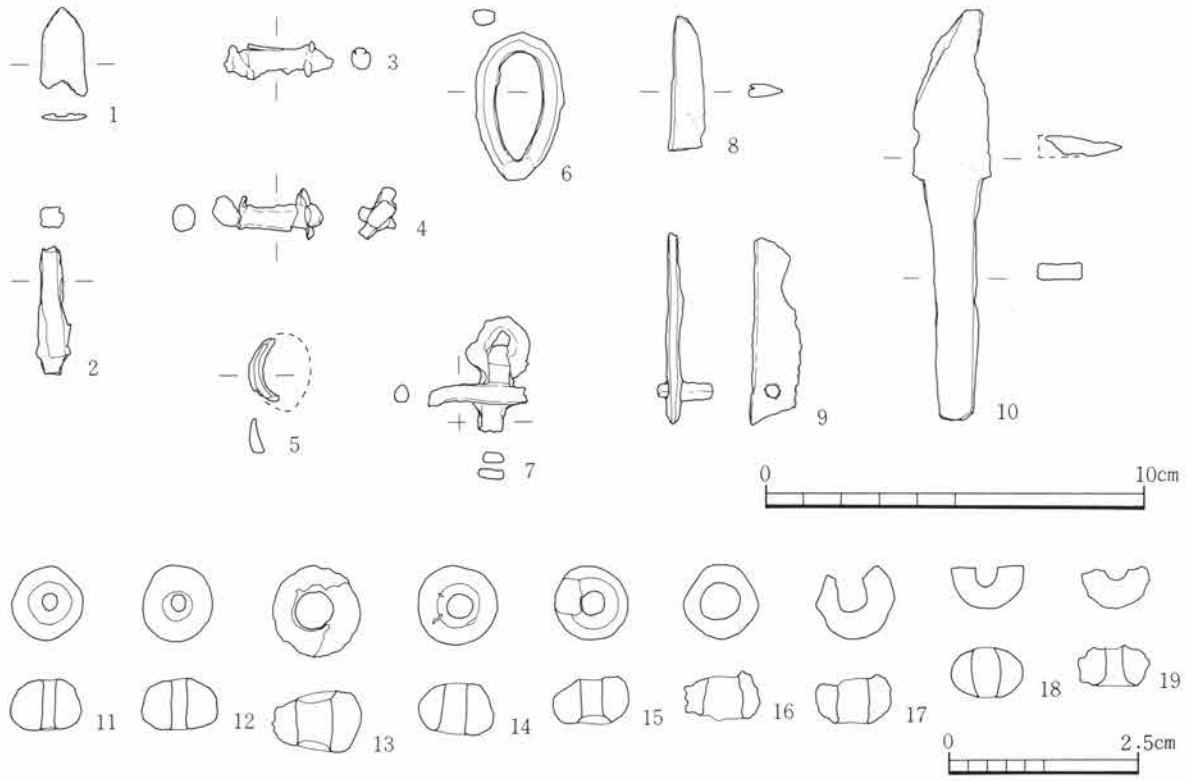
17



18



第209図 9号墳出土遺物実測図(2)



第210図 9号墳副葬品実測図



10号墳《第211～213図、図版76》

1. 位置と調査前の状態

N-25ポイント周辺に位置していた。北緩斜面に立地しており、削平が著しく、耕作による破壊が進んでいた為に、全面的な表土除去が完了するまで古墳の存在を確認できなかった。古墳群の中ではほぼ中央に占地しており、2・3・18・21号墳の間に挟まれていた。

2. 外部施設

周堀の外側の下部と葺石の根石と考えられる石列が長さ6m程確認されたに過ぎない。

周堀は40°程の角度で40cm程立ち上がっており、下端と石列との間隔は一定しておらず、10～40cmある。

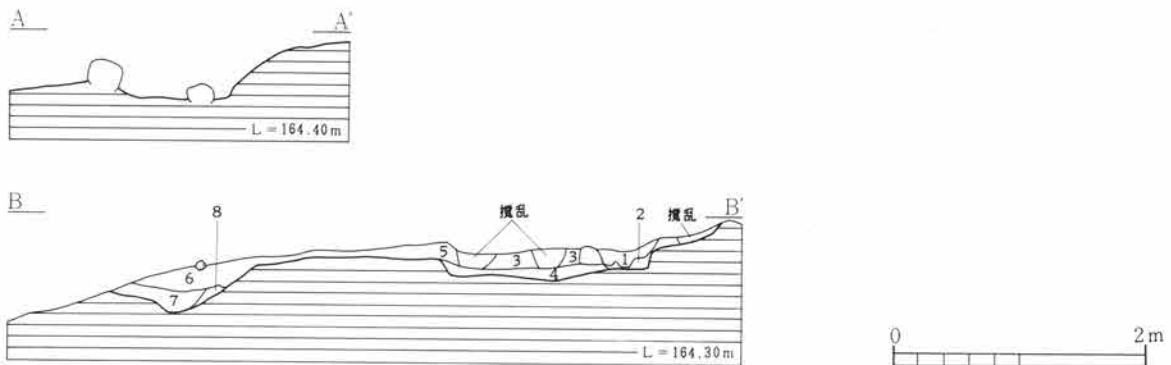
石列の西部では内側にも石が検出されたが、原位置を保つものではなかった。石列の石は、葺石状に積み上げられた状態でなかったことから、恐らくは基壇斜面の葺石の根石が遺存したものであると思われるので、本墳は、基壇部径12m程の円墳であったと考えられる。

3. 内部施設

削平が著しく、埋葬主体部に関する資料は全く得られなかったが、埴輪を伴っておらず、滑石製の紡錘車が出土した点から推して、本古墳群の中では比較的初期の段階で築造されたものであり、竪穴系の埋葬施設を持っていたと思われる。

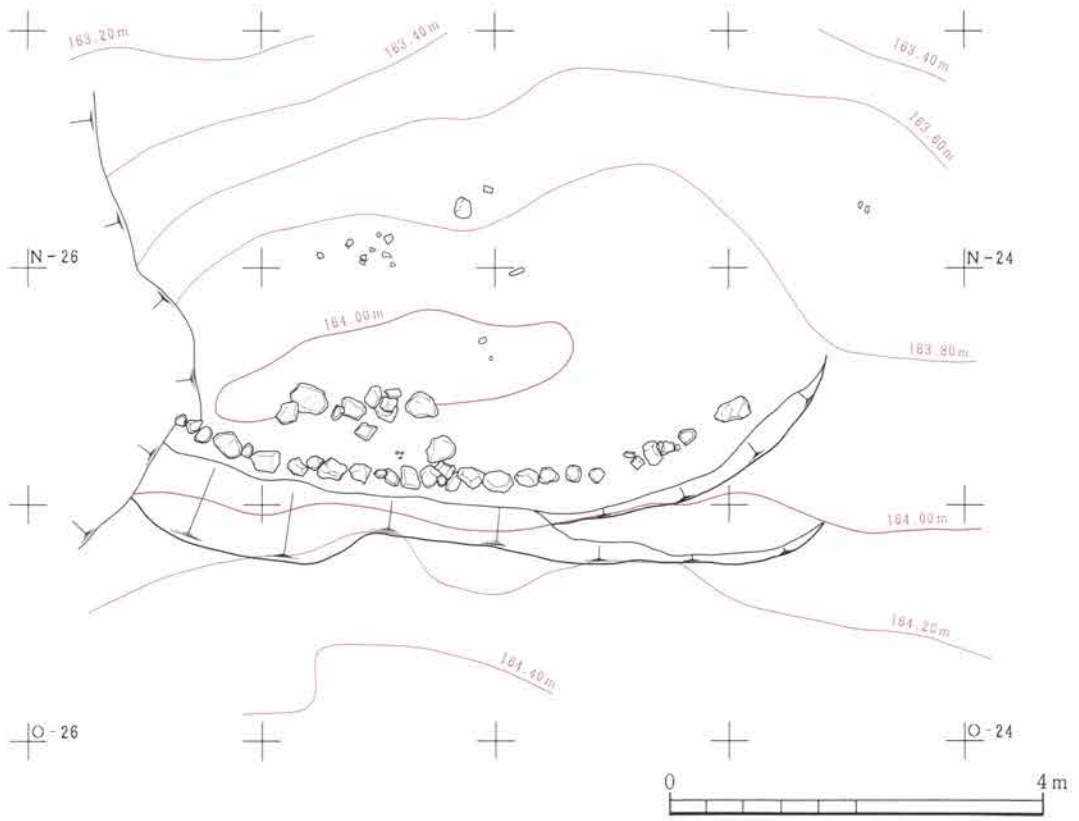
4. 出土遺物

周堀の覆土と考えられる暗褐色土を、注意深く除去したにも拘わらず、確認された石列の西から9番目の石のやや南側から滑石製紡錘車が出土したのみである。狭端面を地山の中に押し込まれた様な出土状態であったことから、本墳に伴うものであると考えられる。側面がやや内湾した截頭円錐形で、下面径52mm・上面径28mm・厚さ11mmを測る。一部が欠損しているが、重さは39gである。中央部に径7mmの孔が穿たれているが、両端とも若干の面取りがなされている為、穿孔方法は不明である。上面は平滑であるが、側面及び下面には幅3mm程の成形時の削り痕が放射状に残っている。 (飯塚)

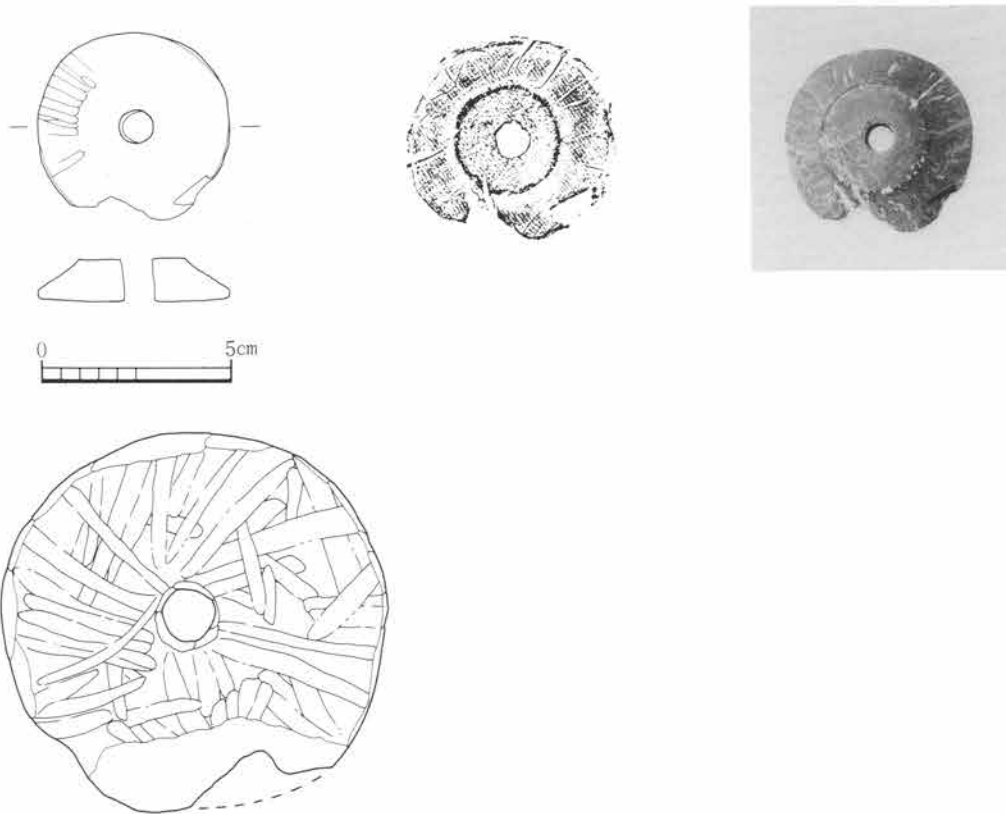


- | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1. 暗褐色土 白色軽石・ローム粒をまばらに含む。 | 5. 暗褐色土 白色軽石をまばらに含む。 |
| 2. 暗褐色土とロームブロックの混土層。 | 6. 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒をまばらに含む。 |
| 3. 暗褐色土 白色軽石とロームブロックを多く含み、締まる。 | 7. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。 |
| 4. 黒褐色土とローム小ブロックの混土層。(地山の可能性があるか) | 8. 暗褐色土 6層よりもローム小ブロック・ローム粒を多く含む。 |

第211図 10号墳地層断面実測図



第212図 10号墳墳丘実測図



第213図 10号墳出土遺物実測図

III 検出された遺構と遺物

11号墳《第214～226図、

図版76～78・127～130・150・159》

1. 位置と調査前の状態

S-33ポイント周辺に位置していた。北西緩斜面に立地しており、梨畑として利用されていたが、全体の7割近くが、地辻りに伴い南西側に3～4m程陥没していた。崖面の観察中に石室用材と考えられる石材が認められた為に、発掘調査前の現況観察時点で古墳と認定した。古墳群の中では、中央からやや西寄りに占拠しており、南東側に9号墳、北西側に12号墳、南西側に15号墳がそれぞれ隣接して築造されていた。

なお、耕作者は、この場所を「シバツキ(柴付き?)」と呼んで、石室用材の上に簡単な祠を建てて祭っていたとのことである。

2. 外部施設

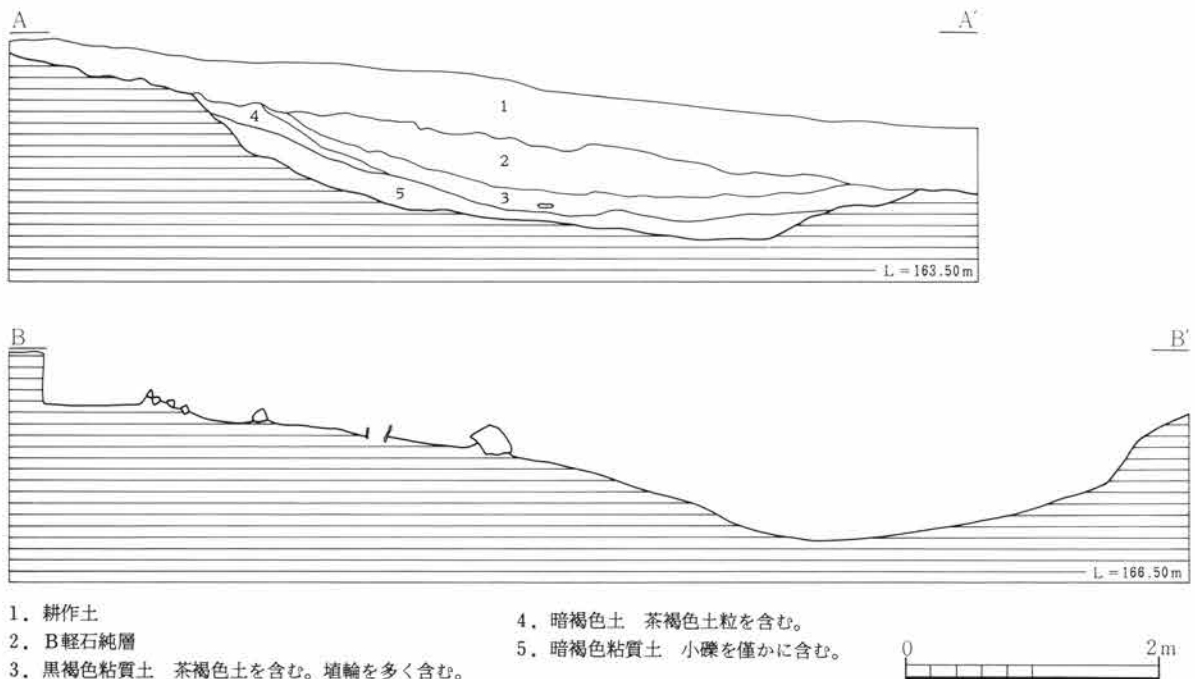
地辻りに伴う陥没の影響で南西部では明確な周堀を確認できなかったが、ローム層中に掘り込まれた環状に巡ると考えられる周堀の大部分を検出した。規模は、上幅4.5m、下幅1.5mで、深さは90cm前後である。周堀上端での外径は33m、内径は24mで、比較的均整のとれた円形を呈していたと考えられ

る。断面形は凹レンズ状を呈しており、底面の状態は陥没の影響で明確にし得ない部分を残すが、ほぼ平坦であったと思われる。

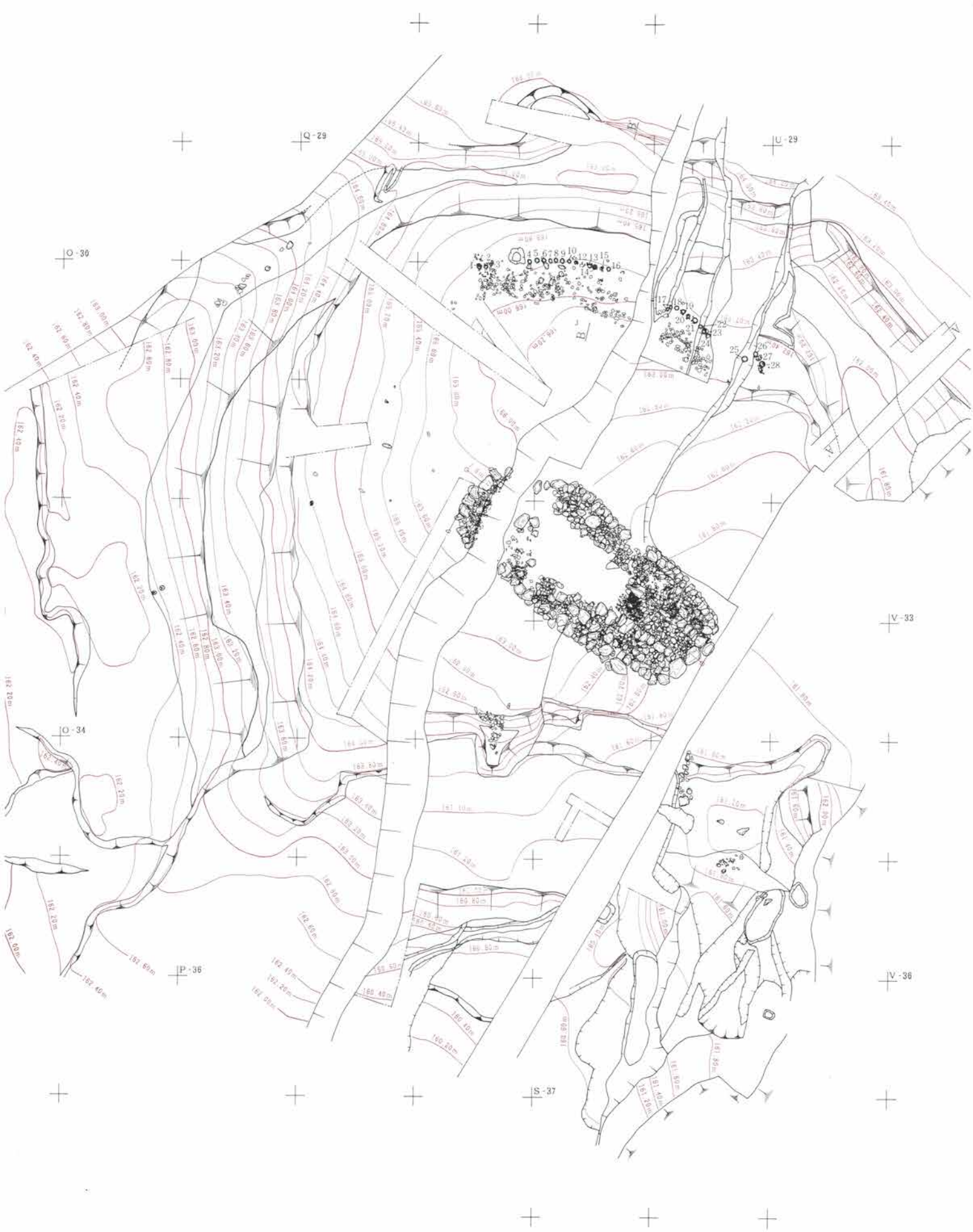
周堀の底面から65cm程上位には、ローム層を削り出した基壇が巡っており、斜面には葺石が葺かれていたが原位置を保つ物は僅かであった。また、テラス面には、径2～5cm前後の垂角礫が敷かれた部分が残っていた。規模については、周堀内縁の上端から3m程内側まで敷石の認められる箇所があったことから、3m以上の幅を持っていたと考えられるが、墳丘規模を推し量れる様な資料は得られなかった。埴輪は、南東部のテラス面に、殆ど間隔を空けずに樹立された状態で28本の円筒埴輪が残っていた。周堀の全域から破片が出土しているため、径20m程の規模で円形に囲繞していたと考えられる。

3. 内部施設

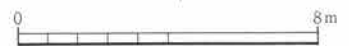
石室は、周堀が描く円のほぼ中央部に位置し、南西方向に開口する袖無型横穴式石室である。地辻りに伴って、玄室奥部の裏込め被覆を残して全体が3m以上陥没すると共に、玄室の前半及び羨道部は更に80cm程陥没していた。垂直方向の移動は、発掘調査した古墳の中では最も著しかったが、水平方向の



第214図 11号墳周堀断面実測図



第215图 11号墳填丘实测图



III 検出された遺構と遺物



第216図 11号墳石室裏込め被覆実測図

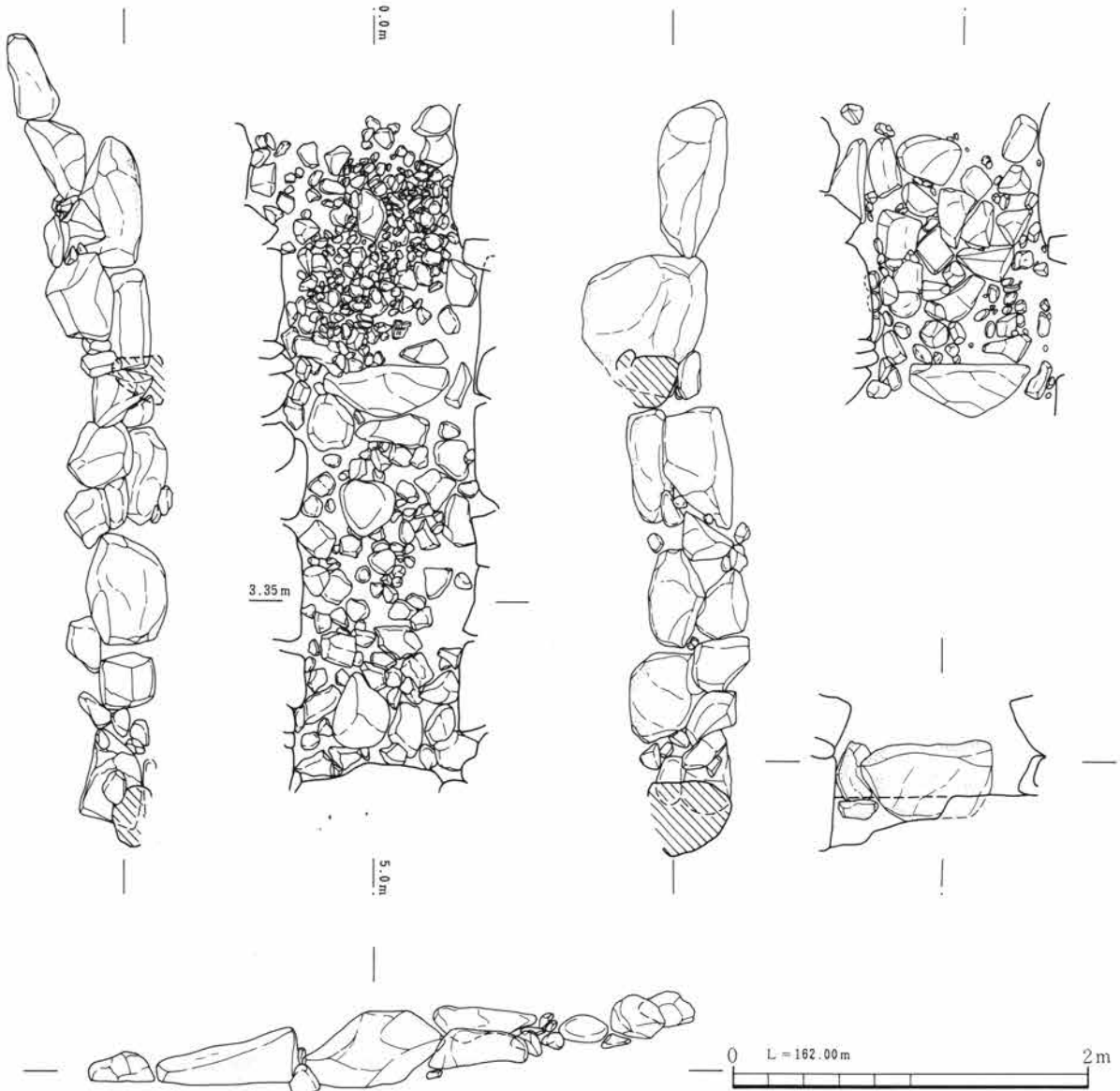
移動は、亀裂部分の他は殆ど認められなかった。石室の天井石及び壁材の大部分は、地沁りによって生じた亀裂を埋める為に砕かれて持ち去られていた。また、玄室部の大半は梨の植樹の為に攪乱されていたが、辛うじて裏込め被覆の石組みが残っていた。玄室と羨道とは、42×74・厚さ30mの石の平面を垂直に立てた榦石によって区分されており、玄室は羨道のほぼ2.3倍程の長さを持つと考えられる。現状における各部の計測値は以下の通りである。

石室残存長 282cm
 玄室前幅 102cm
 玄室幅 114cm+α

羨道長左 270cm
 羨道長中 282cm(榦石が壁石より10cm程突出)
 羨道長右 265cm
 羨道前幅 95cm
 開口方位 S-38°-W
 使用尺 ≒24cm

玄室プランは、奥壁が確認されていないが、裏込め被覆の厚さから推して、間口に対して奥行きが著しく長い方形を呈しているが、前室があった可能性が高い。

石室床面は、榦石よりも奥部では、掘り方底面に



第217図 11号墳石室展開図

III 検出された遺構と遺物

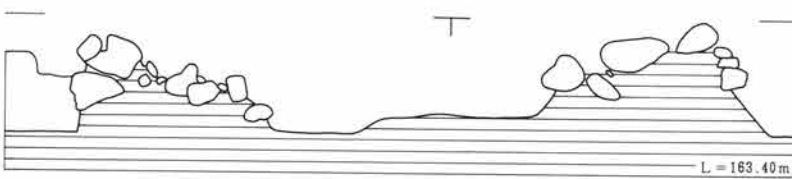
径20～30cm大の亜角礫を敷いた上にやや大振りな玉石を薄く敷き詰めて整えていた。羨道部の床は、明確な面が捉えられなかったが、開口部の框石と梱石の間に径20～30cm大の石が詰め込まれていた。

副葬品は、羨道入口から1m程奥に、多数のガラス小玉が散乱していた。大小2種類があり、右壁寄りには径4mm前後の物が、左壁寄りでは径8mm前後のやや大型の物が多く認められた。

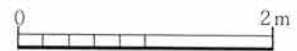
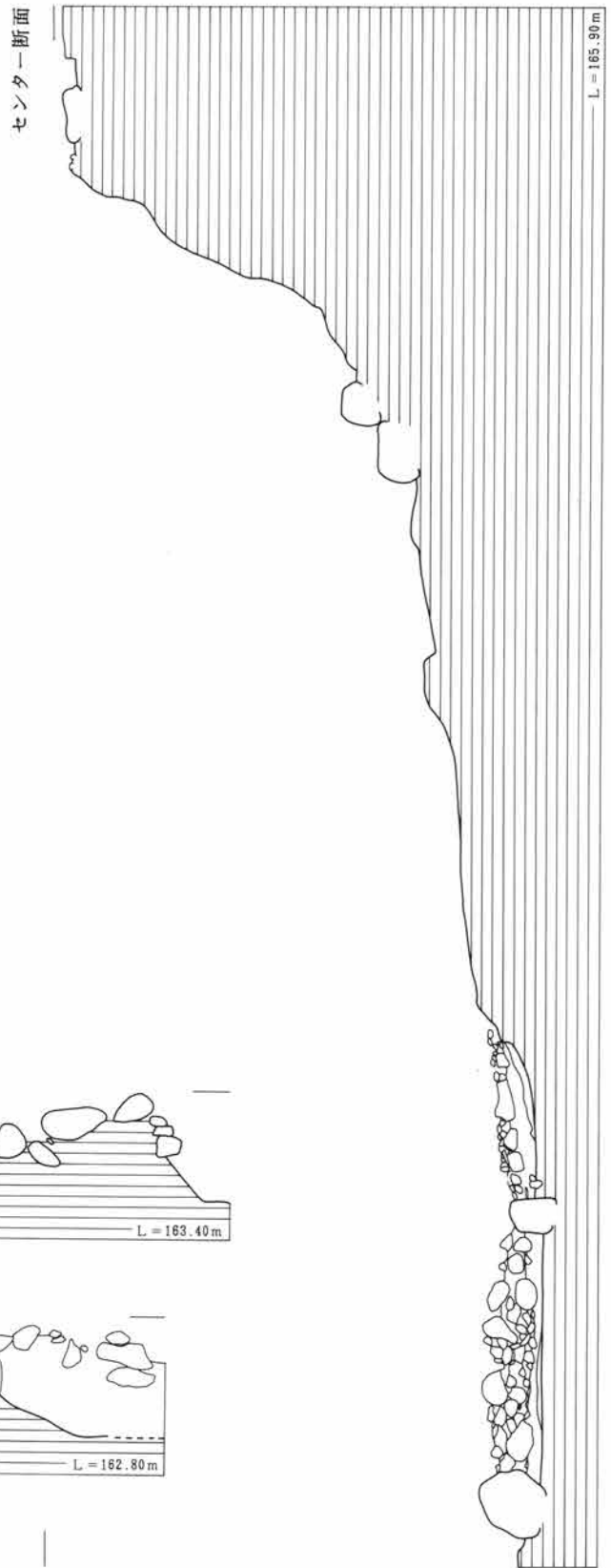
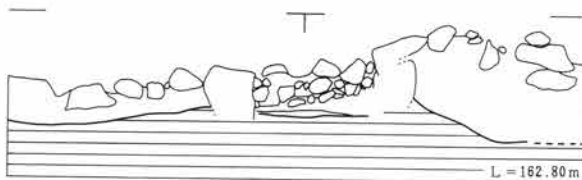
石室の掘り方は、明確な掘り込みは認められず、根石設置部分が若干窪んでおり、結果的に中央部が蒲鉾状に盛り上がっていた。

壁体及び裏込めは、粗粒安山岩の亜角礫によって構成されていた。羨道部の根石は、左側5石・右側4石で構成されていたが、右壁の最奥部には玄室の石が20cm余り張り出していた。開口部には80～90cm大の石を横長に据えていたが、他はやや小振りな石の平面或は横面を使用して壁面としていた。裏込め被覆は、石室の壁面から1.6～2.0m程外側に、60～70°前後の傾斜で、30～70cm大の石が積み上げられていた。陥

-2.7m位置断面



3.35m位置断面



第218図 11号墳石室断面図

没の為に、亀裂部分に1.1~1.4mの隙間が有るが、現状での長さは12.1m・最大幅は5.4mを測る。

4. 出土遺物

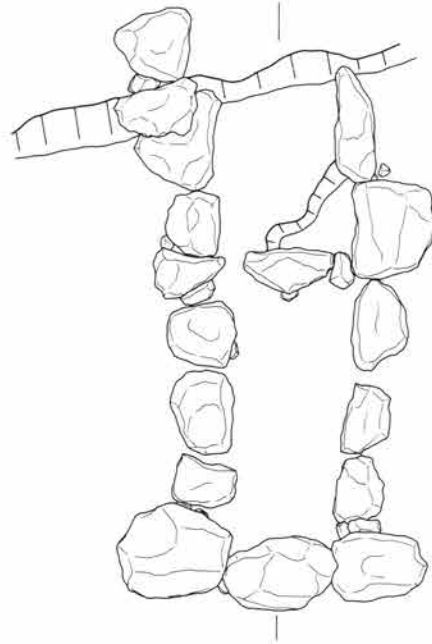
円筒埴輪は、2条凸帯3段構成の物が2種類確認された。樹立状態を保っていたのは小型品のみで、完形に復元できる接合資料は得られなかった。器表面の剝離が著しい為に、細部調整や塗彩の有無等は観察できないが、下段の胴部に透孔が穿たれた資料は認められない。中型の物は、南西部の周堀中から出土し、底径対口径の比は1:1.6であり、胴部2段に円形の透孔が1対ずつ穿たれており、口縁部には赤色塗彩が施されている。

南東部の周堀覆土から出土した須恵器甕(6)は、9号墳に伴う遺物の可能性が高い。須恵器羽釜(7)の出土箇所は、どの部分の周堀か判然としない。

ガラス玉は、完形品のみでは、小型品が355個、大型の物が98個確認されたが、他に破片状態の物も出土している。

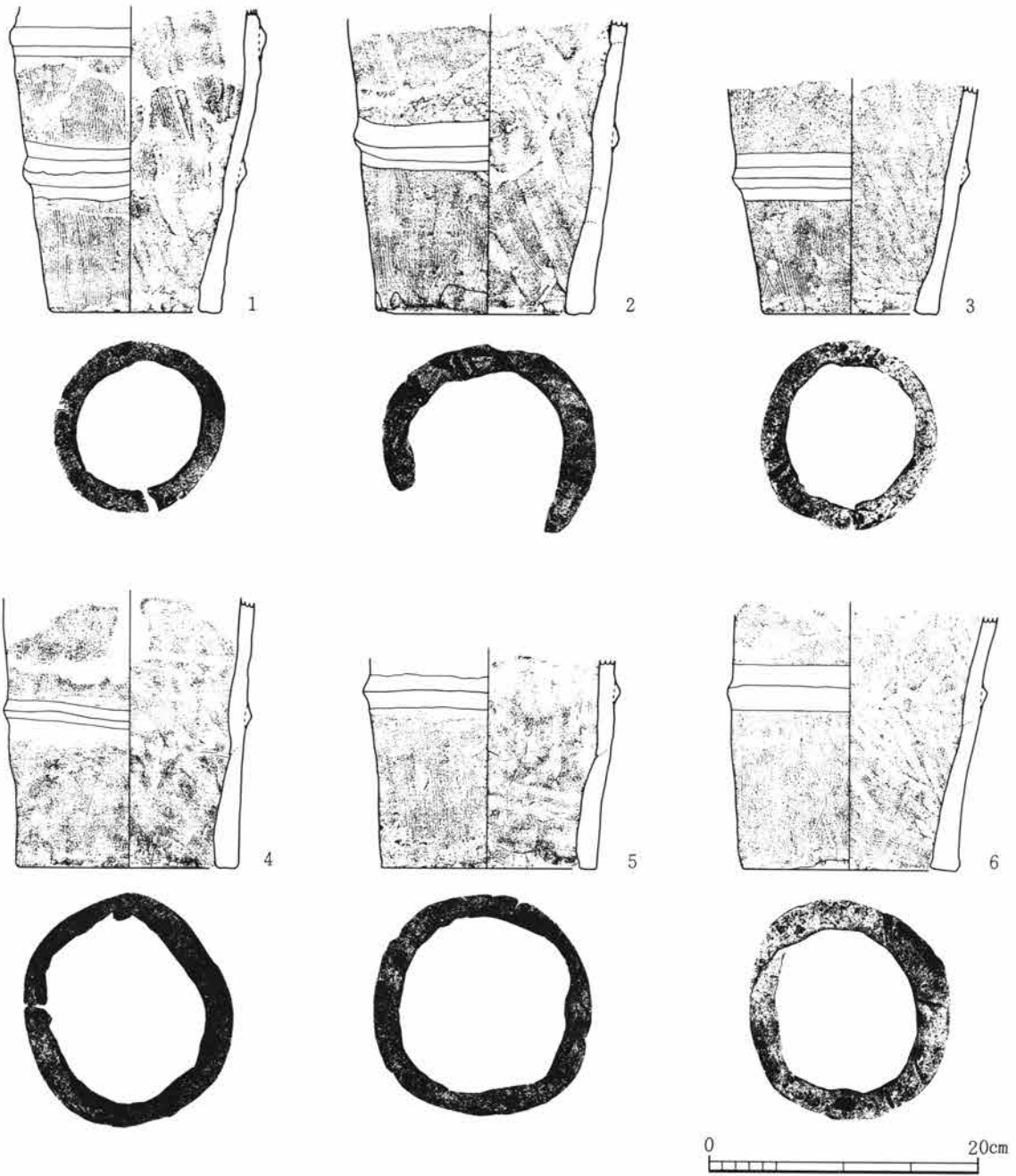
5. 備考

本古墳は、確たる証左に欠けるが、石室の形状や埴輪の様相等から推して、6世紀の中葉前後の築造と思われる。(飯塚)

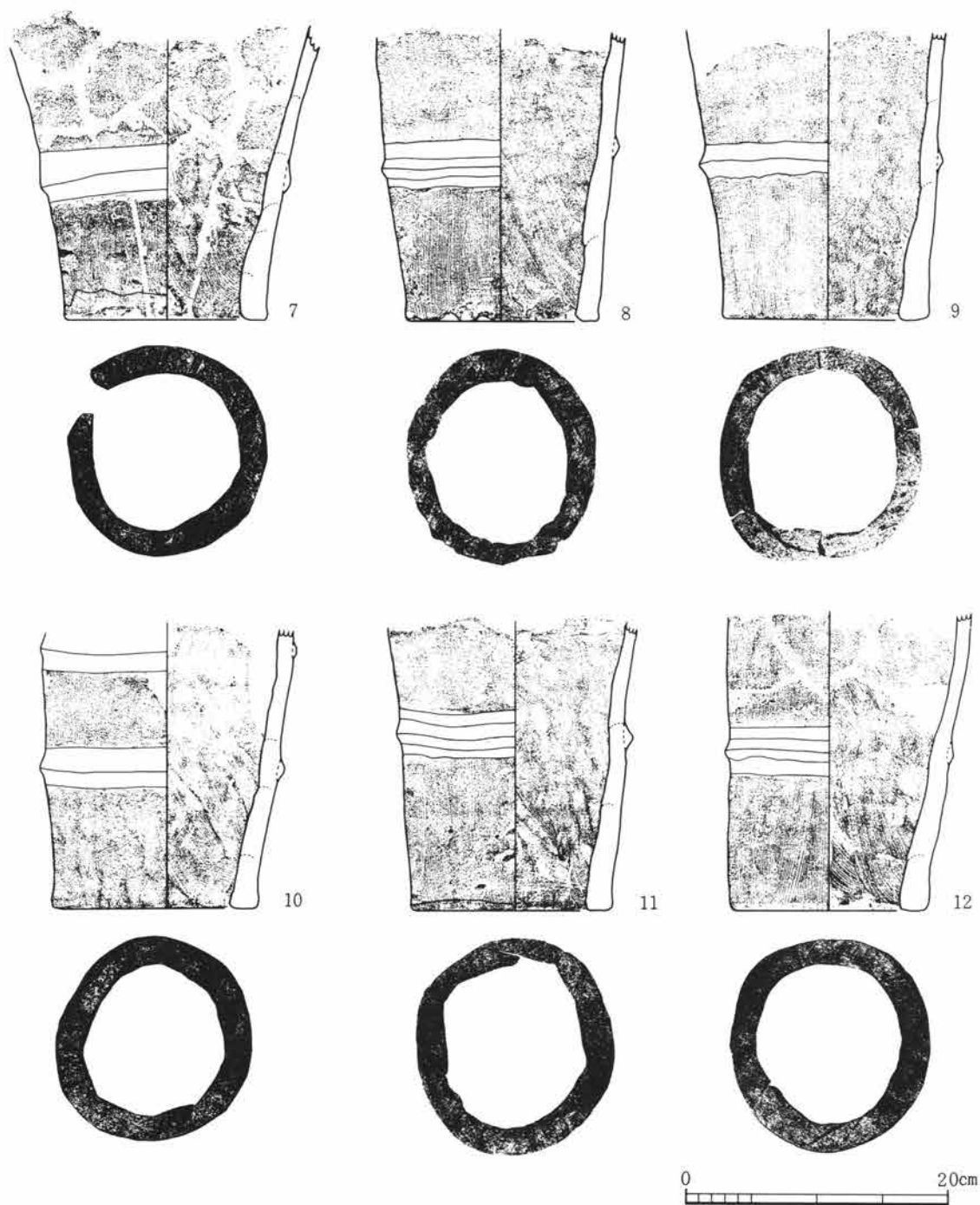


第219図 11号墳石室根石実測図

III 検出された遺構と遺物

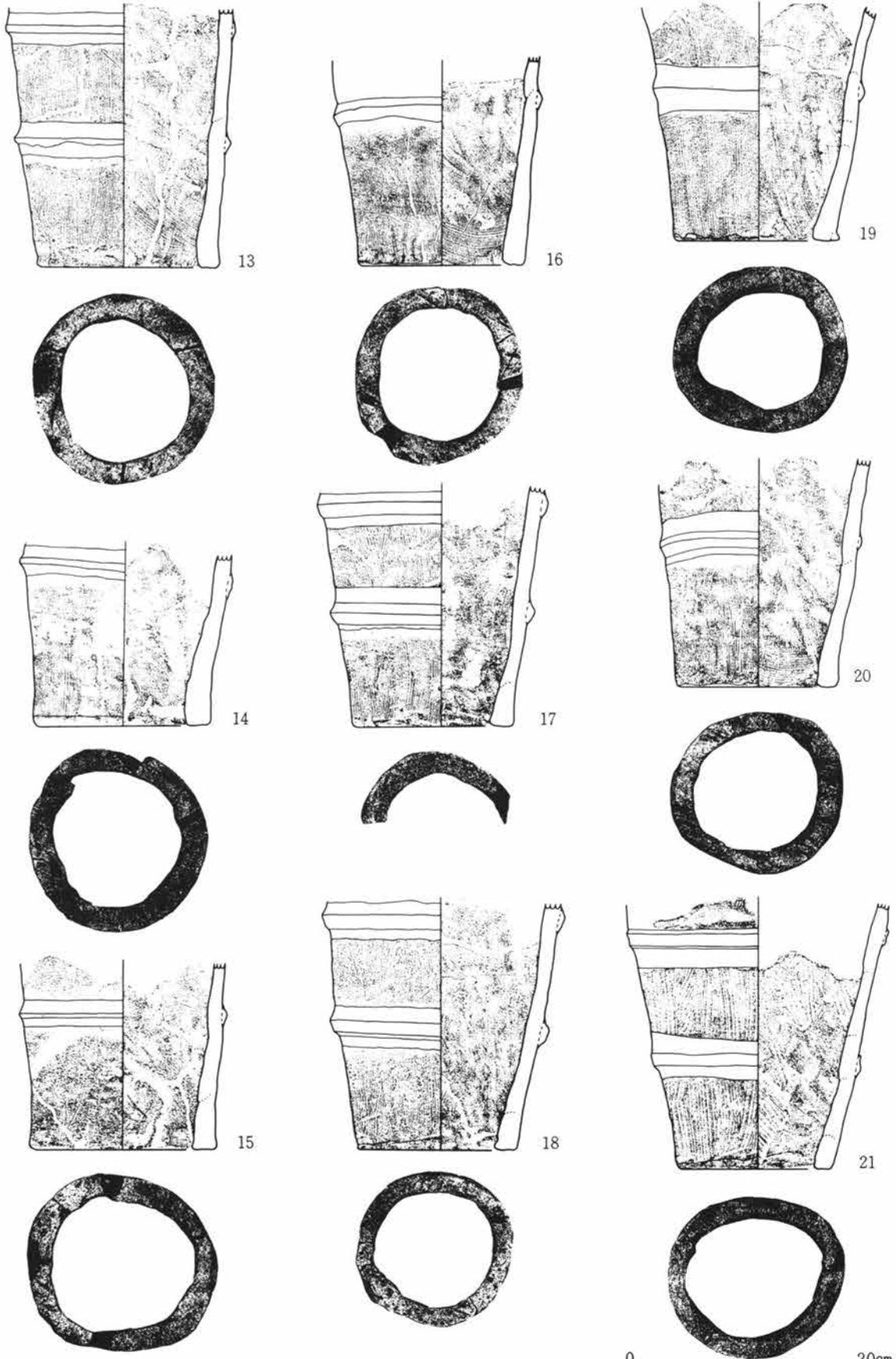


第220図 11号墳出土円筒埴輪実測図(1)



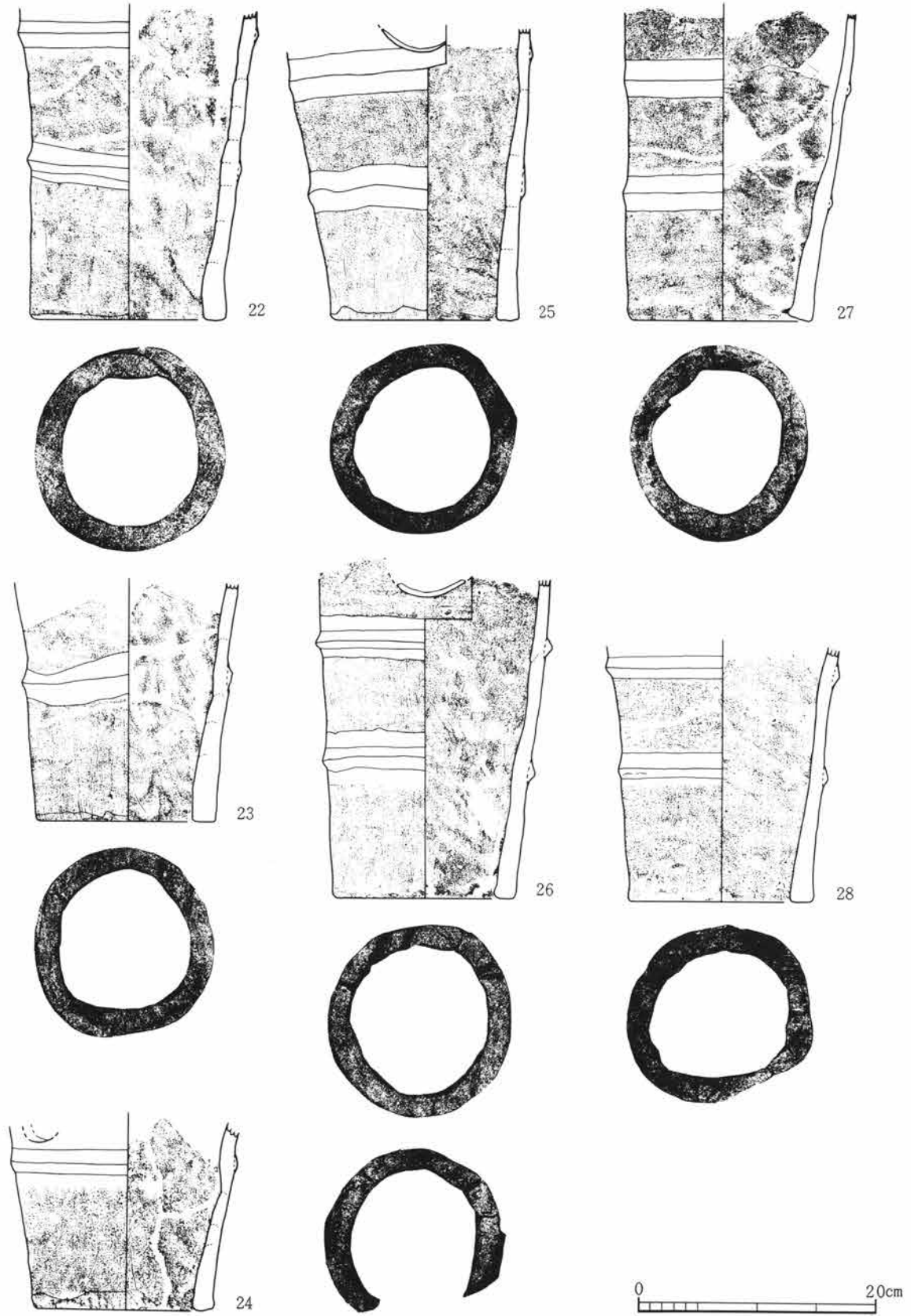
第221図 11号墳出土円筒埴輪実測図(2)

III 検出された遺構と遺物



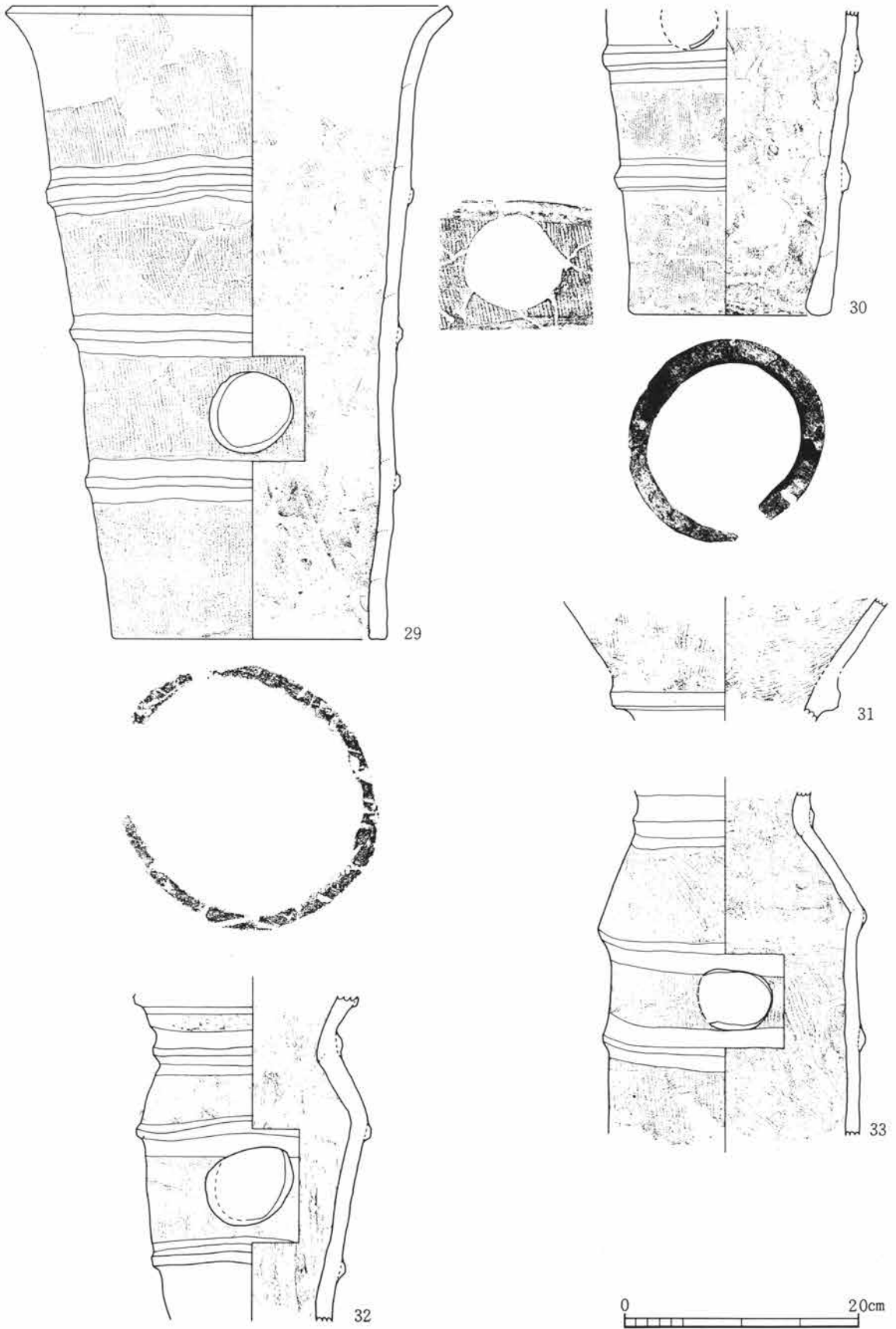
第222図 11号墳出土円筒埴輪実測図(3)

0 20cm

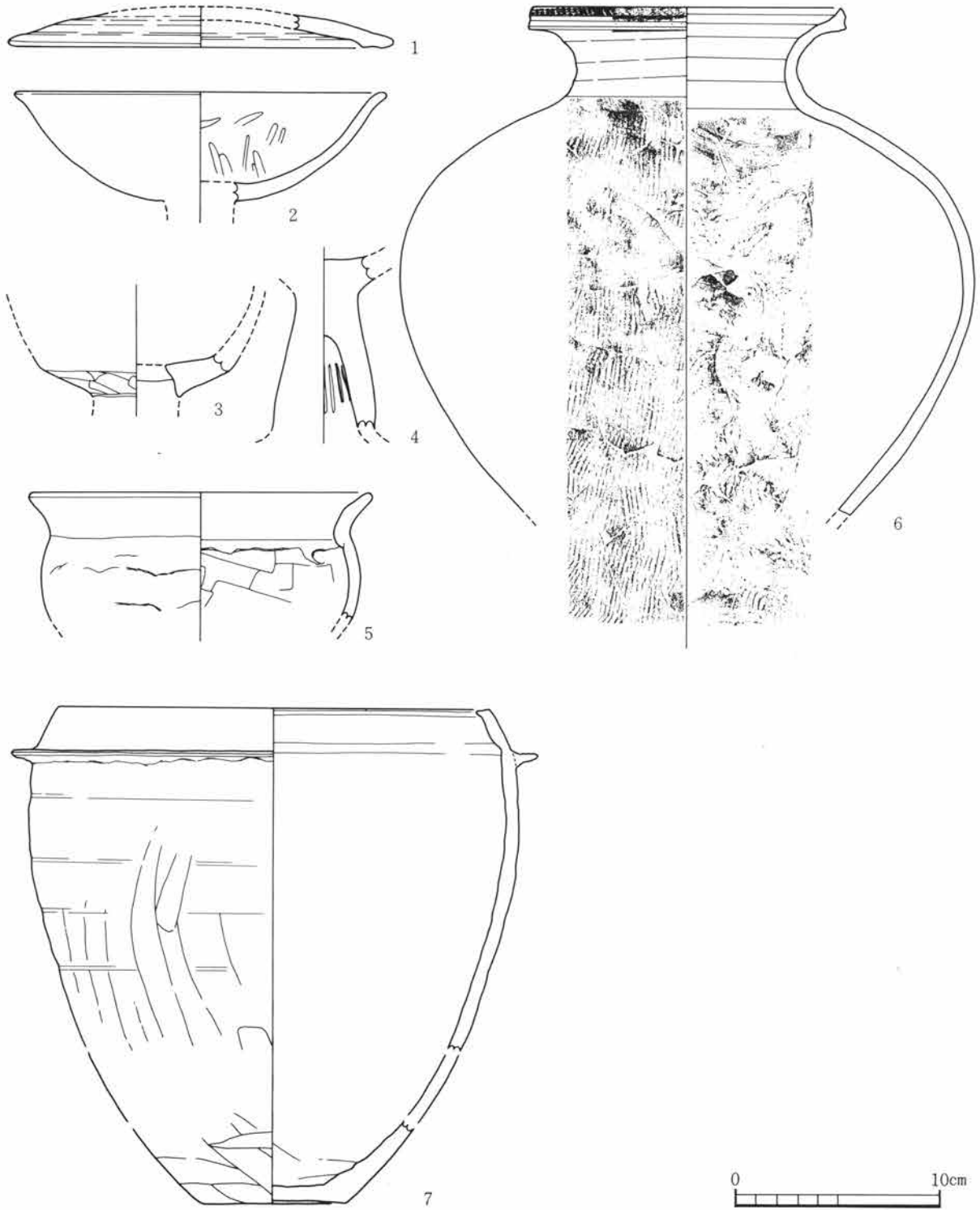


第223図 11号墳出土円筒埴輪実測図(4)

III 検出された遺構と遺物

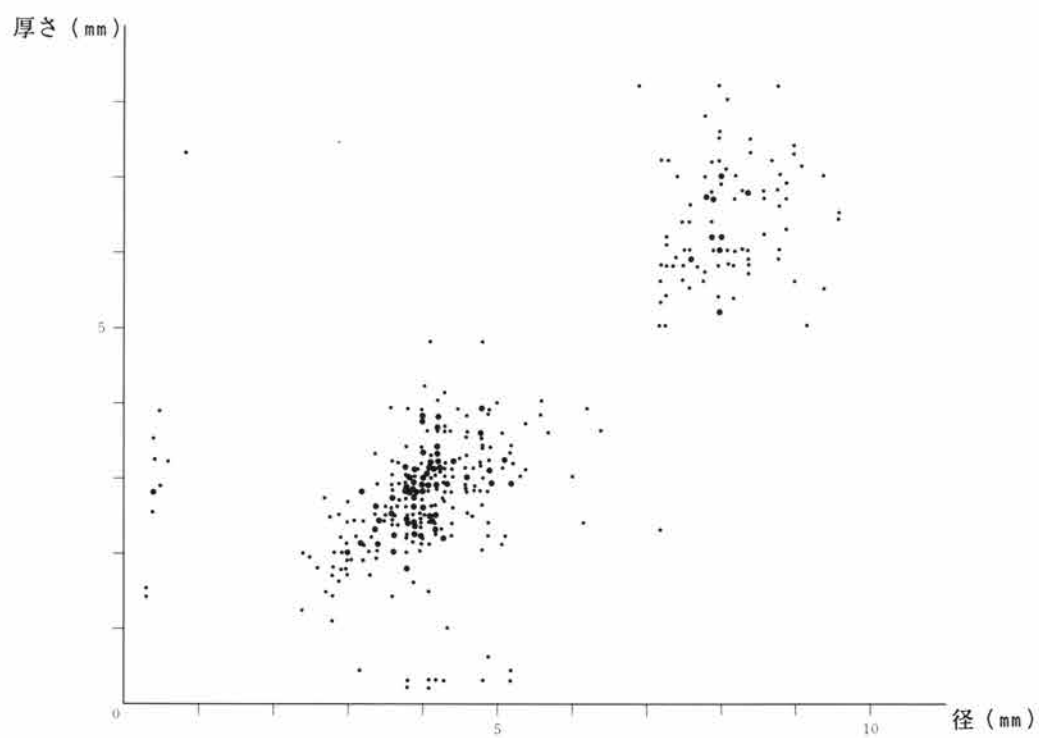


第224図 11号墳出土土円筒埴輪実測図(5)



第225図 11号墳出土遺物実測図

III 検出された遺構と遺物



第226図 11号墳出土ガラス玉検討図

12号墳《第227～245図、図版79～81・130～133・
151・152・160～165》

1. 位置と調査前の状態

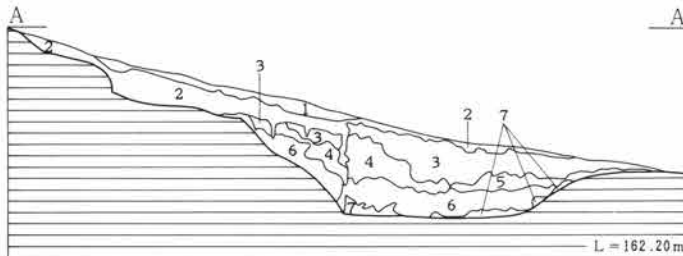
P-39ポイント周辺に位置していた。調査区西側の北西緩斜面の北面に立地しており、梨畑として利用されていた。石室用材が露出しており、古墳であることは一目瞭然であったが、地氾りの影響を最も著しく被っていた。石室全体が陥没しており、背後は50cm程の段差しか無かったが、開口部の7m程手前は高さ約4mの垂直な崖面となっていた。現状での標高は、158～160m前後である。

古墳群の中では、中央からやや西寄りに占地しており、南東側に11号墳が隣接していたが、北側は急斜面となるために、17号墳とは20m程の間隔が認められた。また、西側に位置する14号墳及び南側に位置する15号墳は、北西緩斜面の南面に在る為に15m前後の距離を空けて営まれていた。

2. 外部施設

周堀は、ローム層中に掘り込まれた下部のみが、南東部で検出された。断面形は逆台形状を呈し、上幅2.8～3.0m・下幅1.0～1.4mを測る。部分的な確認ではあるが、周堀内縁の上端での径は24m前後と考えられる。陥没の影響で3段に分断されており、遺存状態は芳しくなかったが、覆土中からは多量の埴輪片が出土した。なお、内縁部の斜面には葺石は認められず、覆土中からも少量の石が出土したのみである。

墳丘は、周堀内縁の6m程内側に、径約11m・高



- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 1. 黒褐色土 B軽石を少し含む。埴輪出土。 | 6. 明褐色土 ローム粒を多く含む。やや粘性がある。 |
| 2. 明褐色土 B軽石をブロック状に含む。埴輪出土。 | 7. 明褐色土 ロームブロックを多量に含む。 |
| 3. 黒褐色土 B軽石を少し含む。固く締まる。埴輪出土。 | |
| 4. 黒褐色土 B軽石と小礫を少し含む。固く締まる。埴輪出土。 | |
| 5. 褐色土 B軽石と小礫を少し含む。埴輪出土。 | |



第227図 12号墳周堀地層断面実測図

さ1mの大ききで削り残されていた。確認された範囲内では、封土の盛土作業工程を表すと考えられる硬化面は、築造時の整地面とほぼ平行していた。なお、葺石の存在については確認できなかった。

埴輪の配列状況を推定できる様な資料は得られなかったが、形象埴輪の破片の殆どは石室の左側の攪乱土層中より出土した。

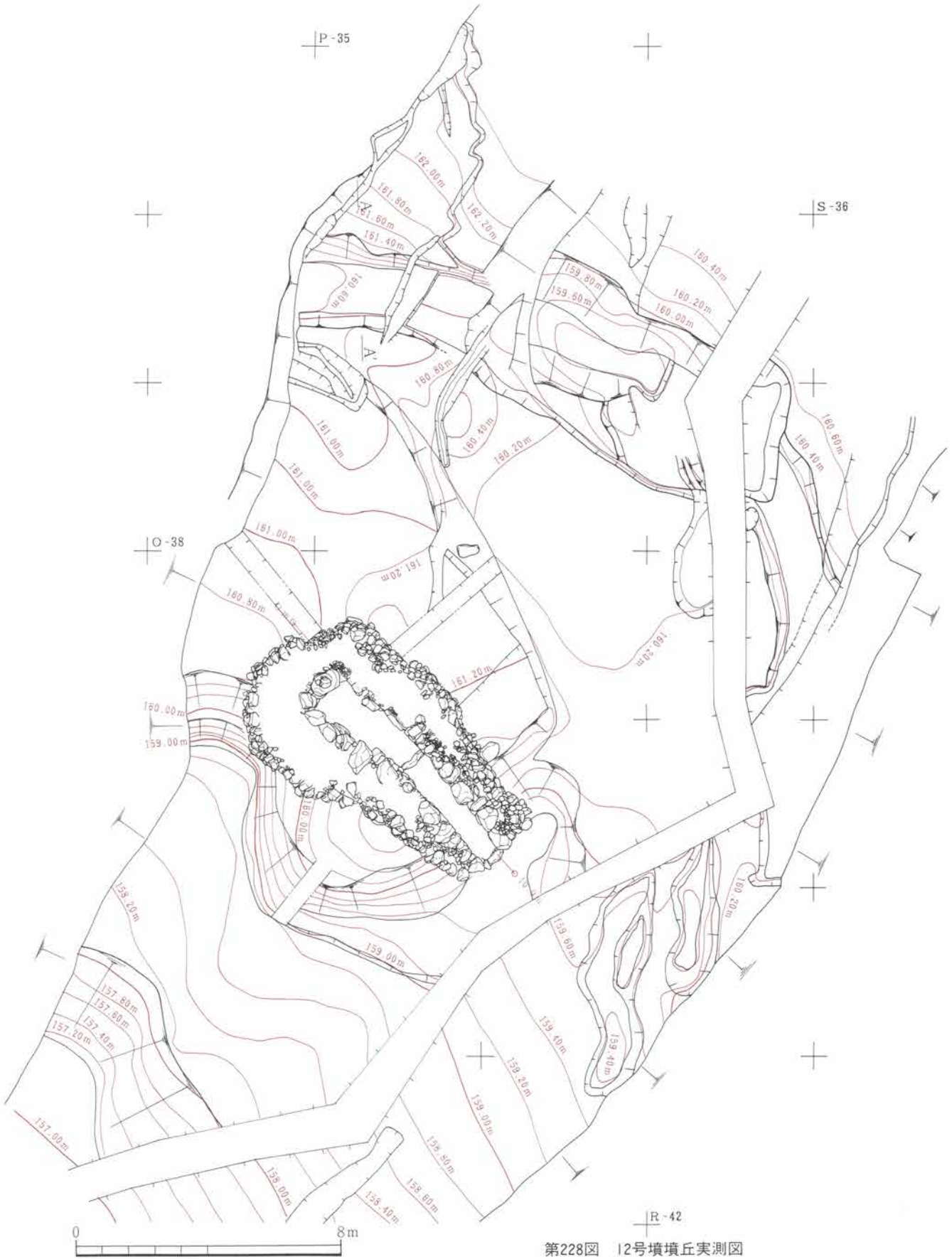
3. 内部施設

石室は、地氾りの影響で著しく変形していたが、南西方向に開口する袖無型の横穴式石室で、玄室の手前には前室が設けられていた。玄室と羨道とは、47×110×30cmの板状の石の平面を横長に直立させた榎石によって区分されており、羨道閉塞部の奥には20～30cm大の3個の塊石からなる別の榎石が設置され、両者の間が前室となっていた。用材は粗粒安山岩で、大きさは表の通りである。なお、石室各部の計測値は以下の通りである。

石室全長	720cm	開口方位	S-48°-W
玄室長	310cm	羨道長	265cm
玄室奥幅	120cm	羨道前幅	75cm
玄室前幅	96cm	奥壁残高	150cm
前室長	145cm		
前室前幅	80cm	使用尺	≒24cm

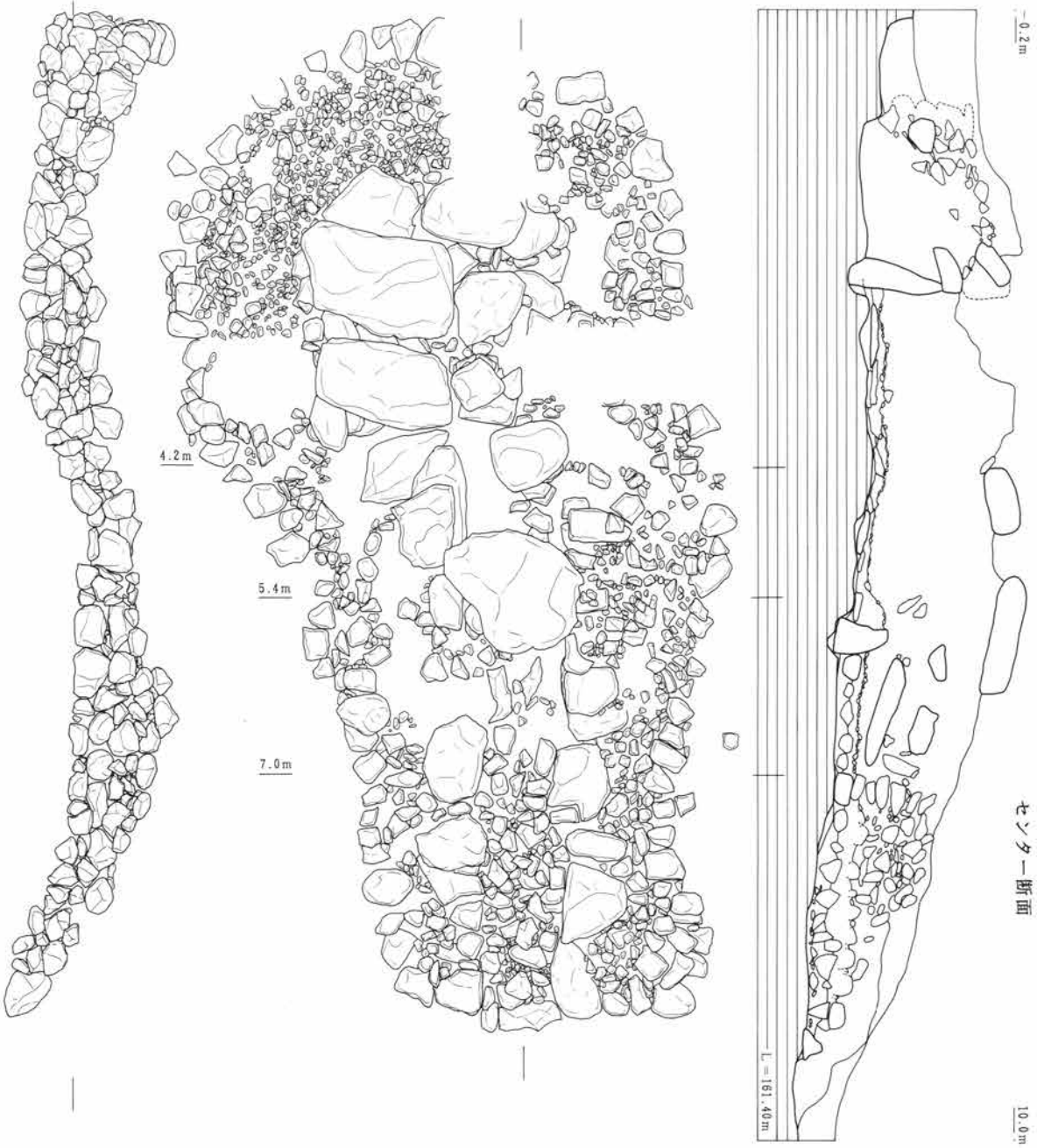
玄室プランは、間口に対して奥行き著しく長い方形で、両者の比はほぼ1:2.6・3.3である。床面上には、取り外された天井石の隙間から流入した土砂が厚く堆積していた。構築当初の床面は掘り方底面に、長さ90cm・幅60cm大の平らな舗石を並べた上

III 検出された遺構と遺物

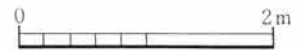
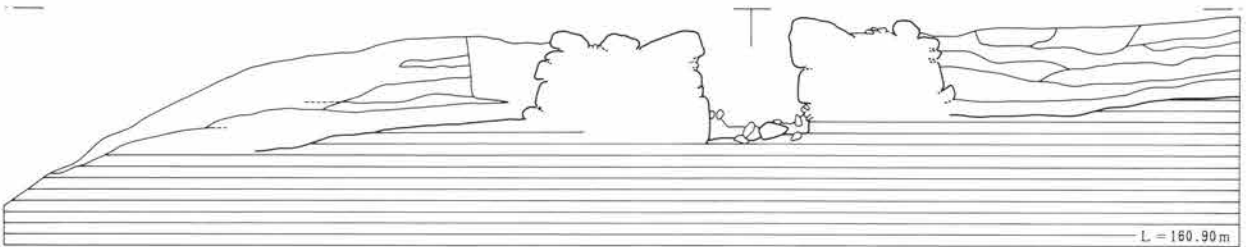


第228図 12号墳填丘実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物

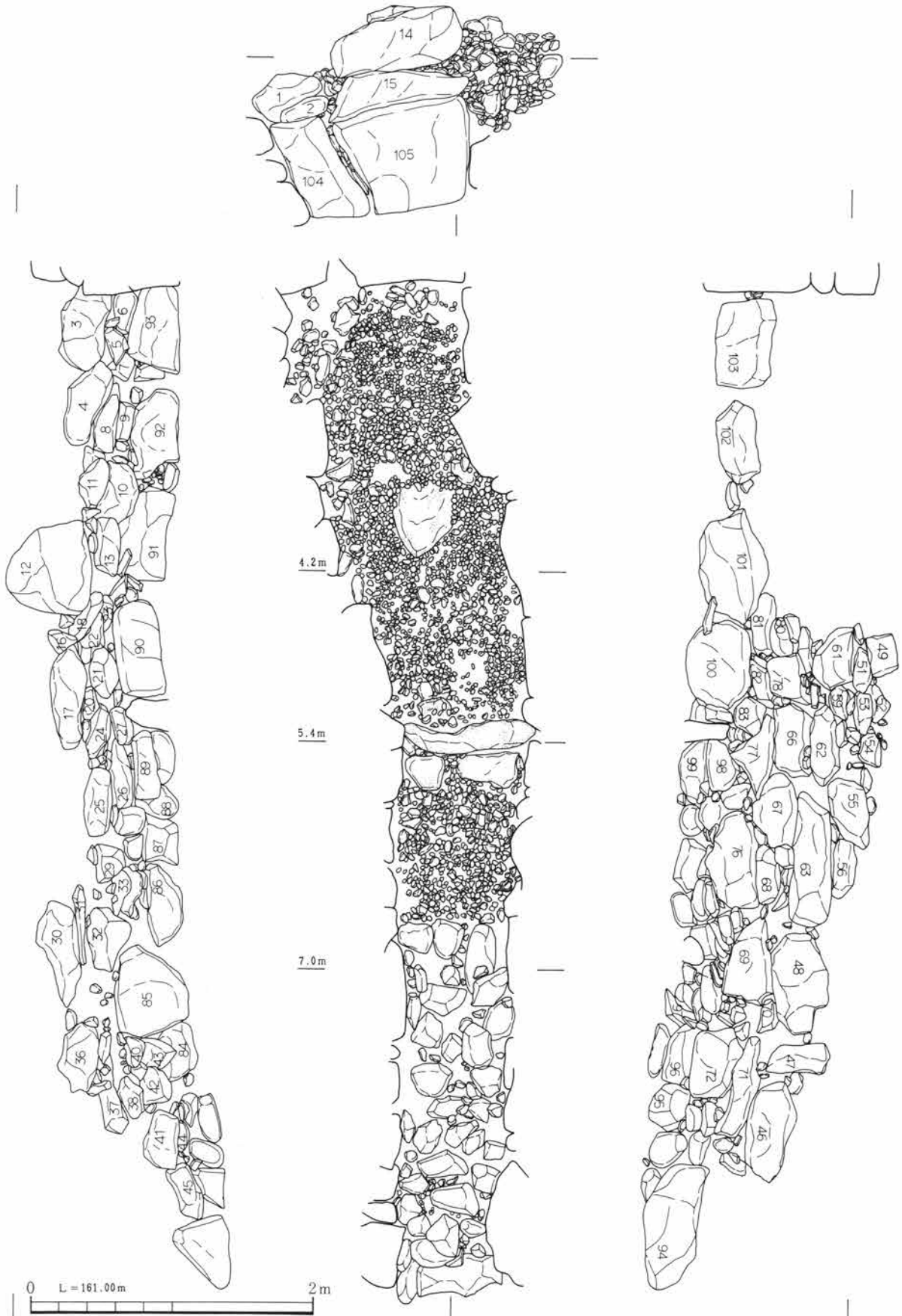


7.0m 位置断面



第229図 12号墳石室裏込め被覆実測図

III 検出された遺構と遺物



第230図 12号墳石室展開図

に、玉石を10cm程敷き詰めて整えていたが、内部は攪乱を受けており、右壁際に鉄鏃と僅かな骨片が残されていたのみである。

前室の床面は、倒れた扉石によって保護されており、旧態を良く留めていた。掘り方底面に、小円礫が混入した暗黄褐色土を貼った上に、20~30cm大の塊石と拳大の河原石を重ね、玉石を厚さ10cm程敷き詰めて整えており、豊富な副葬品が認められた。

閉塞は、羨道入口に横長の自然石を据え、奥部の柵石との間を間詰め技法によって充填していた。閉塞部の床は明確な面が捉えられなかったが、奥の石積が、90cm程の高さに6段残っていた。

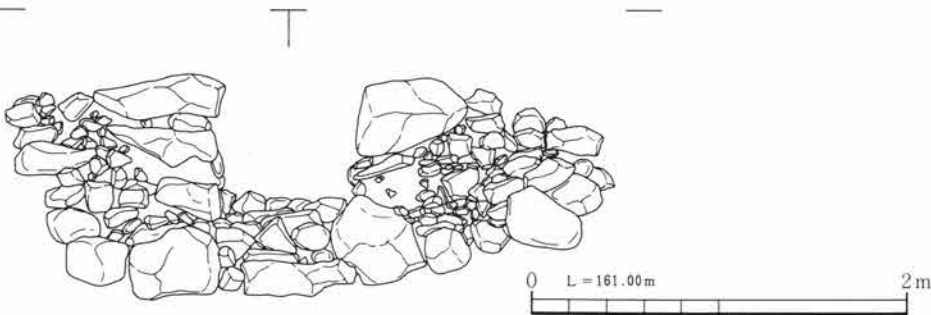
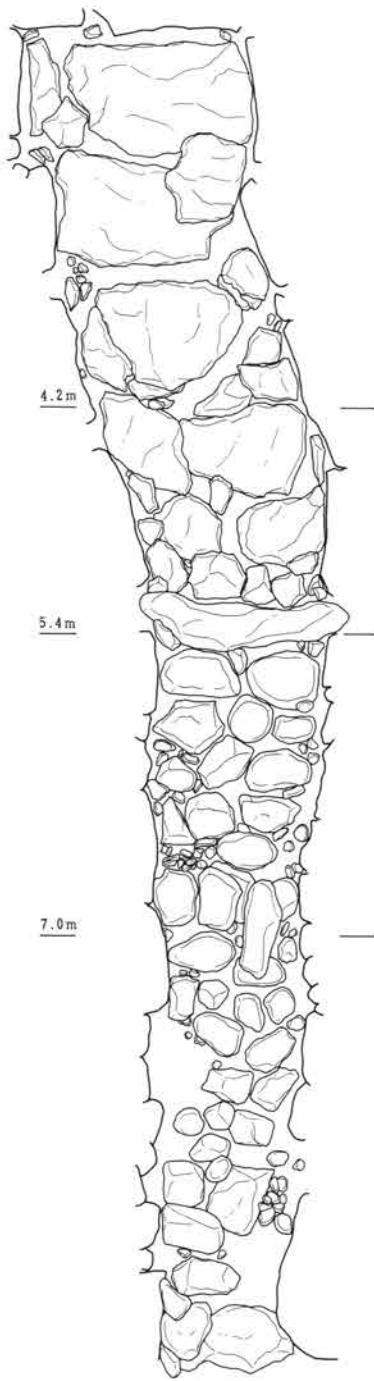
掘り方は比較的浅く、整地面から40cm程の深さで、長さ9m・最大幅4mの笏状に掘られており、底面もほぼ平坦であったと思われるが、現状では陥没によって手前が60cm低くなっていた。

壁体及び裏込めは、粗粒安山岩の直方体状の垂角礫によって構成されていた。奥壁は、多石構成で、3段に積まれた5石が残っていた。最下段は石の平面を直立させて根石とし、上部は横面を利用していた。

玄室の側壁も、石の平面を直立させて根石としていたが、羨道部の側壁は小口面を利用していた。上部には小口面と平面とが使用されていたが、規則性は認められなかった。

12号墳石室奥壁材法量一覧表

No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
1	24	56	53		☆	
2	15	40	51	☆		
14	40	100	65		☆	
15	30	110	60		☆	
104	71	71	48			☆
105	84	97	43			☆



第231図 12号墳石室正面・舗石面実測図

III 検出された遺構と遺物

12号墳石室左壁材法量一覧表

No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
3	30	75	46		☆	
4	25	63	63			
5	18	26	44	☆		
6	35	50	56	☆		
7	18	30	51	☆		
8	13	50	48		☆	
9	14	31	44	☆		
10	25	43	45	☆		
11	22	37	50	☆		
12	50	65	90	☆		
13	23	48	52	☆		
16	18	17	39	☆		
17	30	80	75		☆	
18	13	38	42	☆		
19	10	17	31	☆		
20	10	22	28	☆		
21	25	36	55	☆		
22	10	30	45	☆		
23	13	30	45	☆		
24	20	42	50	☆		
25	25	55	72	☆		
26	18	50	50			
27	10	30	40	☆		
28	7	18	28	☆		
29	25	30	52	☆		
30	30	80	60		☆	
31	30	80	75		☆	
32	30	50	40		☆	
33	6	46	60	☆		
34	20	48	50	☆		
35	12	36	40	☆		
36	30	55	70	☆		
37	20	100	60		☆	
38	20	31	32	☆		
39	15	17	28	☆		
40	18	28	25		☆	
41	25	45	35		☆	
42	19	35	40	☆		
43	20	25	43	☆		
44	14	35	46	☆		
45	16	39	47	☆		
84	30	41	56	☆		
85	54	69	52			☆
86	25	60	40		☆	
87	26	35	50	☆		
88	31	30	54	☆		
89	20	50	52	☆		
90	35	71	40		☆	
91	41	75	35			☆
92	35	66	33			☆
93	38	74	25			☆

12号墳石室右壁材法量一覧表

No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
34	20	48	50	☆		
35	12	36	40	☆		
46	40	70	65		☆	
47	38	25	66	☆		
48	47	70	65		☆	
49	25	32	65	☆		
50	11	20	30	☆		
51	17	33	48	☆		
52	12	30	37	☆		
53	14	28	35	☆		
54	13	22	40	☆		
55	25	54	45		☆	
56	14	42	50	☆		
57	10	15	25	☆		
58	13	26	44	☆		
59	6	10	15	☆		
60	8	20	28	☆		
61	33	55	64	☆		
62	23	70	65		☆	
63	35	105	78		☆	
64	14	40	65	☆		
65	8	20	25	☆		
66	30	50	60	☆		
67	40	60	65	☆		
68	17	38	55	☆		
69	48	70	85	☆		
70	20	20	50	☆		
71	30	82	50		☆	
72	36					
73	12	21	35	☆		
74	9	20	24	☆		
75	14	30	38	☆		
76	35	70	60		☆	
77	30	88	50		☆	
78	23	40	50	☆		
79	8	25	38	☆		
80	13	30	45	☆		
81	20	39	62	☆		
82	17	41	58	☆		
83	19	30	40	☆		
94	46	84	50		☆	
95	30	35	47	☆		
96	30	42	50	☆		
97	22	28	45	☆		
98	23	37				
99	25	46	38		☆	
100	47	65	32			☆
101	50	85	35			☆
102	32	62	47		☆	
103	43	67	35			☆

両側壁の根石ともそれぞれ4石で構成されていたが、左側は奥壁を支えるかの様に外側に設置されていたのに対して、右側は奥壁面と梱石とに挟まれて設置されていた。

裏込め被覆の石積みは、整地面から上部に、80°前後の傾斜で、全面に互って堅牢になされていた。石室の壁面から120~150cmの厚さで、長さ900cm・幅520cmの範囲であった。

天井石は、羨道部手前のもは除去されていたが、3石が石室内に半ば崩落した状態で残っていた。

4. 出土遺物

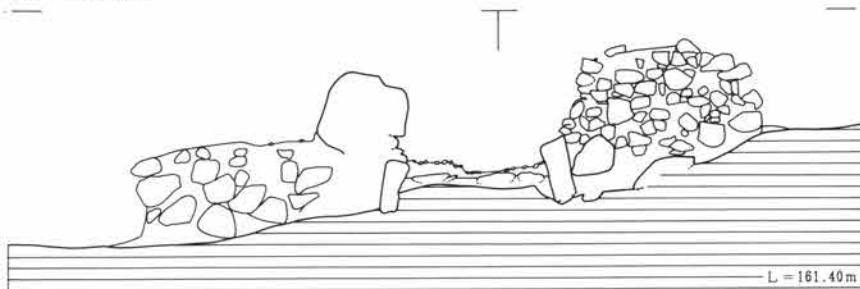
玄室内の覆土の篩作業によって、鉄鏃と弓の飾り金具・刀装具を発見した。鏃は、無茎・短頸・長頸鏃があり、長頸鏃には独立逆刺と篋竹固定金具が認

められた。

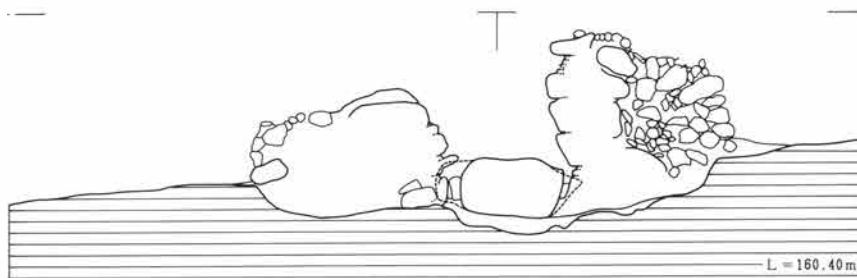
前室では、玄室の扉石と考えられる板石が倒れていた為に、最終埋葬に拘わる可能性が極めて高い遺物群が、ほぼ完全に保存された状態で発見された。土器類は手前から奥にかけて、須恵器坏10セットが3・4・3組ずつ、蓋を受台として身を乗せた状態で並べられており、この奥の左壁寄りに馬具類が置かれ、右壁寄りに須恵器甗1、土師器高坏3・長頸壺1が置かれていた。また、最前列の右端の坏の下部からも土師器埴1が出土している。須恵器にはMT-15の形態的特徴が認められる。

馬具類はほぼ1セットが出土した。二連銜の素環鏡板付轡は、立聞は別造りで、引手には別造りの引手壺が付く比較的古式の物である。鏡は、銅具から連なる兵庫鎖の先端に4個の鉾を持つU字状の金具

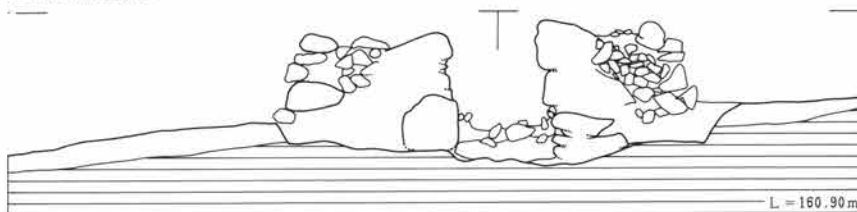
4.2m 位置断面



5.4m 位置断面



7.0m 位置断面

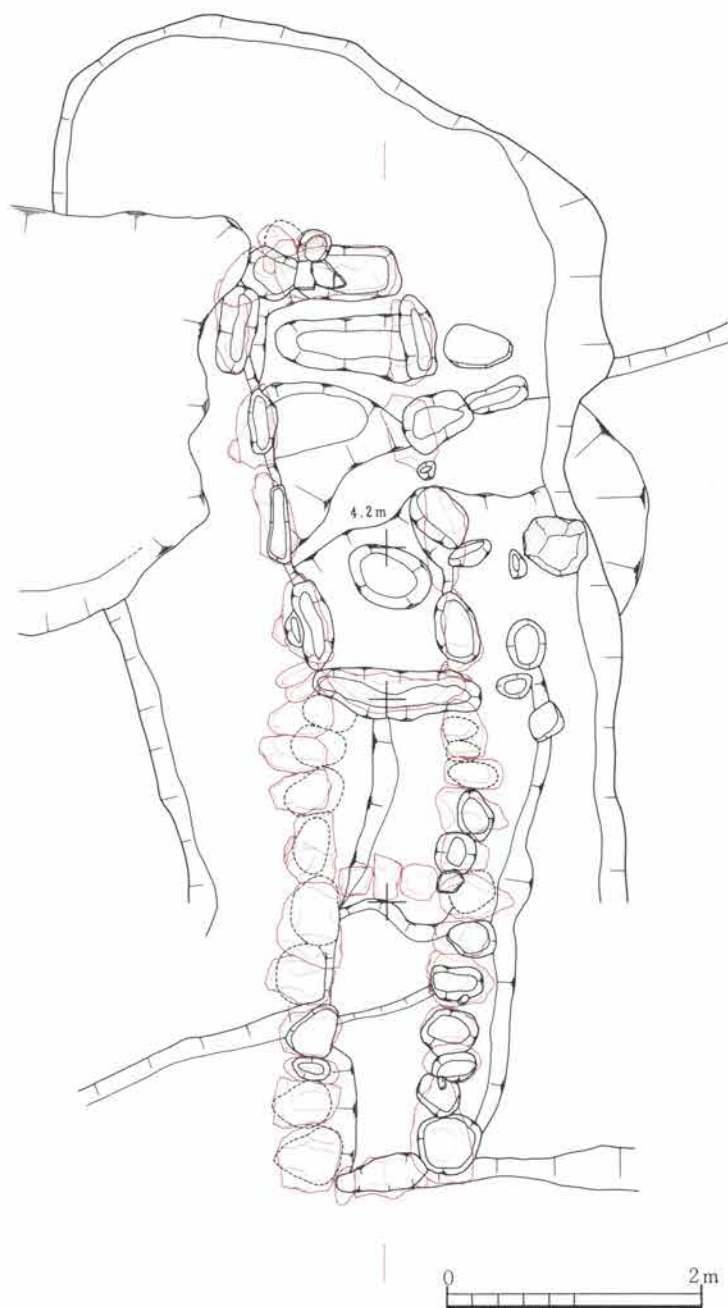


第232図 12号墳石室断面図

III 検出された遺構と遺物

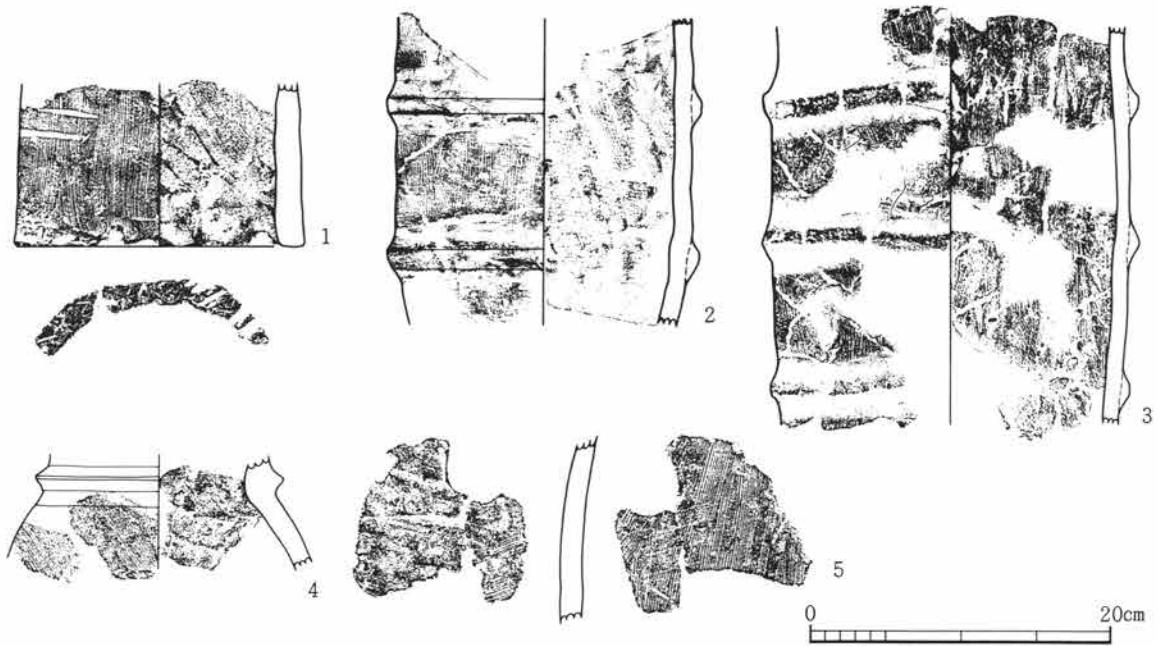


第233図 12号墳羨道部遺物出土状態実測図



第234図 12号墳石室根石・掘り方実測図

III 検出された遺構と遺物



第235図 12号墳出土円筒埴輪実測図

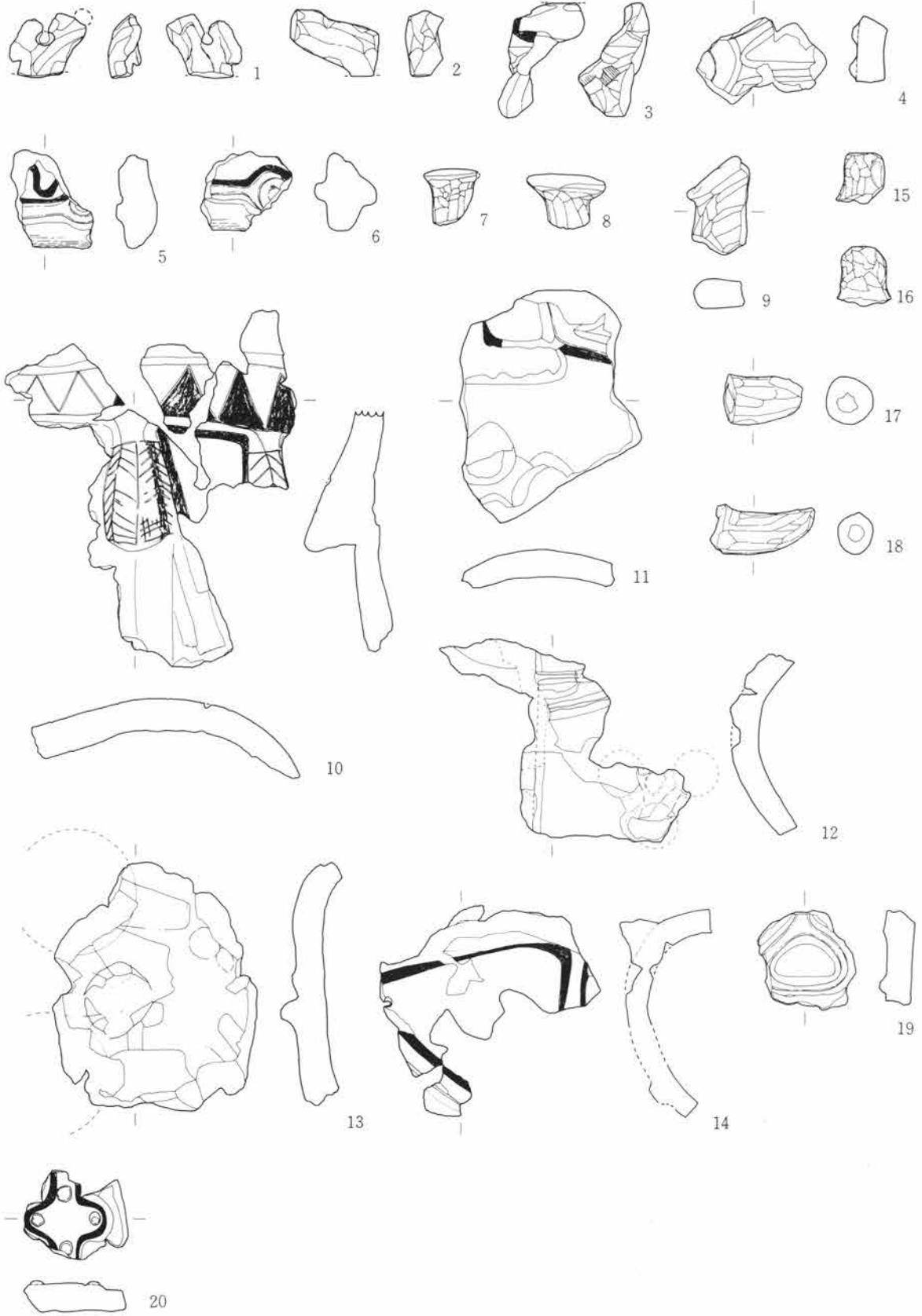
が付いており、この金具に木製の壺鏡が取り付けられていたものと考えられる。なお、鏡☆の間には兵庫鎖の連結を反転させる板状の環が挿入されており、鏡の位置を正位に保つための工夫が認められた。鞍に関する資料としては、銀鉾が密に打たれた縁金具と軛2個が出土した。飾り金具は、鉄地金銅張りで、表面に細かな点状刺突によって花卉文が施された径約6cmの無脚で偏平な半球形雲珠3個と径約10cmの雲珠1個及び爪形金具・貴金具等が確認された。他に2種の銅具が出土しているが使用部位は不明である。綏綏鯨鯨

周堀内からは土師器の長甕と高坏の脚部及び埴輪片が出土した。円筒埴輪は全貌を把握できる接合資料は無いが、3条凸帯4段構成であると思われる。また、形象埴輪は家・馬・人物が確認された。なお、埴輪の配列状況は明らかにし得なかった。

5. 備考

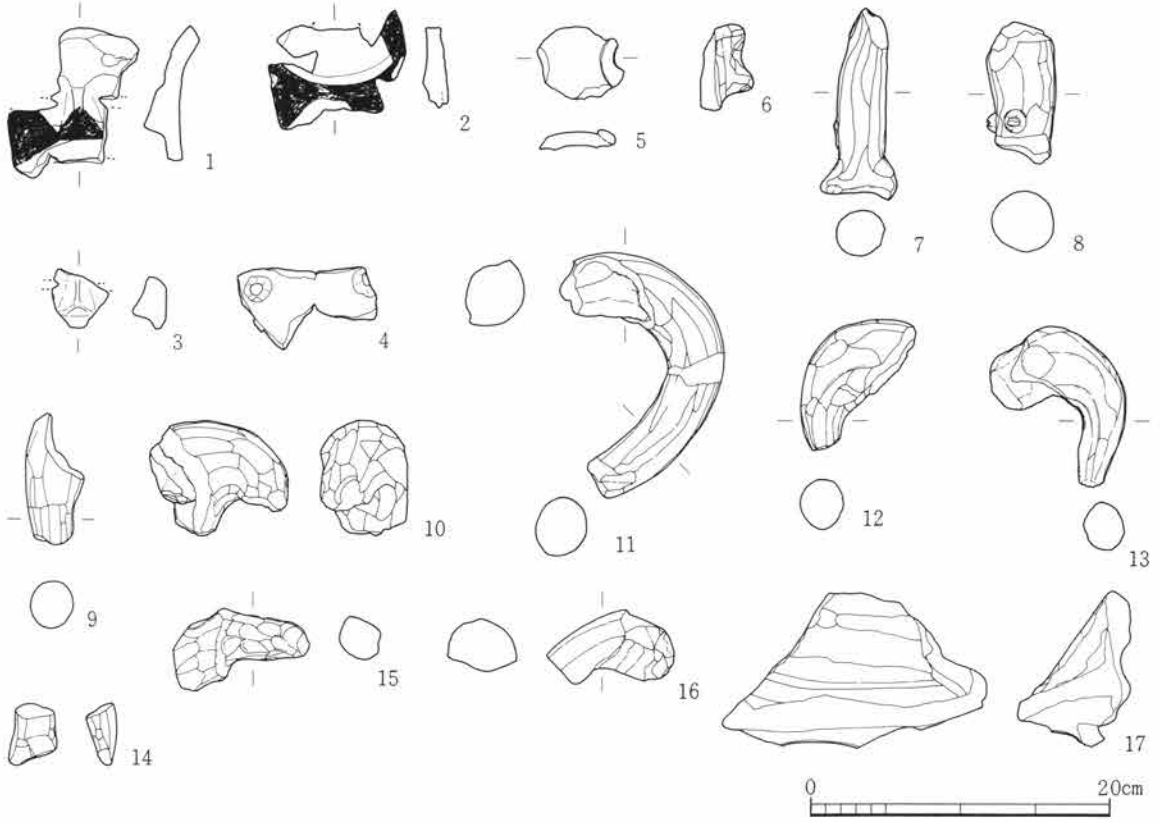
本古墳は、小型の古墳の埋葬施設に横穴式石室が採用された初期のものであり、6世紀初頭の築造と考えられる。
(飯塚)

4. 古墳時代の遺構と遺物

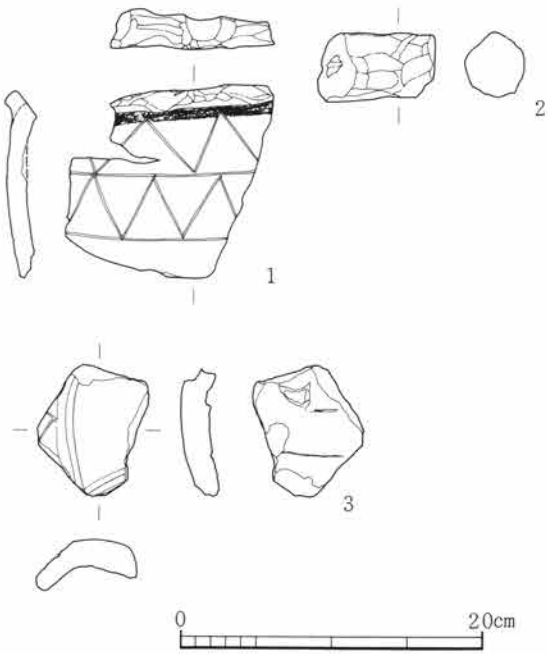


第236図 12号墳出土形象埴輪実測図(1)

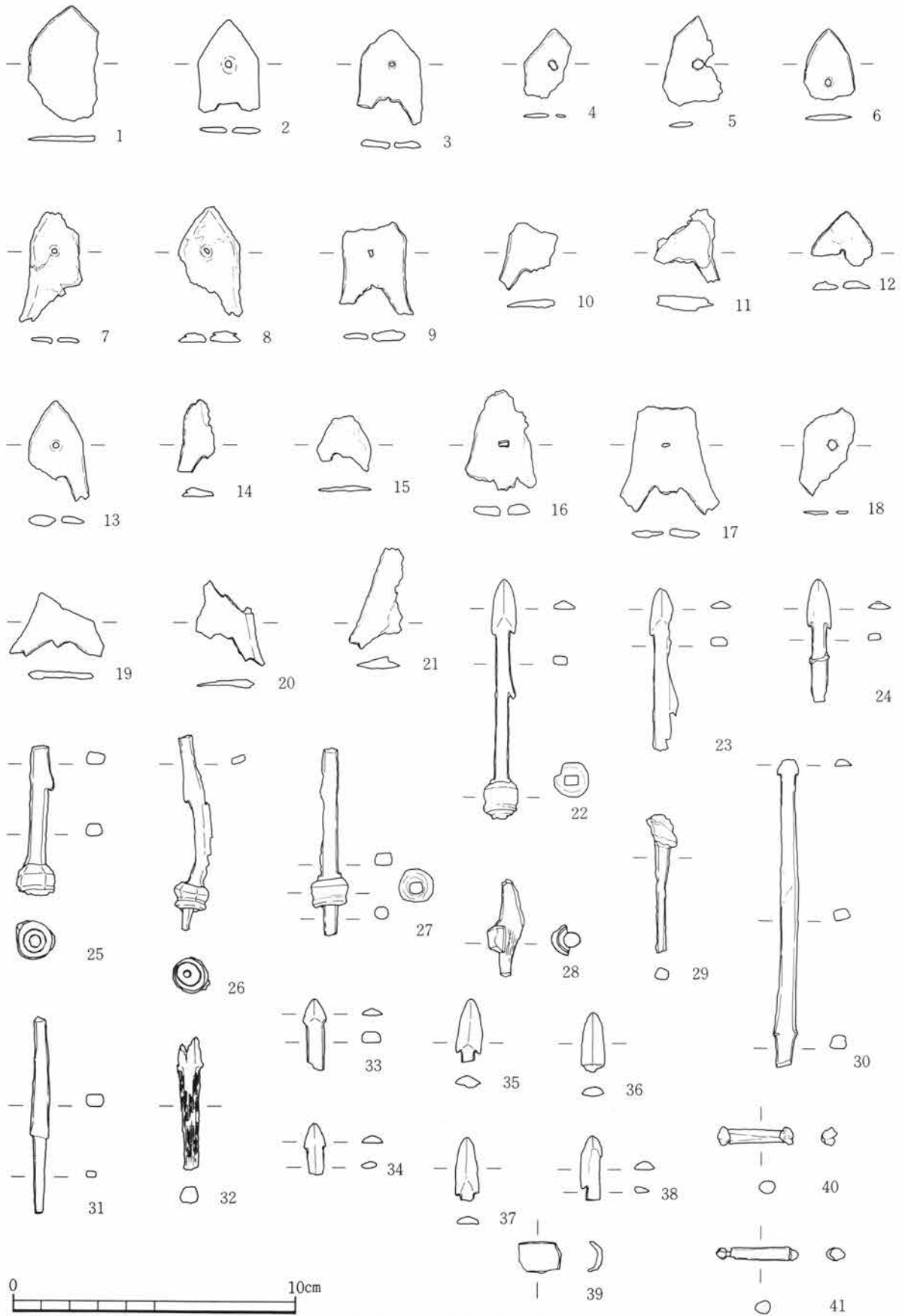
III 検出された遺構と遺物



第237図 12号墳出土形象埴輪実測図(2)

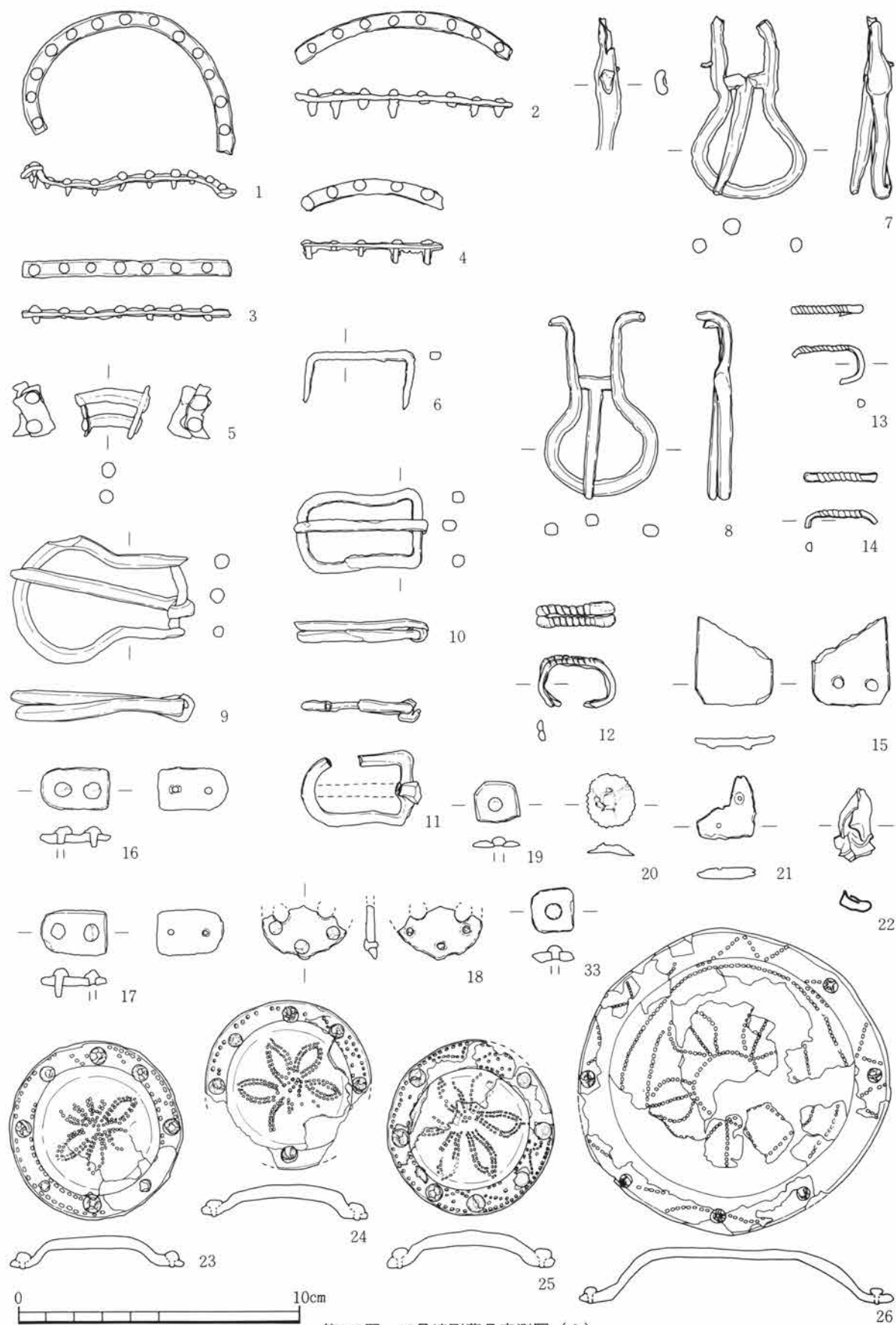


第238図 12号墳出土形象埴輪実測図(3)

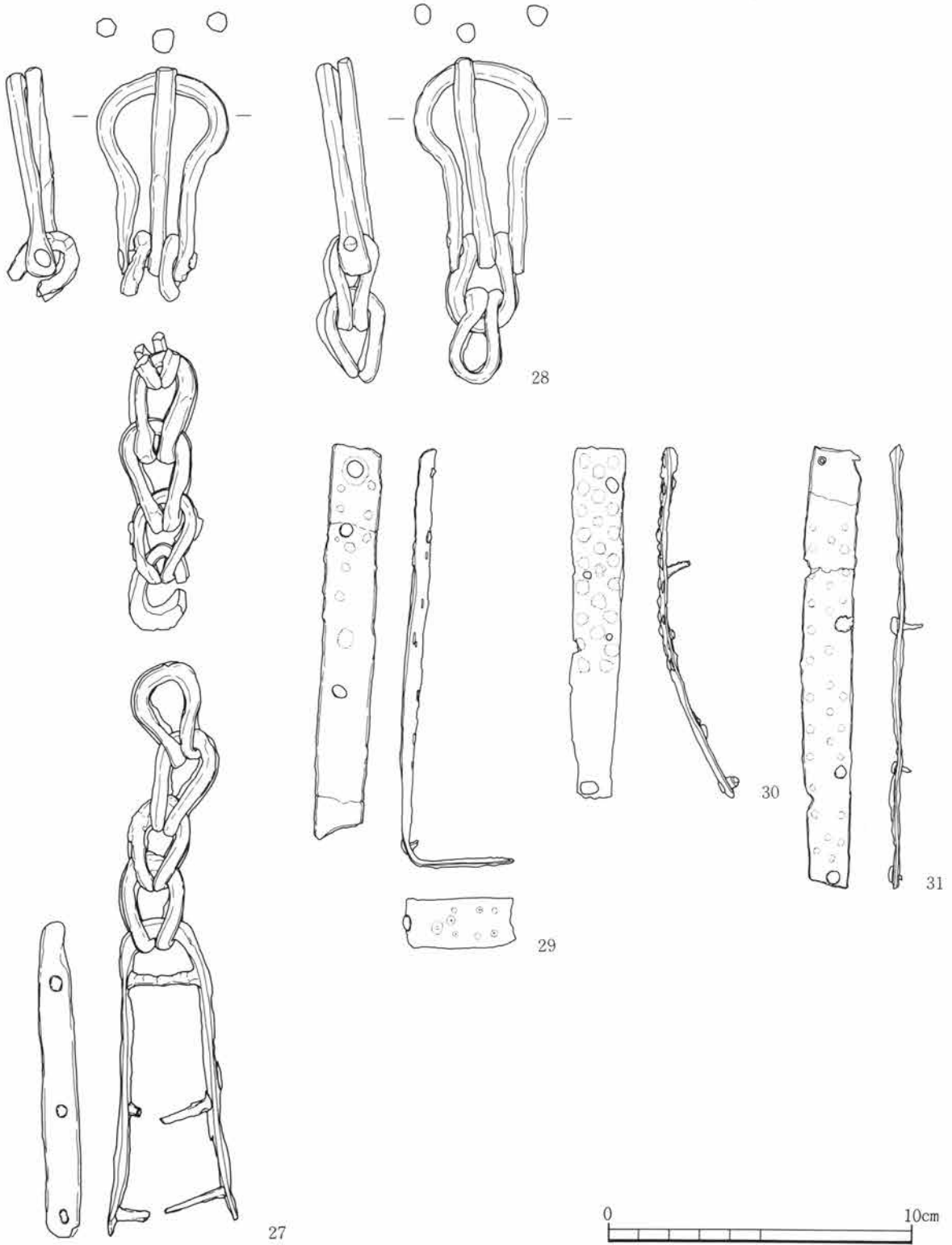


第239図 12号墳副葬品実測図(1)

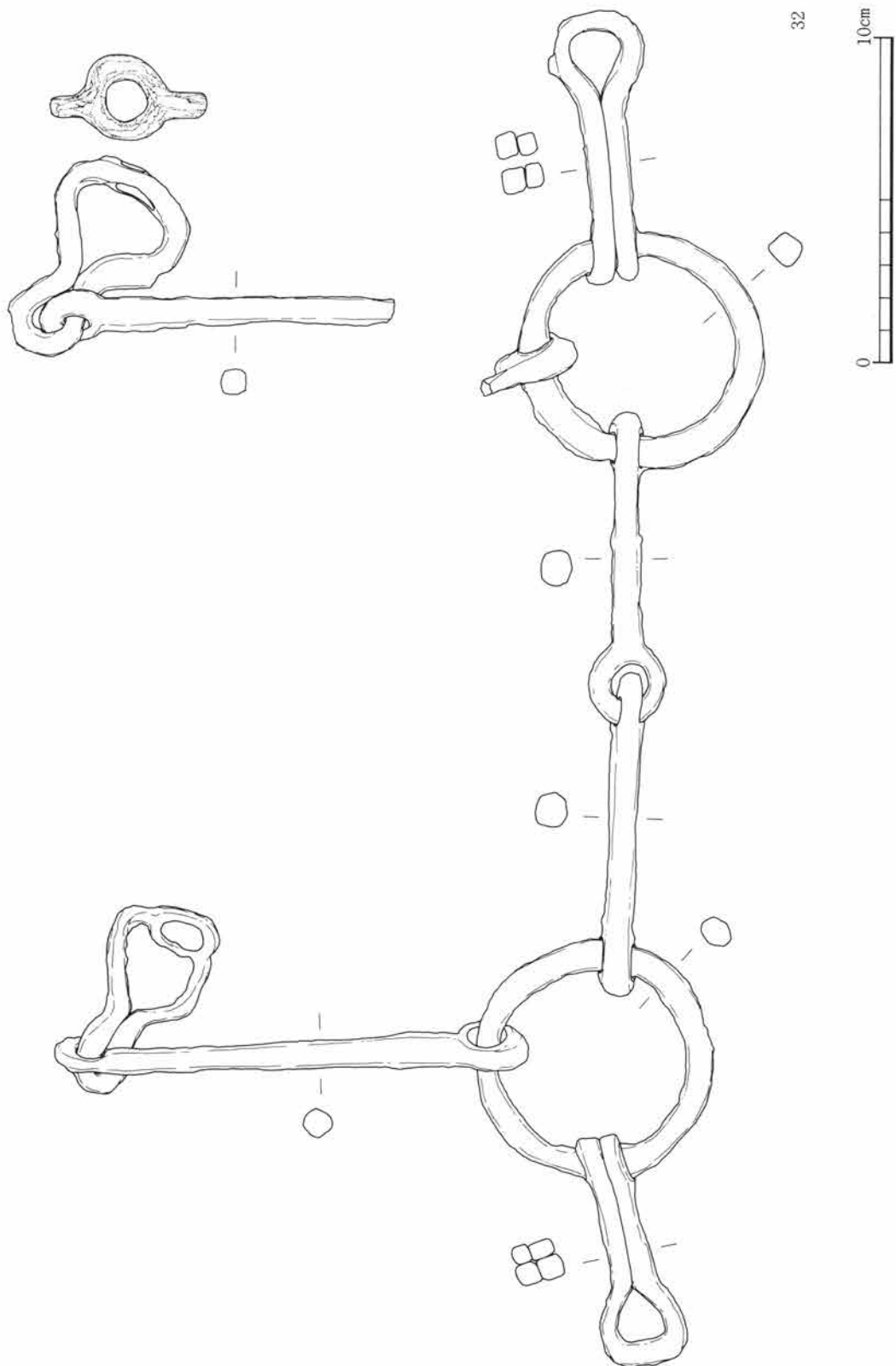
III 検出された遺構と遺物



第240図 12号墳副葬品実測図(2)

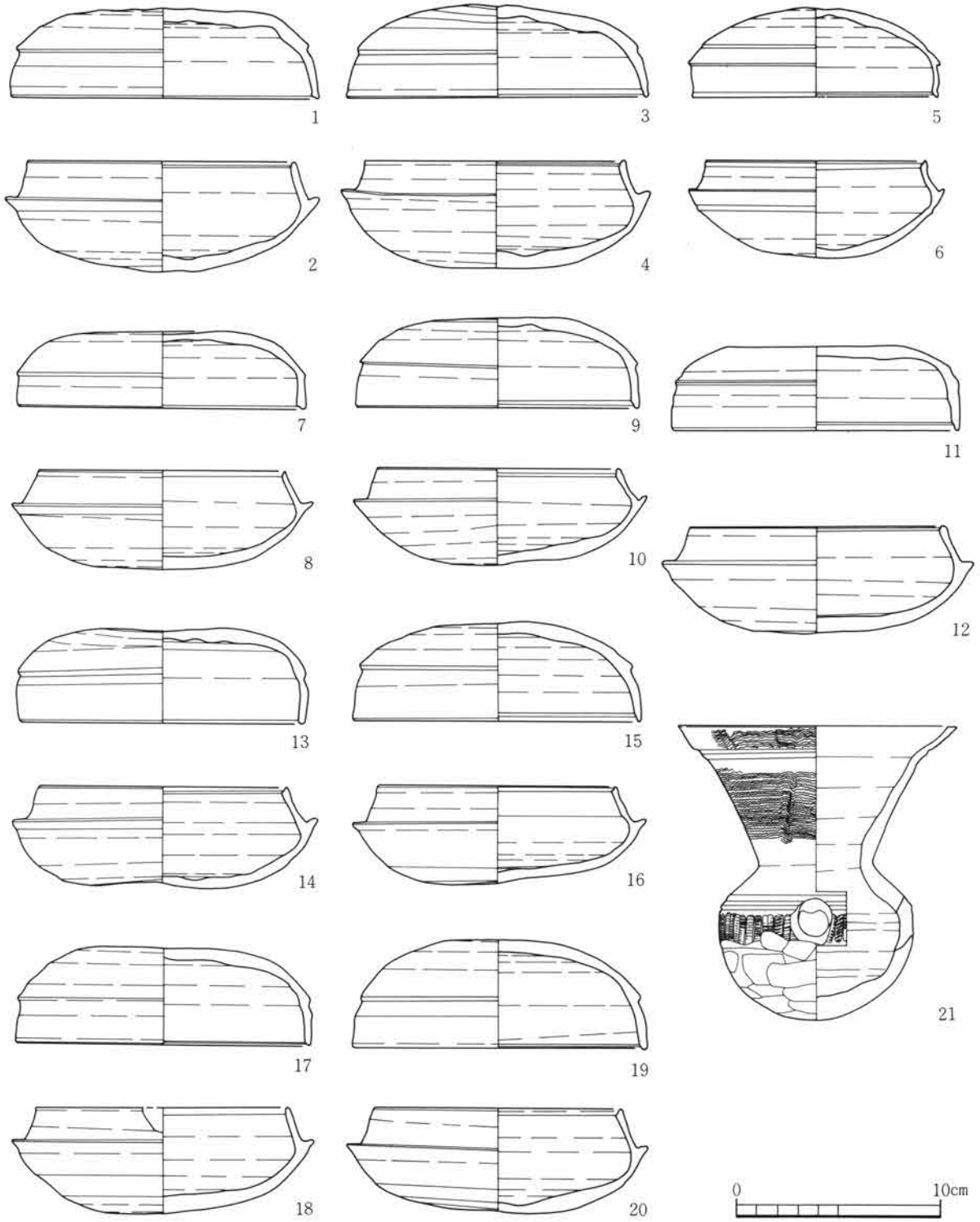


第241図 12号墳副葬品実測図(3)



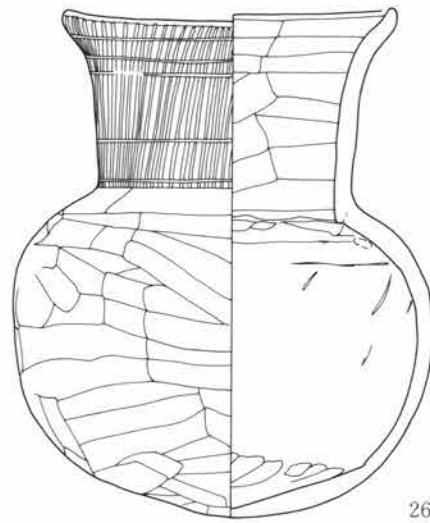
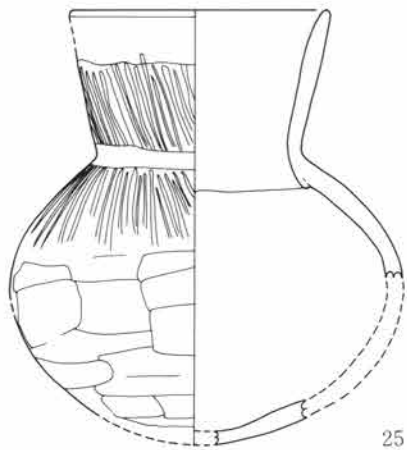
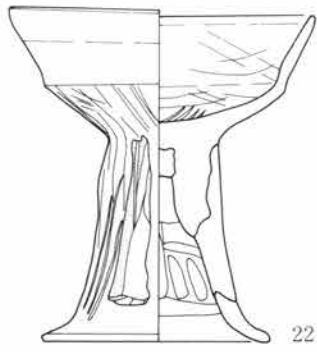
第242図 12号墳副葬品実測図(4)

4. 古墳時代の遺構と遺物



第243図 12号墳副葬品実測図(5)

III 検出された遺構と遺物



第244図 12号墳副葬品実測図(6)



14号墳《第246～253図、

図版82～84・153・166・167》

1. 位置と調査前の状態

O-47ポイント周辺に位置していた。西側緩傾斜地の先端部に立地しており、標高は160～162m前後である。発掘調査を行った古墳の中では最も西側に在るが、分布調査の結果では、古墳群は更に北及び西方向に展開していることが確認されている。北西には16号墳・西側にはF号墳が近接して営まれている。北側と東側は地辻りに伴い5m近く陥没しており、西側は宅地造成の為に削平されていたが、封土を失った石室が露出していたので、古墳であることは一目瞭然であった。

2. 外部施設

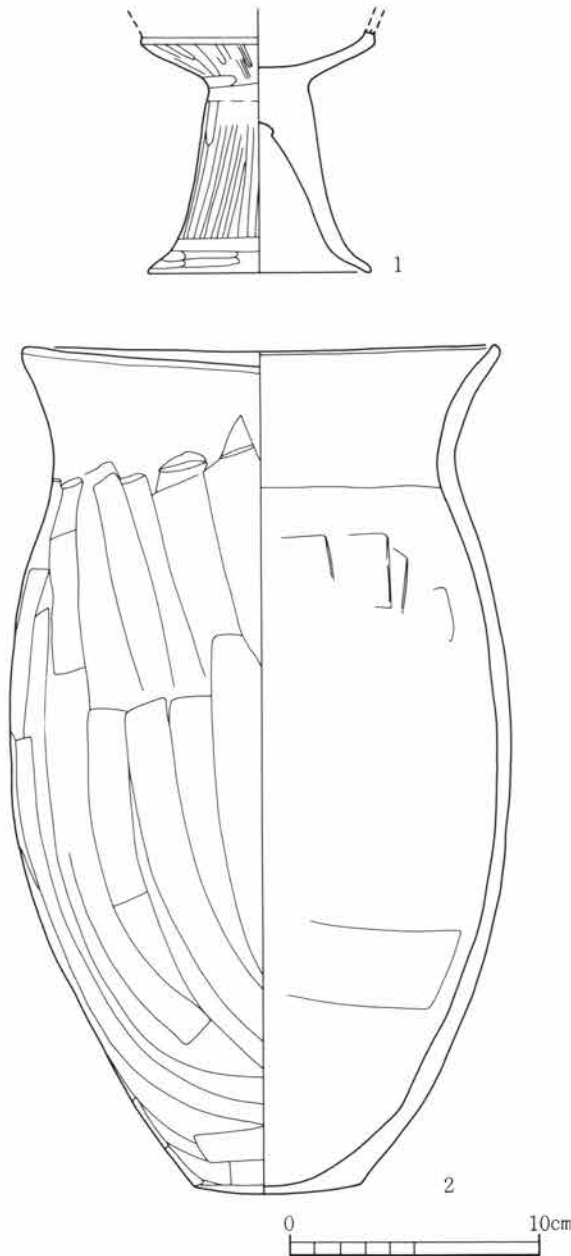
周堀については、東側の陥没地点で部分的に検出されたが、削平が著しく、詳細は不明である。南東部では、浅間B軽石が薄く堆積した周堀の痕跡が確認されており、外縁部径は29.6mを測るが、内側の立ち上がりは不明瞭であった。

石室開口部前には、台形状を呈すると考えられる前庭が検出されたが、左側は削平されてしまっており全貌は把握できなかった。右側斜辺の石組が、羨道右壁から80cm程外側に4石残っていた。羨道とほぼ同じ走向で、110cm検出したが端部は確認できなかった。底面は手前に向かって傾斜しており、現状で基壇のテラス面よりも30～40cm程下がっていた。基壇は、地山を削り出して付設していたが、全体の形状及び規模は確認できなかった。

墳丘は、封土の大部分が削平されていたが、南側及び陥没した北東部に葺石の根石が残っており、径約16mを測る。

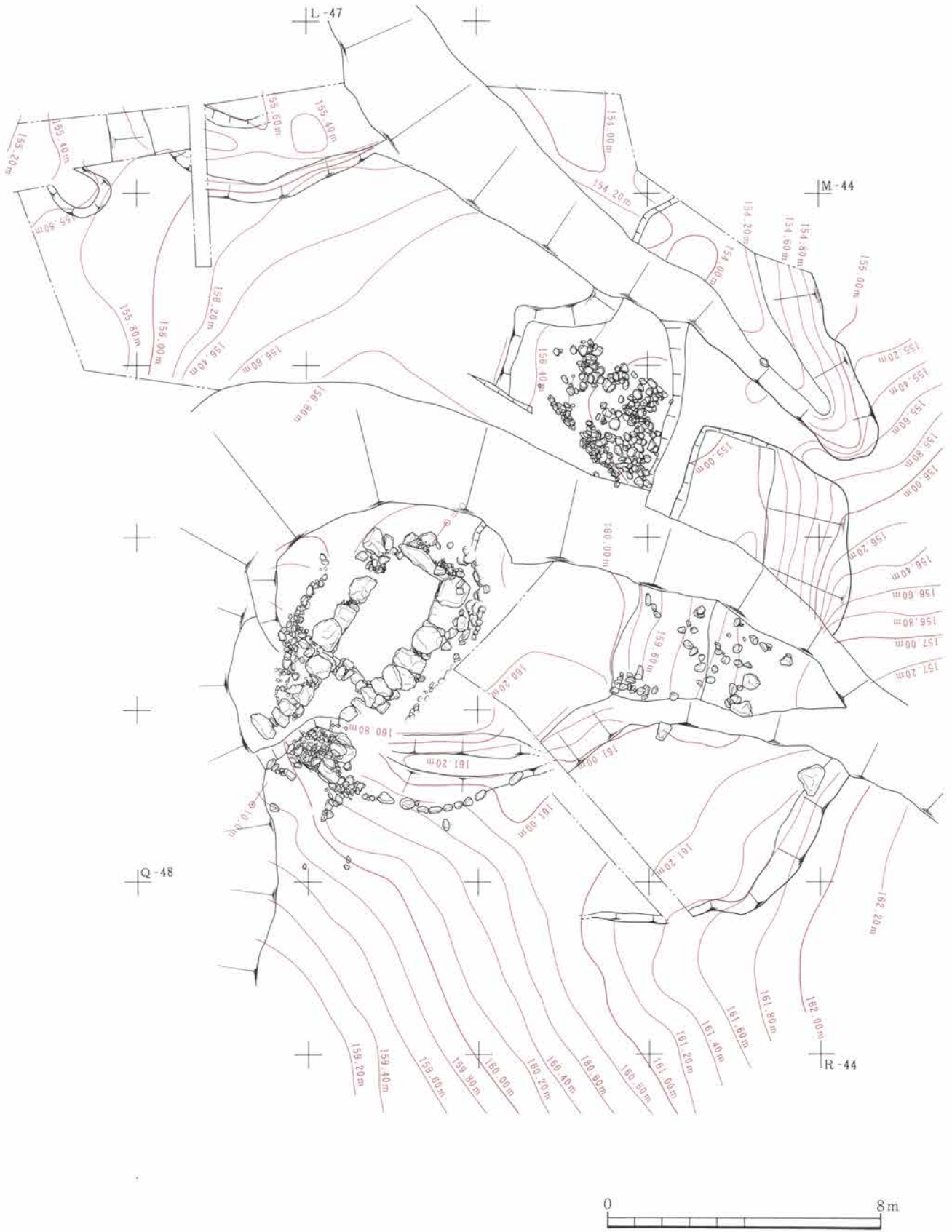
3. 内部施設

石室は、葺石根石が描く円のほぼ中央に位置し、南南西方向に開口する両袖型の横穴式石室である。羨道の半ばから奥が120cm程陥没していたが、現状で、羨道よりも玄室の方が80cm程長い。現状におけ



第245図 12号墳出土遺物実測図

III 検出された遺構と遺物



第246図 14号墳墳丘実測図

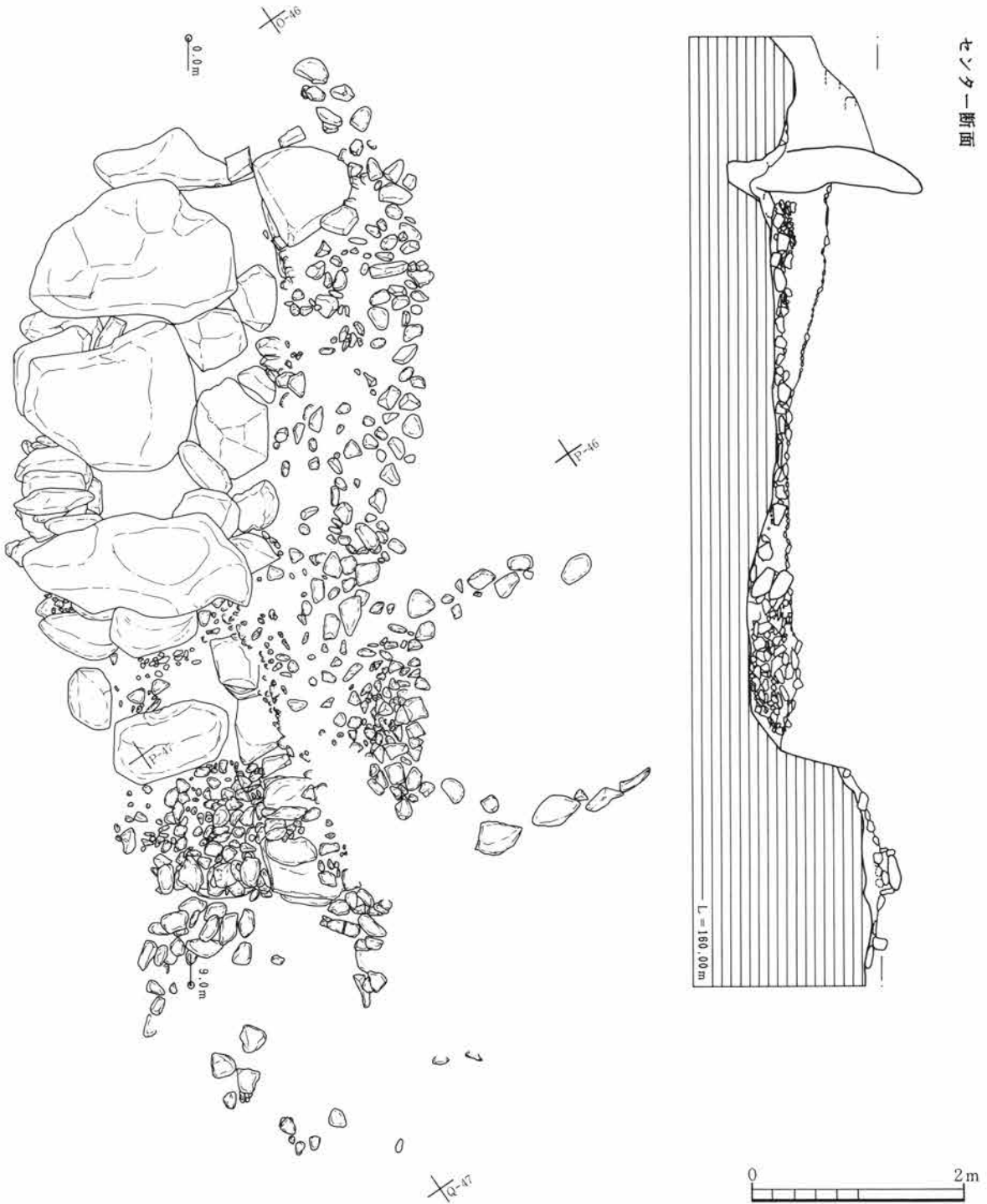
4. 古墳時代の遺構と遺物

る各部の計測値は以下の通りである。

石室全長	680cm	開口方位	S-35°-W
玄室長	364cm	羨道長	313cm
玄室奥幅	145cm	羨道奥幅	119cm

玄室前幅 165cm 使用尺 ≒35cm

玄室プランは、間口に対して奥行きの著しく長い
 方形で、両者の比は1：2である。左壁は奥の石が
 取り去られていたが、ほぼ直線的で、右壁には胴張

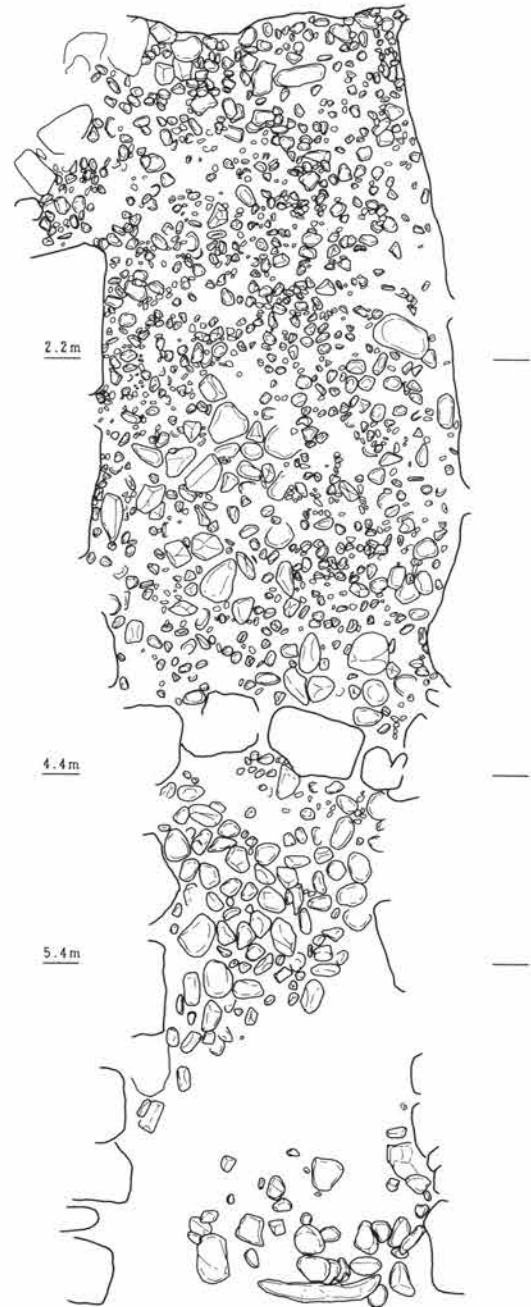
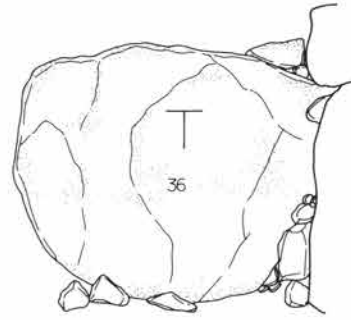


第247図 14号墳石室裏込め被覆実測図

III 検出された遺構と遺物

14号墳石室左壁材法量一覧表

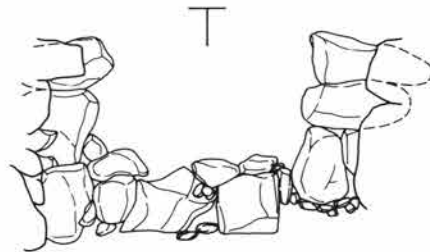
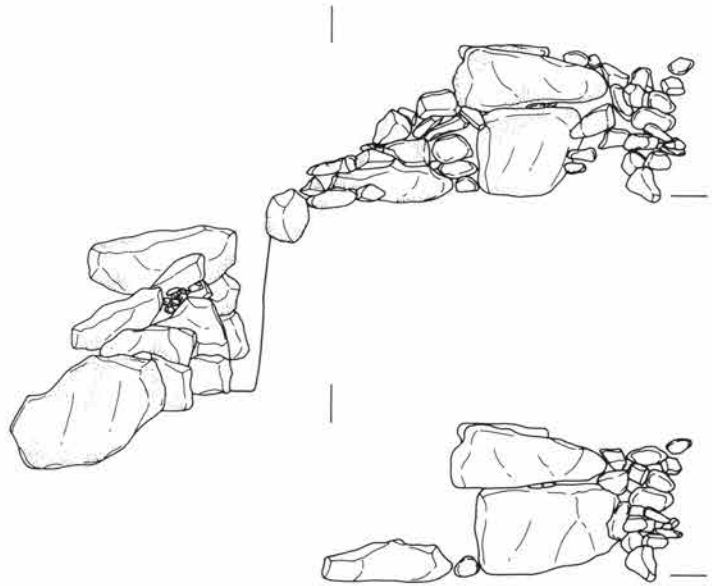
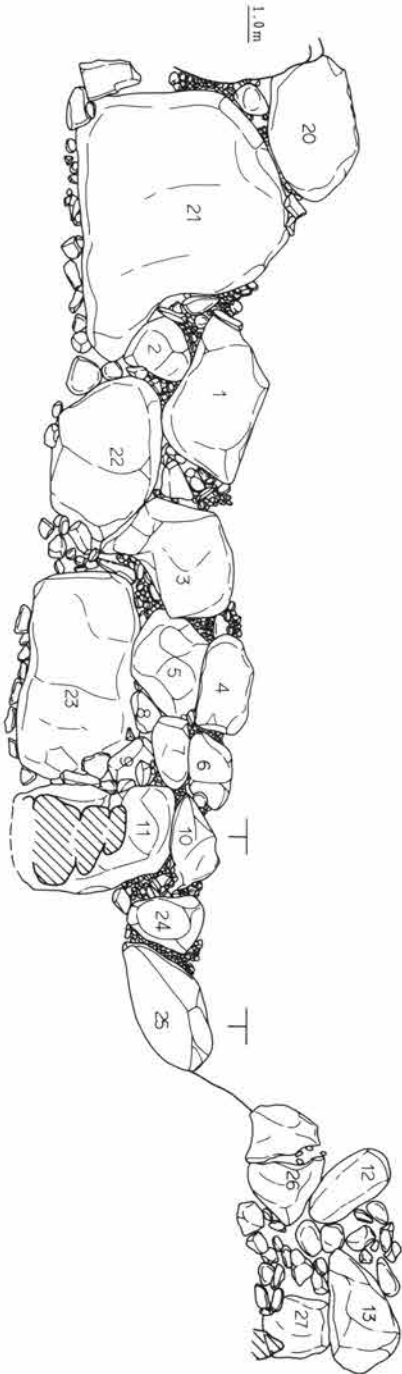
No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
14	30	40	55	☆		
15	40	65	55		☆	
16	30	65	80	☆		
17	30	55	100	☆		
18	20	35	50	☆		
19	35	100	85		☆	
28	35	63	87	☆		
29	35	59	60	☆		
30	43	76	40			☆
31	54	66	55		☆	
32	47	64	77	☆		
33	62	61	72	☆		
34	69	98	91		☆	
35	77	97	80		☆	
36	158	178	52			☆



第248図 14号墳石室展開図

14号墳石室右壁材法量一覧表

No	上下	左右	奥行き	小口	横積	平積
1	60	90	85		☆	
2	30	30	65	☆		
3	84	65	96	☆		
4	30	55	75	☆		
5	40	55	95	☆		
6	25	40	70	☆		
7	25	40	60	☆		
8	12	25	30	☆		
9	20	35	60	☆		
10	30	45	60	☆		
11	40	45	80	☆		
12	30	45	60	☆		
13	40	60	80	☆		
20	50	98	88		☆	
21	114	159	95			☆
22	60	92	78		☆	
23	65	111	55			☆
24	40	35				
25	48	68		☆		
26	42	64	73	☆		
27	40	48	85			



III 検出された遺構と遺物

りが認められた。羨道プランは、左壁の残りが芳しくない為には断定できないが、間口には長さ60cm・幅20cmの扁平な石が横長に据えられており、右壁から110cm左側までは前庭の底面が確認されることから、矩形を呈していたものと考えられる。

玄室の床面は、掘り方の底面に20~30cm大の河原石を敷いた上に、玉石を厚さ20cm程敷き詰めて整えていたと考えられるが、大部分の玉石は奥部に掻き集められていた。

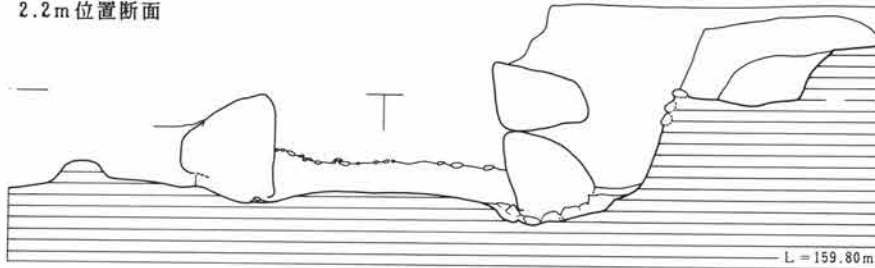
副葬品は、玄室奥部に寄せ集められた玉石の間に散在して出土した。

閉塞は、間詰め技法によって充填されており、羨

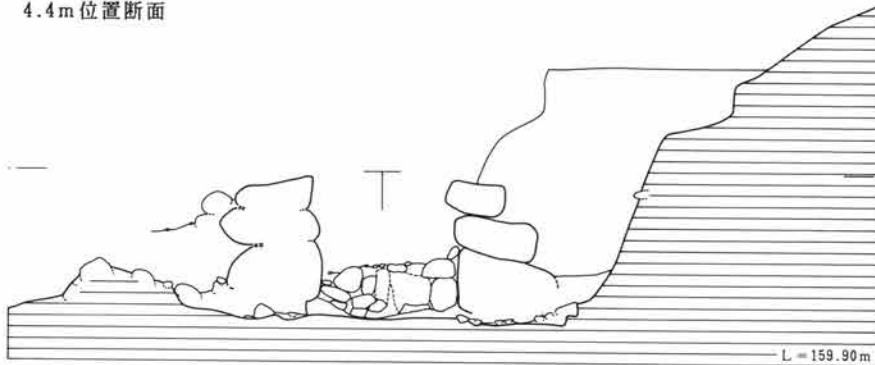
道奥部の梱石の上部には、奥の石積み高さが40cm程の高さに2段残っていた。羨道部の床は明確な面が捉えられなかったが、間口に据えられた梱石は前庭面よりも10cm程突出していた。

石室の掘り方は、玄室部の右側では整地面から1m程の深さまで掘られていたが、羨道部では60cm前後の深さしか無かった。平面形は隅丸長形状を呈しており、法面は70°前後の傾斜であった。底面は中央部がややこんもりと盛り上がり、根石の設置部分が一段と低くなっていた。石室は、掘り方の中軸よりもやや南東寄りの、斜面高位部に寄せ掛けられて構築されていた。

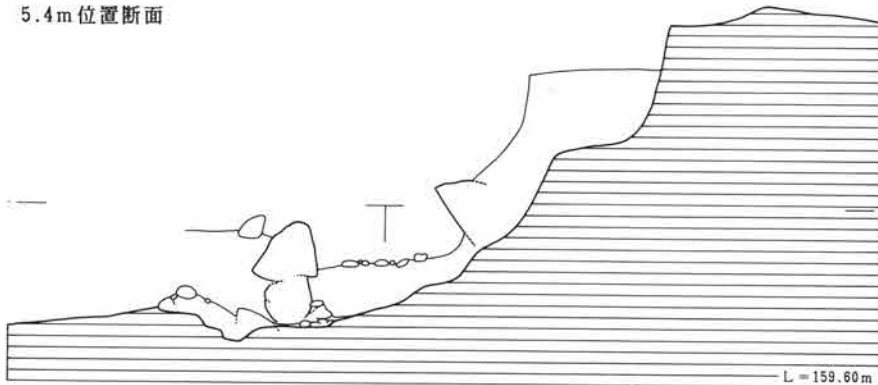
2.2m位置断面



4.4m位置断面



5.4m位置断面

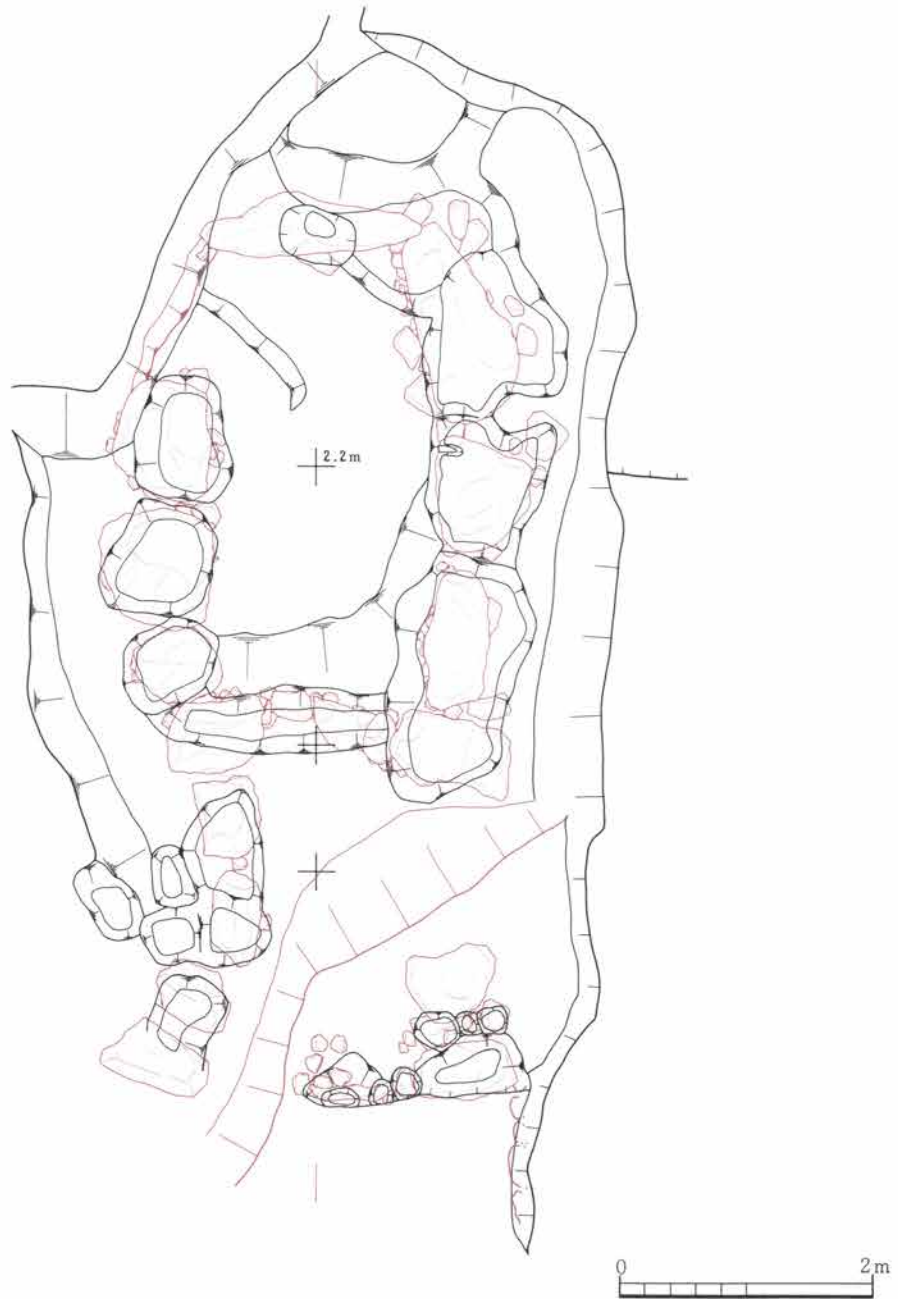


第249図 14号墳石室断面図

壁体及び裏込めは、粗粒安山岩の直方体状の亜角礫によって構成されていた。奥壁は、 $180 \times 140 \times 50$ cmの石の平面を横長にして垂直に立てた鏡石のみが残っていた。上端部にずれ落ちた天井石が架かっていたが、本来的には2段積みであったと思われる。側壁の根石も、平面を横長に使用して据えられていたが、右壁の袖石は縦長に置かれていた。また、胴張りの認められる玄室右壁の根石が3石であったのに対して、直線的な左壁には4石が使われていたこ

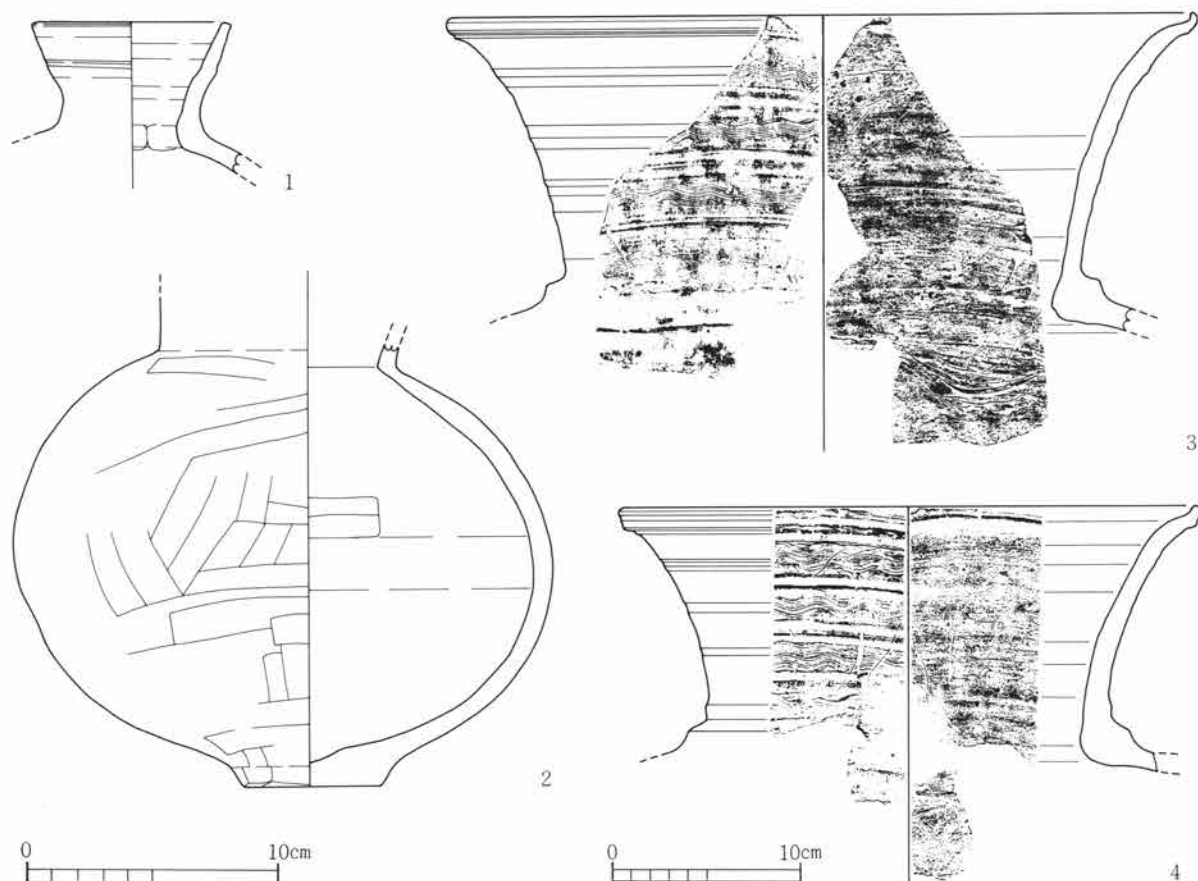
とが掘り方の調査で判明した。壁面は自然石の乱石積みによって構成されており、根石の他は比較的小振りの石を多く使用していたにも拘わらず、それぞれの間差し込まれた石が占める部分が多かったのが特徴的である。なお、左壁はほぼ垂直に積み上げられていたが、右壁には 10° 前後の転びが認められた。

裏込めには、拳大～人頭大の亜角礫を使用していたが、被覆の石積みは認められなかった。



第250図 14号墳石室根石・掘り方実測図

III 検出された遺構と遺物



第251図 14号墳出土遺物実測図

天井石は、羨道部のものは除去されてしまっていたが、玄室部の3石が辛うじて残っていた。大きき的には、長さ200～230cm・幅100～140cm・厚さ60cm前後の石を使用しており、奥寄りの2石と手前の石の間には60cm程の隙間が有ったので、玄室部には4石が架け渡されていたものと思われる。

4. 出土遺物

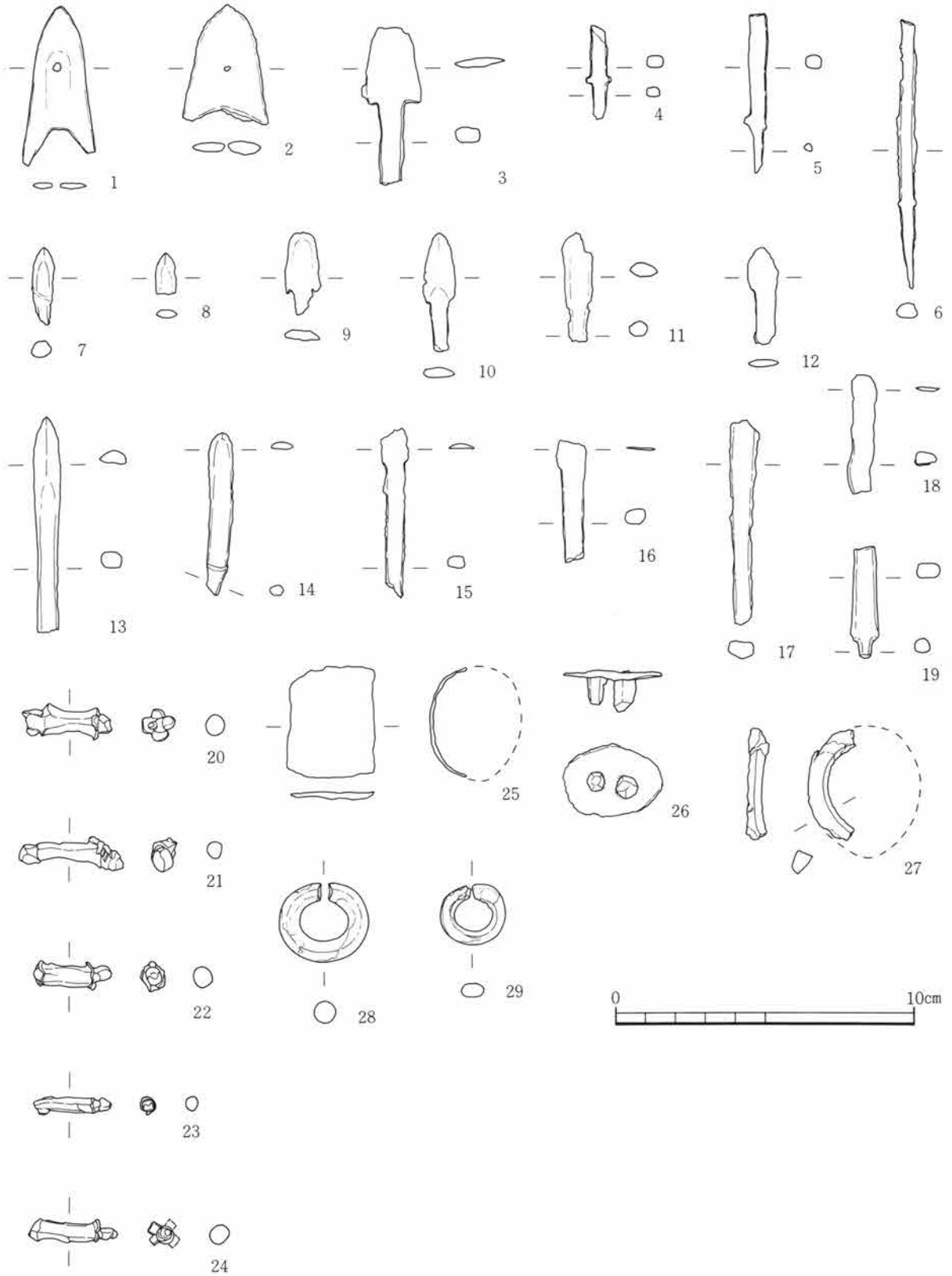
玄室内からは、人歯・骨片と共に鉄鏃と弓の飾り金具・刀装具・耳環・馬具・ガラス玉・水晶製紡錘玉及び古銭が出土した。石室内が荒らされていた為に、埋葬状態を推し量れる様な資料は得られなかった。鏃には、無茎・短頸・長頸鏃が認められる。弓の飾り金具は5点出土したが、弓の大きさや装着状況は不明である。刀装具には銀象嵌が施されている資料が認められたが、小破片のたの全体の文様構成は明らかでない。耳環は大小2種類が出土した。馬具は、いずれも鉄地金銅張りで、銀鉾が打

たれており、楕円形の雲珠と杏葉及び瓜形飾り金具が確認された。雲珠は大小2種類が有り、小型の物は4脚半球形で、鉢の表面に花卉文が表され、周縁部には3条の沈線が施されている。大型の物も脚数は不明であるが同様な造りである。杏葉は花形を呈し、少数の大型鉾が打たれ、九曜文が表された金銅板が固定されている。

古銭は、寛永通宝9・文久永宝2・開元通宝1・半銭2（明治16・17年）・1銭（明治18年）・不明1である。

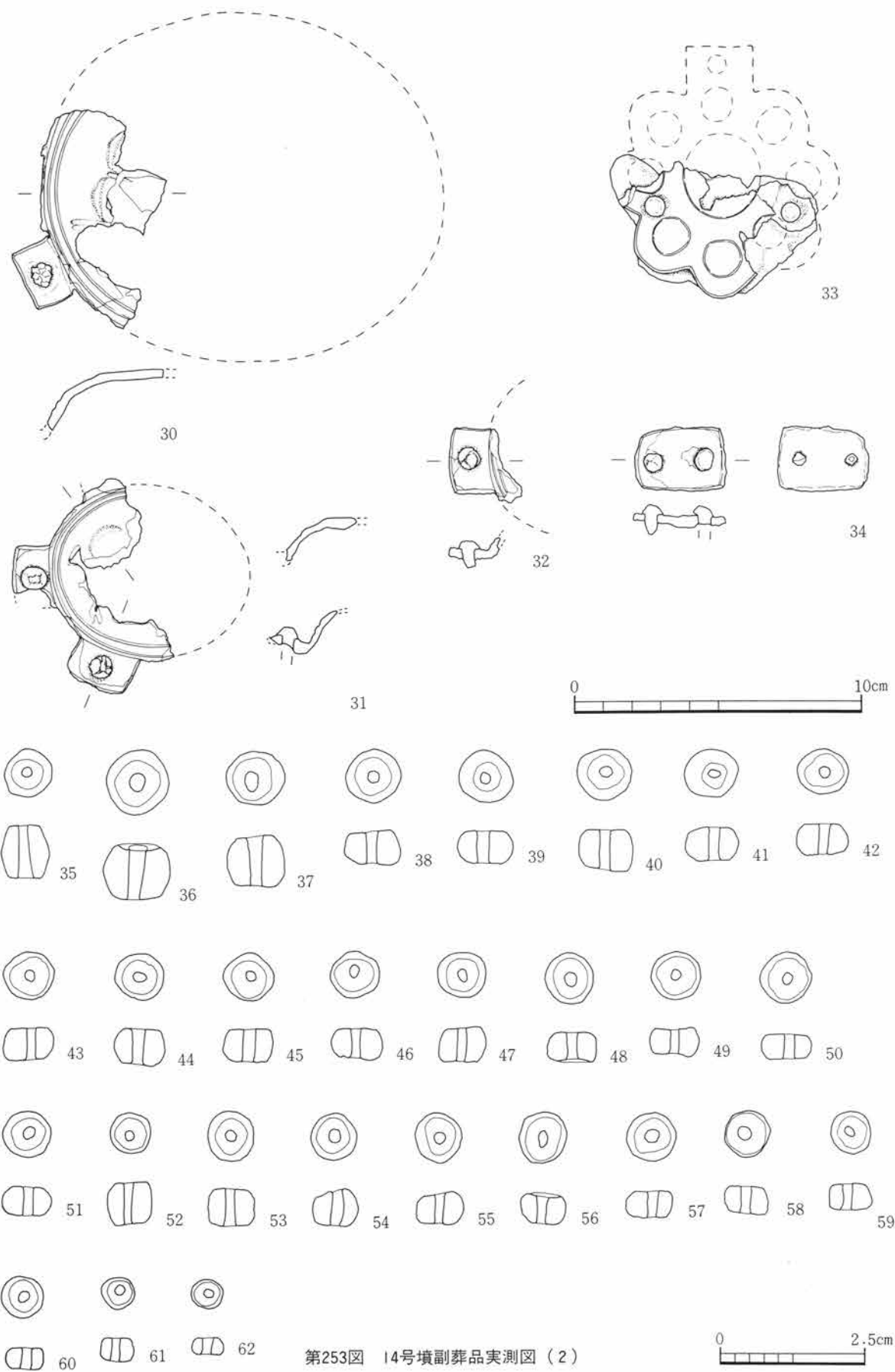
5. 備考

杏葉は、小野山節氏分類の、IV期第二段階（580～600年）に相当すると思われる。また、頸部補強帯付須恵器甕もほぼ同様の年代観を示すことから、本古墳の築造時期については、6世紀後半代に求めることができると考えられる。（飯塚）



第252図 14号墳副葬品実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第253図 14号墳副葬品実測図(2)

15号墳《第254～257図、図版85・86・167》

1. 位置と調査前の状態

V-38ポイント周辺に位置していた。南北両側が地汙りに伴って2～4m程陥没しており、幅11m程の帯状に取り残された部分に石室の残骸と考えられる石が残っていた為、発掘調査前の段階で古墳と認定した。西側緩傾斜地に立地しており、標高は164m前後である。古墳群の中では、南西の隅に占地しており、北東側に11号墳、北側に12号墳が構築されていた。

南側の崖の斜面には果樹園の耕作に伴う石垣が積み重ねられており、地権者の談によると、先代が、本古墳の石材を多数利用して築いたものであるとのことであったが、出土遺物については聞き及んでいないとのことであった。また、石室の南西側には、東西方向5m・南北方向5.6mの範囲に互って10～20cm大の礫が敷き詰められていた。当初は、古墳構築時の積石或は石室に伴う礫地形の可能性を考えて慎重に調査したが、内部から近代の瓦片が出土したことによって、古墳とは全く関連性を持たないことが確認された。

2. 外部施設

本墳は削平が著しく、封土・石室の遺存状態が極めて悪い上に、残された石室の内部に梨が植樹されており、墳形や規模、石室のプラン等も確定できない状況であった。

周堀については、石室の中央部から10m程東側の地点で、長さ8m程の三日月状の落ち込みが検出された。小規模な地割れが重複しており、形状や規模に不明確な点を残すが、埋没土中に浅間B軽石が多く混入していたことから、古墳の周堀である可能性が高いと考えられるが、本墳に付随するものであるか否かについては明らかにし得なかった。

3. 内部施設

粗粒安山岩の自然石を使用した両袖型横穴式石室であり、南西方向に開口する。玄室と羨道とは左右の袖及び30cm程の円礫4石からなる梱石によって区分されていた。羨道部の前半及び玄室の奥側は破壊

されており、残存状態は劣悪で、石室壁材の根石及び裏込めに使用された石材の一部が検出されたのみである。左壁は羨道最奥部の1石と袖石・玄室壁材2石、右壁は袖材と玄室用材2石が辛うじて残っていたが、両側とも玄室用材の内の1石は原位置を保っていなかった。

玄室の床面には30cm前後の円礫を舗石状に並べ、その上に玉石を重ねて敷いていたようであるが、著しく攪乱されており、厚さは不明である。羨道部には舗石状の石が厚さ20cm程残っていたが、明確な床面を検出することはできなかった。

石室の掘り方は、壁面よりも130～150cm外側で、ローム層中に掘り込まれた部分のみが確認されたが、底面は蒲鉾状に中央が盛り上がり、壁際が布掘状に1段深く下がっていた。全体の形状は明らかにし得ないが、玄室部よりも羨道部の幅を狭めていた。

壁体及び裏込めには粗粒安山岩の亜角礫が使用されており、両方の袖は石の小口面を縦に立てて、壁は平面を横長に用いて構成されていた。根石の設置に当たっては、布掘状の掘り方の底に小礫を敷き詰めていた。

以上のような状況であり、石室の形状や規模を明らかにすることはできない状態であった。限られた資料から得られたデータは次の通りである。

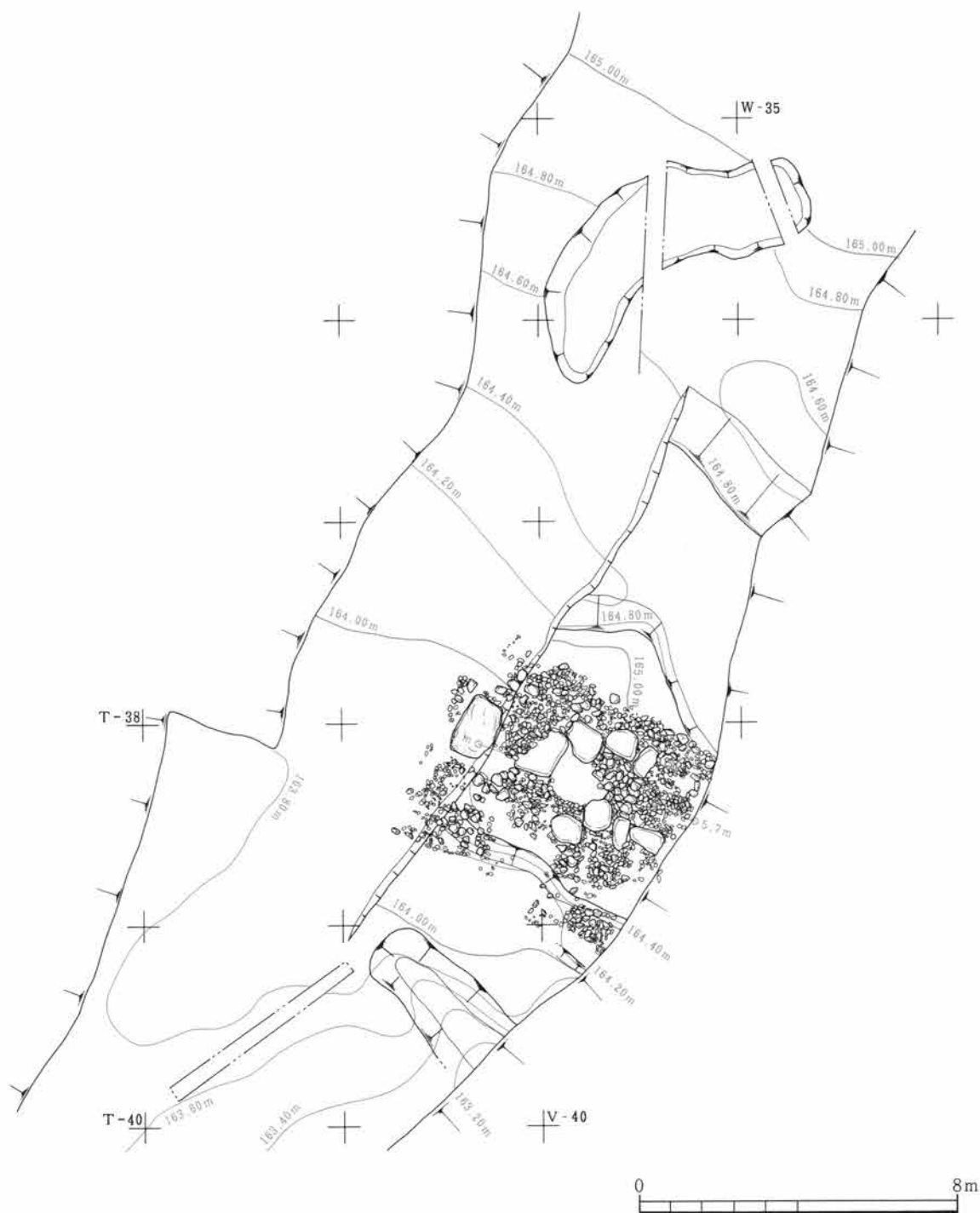
羨道幅は床面の石の残存状態から推して145cm程と考えられる。

玄室前幅は175cmを測り、左右の袖はそれぞれ壁から35cm・20cm突出しており、玄室入口幅は120cmを測る。玄室の幅は、床面の範囲から推して、156～182cmを想定することができ、中央部がやや張り出す傾向が認められた。

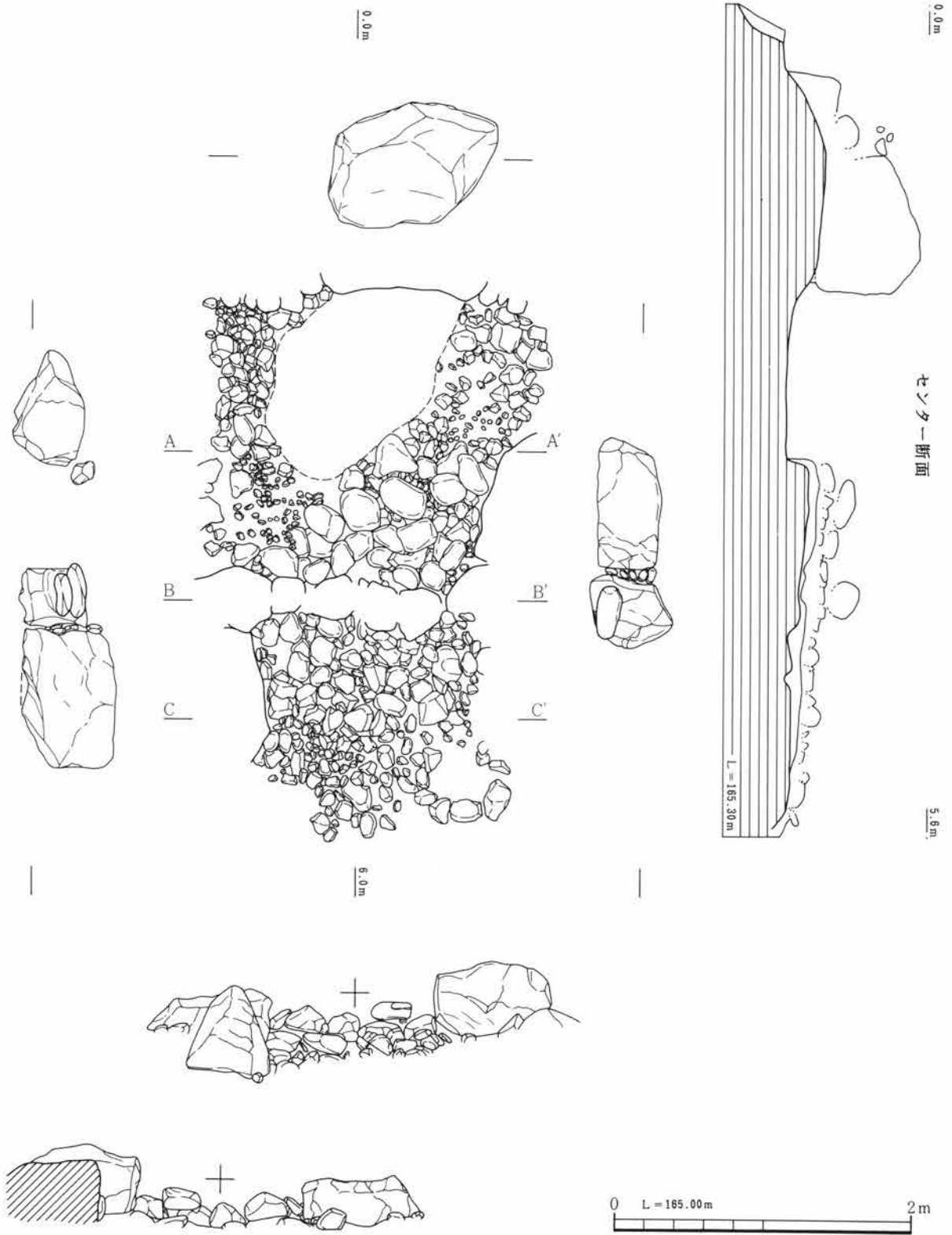
4. 出土遺物

玄室内から、金銅製耳環1・大刀1・ハ1と不明金属片5が出土した。埴輪については、石室の周囲で小破片を数点採集したのみで、原位置に樹立されていた物は全く無く、破片の帰属についても判然としない。

III 検出された遺構と遺物

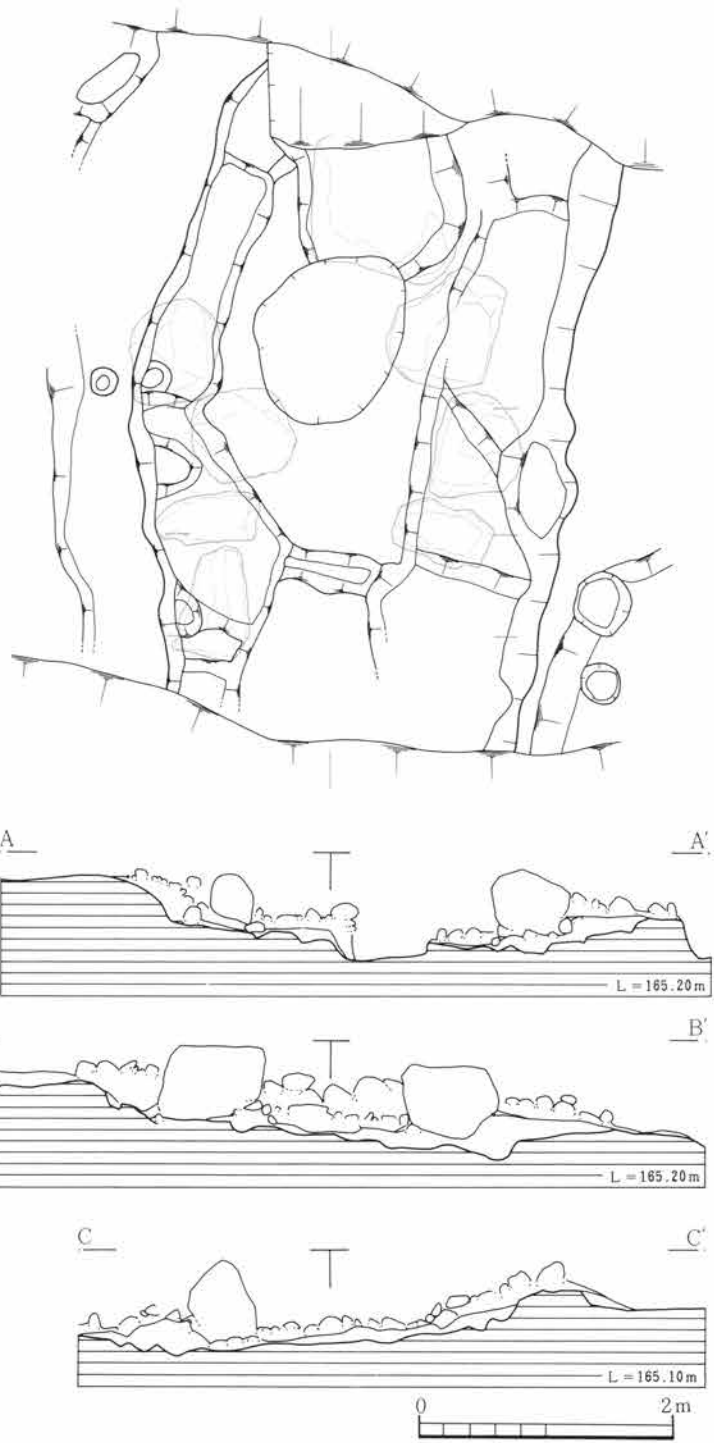


第254図 15号墳墳丘実測図

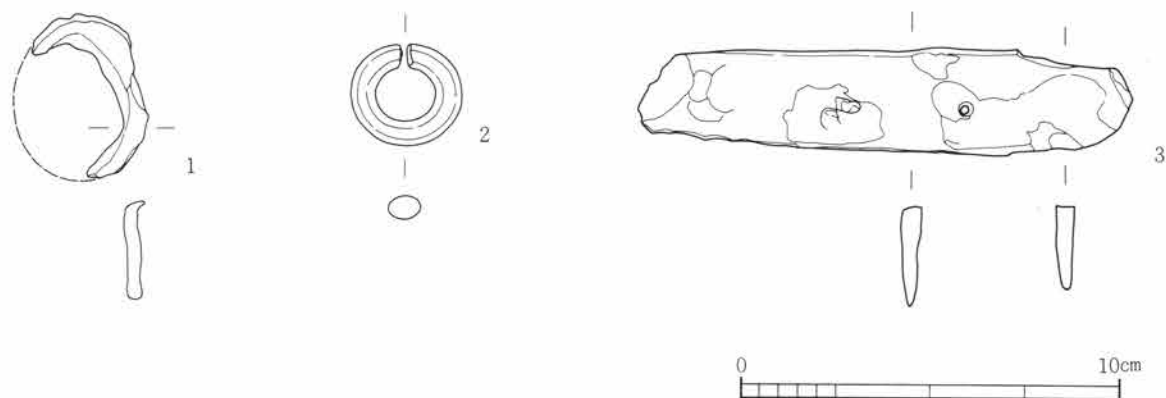


第255図 15号墳石室展開図

III 検出された遺構と遺物



第256図 15号墳石室根石・掘り方実測図



第257図 15号墳副葬品実測図

17号墳《第258～272図、図版87～89・134～137・

153・154・167・168》

1. 位置と調査前の状態

H-44ポイント周辺に位置していた。調査区北西部の傾斜変換点付近に在り、傾斜角40°程の急な斜面が北西緩斜面に移行する部分に立地している。標高は153～155m前後である。墳丘の上部は削平され、梨畑として利用されており、石室は天井石が露出し、内部には葦石に用いられた河原石がびっしりと詰め込まれていた。発掘調査を行った古墳の中では北西隅を占めており、急斜面を避けた為に、12・14号墳とは15～25m程の間隔を空けるが、分布調査の結果では更に北側方向にも隣接して展開していることが確認されている。

2. 外部施設

ローム層中に掘り込まれた周堀の下部が検出された。外縁部は30°近い斜面に当たっているため明瞭な端部を認定し得ない部分が残るが、上幅は最大で7m・下幅1.8～2.4m・深さは最大で160cm前後である。断面形は凹レンズ状を呈し、内縁部は緩やかに立ち上がりながら基壇葦石の根石へと連続していた。底面はほぼ平坦であったが、斜面高位の南側と下位の東側とでは120cmのレベル差が認められた。確認された範囲での外縁部上端での径は約28mであるが、全体を環状に取り囲んでいたものか或は扶状に圍繞し

ていたものかは確認できなかった。

基壇の周縁部は周堀の内縁と連続しており、掘り残されたローム層に葦石が葺かれていたが、テラス面の下部からは、いわゆる埋没溝が検出された。葦石は70°の傾斜で80cm程立ち上がっており、30～40cmの根石の上にやや小振りな石を積み上げていた。基壇葦石根石での径は18.5mを測るが、北西斜面に位置するにも拘わらず、北西方向がやや長い楕円形状を呈する。幅約160cmのテラス面は僅かに外傾しながら墳丘を圍繞しており、周堀底面よりも最大で約60cm高かったが、埋没溝の底面は50cm程下がっていた。断面形は逆台形を呈すると考えられるが、保存上の観点から墳丘部の葦石を外さなかったため、内縁部は確認していない。底面には多少の凹凸が認められ、北側に行くにつれて徐々にレベルが下がり、北半部では立ち上がりを検出できなかった。従って、埋没溝が墳丘を環状に圍繞していたものか或は扶状に掘られていたものなのかは確認できなかった。なお、埋没溝の埋土中から須恵器高坏(17・18)が出土している。鉄鏝

石室開口部の前面では、テラス面が40cm程下がっており、平行四辺形状の前庭が付設されていた。左側の石組みは、羨道の左壁から70cm程外側で、石室の開口部に対して120°程開いており、長さは180cmを測る。右側の石組みは、右壁から80cm程外側で、100°

III 検出された遺構と遺物

程開き、長さは190cmを測る。開口部の2m程手前の右隅部分には、径約20cmの石が3石、底面に埋め込まれた状態で残っていた。底面には5°前後の傾斜が有り、奥側が20cm程高くなっていた。ほぼ全面に須恵器の破片が散乱していたが、故意に破砕されたものであるのか或は後に破片となったのかについては資料的に確認できなかった。

テラス面では、墳丘裾周りから100~120cm程外側に埴輪列が確認された。埴輪を樹立するに当たっては、基壇上面の土砂が流失しているために不明な部分も残るが、個別に、10cm程の深さで底径よりもやや大きめな穴を掘って据えられており、40~60cm前後の間隔を空けて配置されていた。なお、テラス面に樹立状態で残っていたものは円筒埴輪の基部のみであり、形象埴輪の破片は石室の左側に集中していた。

墳丘は、石室の開口方向である西側部分が技術上の制約と前面観を意識した為か、やや直線的になっていたが、全体としては比較的均整のとれた円形を呈していた。上半部は殆ど削平されていたが、70°前後の傾斜で葺石を葺かれた墳丘下部が、テラス面下に約80cm埋め込まれていた。葺石は、30~60cm大の粗粒安山岩の亜角礫の平面を外側に向けて据えて根石とし、その上にやや小振りな石を隙間なく積み上げていた。なお、埋設部の上部にもやや大きめな石が積まれていたが、作業単位を表す目地は認められなかった。テラス面内縁部での径は14.8mで、葺石根石での径は15.6mを測る。

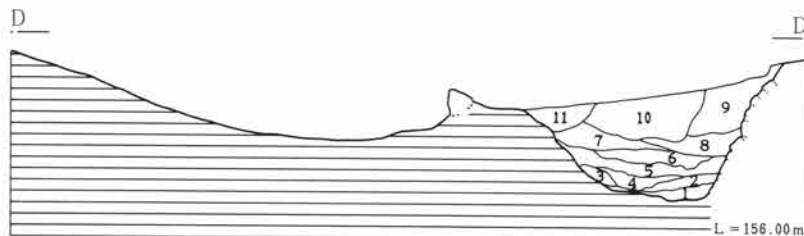
封土の調査は最小限に留めたが、石室の掘り方底面の範囲内のみは大規模な整地作業が行われ、裏込め被覆の石組は無く、山側の盛土の単位が水平に近いことは確認できた。

3. 内部施設

石室は、墳丘の葺石根石が描く円の中央よりもやや奥寄りに位置し、西南西方向に開口する両袖型の横穴式石室である。玄室と羨道とは左右の袖及び梱石によって区分されており、左右の袖にはずれが認められるが、玄室は羨道の長さのほぼ2倍である。玄室プランは、奥壁面の凹凸が大きく、左右の壁には胴張りが認められるが、間口に対して奥行きが著しく長い長方形で、両者の比はほぼ1:2.7~2.9である。なお、右壁はやや直線的であるが、左壁中央部に最大幅をとる胴張りプランである。羨道は、間口部幅108cmに対して奥幅134cmを測り、奥がやや広がっている。各部の計測値は以下の通りである。

石室全長	748cm	開口方位	S-75°-W
玄室長左	470cm	羨道長中	262cm
玄室長中	486cm	左袖長	23cm
玄室長右	515cm	右袖長	48cm
玄室奥高	220cm		
玄室前高	147cm	使用尺	≒35cm

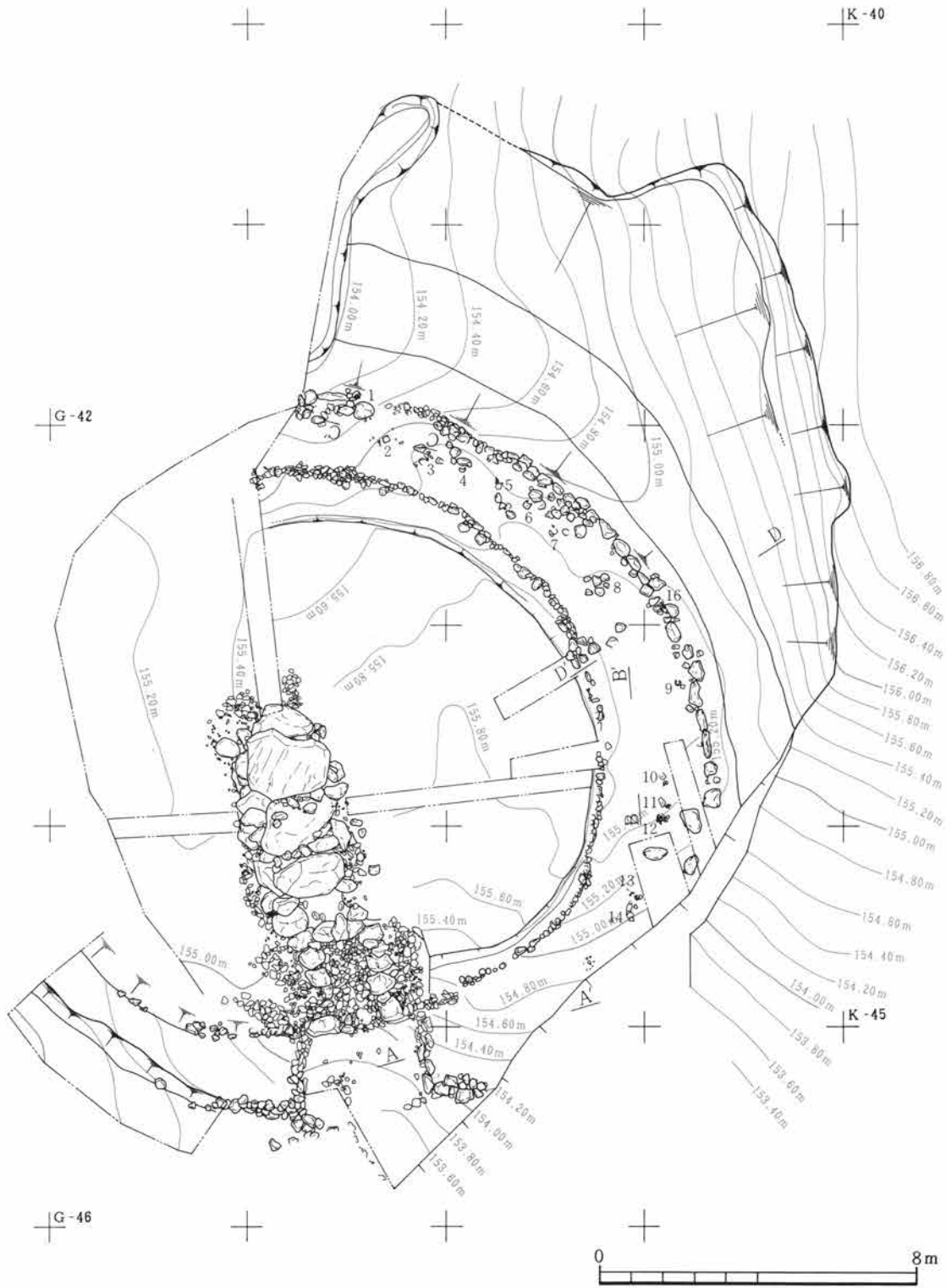
石室床面上には、羨道及び玄室前半部の天井石が除去された為に流れ込んだ土砂が奥壁に向かって斜めに厚く堆積しており、覆土の下部にはA軽石が5



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 17号墳 | 6. 褐色土 ロームブロックを少量含む。 |
| 1. 少し汚れたローム層 | 7. 暗褐色土 ローム粒を含む。 |
| 2. 黒色土 ロームブロックを少量含む。 | 8. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。 |
| 3. ロームブロックと褐色土との混土層 | 9. ロームの中に褐色土を少し含む。 |
| 4. 褐色土 ローム粒を少量含む。 | 10. ロームブロックと褐色土との混土層 |
| 5. 褐色土 ロームブロックを多量に含む。 | 11. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。 |

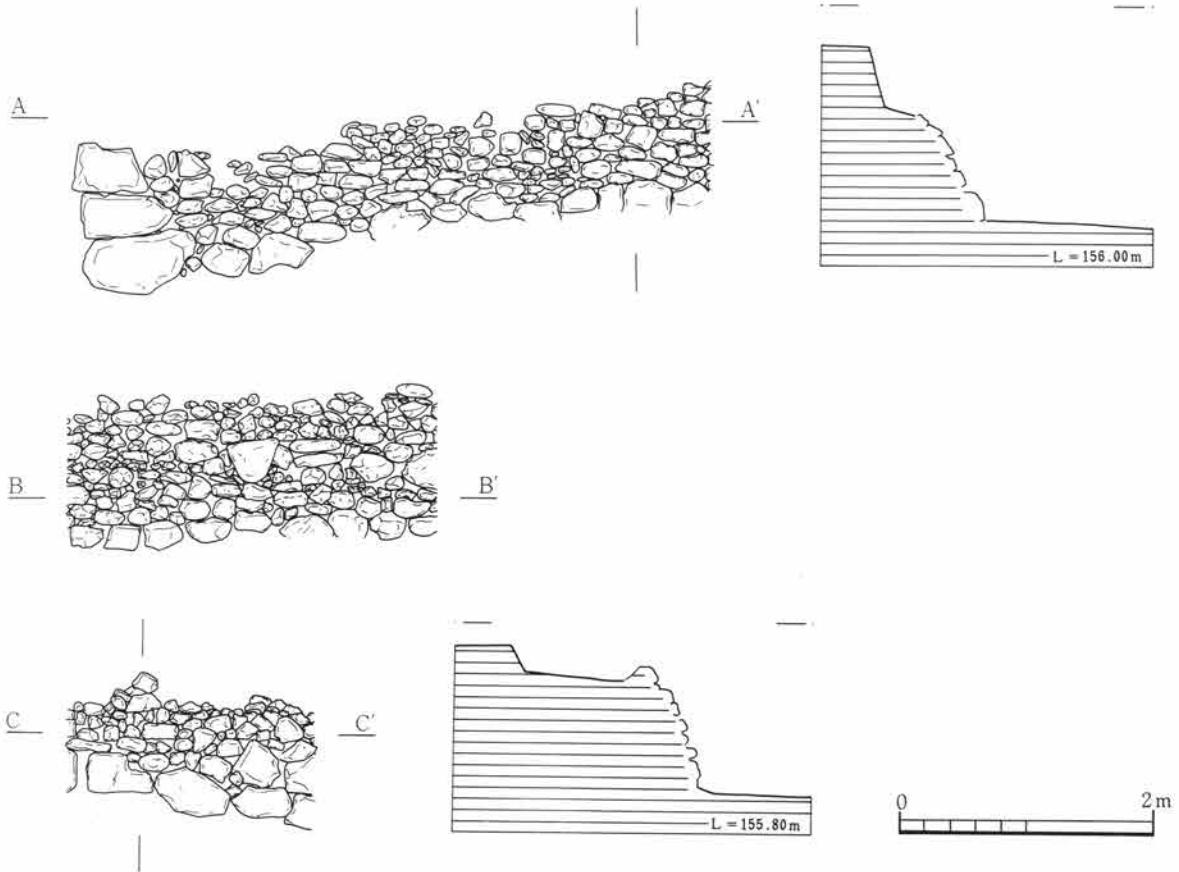


第258図 17号墳周堀・基壇断面実測図



第259図 17号墳墳丘実測図

III 検出された遺構と遺物



第260図 17号墳葺石実測図

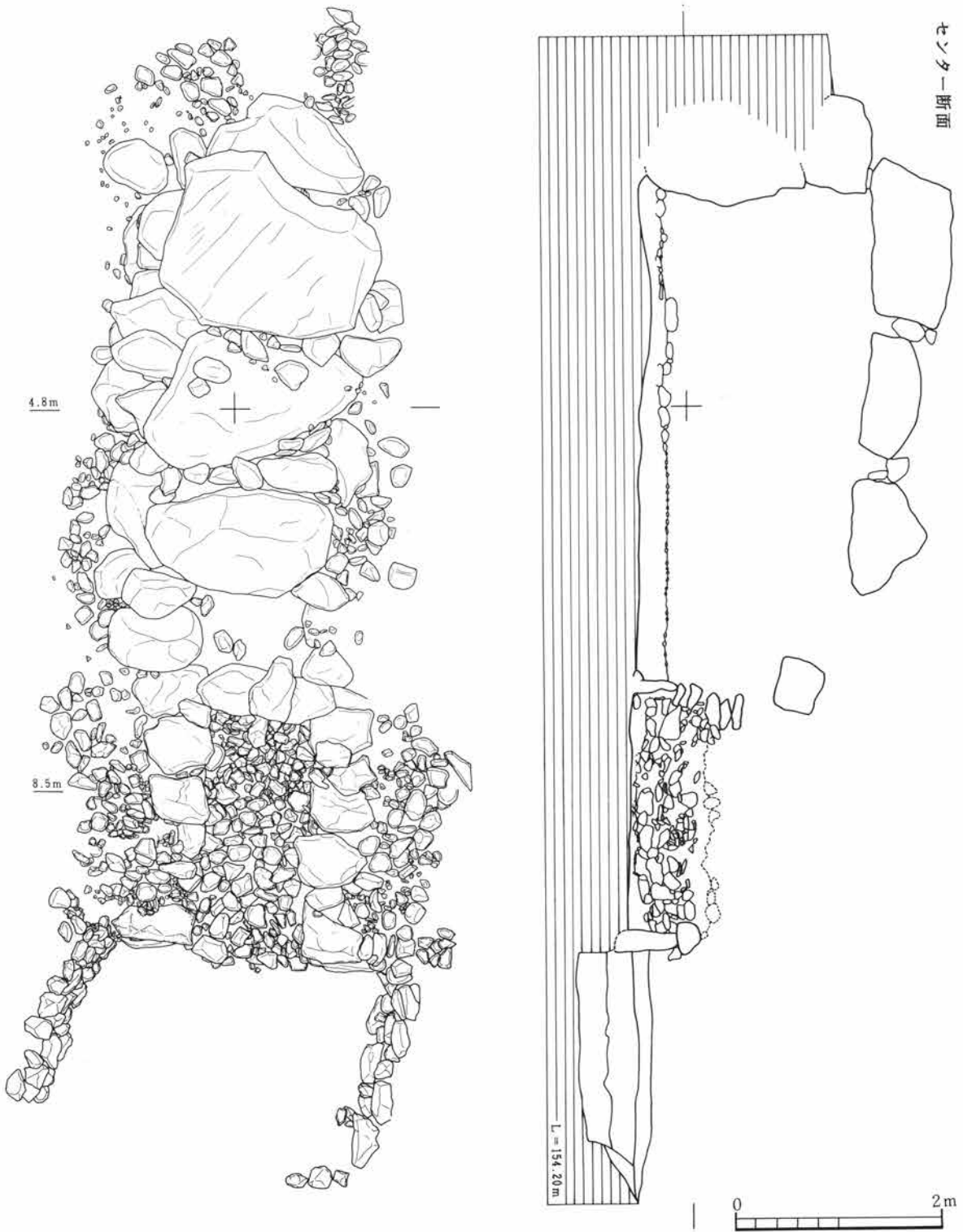
cm程の厚さで堆積していた。覆土の上部には、耕作に伴って除去された石材がぎっしりと詰め込まれており、天井に達していた。玄室の奥部には、幅90cm程の棺床が設けられ、径20～40cmの石が敷き詰められていた。棺床の手前約130cmの範囲もほぼ同様に整えられていたが、前半部には玉石が敷かれていた。副葬品は、耳環（14）が右奥隅で出土し、鉄鏃と刀装具が左壁のほぼ中央に錆着していた。刀子は右隅から1.8m程奥の部分に骨片と共に残っていた。耳環（15）は、羨道部より出土した。

羨道の床は明確な面が捉えられなかったが、間詰めによる閉塞の奥の石積が5段残っていた。開口部には、60×70cm・厚さ20cm大の石の平面を横長に用いて垂直に立て、両側を別の石で支えて高さ28cmの上がり框を作っていた。入口部の框石の上面と楣石上面とはほぼ同じレベルで、大半の天井石は除去されてしまっていたが、奥部の天井石下面との間隔は

98cmを測る。

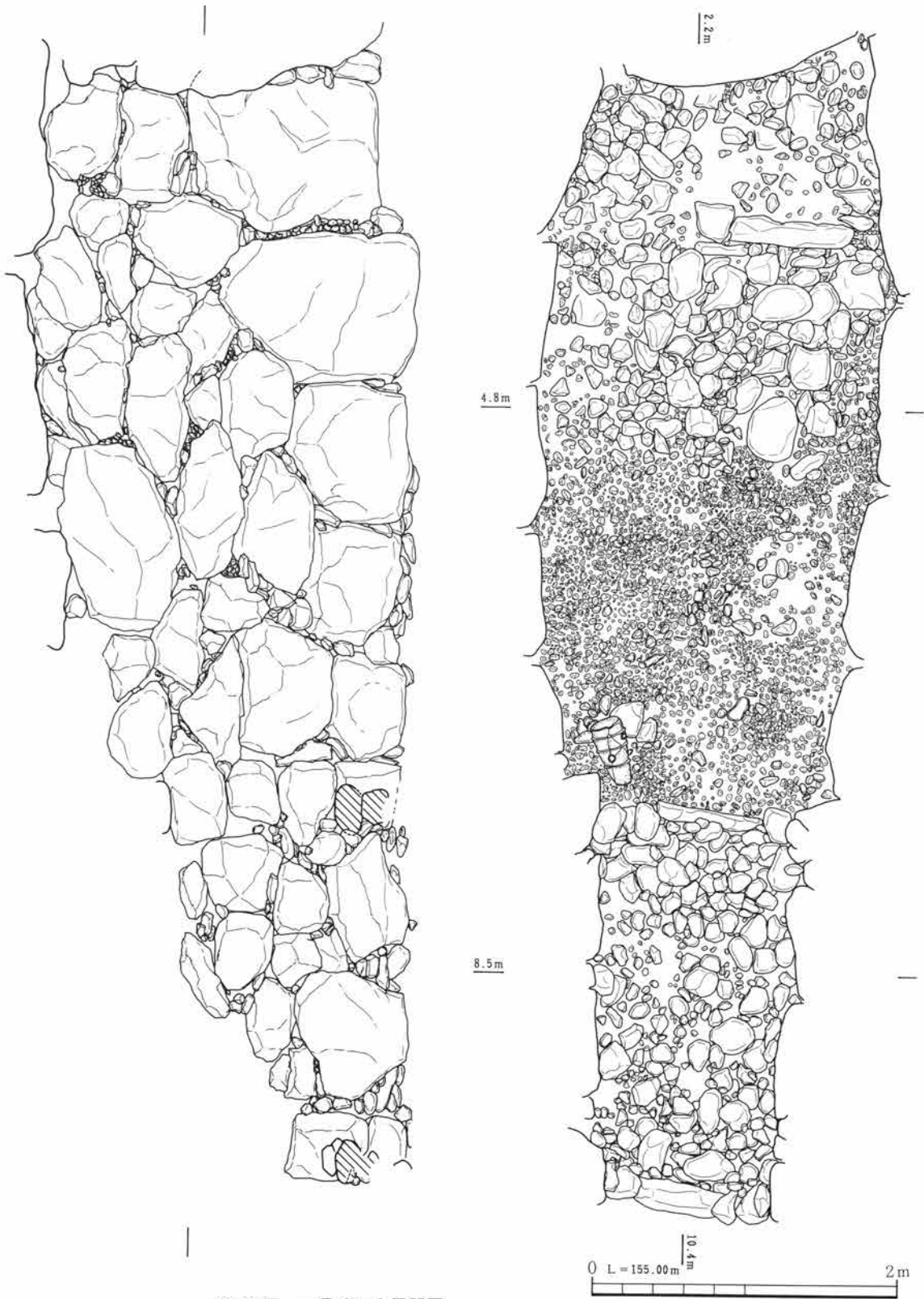
掘り方は、右壁面の170cm程外側で確認したが、部分的な調査である為に、平面形や規模等の詳細は不明である。整地面からほぼ垂直に30cm程掘り下げて石室構築範囲を確保したものと思われる。底面は蒲鉾状に中央部が盛り上がっていたが、奥部の棺床部分はやや高く掘り残していた。排水機能を考慮した為か、全体的には斜面下位の左側が10～15cm低くなると同時に、開口部に向かって下がっており、15cm程低くなっていた。

壁体及び裏込めは、粗粒安山岩の直方体状の亜角礫によって構成されていた。奥壁は、間に詰められた小さな石を除くと、2石で構成されており、下部の石は160×200cmの大きさがあり、1石で奥壁面の約7割をカバーしていた。左隅はほぼ垂直に立ち上がるが、右隅部は天井面で70cm程内側に入り込み、幅は120cmを測る。なお、左上隅には、「天神□□□

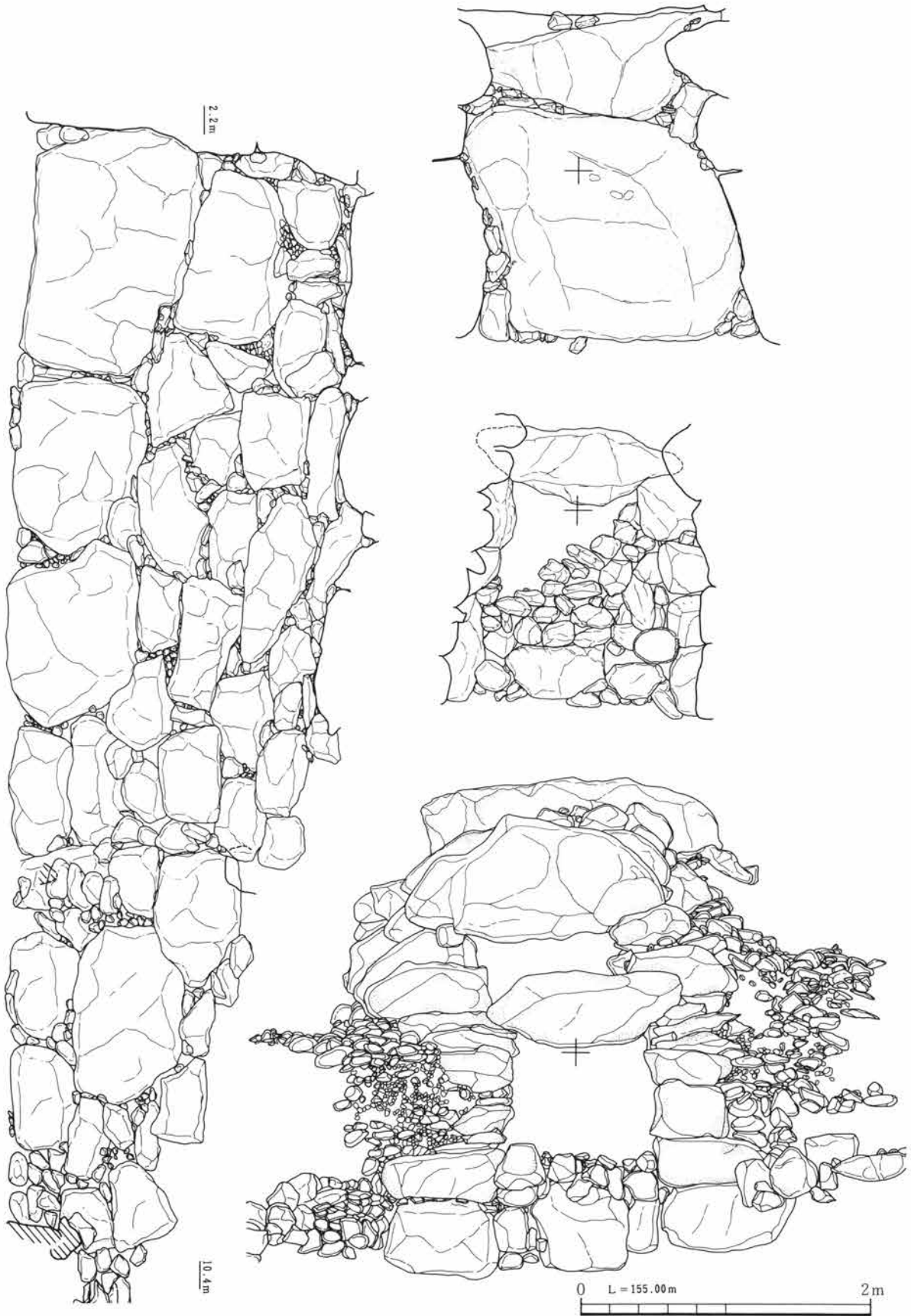


第261図 17号墳石室裏込め被覆実測図

III 検出された遺構と遺物



第262図 17号墳石室展開図



III 検出された遺構と遺物

□」の線刻が認められたが、時期の特定はできなかった。

側壁は、自然石乱石積みによって構築されていた。玄室右壁面の石積みは、玄室部根石は4石で構成されていたが、最奥部の石材の高さは115cmで、最前部では40cmの物を使用し、奥壁側に向かって斜めに目地が通るような積み方がなされていた。羨道部では、袖石は3段の石積みで構成されていたが、根石よりも2段目に大きな石を用いて、袖部材の1段目と2段目の用材の保持をより強固なものとしていた。壁面の目地は、やはり斜めに通っていた。

左壁面については、玄室部根石は胴張りプランの曲線を実現するために、右壁よりも一回り小さな5石で構成されていた。最奥部の根石材の高さは2番目の物よりも約5cm低いが、幅が勝っているために、意図的に設置面を約25cm上げて天端が斜めになるようにしており、斜めの目地を通すべく考慮された状況が顕著に認められた。袖部材は4石で構成されていたが、左右の石と目地が通らないよう配慮されていた。

天井石は、玄室奥部の3石と羨道の最奥部の1石

が残っていた。玄室部の石は、手前の石の上に奥の石が乗った状態で架けられていた。天井面は、奥よりも手前の方が30cm程低く、羨道部では更に約70cm低くなっており2段構造になっていた。天井面での規模は、奥幅120cm・前幅105cm・左壁長435cm・右壁長458cmを測り、左袖は20cm程突出し明瞭に残っていたが、右袖の段差は転びの為に、不明瞭になってしまっており、全体として左寄りになっていた。

4. 出土遺物

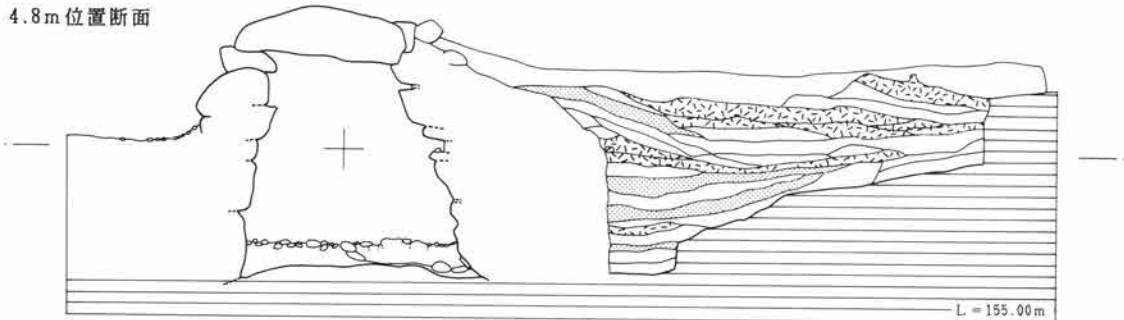
円筒埴輪は、2条凸帯3段構成の物と3条凸帯4段構成の物との2種類が確認された。樹立状態或は原位置に近い状態で出土した資料は、1～15であり、14は4段構成の物と考えられる。また、17は玄室内部に横たえられていた資料であり、両者の配列状況は明らかにし得なかった。

基部の内面或は外面には、粘土板を作った時の横方向の刷毛目が残っている物が多く、基部調整も行われている。なお、20は朝顔形埴輪の口縁部破片であるが、折り返し口縁となっている。

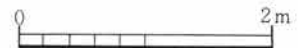
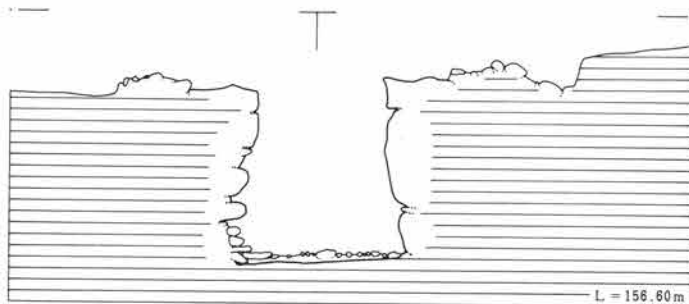
形象埴輪は、人物と家が確認された。

須恵器は、7世紀後半以降のものも混ざるが、6

4.8m位置断面



8.5m位置断面



第263図 17号墳石室断面図

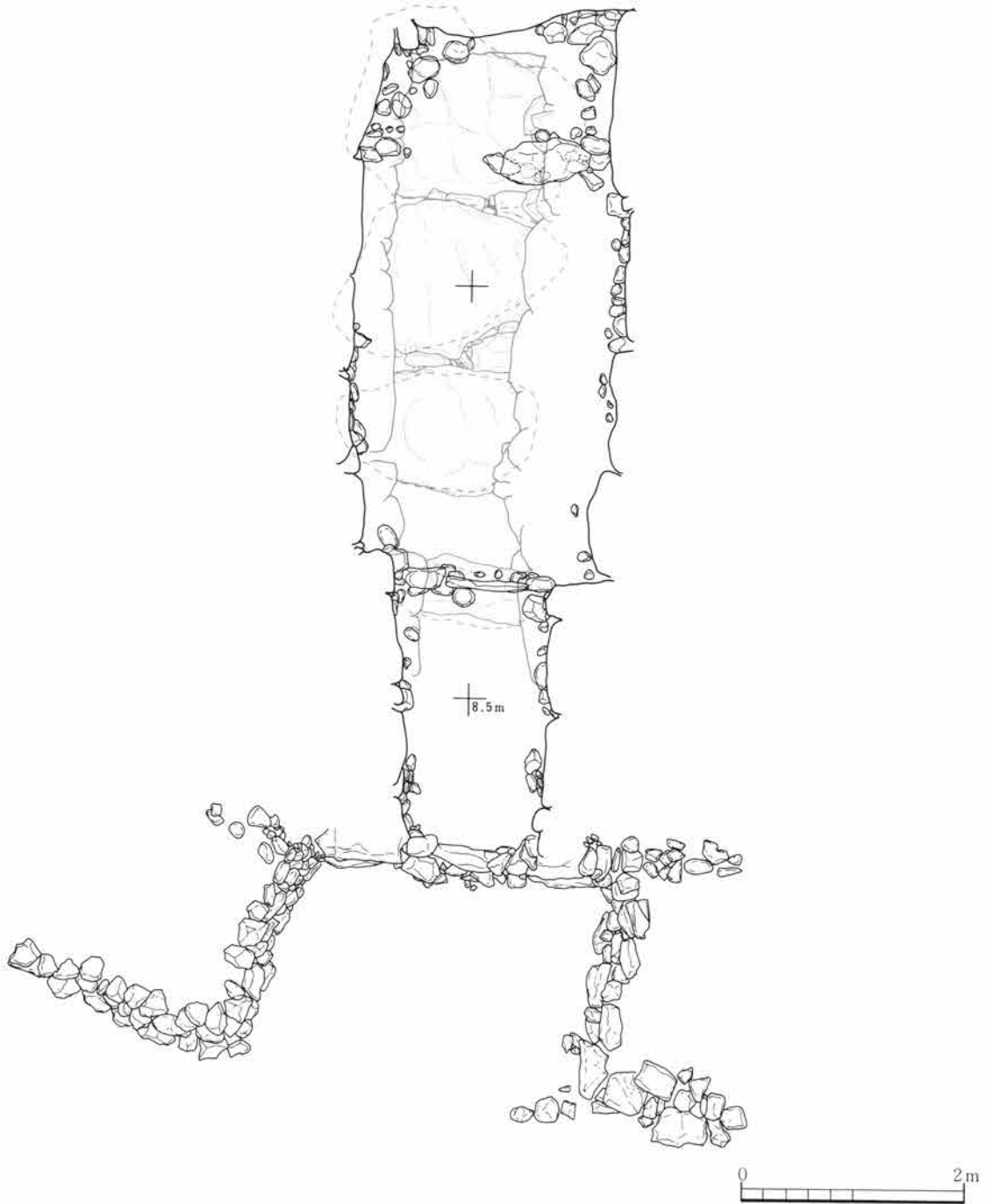
世紀後半代の物が多く認められる。横瓶(15)や高坏(17)等にも、さほどの時間差は窺えない。

金銅製の刀装具(11・13)が出土したことから、飾り大刀の存在が知られたが、詳細は不明である。

5. 備考

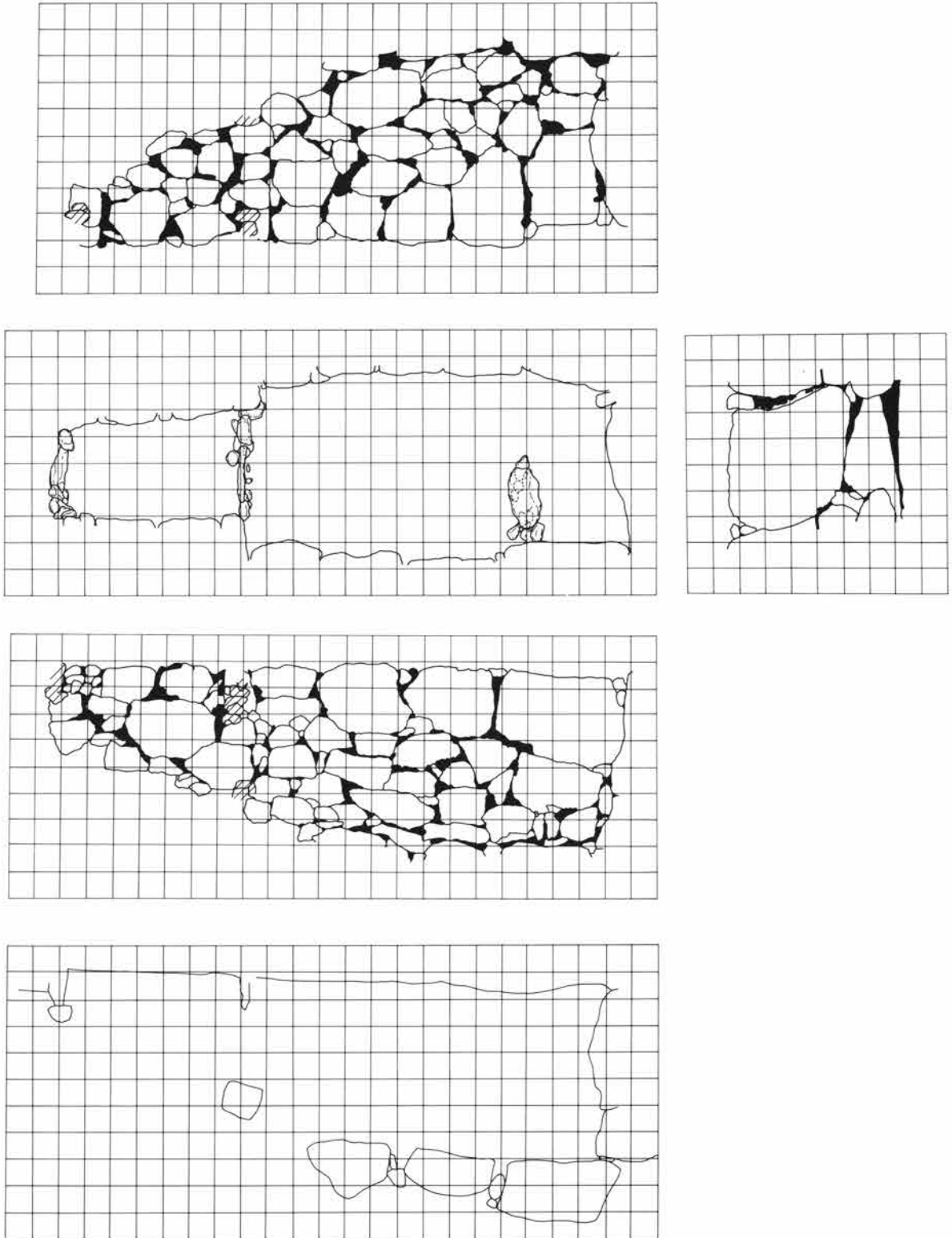
本古墳は、6世紀後半の築造と考えられるが、埋没溝の存在や前庭の形状等、立地と古墳の築造技術の問題を考えて行く上での貴重な資料である。

当局の理解を得られて、現状保存され、将来的に整備されて行く予定である。(飯塚)

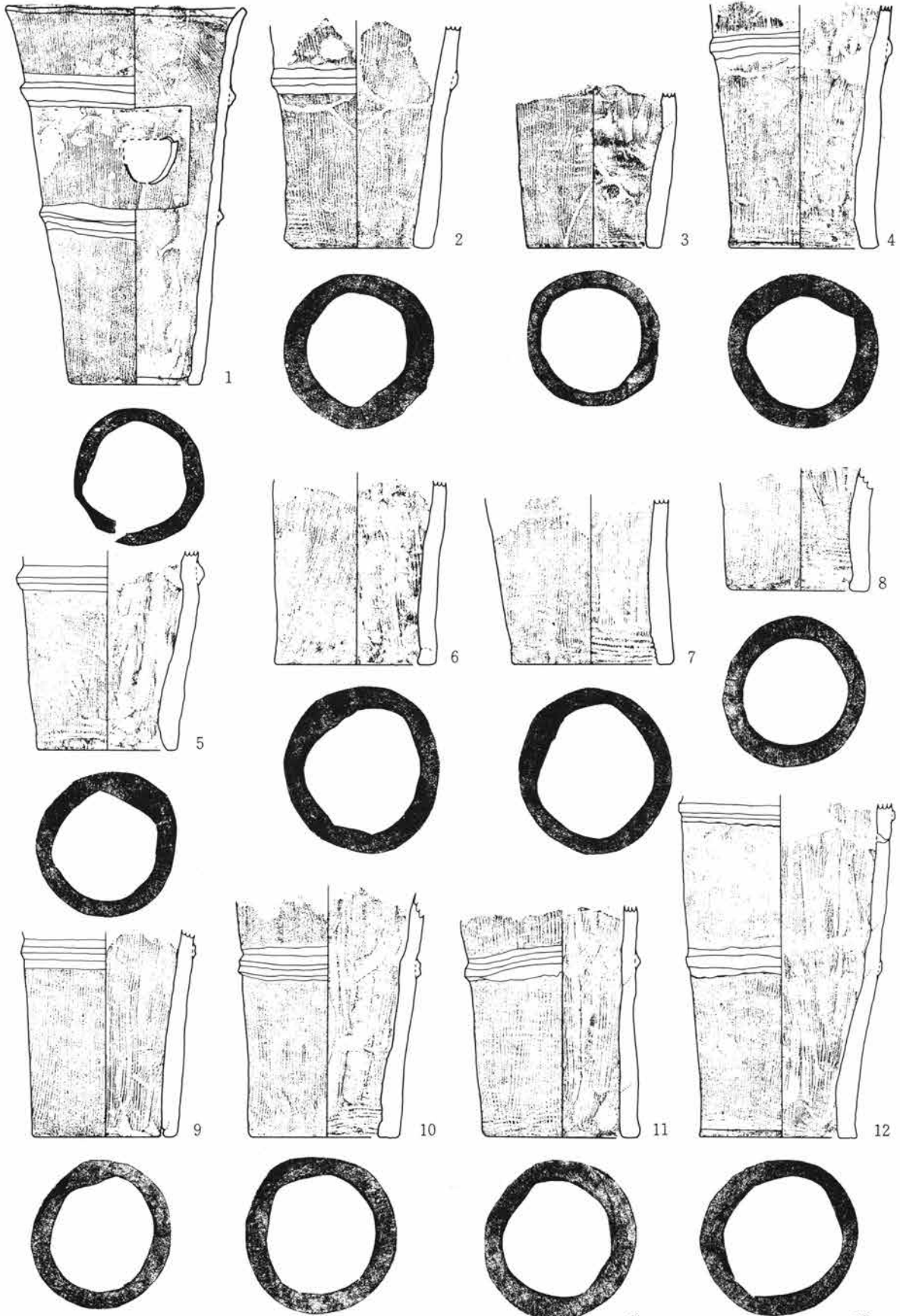


第264図 17号墳石室平面図

III 検出された遺構と遺物

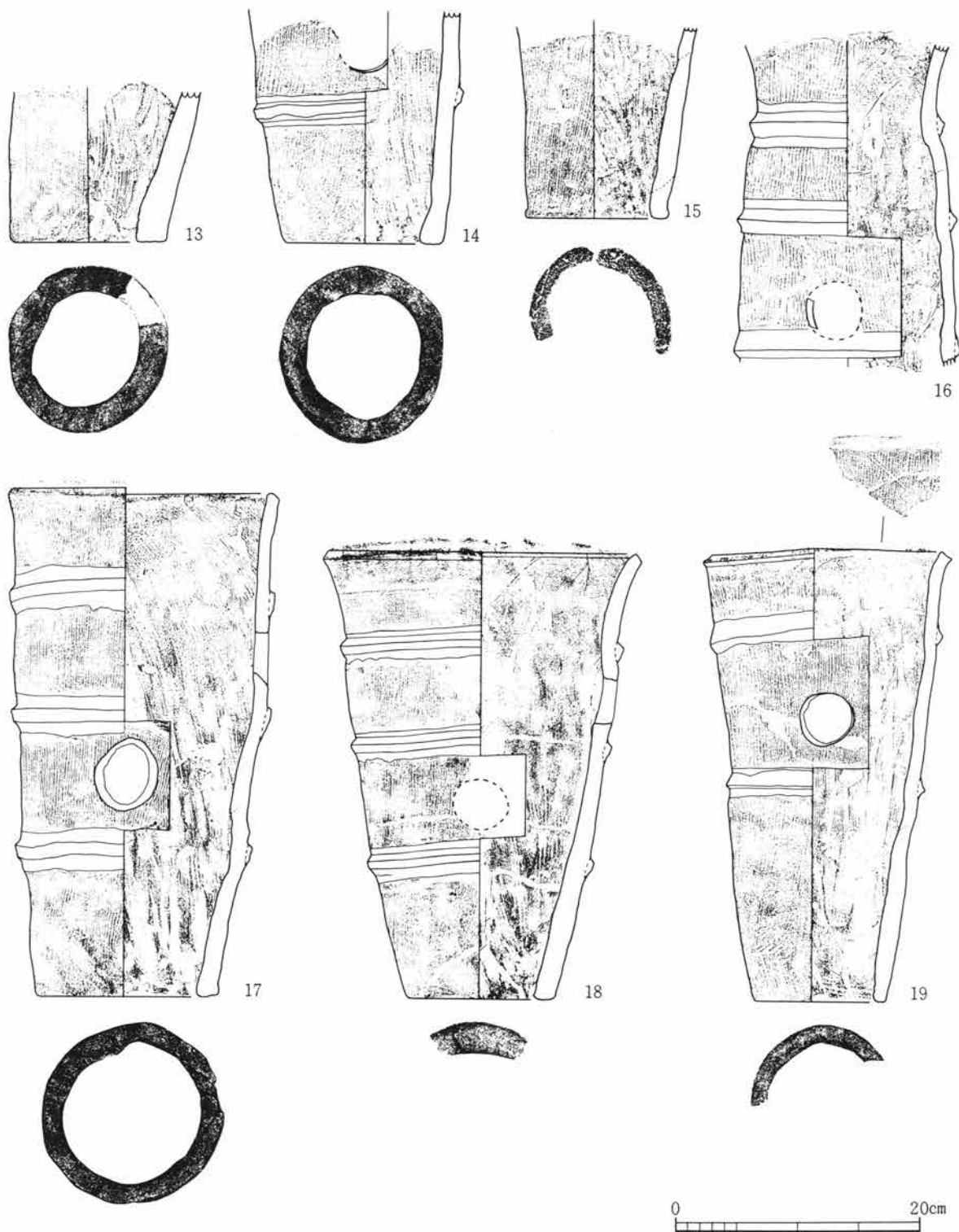


第265図 17号墳石室検討図

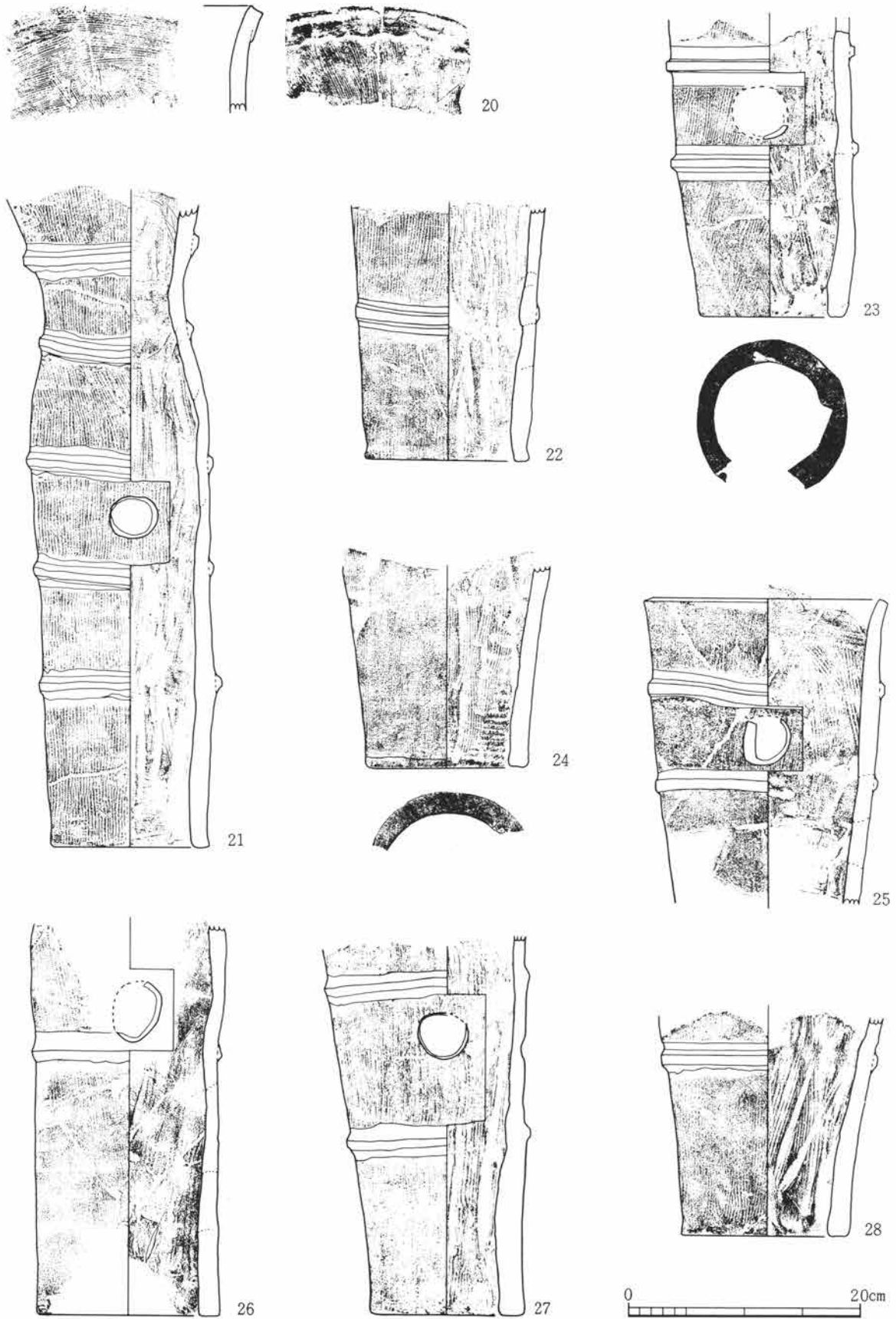


第266図 17号墳出土円筒埴輪実測図(1)

III 検出された遺構と遺物

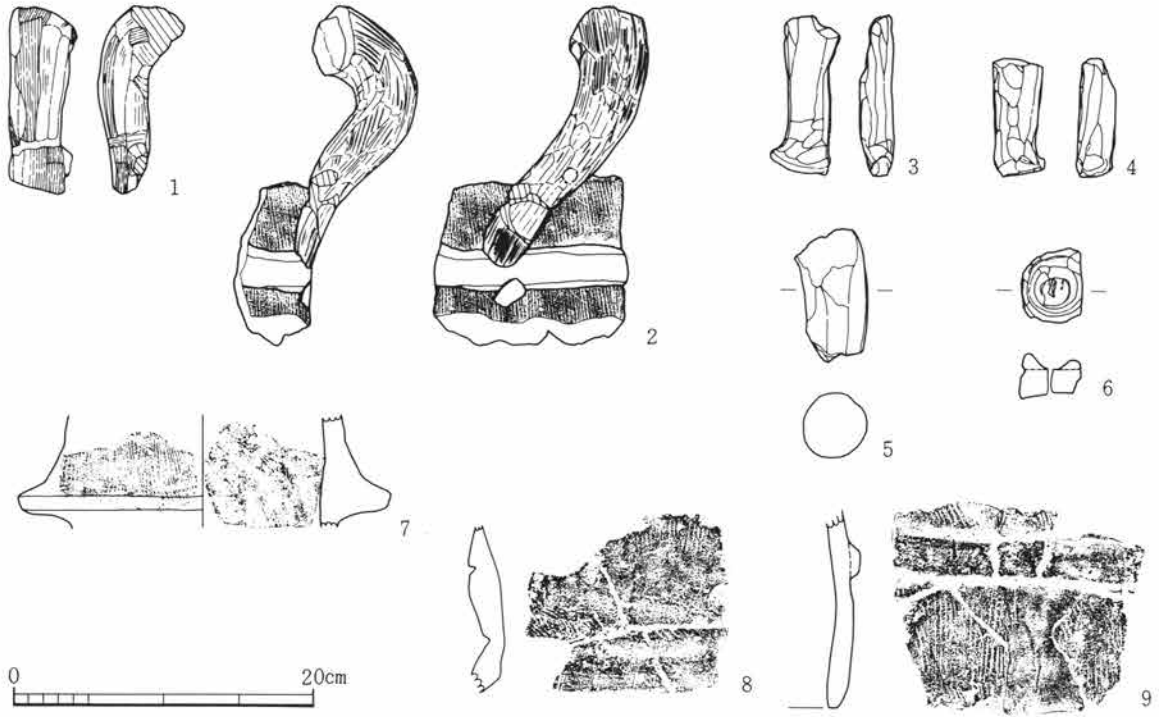


第267図 17号墳出土円筒埴輪実測図(2)



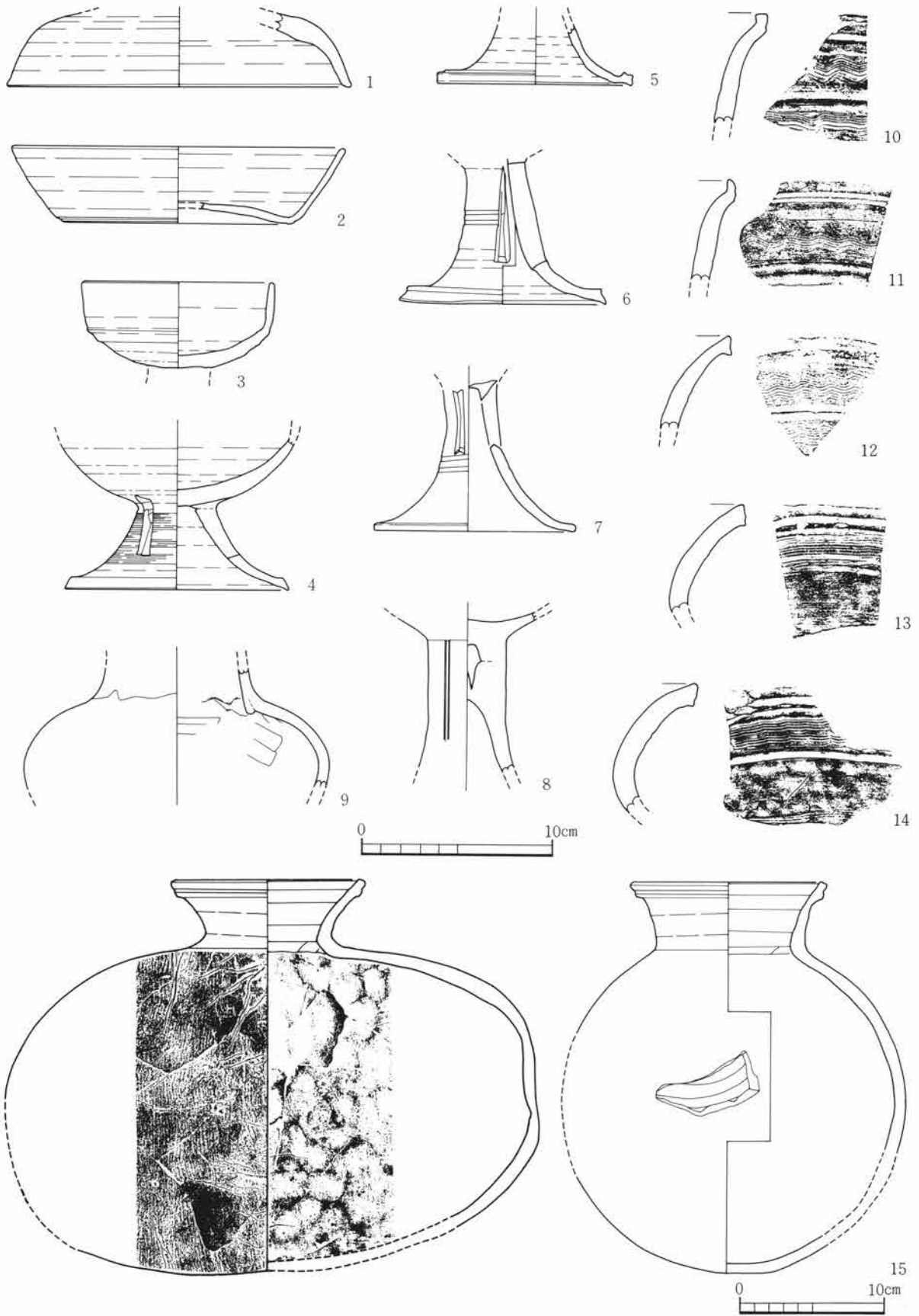
第268図 17号墳出土土円筒埴輪実測図(3)

III 検出された遺構と遺物



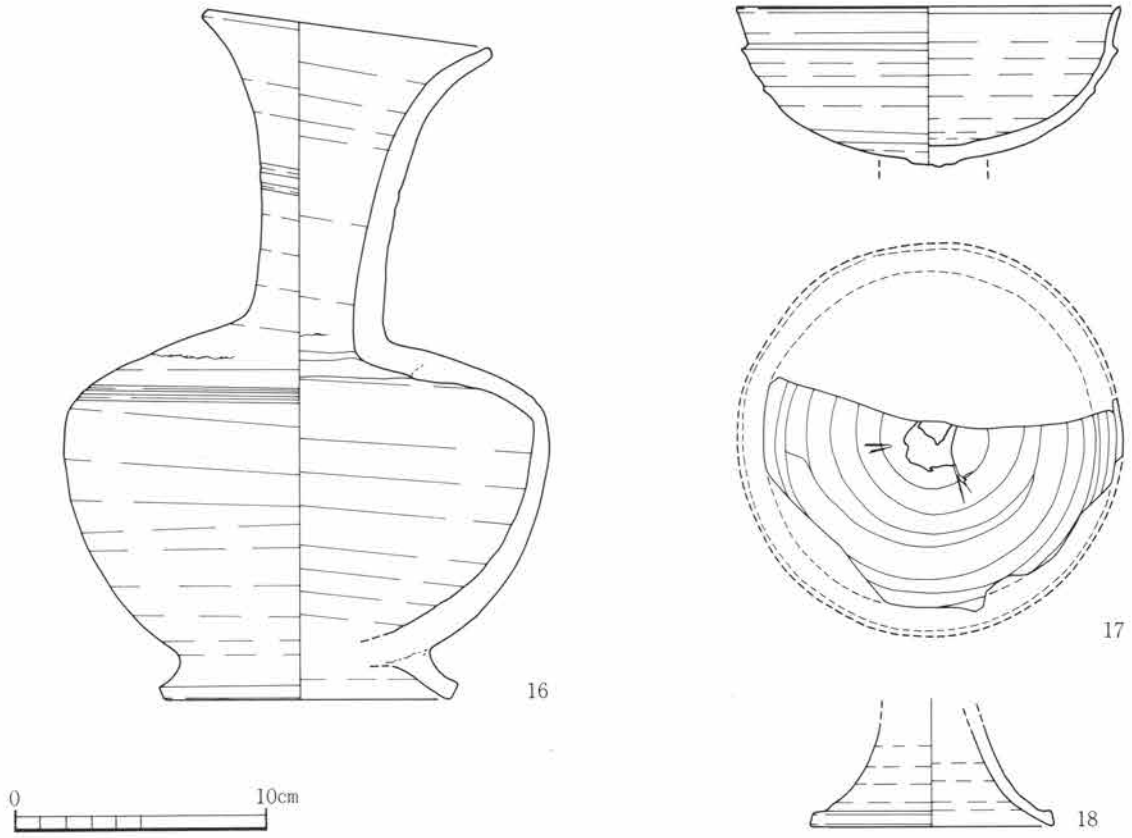
第269図 17号墳出土土形象埴輪実測図





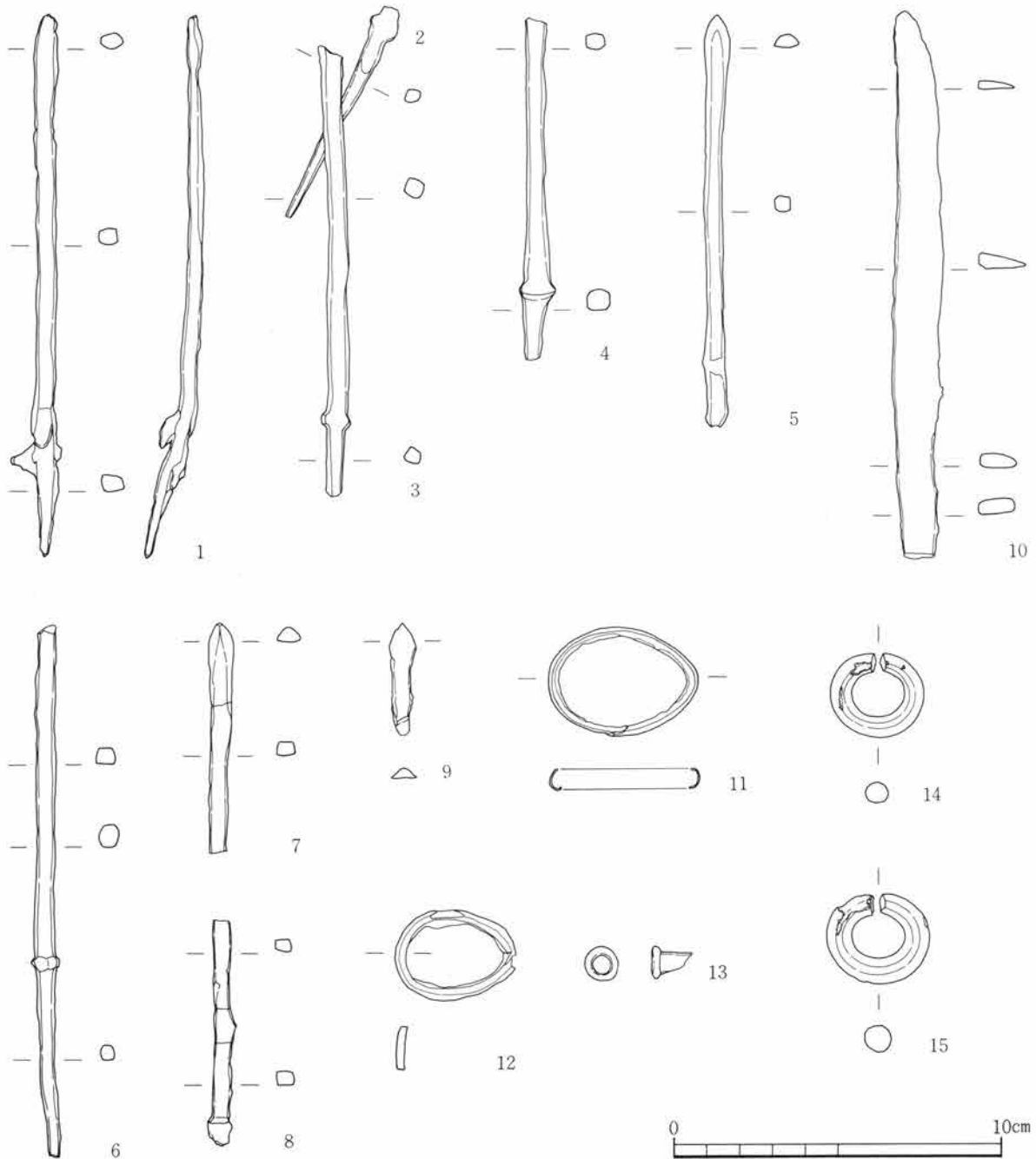
第270図 17号墳出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第271図 17号墳出土遺物実測図(2)





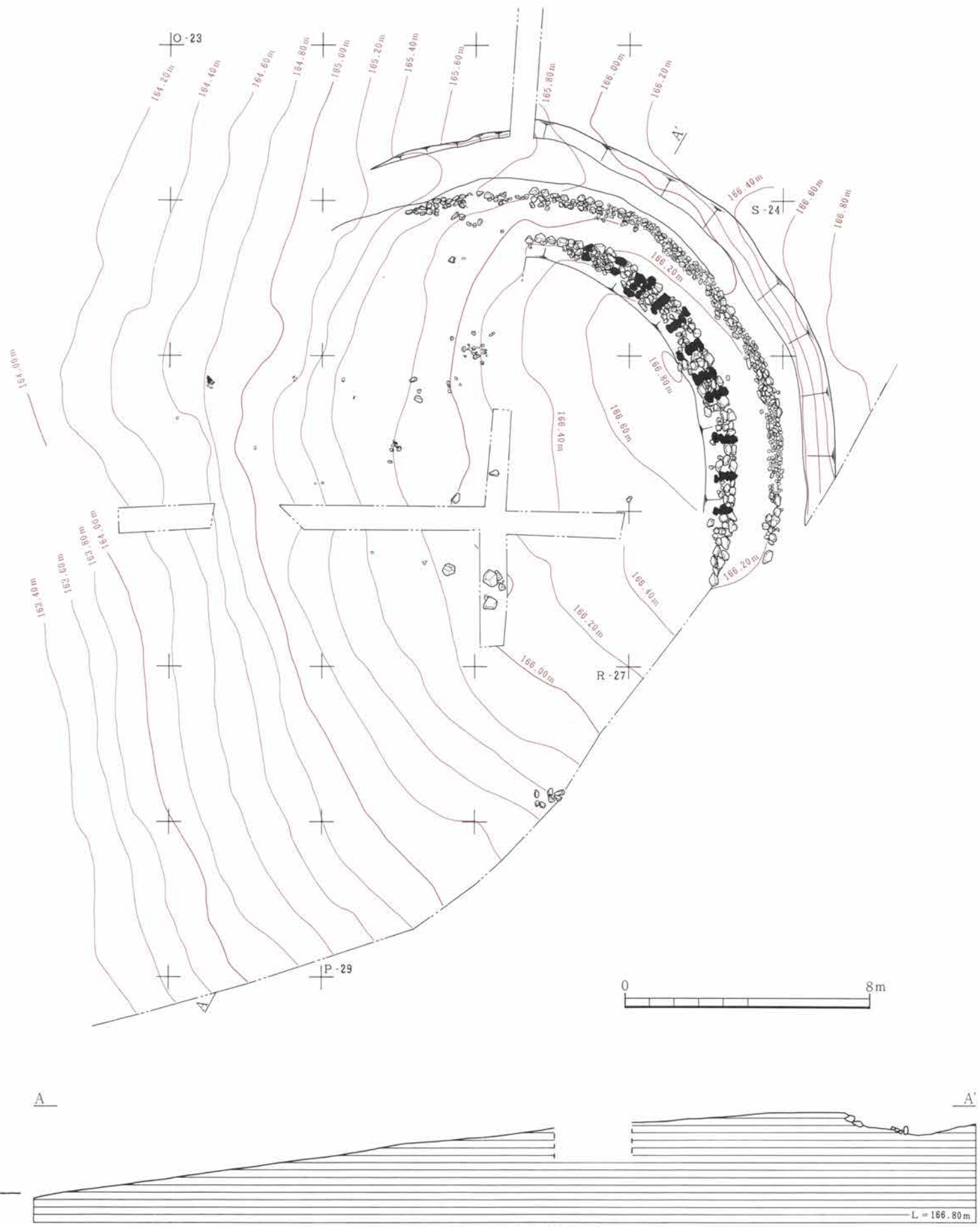
第272図 17号墳副葬品実測図

18号墳《第273・274図、図版90・91》

1. 位置と調査前の状態

Q-26ポイント周辺に位置していた。北西緩斜面の比較的平坦な場所に立地しており、標高は166m前後である。南西部は自然遊歩道によって破壊されており、他の部分も梨畑の耕作に伴って著しく削平されていた。調査前の現況観察の時点ではその存在が

全く予想されなかったが、トレンチによる試掘調査によって葺石の一部が検出された為、古墳と認定した。調査した古墳群の中ではほぼ中央からやや南側に寄った部分に占地しており、北東側に3号墳、南東側に19号墳、南西側に9・11号墳が築造されていた。



第273图 18号墳填丘实测图

2. 外部施設

斜面高位の南東側で、ローム層中に掘り込まれた周堀下部の一部が検出された。上幅160cm・下幅64～136cm・深さ20cm前後で、断面は凹レンズ状を呈しており、内縁部は基壇葺石と連続していた。底面はほぼ平坦であったが、斜面下位の北側が120cm程下がっていた。全貌は把握できなかったが、環状に巡っていたものと思われる。確認された範囲での外縁部上端径は約19.7mである。

基壇は、地山を削り出して成形した後に若干の盛土で整形し、25°の傾斜で高さ30cm程立ち上がる斜面には葺石が葺かれていた。上面は5°前後の傾斜で緩やかに傾斜しながら墳丘葺石へと続いており、幅約90cmのテラス面が巡っていた。基壇葺石根石での径は17.8mで、ほぼ正円に近く、均整がとれていた。

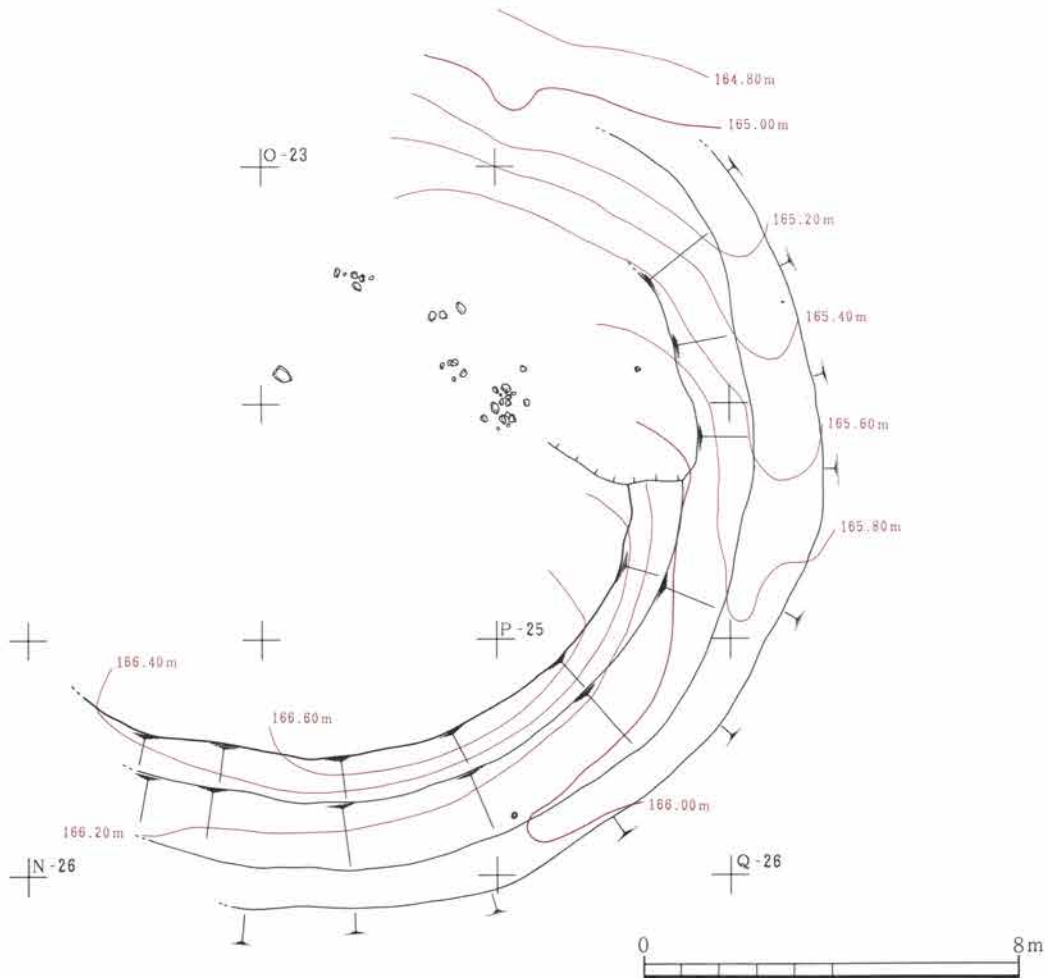
墳丘も基壇と同様に築かれており、45°の傾斜で高さ50cm程立ち上がっていた。上部は削平されており、墳頂部は確認できなかったが、墳丘葺石根石での規模は15.8mを測る。

葺石は、20～30cm大の粗粒安山岩の亜角礫の平面を外側に向けて据えて根石とし、その上にやや小振りな石を隙間なく積み上げていた。作業時の目安としたと考えられる、縦方向に目地が通る部分が数箇所認められたが、規則性は認められなかった。

遺存した周堀の覆土中からは埴輪が全く出土していないので、埴輪配列は伴っていなかったものと考えられる。

3. 内部施設

表面の精査とトレンチによる断ち割り調査を行ったが、埋葬施設の痕跡すら検出されなかった。



第274図 18号墳墳丘地形実測図

III 検出された遺構と遺物

墳丘の遺存状態から推して、竪穴系の埋葬施設を持った古墳であったと考えられる。

4. 出土遺物

周堀の覆土中から弥生土器の破片数点が出土し、墳丘部に縄文時代の磨製石斧1点と土器が散らばっていたのみで、古墳に関連する遺物は全く認められなかった。

5. 備考

本古墳は、確たる証拠は無いが、竪穴系の埋葬主体部の存在が想定されること等から推して、5世紀前半代の築造と思われる。(飯塚)

19号墳《第275～278図、図版91・137・138》

1. 位置と調査前の状態

T-22ポイント周辺に位置していた。北東緩斜面の比較的平坦な場所に立地しており、標高は167m前後である。自然遊歩道に伴う側溝と休憩施設が作られており、北東部は畑地となっていた為に削平が著しかった。調査前の現況観察の時点ではその存在が全く予想されず、トレンチによる試掘調査でも確認されなかった。調査区の表土を除去した時点で古墳の存在が明らかになったが、前述の工作物による破壊に加えて小規模な地割れが幾筋も走っていた為に、遺存状態は芳しくなかった。

古墳群の中では、南東部に占地しており、周囲を3・4・6・9・18・20号墳に取り囲まれていた。

2. 外部施設

削平が進行しており、ローム層中に掘り込まれた周堀下部の一部が、斜面高位側2箇所に残存していたのみであった。全体形状は、把握し難いが、南西側の6号墳と北西側の18号墳周堀に近接する付近で著しく形状を歪めており、南北方向に長い偏円形の一部が遺存したのと考えられる。なお、南西部においては明確な立ち上がりを検出できず、東端部の底面がやや上昇する傾向が認められたので、或は環状に巡っていなかった可能性も残る。周堀の規模は、北西部での最大上幅4.24m、南西部での最大上幅は3.60mで深さは20cm前後であった。断面は凹レンズ

状を呈していたが、内側の傾斜がややきつい傾向が認められた。

以上により、本墳は、周堀内縁での径が22m程の規模の円墳であったと考えられる。

なお、周堀の覆土中から10～20cm大の粗粒安山岩の垂角礫や埴輪片が出土していることから、葺石及び埴輪配列の存在が考えられるが、詳細は不明である。

3. 内部施設

埋葬主体部については確たる資料を得られなかった。

4. 出土遺物

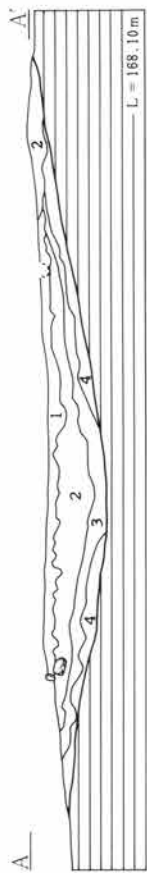
周堀内から、円筒埴輪・人物埴輪・家形埴輪の破片が出土したのみである。円筒埴輪は、基部から余り広がらずに立ち上がっており、朝顔形埴輪も、肩部が比較的張っているものであった。

5. 備考

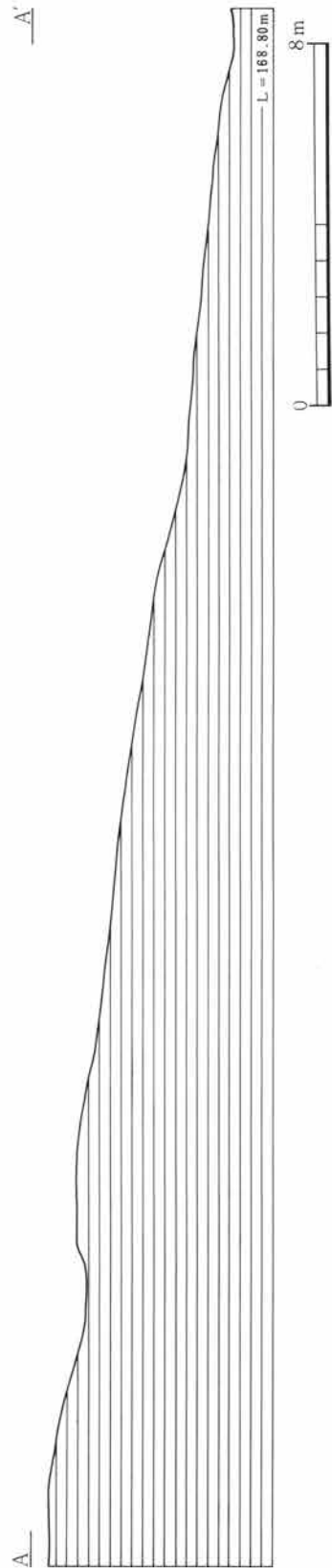
周囲の古墳との前後関係については、本墳の周堀が18号墳の周堀を切っていたことから、18号墳に後出することが確認された。また、南側の周堀が6号墳の周堀を避けるかのように歪んでいることから、本墳の方が新しいと考えられるが、20号墳との前後関係は不明である。

横穴式石室を持つ6号墳よりも新しく、南西部の周堀底面が周囲と比較するとやや高くなっていた点を考慮すると、或は南西方向に開口する横穴式石室を持つ古墳であったかも知れない。(飯塚)

1. 褐色土
2. 暗褐色粘質土 遺物を多く含む。
3. 淡褐色土 よく締まる。
4. 明褐色土 ローム粒を含む。



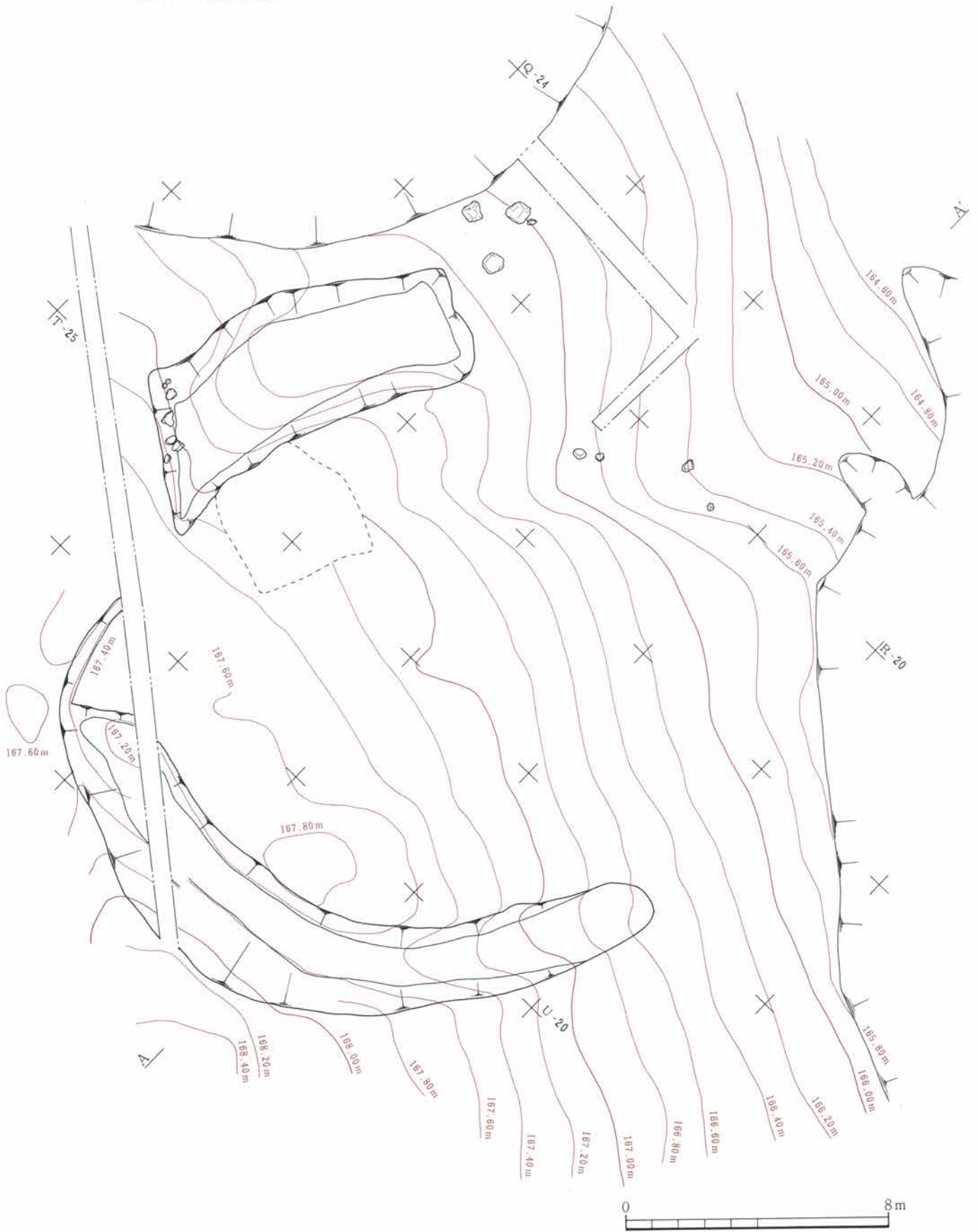
第275図 19号墳周堀地層断面実測図



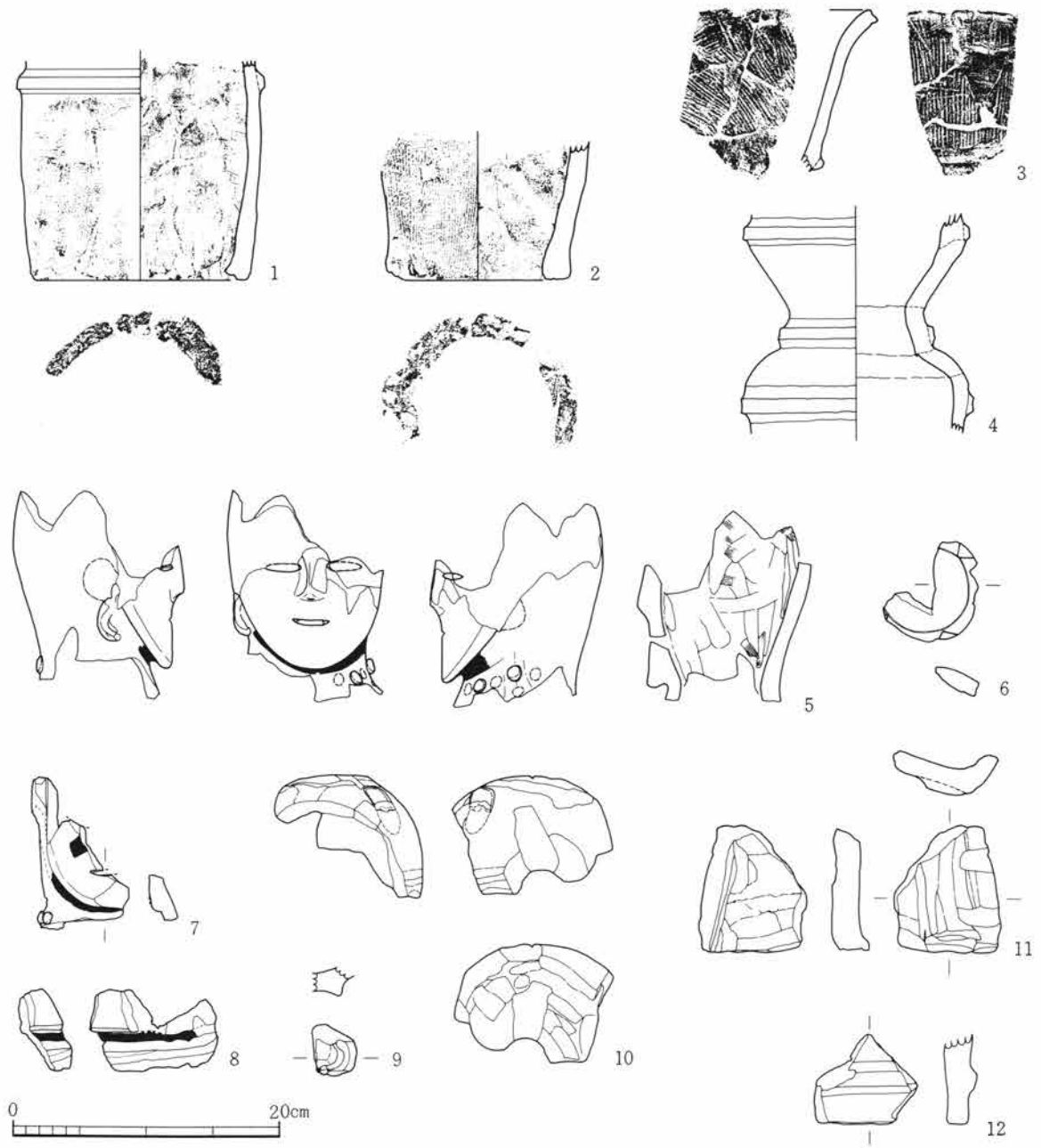
4. 古墳時代の遺構と遺物

第276図 19号墳断面実測図

III 検出された遺構と遺物



第277図 19号墳墳丘実測図



第278図 19号墳出土埴輪実測図

III 検出された遺構と遺物

20号墳《第279・280図》

1. 位置と調査前の状態

W-19ポイント周辺に位置していた。南西に5号墳・北西に19号墳が接するように築造されており、古墳群の南東部の端に占地していた。北東緩傾斜地に立地し、畑及び自然遊歩道によって、殆ど潰滅的に削平されてしまっており、調査前の現況観察及び試掘調査ではその存在を全く確認できなかった。更に、重機による全面的な表土掘削が完了した時点においても、地汙りに伴う陥没や地境の溝と周堀とが重複しており、古墳としての認定が大幅に遅れてしまった為に部分的な資料しか残し得なかった。

2. 外部施設

削平が進行しており、斜面高位側において、ローム層中に掘られた周堀下部の一部が遺存していたのみであった。形状は、円墳であったと考えられるが、南西側の5号墳周堀に近接する付近で著しく形状を歪めており、偏円形に掘られた周堀下部の一部が確認された。規模は、上幅1.4～3.0m・下幅0.4～1.6mで、深さは10cm前後であった。周堀上端での外径は約15～17m、内径は約12mである。覆土除去作業中においても遺物は全く検出されておらず、葺石・埴輪の使用等については不明である。

3. 内部施設

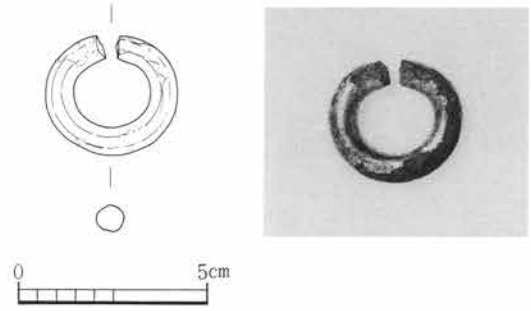
埋葬主体部については、掘り方の痕跡すら残っていなかったが、周堀の形状から推して、5・19号墳に後出すると思われるので、恐らくは横穴式石室を主体部としていたものと思われる。

4. 出土遺物

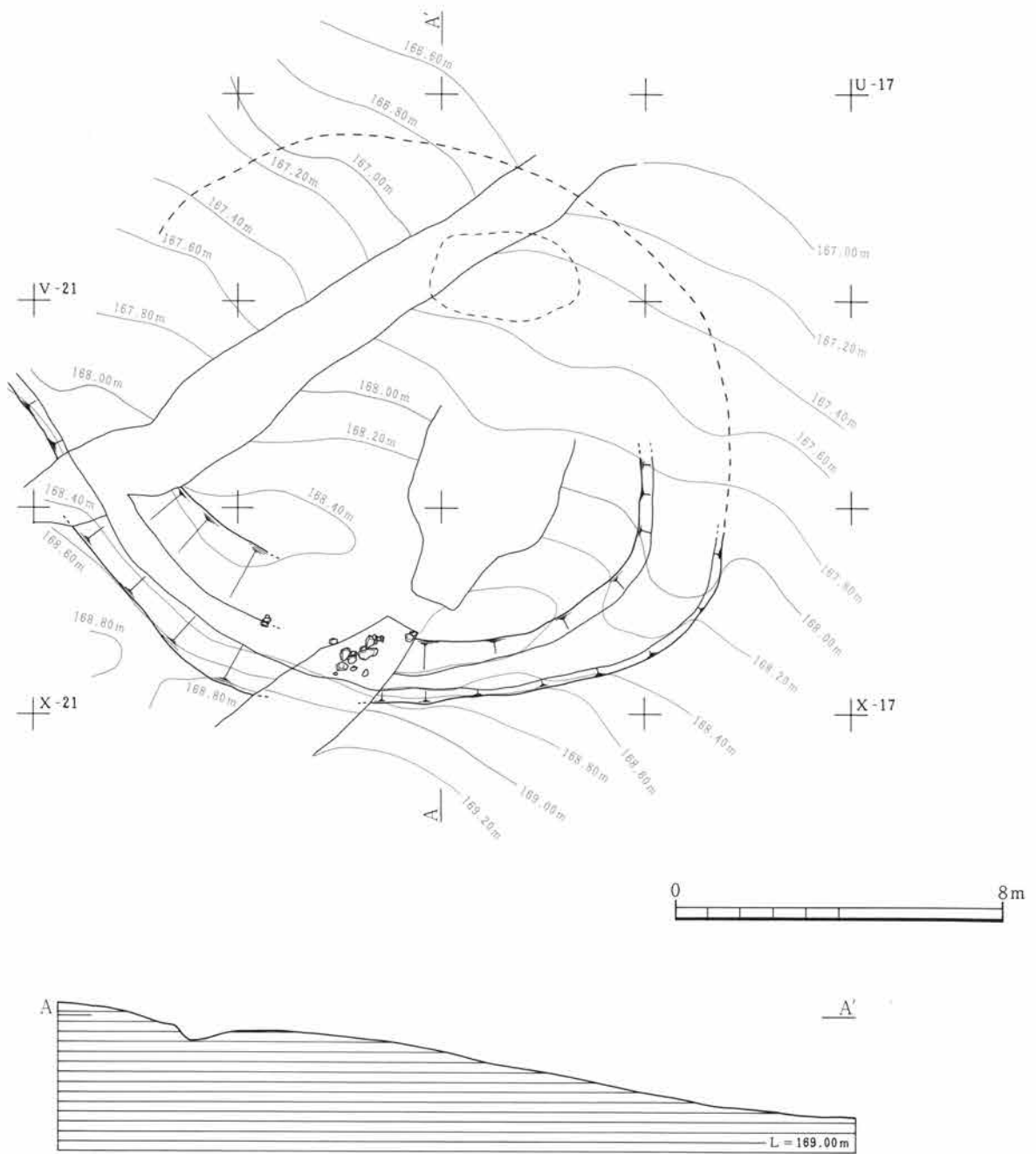
5号墳と接する地点付近の陥没箇所の際乱土層中から、径18mmの金銅製耳環が1点出土しているが、本墳に伴うものであるか否か定かではない。

5. 備考

本古墳は、確たる証拠は無いが、周堀の形状等より推して、7世紀の築造と思われる。(飯塚)



第279図 20号墳出土遺物実測図



第280図 20号墳墳丘実測図

21号墳《第281～289図、

図版92・93・138～144・154》

1. 位置と調査前の状態

J-29ポイント周辺に位置していた。15°程の傾きを持った北緩傾面が斜度を増す傾斜変換点付近に立地しており、標高は160～161mである。

古墳群の中では中央部からやや北寄りに占地しており、東側に2・3・10号墳、北側に1・7号墳、南側に18号墳が築造されていた。西側は傾斜がきつくと、窪地状になっていた為に、他の古墳は築造されていなかった。

整地されて、少林山達磨寺の駐車場として利用されていたが、掘削時の状況等は詳らかではないとのことであった。

2. 外部施設

斜面高位の南側で、ローム層中に掘り込まれた周堀の一部が検出された。現存部分での外縁部上端径は約34.5mで、深さは最大で1.2mを測る。断面は逆台形を呈し、下幅は100～120cmを測るが、内縁部は基壇葺石の根石と連続していた。底面はほぼ平坦であったが、南側の一部に他よりも30cm程高く掘り残された部分が有った。なお、底面から1m程上位に浅間B軽石の純層が認められ、下部の茶褐色粘質土中には多量の埴輪片が混入していた。

また、削平が著しく、環状に巡るものか、斜面下位の北側は自然地形に吸収されてしまうものなのか不明である。

基壇は、地山を削り出して成形した後に若干の盛土で整形し、30°の傾斜で高さ40cm程立ち上がる斜面には葺石が葺かれていた。上面は僅かに傾斜しながら墳丘葺石へと続いており、幅160cmのテラス面が巡っていたが、南側には幅8.4m・長さ80cmの張出し部が認められた。張出し部の南端には葺石は葺かれておらず、直接に周堀の外縁へと連なっていた。基壇葺石根石での径は約28.4mである。

テラス面には、墳丘裾周りから100～120cm程外側に、18本の円筒埴輪が樹立状態で遺存していた。各々の埴輪は、80～90cmの間隔を以て配列されていたが、

張出し部では他よりもやや疎らであった。埴輪を樹立するに当たっては、個別に10cm程の深さで底径よりもやや大きめな穴を掘って据えていた。なお、墳丘裾からの距離は一定でなく、作業工程上の一単位を示すかのように3～5本が直線的に並んでいた。樹立状態を保っていたのは、ハケ目調整を施された埴輪のみであり、墳丘斜面及び周堀内からナデ調整の埴輪が出土していることから、墳頂部にも埴輪配列が有ったと考えられるが、詳細は不明である。

墳丘も、基壇と同様に築かれており、40°の傾斜で高さ120cm程立ち上がっていたが、上部が削平されており、墳頂部は確認できなかった。墳丘葺石根石での規模は、径24.4mを測る。

葺石は、20～30cm大の粗粒安山岩の亜角礫の平面を外側に向けて据えて根石とし、その上にやや小振りな石を隙間無く積み上げていた。周囲よりもやや大きめな石を使用し、作業時の目安としたと考えられる、縦方向に目地が通る部分が数箇所認められたが、規則性は捉えられなかった。

基壇張出し部の西側には、土師器鉢が口縁部を上にした状態で据えられており、東側では、肩部に外側から小孔を穿たれた甕が、潰れた状態で検出された。何等かの儀礼に伴って置かれたものと考えられるが、性格は解明できなかった。

前述の通り全体の形状を把握できなかったが、以上に拠り、本墳は張出しを持った二段築成の円墳であったと考えられる。

3. 内部施設

北側の過半部が整地作業によって掘り取られていた上に、墳丘上部も削平されてしまっていた為、埋葬施設の痕跡すら検出されなかった。

墳丘の遺存状態から推して、竪穴系の埋葬施設を持っていたと考えられる。

4. 出土遺物

埴輪は、3条凸帯4段構成及び2条凸帯3段構成の中型の円筒埴輪と朝顔形埴輪とが出土した。前者は、二次調整にB種横ハケが認められ、底径対口径の比は1:1.3～1.4であり、胴部に円形の透孔が1

対ずつ穿たれている。器表面に焼きムラが見られるが、黒斑は認められなかった。また、口縁部外面にヘラ記号が有るものもある。

なお、10は2条凸帯3段構成であるが、二次調整に縦ハケが認められる資料であり、底径対口径の比は1:1.5である。基部付近のみの資料の中には同様の物が有ると思われる。

後者は、完形に接合・復元できた物は無いが、器表面はナデ調整によって仕上げられており、刷毛目を持たない。底径対口径との比はおよそ1:1.3と考えられ、胴部のほぼ中央に小さな円形の透孔が穿たれているが、個数を特定できる資料は得られなかった。器表面には黒斑が認められる。

土師器鉢及び甕の示す年代相は、5世紀中葉に比定される。

(備考) 遺存した墳丘の北東部に玉石の集中した箇所が認められたため、慎重に調査を行った結果、本墳とは直接の関連性を持たず、先行する1号墓に伴う集石であることが判明した。

(飯塚)

1. 黒色粘質土 C軽石を含む。上面にB軽石が堆積。

2. 黒褐色粘質土 軽石を少し含む。

3. 暗黄褐色土

4. 褐色粘質土 C軽石を含む。

5. 淡褐色土

6. 淡褐色土 C軽石を含む。

7. 黄褐色粘質土

8. 茶褐色粘質土

9. 暗茶褐色土 軽石を少し含む。

10. 淡茶褐色土 C軽石を含む。

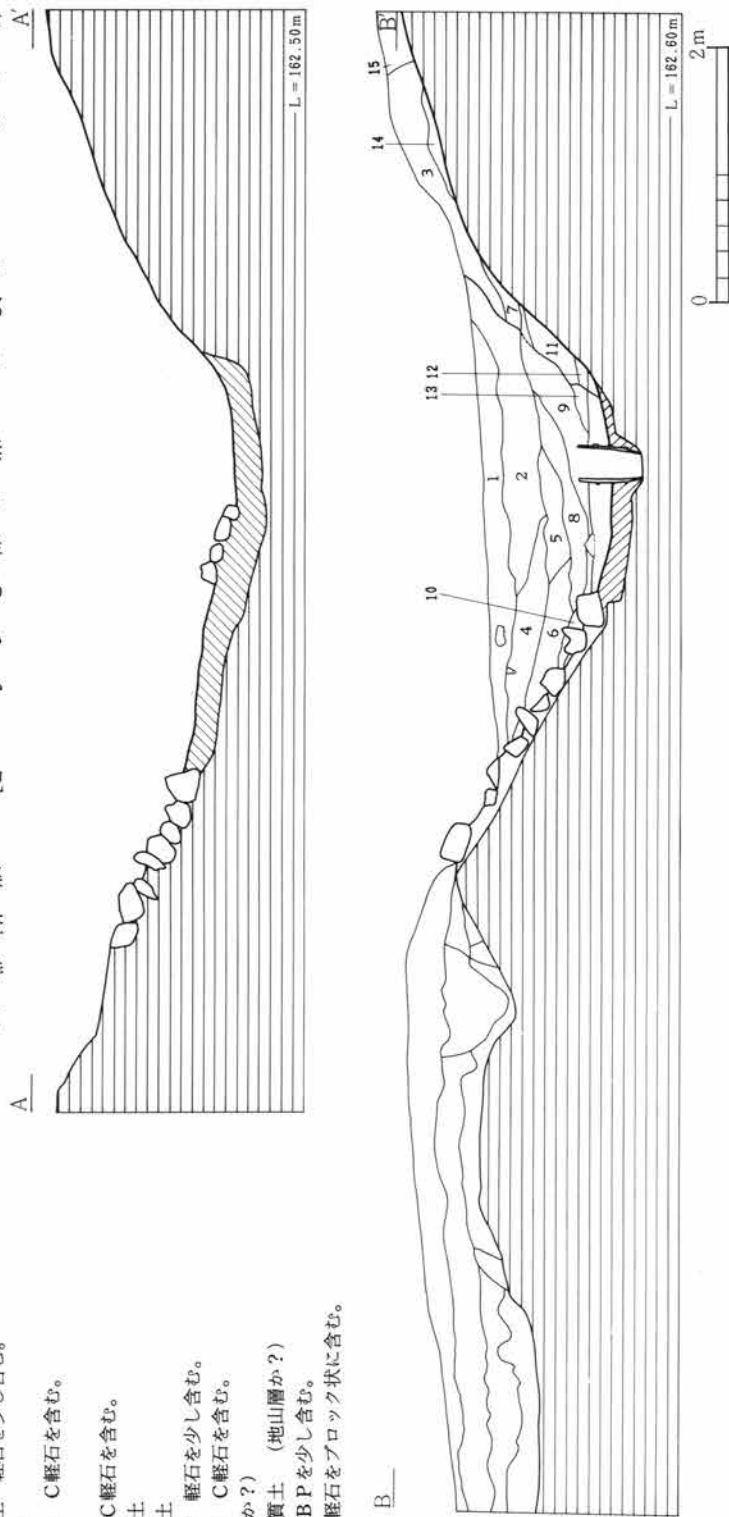
11. Y P (地山か?)

12. 淡茶褐色粘質土 (地山層か?)

13. 茶褐色土 B Pを少し含む。

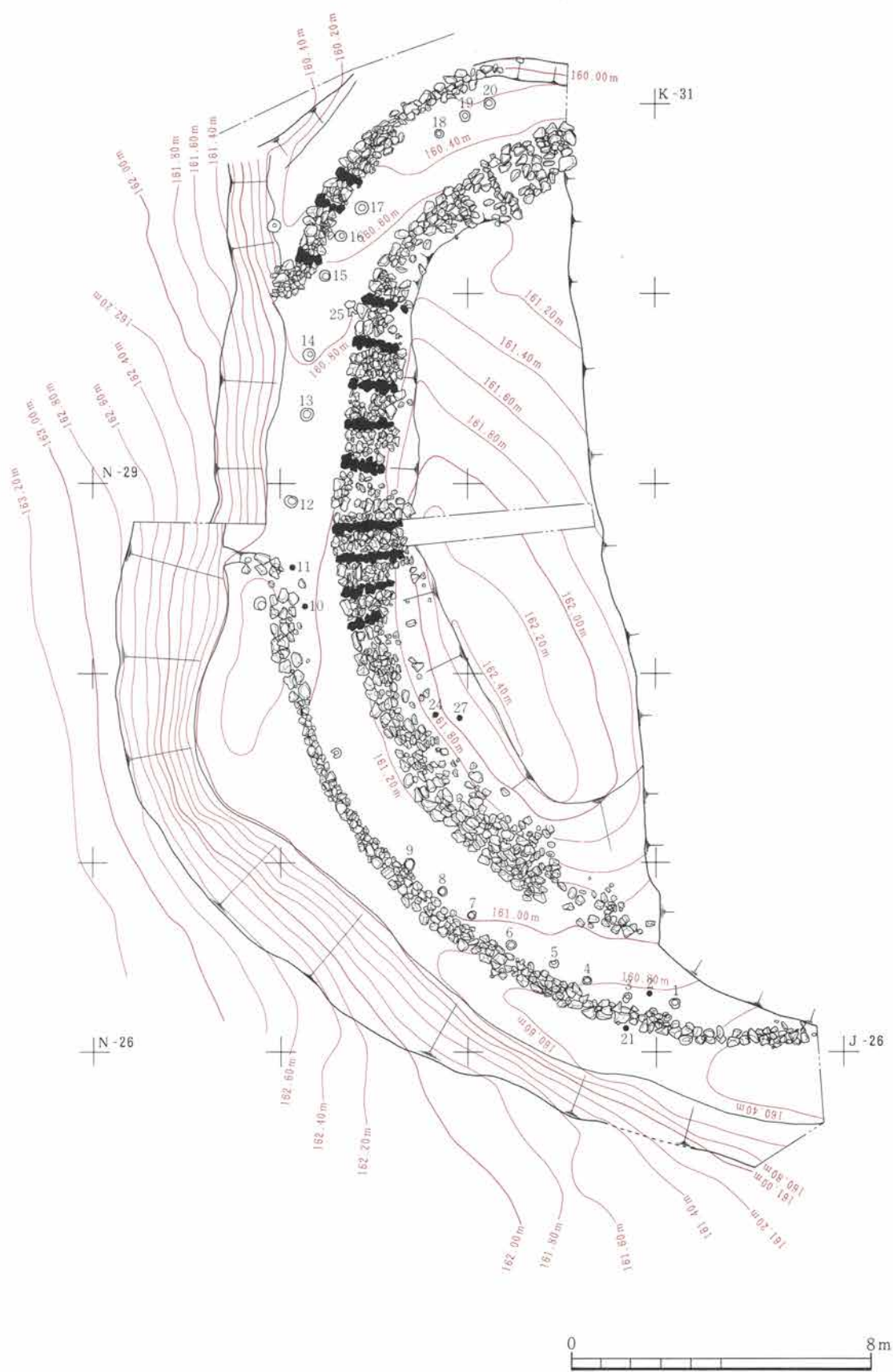
14. 黄褐色土 軽石をブロック状に含む。

15. 攪乱土層



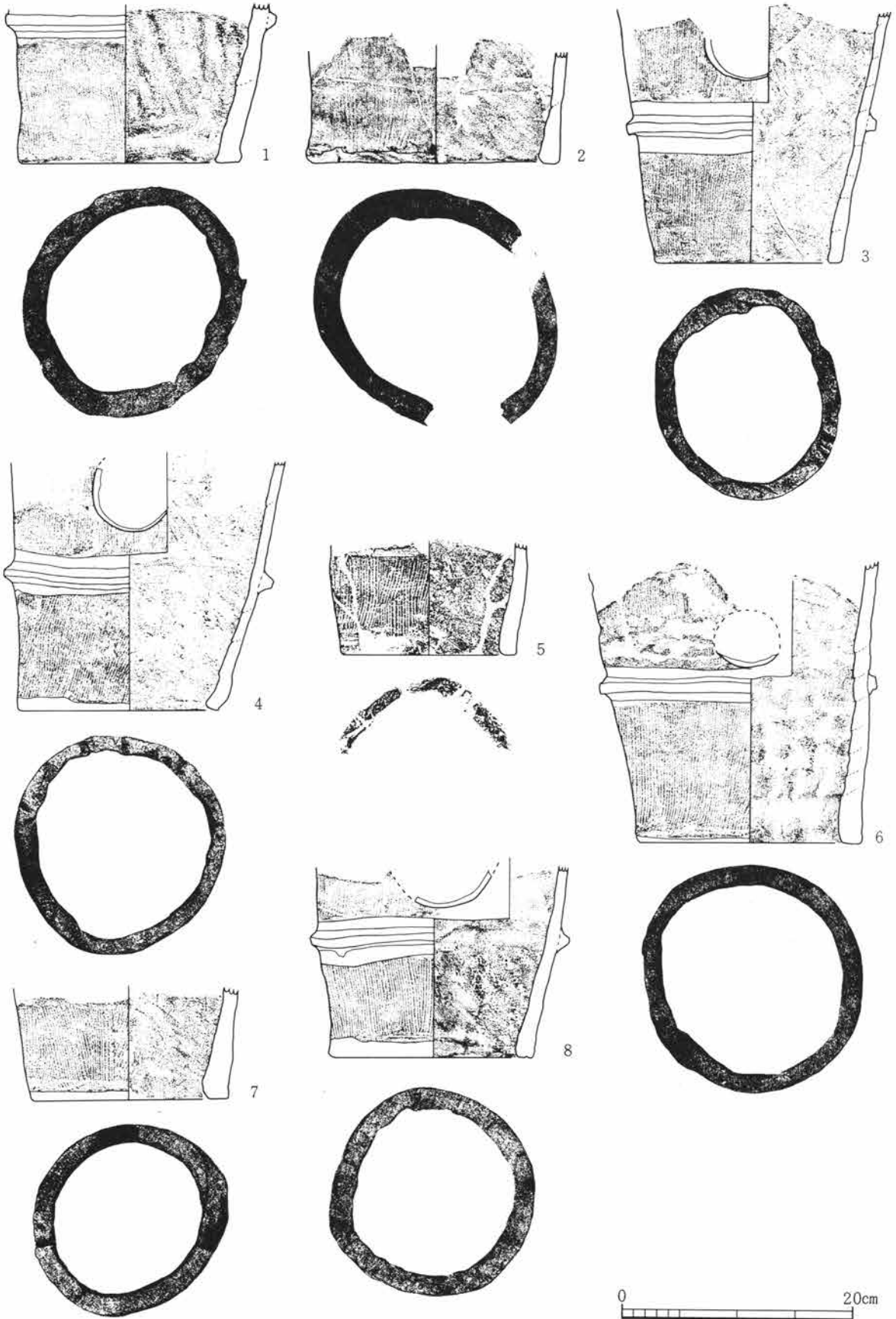
第28|図 21号墳周堀地層断面実測図

III 検出された遺構と遺物



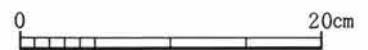
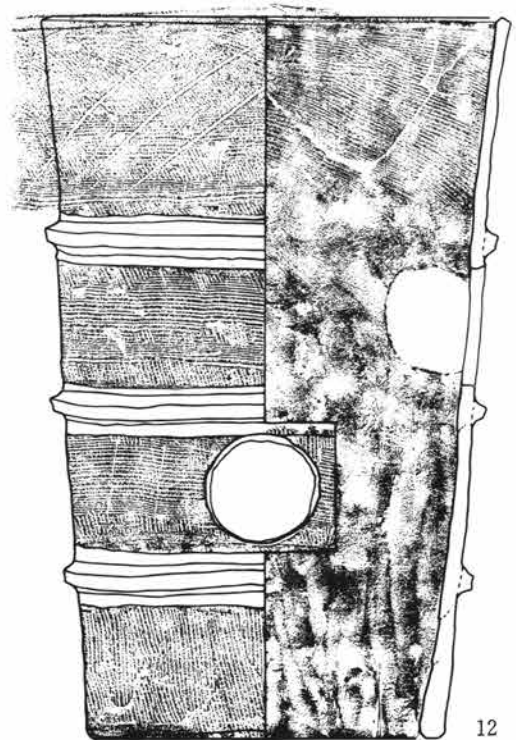
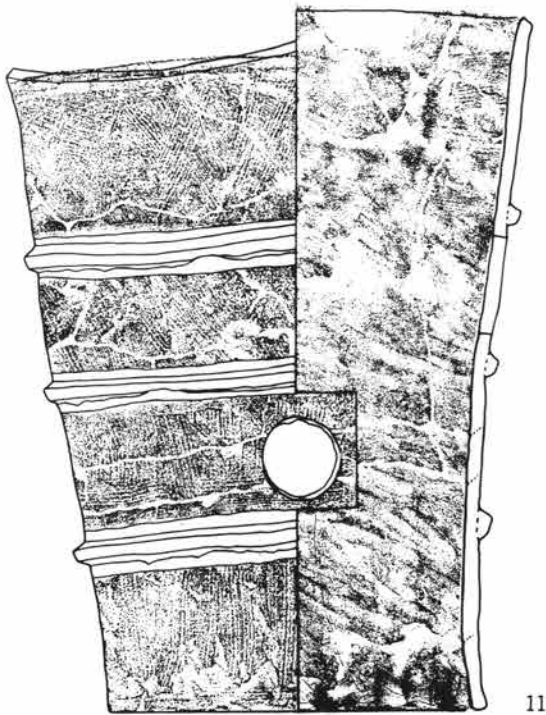
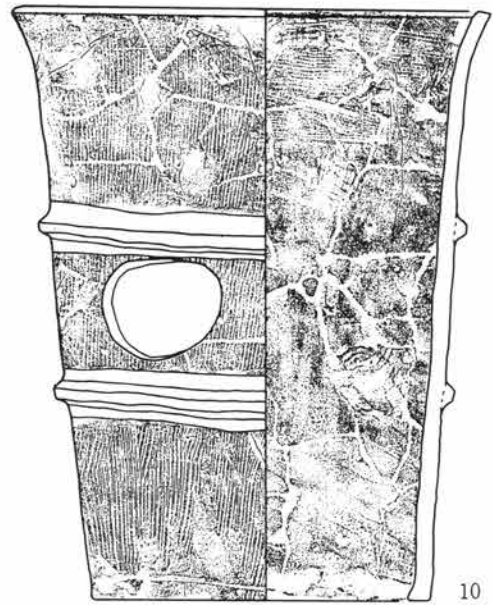
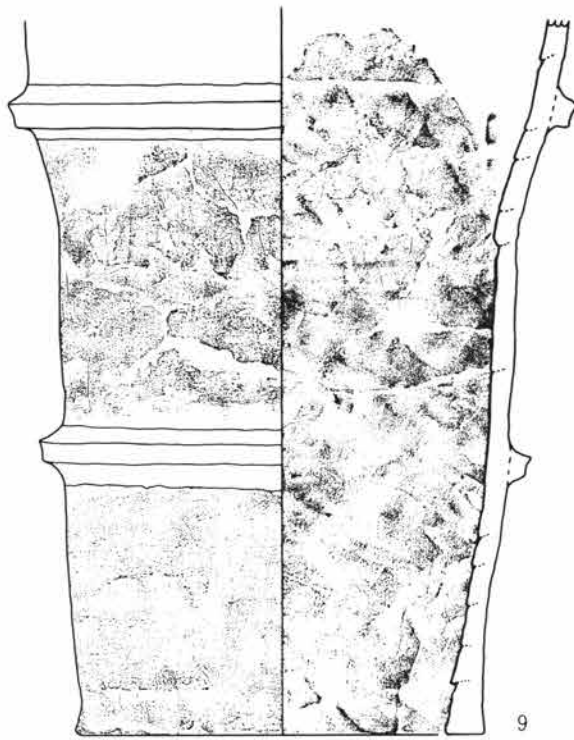
第282図 21号墳墳丘実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物

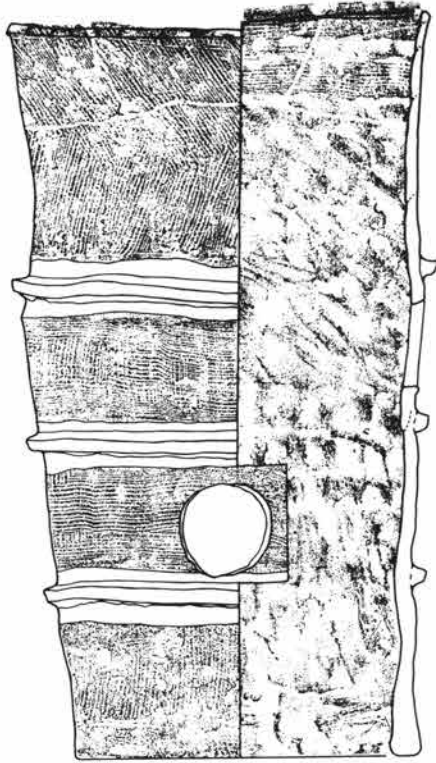


第283図 21号墳出土円筒埴輪実測図(1)

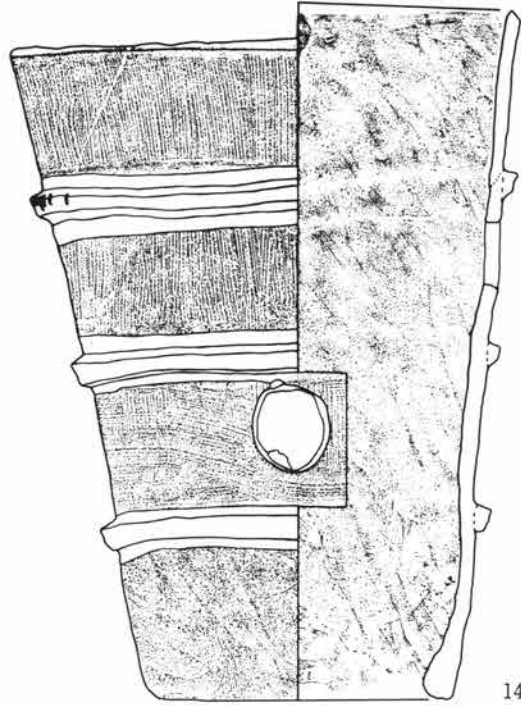
III 検出された遺構と遺物



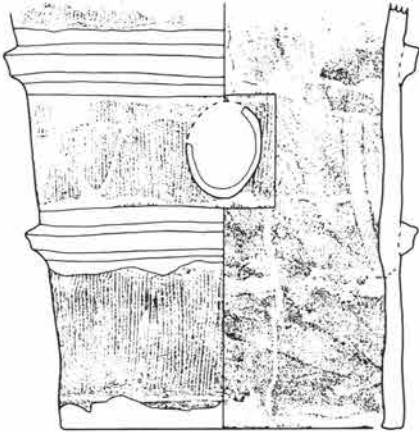
第284図 21号墳出土円筒埴輪実測図(2)



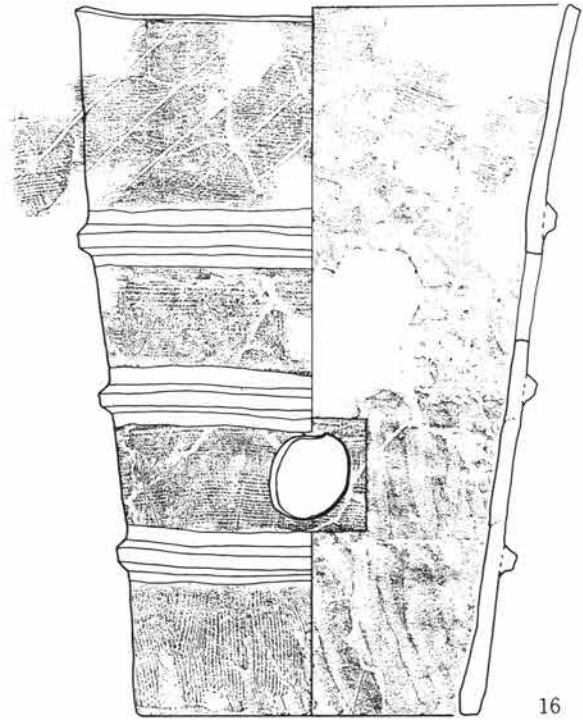
13



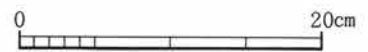
14



15

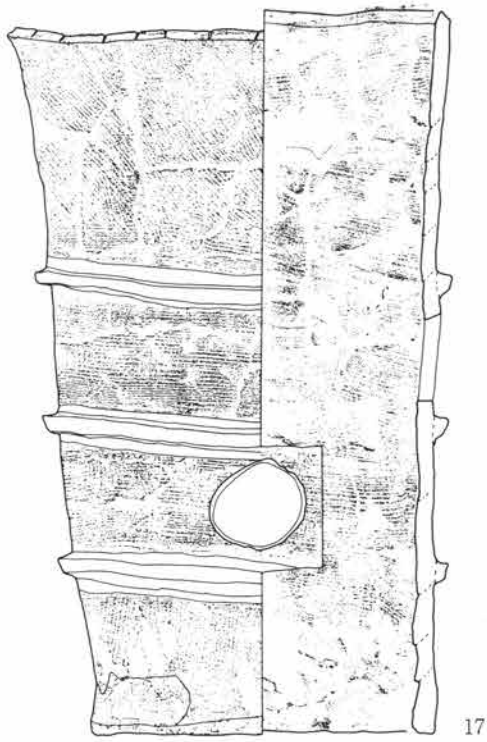


16

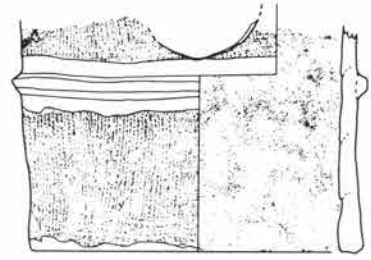


第285図 21号墳出土円筒埴輪実測図(3)

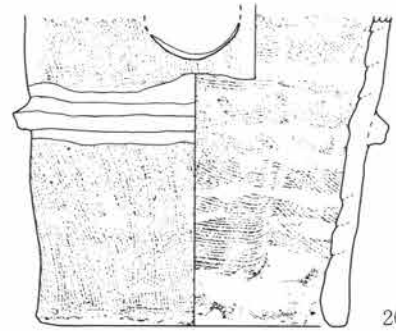
III 検出された遺構と遺物



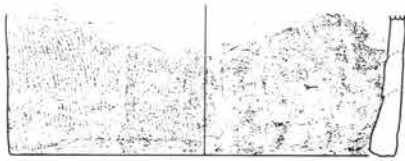
17



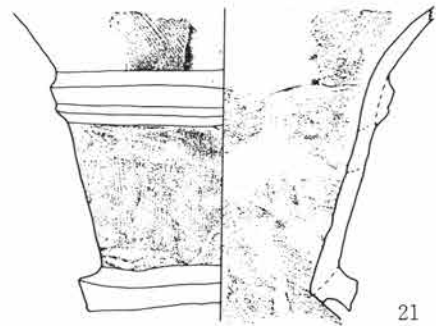
19



20



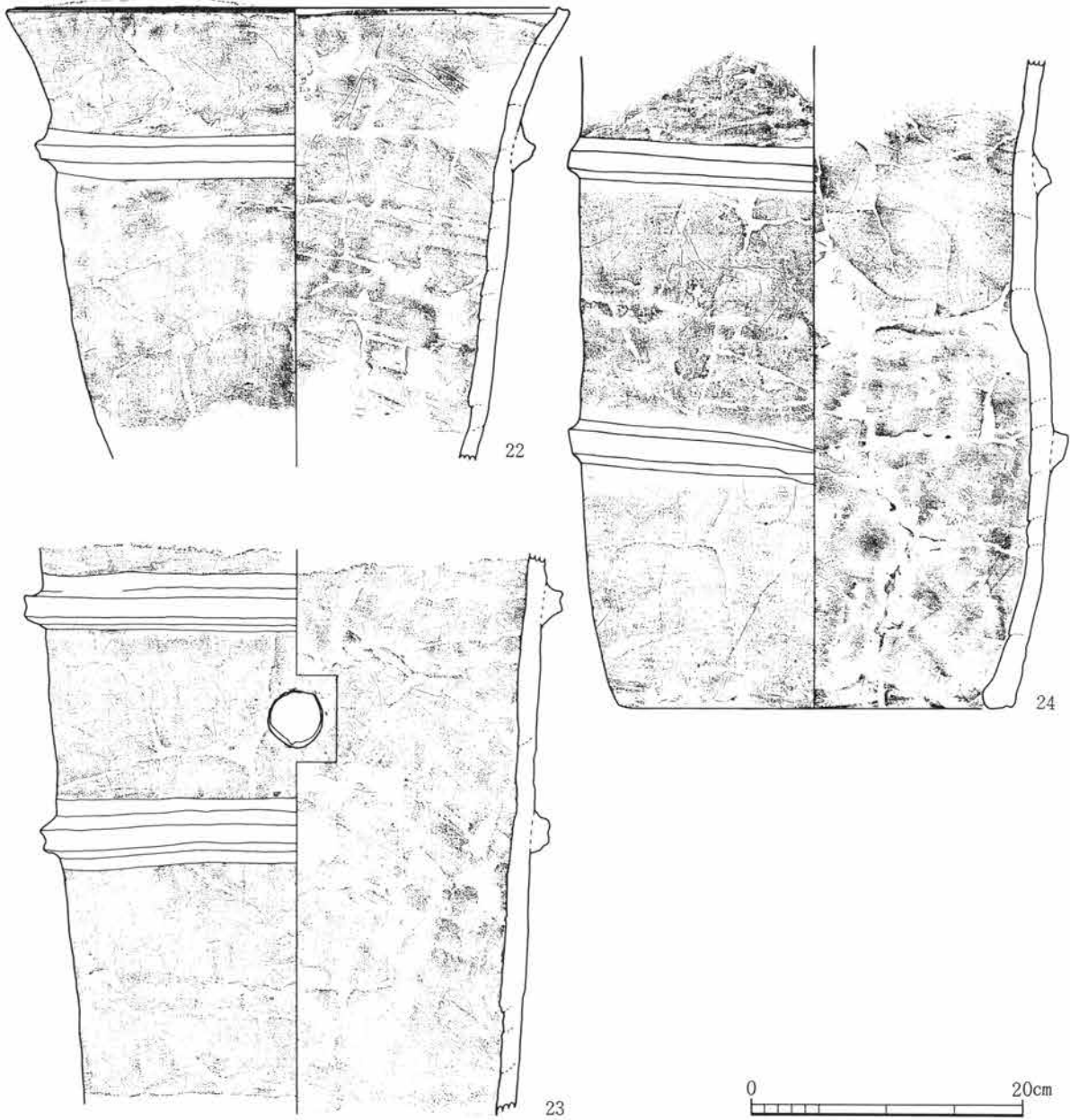
18



21

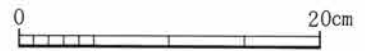
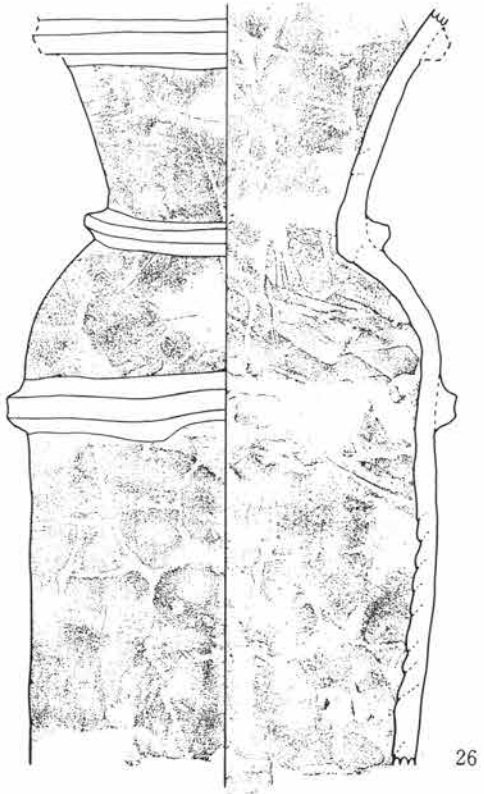
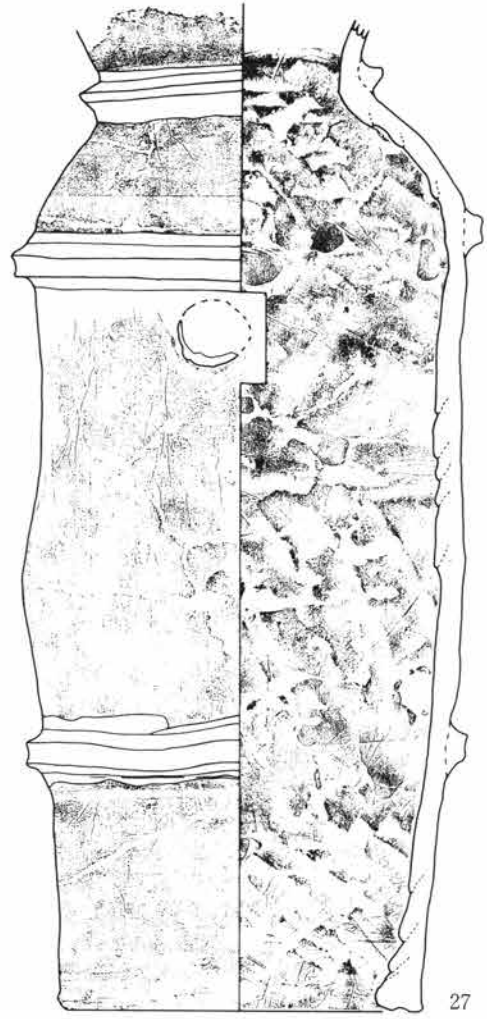
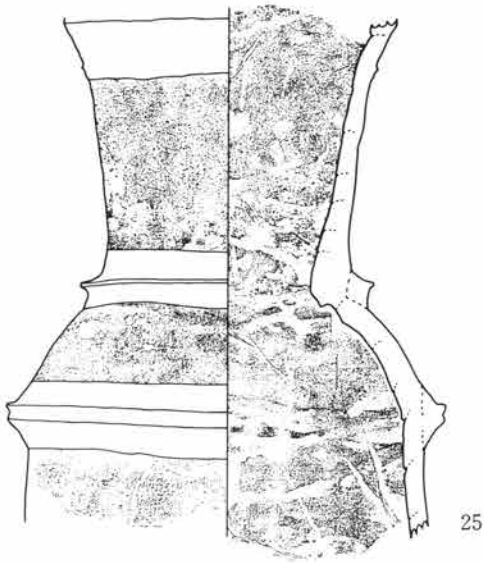
第286図 21号墳出土円筒埴輪実測図(4)



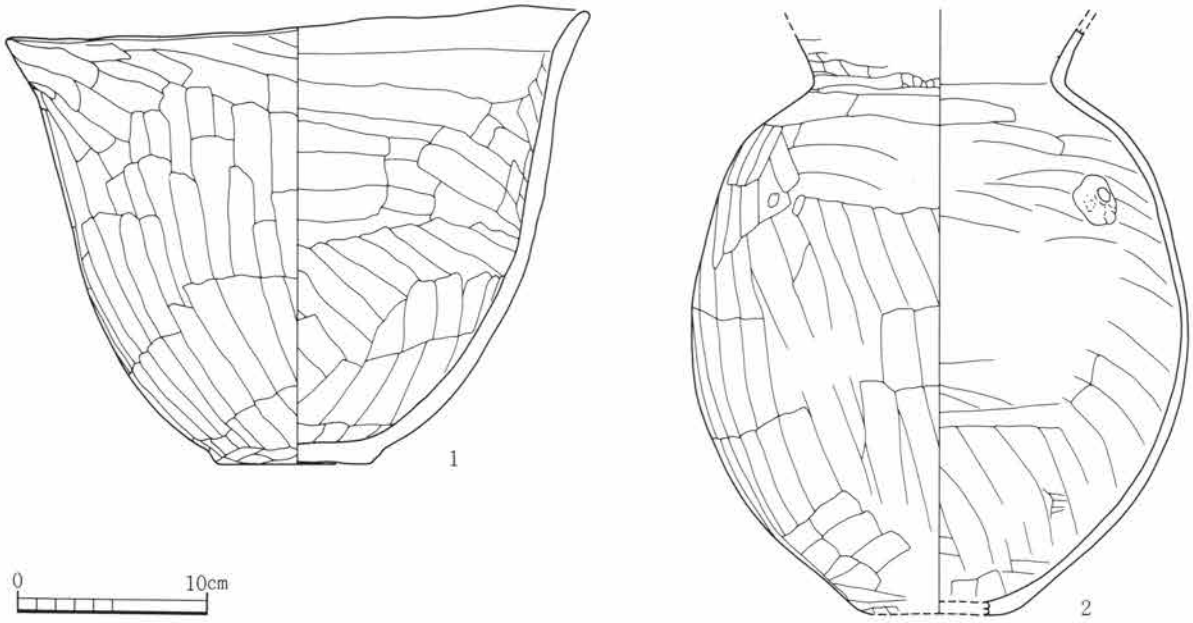


第287図 21号墳出土円筒埴輪実測図（5）

III 検出された遺構と遺物



第288図 21号墳出土円筒埴輪実測図(6)



第289図 21号墳出土遺物実測図



22号墳《第290～295図、図版94・95・154・168》

1. 位置と調査前の状態

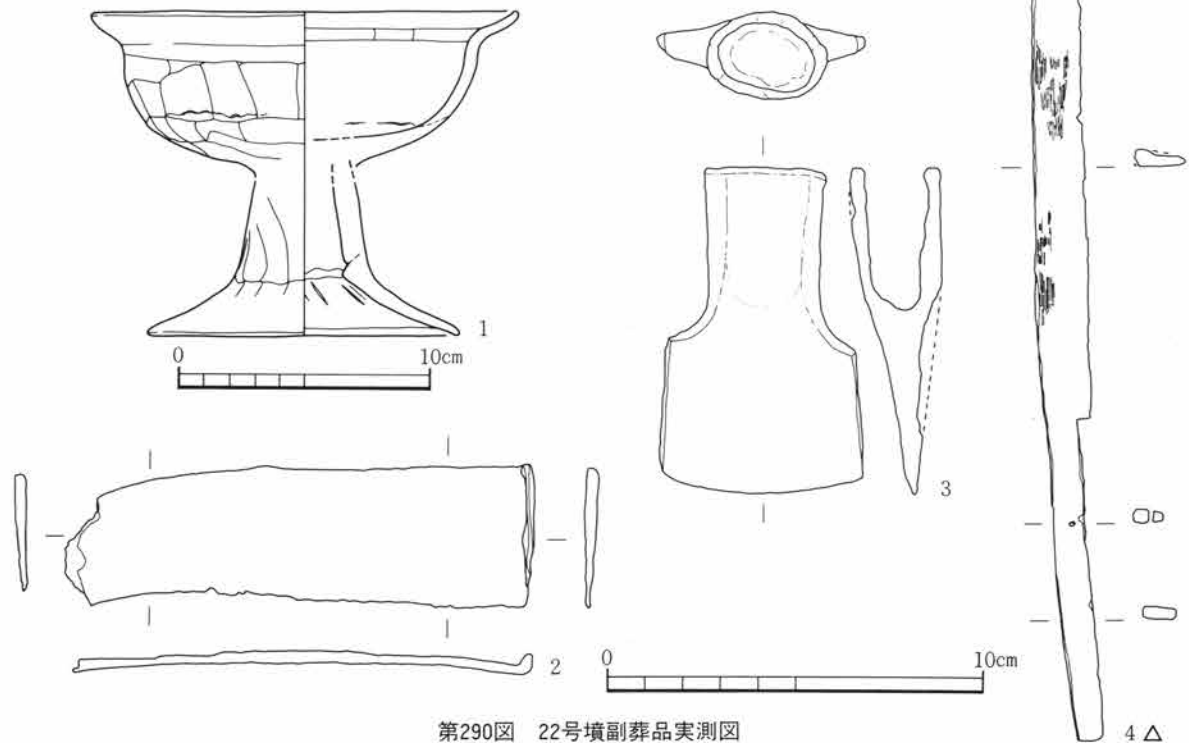
傾斜角8°程の北向きの緩斜面に広がる荒地であり、重機による表土掘削を行った際に壁石の一部が露出した為に、初めて古墳であることが判明したものである。古墳群の中では他とは隔絶した位置に在り、最も近い20号墳から南東方向65mの位置に占地していた。周堀・墳丘・葺石・埴輪列等の外部施設は全く検出されなかった。

2. 内部構造

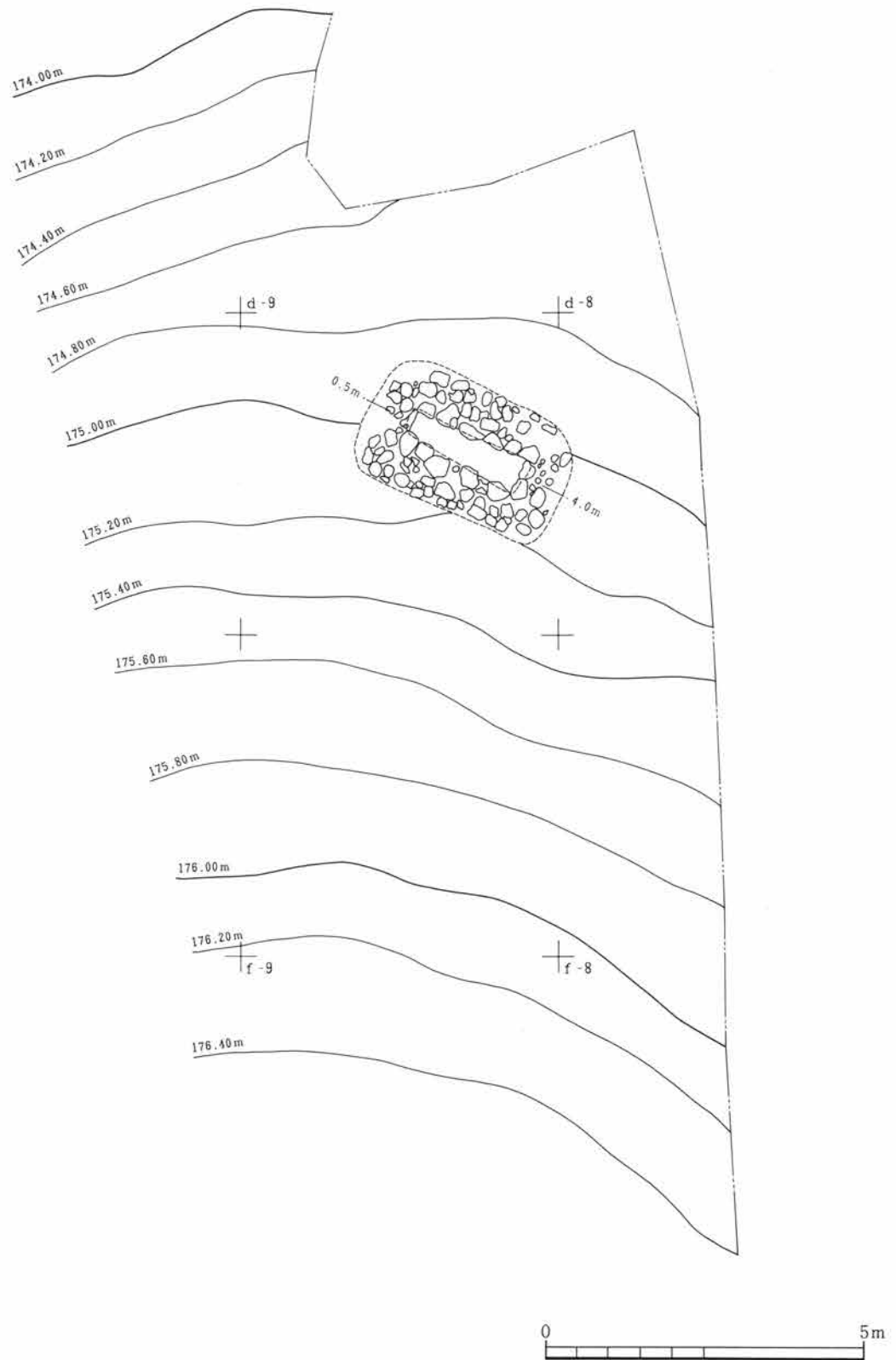
石室の規模と形状 石室は、河原石と粗粒安山岩の垂角礫によって構築されており、東西方向が長く、西側よりも東側の小口部がやや広い小竪穴式石室であり、主軸をN116°Eにとる。壁体には赤色塗彩が施されていた。各部の計測値は以下の通りである。東壁長 西壁長 南壁長 北壁長 主軸長

56cm 37cm 188cm 190cm 191cm

石室の掘り方 形状は、東西方向が長く、東側よりも西側がやや広い隅丸不整形を呈し、10°程の傾斜を以て地山層まで掘り込まれており、深さは現状で23～40cmを測る。主軸方位はN-121°-Eであり、石室の主軸と若干ずれている。底面はほぼ平坦であり、



第290図 22号墳副葬品実測図



第291図 22号墳周辺地形図

III 検出された遺構と遺物

標高は174.65mを測る。各部の計測値は以下の通りである。

	上端	下端
東西方向	335cm	305cm
東辺	182cm	165cm
西辺	217cm	182cm

床面の状態 天井石は既に検出された時点で除去されており、石室内には黄褐色粘土と軽石粒を含む褐色土が約15cm、その下層に黄褐色粘土と軽石粒を含む暗褐色土が約20cmの厚さで堆積しており、床面の一部も若干攪乱を受けていた。造作は、掘り方の底面に厚さ10cm程の板状の石を敷き並べ、その上に玉石を敷いて床面としていた。

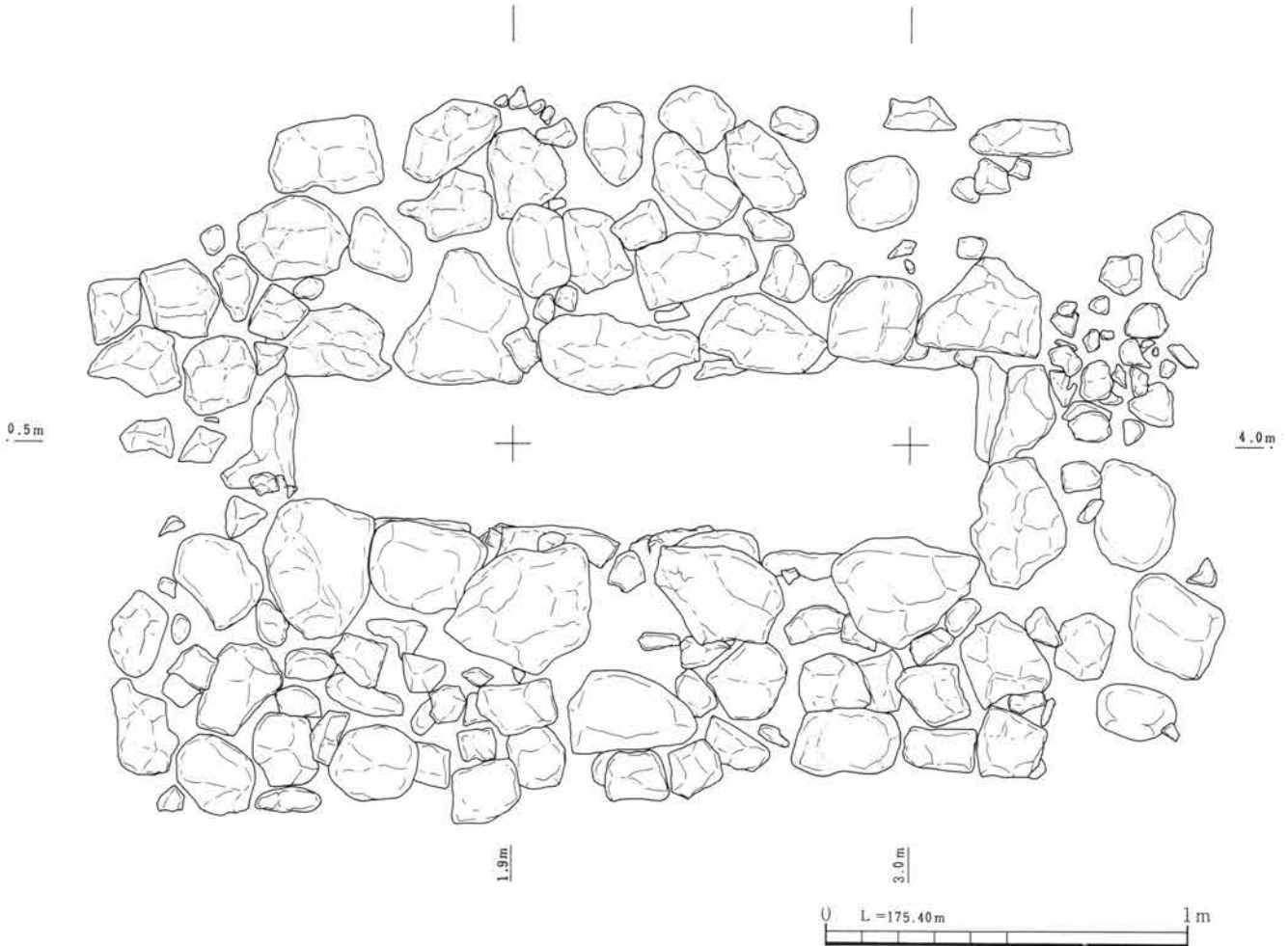
石室の構造 壁体は40cm代の河原石の横面を用いて構築されており、東壁が約25°外傾する他はほぼ垂直に積み上げられていた。現状で、東壁3段(39cm)・

西壁1段(23cm)・南壁3段(55cm)・北壁2段(40cm)が残っており、横目地を通す様に意識しながら互目積みによって構築していた。石室の解体時には、最初に東辺の根石を据えて右廻りに作業を進めて行ったのではないかと考えられる次の2点の事実が観察された。まず、西壁は南壁の上に乗って北壁に押えられていた。次に、北辺の東から2・3番目の根石は他とは異なり、小口面を利用して石室全体の長さを調節するかの様に据えられていた。

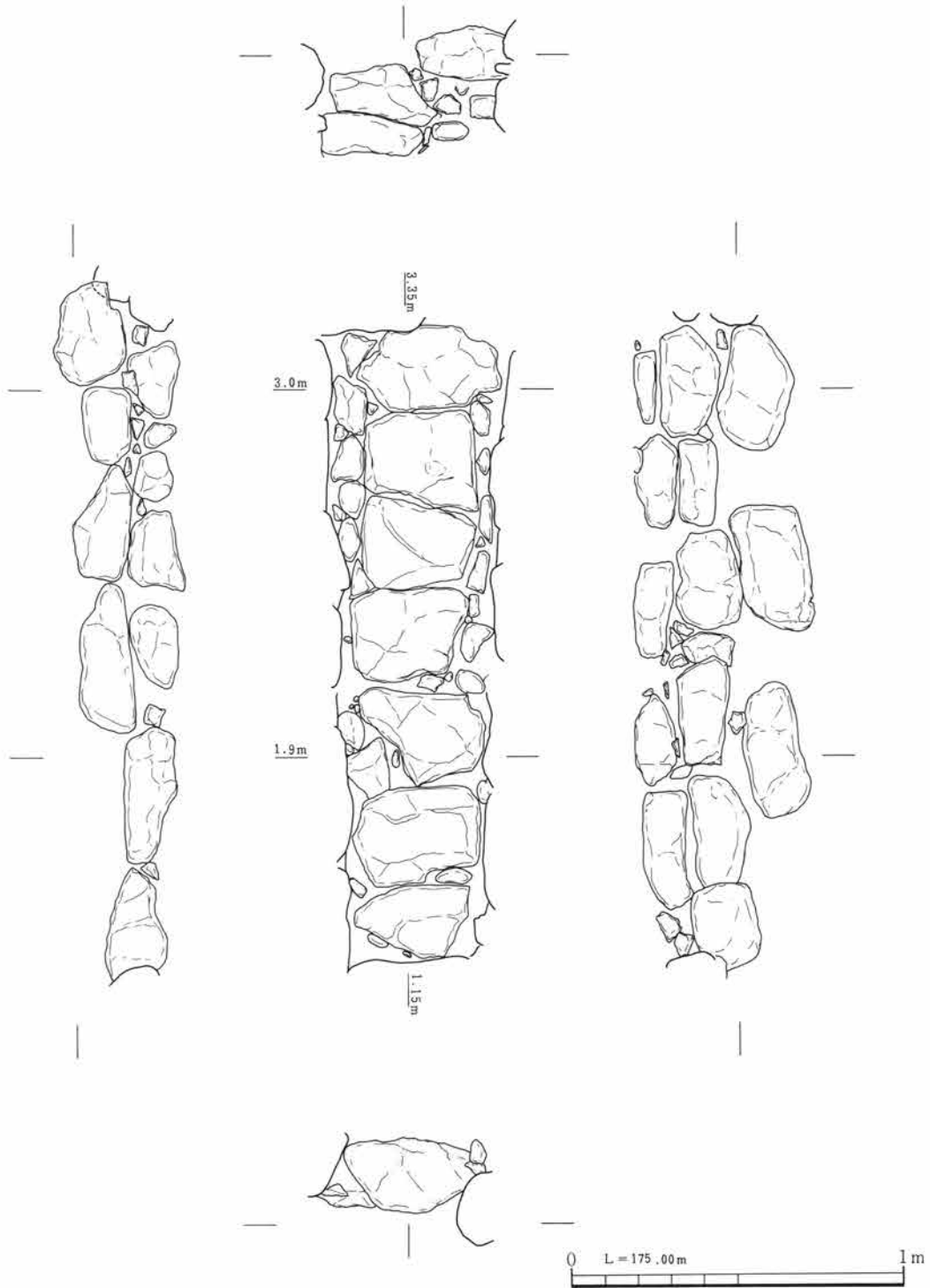
掘り方の法面と壁体との間の裏込めには、壁材よりも一回り小さい粗粒安山岩の亜角礫と黄褐色粘土がぎっしりと詰め込まれていた。

3. 出土遺物

土師器高坏は石室の覆土上層部より破片となって出土したものであり、天井石が除去された際に石室内に落ち込んだものと思われる。



第292図 22号墳石室平面図

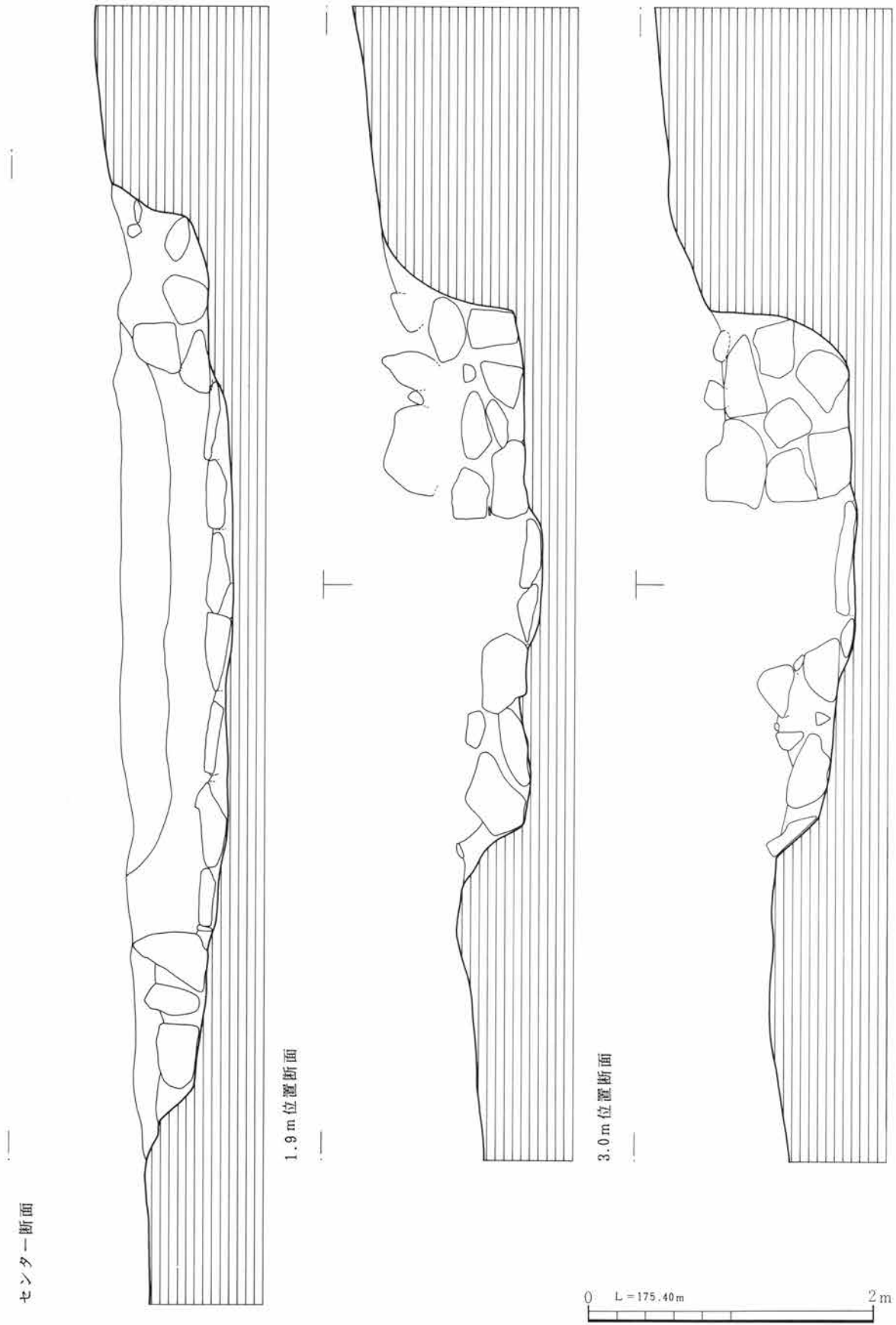


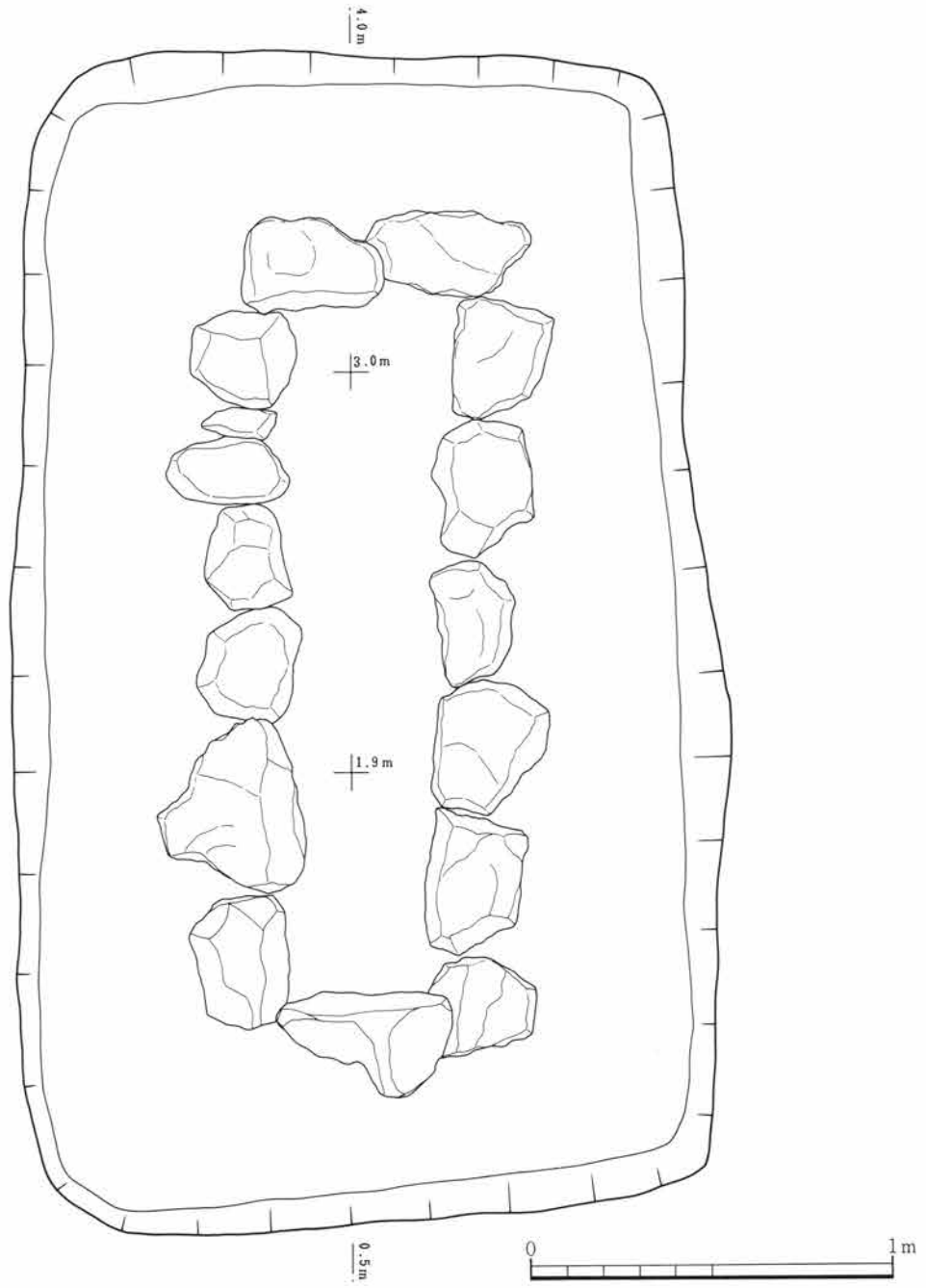
第293図 22号墳石室展開図

副葬品は、北東隅の床面上に、切っ先を西に、刃部を南に向けた刀が遺存しており、西壁際からは、曲刃鎌と袋状有肩鉄斧とが各々1個まとまって出土した。

棺の使用を裏付ける様な遺物及び遺骨は残っていない

なかったが、石室の形状及び遺物出土状況等から推して、頭位東側で直接埋葬されたものと考えられる。また、遺物の示す時期相からは、本墳の築造年代として5世紀第4四半期が考えられる。（飯塚）





第295図 22号墳石室根石・掘り方実測図

(2) 竪穴住居跡

17号住居《第296～298図、図版169・170》

位置 Q-17グリッド

形状・規模 遺構確認面の土層と埋没土との識別が困難で、壁面の検出に難渋を極めた。北壁は攪乱坑により全て削平されていたが、南北に長軸を持つ小型の矩形を呈していたものと思われる。規模は、東西方向が3.08mを測り、南北方向の残存長が3.57mで、4.00m程を推定できる。

長軸方位 N-25°-E 残存面積 9.45㎡

周壁 黒褐色粘質土を掘り込んで形成されていた。東西の壁は、北半部分でこの土層の上位に赤みの強い茶褐色土が堆積していたため、埋没土との識別をより困難なものとしていた。

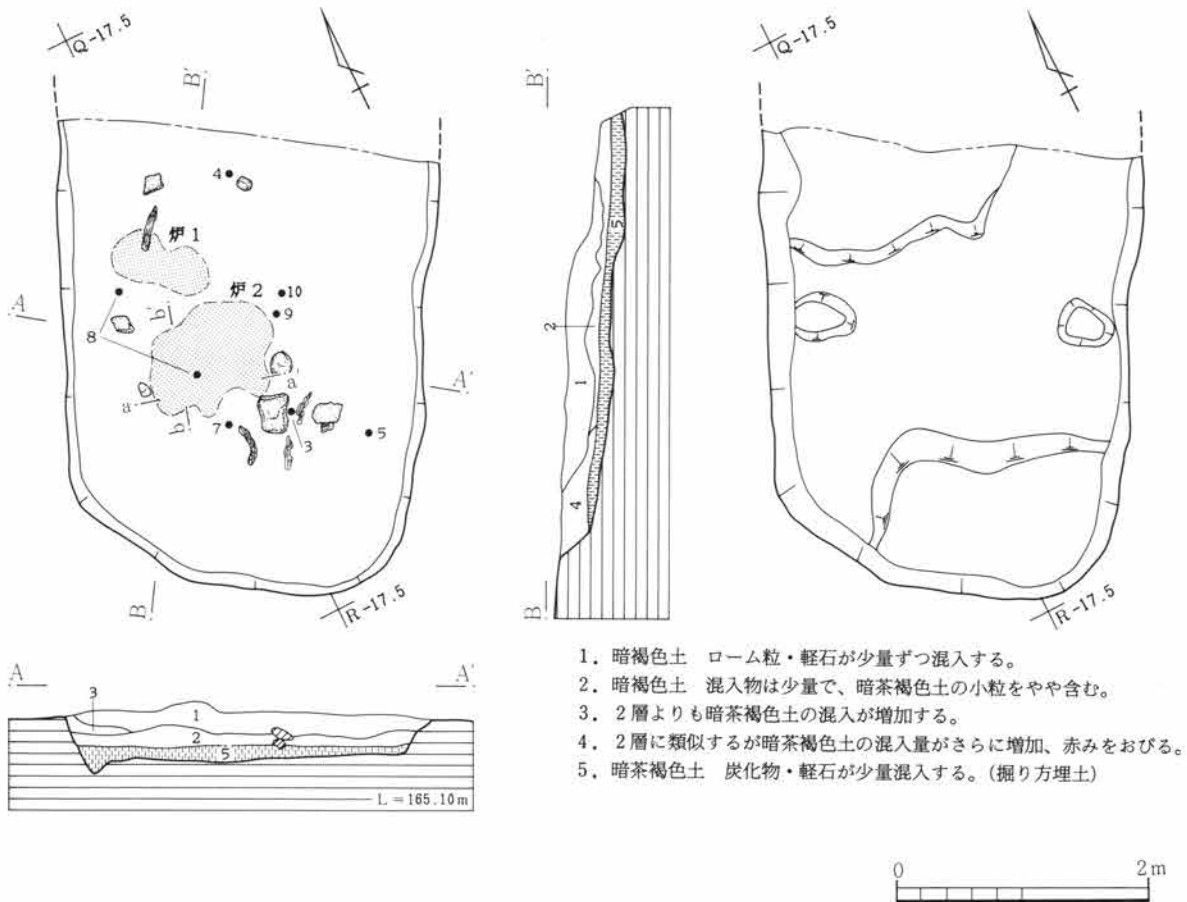
床面 全体に軟弱であった。深さ6cm程の掘り方が

有り、暗茶褐色土が堆積していた。

埋没土 黒みの強い暗褐色土が堆積していた。地山との相違は、色調が灰色みを帯び、炭化物や軽石が若干含まれる程度であった。また、中層からは炭化材の大片が数個検出された。2号炉北側から出土したものは径10cm程の棒状を呈していた。

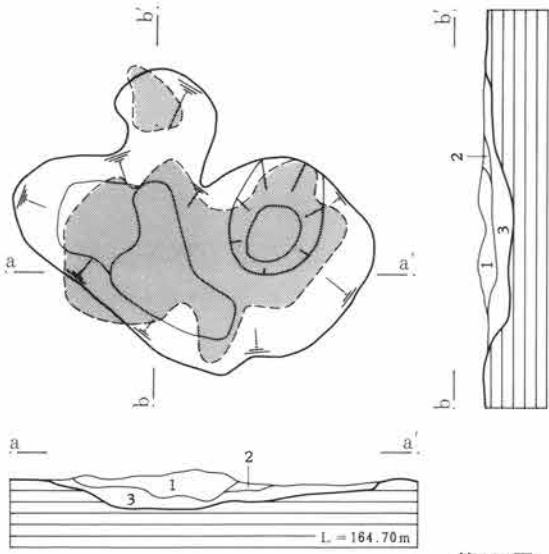
炉 検出した床面の中央からやや南西寄りに、主体的に機能したと考えられる2号炉が、その北側に1号炉が位置する。1号炉の掘り込みは不明瞭であったが、床面の焼土化が著しく、焼土のブロックが東西方向に3箇所認められた。2号炉は径30cm程の円形の掘り込みが東西方向に2基連なり、これを埋めるように焼土のブロックと炭化物が90cm四方の範囲に広がっていた。また、壺(1)は細片となり、一帯に散らばって出土した。

遺物の出土状況 炉内出土の壺(1)の他はいずれも小破片であった。2号炉の東側からは長さ30cmの偏



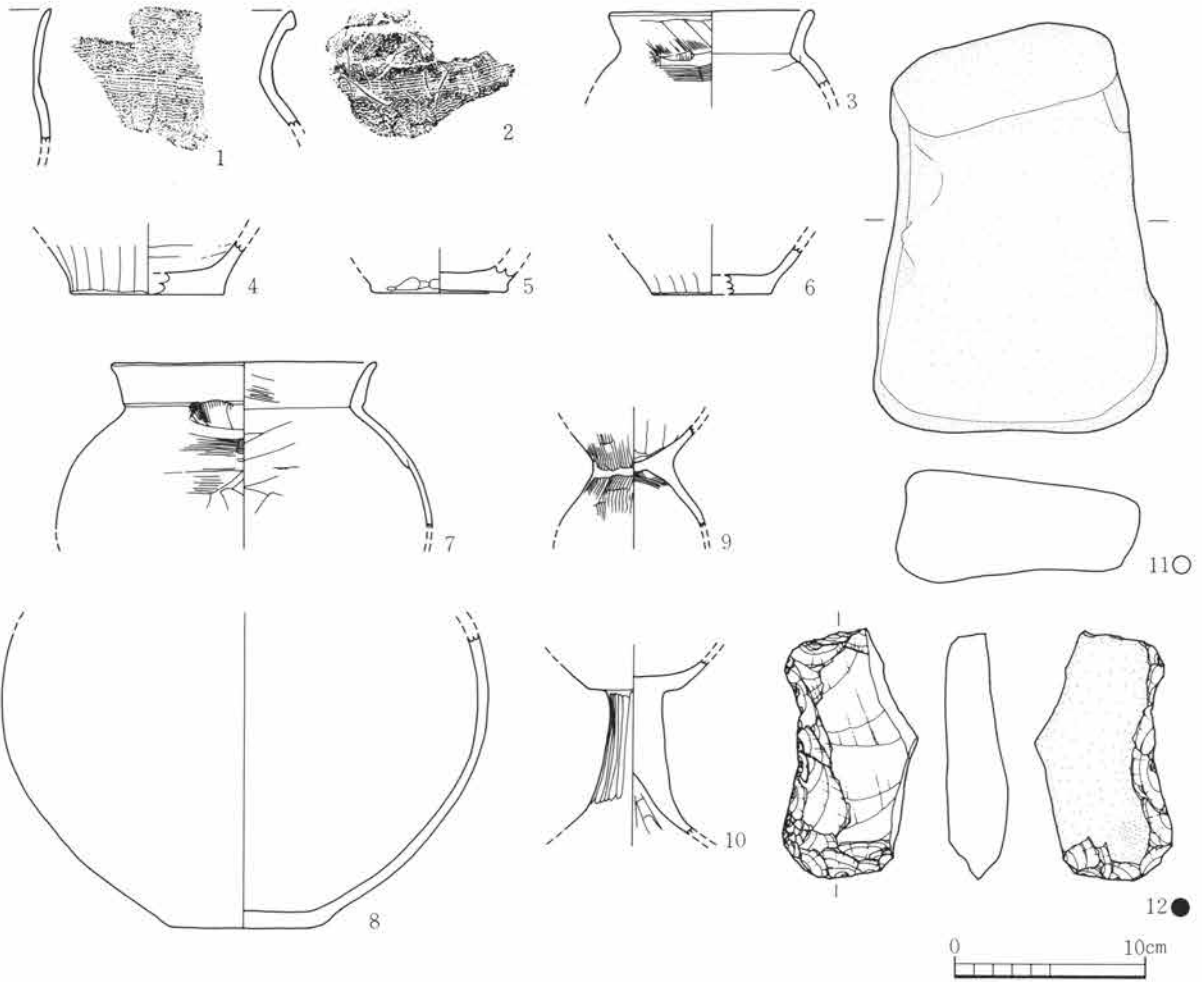
第296図 17号住居実測図

4. 古墳時代の遺構と遺物



- 1. 焼土ブロック
- 2. 炭化物・灰層
- 3. 暗褐色土 灰色みをおびる。炭化物・焼土が少量混入する。

第297図 17号住居炉実測図



第298図 17号住居出土遺物実測図

III 検出された遺構と遺物

平な礫(11)が出土した。器面には人為的な摩耗痕がある。

備考 本住居の南側では弥生土器の分布が広範囲に認められた。出土層位は本住居の床面よりも10~30

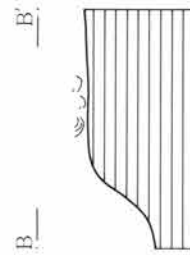
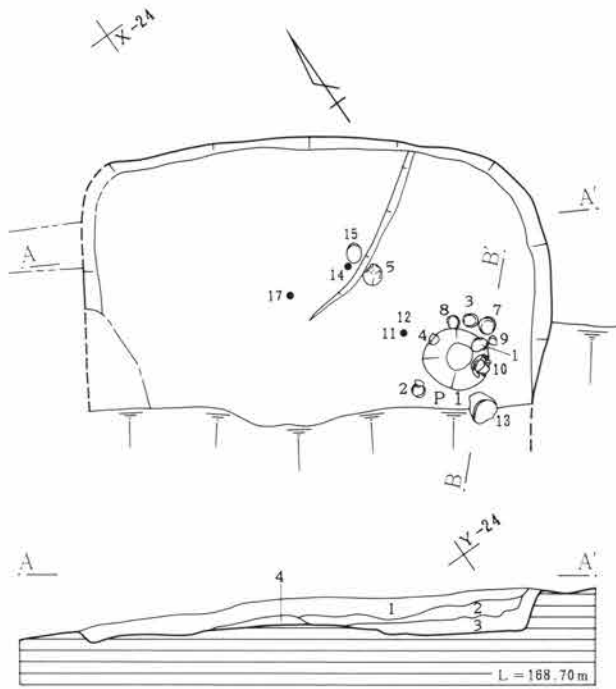
cm以上高く、本住居との直接の関係は無いと思われる。焼土等の散布も無く遺構の特定には至らなかった。(徳江)

21号住居《第299~301図、図版168・170》

位置 X-24グリッド

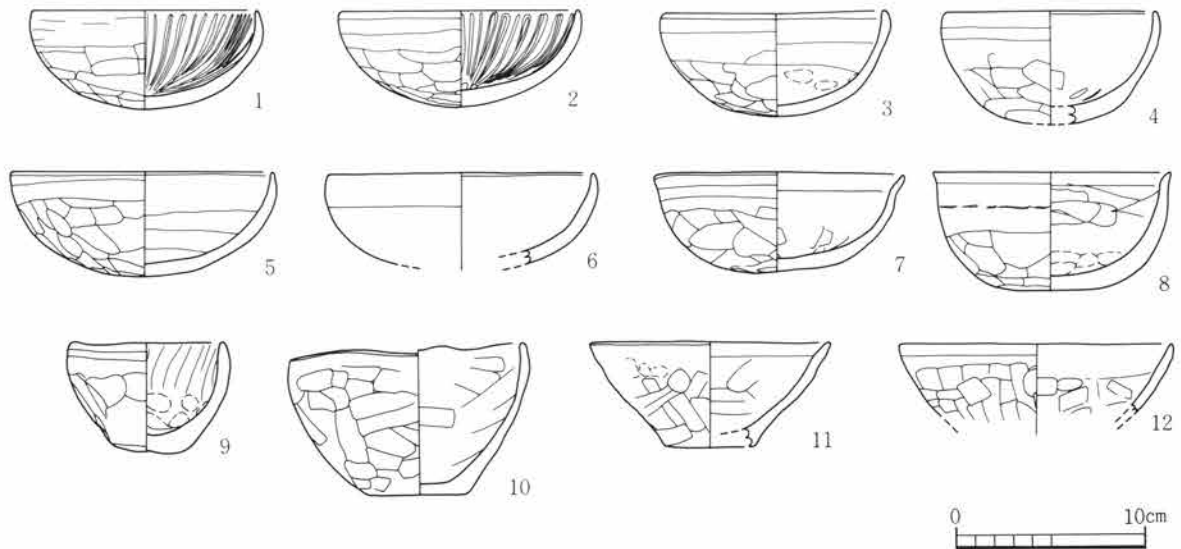
形状・規模 南壁を初めとした南側部分は地辻により、1m程下位に滑落し、その後の耕作により削

平されたものと考えられ検出できなかった。検出部分は、東西方向3.84mを測り、南北方向の残存長は2.28mであった。北東隅の形状は隅丸で、これが原形に近いものと考えられるので、本住居は隅丸の矩

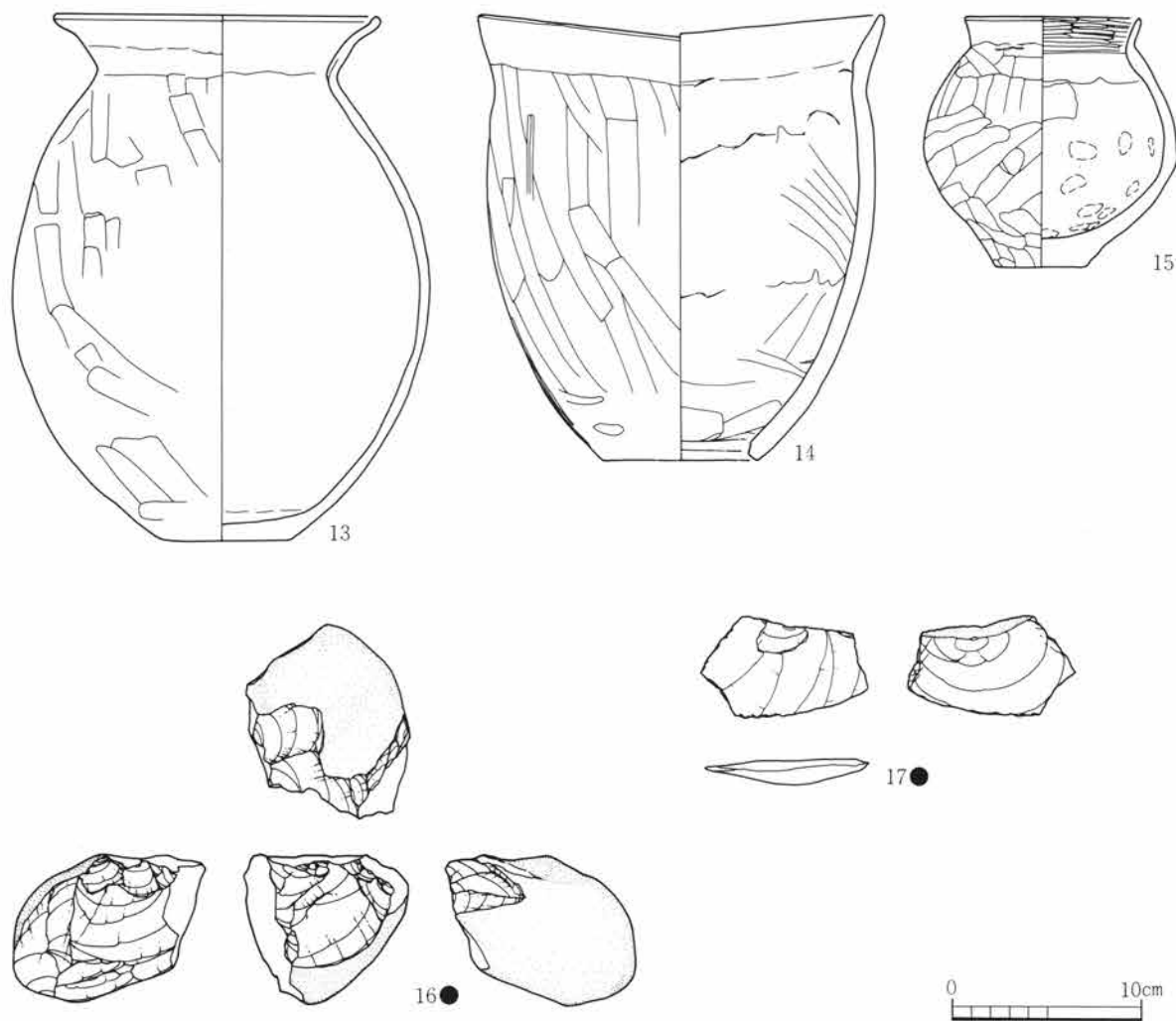


1. 暗褐色土 やや黒みをおびる。軽石・炭化物がまばらに混入する。
2. 暗褐色土 茶褐色土の小ブロックが混入、炭化物も散見する。
3. 暗褐色土 2層よりさらに茶みをおびる。
4. 暗褐色土 黒みがあり、粘性に富む。

第299図 21号住居実測図



第300図 21号住居出土遺物実測図(1)



第301図 21号住居出土遺物実測図(2)

形を呈していたと思われる。

残存面積 17.12m²

周壁 黒褐色の粘質土層を掘り込んで構築されていたが、色調が埋没土と同様であったため識別が困難で、西側壁面は判然としなかった。残存壁高は10～31cmであった。

床面 黒褐色の粘質土とその下層のローム漸移層中にあつた。特に踏み固められたような様子は無かつた。全体に平坦な面を形成していたが、小型甕(15)と坏(5)の出土位置の間には、北東から南西方向に向け、地汙りにより小規模な段差が生じていた。

遺物の出土状況 P1の周囲とその北側の2箇所から集中して出土した。全てが土師器で、記録上では床面から3～6cm程遊離して出土しているが、床上の構造物の存在等を考慮にいれると、実際は床面直

上に置かれていた可能性が多である。1・2・3・7・8・9は完形で、9が倒置の他は口縁部を上にして置かれていた。また、10には他に鉢2個体が入れ子状態で検出された。北側のブロックからは細片化した甕(14)と坏(5)及び小型甕(15)が出土した。

備考 P1は径55×45cmの長円形を呈し、深さ67cmを測つた。埋没土はロームの小ブロックを含む黒褐色土である。貯蔵穴或は柱穴の可能性が考えられるが、住居の全体形状の把握が不可能な現時点での性格の特定は困難である。(徳江)

III 検出された遺構と遺物

27号住居《第302～304図、図版168・171・172》

位置 U-27グリッド

形状・規模 地汙りにより確認面に起伏が生じ、3段階に寸断されていた上に、9号墳の主体部とも重複していたため、残存状態は極めて悪かった。唯一確認できた南東隅はやや丸みを帯びており、全体形状は隅丸の矩形を呈していたものと考えられる。遺物の出土状況からすると、一辺6.40m以上の規模を有しており、U-28グリッドから出土した小型土器(7)も本住居に所属するものとする、一辺が9mを超す大型住居であった可能性もある。

周壁 ローム層を掘り込んでいるが、一部上層の黒褐色土の堆積が確認できた。

床面 東壁から2.5m程はローム層中に形成されていたが、それよりも西側は黒褐色土中にあり、U-27グリッドでは1.5m程の硬化面が検出された。

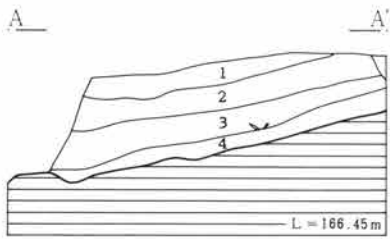
遺物の出土状況 南東隅及びP1・2の周辺に集中しており、図化或は資料化できたものは22点になる。床面直上からの出土は、高坏(12・18)、鉢?(5)で、その他は床面から5～10cm前後遊離していた。

備考 炉や貯蔵穴・柱穴等の諸施設は検出できなかった。P1・2は貯蔵穴の可能性もあるが、住居の全体像が把握できない現時点ではその性格を特定し難い。

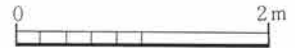
P1は径85cm程の規模で、深さ32cmを測った。壺(24)は胴下半を埋没させ、高坏(11・15)、甕(13)、小型広口壺(4)はこの上位から出土している。

P2は径60cm、深さ38cmで、上層からは高坏(12・17)、甕(22)が出土した。小型広口甕(9)は入れ子状に重なっていた。

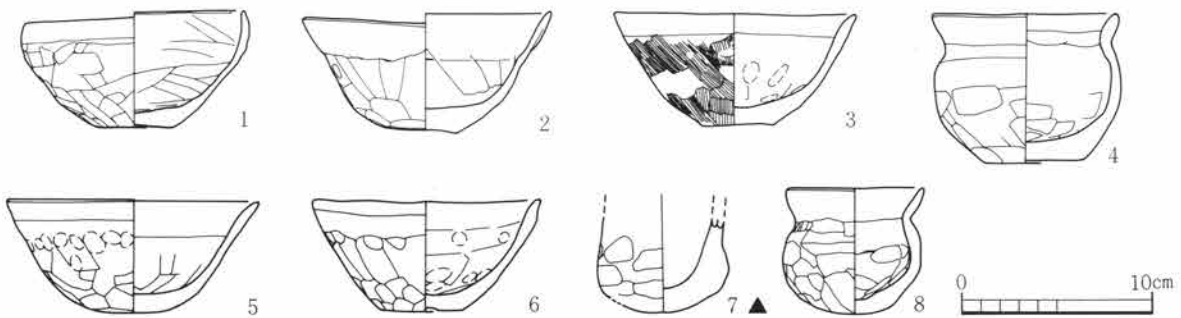
高坏(13・14)の北側から出土した礫は表面に強い火熱を受けた痕跡が確認でき、周囲の埋没土中や床面上からは、焼土の小粒や小ブロックが多数出土した。
(徳江)



1. 暗褐色土 茶褐色土粒が混入する。1～3層には炭化物も散見する
2. 暗褐色土 茶褐色土・軽石がまばらに混入する。
3. 暗褐色土 2層に類似するが混入物の量は減少する。
4. 暗褐色土 黒色土・茶褐色土のブロックが混入、粘性に富む。

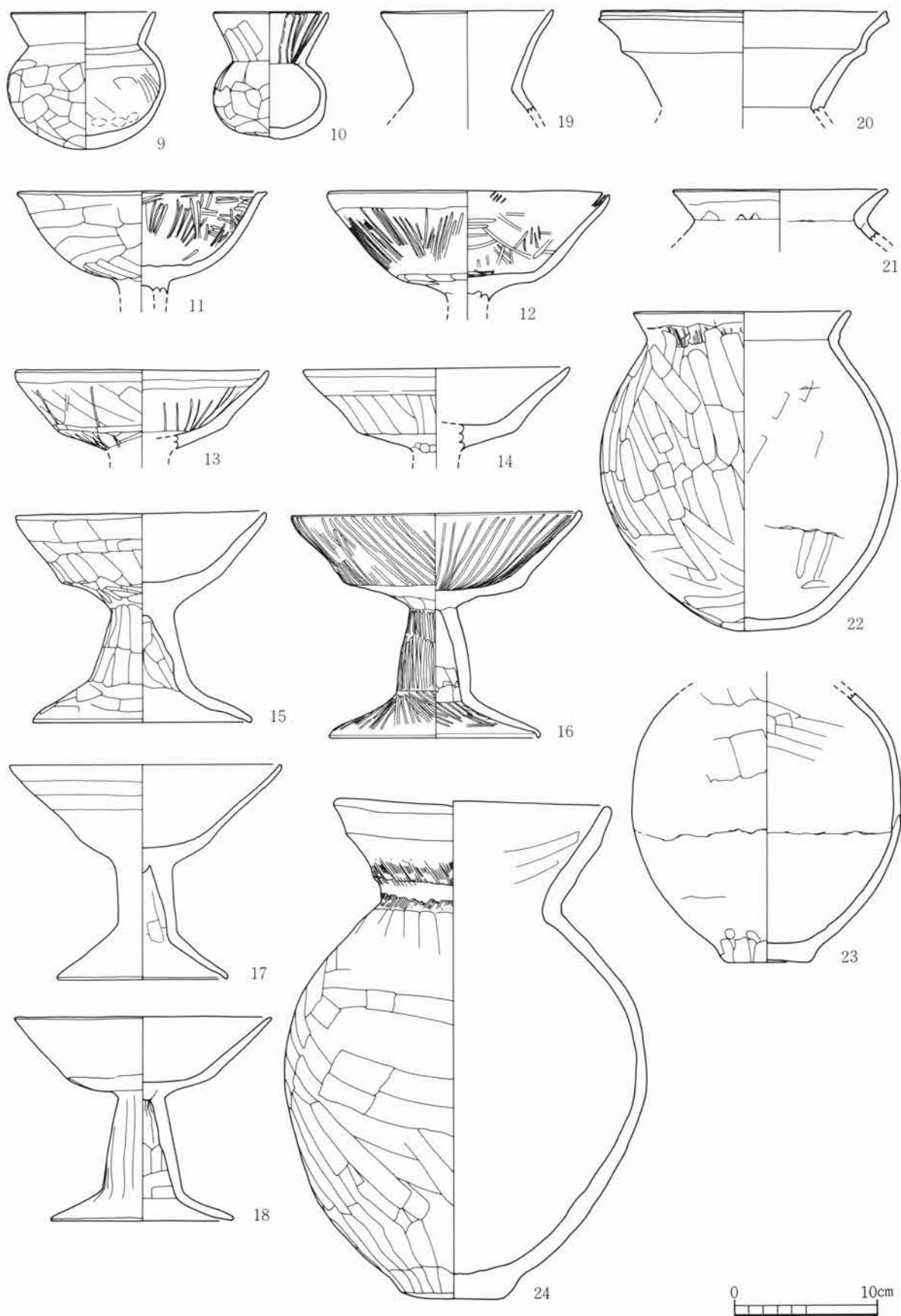


第302図 27号住居実測図



第303図 27号住居出土遺物実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



第304図 27号住居出土遺物実測図(2)

(3) 土坑

2号土坑《第305・306図》旧5号土坑

位置 K-42グリッド

形状・規模 長軸方向に、最大長216cm、最小長177cm、短軸方向に97cm、深さ25cmを測る不整形な台形状を呈する。長軸の方位はW-20°-Sである。

埋没土 暗褐色土を主体とした3層からなり、北西方向の土層断面の堆積状況から、自然埋没と思われる。

遺物の出土状況 中央北東よりに、底面から12cm浮いた位置で胴部を上に向けた状態で甕一個体が出土した。(根岸)

3号土坑《第305・306図、図版170》旧1号土坑

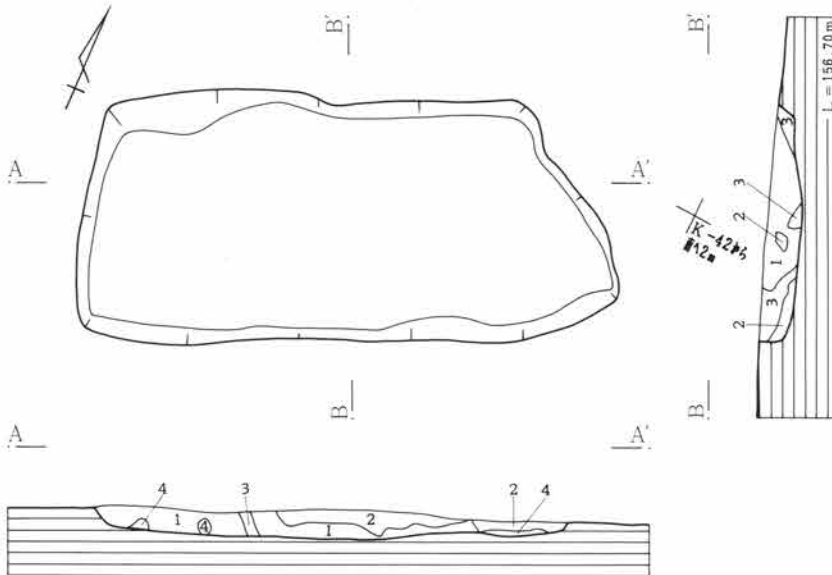
位置 b-9ポイントから南へ2m

形状・規模 長軸方向に、102cm、短軸方向に58cm、深さ16cmの楕円形を呈する。長軸の方位はN-85°-Wである。

埋没土 黒褐色土の一層のみで、異層の堆積は認められなかった。

遺物の出土状況 ほぼ中央より、底面から8cm浮いた位置で、長軸南東方向に口縁部を向け、押し潰された状態で埴一個体が出土した他は、該期の遺物の出土は確認されなかった。(根岸)

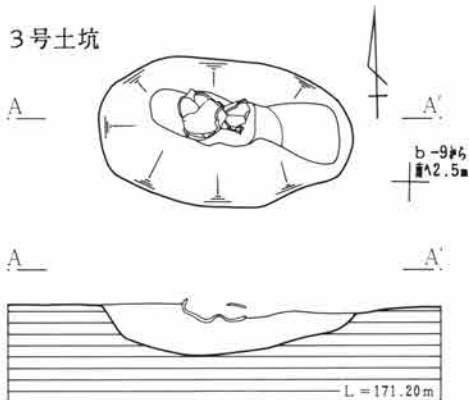
2号土坑



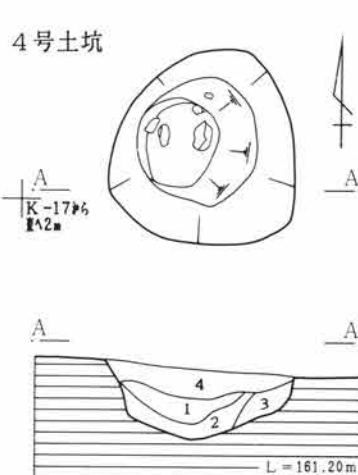
2号土坑

1. 暗褐色土 やや粘性がある。層中に2層がブロック状に点在する。
2. 黒褐色土 やや粘性がある。
3. ロームブロック

3号土坑



4号土坑



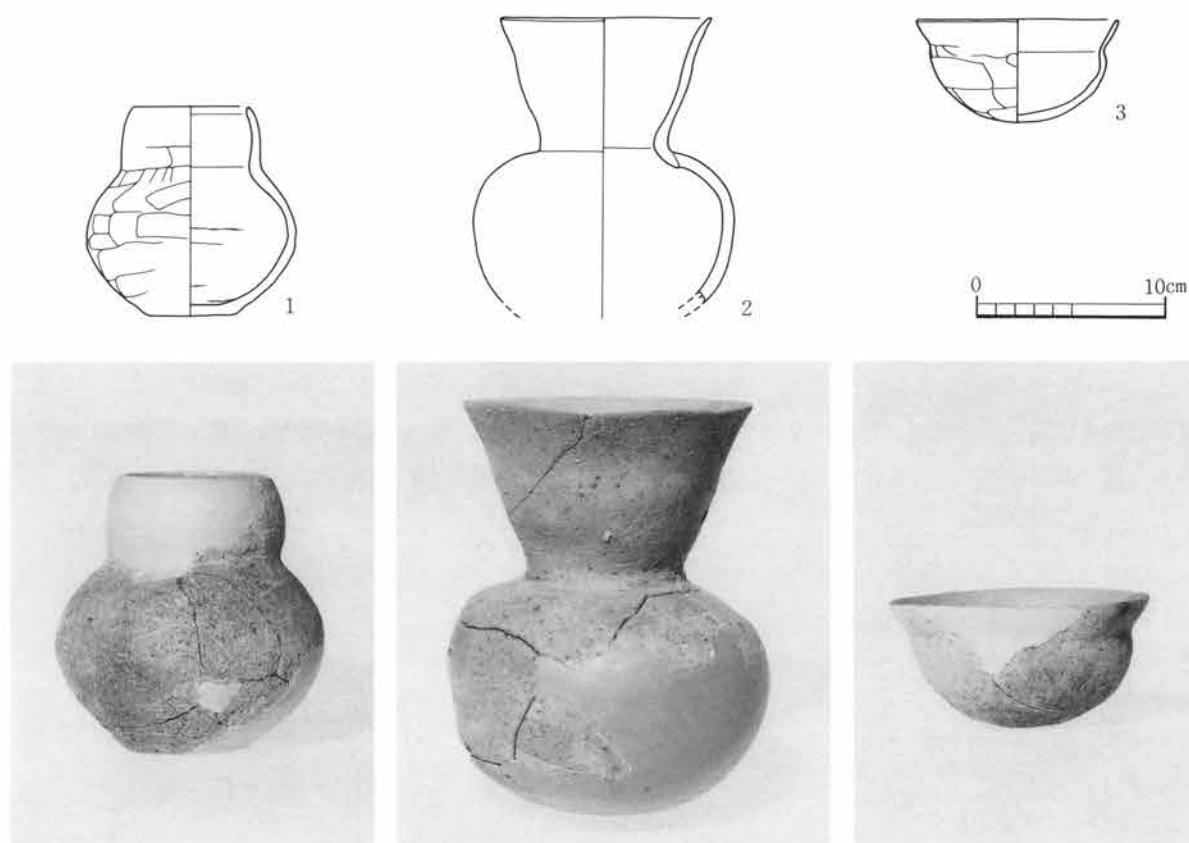
4号土坑

1. 暗褐色土 茶みをおび、やや砂質。軽石がまばらに混入する。
2. 暗褐色土 軽石の混入が極端に減少し、炭化物の混入が顕著になる。
3. 暗褐色土 黒みがあり、やや締まる。炭化物は減少する。
4. 暗褐色土



第305図 土坑実測図

III 検出された遺構と遺物



第306図 土坑出土遺物実測図

4号土坑《第305・306図、図版170》旧6号土坑

位置 K-17ポイントから東側へ3m

形状・規模 東西方向150cm・南北方向155cmの不整形円形を呈する。現状で深さ62cm程掘り込まれているが、底面は北西部に偏っている。

埋没土 上層はやや砂質が強かったが、以下は、炭化物を含む暗褐色土を主体に堆積していた。

遺物の出土状況 埴の破片が散在して出土したが、接合作業の結果、ほぼ完形に近くまで復元できた。

備考 性格不明。(飯塚)

(4) 墓跡

10号墓《第307図・図版170・173》旧溝状遺構

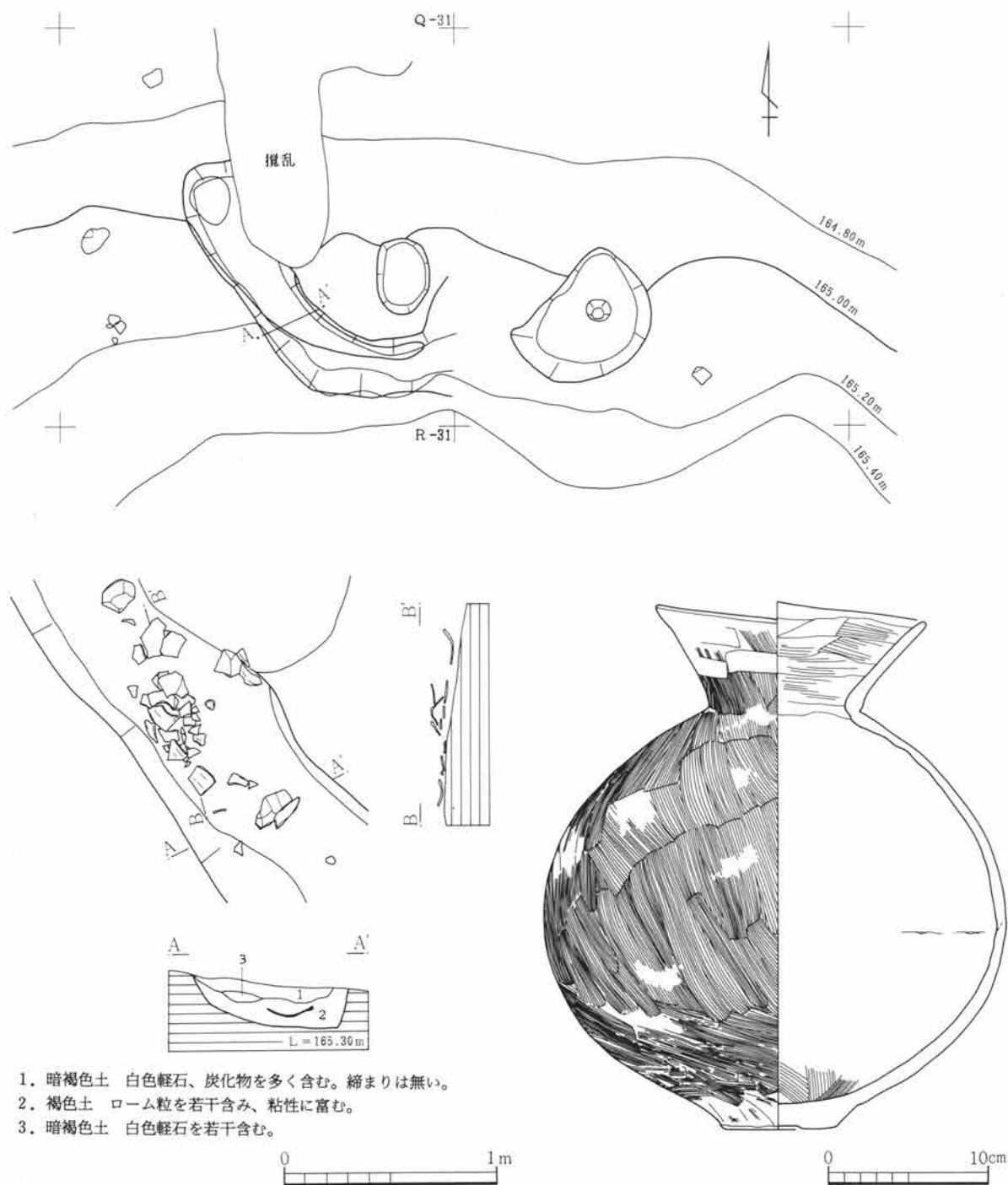
位置 Q-31グリッド 11号墳の北東部の緩い北斜面に位置しており、ローム層中に掘り込まれた長さ4.5m程の溝と土坑状の落ち込み二箇所が検出された。

形状・規模 溝は、上幅80cm・下幅70cm・深さ25cm前後で、弧の内側がやや急に立ち上がる、不整形な断面形を呈する。N-40°-Wの走向で3m程延びており、東部は折れ曲がっていた。底面はほぼ平坦であったが、南側よりも北側の方が30cm程低くなっていた。また、溝の東端から1m程離れた位置には、径1.9×1.6m・深さ14cmの土坑状の落ち込みが確認された。さらに、弧状を呈する溝の内側には、68×94cm・深さ22cmの、南北方向が長い不整形楕円形の落ち込みが認められた。

埋没土 暗褐色土を主体としていたが、焼土・炭化物が混入していた。

遺物の出土状況 溝の底面近くから、図示した壺が潰れて出土した。

備考 本遺構については、周溝墓状の遺構を想定してこの項で扱ったが、墓と断定できる資料は得られていない。
(飯塚)



1. 暗褐色土 白色軽石、炭化物を多く含む。締まりは無い。
2. 褐色土 ローム粒を若干含む、粘性に富む。
3. 暗褐色土 白色軽石を若干含む。

第307図 10号墓実測図

5. 平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

31号住居《第308～310図、図版173・174》

位置 Z-30グリッド

形状 東西方向に長軸を有する縦長の長方形で、四隅はやや丸みを持つ。規模は、東西3.04m・南北1.82mを測る。長軸対短軸の比率は1.67：1である。

長軸方位 N-82°-W 面積 5.52m²

周壁 全体に削平が進行していたが、特に北下がり斜面に構築されたため、北東の隅と北壁の東半分が削平され、検出できなかった。残存壁高は良好な北辺の西寄りで30cmであった他は、10～20cmであった。

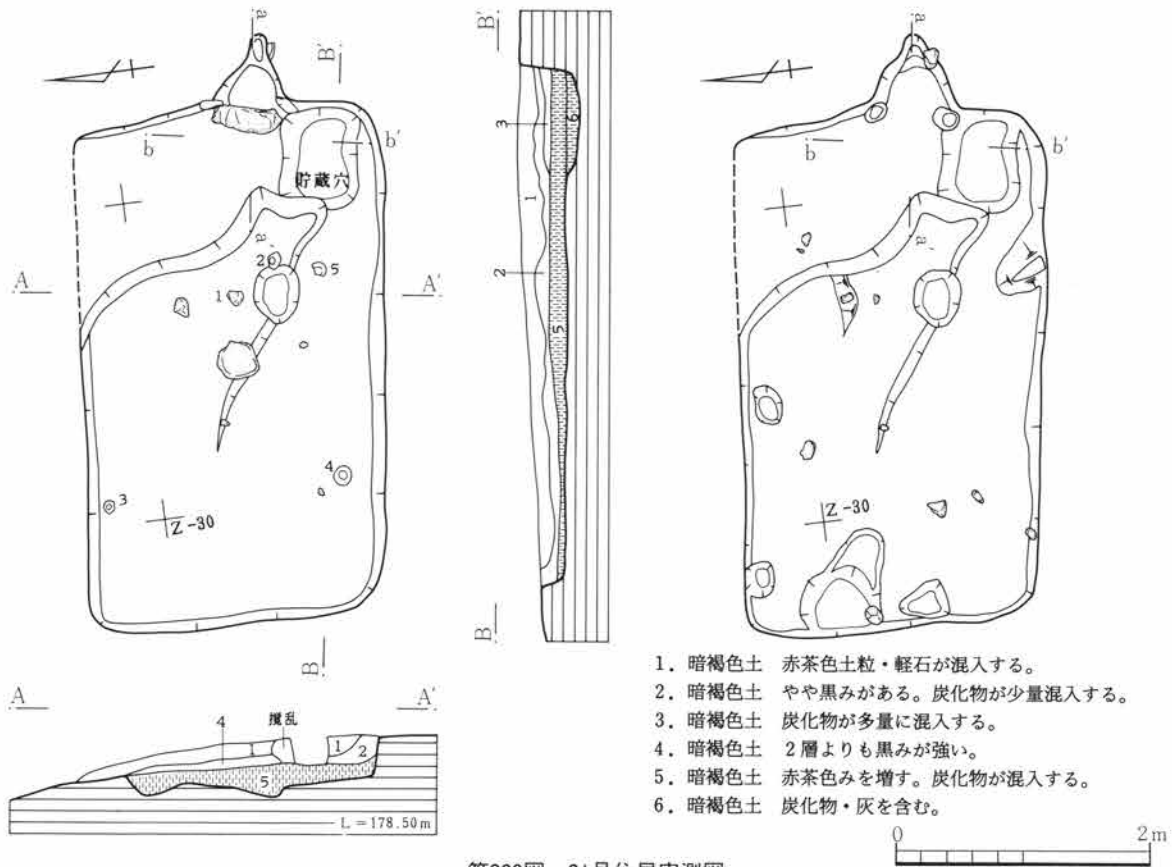
床面G 礫を多量に含む茶褐色の粘質土層を掘り込んで構築されていたため、径1～2cmの礫が床面上に露出していた。竈の前がやや締まっていた他は特に硬化面は存在せず、貼床も認められなかった。

南東隅から対角線上に幅を増す地割れが走り、そ

の影響でこの間の床面が約5～10cm陥没していた。原形は北辺に向かってやや下がる面が形成されていたものと考えられる。

埋没土 暗褐色土が堆積していた。下層に炭化物の混入が顕著となることから二層に大別できる。

竈 東壁の中央からやや南寄りに構築され、中軸線は住居の南壁の走向とほぼ一致する。煙道・燃烧部とも住居壁外に掘り込まれており、煙道は24cmが残存していた。燃烧部は焚口幅40cm・奥行35cmを測った。内壁は火熱を受け焼土化していた。焚口は住居壁面に接して設けられ、左右の袖部に粗粒安山岩の礫を立置していた。袖石前方の床面からは長扁平の礫が検出されたが、これは袖石の上に渡架し、三石で焚口を鳥居状に補強していた天井石がずり落ちたものである。いずれも火熱を受け脆弱化していた。燃烧部の埋没土は大部分が茶色み強い暗褐色土で、上層には焼土が多量に混入していた。下層には炭化物・灰が良好に堆積しており、灰層は約5cm程残っていた。掘り方は燃烧部前に浅い皿状の掘り込みが



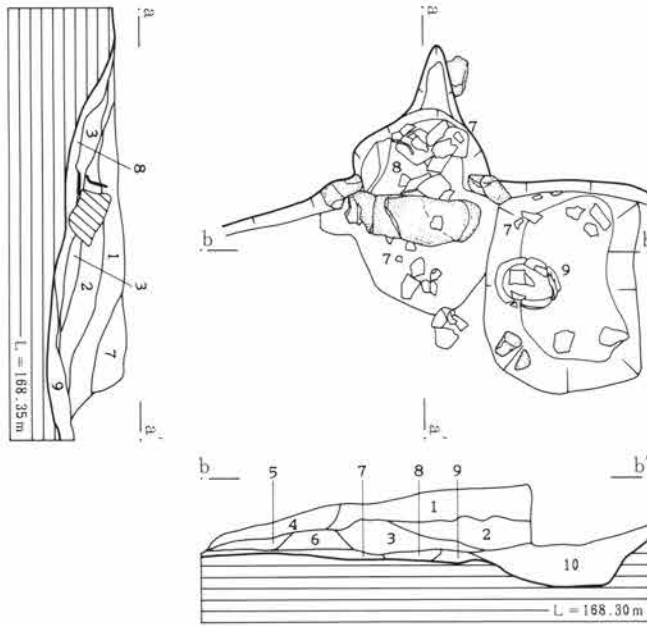
第308図 31号住居実測図

有ったようである。また、袖石は、天井石の渡架の位置とレベルを調節するために、地山に小穴を穿って据えられていた。

貯蔵穴 竈の右側、住居の南東隅に位置する。検出時の規模は、東西78cm・南北61cm・深さ18cmで、隅丸矩形が原形であったと考えられる。北壁は竈からの炭化物・灰の流入で原形を失い、緩やかに立ち上がっている。

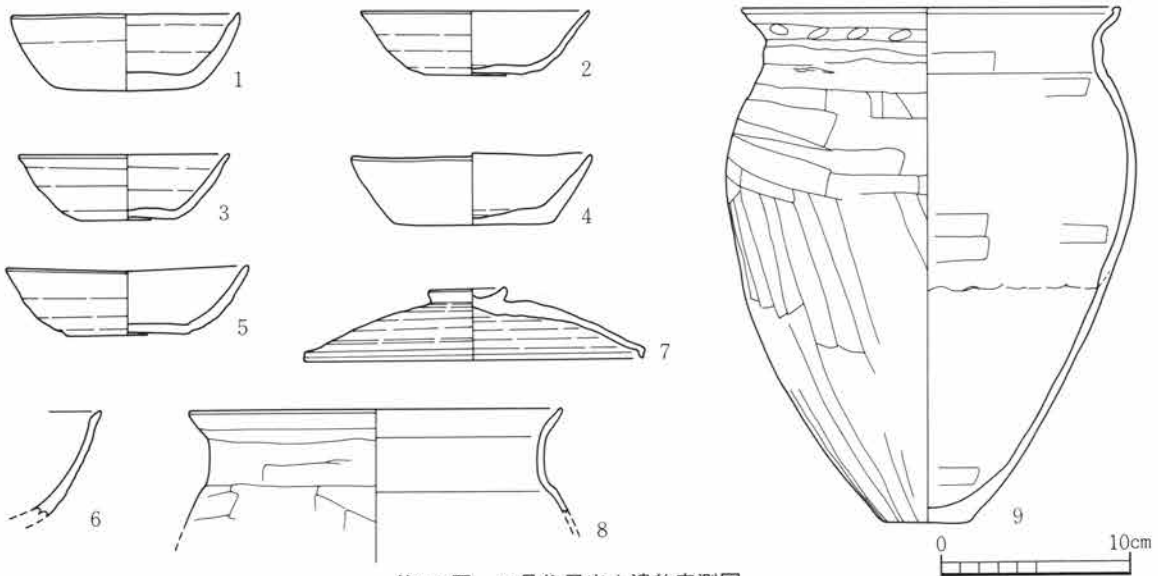
柱穴 床面精査時には確認できなかった。掘り方確

認作業時に5箇所小ピットを検出したが、位置・掘削深度のいずれからも支柱穴とは考えられない。遺物の出土状況 甕(9)は貯蔵穴内の口縁部と竈燃焼部内の胴部破片が接合した。竈燃焼部からはもう一個体の甕(8)が出土した。また、須恵器蓋(7)も竈と貯蔵穴からの接合資料である。床面からは、中央やや竈寄りから土師器坏(1)・須恵器坏(2・5)が、西寄り南壁際からは土師器坏(4)が、北壁際からは須恵器坏(3)が出土した。(徳江)



1. 暗褐色土 軽石・焼土粒がまばらに混入する。
2. 暗褐色土 黒みをおび、焼土粒・炭化物が少量混入する。
3. 暗褐色土 2層よりも炭化物の混入量が増加する。
4. 暗褐色土 鉄分凝集の土粒を含み、茶みをおびる。
5. 暗褐色土 軽石・焼土粒が混入する。
6. 暗褐色土 色調は灰色みをおび、粘性もある。
7. 暗褐色土 灰色みをおび、軽石・小円礫が混入する。
8. 炭化物・灰層
9. 暗褐色土 焼土粒・炭化物が混入する。
10. 暗褐色土 上部に炭化物・灰が多量に混入する。

第309図 31号住居カマド実測図



第310図 31号住居出土遺物実測図

III 検出された遺構と遺物

(2) 溝跡

1号溝《第311図、図版174》

位置 南から北へ下る緩斜面上に、走行をe-9グリッドからb-10グリッドへ向け、そのままY-10グリッド方向へと直進する。

形状・規模 確認面での長さ32.11m、最大巾1.60m、最小巾0.72m、底面の最大巾1.40m、最小巾0.26mを測る。法面の立ち上がりは、緩やかな半円状を呈する。溝の延長部は削平のため確認できなかったが、更に北側傾斜地下位へと続いていた可能性が高い。

埋没土 一部上層にAs-Bを少量含む層が認められた。土層断面ではレンズ状の堆積が認められることから、自然埋没した可能性が高い。雨水等の影響によると思われる細砂も確認された。

遺物の出土状態 中央部底面から細砂を含む茶褐色土層にかけて、中・小の多量の角礫と少量の土器片が流水の影響を受けた状態で出土した。(根岸)

2号溝《第311図、図版174》

位置 走行をk-12グリッドから、h-12グリッドへ向けて北に直進する。

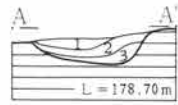
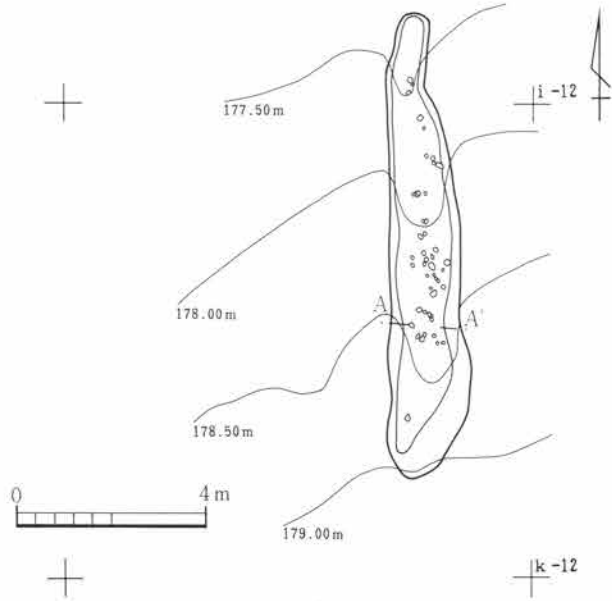
形状・規模 確認面での長さ9.82m・最大巾1.72m・最小巾0.80m・底面の最大巾1.14m・最小巾0.51mを測る。西壁側の走向がほぼ直線的に延びるのに対して、東壁側は外に湾曲する。

埋没土 レンズ状の堆積を呈する3層からなり、上層の黒褐色土がやや砂質を帯びることから、自然埋没の可能性が高い。

遺物の出土状態 中央部の底面から細砂を含む茶褐色土層(2)にかけて、中・小の少量の角礫が出土した。

備考 1号溝・2号溝ともに走向を南北に向け、角礫の出土状態も類似している。また、2号溝の最上層(1)の埋没土が1号溝のAs-Bを含んだ層下の黒褐色土(2)と比定できることから、両溝はほぼ同時期に掘削された可能性が高い。(根岸)



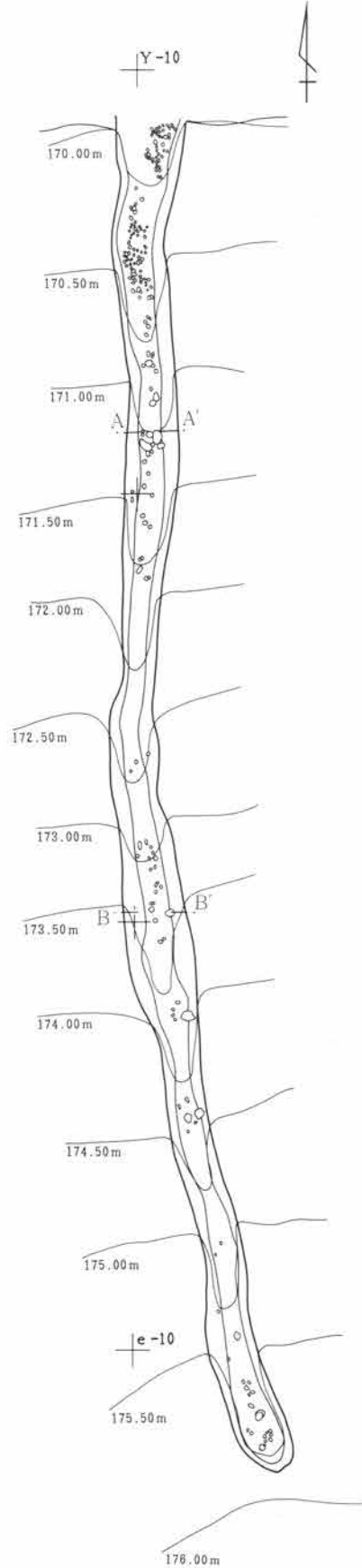
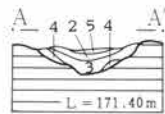


2号溝

1. 黒褐色土 やや砂質な部分もある。
2. 茶褐色土 白色砂粒を僅かに含む部分もある。
3. 茶褐色土 ロームを若干含む。

1号溝

1. As-B
2. 黒褐色土 上部にはAs-Bがやや混入する。茶褐色土も含む。
3. 茶褐色土 細砂を含むが締まりもある。
4. 茶褐色土 3層よりも茶みが強い。ロームも多く混入する。
5. 茶褐色土 耕作土か。



第311図 1・2号溝実測図

6. 所属時期不明の遺構

今回の調査で時期を確定できる遺構の中で最も新しいものは平安時代（8世紀第・四半期）の構築と考えられる31号住居である。また、1号溝は、埋没土中にAs-Bが堆積していることから、1108年（天仁元）以前の掘削と考えられる。その後の土地利用については判然としない点が多いが、調査区の北側地域は、2号墳の石室内の線刻仏に見られるように少林山達磨寺が延宝年間に開山されて以後は寺域と何等かの関係を保つ中で景観の変遷を遂げてきたものと考えられる。

今回の調査で時期の確定が困難であったものに、土坑13基と柱穴状のピット、溝状遺構がある。

溝状遺構については詳細な報告を割愛するが、これらの溝の埋没土は締まりがなく、流水の痕跡も認められなかった。複数回掘り直しがなされているものもあった。多くの溝は調査直前の土地区割りに沿って掘削されたものが多いことから、いわゆる「根切りの溝」と考えられる。区割りと合致しないものもあるが、このなかには耕作が進行する中で古墳の墳丘裾部を壑開していったことを如実に現しているものもあった。

3・4・18・19・21号古墳が築造された範囲、グリッド名で表記すると、JとUライン、15と30ライ

ンで区画された所からは、長軸長が60～300cm・深さ50～160cm程の規模の土坑状の落ち込みが多数検出された。風倒木痕に見られる明瞭な土層の逆転現象などは確認できなかったが、掘り込みが不整形で明瞭な壁面を構成せず、規模や掘削状況にも企画性が無いこと、一部の底面には根系の深延を思わせる小ピットが観察できたこと等の事由から、樹木根の痕跡の可能性が高いと考えられる。3号住居では明らかに住居の構築段階よりも古いものがあったが、大多数は遺構との前後関係は不明である。弥生時代の集落の形成や古墳群築造に伴う景観の改変と関連付けるにはその根拠を得られなかった。

(1) 土坑

土坑は、13基を検出した。いずれも遺物が無く、埋土中のテフラも、10号土坑にAs-Aの混入が顕著であった他は、時期を決定するに可能な要素は認められなかった。規模等については、表に記載したとおりであるが、その他若干の補足しておく。

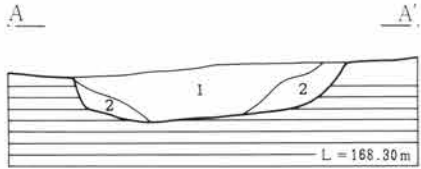
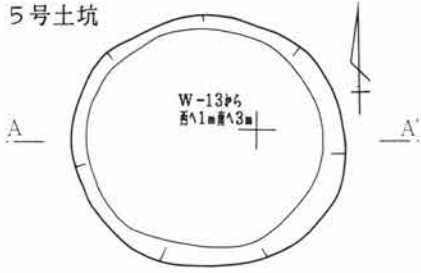
形状は、円形・長円形を基本としたものが多い。7・11・14号土坑は矩形で、長軸に比して狭小な短軸を持つことが共通している。他遺跡における検出例では、貯蔵穴等の例もあるが、本遺跡での性格付けは困難であった。

8号土坑は、長円形の平面形であるが、断面の下位がえぐれ、底面が広がっていた。

土坑一覧表

番号	位置 グリッド	形状	規模 長軸×短軸	残存 深	長軸の方向	調査時の名称
5	W-13	円形	110×98	18	N-90°-E	2号
6	i-13	長円形	346×142	18	N-83°-E	3号
7	T-22	短形か	(180)×94	42	N-81°-E	4号
8	J-15	長円形	136×110	63	N-84°-W	8号
9	R-19	長円形	70×55	51	N-21.5°-E	12号
10	F-19	不整形	96×90	25	N-40°-W	19号
11	N-18	短形か	(290)×130	48	N-2°-E	N-18G土坑状遺構
12	P-27	不整形	214×137	22	N-83°-E	H号土坑状遺構
13	O-27	長円形	92×68	92	N-33°-E	N号土坑状遺構
14	N-28	短形	270×110	33	N-0°-E	S号土坑状遺構
15	Q-27	不整形	230×90	64	N-16°-W	a号土坑状遺構
16	Q-26	不整形	256×214	76	N-60°-E	e号土坑状遺構
17	R-25	不整形	157×94	74	N-37°-W	m号土坑状遺構

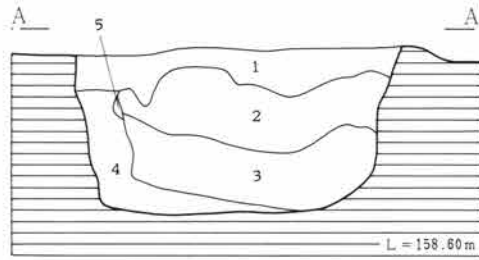
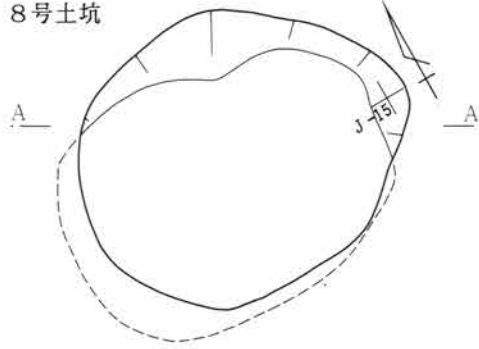
5号土坑



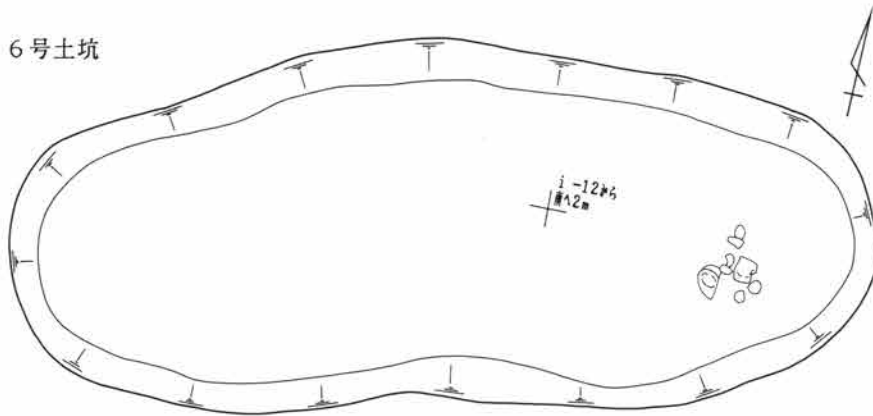
5号土坑

1. 黒褐色土 砂質。
2. 茶褐色土 黒褐色土が少量混入する。

8号土坑



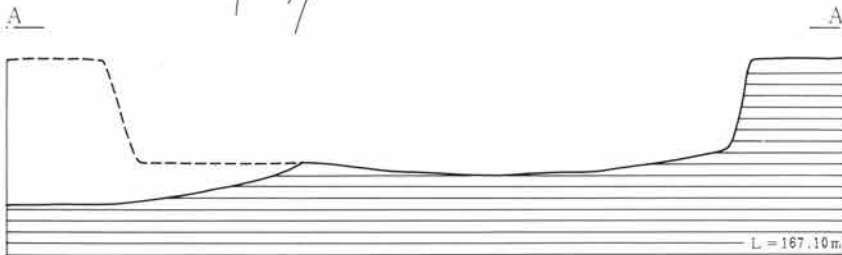
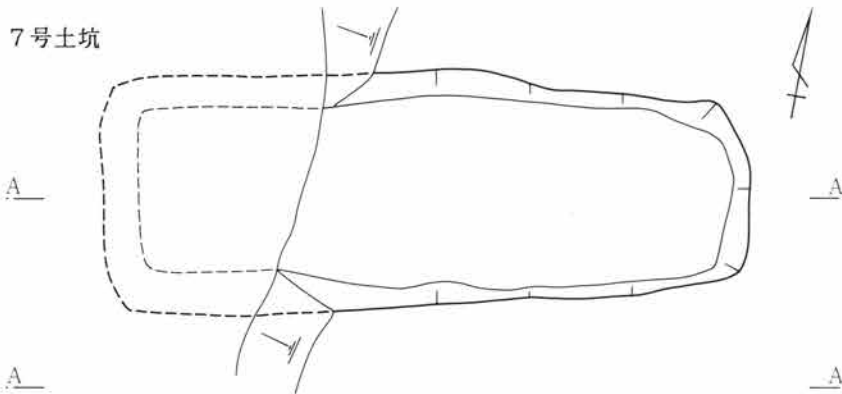
6号土坑



8号土坑

1. 暗褐色土 やや茶みをおびる。軽石が少量混入。
2. 暗褐色土 黒みのある褐色土を主体とし、茶褐色土と混土状をなす。
3. 暗褐色土 黒みがやや強く、白色の細砂粒が多量に混入する。
4. 暗褐色土 茶みが強く、粘性もある。
5. ロームブロック

7号土坑

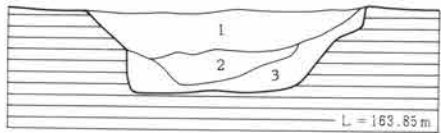
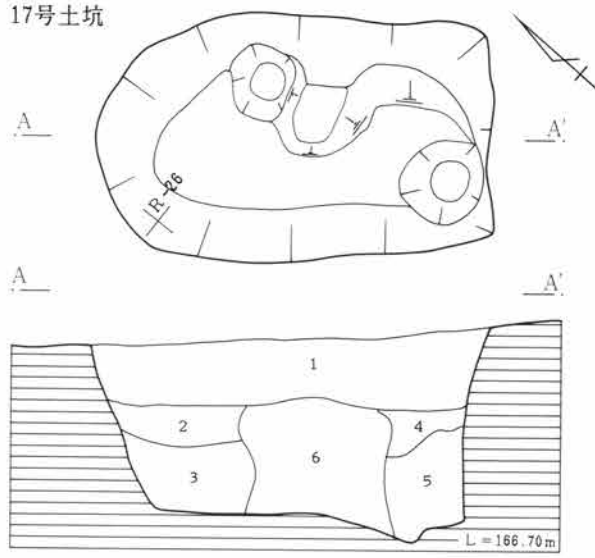
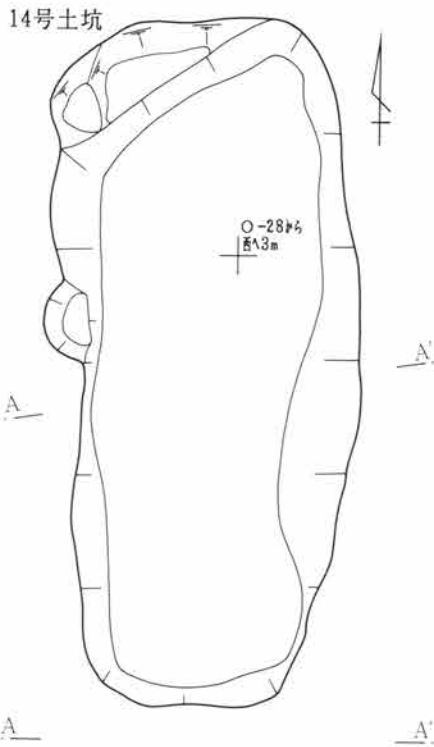
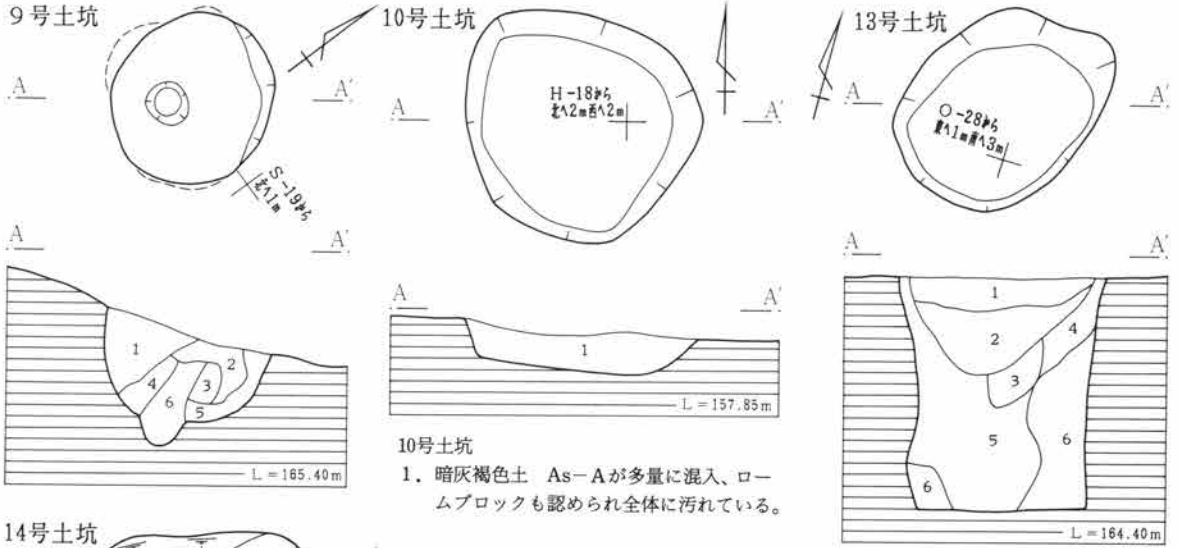


T-23p6
直径1.2m



第312図 土坑実測図(1)

III 検出された遺構と遺物



14号土坑 313図

1. 暗褐色土 軽石がまばらに混入する。
2. 暗褐色土 色調がやや茶みを増す。
3. 茶褐色土 ロームに近い色調であるが壁面よりも黄色みがはるかに薄い。

17号土坑

1. 暗褐色土 黒みが強く、少量の軽石が混入する。
2. 暗褐色土 ロームブロックが混入し、茶みが強い。

9号土坑

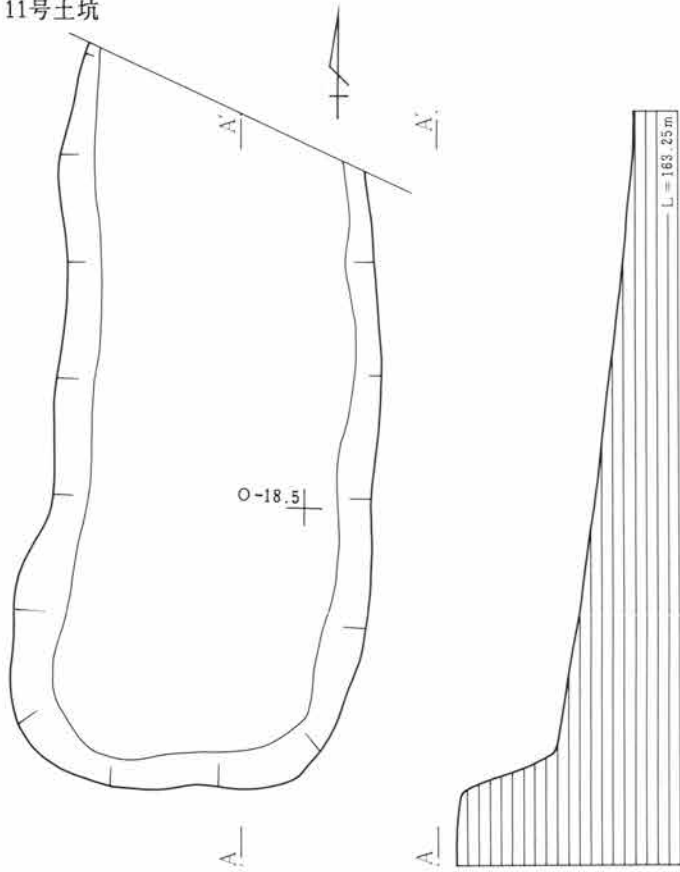
1. 暗褐色土 砂質である。
2. 黒褐色土 砂質である。
3. 黒褐色土 黒みが薄れ、暗褐色みをおびる。
4. 暗褐色土 黒褐色土が僅かに混入する。
5. 暗褐色土 3層よりも粘性をおびる。
6. 黒褐色土 暗褐色土を僅かに混入する。

13号土坑

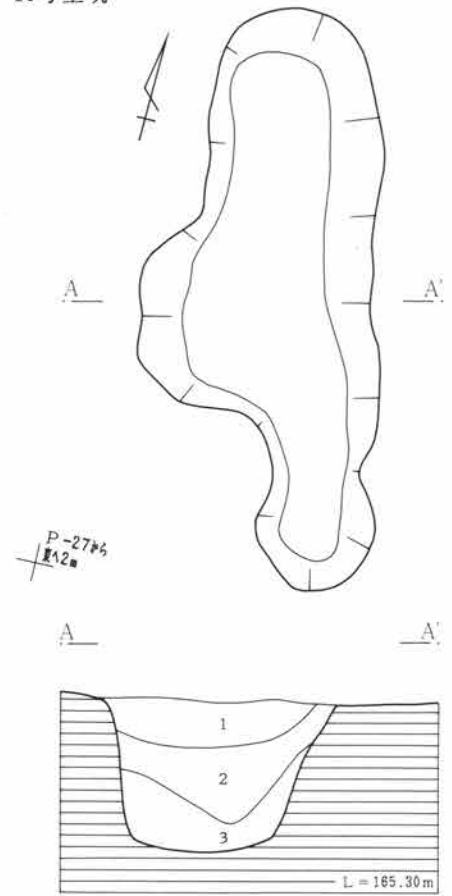
1. 黒褐色土 ロームブロックが混入する。
 2. 暗褐色土 ローム粒と軽石が少量ずつ混入する。
 3. 暗褐色土 2層に類似するが混入物は少ない。
 4. 暗褐色土 ロームが僅かに混入する。
 5. 暗褐色土のブロックとロームの小ブロックとの混土层 黒褐色土も僅かに散見する。
 6. 暗褐色土 ロームの混入が無く、黒みが強い。
3. 暗褐色土とロームブロックとの混土层
 4. 暗褐色土 茶みが強い。
 5. 暗褐色土とロームブロックとの混土层 下部にはYPが混入する。
 6. 茶褐色土 ロームブロックを主体とし、暗褐色土ブロックが少量混入する。

第313図 土坑実測図(2)

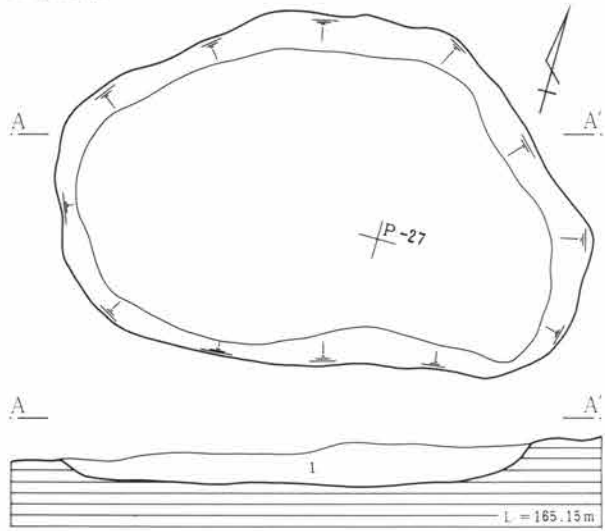
11号土坑



15号土坑



12号土坑

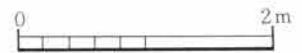


12号土坑

1. 暗褐色土 下層はやや茶みをおびる。

15号土坑 314図

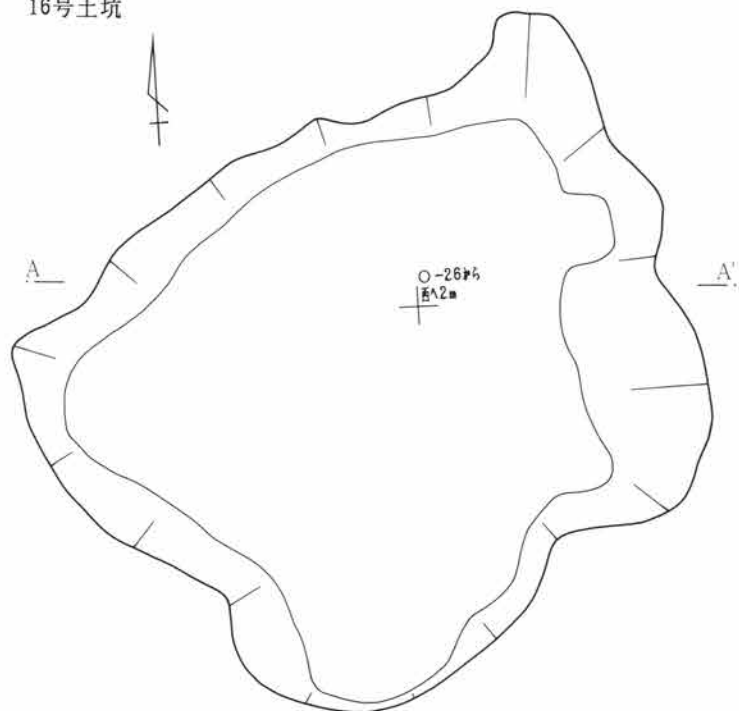
1. 暗褐色土 ローム粒が混入し、茶みが強い。
2. 暗褐色土 ローム粒は1層と同様に含まれるが、色調はやや黒みが強い。
3. 暗褐色土を主体としたローム小ブロックとの混土層



第314図 土坑実測図(3)

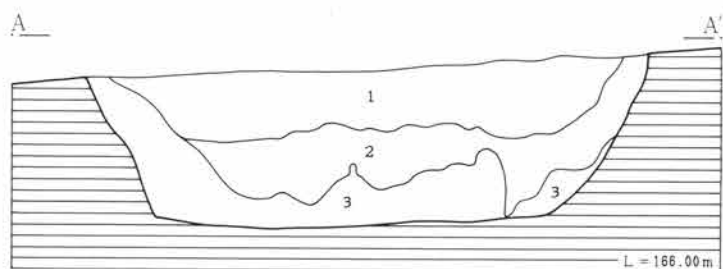
III 検出された遺構と遺物

16号土坑



16号土坑

1. 暗褐色土 黒みが強く、軽石をまばらに混入する。
2. 暗褐色土のブロックを主体にしたロームブロックとの混土層 軽石をまばらに混入する。
3. ロームブロックを主体とした暗褐色土ブロックとの混土層



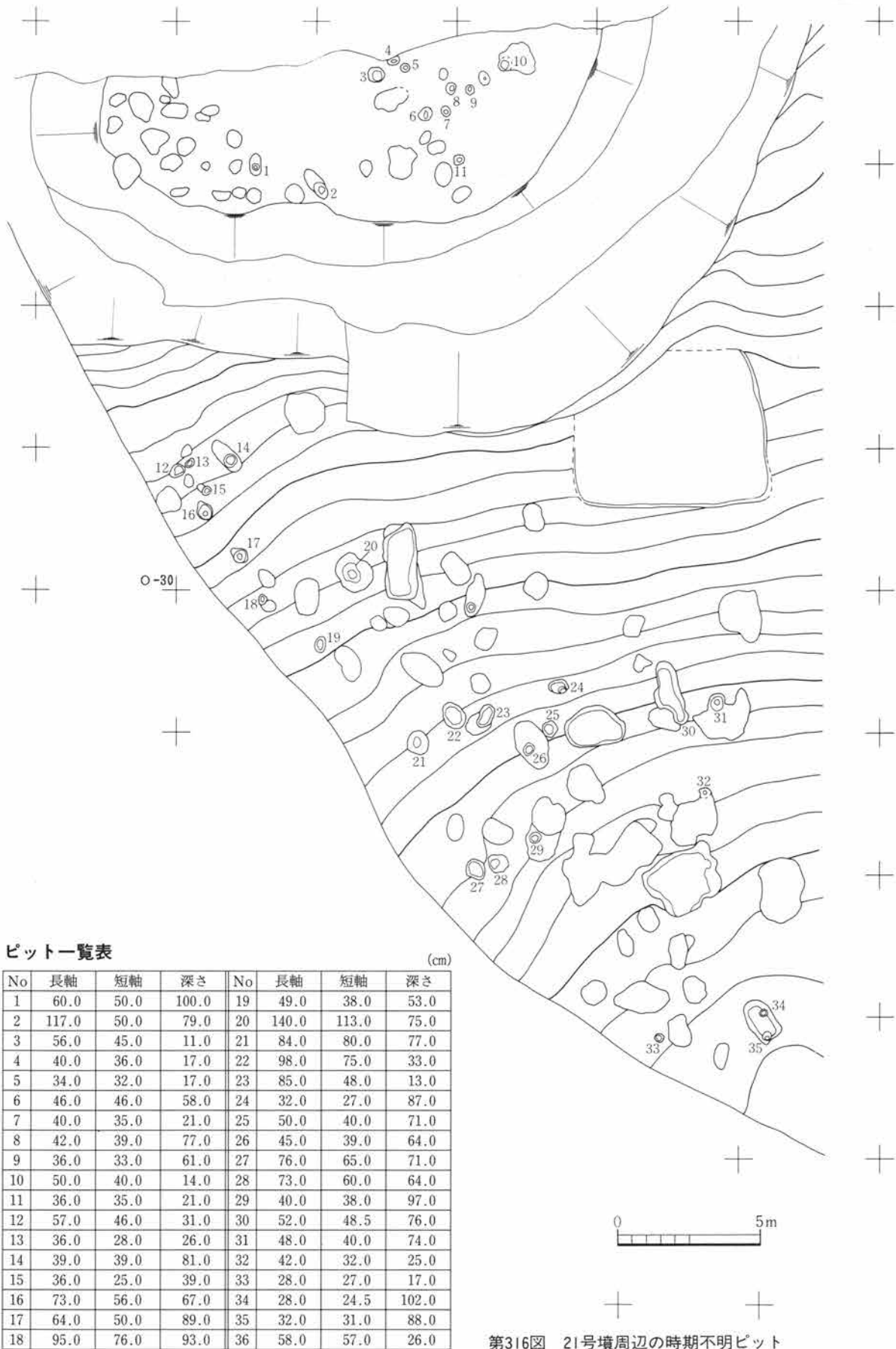
第315図 土坑実測図(4)

9号土坑は、丸底の底面に、径18cm・深さ20cmの小ピットがあり、埋没土は全体に砂質であった。

6号土坑は、調査区の南東斜面の高位部にあり、周囲は耕作による削平が著しく、残存状態は劣悪であった。東側にはこの土坑の長軸と走向を合わせたように2号溝があった。本土坑の埋没土は黒みの強い土層で、2号溝のそれと共通するものであり、このような点を加味すると、本土坑は溝状遺構の深所部分が残存した可能性も考えられる。(徳江)

(2) ピット

調査区の中央部分、18号墳と21号墳に挟まれた地点は、先の項でも記したとおり、土坑の他に樹木根の痕跡と考えられる落ち込みが多数検出されたが、これらに混じって、小ピットが見られた。この内の多くは、先の樹木根と同様のものと考えられるが、形状・掘削深度からみて、人為的なものもある。表に掲げたものがそれである。埋没土は黒褐色土あるいは暗褐色土であった。平面上の検討も試行したが、検出地点の制約もあり、掘立柱建物や柵列等の存在を確定するには至らなかった。(徳江)



ピット一覧表

No	長軸	短軸	深さ	No	長軸	短軸	深さ
1	60.0	50.0	100.0	19	49.0	38.0	53.0
2	117.0	50.0	79.0	20	140.0	113.0	75.0
3	56.0	45.0	11.0	21	84.0	80.0	77.0
4	40.0	36.0	17.0	22	98.0	75.0	33.0
5	34.0	32.0	17.0	23	85.0	48.0	13.0
6	46.0	46.0	58.0	24	32.0	27.0	87.0
7	40.0	35.0	21.0	25	50.0	40.0	71.0
8	42.0	39.0	77.0	26	45.0	39.0	64.0
9	36.0	33.0	61.0	27	76.0	65.0	71.0
10	50.0	40.0	14.0	28	73.0	60.0	64.0
11	36.0	35.0	21.0	29	40.0	38.0	97.0
12	57.0	46.0	31.0	30	52.0	48.5	76.0
13	36.0	28.0	26.0	31	48.0	40.0	74.0
14	39.0	39.0	81.0	32	42.0	32.0	25.0
15	36.0	25.0	39.0	33	28.0	27.0	17.0
16	73.0	56.0	67.0	34	28.0	24.5	102.0
17	64.0	50.0	89.0	35	32.0	31.0	88.0
18	95.0	76.0	93.0	36	58.0	57.0	26.0

第316図 21号墳周辺の時期不明ピット

7. 発掘区周辺の古墳

A号墳《第317・318図、図版177》

1号墳の北側30m程の、少林山達磨寺の境内にある。玄室の奥から2番目の天井石が石室内に崩落しており、内部に出入りできる。内部主体は、S-19°-W方向に開口すると考えられる横穴式石室である。内部には土砂が厚く堆積しており、現状での計測値は以下の通りである。

高さ 125cm

奥幅 175cm

左壁 220cm

右壁 195cm

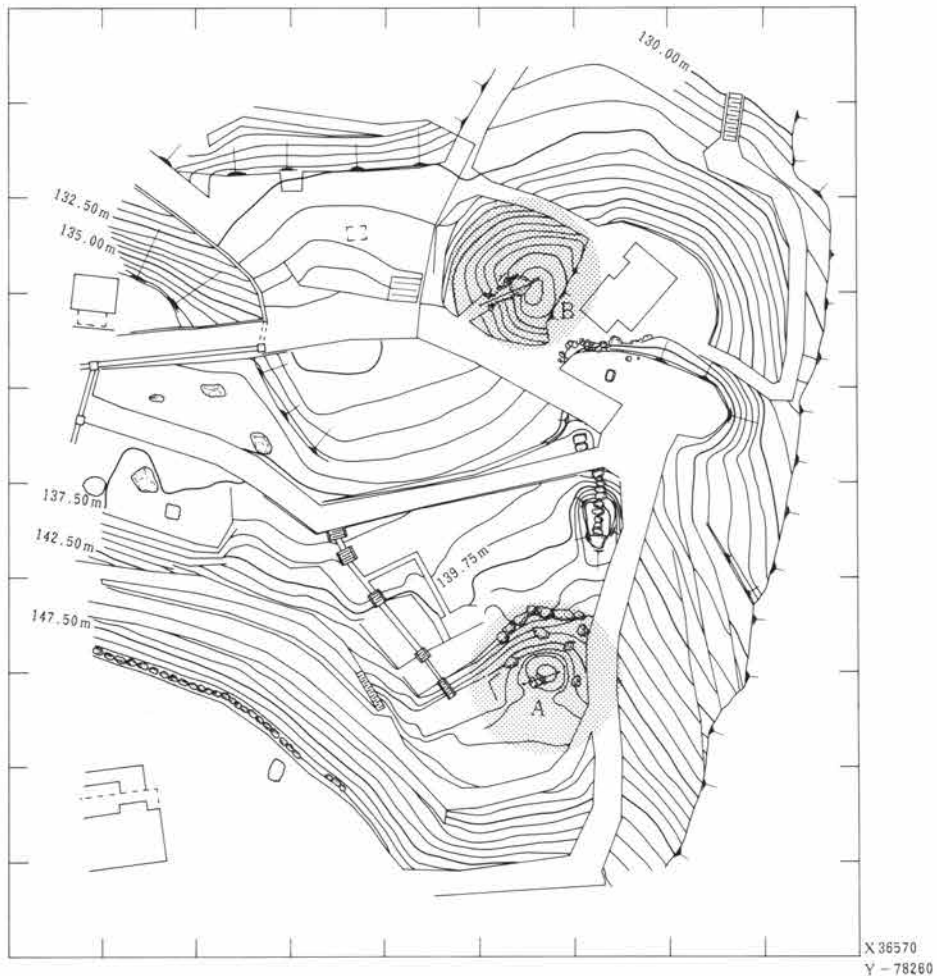
奥壁は、大型の石材が3段積みされた上に、天井

との隙間を埋めるために小型の石材が差し込まれている。現状から推して、石室の半ばが土砂に埋もれていると考えられる。

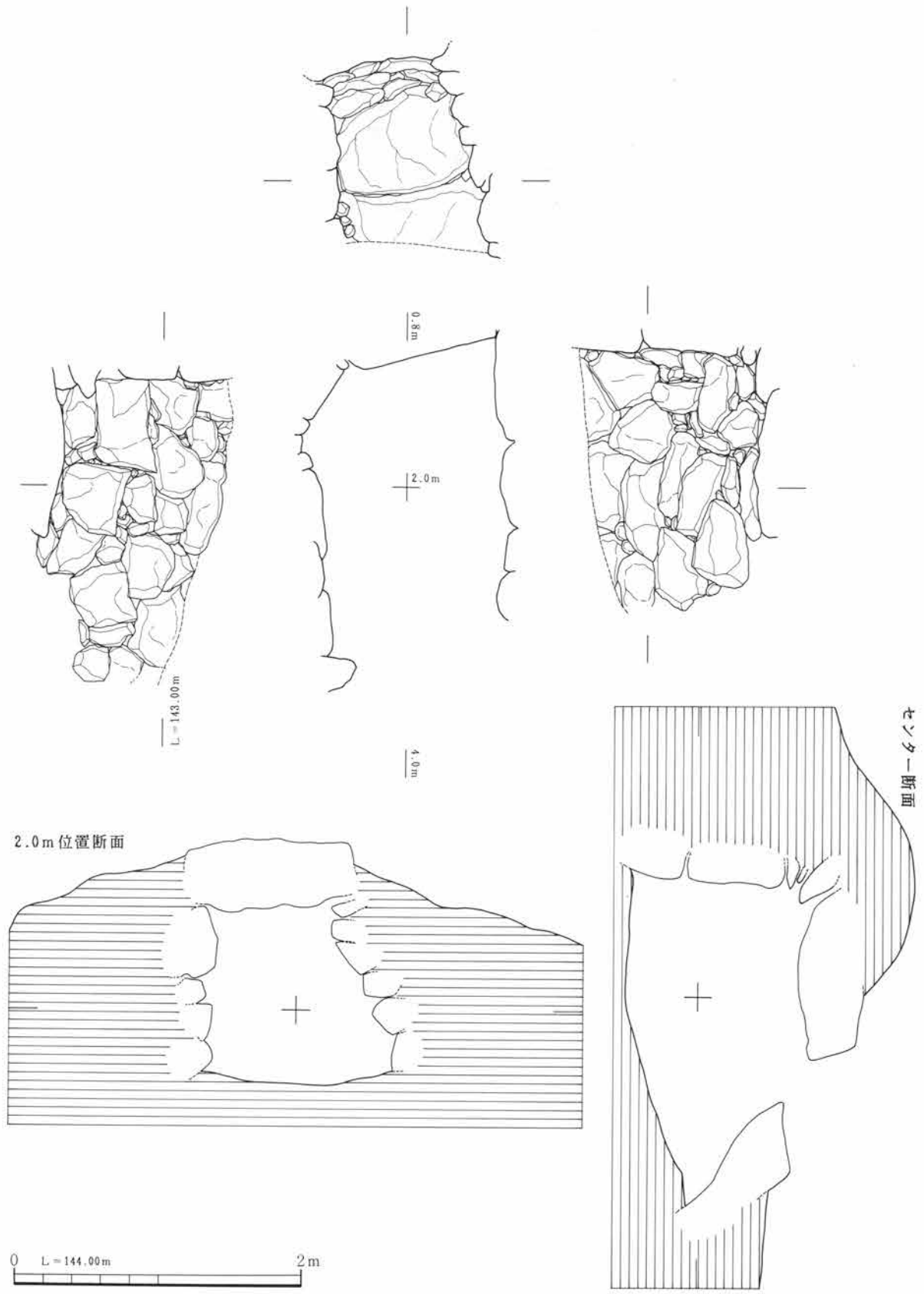
左右壁とも、粗粒安山岩の垂角礫を使用した自然石の乱石積みで壁体を構成しているが、底部から約60cm上部で横目地が通ると同時に、奥壁に寄せ掛ける様に積まれている。左壁はほぼ垂直に積み上げられているが、右壁は約7°内傾しており、天井部での奥幅は75cmを測る。

玄室のプランは、左隅に隅石があるために歪んで図示されているが、本来的には矩形を呈すると思われる。

天井石は、厚さ50cm程で、比較的偏平な石を使用している。

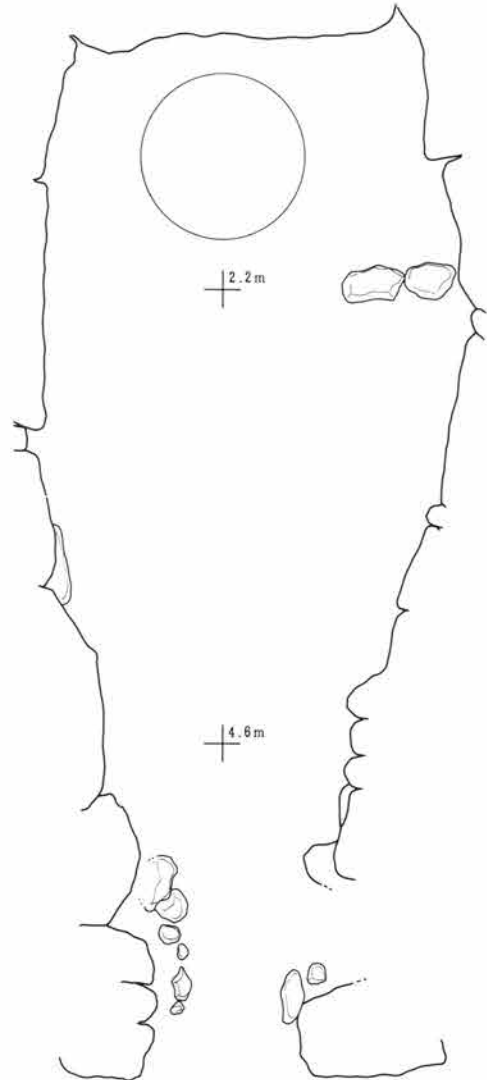
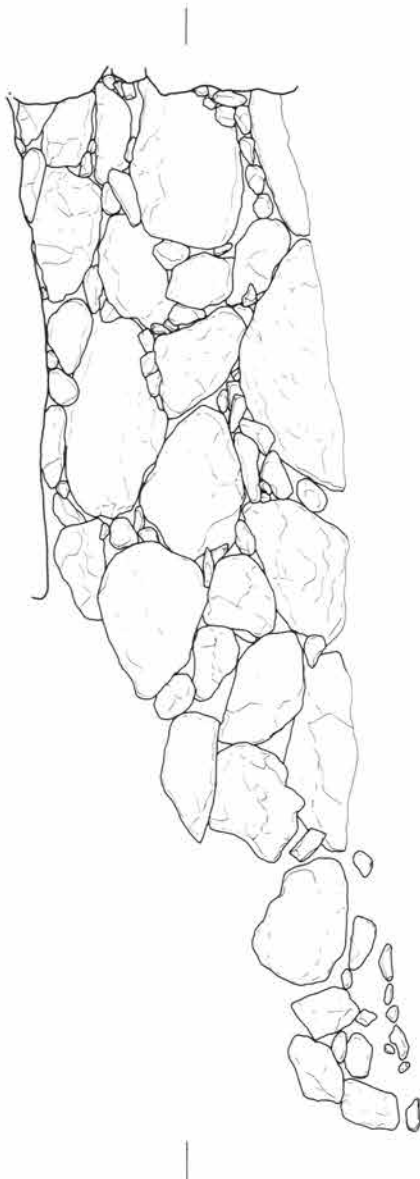
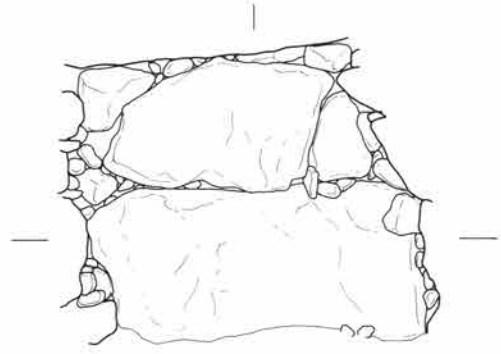


第317図 A・B号墳周辺地形図



第318図 A号墳石室実測図

III 検出された遺構と遺物

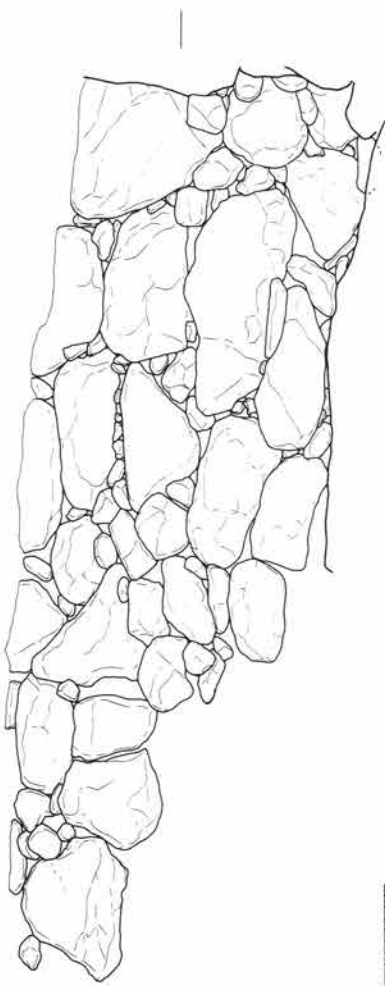
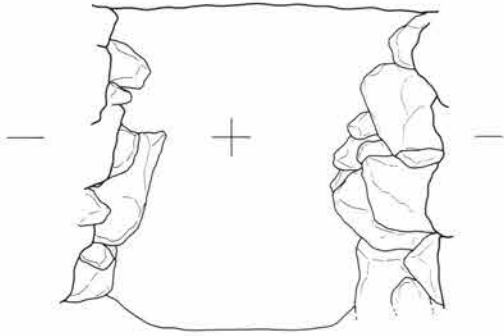


0 L = 137.00m 2m

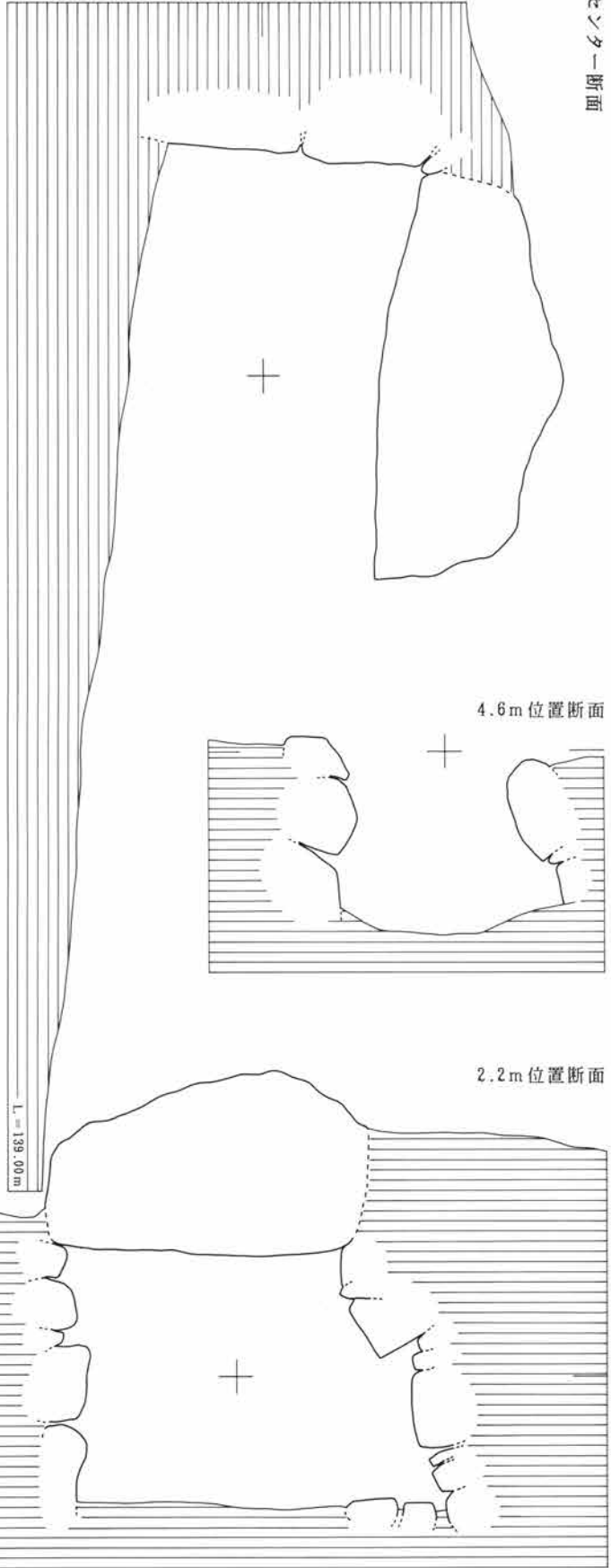
第319図 B号墳石室実測図

7. 発掘区周辺の古墳

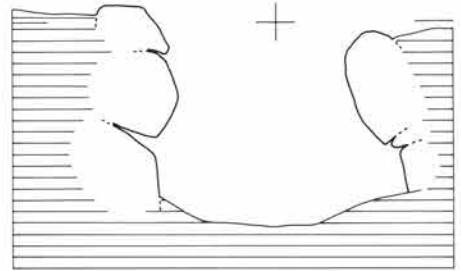
センター断面



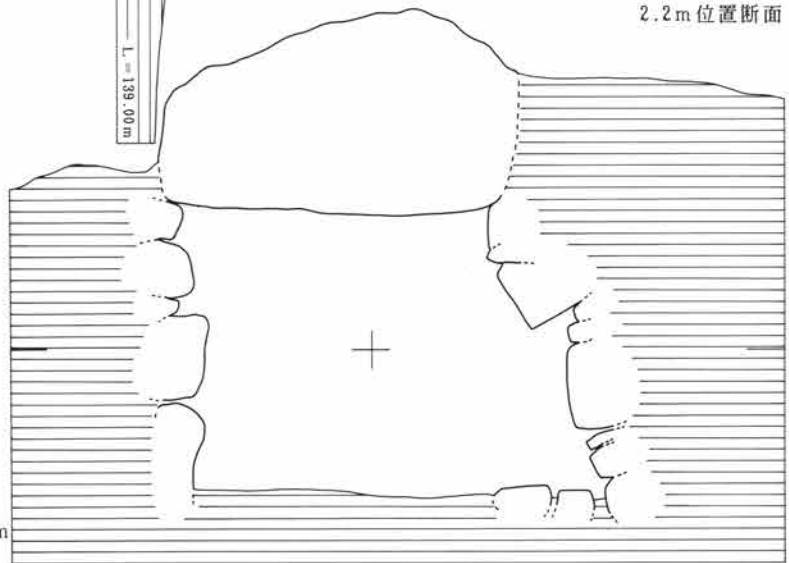
0 L = 137.00m 2m

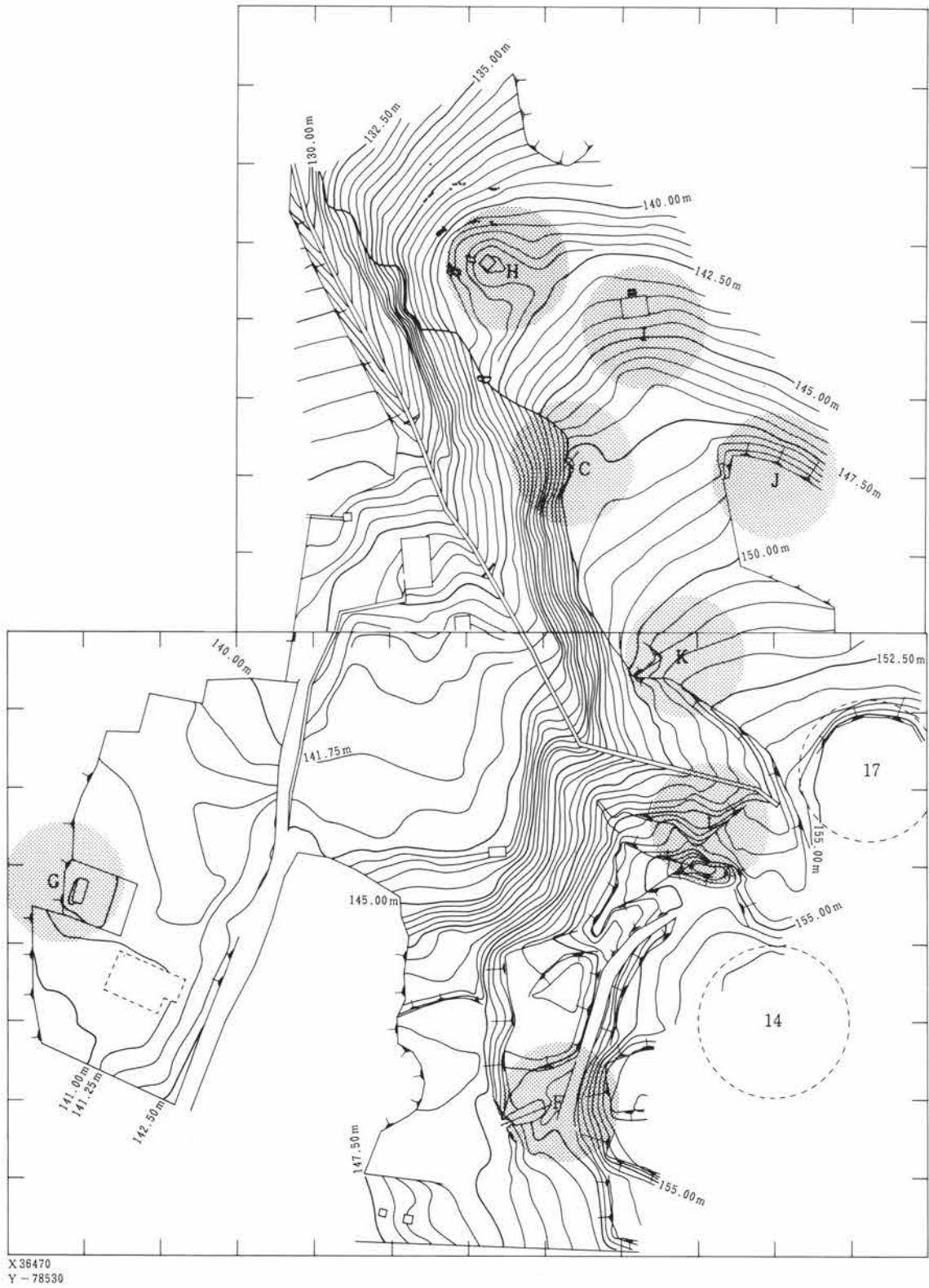


4.6m 位置断面

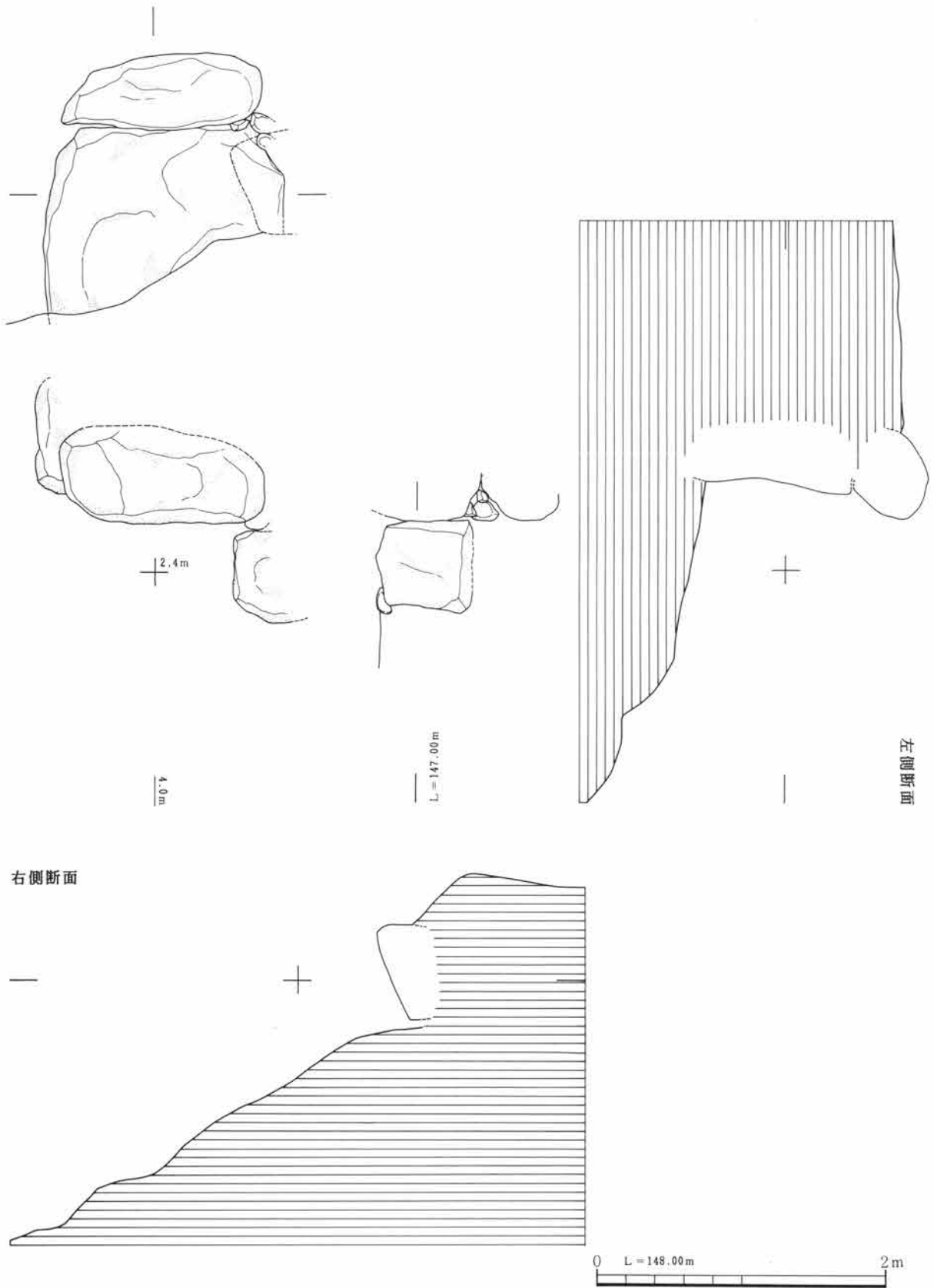


2.2m 位置断面





第320図 C号墳周辺地形図



第321図 C号墳石室実測図

III 検出された遺構と遺物

B号墳《第319図、図版177・178》

洗心亭の西側に位置しており、墳丘の南東部は洗心亭の敷地のために削り取られている。

現状で、径15m前後・高さ約3mの円墳であり、葺石が葺かれている様子は観察できる。埴輪も使用されているものと思われるが資料は採集できなかった。

内部主体は、S-49°-Wに開口する横穴式両袖型石室で、内部には石造薬師如来像が祭られている。現状での計測値は以下の通りである。

高さ 150cm

奥幅 165cm

左壁 546cm

右壁 560cm

奥壁は、大型の石材が2段積みされているが、下部には10cm大の河原石が敷かれており、石室の半ば近くが埋もれていると考えられる。

左壁はほぼ垂直に積まれているが、右壁は底面か

ら70cm程上部で、30°程内傾しており天井部での奥幅は145cmを測る。

玄室のプランは、両側壁に胴張りが認められる。奥から125cm手前のに部分に最大幅があり230cmを測る。左壁の袖はやや不明瞭に変化しているが、右袖は約30cm張り出している。

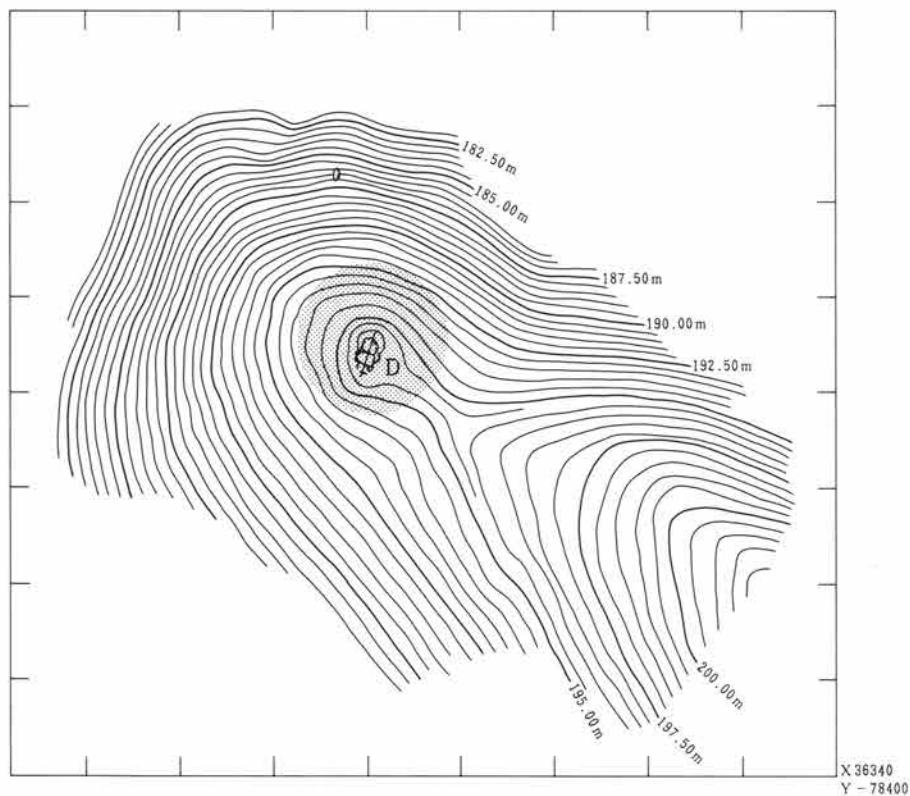
羨道のプランは、間口に対して奥部がやや開く逆台形状を呈する。

天井石は、200×250cm・厚さ110cmの大型のものが1石残っているだけだが、玄室の半ば以上を覆っている。

C号墳《第320・321図、図版179》

17号墳の北西60m程の位置にある。西側は地辻に伴う陥没と、駐車場整備の為に削平されており、崖の斜面に横穴式石室の奥壁部分が辛うじて残っている状態である。

奥壁は、大型の石材が2段積みされており、幅170



第322図 D号墳周辺地形図

cm・高さ180cmを測る。右壁の最奥部の壁石が1石だけ残っており、奥壁に対してほぼ直交していることから推して、開口方向は西側と考えられる。周囲には、開口していないものの、地膨れや天井石・葺石と考えられる石材の存在から推して、5基の古墳が隣接している。また、埴輪の破片も多量に分布していた。

D号墳《第322～324図、図版179》

本調査区の南西部に延びる標高約196mの尾根の先端部に位置する。

内部には、砂防指定地のコンクリート製標柱が壊れたものが入っており、奥壁にもコンクリートの飛沫が付着している。

内部主体は、S-20°-Wに開口する横穴式石室であると考えられる。現状での計測値は以下の通りである。

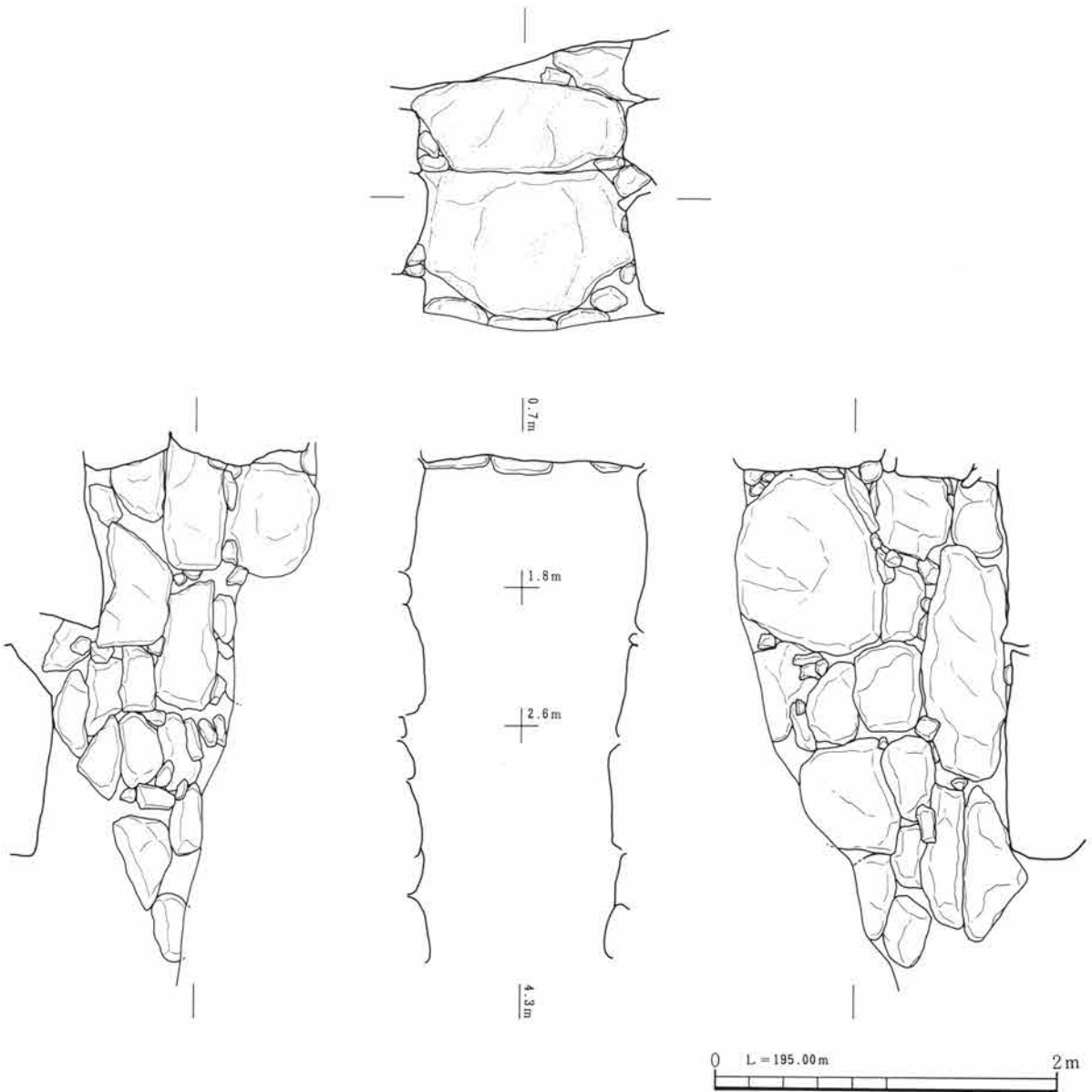
高さ 155cm

奥幅 125cm

左壁 285cm

右壁 285cm

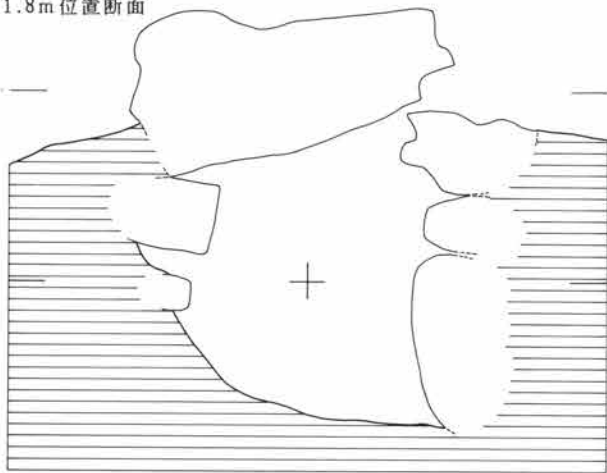
奥壁は、小型の石材が3個並べられた上に大型の



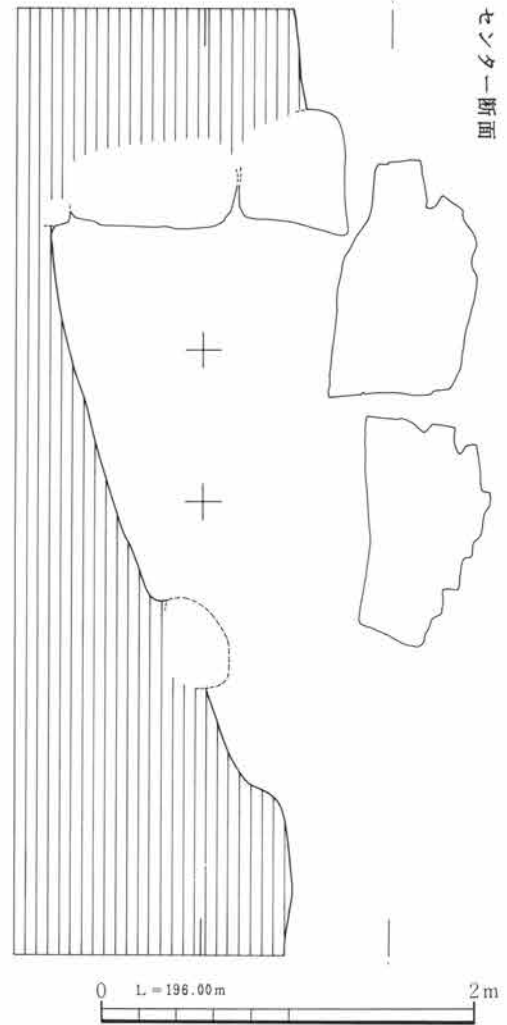
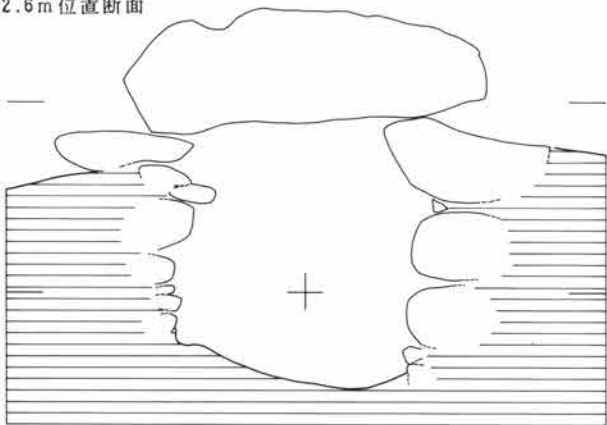
第323図 D号墳石室展開図

III 検出された遺構と遺物

1.8m 位置断面



2.6m 位置断面



第324図 D号墳石室断面実測図

石材2個が積まれているのが観察できる。

左右の側壁とも、自然石乱石積みで構成されているが、底部から60cm程上部では横目地が通っている様子が観察できる。左壁はほぼ垂直に積み上げられているが、右壁は10°前後内傾しており、天井部での奥幅は105cmを測る。

天上石は奥の2石が残っており、1.2×2.0m・厚さ60～70cmの大きさである。

E号墳《第325～327図、図版179・180》

D号墳の120m程南東に位置する。径16～17m前後の円墳か、或は南東部に張出または前方部を持った古墳と思われるが、定かではない。

天井石が除去されており、玄室が観察できる。内部主体は、南西方向に開口するT字形の横穴式石室であるが、羨道部が埋もれている。現状での計測値は以下の通りである。

奥幅	285cm	前幅	225mm
左壁	107cm	高さ	75cm
右壁	113cm	羨道幅	90cm

壁体は、粗粒安山岩の亜角礫の小口面を使用して構築されているものと思われる。また、羨道は5m以上あるものと考えられる。

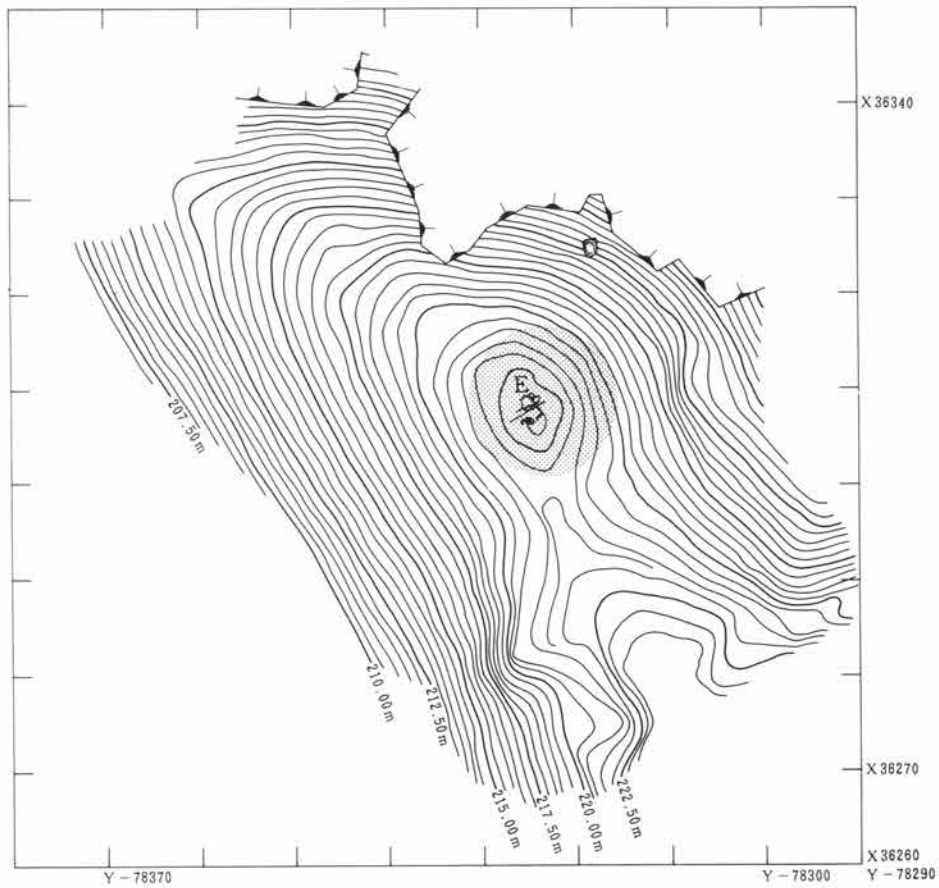
F号墳《第320図、図版180》

天井石が崩落しそうなため、内部の実測は行えな

かったが、西南西方向に開口する横穴式石室を持つ古墳である。埴輪を伴い、円墳と考えられるが、ボーリング棒では葺石は確認できなかった。

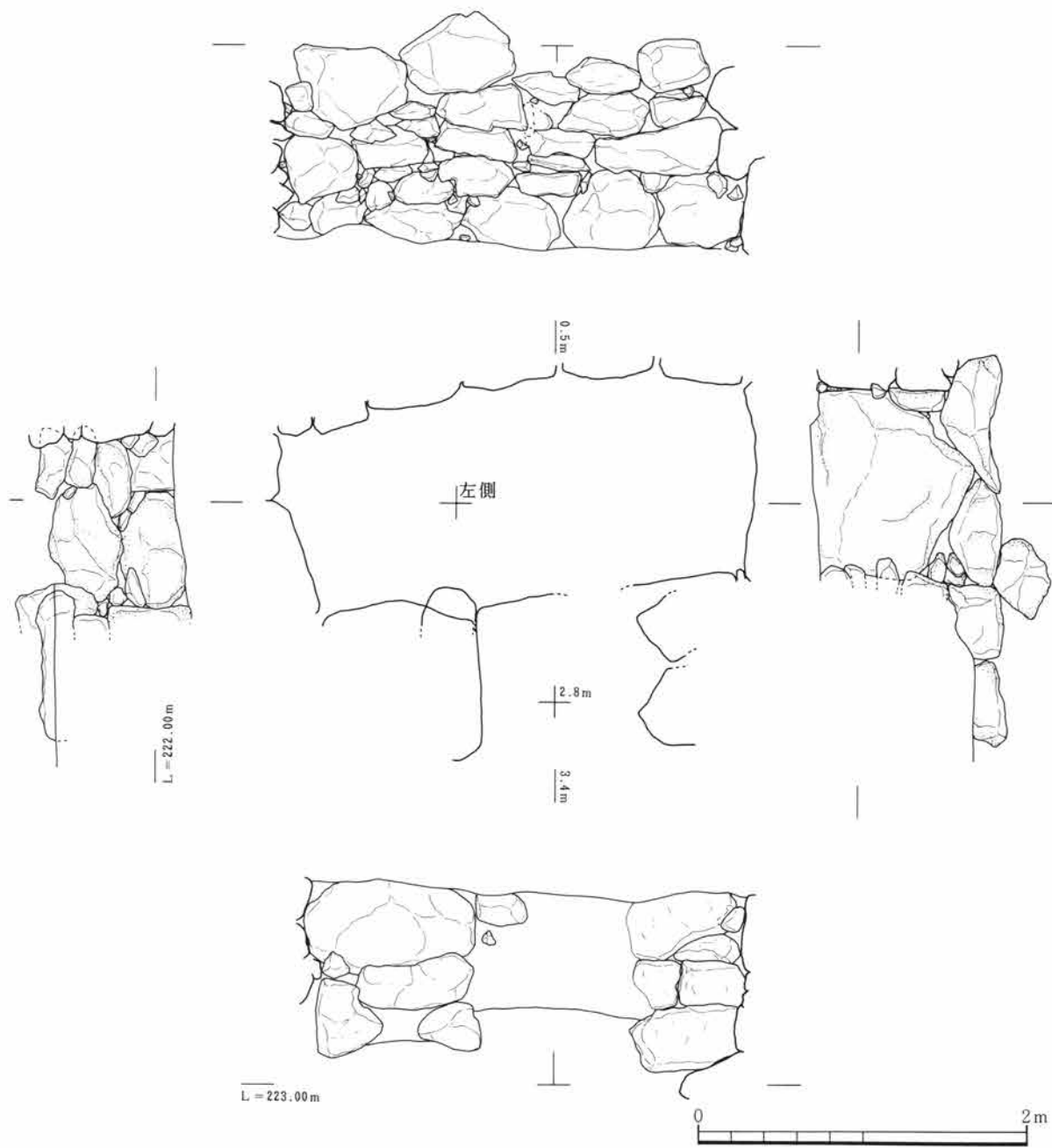
G号墳《第320図》

梨畑の隅に残っている。周囲には石垣が積まれているが円墳と考えられる。頂部には石碑が建てられており、内部主体は不明である。周辺には形象埴輪の破片が多く散在していた。

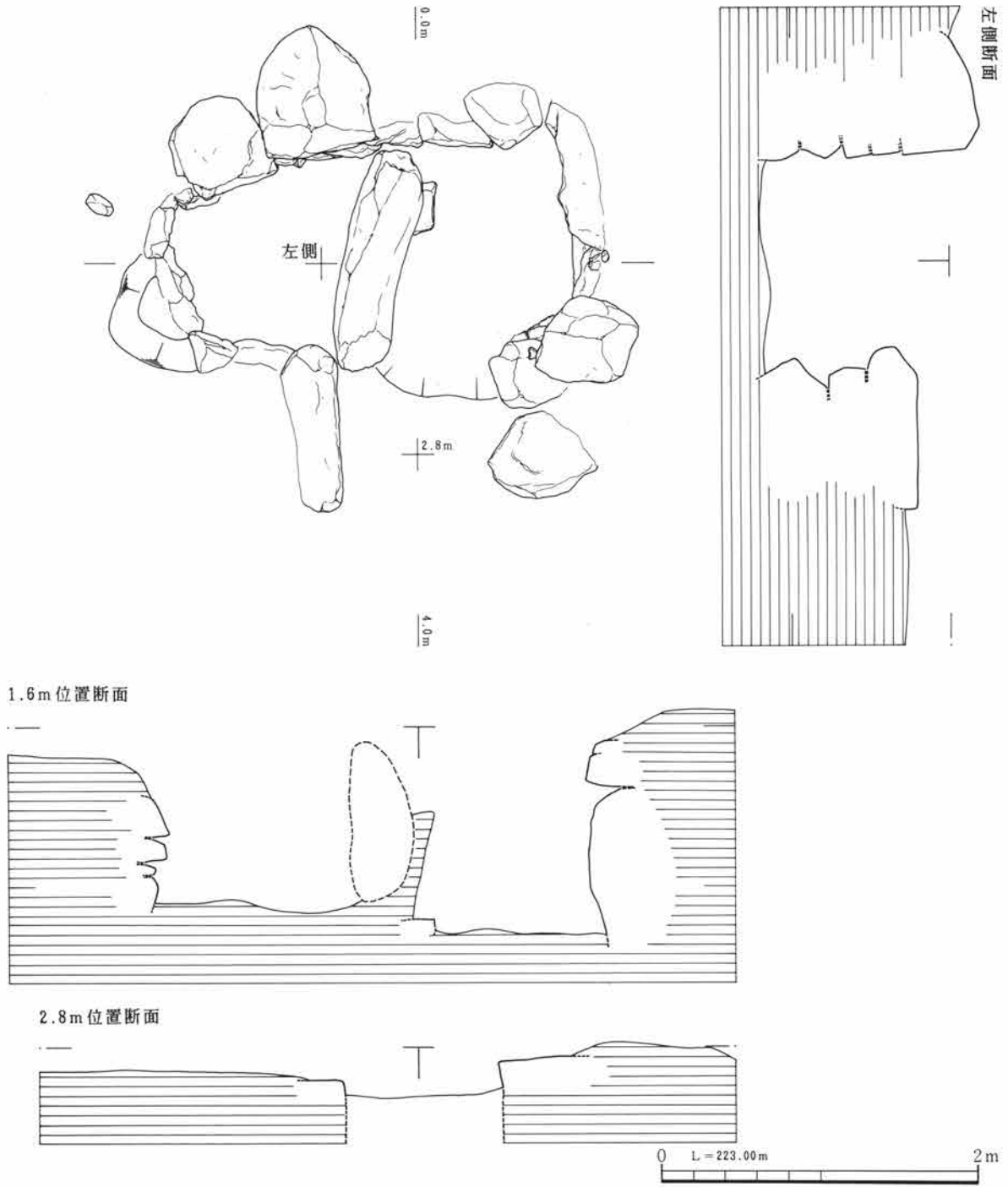


第325図 E号墳周辺地形図

III 検出された遺構と遺物



第326図 E号墳石室展開図



第327図 E号墳石室実測図

IV 科学分析

(1) 埴輪

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試料に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{mm}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる胎土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu、Filter : Ni、Voltage : 40Kv、Current : 30mA、ステップ角度 : 0.02° 、計数時間 : 0.5SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の割合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35,350,750,1500,5000,の5段階で行い、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとうりである。

第1表右側にはX線回折試験に基づき粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づき粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの強度を測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組合わせとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

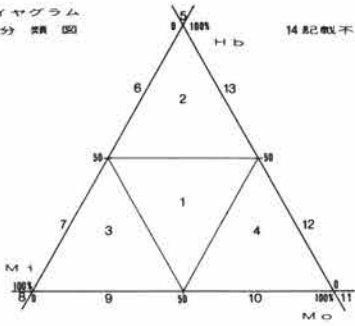
Mo, Mi, Hb, の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)、のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント(%)で表示する。

モンモリロナイトは $\text{Mo}/\text{Mo}+\text{Mi}+\text{Hb} \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hbも計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1~4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

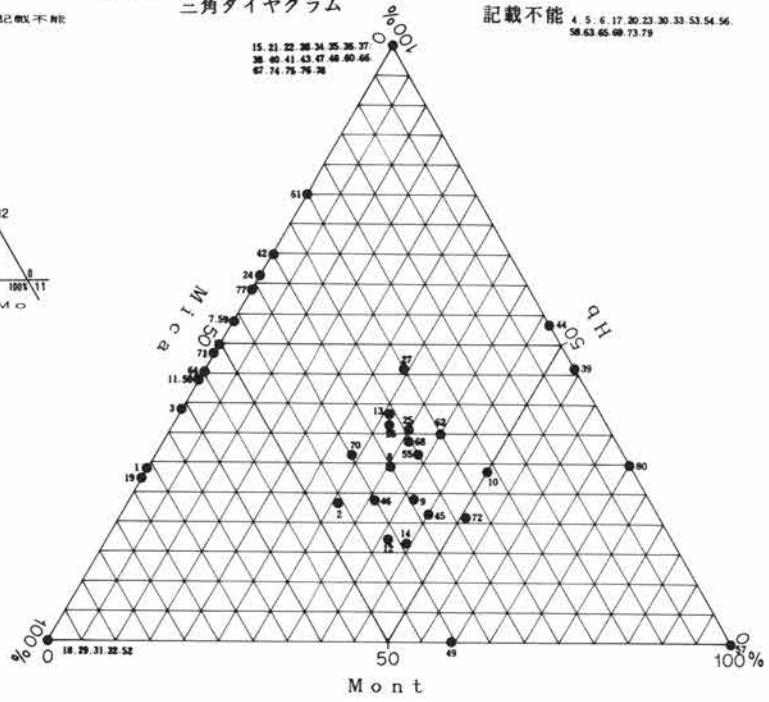
位置分類についての基本原則は第1図に示すとうりである。

三角ダイヤグラム
位置分類図



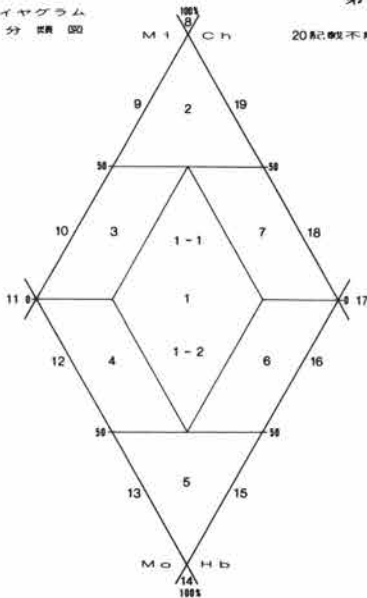
14 記載不能

第3図 Mo-Mi-Hb
三角ダイヤグラム



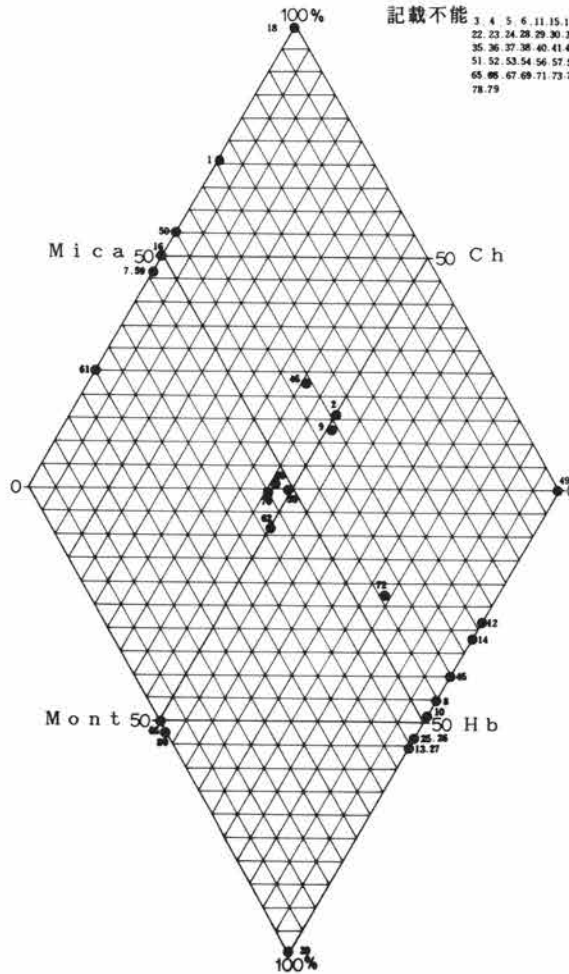
記載不能 4, 5, 6, 17, 20, 23, 30, 33, 53, 54, 56, 58, 63, 65, 69, 73, 79

菱形ダイヤグラム
位置分類図



20 記載不能

第4図 Mo-Ch, Mi-Hb
菱形ダイヤグラム



記載不能 3, 4, 5, 6, 11, 15, 17, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 40, 41, 42, 43, 47, 48, 51, 52, 53, 54, 56, 57, 58, 60, 63, 64, 65, 66, 67, 69, 71, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79

IV 科学分析

ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA, B, Cなどは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3 分析結果

3-1 タイプ分類

少林山台遺跡より出土した円筒埴輪・形象埴輪及び土師の坏・高坏を分析した。又、これらと対比するために高崎市・前橋市・安中市・伊勢崎市・太田市・赤堀町・甘楽町の古墳より出土した円筒埴輪も同時に分析した。又、既に分析が行われた藤岡市の芝宮古墳群より出土した円筒埴輪と形象埴輪も参照した。

土器胎土は第1表胎土性状表、円筒埴輪・形象埴輪と土器の一覧表は第3表、胎土のタイプ分類一覧表は第4表。

第1表胎土性状表に示すように、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA～Rの18タイプに分類された。Fタイプは最も多いタイプで、106個のうち30個が該当し、約30%を占めている。ついで、Rタイプの20個、約20%が続く。FとRの2タイプで全体の約50%を占めている。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、少林山台-6は粗粒のガラスが生成し、須恵器のように焼成され、焼成ランクIと高い。少林山台-4, 38, 58, 65, 69の5個の円筒埴輪も粗粒のガラスが生成し、焼成ランクもI～IIと高い。少林山台-3, 15, 20, 23, 28, 30, 37, 43, 54, 56, 60の11個は中～粗粒のガラスが生成し、焼成ランクはII～IIIと幾分高い。他は中粒のガラスが生成し、焼成ランクはIIIである。

Aタイプ……少林山台-2, 9, 46, 55, 62,
68, 70,

芝 宮-1, 5

Mont, mica, Hb, Chの4成分を

含む。個体数は9個で、Rタイプについて多い。

Bタイプ……少林山台-13, 25, 26, 27

芝 宮-3, 6, 14

Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。個体数は7個である。

Cタイプ……少林山台-8, 12, 14, 45

芝 宮-11, 15

Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。個体数は6個である。組成的にはBタイプと同じであるが、検出強度が異なるために、位置分類が違っている。

Dタイプ……少林山台-72

Mont, Mica, Hb, Chの4成分を含む。個体数は1個である。組成的にはAタイプと類似するが、検出強度が異なり、異質である。

Eタイプ……少林山台-10

Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch1成分に欠ける。組成的にはBとCタイプに類似する。

Fタイプ……少林山台-15, 21, 22, 28, 34,
35, 36, 37, 38, 40,
41, 43, 47, 48, 60,
66, 67, 74, 75, 76,
78

芝 宮-4, 7, 10, 12, 13,
16, 17, 18, 21

Hb1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。個体数は30個で、全体の約30%を占めている。少林山台遺跡の円筒埴輪と土師器、今井神社古墳の円筒埴輪で構成される。芝宮古墳群

- でも多く検出されている。
- Gタイプ……少林山台-7, 59, 61
芝 宮-2, 24, 25
Mica, Hb, Chの3成分を含み、
Mont 1に欠ける。個体数は6個
である。
- Hタイプ……少林山台-24, 42, 77
芝 宮-9
Mica, Hbの2成分を含み、
Mont, Chの2成分に欠ける。個
体数は4個である。
- Iタイプ……少林山台-1, 16, 50
芝 宮-22, 23
Mica, Hb, Chの3成分を含み、
Mont 1成分に欠ける。個体数は
5個である。組成的にはGタイ
プと類似するが、検出強度が異
なる。
- Jタイプ……少林山台-3, 11, 19, 51, 64,
71
芝 宮-8
Mica, Hbの2成分を含み、
Mont, Chの2成分に欠ける。個
体数は7個である。組成的には
Hタイプと類似するが検出強度
が異なる。
- Kタイプ……少林山台-18
Mica, Chの2成分を含み、
Mont, Hbの2成分に欠ける。個
体数は1個である。
- Lタイプ……少林山台-29, 31, 32, 52
Mica 1成分を含み、Mont, Hb,
Chの3成分に欠ける。個体数は
4個である。
- Mタイプ……少林山台-49
Mont, Mica 2成分を含み、Hb,
Chの2成分に欠ける。個体数は
11個である。
- Nタイプ……少林山台-57
Mont, Chの2成分を含み、
Mica, Hbの2成分に欠ける。個
体数は1個である。
- Oタイプ……少林山台-80
Mont, Hb, Chの3成分を含み、
Mica 1成分に欠ける。個体数は
1個である。
- Pタイプ……少林山台-39
Mont, Hbの2成分を含み、
Mica, Chの2成分に欠ける。個
体数は1個である。
- Qタイプ……少林山台-44
Mont, Hb, Chの3成分を含み、
Mica 1成分に欠ける。個体数は
1個である。組成的にはOタイ
プと類似するが、検出強度が異
なる。
- Rタイプ……少林山台-4, 5, 6, 17, 20,
23, 30, 33, 53, 54,
56, 58, 63, 65, 69,
73, 79
芝 宮-19, 20, 26
Mont, Mica, Hb, Chの4成分に
欠ける。おもに、アルミナゲル
($nA 1 2O_3 \cdot mSiO_2 \cdot 1 H_2O$)で
構成される。個体数は20個で、
Fタイプについて多く、全体の
20%を占める。少林山台-4, 6,
58, 65, 69の5個は粗粒のガラ
スが生成した焼成ランクがIあ
るいはI~IIと高いものであ
り、高温で焼成された際に、鉱物
が分解してガラスに変化したた
めに、Mont, Mica, Hb, Chの4
成分が検出されないと推察され
るので、この5個は本来の組成と
は異なっている可能性がある。

IV 科学分析

以上の結果から明らかなように、AとDタイプはMont, Mica, Hb, Chの4成分を含み、個体数は10個。B, C, Eの3タイプはMont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch 1成分に欠ける、個体数は14個。GとIタイプはMica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける、個体数は11個。HとJタイプはMica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける、個体数は11個である。これに、Fタイプの30個とRタイプの20個を加えると96個となる。この様に見てみると、上記の6タイプで全体の90%を占めることになる。

3-2 石英(Qt)-斜長石(Pi)の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといことは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

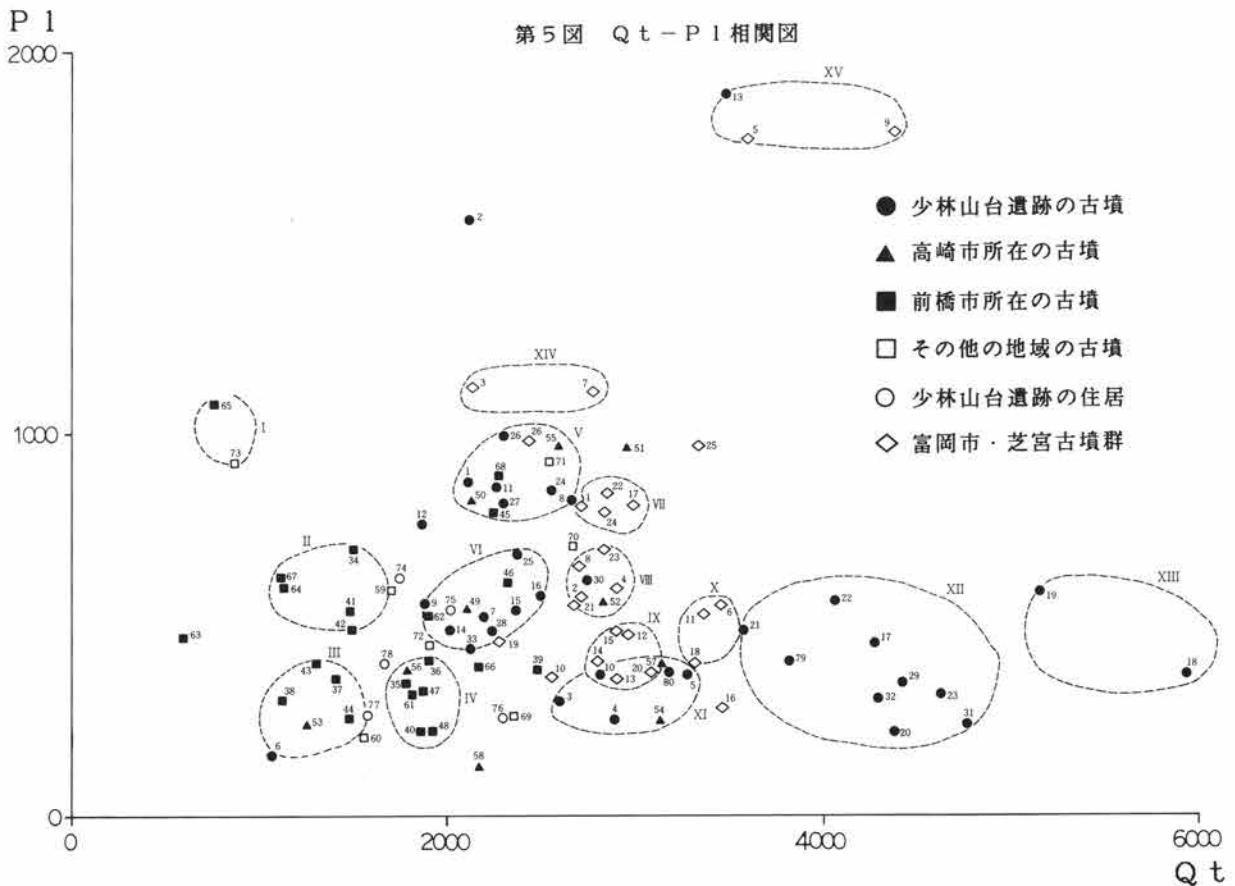
自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々固有の石英-斜長石比を有しているといえる。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する固有の技術の一端である。

第5図Qt-Pi相関図に示すように、円筒埴輪・形象埴輪、土器はI~XVの15グループと“その他”に分かれた。

図から明らかなように、石英の強度が1000~2000の間は前橋市の古墳から出土したものが分布し、2000~2600の間では少林山台と高崎市の古墳から出土したものが分布し、2600~3600の間では富岡市の芝宮古墳群より出土したものが分布し、3600以上の領域では少林山台遺跡から出土したものが分布する。

図の中で特徴的なことは少林山台-74~78の少林山台遺跡の住居跡から出土した土器師の坏と高坏で



ある。これらは埴輪の各グループに属することなく分布していることである。

第4表で明らかなように、Fタイプは前橋市の今井神社古墳の埴輪が主体となり、少林山台遺跡から出土した埴輪4個と土師器4個が含まれるが、高崎市の他の古墳からは検出されないのが特徴である。少林山台遺跡と高崎市の古墳ではRタイプの胎土が多いが前橋市の古墳ではあまり検出されていない。少林山台遺跡と高崎市の古墳では多くのタイプが検出されているが、その主体となる鉱物はMica、Hbの2成分で、この成分にMontやChが加わっていろいろなタイプが形成されている。

Iグループ……少林山台-65, 73

65は前橋市の中二子古墳、73は伊勢崎市のお富士山古墳の埴輪。

IIグループ……少林山台-34, 41, 42, 59, 64, 67

34、41、42の3個は前橋市の今井神社古墳、59は赤堀町の茶臼山古墳、64は前橋市の前二子古墳、67は前橋市の正円寺古墳で構成される。34、41、67の3個はFタイプである。

IIIグループ……少林山台-6, 37, 38, 43, 44, 53, 60

6は少林山台遺跡、37、38、43は今井神社古墳、44は前橋市の荒砥村245号墳、53は高崎市の観音塚古墳で構成される。37、38、43はFタイプ、6、53はRタイプで構成される。

IVグループ……少林山台-35, 36, 40, 47, 48, 56, 61

35、36、40の3個は今井神社古墳、47は前橋市の宮原1号墳、48は宮川1号墳、61は遠

見山古墳、56は高崎市の三島塚古墳で構成される。35、36、40、47、48の5個はFタイプで、このグループはFタイプで代表される。

I～IVの4つのグループは今井神社古墳で代表されるように、Fタイプの胎土が主体となり、前橋市の古墳の埴輪が集中するのが特徴である。

Vグループ……少林山台-1, 8, 11, 24, 26, 27, 45, 50, 55, 68, 71
芝宮-26

1、8、11、24、26、27の6個は少林山台遺跡、45は前橋市の荒砥村245号墳、68も前橋市の不二山古墳、50は高崎市の浅間山古墳、55も高崎市の漆山古墳、71は太田市の天神山古墳、芝宮-26で構成される。少林山台遺跡の埴輪と高崎市の埴輪が主体となる。

VIグループ……少林山台-7, 9, 14, 15, 16, 25, 28, 33, 46, 49, 62, 75

芝宮-19
7、9、14、15、16、25、28、33、75の9個は少林山台遺跡の埴輪、46は前橋市の宮原1号墳、49は高崎市の大鶴巻古墳、62は前橋市の総社二子山古墳、芝宮-19で構成される。このグループも少林山台遺跡の埴輪を主体とする。

このVとVIグループには少林山台遺跡の埴輪と高崎市の古墳の埴輪が多く含まれているのが特徴である。

VIIグループ……芝宮-1, 17, 22, 24
芝宮古墳群の埴輪が集中する。

IV 科学分析

VIIIグループ……少林山台-30, 52
芝 宮-2, 4, 8, 21,
23
30は少林山台遺跡、52は高崎市平塚古墳、芝宮-2, 8, 21, 23は芝宮古墳群で構成される。芝宮古墳群の埴輪が主体となっているグループ。

IXグループ……芝 宮-12, 13, 14, 15,
20
芝宮古墳群の埴輪が集中する。

Xグループ……芝 宮-6, 11, 18
芝宮古墳群の埴輪が集中する。

VII~Xグループの4グループは芝宮古墳群の埴輪が集中することで特徴付けられる。少林山台遺跡の埴輪や前橋市や高崎市の古墳の埴輪とは異なるグループを形成している。

XIグループ……少林山台-3, 4, 5, 10,
54, 57, 80
3, 4, 5, 10, 80の5個は少林山台遺跡の埴輪、54は高崎市の長瀬西古墳、57は高崎市の若宮八幡北古墳で構成される。

XIIグループ……少林山台-17, 20, 21, 22,
23, 29, 31, 32,
79
少林山台遺跡の埴輪だけで構成されるグループ。
21, 22はFタイプ、17, 20, 23, 79はRタイプで構成され、FとRが混在する。この2タイプは少林山台遺跡の中で最も多く検出されたタイプである。

XIIIグループ……少林山台-18, 19

石英の強度が高いグループで、少林山台遺跡の埴輪だけで構成される。

XI~XIIIの3グループは少林山台遺跡の埴輪が集中し、他のものは非常に少ない。特にXIIとXIIIの2グループは石英の強度が高く、他のものと比較して異質である。

XIVグループ……芝 宮-3, 7
芝宮古墳群の埴輪が集中する。

XVグループ……少林山台-13,
芝 宮-5, 9
斜長石と石英の強度が非常に高く、異質なグループである。

XIVとXVの2つのグループは斜長石の強度が高く、他のグループと比較して異質である。この2グループはともに芝宮古墳群の埴輪が主体となる。

“その他”……少林山台-2, 12, 39, 51,
58, 63, 66, 69,
70, 74, 76, 77,
78

芝 宮-10, 16, 25
少林山台-2は斜長石の強度が高く異質である、12もどのグループにも属さない。少林山台-74, 76, 77, 78の4個は坏と高坏で、組成的には今井神社遺跡の埴輪と類似するものであるが、どのグループにも属さず、又、各々も離れている。51は高崎市の不動山古墳、58は高崎市の若宮八幡北古墳、63は前橋市の王山古墳、66は前橋市の後二子古墳、69は甘楽町の貉塚古墳、70は安中市の岩野谷村57号墳、芝宮-10, 16, 25は芝宮古墳群である。これらはどのグルー

ブにも属さず、各々がそれぞれのグループを代表しているものである。

以上の結果から明らかなように、石英の強度で地域差が出ているのがよくわかる。

石英の強度が2000以下の領域は前橋市、2000～2600の領域は高崎市の少林山台遺跡、2600～3600の領域は藤岡市、2600以上は少林山台遺跡という具合である。

前橋市のグループはFタイプの胎土が多く使われているが、少林山台遺跡ではFとRの2タイプが使われている。

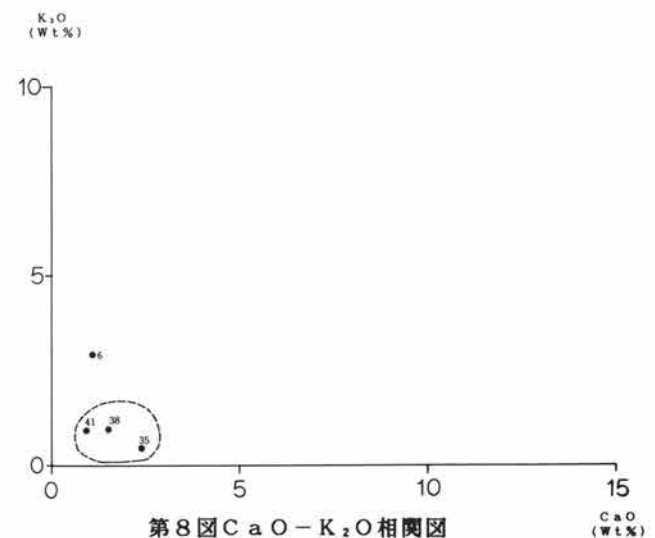
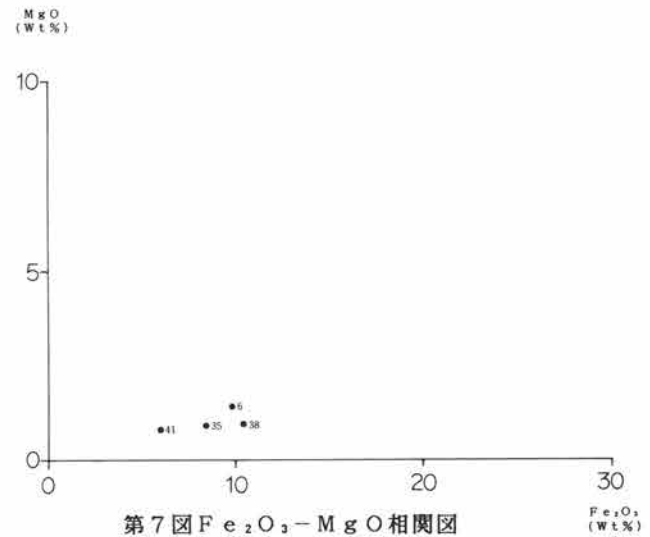
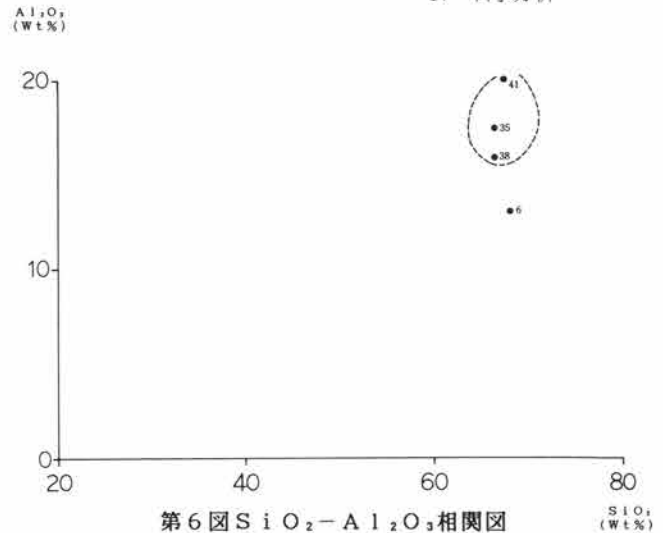
3-3 化学分析結果

X線回折試験と電子顕微鏡による分析の結果より焼成ランクが高いものを抽出したものが少林山台遺跡より出土した埴輪(6)と今井神社古墳より出土した埴輪(35, 38, 41)の4個である。

化学分析は日本電子製エネルギー分散型X線分析装置JED-2000で行った。分析結果は第2表化学分析結果表に示す通りである。

分析結果に基づいて第6図SiO₂-Al₂O₃相関図、第7図Fe₂O₃-MgO相関図、第8図CaO-K₂O相関図を作成した。

第6図と第8図で明らかなように少林山台遺跡の埴輪と今井神社古墳の埴輪は明瞭に分かれた。少林山台遺跡の埴輪はAl₂O₃の値が今井神社古墳の埴輪より小さいが、SiO₂の値は変わらない。少林山台遺跡の埴輪はK₂Oの値が3%と高いが、今井神社古墳の埴輪はK₂Oの値が1%以下と低く、明瞭に分かれる。この結果は石英と斜長石の相関の項で得た結論とよく対比される。



IV 科学分析

3	小林山6-1	小林山6-2	小林山35-1	小林山35-1	小林山38-1	小林山38-2	小林山41-1	小林山41-2		
Oxide	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
Na ₂ O	1.030	1.180	0.730	0.750	0.760	0.550	0.360	0.450		
MgO	1.380	1.510	0.940	0.930	0.960	0.770	0.950			
Al ₂ O ₃	12.890	13.240	17.390	17.260	15.810	17.680	19.990	19.980		
SiO ₂	68.390	70.010	66.730	67.780	66.720	65.410	67.470	66.280		
K ₂ O	2.920	2.950	0.440	0.640	0.950	0.890	0.910	0.340		
CaO	1.050	1.100	2.370	3.130	1.480	1.280	0.850	0.940		
TiO ₂	1.030	1.160	1.270	1.460	1.390	1.630	1.430	1.090		
MnO	0.160	0.140	0.240	0.030	0.150	0.310	0.250	1.360		
Fe ₂ O ₃	9.840	6.980	8.350	6.540	10.420	9.700	6.070	0.180		
CoO	0.000	0.000	0.000	0.330	0.000	0.030	0.000	6.850		
CuO	0.000	0.300	0.380	0.000	0.320	0.000	0.350	0.160		
SnO ₂	0.120	0.190	0.020	0.010	0.000	0.260	0.160	0.240		
HgO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		
PbO	1.170	1.250	1.140	1.270	1.070	1.290	1.390	1.200		
SO ₂	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		
Total	99.980	100.010	100.000	99.990	100.000	99.990	100.000	100.000	0.000	0.000
	5 C円筒	5 C円筒	5 C円筒	5 C円筒	5 C円筒	5 C円筒	5 C円筒	5 C円筒		

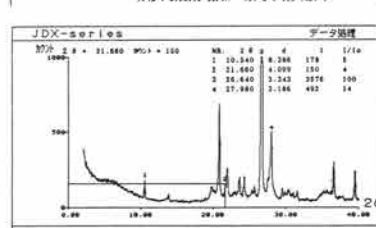
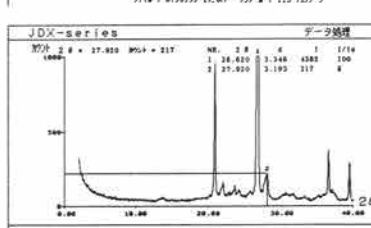
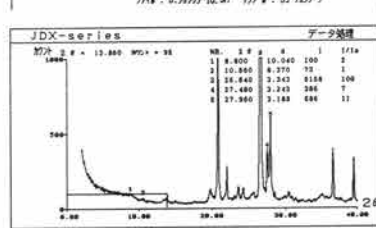
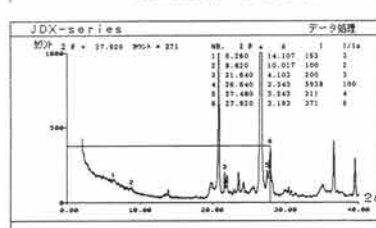
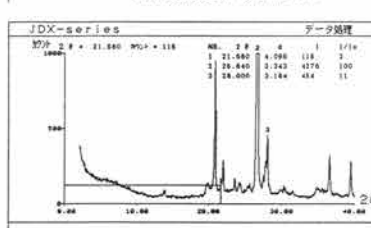
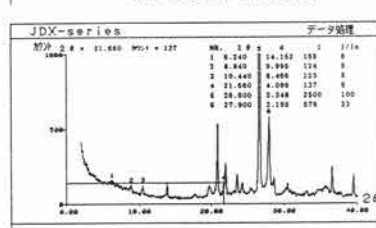
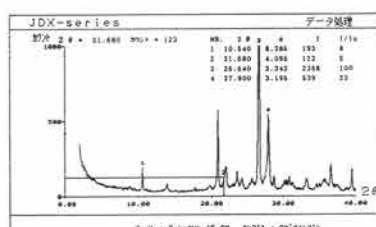
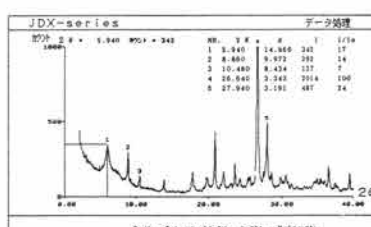
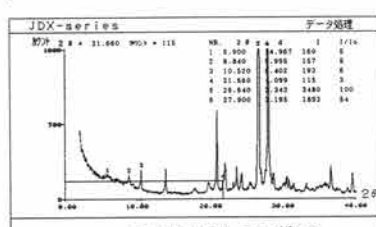
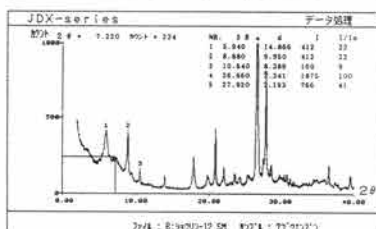
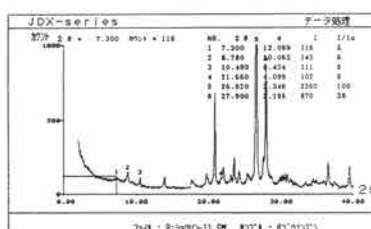
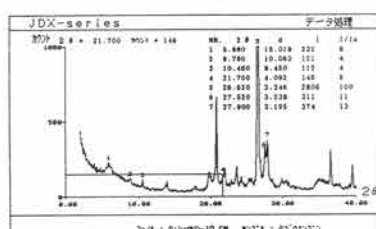
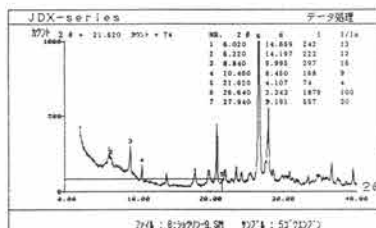
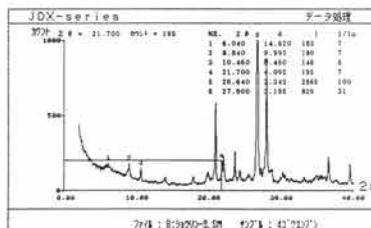
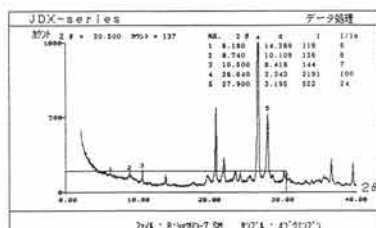
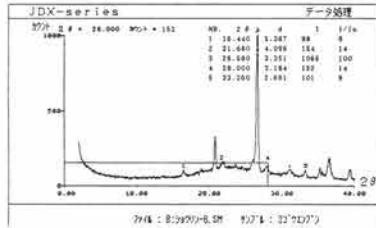
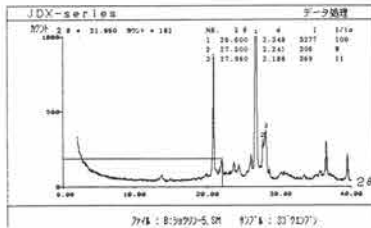
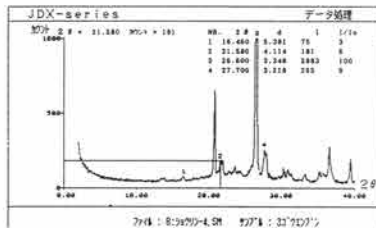
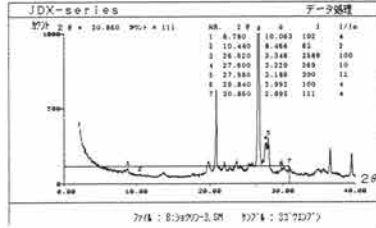
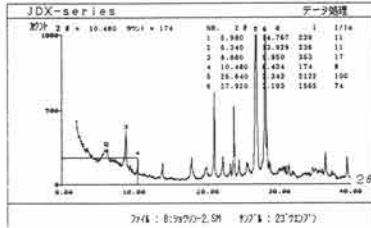
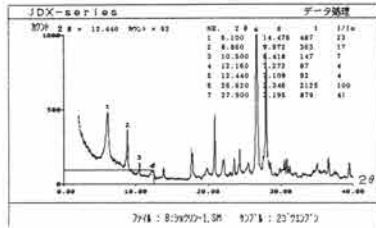
2表 化学分析表

4 まとめ

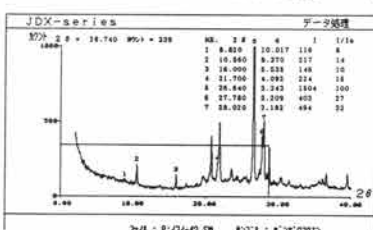
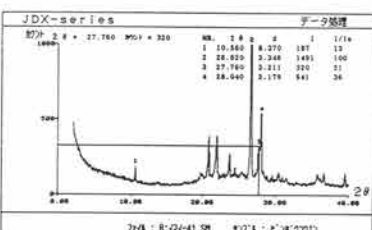
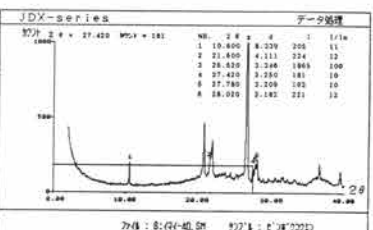
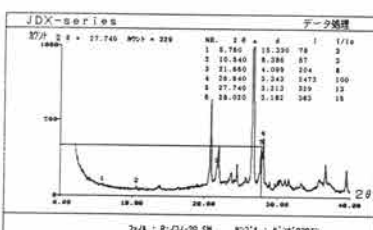
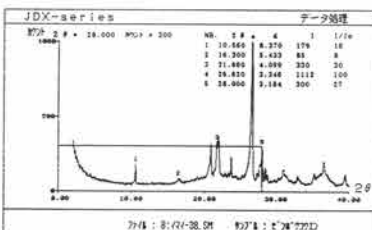
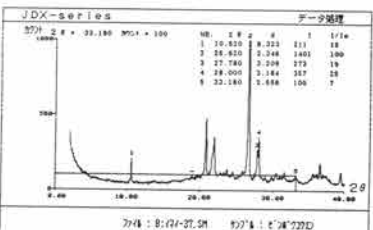
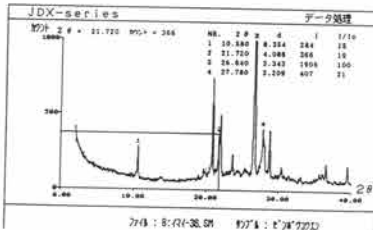
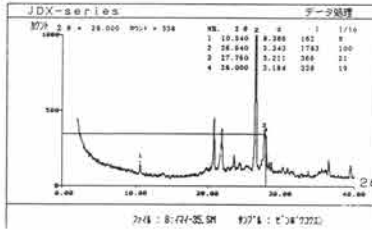
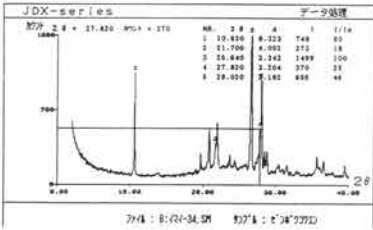
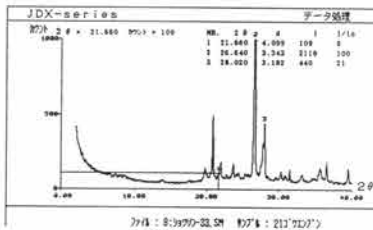
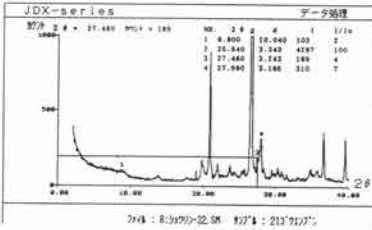
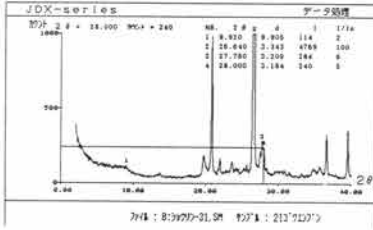
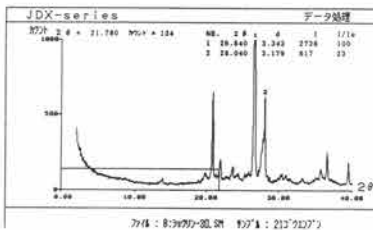
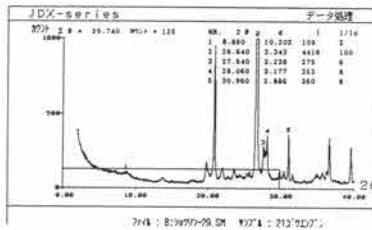
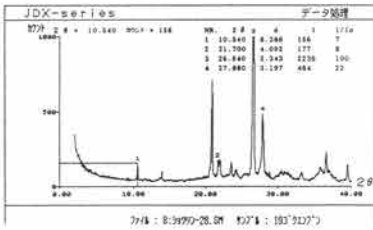
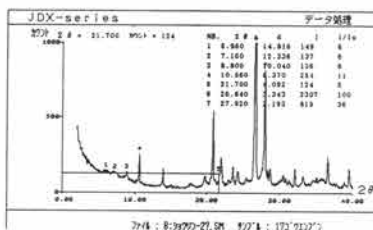
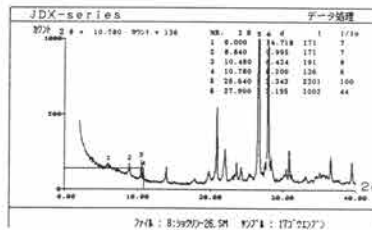
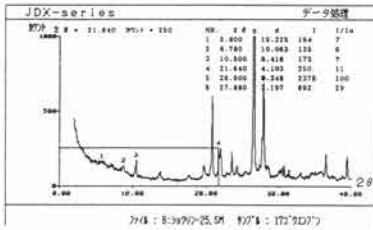
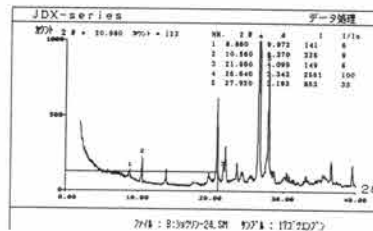
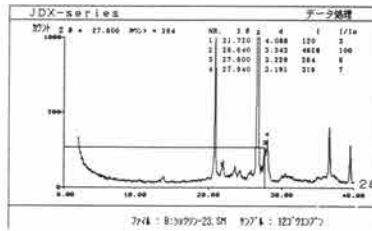
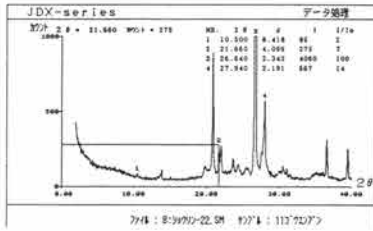
i) 埴輪と土器の胎土の分析ではA～Rの18タイプに分類された。最も多いタイプはFタイプで、30個が該当し、全体の約30%を占めている。ついで、Rタイプが多く、20個が該当し、全体の約20%を占めている。FとRの2タイプで全体の約50%を占めていることになる。前橋市の今井神社古墳の埴輪はFタイプで、少林山台遺跡の土師器の坏と高坏も同じFタイプで、関連性が伺われた。少林山台遺跡の埴輪はRタイプが多く、Fタイプも一部共存する。

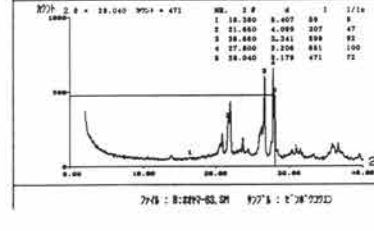
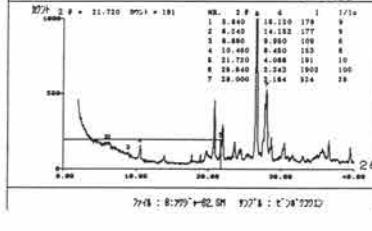
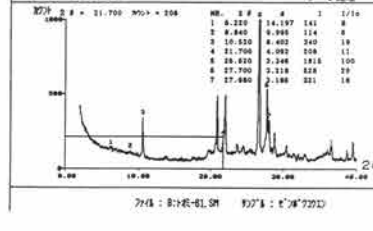
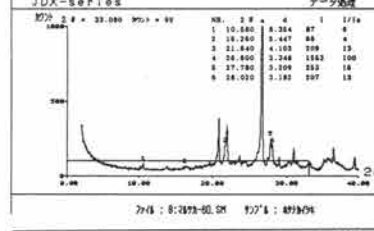
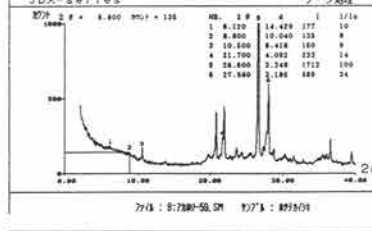
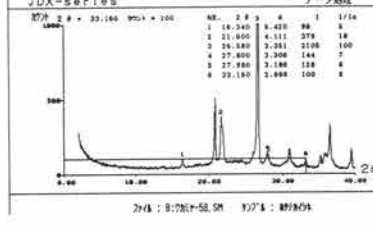
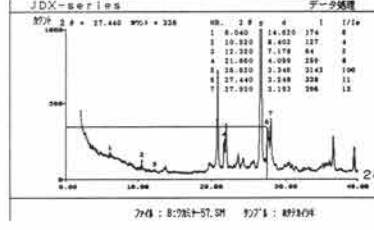
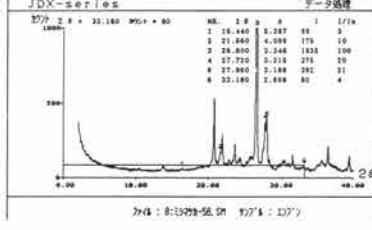
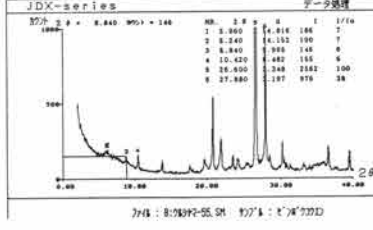
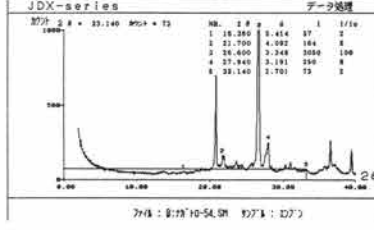
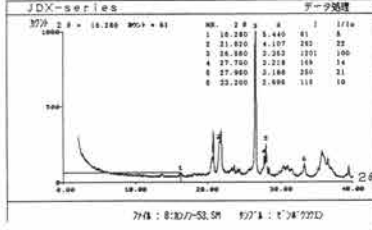
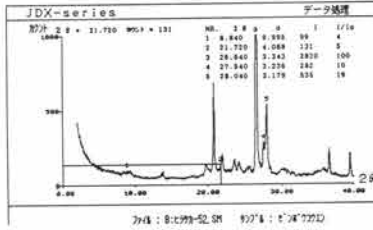
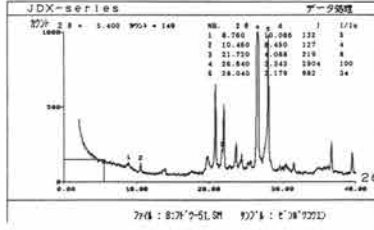
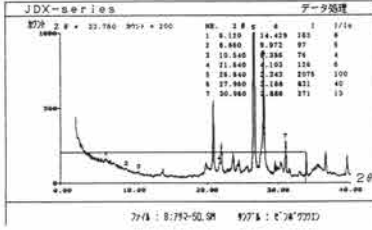
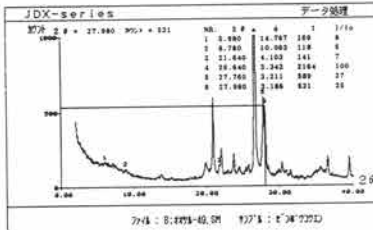
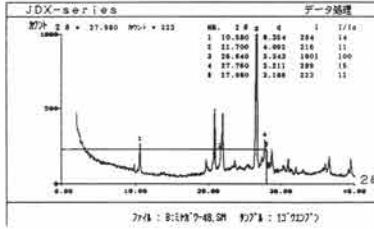
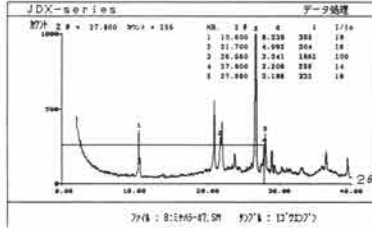
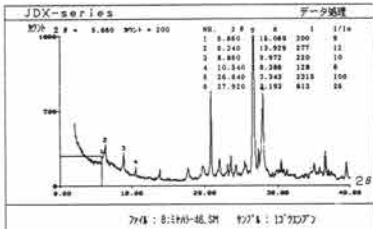
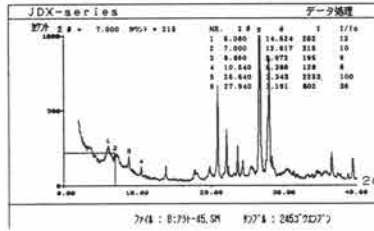
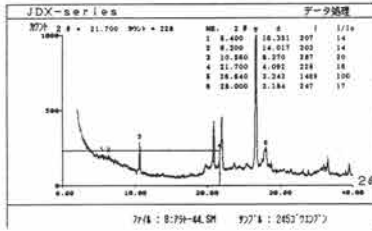
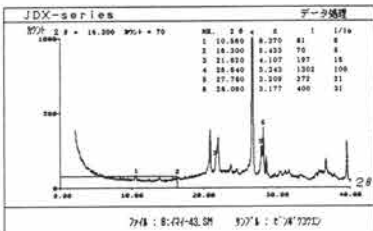
ii) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、少林山台-6で代表されるように粗粒のガラスが生成した焼成ランクIのものやI～IIと高いものが5個検出されている。又、粗～中粒のガラスが生成した、焼成ランクがII～IIIのものは11個検出されたが他は中粒のガラスが生成した、焼成ランクIIIがほとんどである。

iii) 石英と斜長石の相関では、I～XVの15グループと”その他”に分類された。埴輪においては石英の強度で地域が明瞭に分かれることが判明した。石英の強度が2000以下では前橋市の埴輪、2000～2600の間では少林山台遺跡と高崎市の埴輪、2600～3600の間では藤岡市の芝宮古墳群の埴輪、3600以上には少林山台遺跡の埴輪が分布する。各グループは混在する傾向が低く、各遺跡の埴輪だけで独自にグループを作る傾向が強い。

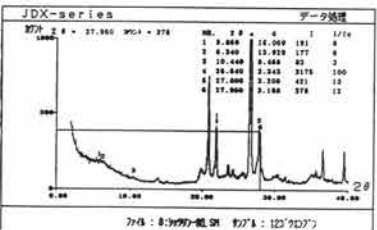
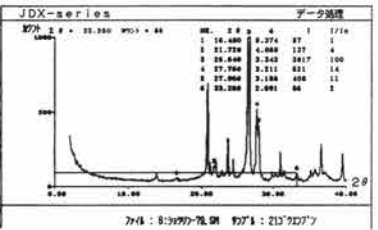
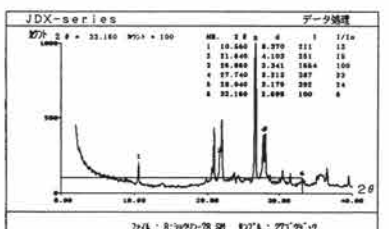
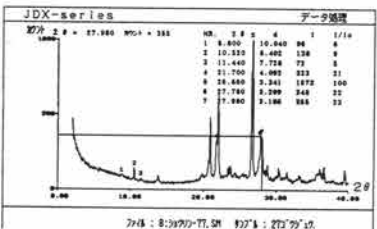
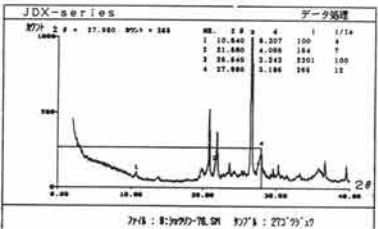
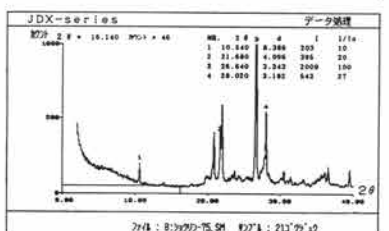
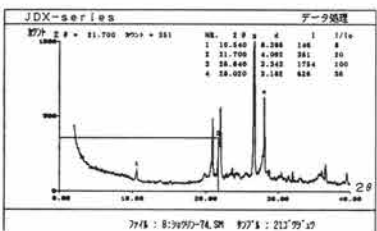
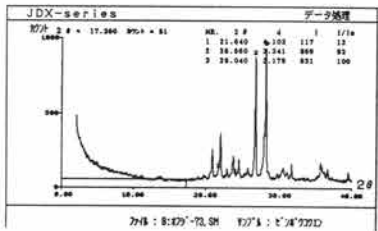
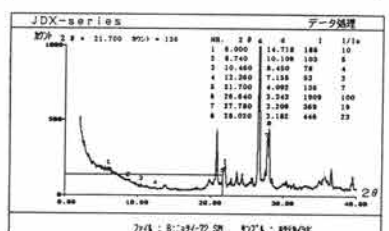
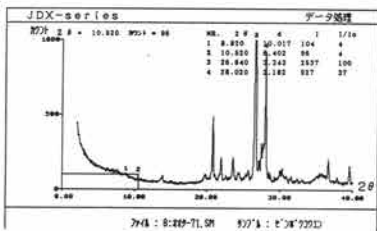
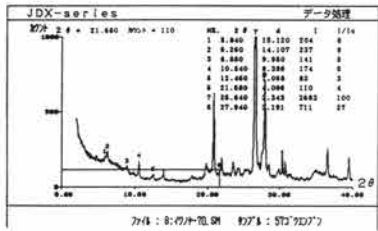
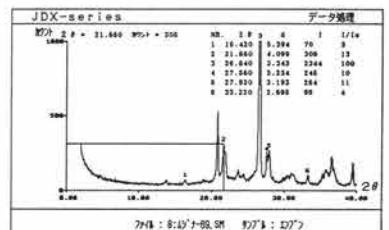
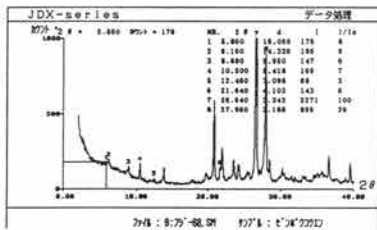
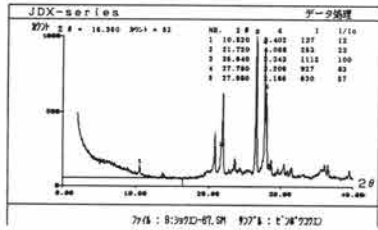
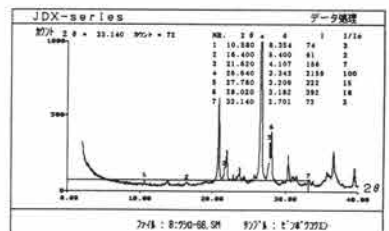
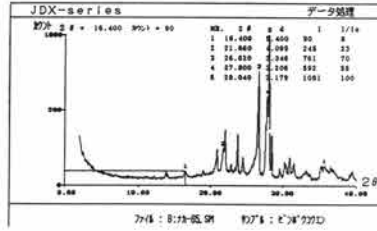
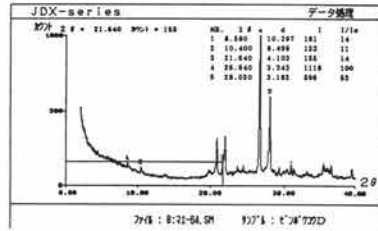


IV 科学分析





IV 科学分析



(2) ガラス・金属製品

はじめに

少林山台遺跡より出土したガラス小玉と鉄製品に対する化学分析は日本電子製エネルギー分散型X線分析装置JED-2000を使って行った。

ガラス小玉は11個で、緑色、黄色、濃紫色、淡青色、淡緑色のガラス小玉各々について2回の化学分析を行った。

鉄製品については鉄斧、鉄剣、雲珠、轡、鉄鏃各々についてガラス小玉と同様に2回化学分析を行った。

1 ガラス小玉の化学分析

ガラス小玉の化学分析結果は第1表化学分析表に示す通りである。これらの結果に基づいて第1図SiO₂-Al₂O₃図、第3図CaO-Na₂O図を作成した。

1 緑色(鉛ガラス)	7 淡緑色(Cu)
2 黄色(Ag)	8 淡緑色(Cu)
(Cu)	
3 青色(Cu)	9 淡緑色(Cu)
4 濃紫色(Co)	10 淡青色(Cu)
5 淡青色(Cu)	11 淡青色(Cu)
6 濃紫色(Co+Cu)	

分析したガラス小玉の色と括弧内は検出された発色元素の一覧表である。これらの色とガラス成分について述べる。

[SiO₂-Al₂O₃の相関について]

第1図に明らかなようにI~IIIの3つのグループと“その他”に分類された。

Iグループ……5, 7, 8, 9, 11

7, 8, 9の3個は淡緑色で、CuOは0.8~1.6%含んでおり、明らかにCuOのWt%が高い。5と11は淡青色で、CuOは0.8~1.0%含んでおり、CuOのWt%は淡緑色のガラス小玉と

同様に高い。

IIグループ……2, 10

2は黄色のガラス小玉で、0.6%のCuOと0.15%のAgOが検出されている。10は淡青色で、1.94%という高いWt%を示している。

IIIグループ……3, 4, 6

3は青色のガラス小玉で、2.16%のCuOと0.19%のCoOを含んでいる。4は濃紫色のガラス小玉で、0.28%のCoOを含んでいる。6は濃紫色で、0.74%のCuOと0.06%のCoOが含まれている。

“その他”……1

1はPbOをWt%で67.76%も含んでおり、緑色の鉛ガラスであることは明らかである。

以上の結果からIグループは淡緑色のガラスが主体、IIグループは混在、IIIグループは濃紫色が主体となり、明らかにガラスの成分が異なっている。

[CaO-Na₂Oの相関について]

第2図から明らかなように、I~IIの2つのグループと“その他”に分類された。図中の中央に引いた直線はソーダガラスとソーダライムガラスを暫定的に分ける線である。線より上方がソーダガラス、下方がソーダライムガラスである。

Iグループ……5, 8, 9, 11

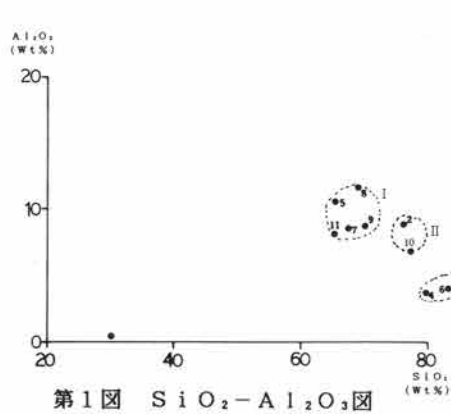
5と11は淡青色、8と9は淡緑色のガラスで、このグループのみがソーダガラスの領域にはいる。第1図のIグループとほとんど同じものが含まれる。

IV 科学分析

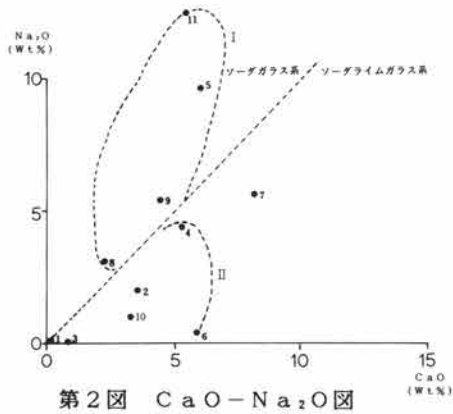
Oxide	少林G1-1	少林G1-2	少林G2-1	少林G2-2	少林G3-1	少林G3-2	少林G4-1	少林G4-2	少林G5-1	少林G5-2	少林G6-1	少山G6-2
	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
Na ₂ O	0.000	0.000	1.990	1.880	0.080	0.000	4.430	4.100	10.540	9.630	0.230	0.430
MgO	0.090	0.000	0.400	0.510	0.000	0.080	0.020	0.120	0.330	0.270	0.560	0.420
Al ₂ O ₃	0.410	0.220	8.780	8.800	5.390	4.520	3.730	4.010	9.340	10.470	2.620	3.970
SiO ₂	30.040	30.930	76.420	76.540	84.910	85.550	80.090	79.310	66.000	65.290	85.200	83.180
K ₂ O	0.000	0.000	1.440	0.930	2.730	2.600	1.460	1.440	2.030	1.970	0.040	0.130
CaO	0.020	0.000	3.460	3.500	1.340	0.870	5.320	5.290	6.350	5.970	6.030	5.930
TiO ₂	0.000	0.000	1.640	1.490	0.470	0.650	0.530	0.650	0.810	0.760	0.370	0.290
MnO	0.020	0.000	0.000	0.220	0.240	0.190	1.820	1.970	0.160	0.320	0.420	0.340
Fe ₂ O ₃	0.440	0.530	3.220	1.000	1.320	1.230	1.620	2.550	3.260	2.690	2.930	
CoO	0.320	0.100	0.070	0.000	0.000	0.190	0.280	0.000	0.000	0.050	0.060	0.000
CuO	0.900	1.070	0.620	0.360	1.620	2.160	0.050	0.210	0.340	0.770	0.380	0.740
SnO ₂	0.000	0.250	0.120	0.000	0.520	0.160	0.010	0.000	0.350	0.150	0.000	0.000
HgO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
PbO	67.760	66.900	1.840	2.330	1.690	1.660	0.850	1.040	1.060	0.920	1.330	1.510
SO ₂	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
Ag ₂ O				0.150	0.000	0.050	0.180	0.240	0.150	0.150	0.070	0.130
Total	100.000	100.000	100.000	100.000	99.990	100.000	100.000	100.000	100.010	99.980	100.000	100.000
	ガラス緑	ガラス緑	ガラス黄色	ガラス黄色	ガラス青	ガラス青	ガラス紺	ガラス紺	ガラス青	ガラス青	ガラス紺	ガラス紺

Oxide	少林G7-1	少林G7-2	少林G8-1	少林G8-2	少林G9-1	少林G9-2	少林G10-1	少林G10-2	少林G11-1	少林G11-2	Wt%	Wt%
	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%		
Na ₂ O	5.600	9.650	3.440	3.110	5.360	8.870	0.570	0.990	12.490	12.320		
MgO	0.470	0.420	0.580	0.540	0.320	0.180	0.290	0.240	0.310	0.480		
Al ₂ O ₃	8.510	8.090	9.050	11.640	8.680	8.260	6.440	6.930	8.110	8.420		
SiO ₂	67.520	68.440	74.080	69.270	70.350	70.120	78.020	77.210	65.280	66.240		
K ₂ O	2.230	2.080	3.760	4.540	3.020	2.800	2.370	2.290	2.080	2.090		
CaO	8.170	5.550	2.280	2.300	4.420	3.4000	3.460	3.340	5.450	5.210		
TiO ₂	0.800	0.580	0.570	1.010	1.030	0.730	2.300	2.110	1.180	0.660		
MnO	0.000	0.100	0.000	0.000	0.130	0.140	0.000	0.000	0.260	0.040		
Fe ₂ O ₃	4.760	3.520	1.540	2.320	2.840	1.980	3.660	3.480	2.230	2.130		
CoO	0.010	0.000	0.000	0.160	0.040	0.000	0.000	0.000	0.000	0.010		
CuO	1.050	0.750	1.070	1.630	0.810	0.510	1.420	1.940	0.990	0.880		
SnO ₂	0.000	0.000	0.340	0.440	0.570	0.490	0.110	0.250	0.140	0.250		
HgO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		
PbO	0.880	0.780	3.150	2.770	2.390	2.300	1.200	1.220	1.230	1.080		
SO ₂	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		
Ag ₂ O		0.050	0.140	0.270	0.050	0.230	0.140	0.020	0.250	0.190		
Total	100.000	99.990	100.000	100.000	100.010	100.010	99.980	100.020	100.000	99.980	0.000	0.000
	ガラス緑	ガラス緑	ガラス黄緑	ガラス黄緑	ガラス黄緑	ガラス黄緑	ガラス青	ガラス青	ガラス青	ガラス青		

第1表 化学分析表



第1図 SiO₂-Al₂O₃図



第2図 CaO-Na₂O図

IIグループ……2, 3, 4, 6, 10

2と10は第1図のIIグループのもので、混在するものであるが、このグループでは接近して分布する。3, 4, 6は第1図のIIIグループを形成するもので、濃紫色のものが主体となる。このグループのガラスはソーダライムガラスの領域に分布している。

“その他”……1, 7

1はほとんど0に近いもので、

鉛ガラス。7は淡緑色で、第1図ではIグループに入っていたもので、この図ではソーダライムガラスの領域に分布し、異質である。

以上の結果から明らかなように、淡緑色、淡青色系はソーダガラス系であり、濃紫色あるいは青色など濃色系はソーダライム系である。

2 鉄製品の化学分析

鉄製品の化学分析は6個行った。分析結果は第1表化学分析表に示す通りである。分析結果に基づいて第3図 $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{SiO}_2$ 図、第4図 $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{TiO}_2$ 図を作成した。

- 1 鉄斧
- 2 鉄剣
- 3 雲珠(表面)
- 4 雲珠(基板)
- 5 轡
- 6 鉄鏃
- 7 鉄鏃

[$\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{SiO}_2$ の相関について]

第3図に示すようにI~IIの2つのグループと“その他”に分類された。

Iグループ……4, 7

4は雲珠の基板で、 Fe_2O_3 が34%、 SiO_2 が40%と高い。

7は Fe_2O_3 が54%、 SiO_2 が26%である。この2個は Fe_2O_3 のWt%が低く、鍛鉄というよりは鑄鉄的である。

IIグループ……1, 2, 5, 6

1は鉄剣で、 Fe_2O_3 は93.25%に達し、 SiO_2 は3.17%である。2は鉄剣で、 Fe_2O_3 は82%、 SiO_2 は8%と低い。5は轡で、 Fe_2O_3 は91%に達し、 SiO_2 は2%以下である。6は鉄鏃で、 Fe_2O_3 は96%、 SiO_2 は1%程度と低い。この4個は明らかに Fe_2O_3 のWt%が高く、鍛鉄である。

”その他”……3

3は雲珠の表面の飾り板状のものを分析したものである。第1表に明らかなように、 Au_2O_3 が73%、 CuO が21%を占め、金と銅による鍍金と判断さる。

以上のように、Iグループは鑄鉄、IIグループは鍛鉄のグループと判断された。

[$\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{TiO}_2$ の相関について]

第4図に示すように、IとIIの2つのグループと“その他”に分かれた。IグループはIIグループとともに、 TiO_2 は1%以下で、ほとんど差がない。Iグループは Fe_2O_3 が34~54%の範囲にあり、鑄鉄のグループ。IIグループは Fe_2O_3 が82~96%の範囲にあり、鍛鉄のグループと判断された。3は金と銅の鍍金である。

3 まとめ

i) ガラスの分析では淡緑色と淡青色のガラス小玉はソーダガラス系で、銅で発色している。濃紫色(コバルトブルー)、青色は同じグループを形成し、ソーダ石灰ガラス系である。濃緑色のガラスは鉛を多く含み、鉛ガラスである。黄色のガラスはソーダ石灰系で、銀により発色しているものと推察される。

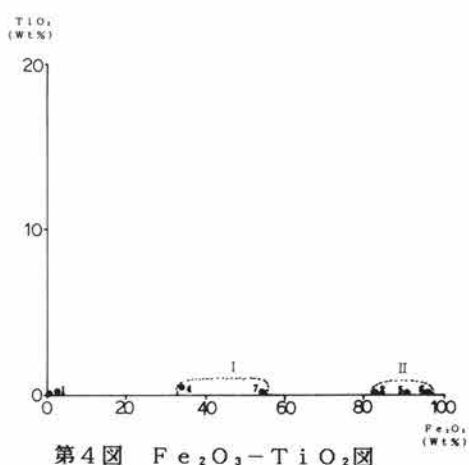
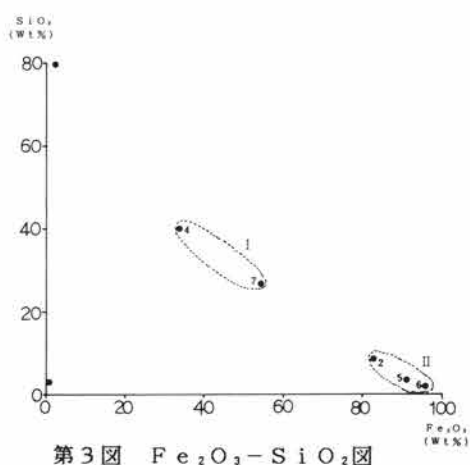
ii) 鉄製品の分析では鉄斧と鉄剣と轡と鉄鏃は Fe_2O_3 のWt%が82~96%と高く、鍛鉄であると判断された。雲珠の基板と7の鉄鏃は Fe_2O_3 のWt%が34~54%と低く鑄鉄の可能性が高いと判断された。3は雲珠の表面で、金と銅とで鍍金されていることが判明した。

IV 科学分析

Oxide	小林山1-1 Wt%	小林山1-2 Wt%	小林山2-1 Wt%	小林山2-2 Wt%	小林山3-1 Wt%	小林山3-2 Wt%	小林山4-1 Wt%	小林山4-2 Wt%	小林山5-1 Wt%	小林山5-2 Wt%	小林山6-1 Wt%	小林山6-2 Wt%
Na ₂ O	1.910	2.150	0.090	0.190	0.000	0.000	0.120	0.320	0.000	0.000	0.000	0.000
MgO	0.070	0.040	0.140	0.210	0.810	0.880	1.190	1.020	0.090	0.830	0.150	0.000
Al ₂ O ₃	7.760	7.740	4.690	2.070	0.330	0.410	20.830	20.580	1.390	2.440	0.350	0.310
SiO ₂	79.870	79.530	17.020	8.740	4.270	3.120	40.280	39.180	1.820	5.840	2.100	1.690
K ₂ O	3.540	3.330	0.140	0.000	0.070	0.000	0.390	0.310	0.000	0.000	0.010	0.000
CaO	2.340	1.530	2.640	4.640	0.070	0.140	0.820	0.830	1.630	7.840	0.570	0.150
TiO ₂	0.160	0.300	0.100	0.000	0.000	0.000	0.470	0.410	0.000	0.070	0.000	0.000
MnO	0.070	0.020	0.580	0.720	0.000	0.090	0.500	0.860	0.620	0.460	0.790	0.730
Fe ₂ O ₃	2.650	3.550	74.040	82.720	0.000	0.050	33.540	34.620	91.200	81.460	95.930	97.020
CoO	0.160	0.000	0.000	0.000	0.000	0.150	0.020	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
CuO	0.110	0.320	0.040	0.400	35.830	21.700	1.140	1.330	0.080	0.520	0.000	0.000
SnO ₂	0.470	0.340	0.000	0.000	0.210	0.000	0.030	0.000	0.090	0.000	0.000	0.000
HgO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
PbO	0.870	1.130	0.510	0.300	0.000	0.000	0.670	0.530	0.040	0.310	0.090	0.090
SO ₂	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.400	0.420	0.000	0.000
Ag ₂ O	0.030	0.000	0.000	0.000	58.400	73.440	0.000	0.000	0.640	0.000	0.000	0.000
Total	100.010	99.980	99.990	99.990	99.990	99.990	100.000	99.990	100.000	99.990	99.990	99.990
	鉄	鉄	鉄	鉄	金メッキ	金メッキ	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄	鉄

Oxide	小林山7-1 Wt%	小林山7-2 Wt%	Wt%	Wt%	Wt%	Wt%
Na ₂ O	0.200	0.190				
MgO	0.460	0.850				
Al ₂ O ₃	7.920	8.140				
SiO ₂	26.840	24.880				
K ₂ O	0.210	0.000				
CaO	7.390	20.220				
TiO ₂	0.070	0.280				
MnO	0.410	0.330				
Fe ₂ O ₃	54.480	42.530				
CoO	0.000	0.000				
CuO	0.010	0.160				
SnO ₂	0.110	0.000				
HgO	0.000	0.000				
PbO	0.410	0.200				
SO ₂	0.600	1.220				
Ag ₂ O	0.890	1.000				
Total	100.000	100.000			0.000	0.000
	鉄	鉄				

第1表 化学分析表



(3) 古墳出土の人歯・骨

宮崎重雄

I はじめに

少林山古墳群は群馬県高崎市鼻高町にあり、5世紀後半から6世紀までに築造されたもので、この内の4つの古墳の石室内から攪乱を受けたヒトの歯39本と数10片の歯片および多数の人骨片が出土した。これらの歯は全部が遊離歯で、歯根を有するのは8本のみで、その他は歯冠部のみが残存したものである。このため、歯種判定には困難が伴い、特に第2・第3大臼歯においては多少の誤りが含まれていることも懸念される。

ここに報告する出土骨のうち、ヘビの椎骨の同定は日本蛇族学術研究所の鳥羽久氏によってなされた。ここに記して感謝の意を表したい。

本調査で用いた基準は以下の通りである。

- 1) 略号はIが切歯、Cが犬歯、Pが前臼歯、Mが大臼歯、Lは左、Rは右を意味する。
- 2) 年齢段階の区分は片山(1990)を参考にした。
- 3) 歯の計測法は藤田(1949)を用いた。
- 4) 歯の調査項目は主に上条(1962)によった。
- 5) 咬耗度の表示は大臼歯Brothwell(1972)により、それ以外の歯は栃原(1957)によった。

II 本文

A. 2号墳

2号墳では石室床面からヒトの大腿骨2片と、保存最大長28.6mmの頭蓋片多数と完存する右上顎第2切歯1本、左第1または第2大臼歯片1、左下顎第2小白歯片1、歯種不明の歯冠片1と、ヤマカカシまたはジムグリの椎骨が4個出土している。人骨と同時期のものか、後世のものが石室内に入り込んだのかは分からない。

右上顎第2切歯は近心辺縁隆線の中央部のみにエナメル質の咬耗があり、左下顎第2小白歯および歯種不明の歯冠片にも咬合面にエナメル質の咬耗がある。大臼歯片には全く咬耗が見られない。これらの歯を1個体由来すると考えると、歯の咬耗度から、

年齢は青年期程度が推定される。

一本の歯から咬合型を推定するのは危険であるが、右上顎第2切歯の咬耗部分が切縁から近心・遠心辺縁隆線に及んでいることから鉋状咬合をしていた可能性が窺える。

右上顎第2切歯の辺縁隆線の発達が著しく、呑面窩のくぼみが大きい。

Matsumura(1990)は古墳時代人の上顎第2切歯の近遠心径の平均を男性7.11mm、女性6.98mmとしている。この平均値に照合すれば、本個体が男性である可能性も考えられる。遠心歯頸部に齶蝕があるように観察されるが断定はできない。

B. 7号墳

7号墳の玄室からは頭蓋骨3片、体肢骨片など数10片、微細骨片多数と、左上顎犬歯、左下顎第1小白歯、右上顎第2(?)大臼歯片、左下顎第1大臼歯が出土している。

犬歯は、尖頭部にのみ象牙質の露出があり、近遠心径は8.6mmで極めて大きく、Matsumura(1990)の計測値と照合すると、この個体は男性と推定される。左第1小白歯は歯冠部の頰側1/4が欠損し、エナメル質に点状のごく僅かの咬耗がある。右上顎第2大臼歯の歯冠近遠心径は11.1mmで、エナメル質に線または面状の咬耗がある。左下顎第1大臼歯も線状または面状のエナメル質の咬耗があり、年齢は青年期と推定される。裂溝型はY4である。いずれの歯にも齶蝕はない。

C. 9号墳

この9号墳の最大の特徴は焼骨が存在することである。これらの骨は焼骨に特有の細骨片化しており、最大のものでもその長さ3.7cmを計測できるのみである。亀裂・歪みが生じ、灰白色化しているものが多いが、金属音のするほど硬度を増しているものはなく、^{なま}生に近いものがある。比較的熱に弱いとされる歯冠部エナメル質の残存する歯も10本程含まれている。平野(1935)の実験結果によれば、歯に加熱

IV 科学分析

した場合、316°C~427°Cで歯冠部に亀裂が生じ、崩壊するのは427°C~538°Cである。下顎骨の実験例ではあるが、骨に部分的に亀裂が生じ始めるのは316°Cで、427°Cに至るとすべての部分に亀裂が発生する。このことから、9号古墳の人骨に加えられた熱は平均で300~400°Cくらいが推測される。また、桐生市千網谷戸遺跡(宮崎、1978)、邑楽郡明和村矢島遺跡(宮崎、1991)等の縄文時代後・晩期の獣骨類、藤岡市大御堂遺跡の中世人骨(綿貫ほか、1992)が約800°C程度に焼かれているのに比べると、かなり低温である。

池田(1985)によれば、火を受けた横穴式木室や窯形粘土櫛を内部構造に持つ古墳は兵庫県から静岡県に至る近畿、東海地方で10数例報告されている。最近では石川県小松市八幡の八幡2号古墳の粘土室内部に火で焼かれた形跡があることが報道されている(読売新聞石川版、1992.7.4)。また池田(1985)は、これを火葬墓とみるか単なる火化施設と見るか、定説を見ない。これを論じる際には、古墳の主体部に残存する焼けた人骨の分布状態を詳細に検討する必要があるとの問題を提起している。

9号墳の場合、上記のように人骨は細片化していて、ほとんどのものが詳細な部位決定が困難であり、池田の問題提起に対しての解決の手掛かりにはほとんどなっていない状況である。

骨類は一般的に焼かれると有機質が消失し、無機質化されるため、保存が良くなる性質がある。発掘法は篩がけで採集し、少なくとも7~8割の骨片は回収されている。しかし、頭蓋骨の中でもとりわけ保存良好な部位とされる岩様部が1個しか見い出されていないことや、採集された骨片の総量が推定個体数の2個体分にしてはあまりにも少なく、また骨の含有層に焼土・焼えさし・炭化物が含まれていることもなく、玄室の壁が黒色化するなど、玄室内で火を使った形跡はまったく認められないことから、骨は他所で焼かれ外部から持ち込まれ、埋葬された可能性が考えられる。いずれにしても本古墳では、内部に火を使用した形跡のあるこれまでの例と違っ

て、玄室に火の使用跡がなく焼骨のみが出土していることで異質であり、地域的にも関東地方の古墳であるということで特筆される。

歯についてみると、細かい歯種判定が可能な歯が10本、その他歯冠部の破片が16片出土している。歯種とその咬耗度との関係からこれらの歯は少なくとも2個体分に由来していると思われる。そのうちの一個体は上顎第2大白歯(No.7b)が未咬耗で、少年期から思春期程度の年齢が推定され、もう一つの個体は壮年期程度と思われる。

壮年期の個体は上顎犬歯(No.105)・下顎の犬歯(No.7A)・上顎第1小白歯(No.A)・上顎第2小白歯(No.23A)の近遠心径から女性と判断される。

No.7bの右上顎第2大白歯にはカラベリー結節が存在する。主咬頭とは溝で分かれています。小咬頭化している。その最大近遠心径は4.8mmで、歯冠長は4.5mmである。上条(1962)によれば、現代日本人の上顎第2大白歯におけるカラベリー結節の出現率は極めて低く、0.2%である。14号古墳出土の上顎第2大白歯は稀有な例と言えよう。

出土骨類には脳頭蓋片、岩様部、その他の頭蓋骨片、大腿骨または脛骨を思わせる体肢骨片、その他の体肢骨片などが含まれていることが分かる。

この古墳でNo.11の脳頭蓋片、No.23の白歯3片、No.23Aの左上顎第2白歯、No.14の細骨片の一部等に青銅器による緑青での変色がある。

D. 14号墳

14号墳からは歯種同定可能な歯だけでも39本が出土している。このなかに、右上顎大白歯が11本あることから、14号墳には少なくとも4個体が存在することは確実である。左上顎大白歯は5本が見い出され、そのうち、No.106の第2大白歯は比較的大きく、右の大白歯でこれの対応する大きさのものはなく、咬耗度の点からも、14号墳の最少個体数はさらに1つ加わって、5つあったと考えられる。

右上顎大白歯には4本の第1大白歯と思われるものがあり、最も咬耗度が強いのは、咬合面全面に咬

耗が進み、舌側の2咬耗が進んでいる歯(No6)は、近心舌側咬頭のみで亀歯質の露出があり、他の2本(No1、No玄Z)は咬合面全面に咬耗が及んでいるものの象牙質の露出はない。この事実は、前2者が壮年期後半から熟年期前半程度、後2者が壮年期程度の年齢が想定され、左上顎第2大臼歯(No106)はほとんど未咬耗で、第5個体は思春期から青年期程度の年齢と思われる。

犬歯を見ると、男性を推定させる右上顎犬歯が2本の下顎の犬歯1本があり、その近遠心径はそれぞれ、8.7mm、8.9mm、7.5mmと極めて大きく、少なくとも14号墳出土5個体の内の2個体は男性であると言えよう。

右上顎臼歯の内、第1大臼歯以外のNo玄TとNoORは第3大臼歯であることは確実であるが、残りの5本については、ほとんどが第2大臼歯と思われる。しかし、遠心隣接面に接触面の観察されないものもあり、第2大臼歯としたものの中にもさらに、第3大臼歯が含まれている可能性もある。左上顎第2臼歯(No18A)も第3大臼歯である可能性を含んでいる。

下顎の大臼歯は、左10本、右6本からなるが、No25の右第1大臼歯は、近遠心径が12.2mm、頬舌径が11.8mmあり、その大きさが特に目立つ。おそらく男性のものであろう。

また、小白歯の大・中・小の3つのグループに分類され、「大」に属する歯はNo530左上顎第1小白歯(近遠心径8.6mm)、No81の左上顎第2小白歯(同7.3mm)、No玄Vの右下顎第2小白歯(同7.8mm)、No10の左下顎第2小白歯(計測不能)である。また、「中」に属するのはNo玄Kの右上顎第1小白歯(同7.3mm)、No玄Bの右下顎第2小白歯(同7.6mm)で、「小」に属するのはNo64の左上顎第2小白歯(同、7.1mm)、No玄Hの左下顎第1小白歯(同7.3mm)である。「大」の歯はMatsumura(1990)の示す古墳時代の男性の平均値をはるかに越えるものであり、現代人と比較しても最大の部類に入る。したがって、この歯の持ち主は当時としてはかなり大柄な男性であったと考

えられる。「中」も男性の平均を凌ぐもので、おそらく男性のものであろう。「小」は男性と女性の平均の中間にあるか、女性の範囲内におさまり、特に後者(No玄Hの左下顎第1小白歯)は女性のものである可能性が高い。

No玄Vの右下顎第2小白歯は舌側咬頭の発達極めて良好で、頬側咬頭と同じ高さかそれを上回っているという特徴的な歯である。

No玄Aの左下顎第2大臼歯には第7咬頭があり、No85の左第1大臼歯には第6咬頭がある。上条(1962)によれば現代日本人では下顎第2大臼歯における第7咬頭の出現率は32%。下顎第1大臼歯における第6咬頭の出現率は7.9%である。

歯石の付着している歯はほとんどないが、No10の左下顎第2小白歯には歯石が少し付いている。

齶歯はごく少なく、No玄Oの右上顎第3大臼歯咬合面にC2の齶蝕が見い出されるのみである。

人骨は一覧表で見ると、かなりの数が出土しているが、ほとんどが細骨片で、最大長でも101mmを計るのみである。保存状態も極めて不良で、詳細な部位同定の困難なものがほとんどであった。最も数多く部位同定のできた大腿骨で見ると、骨体中央部の前後径・左右径の計測値を得られたのは4つで、此の内2つ(No51とNo73)は同一個体であることが予想され、3個体分からなると考えられる。これらのうちNo44は、左右径よりも前後径の方が大きく、他の3つの大腿骨が左右径より前後径の方が小さいとの対照的である。扁平率(前後径/左右径×100)で表すと、No44が104.8、No51が79.6、No73が75.6、No78が88.1である。平井・田幡(1928)の示す現代関東地方人と比べた場合、左右径においては、いずれも出土骨も大きいだが、前後径においては、これより大きいものも、小さいものもある。扁平率は出土骨のNo44が現代関東地方人の男性102.3、女性101.6に近く、他の3つの出土骨はこれを大きく下回っている。14号墳に葬られた人の大腿骨が左右方向にかなり扁平であることが示されていて、興味深い。

保存長47.2mmの左上腕骨では、中央最大径が18.9

IV 科学分析

mm、中央矢状径が19.2mmである。

また、オトガイ棘の明瞭に発達した保存長30.0mmの下顎結合部片 (No.52) も存在する。

III まとめ

- 1) 1号墳、2号墳出土の人歯・骨はいずれも、個体数は1で、青年期の男性と推定される。
- 2) 号墳には、2個体存在し、その内の1個体は少年期から思春期が、他の1個体は壮年期の女性が推定される。
上顎第2大臼歯にはカラベリー結節がある。
人骨は明らかに火熱を受けていて、灰白色化し、亀裂や歪みの生じている骨片が多い。
- 3) 14号墳には少なくとも5個体存在し、この内2個体は壮年期後半から熟年期前半、他の2個体は壮年期、残り1個体は思春期から青年期ほどの年齢が推測される。この内の少なくとも2個体は男性で、女性の可能性もあるものも1個体含まれる。
- 4) 以上の各古墳で、疾患を有する人歯・骨は14号墳で1本の齲歯が認められるだけで、他には検出されない。

引用文献

- 片山一道 (1990)、「古人骨は語る」, 同期社、東京。
- 藤田恒太郎(1949)、歯の計測基準について、人類学雑誌、61、27-32。
- 上条 彦 (1962)、「日本人永久歯の解剖学」、地人書館、東京。
- Brothwell, D.R.(1972)、*Digging up bones*, British Museum, London.
- 栃原 博(1957)、日本人歯牙の咬耗にかんする研究、熊本医学会誌、31補冊、607-656。
- Natsumura, H.(1990)、Geographicl variation of dental characteristics in the Japanese of the Protohistoric Kofun Period *J. Anthropol. Soc. Nippon*, 98(4): 411-423.
- 平野賢二 (1935)、歯牙の熱処理に対する研究 (第一編) 人類歯牙の熱処理に就いて、口腔病理学雑

誌、9、375-393。

宮崎重雄(1978)、群馬県桐生市千網谷戸遺跡星野昭司宅内1号住居址出土の獣骨類「群馬県桐生市千網谷戸遺跡発掘調査報告書」、桐生教育委員会、125-134。

宮崎重雄(1991)、矢島遺跡出土の焼獣骨類について「矢島遺跡発掘調査報告書」、群馬県明和村教育委員会、44-48。

綿貫鋭次郎・宮崎重雄・津金沢吉茂・飯島義雄(1992)、群馬県藤岡市白石大御堂遺跡に於ける中世埋葬遺構の検討、群馬県埋蔵文化財調査事業団紀要、9、151-181。

池田次郎(1985)、古墳の主体部に遺存する焼けた人骨「シンポジウム・国家成立前後日本人—古墳時代人骨を中心として」、季刊人類学、16(3)、106-107。

平井 隆・田幡丈夫 (1928)、下肢骨の研究「現代日本人骨の人類学的研究」、人類学雑誌、43第1付録。

人歯計測値

14号墳

犬歯計測値

No	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	棘突起	中央舌面隆線	舌面溝	舌面齒頸隆線	舌面齒頸溝	遠心溝	副隆線	唇面溝	唇面隆線	咬耗度
10	上R	8.7	7.3*	9.0*	?	2本	3本	?	?	○	○	○		1'b
E	上R	8.9	10.3	9.1	1	不明瞭	不明瞭	×	×	○	○	○	○	1'b
D	下R	7.5	9.3	12.4	×	○	○	×	×	○	×	○		2'a

上顎小白歯計測値

No	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	頰側副隆線		舌側副隆線		舌側交頭の位置	近遠心溝		介在結節		咬耗度
					近心	遠心	近心	遠心		近心	遠心	近心	遠心	
玄K	RP ¹	7.3	9.5	9.6*	○	○	?	?	近心	○	?	?	?	1'b
53	LP ¹	8.6	11.3	8.0	×	○	?	?	近心	○	○	×	×	1'b
64	LP ²	7.1	10.0	5.5*	?	?	?	?	中央	○	○	○	○	1'b
81	LP ²	7.7	10.8	12.3	○	?	?	?	近心	○	?	○	×	1'b

下顎小白歯計測値

No	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	舌側咬頭の位置	連合隆線の経過	副隆線		辺縁溝		咬合面の溝形	舌側付加結節	舌側溝	Blackの分類	咬耗度	
							頰側 近心 遠心	舌側 近心 遠心	近心 遠心	近心 遠心						
玄V	RP ₂	7.8	9.2	7.8*	近心	/	○	○	×	×				Y	1'a	
玄B	RP ₂	7.6	8.8	8.7	近心		○	○	/	/	×	×		H	1'a	
玄H	LP ₁	7.3	8.1	9.2	近心	a	○	○	×	×	×	×	2	b	近心	1'a
10	LP ₂		9.0*	5.8	近心	/	?	?	?	?	?	×		Y	1'b	

上顎大白歯計測値

No	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	辺縁結節		副隆線					舌側咬合縁諸型	咬合面隅部の鈍円化	咬耗度						
							近心頰側		近心舌側		遠心頰側				遠心舌側		辺縁溝			
							近心	遠心	近心	遠心	近心				遠心	近心		遠心	近心	遠心
玄T	RM ²	8.4	10.7	3.6 ⁻	×	×	×	○	?	?	/	/	/	/	○	○	3 ⁻	C 2	1~2	
O	RM ²	9.5	11.9	7.0	×	×	○	○	×	×	×	×	/	/	?	○	3 ⁻	C 3	1~2	
玄G	RM ²	10.0	12.0	11.9	×	○	×	×	×	×	×	×	/	/	?	?			1~2	
玄M	RM ²	10.2	11.6	5.3*	○	○	○	×	×	×	×	×	?	?	?	○	?	3 ⁻	A 2	1~2
18	RM ²	9.7	11.6	7.8	×	×	?	?	×	×	?	?	×	×	?	○	?	3 ⁺	A 2	2
J	RM ²	10.4	11.9	5.1*	○	×	○	○	○	○	○	×	/	/	○	×	4	B 2	1	
玄U	RM ¹	9.6*	10.8*	3.4	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	4	A 1	3 ⁻	
玄1	RM ¹	10.6	11.5	5.5	?	?	?	?	?	?	○	×	?	?	?	○	4	A 1	2	
玄Q	LM ¹	9.3*	11.1*	5.0	?	×	?	○	?	?	?	○	/	/	?	?			2	
59	LM ¹	10.5	11.6	6.1	?	?	?	?	?	?	○	×	?	?	?	?	4	A 1	2	
18A	LM ²	10.0	9.0*	5.9*	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	3 ⁺		2	
8	LM ²	10.2	11.6	5.1*	×	×	○	?	?	?	?	○	/	/	×	○	4	B 2	1~2	
106	LM ²	10.6	12.4	6.5	×	×	×	○	?	○	×	×	?	○	4		B 2	1~2		

下顎大白歯計測値

No	歯種	近遠心径	頬舌径	歯冠長	遠心咬頭の退化	辺縁溝		副隆線					三角溝		裂溝型	咬耗度						
								近心頰側		近心舌側		遠心頰側		遠心舌側			近頰	近舌	遠頰	遠舌		
								近心	遠心	近心	遠心	近心	遠心	近心							遠心	
28	RM ₂	10.8	10.8	5.5	5	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	Y 5	3 ⁻			
68	RM ₂	11.2	10.1	6.1	5	×	○	○	?	○	?	×	×	○	×	○	×	○	○	Y 5	1	
2	RM ₂	10.8	9.6	4.7*	5	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	×	○	×	Y 5	1~2	
60	RM ₁	11.1*	11.0	6.3*	5	?	×	○	×	○	○	×	×	○	○	×	○	×	○	X 5	1	
67	RM ₁	11.5	10.3	6.1	5	×	○	?	?	×	○	?	?	○	?	○	×	×	○	X 5	1~2	
25	RM ₁	12.2	11.8	5.5*	5	?	○	?	?	?	?	?	?	○	?	?	?	?	○	Y 5	3 ⁻	
玄P	LM ₁	9.9*	10.7	5.9*	5	?	×	?	?	?	○	?	?	○	○	?	?	?	?	X 5	2	
玄S	LM ₁	10.9*	10.0	4.9*	5	?	?	?	?	○	?	?	?	○	?	○	○	?	?	Y 5	3 ⁻	
玄C	LM ₁	11.8	10.5	6.7*	5	×	○	×	?	?	○	×	?	?	?	○	×	×	○	X 5	2	
57	LM ₁ 又は ₂	11.6	10.6	5.6*	5	×	○	×	×	○	×	?	?	?	?	○	○	×	×	X 4~5	1~2	
85	LM ₁	11.6	11.4	5.3*	5	×	?	○	○	?	?	×	×	?	?	○	○	○	○	?	2 ⁺	第6咬頭
玄L	LM ₂ 又は ₃	11.0	9.4	4.4*	5	×	×	○	○	?	?	○	×	○	×	×	×	×	×	X 5	1~2	
玄A	LM ₂	11.4	10.8	7.4			○	?	○	○	○	×	×	?	?	○	×	?	?	?	1~2	第7咬頭
58	LM ₂	10.9	9.7	6.5	4 ⁺	○	?	?	?	○	○	?	?	×	×	○	×	?	?	Y 4	2	

IV 科学分析

2号填人歯計測値

切歯計測値

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	型	棘突起	舌面隆線	舌面溝	舌面歯頸裂溝	唇面溝	唇面隆線	咬耗度	備考
R I ²	7.7	6.7	10.6	I	×	○	○		○	○	1'b	缺状咬合

7号填人歯計測値

犬歯計測値

歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	棘突起	中央舌面隆線	舌面溝	舌面歯頸隆線	舌面歯頸溝	唇面溝	唇面隆線	咬耗度
下L	8.6	9.6	12.3	1	○	○	×	×	○	○	2'a

下顎小白歯計測値

歯種	近遠心径	類舌径	歯冠長	舌側咬頭の位置	連合隆線の経過	副隆線		辺縁溝		咬合面の溝形	舌側付加結節	舌側溝	咬耗度		
						類側 近心 遠心	舌側 近心 遠心	近心 遠心	近心 遠心						
L P ₁	7.5*	/	/	近心	C	/	/	○	○	×	?	3	a	遠心	1'b

下顎小白歯計測値

歯種	近遠心径	類舌径	歯冠長	遠心咬頭の退化	辺縁溝	副隆線				三角溝		裂溝型	咬耗度						
						近心類側 近心 遠心	近心舌側 近心 遠心	遠心類側 近心 遠心	遠心舌側 近心 遠心	近類	近舌			遠類	遠舌				
LM ₁	11.9*	11.0	5.6*	5	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○	○	×	×	Y5	1~2

9号填人歯計測値

切歯計測値

No.	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	棘突起	舌面隆線	舌面溝	舌面歯頸裂溝	唇面溝	唇面隆線	咬耗度
4	下R I ₁	5.8		9.8	/	/	/	/	?	?	2'b

犬歯計測値

No.	歯種	近遠心径	唇舌径	歯冠長	棘突起	中央舌面隆線	舌面溝	舌面歯頸隆線	舌面歯頸溝	唇面溝	唇面隆線	咬耗度
105	上UR	7.1	8.1	11.5	/	○	○	/	/	×	×	2'a
7A	下LL	6.7	6.7*	8.9	×	○	○	×	×	?	?	2'a

上顎小白歯計測値

No.	歯種	近遠心径	類舌径	歯冠長	類側副隆線	舌側副隆線	咬合面溝型	舌側咬頭の位置	近遠心溝	介在結節	咬耗度			
					近心 遠心	近心 遠心		近心 遠心	近心 遠心	近心 遠心				
A	L P ¹	7.4	9.9	7.0	○	○	? ×	/	近心	×	×	○	×	1'b
23A	L P ²	6.8	8.5	6.0	? ?	? ?			近心	? ?	? ?	? ?		1'b

上顎大白歯計測値

No.	歯種	近遠心径	類舌径	歯冠長	辺縁結節	副隆線				辺縁溝	舌側咬合縁諸型	咬耗度	齧歯	備考		
						近心類側 近心 遠心	近心舌側 近心 遠心	遠心類側 近心 遠心	遠心舌側 近心 遠心							
21	RM ³	9.7	10.6	5.4							3-	2				
7b	RM ²	10.0	11.3	5.2*							3-	1				
玄室	RM ¹	9.5*	6.8*	6.8*	×	?	○	○	/	/	○	?	/	2+		
22	LM ²				/	×	/	/	/	○	○	/	/	○	4	2

下顎大白歯計測値

No.	歯種	近遠心径	類舌径	歯冠長	遠心咬頭の退化	辺縁溝	副隆線				三角溝		裂溝型	咬耗度					
							近心類側 近心 遠心	近心舌側 近心 遠心	遠心類側 近心 遠心	遠心舌側 近心 遠心	近類	近舌			遠類	遠舌			
16	RM ₂	10.1	9.7	6.0*	4	○	×	? ?	×	○	? ?	○	×	×	×	×	X4	2	
23	RM ₁					?	○	?	○	? ?	×	×	○	○	? ?	×	×	Y5	2+

単位 mm
○は存在する。
×は存在しない。

14号墳出土大腿骨計測値・比較表

	14号墳				現代日本人*	
	No44	No51	No73	No78	男	女
左右	右	右	左	?		
左右径	27.7	30.4	31.2	29.3	25.9	24.6
前後径	28.8	24.2	23.6	25.8	26.5	25.0
前後径/左右径×100	104.4	79.6	75.6	88.1	102.3	101.6

単位 mm

*は平井ほか(1928)による。

14号墳 人骨出土記録

No	部位	数量	
1	骨片	2	
3	体肢骨微細骨片	数片	
4	微細骨片	数片	
5	骨片	1	
13	体肢骨片	数片	
14	体肢骨片	数片	
16	大腿骨片	1	62.6
17	右脛骨等体肢骨片	多数	
24	骨片	1	
25	大腿骨片	1	44.2
27	体肢骨片	1	
28	体肢骨片	数片	
33	体肢骨片	10数片	
34	体肢骨片	6	
36	体肢骨片	数片	
37	体肢骨片	2	
43	体肢骨片	数10片	
44	右大腿骨片	1	83.2
45	骨片	数片	
48	体肢骨片	数片	
49	微細骨片	数10片	
50	左脛骨片など	多数	96.0
51	右大腿骨	1	176.5
52	下顎結合部片	10数片	30.0
62	体肢骨片	2	
63	体肢骨微細片	多数	
69	大腿骨片	数片	31.0
71	左大腿骨片	1	152.0
78	大腿骨片	1	70.9
87	体肢骨片	数片	
88	上腕骨片等骨片	多数	47.2
107	大腿骨片	1	83.2
140	体肢骨片	数片	
玄室	上腕骨又は大腿骨片など	多数	60.0

単位 mm

V 調査のまとめ

今回の調査によって、先土器時代から近世に至る遺物が出土したが、明確な遺構が検出されたのは、弥生時代後期の集落と墓、古墳時代後期の住居と群集墳、平安時代の住居である。

弥生時代集落

本遺跡の調査において、28軒の弥生時代の竪穴住居跡を検出したが、幾つかの視点からこれらの住居を分析してみたい。

まず、支柱穴の有無で分けてみると、

A. 支柱穴を持つグループ…… 2・4・5・7・8・9・11・14・15・19・23・24・28・20・32

B. 支柱穴を持たないグループ

となる。この内、9・10号住居及び8・26号住居ではA・Bが互いに近接して構築されているが、28・29号住居においては、両者とも4本の支柱穴が穿たれている。また、柱穴の配置位置を検討すると、全体的には厳密な規格性に基づいて掘削したとは考えられないが、斜面下位の柱間を広げたものと、その逆のものがある。

斜面下位の柱間が広いもの…… 5・28・29・32

斜面上位の柱間が広いもの……23

新保遺跡218号住居例のように、柱穴が検出されたことによって入り口状施設の位置が明らかに住居が8軒ある。また、炉の位置等から入り口が推定される住居は13軒ある。これら21軒の住居について見ると、南東方向から住居に出入りしていたことが看取り、集落内部の動線を考える際の貴重な材料を提供してくれている。うがった見方をすれば、南東部の丘陵の裾には現在でも湧水が認められることから、この地点が動線の一つの基準点となっていたと考えることも可能である。残念ながら道の遺構が検出されなかったので検証の手段を持たない。

次に、住居の長軸の走向に着目してみると、柱穴を持つ住居は、傾斜地の微地形に即した形で、等高線の走向とほぼ同じ方向に長軸を有するように掘削されている。これに対して、柱穴が検出されなかつ

た住居は、傾斜地形の規制を受けていないものが多い。しかし、本遺跡内において最大規模を有する11号住居は、長軸も等高線とがほぼ直交に近い形で交わっており、大型住居の機能について考える際の注意点を喚起してくれた。

長軸の方位

Iのグループ…… 4・9・10・15・23・24・30

IIのグループ…… 2・7・8・26

IIIのグループ……28・29

炉の形態の点からみると、いわゆる枕石を持つものと持たないものがある。本遺跡においては、枕石の設置位置は住居の内側寄りに設置されており、燃料を補給するのに便利ようになっていた。

また、廃棄された住居と礎床墓との重複が6箇所確認され、集落の変遷を考える際の好資料を提供してくれたが、時間的制約及び個人的な力量不足により十分な分析ができなかった。

古墳群

竪穴系の埋葬施設を持つと考えられる古墳（3・18・21号墳）は、傾斜地に多くの手を加えて、等高線の走向と平行に石室を造営している。

埋葬主体部は、御部入古墳群の調査でも確認されているが、袖無型横穴式石室→片袖型横穴式石室→両袖型横穴式石室と順次採用していったものと考えられる。前庭状遺構を伴ったものは、2・4・14・17号墳である。10・20・22号墳の3基を除くと、全て埴輪を伴っている。

本古墳群においては、各古墳は、

- A. 竪穴系埋葬施設を持つ古墳
- B. 短冊形の袖無型横穴式石室を持つ古墳
- C. 笏形の袖無型・片袖型横穴式石室を持つ古墳
- D. 両袖型横穴式石室を持つ古墳

に分けられる。

使用石材の大きさや石室の裏込め被覆の在り方・前庭の有無と形状等を比較した場合、18号墳→3・21号墳→12号墳→6号墳・11号墳→2・7号墳→14・17号墳→4・5・9号墳の変遷が考えられる。

Aは5世紀中葉～後半、Bは6世紀初頭、Cは6

弥生時代住居跡一覧表

住居 番号	平面形	長軸(主軸) 方向	規模 長 cm 短	柱穴数と柱 穴間寸法cm 長 短	炉の位置	貯穴の 有無	出土品の種類										グリッド
							壺	椀	高杯	台付甕	甕	鉢	蓋	甕	その他		
1	隅丸矩形		396+d 490+d	2-224	P1の西側で南壁 寄り	○				○		○					T-23
2	隅丸矩形	N-89° -W	678 535	2-264	P2の西側	○	○		○						○	手捏ね	N-26
3	縦長の 長方形	N-34° -W	537 400	1	住居中央付近	○	○		○								N-16
4	縦長の 長方形	N-46° -E	720 470	4-320 176~152	西寄り中央(1号) 南壁から1m(2号)	○	○		○	○	○	○	○				K-19
5	平行四辺形	N-58° -W	725 546+d	4-304~320 208	西壁際(1号)P3の南 西 (2号)中央南側(3号)	○	○		○				○	○	手捏ね	N-22	
6		N-20° -W	760+d 362					○	○						○		
7		N-88° -W	640 270+d	2-296		○	○		○	○	○	○	○	○	○	手捏ね	
8		N-81° -E	495 264	4-328~344 120~136		○	○		○	○					○	管玉	
9	矩形	N-51° -W	666 448	4-272 120~136	P1とP2の中間で 西壁際	○	○	○		○		○		○	手捏ね	E-18	
10	矩形	N-59° -W 360	495		西壁寄り中央	○	○		○	○	○			○	埴	F-19	
11		N-29° -E	1052+d 650	4-544~560 200		○	○		○	○		○	○				
12								○		○					○		
13	矩形	N-59° -W	476 434	3-248 128	床面西寄り(1号) 中央近く(2号)	○	○		○	○		○		○			Q-19
14		N-67° -W	752 400+d	2-344	西壁寄り			○		○					○		R-20
15		N-61° -W	672 315	3-328 240	西壁寄り			○	○					○	○		T-20
16	矩形	N-19° -E	330 270		北西隅寄り			○							○		S-21
18			466 370		東西方向のほぼ中央			○		○	○		○	○	○	手捏ね 管玉・ガ ラス小玉	O-17
19		N-0° -W	657 364	4-288~304 128~160		○	○		○	○					○		
20			430+d 430+d							○		○			○		
22	矩形	N-24° -W	588 403		中央・北壁寄り	○	○		○	○		○		○			V-23
23	長方形	N-52° -W	750 440	4-344~376 144~168	中央・西壁寄り(1号) P2の西側(2号)			○		○					○	手捏ね	U-22
24		N-61° -W	1027 550					○		○		○	○	○	手捏ね		
25		N-63° -W	326 160+d					○	○						○		
26			580 340	1				○		○							
28	矩形	N-47° -W	650 440			○	○		○	○					○	手捏ね	G-32
29		N-37° -W	562 430+d					○	○	○		○		○			
30	隅丸長方形	N-56° -W	883 614		西寄り中央部(1号)、 南東隅から対角線方 向に1.5m(2号)、2号 の西側1m(3号)			○	○	○		○		○	手捏ね	H-21	
32	矩形	N-69° -W 532	752	4-304~336 168	中央・西壁寄り(1号) 南東隅(2号)	○	○		○	○	○	○		○	手捏ね	H-23	

V 調査のまとめ

世紀中葉、Dは6世紀後半に築造されたものと考えられる。

D・E号墳は、他の古墳よりも40～60m程高位の尾根上に占地しており、共に横穴式石室を採用しているが、E号墳は地形の制約によるためか、変形石室となっている。D号墳は尾根の先端部に立地しているが、石室の諸要素を比較した場合、E号墳に後出すると考えられる。E号墳の玄室は、12号墳よりも狭いが、使用石材の大きさがやや上回っていることから、新しい要素が認められる。

発掘調査地の原地形の形成時期を解明することはできなかったが、同一集団によって古墳群が形成された後に大規模な地辻りが起こり、分断されたと考えられるよりは、むしろ別の造墓集団の存在を想定する方が妥当性が高いと思われる。

扇状地の斜面高位の比較的平坦な場所に初源期の古墳が営まれ、次第に低位部へと墓域を拡大して行った傾向が窺える。

埴輪については、一基の古墳に複数のタイプの埴輪が樹立されていたことが確認された。それぞれの特徴を埴輪の製作工人の個体差と考えるよりは、むしろ工人集団の差域は時期差として考えたほうが妥当性が高いと思われる。

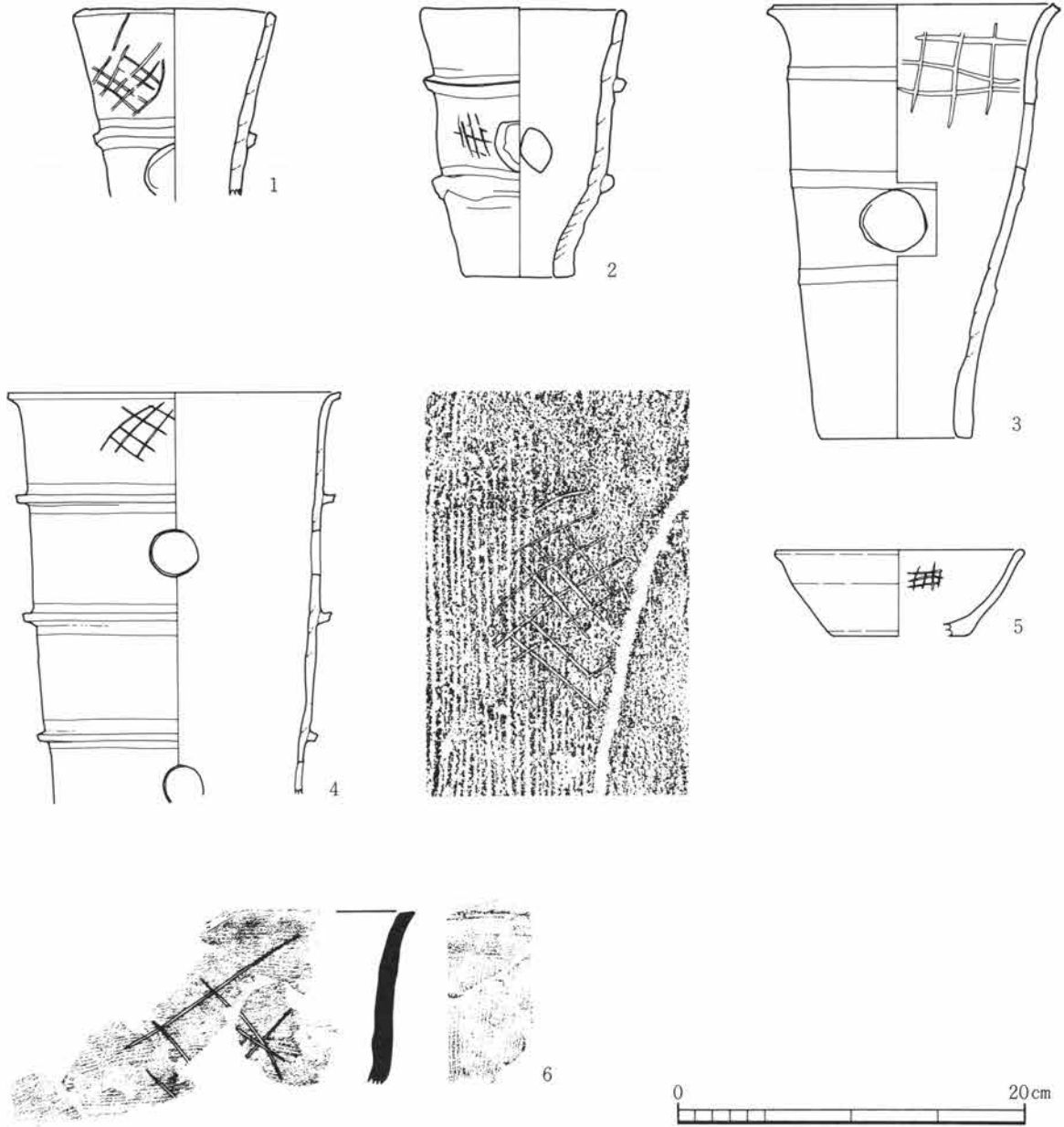
3号墳の埴輪には、①二次調整にB種横ハケを用いて赤色塗彩が施されたものと②二次調整が省略されたもの③須恵質に焼き上がったものとが認められた。21号墳の埴輪には、①ナデ調整で黒斑を有するものと②二次調整にB種横ハケ技法が認められるものの二つが存在した。個々の遺物では横ハケを施す部位の相違によって省略の程度が異なっている。

3号墳及び21号墳出土の土師器は、5世紀第3四半期の特徴を示すが、この遺物が一連の葬送儀礼のどの段階で設置されたものであるのかは特定できないが、両古墳が本古墳群の中では最も古い段階の古墳であるとする事は可能であろう。

2号墳の円筒埴輪は全形を窺える資料を持たない

調査古墳一覧表

No.	所在地	墳形・規模	墳丘	埴輪	埋葬主体部・規模	開口方位
1号墳	高崎市鼻高町字台297-1	円墳		◎	横穴式石室?・未発掘	
2号墳	高崎市鼻高町字台325	円墳		◎	袖無型石室・前庭	S 72W
3号墳	高崎市鼻高町字台327-1	円墳		円筒	竪穴系?・削平	
4号墳	高崎市鼻高町字台324・327-1	円墳		◎	横穴式石室・前庭	S 49W
5号墳	高崎市鼻高町字栗木沢2057-1	円墳		◎	横穴式石室・削平	S 5 W
6号墳	高崎市鼻高町字台337-1・2	円墳		◎	袖無型石室	S 25 E
7号墳	高崎市鼻高町字台324	円墳		◎	袖無型石室	W 5 N
8号墳	高崎市鼻高町字台322	円墳		◎	横穴式石室?・未発掘	
9号墳	高崎市鼻高町字台336-1・2、338-1	円墳		◎	両袖型石室	S 30W
10号墳	高崎市鼻高町字台324	円墳		不明	不明・削平	
11号墳	高崎市鼻高町字台339-2・4・6	円墳		円筒	袖無型石室	S 38W
12号墳	高崎市鼻高町字台339-4	円墳		◎	袖無型石室	S 48W
14号墳	高崎市鼻高町字台345-5	円墳		◎	両袖型石室・前庭	S 35W
15号墳	高崎市鼻高町字台341-1	円墳		不明	両袖型石室	S 20W
17号墳	高崎市鼻高町字台346-1	円墳		◎	両袖型石室・前庭	S 75W
18号墳	高崎市鼻高町字台324	円墳・17.8	14.8		竪穴系?・削平	
19号墳	高崎市鼻高町字台324	円墳		◎	不明・削平	
20号墳	高崎市鼻高町字台324	円墳		不明	横穴式石室?削平	
21号墳	高崎市鼻高町字台324	円墳・28.4	24.4	円筒	竪穴系?・削平	
22号墳	高崎市鼻高町字栗木沢2057-1				箱式石棺	E-W



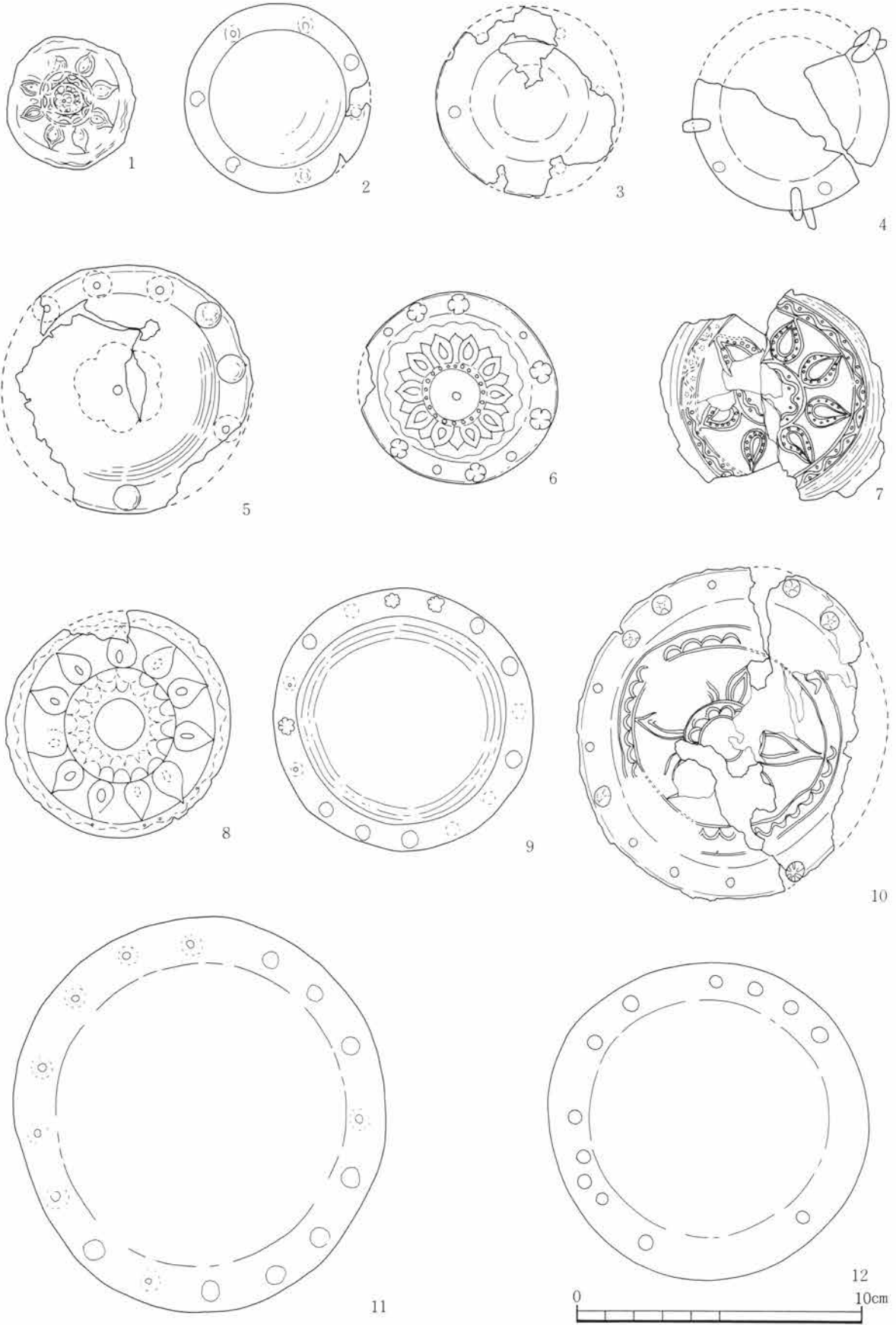
第328図 埴輪ヘラ記号参考図

が、底部調整技法が明瞭に観察される。また、2号墳の埴輪に見られたヘラ記号の類例として県内外の資料を幾つか集めてみたが、海女の周辺に見られるドーマンと呼ばれる格子縞のような文様の民俗事例との関連や、他の記号を含めた検討は後考を俟ちたい。

無脚半球形雲珠について、坂本美夫氏(『馬具』1985年)は、5世紀末から6世紀前半に位置付けられている。参考資料を集めてみた。

1は、愛知県・鎌田古墳。2は、福井県・椀貸山2号墳(前方後円墳・全長45m・横穴式石室、6世紀前葉)の資料で、無文である。3は、福岡県・乙植木4号墳(円墳・14m・横穴式石室、6世紀後半)の鉄地金銅張金具で無文である。4は、埼玉県・黒田4号墳(円墳・18m・L字形横穴式石室)の雲珠で、無文である。5は、群馬県・藤岡市。6は、埼玉県・一夜塚古墳8円墳・径36m・木炭塚・6世紀中頃)の雲珠で、線刻により花卉文と波状文が施されている。

V 調査のまとめ

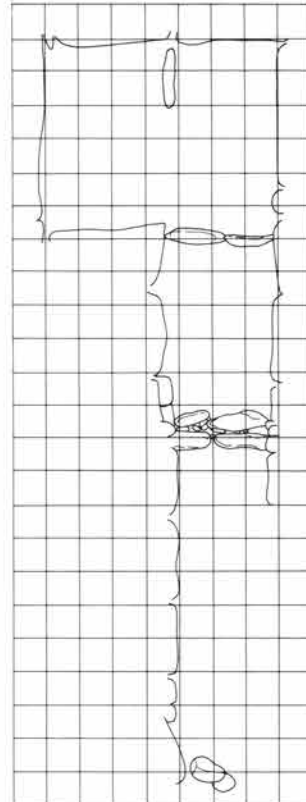
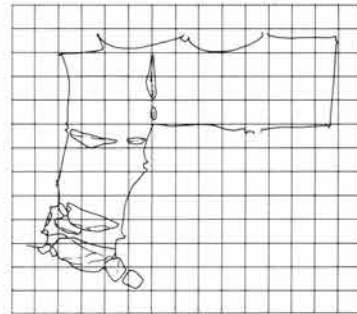
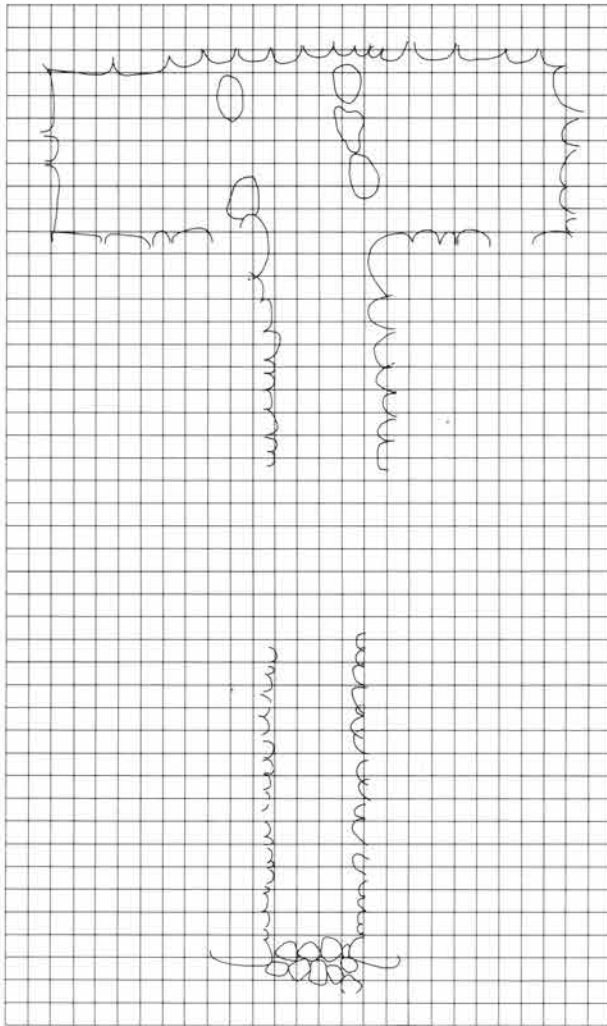


第329図 無脚半球形雲珠参考図

7は、大阪府・芝山古墳「前方後円墳・全長26m・横穴式石室・5世紀後半」の雲珠で、花卉文と波状文が施されている。8は、岡山県・四っ塚1号墳（円墳・248・横穴式石室、朱塗）の大型円形飾り金具で、毛彫りで花卉文を施している。9は、奈良県・ホリノオ4号墳（円墳・14.5m・横穴式石室、6世紀前半）の雲珠で、無文ではあるが銀張鍔が密に打たれている。10は、岐阜県・西洞山6号墳（円墳・12m・横穴式石室、6世紀初頭）の雲珠で、7葉の花弁文を施している。11.、島根県・出雲上島古墳（円墳・15m・家形石棺・竪穴式石室、6世紀前半～中葉）の資料で、無文。12は、佐賀県・潮見古墳（円墳・径25m・

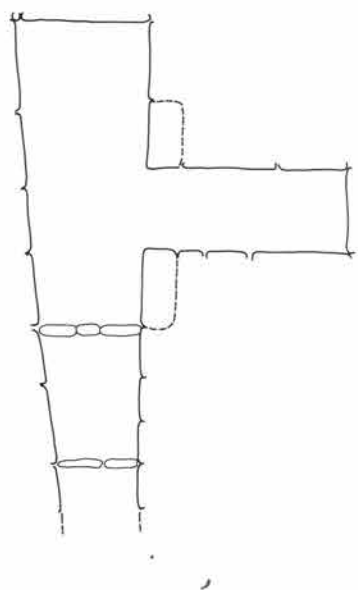
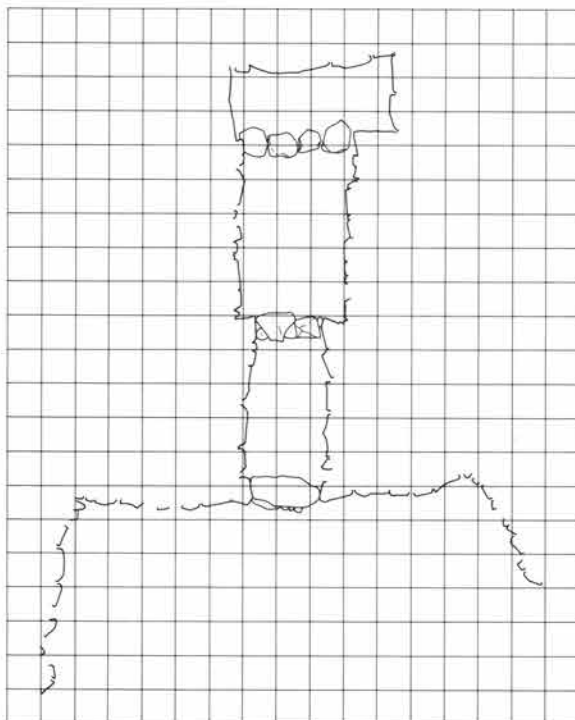
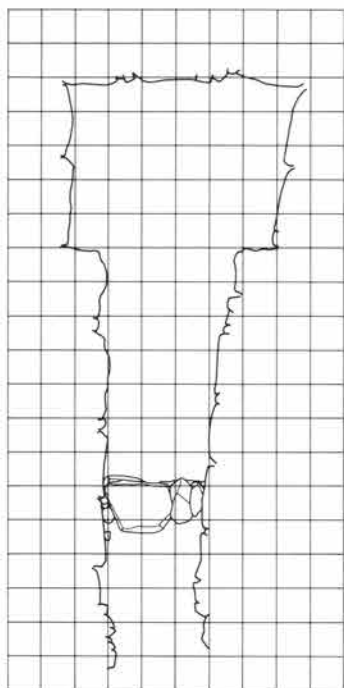
横穴式石室・6世紀後半）の資料で、表面に花びら形の文様が描かれている。

他に、図示できなかったが県内出土資料として、東京国立博物館所蔵の高崎市倉賀野町出土品（径10.7cm・8銚、円墳・径21m）と群馬県立歴史博物館所蔵の甘楽町金井出土品（6銚）が有る。また、愛知県・豊田大塚古墳（径10cm・12銚・点列文、円墳・径31m・横穴式石室・6世紀前半）や、大分県・法恩寺4号墳（円墳・13m・横穴式石室、6世紀中葉、無



第330図 変形横穴式石室（1）

V 調査のまとめ



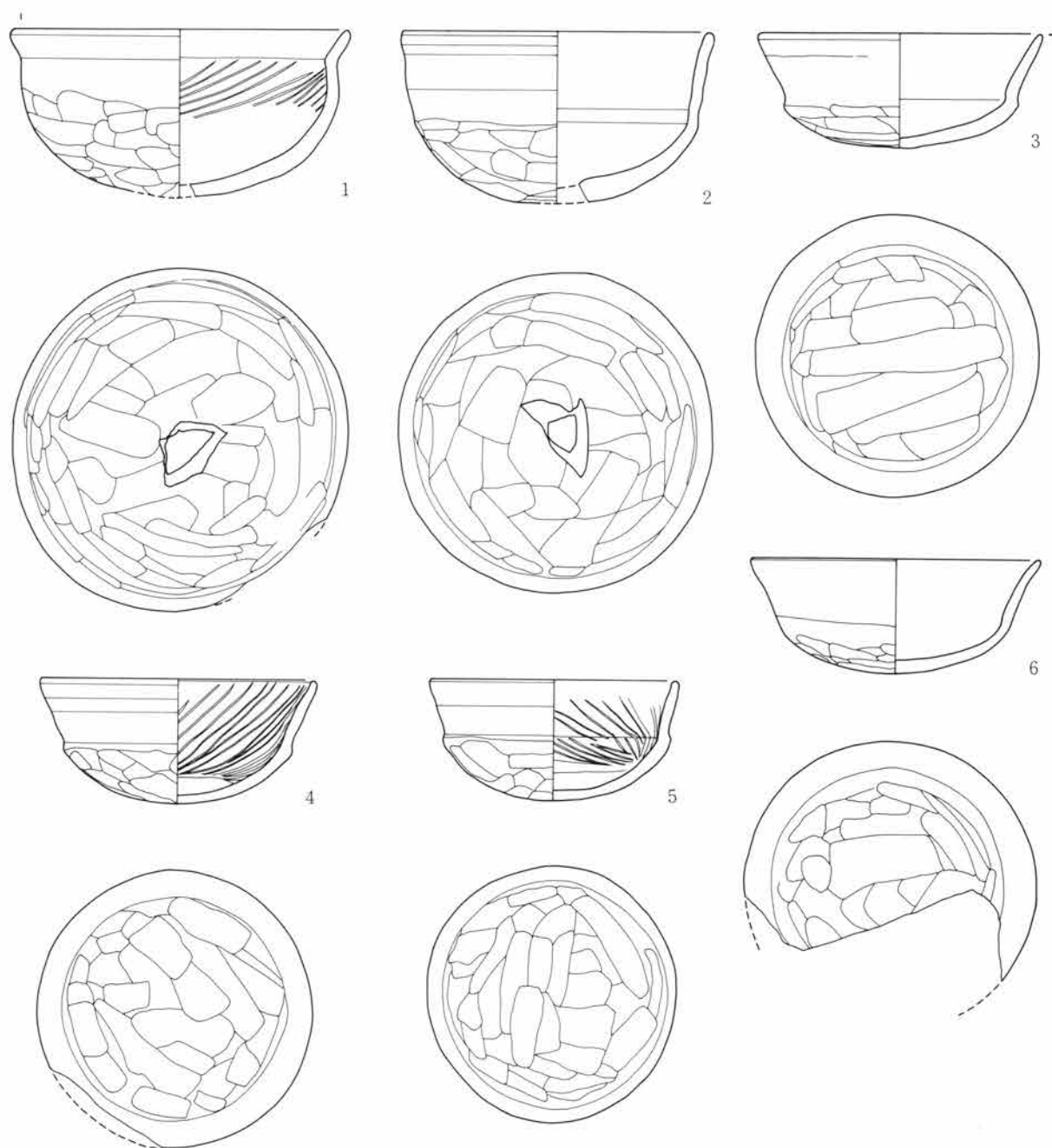
第331図 変形横穴式石室（2）

脚半球形鈴付雲珠・無文)、大阪府・海北塚古墳(飾り金具)の資料等と、花卉表現や数及び波状列点文の位置等を比較しても、12号古墳出土資料と同巧の物は見当たらなかった。

E号墳同様の変形横穴式石室の県内の調査例は、前橋市、伊勢崎市、甘楽町、沼田市、安中市、箕郷町、群馬町等にも見られるが報告書の刊行を待って検討を加えたい。

第332図の土器は、地元の飯沼和雄氏が畑を耕していた際に発見し、大切に保管しておられたものであるが、遺物の示す年代相は、5世紀第4半期であり、古墳の造堂が盛んに行われていた時期のものと考えられる。遺跡内でも3軒の住居跡が検出されたが、生活空間を復元するのに貴重な資料である。

(飯塚)



第332図 飯沼和雄氏所蔵資料実測図

抄 録

書名	少林山台遺跡 ショウリンザンダイイセキ
副書名	少林山砂防施設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第153集
編著者名	飯塚 誠 徳江秀夫
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2 ☎0279-52-2511(代表)
発行年	1993年3月31日
遺跡位置	群馬県高崎市鼻高町字台・栗木沢 北緯 36°19'32" 東経 138°57'40"
調査期間	平成元年4月24日～平成2年10月30日
調査面積	16,500m ² (事業面積 約28,700m ²)
調査原因	地送り対策事業としての少林山砂防施設工事に伴う記録保存
遺構数量	
住居跡	弥生時代後期 28軒 古墳時代後期 3軒 平安時代 1軒
墓跡	弥生時代後期 10基 (礫床墓)
古墳	古墳時代後期 20基 (横穴式古墳16 竪穴式1 竪穴式?3)
溝	弥生時代後期 1条 平安時代 2条
土坑	弥生時代後期 1基 古墳時代 3基 時期不明 13基
主な遺物	
旧石器	ポイント2
縄文時代	早期～晩期土器片 石器
弥生時代	後期土器 石器 ガラス玉 管玉 鉄剣
古墳時代	後期土師器・須恵器 円筒埴輪 形象埴輪 金銅製馬具・圭頭柄頭 刀 鉄鏃 ガラス玉 水晶製紡錘玉 土玉
平安時代	土師器・須恵器
その他	古銭 (開元通宝～昭和12年) 鉄砲玉2
備考	
高崎市の北西部に延びた岩野谷丘陵上に位置し、碓氷川右岸の標高160～170mの尾根間の北東緩斜面に扇形に存在する複合遺跡。扇の要部分には湧水が認められる他、遺跡内には地送りに伴う陥没箇所が多く認められる。付近には、碓氷川氾濫原の他には目立った沖積地は認められず、北東部は碓氷川に合流する寺沢川によって刻まれた比高約20mの崖になっている。弥生時代後期の集落及び古墳時代後期の群集墳の良好な資料が得られた。	

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第153集

少林山台遺跡

〈本文編〉

少林山砂防施設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年3月19日 印刷

平成5年3月26日 発行

編集・発行／群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社